愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第87集

三ツ井遺跡

1999

財団法人　愛知県教育サービスセンター
愛知県埋蔵文化財センター



遺跡の遠景（北西より　1994年撮影）



97B区　古墳時代以降の遺構



96A区　SB01　カマド部分



97B区　SK88　遺物出土状況



96B区　SD28　遺物出土状況



97Ab区　弥生時代前期の水田跡



96Ti　SK01　遺物出土状況



97Ab区　SD46・47　ベルト北壁（⬆は盛土部分）



97Ab区　南壁（⬆は盛土部分）



97Ca区　北壁
谷部分、左上方は
古代の溝（SD21）





上：縄文時代の遺物　　下：弥生時代前期の遺物

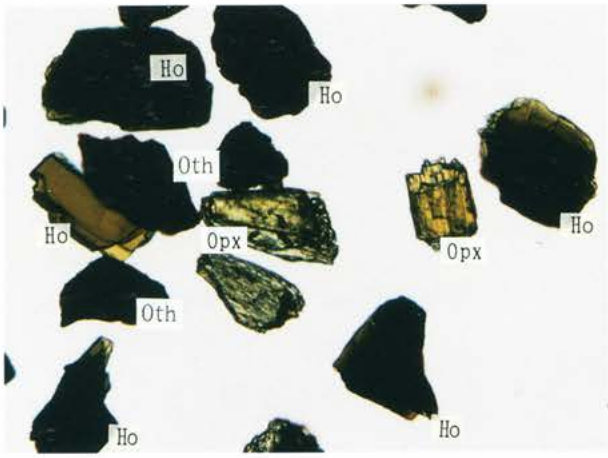




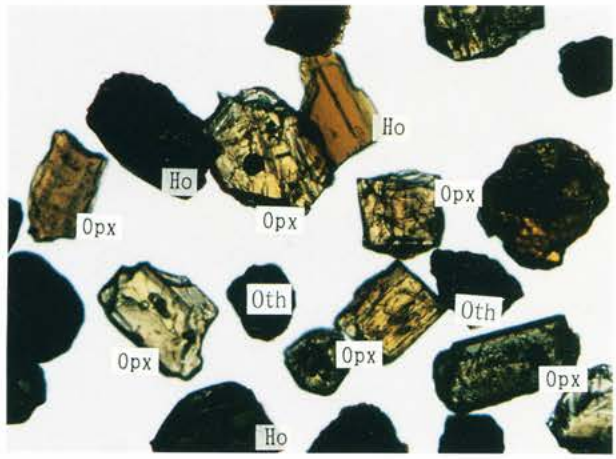
上：弥生時代後期～古墳時代の遺物　　下：古代の遺物



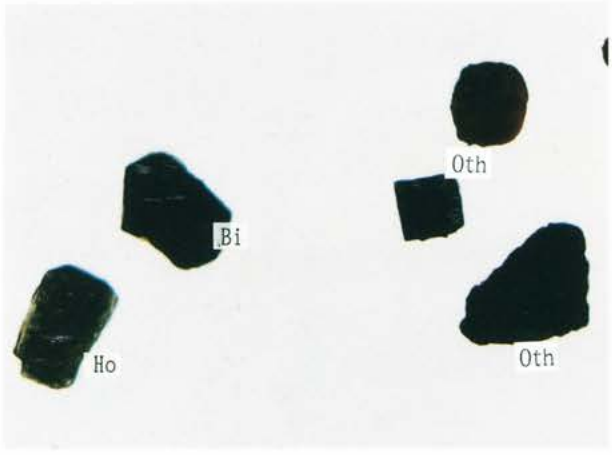
上：中世以降の遺物　　下：縄文・弥生時代の石器・石製品とその剝片



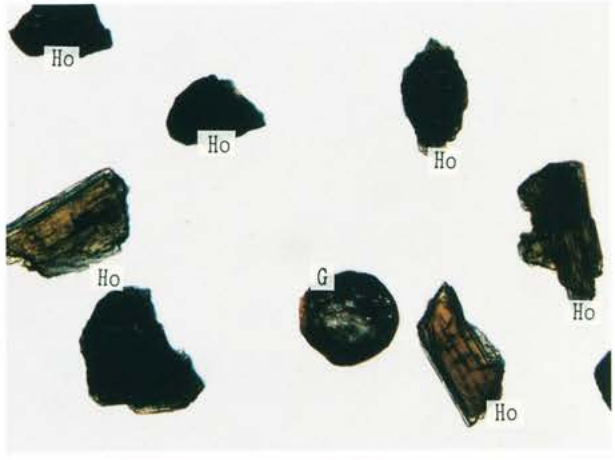
1．縄文土器 96Cb SK90；80



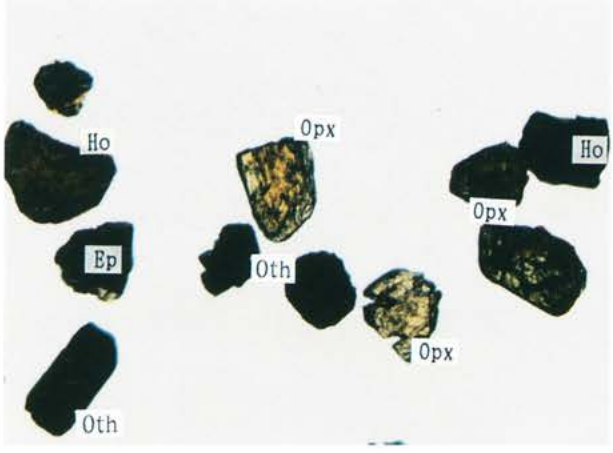
2．縄文土器 97Ab ⅣB20c・検Ⅲ；61



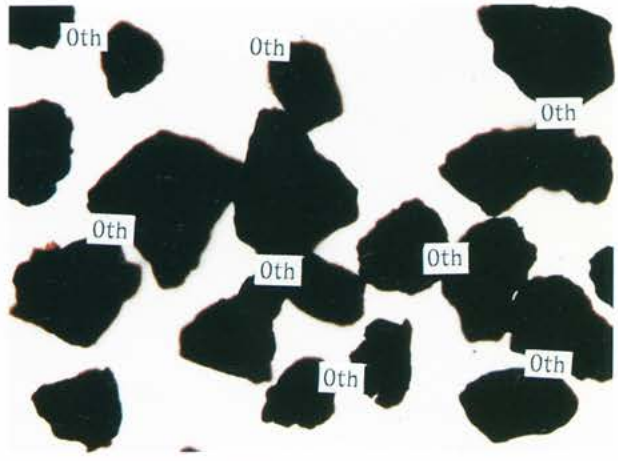
3．縄文土器 97B ⅣA17r・検Ⅲ；102



4．縄文土器 97B ⅣA16t・検Ⅱ；90



5．弥生土器 96Ti SK01；161



6．弥生土器 96Ti SB03；125

0.5mm

Opx:斜方輝石．Cpx:単斜輝石．Ho:角閃石．Bi:黒雲母．G:ザクロ石．Ep:緑レン石．Oth:その他．

胎土中の重鉱物

序

濃尾平野のほぼ中央に位置する愛知県一宮市には、数多くの貴重な遺跡が点在しております。そして、そこには地域に生きた人々の足跡が認められ、同時に豊かな文化が育まれてきたことを知ることができます。

今回、名神高速道路上り線一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査として、水田と畑地の交錯する島畑景観を良好に留めている地域として知られている一宮市丹陽町の三ツ井遺跡を発掘調査しました。この調査によって、この遺跡が縄文時代後期から始まり、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代など、各時代にまたがる複合遺跡であることがわかりました。今回の調査成果が学術的な資料として、また社会教育や学校教育等、幅広く活用され、埋蔵文化財に関して皆様のご理解を深める一助になれば、幸いに存じます。

発掘調査の実施にあたっては、地元住民の方々をはじめ、関係者及び関係諸機関のご理解とご協力を頂きました。ここに厚く御礼申し上げます。

最後になりましたが、昭和60年度に発足しました財団法人愛知県埋蔵文化財センターは、平成11年度より、財団法人愛知県教育サービスセンター　愛知県埋蔵文化財センターへと衣替えしました。今までのご支援に感謝申し上げますとともに、引き続き変わらぬご支援をお願い申し上げます。

平成11年８月

財団法人愛知県教育サービスセンター

理事長　　久留宮泰啓

例　　言

1．本書は、愛知県一宮市丹陽町大字三ツ井・重吉に所在する三ツ井遺跡の調査報告書である。

2．調査は、名神高速道路上り線一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査として、日本道路公団より愛知県教育委員会を通じて委託を受け、愛知県埋蔵文化財センターが実施した。

3．調査期間は、平成８年（1996）４月～平成10年（1998）３月である。

4．調査面積は、平成８年度が6,123㎡、平成９年度が5,977㎡で、計12,100㎡である。

5．調査担当者（調査時、愛知県埋蔵文化財センター調査課所属）は、以下の通りである。

平成８年度　高橋信明（課長補佐兼主査）、山本寿徳（調査研究員）、小川芳範（同）

平成９年度　大崎正敬（主査）、山本寿徳（調査研究員）、田中伸明（同）、早野浩二（同）

6．調査及び報告書作成にあたっては、以下の関係機関からご指導、ご協力を得た。（順不同）

愛知県教育委員会文化財課、愛知県埋蔵文化財調査センター、日本道路公団名古屋管理局、一宮市教育委員会、一宮市博物館、稲沢市教育委員会、㈶大阪府文化財調査研究センター

7．調査及び報告書作成にあたっては、以下の方々からご指導、ご教示を賜った。（順不同、敬称略）

金田章裕、千葉豊、外山秀一、能登健、山崎純男、工樂善通、藤澤良祐、金子健一、赤羽一郎、原田幹、野口哲也、城ヶ谷和広、大矢頭、紅村弘、小野久隆、岡本茂史、河角龍典、亀井聡、渡辺博人、立松彰、田中清美、三好美穂、伊藤基之、古田功治、岩野見司、土本典生、久保禎子、毛受英彦、贊元洋、愛甲昇寛、北條献示、松岡輝幸、田崎博之、小田富士夫、藤田三郎、吉田博之、佐藤由起男、橋本輝彦、豊岡卓之

8．遺物整理及び報告書作成にあたっては、以下の方々の協力を得た。

仲井光代、山本律子、山田有美子、岡田真知子、加藤美和子、山川和子、小崎暢子

9．出土遺物の写真撮影にあたっては、深川進氏の手を煩わせた。

10．発掘調査及び報告書作成事業に参加・協力して頂いた方々は、以下の通りである。（順不同、敬称略）

宮崎美穂子、堀尾美枝、山川美智子、石井春利、鵜飼京子、青井三男、瀬戸照之、瀬戸和子、赤塚ひろ、岩田良雄、岩野きよ江、小島勝子、斎藤ツヤ子、柴田昭子、伊藤孝枝、佐藤洋子、近藤宏、小泉幸雄、新木ヨリ子、青井義昭、青井紀子、安藤民子、植手香代子、杉山加代子、木村幸雄、木村末子、桜井きみゑ、桜井きみ子、桜井須美子、大野和子、西尾孝行、服部貞子、杁山秀子、木村誠子、杉山恭也、加賀智之、脇田真也、松本美和、浅野知之、中村晋也、若杉隆治、後藤茂、佐々木清孝、石河安明、水野良子、中村博、坂薫、岩田陽子、大野啓子、岡村和彦、小川恵子、後藤はつ美、本多伴子、矢藤節子、桜井幸代、山田くに子、高橋益次郎、松本千代美、佐藤しゑ、星野初恵、速水大、山田啓子、大宮克美、野村栄、尾崎和美、八木佳素実、古橋佳子、岩本佳子、阿部佐保子、服部恵子、宇佐美美幸、田中和子、野川佳江、木全典子、宮崎照美、伊藤典子、土井てる子、加藤豊子、平野みどり、服部里美、飯田祐子、中村たかみ、本多恵子、中村知嗣、武田紀子、服部亜紀子、武村文孝、服部陽介、宮崎奈緒美、藤田和佳子、早川友司

11. 本書の執筆は、以下のとおりである。なお、全体の編集は、田中伸明が担当し、第４章の編集は、鬼頭剛が担当した。

第１章第１節、第３節、第２章、第３章第１節１・４、 第２節、第３節２、第４節１、第５章、付論	田中伸明
第１章第２節、第４章第１節	鬼頭　剛
第３章第１節２、付論	永井宏幸
第３章第１節３	早野浩二
第３章第１節４（土師器）・５	仲井光代
第３章第３節１	川添和暁
第３章第４節２	鈴木正貴
第３章第４節２	蔭山誠一
第４章第１節	堀木真美子
第４章第１節	尾崎和美
第４章第２節	辻本裕也（パリノ・サーヴェイ㈱）
第４章第３節	松葉礼子（パレオ・ラボ㈱）
第４章第４節	矢作健二（パリノ・サーヴェイ㈱）
付　論	原田　幹（愛知県教育委員会文化財課）

12. 本書で使用している遺構記号は、以下の通りであるが、厳密な統一性はない。
ＳＫ…土坑、　ＳＤ…溝、　ＳＥ…井戸、　ＳＢ…建物（竪穴住居含む）
ＳＴ…耕作地（水田・畑地）、　ＮＲ…自然流路、　ＳＸ…その他不明な遺構
13. 調査及び本書で使用した座標は、国土座標第Ⅶ系に準拠した。
14. 本書で使用する遺構埋土等の色調については、『新版標準土色帳』（小山正忠・竹原秀雄編著、財団法人日本色彩研究所、1989年度版）を参考に記述した。
15. 調査の実測図、写真等の記録は愛知県埋蔵文化財センターで保管している。
16. 調査による出土遺物は、愛知県埋蔵文化財調査センターで保管している。

目　　次

巻頭カラー写真図版

序

例　言

目　次

第１章　調査の概要 …… 1

第１節　調査の経緯と経過 …… 田中伸明 … 1

第２節　地形・地質 …… 鬼頭　剛 … 4

第３節　歴史的環境 …… 田中伸明 … 6

第２章　遺　構 …… 田中伸明 … 12

第１節　遺跡の基本層序 …… 12

第２節　遺構の概要と時期区分 …… 14

第３節　各時期の遺構 …… 24

１．縄文時代 …… 24

２．弥生時代Ⅰ期 …… 27

３．弥生時代Ⅱ期 …… 32

４．弥生時代後期～古墳時代 …… 34

５．古　代 …… 36

６．中世以降 …… 38

第３章　遺　物 …… 40

第１節　土器・陶磁器類 …… 40

１．縄文時代 …… 田中伸明 … 40

２．弥生時代前期 …… 永井宏幸 … 55

３．弥生時代後期～古墳時代 …… 早野浩二 … 66

４．古　代 …… 田中伸明・仲井光代 … 76

５．中世以降 …… 仲井光代 … 82

第2節　その他の土製品類 …… 田中伸明 … 90
1．土　錘 …… 90
2．人形・玩具類 …… 90
3．加工円盤類・陶丸 …… 92
4．研磨痕土器類 …… 94
第3節　石製品類 …… 100
1．縄文・弥生時代の石器・石製品 …… 川添和暁 … 100
2．その他の石製品 …… 田中伸明 … 112
第4節　金属製品類 …… 113
1．銭　貨 …… 田中伸明 … 113
2．その他の金属関連資料 …… 鈴木正貴・蔭山誠一 … 114

第4章　自然科学分析 …… 118
第1節　三ツ井遺跡の古環境解析 …… 鬼頭　剛・堀木真美子・尾崎和美 … 118
第2節　堆積物微細構造観察による土地利用状況の検討
…… 辻本裕也（パリノ・サーヴェイ㈱） … 147
第3節　三ツ井遺跡出土木材の樹種同定 …… 松葉礼子（パレオ・ラボ㈱） … 157
第4節　三ツ井遺跡出土土器の胎土分析 …… 矢作健二（パリノ・サーヴェイ㈱） … 159

第5章　まとめ …… 田中伸明 … 164

付　論
「弥生時代前期の諸問題」…… 永井宏幸 … 170
「三ツ井遺跡出土剝片石器の使用痕分析」…… 原田　幹 … 186
「島畑景観の形成と発展について」…… 田中伸明 … 192

遺構一覧表
遺物一覧表
写真図版
報告書抄録

第１章　調査の概要

第１節　調査の経緯と経過

調査経緯　三ツ井遺跡は、愛知県一宮市丹陽町三ツ井・重吉に所在し、青木川と五条川に挟まれた標高７～８ｍの自然堤防と後背湿地上に展開する遺跡である。現況は、水田と畑地の交錯する島畑景観を良好に留めている。名神高速道路上り線一宮パーキングエリア建設に伴い、愛知県教育委員会は、平成６・７年度に事業予定地内で遺跡の有無と範囲の確認調査を実施した。その結果、古代～中世の遺跡の存在が確認され、また、下層に堆積した黒色粘土層からイネのプラント・オパールが検出された。このため、日本道路公団から愛知県教育委員会を通した委託事業として、平成８年４月から平成10年３月まで発掘調査を実施した。

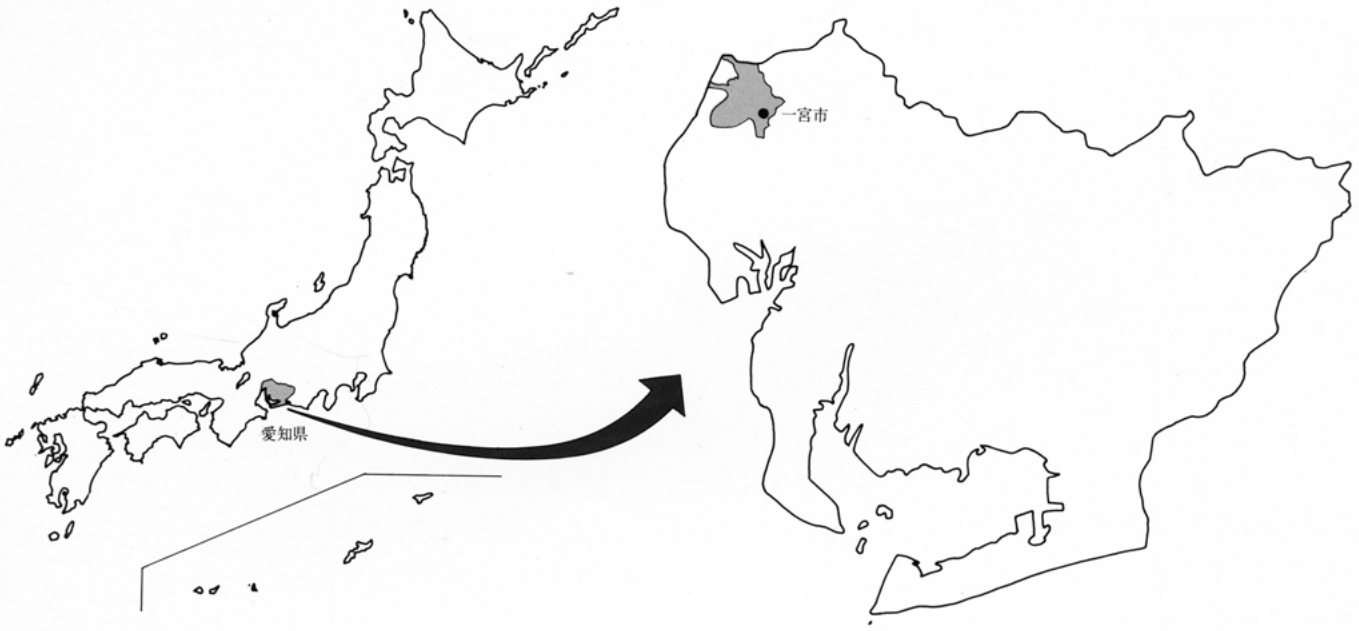
調査経過　平成８年度は、先行事業である側道建設部分4,000㎡をＡ区～Ｄ区に４分割し、さらにＢ区とＣ区については、それぞれBa区～Bc区、Ca区・Cb区と細分割して調査した。後に調査面積の契約変更があって、面積増加分2,123㎡をＥ区として、合わせて6,123㎡を調査した。また、島畑形成過程基礎資料を得るため、調査区内の島畑（島畑１～８）と開発予定地内に存在する島畑（島畑Tb～Ti）に１ヶ所以上のトレンチをいれ、断面を確認した。（島畑Taは未確認。島畑Tiについては、弥生時代前期の遺物・遺構が多く確認されたCb区の東に隣接するため、遺構・遺物の確認を行った。なお、遺物の出土地を記録するため、便宜上、96Tb～Tiの名称を用いた。）平成８年度の調査の結果、本遺跡は、縄文時代後期から始まり、多少の断続はあるが、弥生時代、古墳時代、古代、中世など各時代にまたがる複合遺跡であることが明らかとなった。

平成９年度は、調査区をＡ区～Ｃ区に３分割し、さらにＡ区とＣ区については、それぞれAa区・Ab区、Ca区・Cb区と細分割して、合わせて5,977㎡を調査した。また、調査区内の島畑（島畑９～11）の断面を確認した。

なお、それぞれの年度別調査区、担当者、調査期間、面積は第１表に示す通りである。

年　度	調査区	調査担当者	調査期間	面積(㎡)	備考（調査区の細分化）
平成８年度	96A	高橋・山本・小川	96.4-6	1,400	
	96B	高橋・山本・小川	96.8-11	1,000	Ba・Bb・Bc区に細分割して調査
	96C	高橋・山本・小川	96.11-97.1	840	Ca・Cb区に細分割して調査
	96D	高橋・山本・小川	96.6-7	760	
	96E	高橋・山本・小川	97.1-3	2,123	
平成９年度	97A	大崎・山本・田中・早野	97.4-5,97.8-12	1,797	Aa・Ab区に細分割して調査
	97B	大崎・山本・田中	97.4-8	2,580	
	97C	大崎・山本・田中	97.11-98.3	1,600	Ca・Cb区に細分割して調査

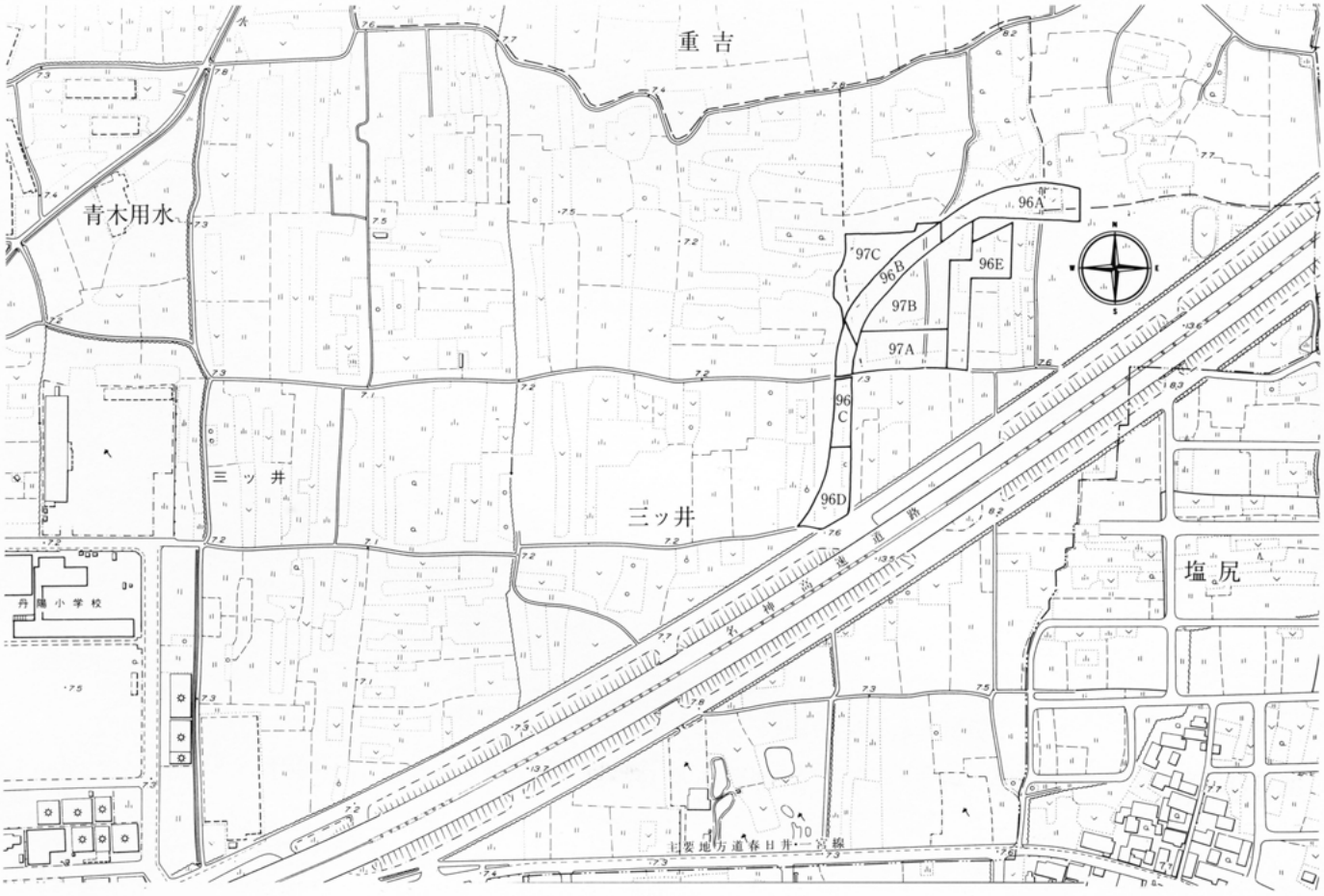
第１表　調査進行表



第１図　三ツ井遺跡の位置

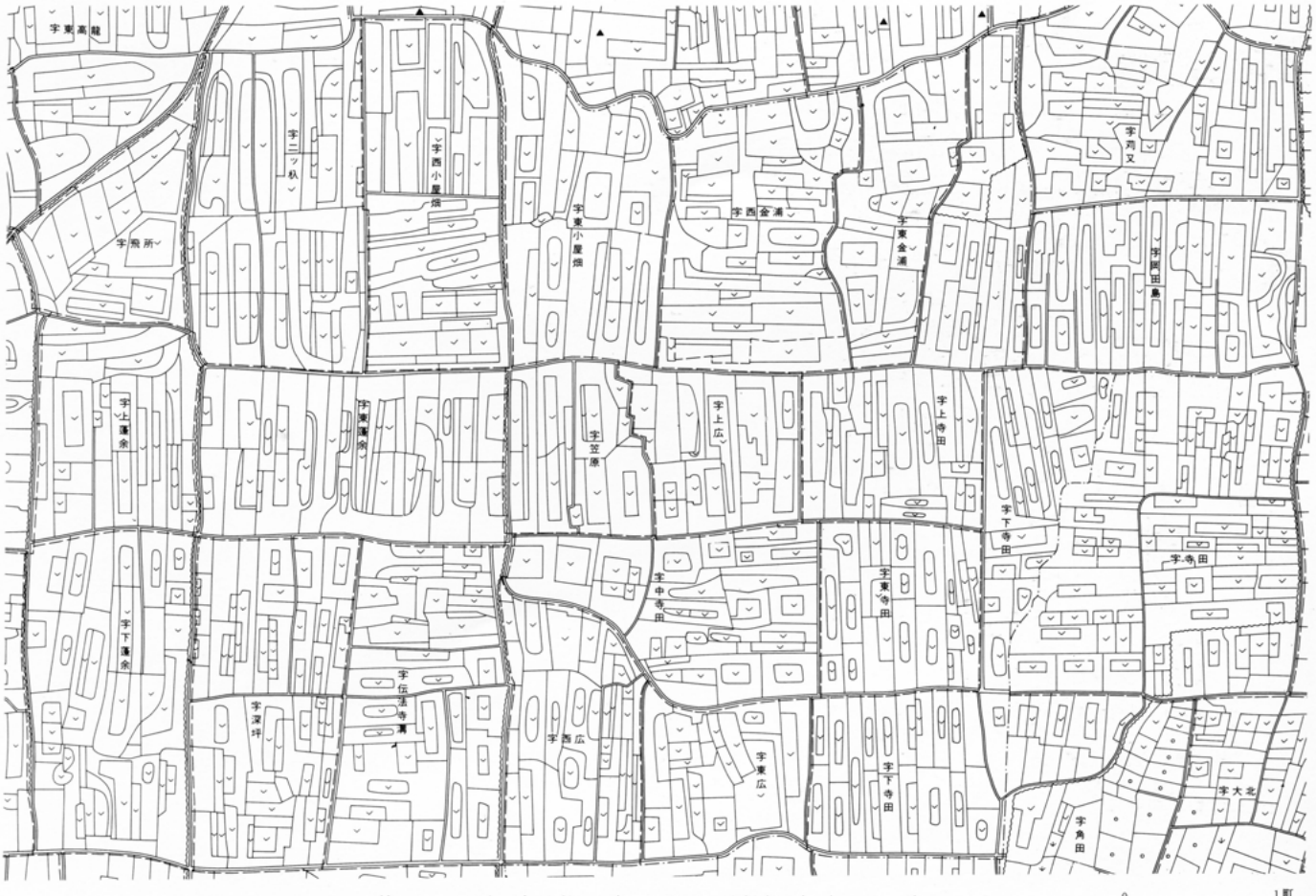


第２図　調査区・島畑位置図（１：2000）



第3図　調査区位置図（1：5000）

0　100m



第4図　明治17年地籍図（丹羽郡三ツ井村付近）（1：5000）

0　1町

第2節　地形・地質

伊勢湾に臨む濃尾平野は西縁を養老山地に、東縁を台地や段丘群の発達する更新統堆積物によって画されるわが国有数の平野である。濃尾平野には木曽川・長良川・揖斐川などの諸河川により運搬された堆積物が広く分布し、地形は北から南へ扇状地帯・自然堤防帯・三角州帯に大きく分けられる。

地形概説

調査地である一宮市三ツ井地域は濃尾平野の北東部に位置する。平野北東方向の犬山扇状地の末端部から南西方向に広がる自然堤防地帯に位置し、周辺には多くの自然堤防が確認される（例えば、森山，1972：国土地理院，1968）。これは、犬山扇状地を分流してきた古木曽川水系の諸河川が、礫質の粗粒堆積物を扇状地部に堆積させ、相対的に緩傾斜の低地帯に砂質堆積物を旧流路の両側に沿って自然堤防として累積させてきたからである。古木曽川水系諸河川の流路変遷は古文書等から推定されており、犬山扇状地地域には東方より一之枝川、二之枝川、三之枝川、黒田川が北東から南西方向に流下していたことがわかっている（多田・井関，1955）。調査地は二之枝川-青木川-五条川水系にあたる。伊藤(1998)は考古学的な見地から平野北東部および東部に分布する遺跡を、地下層序で確認される暗灰色粘土層の生活面の有無により遺跡を分類した。弥生時代前期から古墳時代初期に利用された遺跡群と無遺物層となっている遺跡群とに分け、前者を「第Ⅰ類型」、後者を「第Ⅱ類型」と呼んだ。そして、五条川と庄内川とに囲まれた低地帯の一部に第Ⅱ類型の遺跡が多いと類推した（第3図）。

地質概説

濃尾平野の沖積層は更新統最上部の濃尾層と完新統の南陽層とに区分される。完新統堆積物は臨海部のボーリング資料をもとに松沢・嘉藤(1954)や古川(1972)により南陽層と呼ばれ、下部粘土層・上部砂層・最上部粘土層に区分されている。木曽川デルタの堆積過程について、海津(1994)は10,000～8,500年前の緩慢な海進ステージ、8,500～6,500年前の急激な海進ステージ、6,500～5,500年前の累重的堆積ステージ、5,500～現在の前進的堆積ステージの4つのステージに区分した。後氷期の海進（縄文海進）以降、伊勢湾に臨む三角州は沖合への急速な前進付加堆積を進行させた。その前置層および前置斜面前縁部の堆積物が上部砂層である(海津，1994)。調査地域地下には層厚十数mの粗粒砂層が存在し、周辺に多くの自然堤防をもつことからも、後背地から三角州へ砕屑物を供給する河川の存在が示唆される。歴史時代に入ってからは、主に古木曽川水系流路の側方移動やジャンプによる環境変化を反映する堆積物により構成されている。

文献

古川博恭，1972，濃尾平野の沖積層－濃尾平野の研究，その1－，地質学論集，7，39-59.

伊藤秋男，1998，尾張低地帯における遺跡立地の二つの類型（覚書），弥勒寺御申塚遺跡発掘調査報告書，南山大学大学院考古学研究室，49-54.

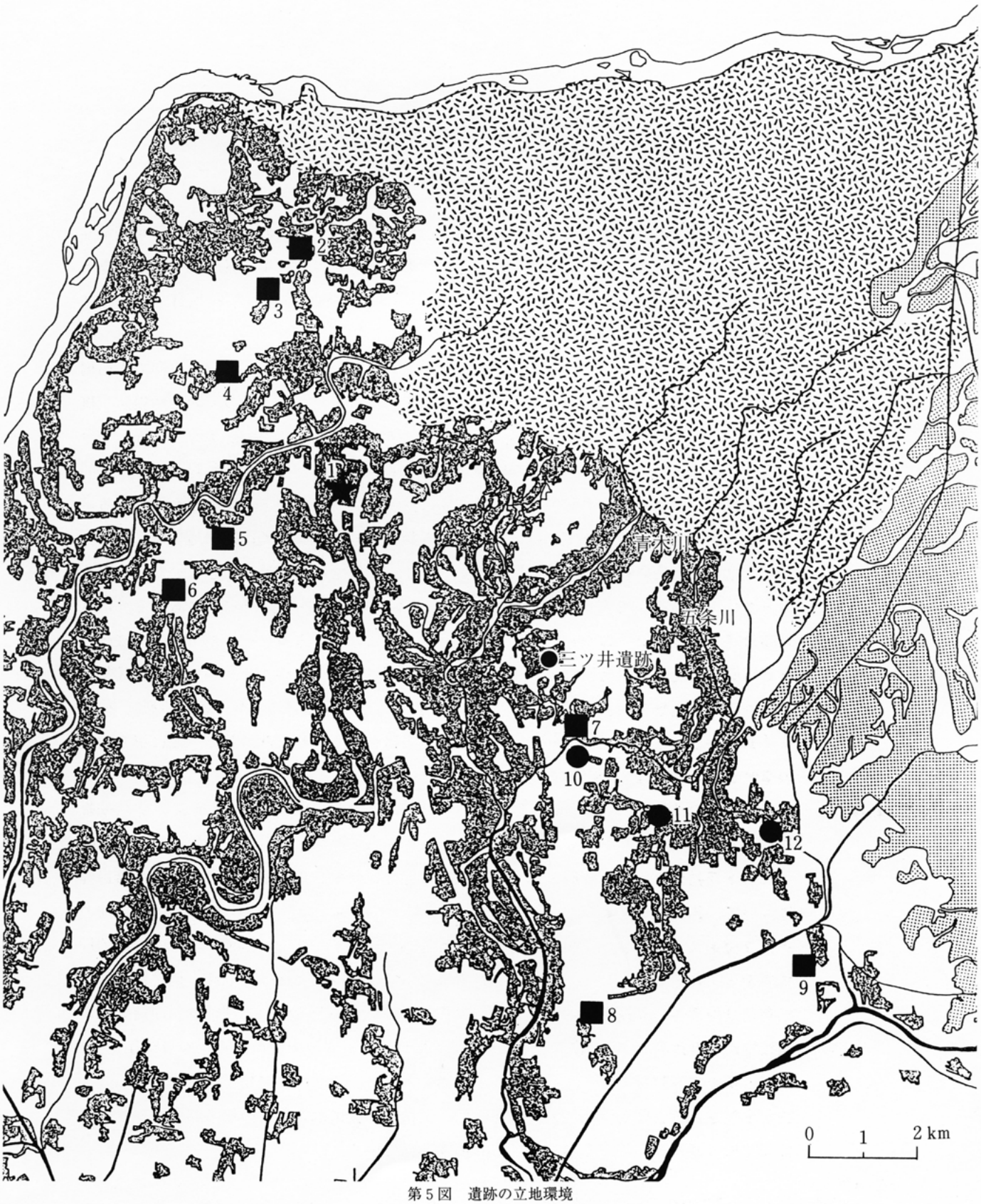
国土地理院，1968，2万5千分の1土地条件図「桑名」「名古屋南部」「津島」「名古屋北部」「大垣」「岐阜」「豊田」および土地条件調査報告書（中京地区），166p.

松沢　勲・嘉藤良次郎，1954，名古屋付近の地質同地質図，愛知県，35p.

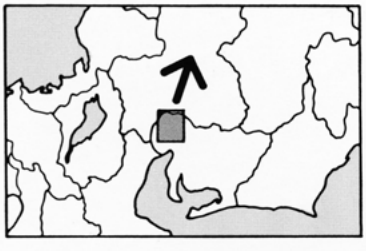
森山昭雄，1972，沖積平野の微地形，地質学論集，7，197-211.

多田文男・井関弘太郎，1955，濃尾平野の地形構造と地盤沈下，総理府資源調査会，82p.

海津正倫，1994，沖積低地の古環境学，古今書院，270p.



第5図　遺跡の立地環境



第3図　踏査した遺跡の立地形態（■第Ⅰ類型、●第Ⅱ類型）

自然堤防　緩扇状地　台地

1．ＮＴＴ一宮局遺跡（仮称）、2．大毛池田遺跡、3．門間沼遺跡、4．西上免遺跡
5．八王子遺跡、6．山中遺跡、7．権現山遺跡、8．朝日遺跡（資料館南地点）
9．月縄手遺跡、10．高塚古墳、11．弥勒寺御申塚遺跡、12．能田旭古墳

第３節　歴史的環境

三ツ井遺跡は、縄文時代に始まり、弥生時代、古墳時代、奈良・平安時代、鎌倉・室町時代など、各時代を通じて人間活動の痕跡が残されていた。本遺跡の周辺にも各時代、数多くの遺跡が存在している。そこで、本遺跡を中心に主な周辺の遺跡を時代順に紹介する。

縄文時代　縄文時代の遺跡として、早期では、北東6.5kmに北替地遺跡、東５kmに織田井戸遺跡、中期では、北３kmに佐野遺跡、東南東1.5kmにノンベ遺跡、後期では、南南東１kmに権現山遺跡、晩期では、北西2.5kmに馬見塚遺跡、西北西５kmに下り松遺跡、西南西１kmに池之上遺跡などがある。

弥生時代　弥生時代の遺跡として、前期では、南１kmに元屋敷遺跡、北島白山遺跡、西北西２kmに弥勒遺跡、中期では、東1.5kmに大地遺跡、南1.5kmに伝法寺野田遺跡、後期では、東北東1.5kmに蕪池遺跡、西７kmに山中遺跡などがある。また、著名な朝日遺跡は南6.5km、八王子遺跡は西北西6.5kmに位置する。

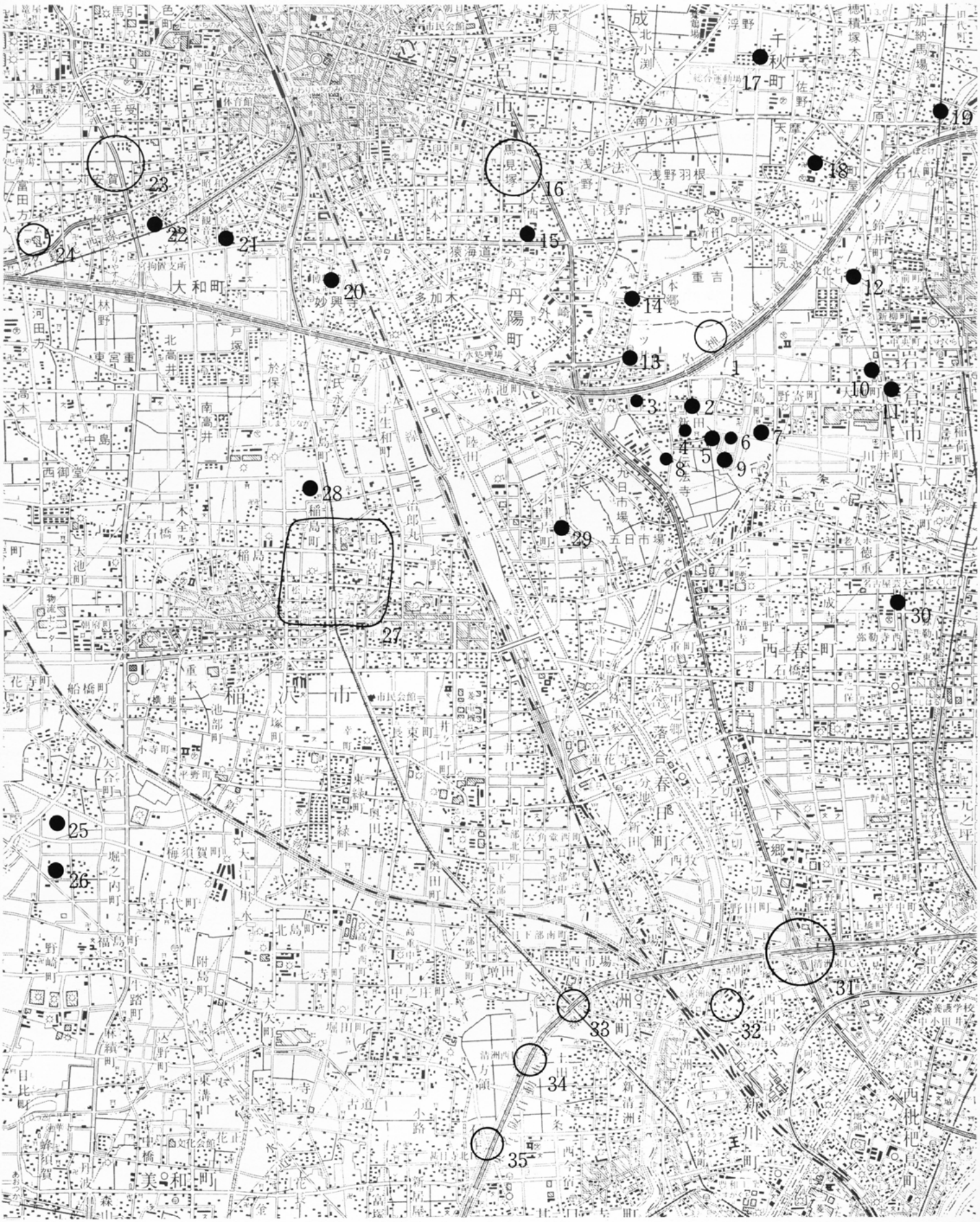
古墳時代　古墳時代の遺跡として、前述の元屋敷遺跡・権現山遺跡、北北東２kmに平松遺跡、南南西700mに方墳と推定される稲荷山古墳などがある。

古　　代　古代の遺跡として、南南西1.5kmに「平」の角印を押した須恵器の椀出土の西大門遺跡、西１kmに「下乃」と篦書きされた灰釉陶器皿出土の茂八杁遺跡などがある。また、南南西１kmに伝法寺廃寺、北東3.5kmに長福寺廃寺、西４kmに妙興寺廃寺、西南西4.5kmに東畑廃寺などの古代寺院跡があり、西南西4.5kmに尾張国府跡推定地がある。

中世以降　中世以降の遺跡として、西北西１kmに尾藤源内の居城と伝えられる重吉城跡、南西2.5kmに下津城跡、東３kmに岩倉城跡などがある。

その他、主な周辺の遺跡については、第６図に示した通りである。

1	三ツ井遺跡	11	ノンベ遺跡	21	下り松遺跡	31	朝日遺跡
2	稲荷山古墳	12	蕪池遺跡	22	北川田遺跡	32	清洲城下町遺跡
3	池之上遺跡	13	茂八杁遺跡	23	八王子遺跡	33	廻間遺跡
4	伝法寺廃寺	14	重吉城跡	24	山中遺跡	34	土田遺跡
5	元屋敷遺跡	15	弥勒遺跡	25	尾張国分寺跡	35	阿弥陀寺遺跡
6	北島白山遺跡	16	馬見塚遺跡	26	堀之内花ノ木遺跡		
7	権現山遺跡	17	佐野遺跡	27	尾張国府跡推定地		
8	西大門遺跡	18	平松遺跡	28	東畑廃寺跡		
9	伝法寺野田遺跡	19	長福寺廃寺	29	下津城跡・下津城下層遺跡		
10	大地遺跡	20	妙興寺廃寺	30	弥勒寺御申塚遺跡		



国土地理院発行１：50000地形図(名古屋北部)使用

第６図　周辺の遺跡（三ツ井遺跡付近は詳細掲載）

文献資料　次に、文献資料などから当地域を概観してみる。

古代律令制下　古代律令制下の当地域は、尾張国丹羽郡に属していたと推察される。前述の茂八杁遺跡出土の灰釉陶器皿に篦書きされた「下乃」を地名と解し、現一宮市丹陽町三ツ井を中心とした地域を「和名抄」にみえる郡内の12の郷のうち、丹羽郡下沼（しもの）郷と推定する説もある。[1)]

島畑の形成　金田章裕氏は、様々な文献史料を中心とした検討結果などから、尾張地域の島畑景観の形成起源を中世の13～14世紀頃に推定している。[2)]

地名の初見　遺跡の所在する「重吉」の地名は、嘉暦２年（1327年）の「荒尾宗顕譲状」[3)]に「重善壱町参段」と見えるものが初見史料である。応永４年（1397年）正月の「尾張国目代光守注進状」[4)]に「重吉六恩寺内、関口殿、子細同前」、同年12月５日の「尾張国在庁等注進状」[5)]に「重吉　関口殿御領」と見え、「関口殿」の知行地が「重吉」にあったことがわかる。天正11年（1583年）の「織田信雄判物」[6)]に「ミツ井」、「しけいし」と見え、これが「三ツ井」の地名の初見史料である。また、天正12～14年の知行形態を示す史料と考えられる「信雄分限帳」[7)]に「ミつ井しけよし郷」と見える。

妙興寺の創建　本遺跡より西４kmに位置する妙興寺の創建は、貞和４年（1348年）といわれているが、創建以前よりこの地は妙興寺という地名でよばれていた。[8)]

三井重吉城
尾藤源内　三井重吉城は、諸書ともに尾藤源内の居城と伝える。[9)]『信長公記』[10)]によれば、尾藤源内は、元亀元年（1570年）９月、森可成の軍に属し、浅倉・浅井軍と戦い、近江坂本で討死したと見える。また、尾藤源内の子孫を称する桑山氏の「系図」[11)]によると、尾藤源内重吉は信濃の小笠原長時に属していたが、小笠原家没落の後、大永年中（1521～28年）に信濃より「三井」に移り築城し、永禄年中（1558～70年）、織田信長の為に落城したが、三河で奥平美作守信昌に属し、同国見代で甲州勢と戦い、討死したとある。『三河国二葉松』[12)]に設楽郡「（設樂郡）赤羽根村古屋敷」、「美藤源内」と見える。作手村に美藤源内の墓と伝えられる石祠があり、禅源寺の過去帳に「寛翁仁信居士　天正元年　八　月廿二日　奥平仕官美藤源内事」[13)]とある。美藤源内と尾藤源内は同一人物であると思われる。桑山氏の「系図」によると、源内の三男の清兼は、三ツ井村に帰り、初め青木川の地名より青木善右衛門清兼と名乗り、豊臣秀吉に仕えていたが、のちに母方姓の「桑山」に改めたと伝える。また、『金鱗九十九之塵』[14)]の著者である桑山好之は同著書の中で、高祖を尾藤源内として「尾州丹羽郡三ツ井古城主也」と記している。桑山氏の「系図」も三男の清兼の二男の金左衛門から五代目に桑山好之の名を記している。

小牧・長久手の戦い　天正12年（1584年）８月～９月にかけての「小牧・長久手の戦い」に関係する史料に「三ツ井」、「重吉」の地名が散見されるようになる。「家忠日記」[15)]の天正12年（1584年）９月７日の条に「無事の沙汰きれ候て、茂吉へ惣人数うつし候」と見え、同年９月８日の「徳川家康書状」[16)]に「如来意和与之儀、事切候て、昨日至当地茂吉寄陣候」と見えることなどから、小牧・長久手の戦いの際、徳川家康が豊臣秀吉との和議の交渉決裂後、「茂吉」（重吉）に布陣したことがわかる。[17)]また、豊臣秀吉も「三ツ井」、「重吉」に布陣したとする史料も

ある。「小牧・長久手の戦い」関係史料については、第２表を参照。

寛文12年（1672年）の「寛文村々覚書」[18]や文政５年（1822年）の『尾張徇行記』[19]などに、「三ツ井」、「重吉」の地名は、「三井重吉村」として記載されている。また、「信雄分限帳」に「ミつ井しけよし郷」と見え、『尾張徇行記』の旧丹羽郡「三井重吉村」の部分に「此

三井重吉村

三井重吉村ハ、元来二ケ村ニテ村落モ二区ニナリ来レリ、然レトモ往古ヨリ二名ヲ并セテ一村トナシ、寛文覚書ニモ三井重吉村トアリテ高モ総括シテトリアツカヒ来レリ」と見えることなどから、明確な時期は不明であるが、江戸時代以前より「三井重吉村」として取り扱われていたものと考えられる。

註

1）『新編　一宮市史』　本文編上　一宮市　1977年
2）金田章裕　「条里地割内部における島畑景観の形成」『条里と村落の歴史地理学研究』　1985年
3）『新編　一宮市史』　史料編五　一宮市　1963年　妙興寺文書　14号文書
4）『新編　一宮市史』　史料編六　一宮市　1970年　醍醐寺文書 397号文書
5）『新編　一宮市史』　史料編六　一宮市　1970年　醍醐寺文書 398号文書
6）『新編　一宮市史』　史料編六，一宮市　1970年　生駒秋彦氏所蔵文書 215号文書
7）『新編　一宮市史』　史料編補遺二　一宮市　1980年　114号文書
8）前掲１）
9）「寛文村々覚書」、「尾州古城志」、『張州府志』、『尾張志』、『尾張徇行記』など
10）太田牛一　『信長公記』（奥野高廣・岩沢愿彦校注『信長公記』1969年）
11）「尾頭（藤ヵ）氏桑山系図」（『一宮市史史料目録』　増補改訂版　歴史 367）
12）佐野監物　『三河国二葉松』　元文５年（1740年）（久曽神昇ほか編『近世三河地方文献集』　1980年）
13）『作手村誌』　作手村誌編纂委員会　1982年
14）桑山好之　『金鱗九十九之塵』（『名古屋叢書』第六～八巻（第七巻部分）所収）
15）松平家忠　「家忠日記」（竹内理三編　『増補続史料大成』　第19巻所収）
16）『新編　一宮市史』　史料編六　一宮市　1970年　棚橋二郎一氏所蔵文書 602号文書
17）『岩倉市史』　上巻　岩倉市　1985年
18）「寛文村々覚書」（『名古屋叢書続編』　第一～三巻（第二巻部分）所収）
19）樋口好古　『尾張徇行記』（『名古屋叢書続編』　第四～八巻（第六巻部分）所収

「小牧・長久手の戦い」関係史料（天正12年）（文字は原文とおり）

（九月）　六日　無事の沙汰候、 七日　無事のきれ候て、茂吉へ惣人数御うつし候、 十七日　敵陣之くつろけひきのき候、 廿七日　家康清須迄御馬被入候、 （九月の条に、矢が刺さった馬と二羽の鷲の挿図あり）	「家忠日記」 『増補続史料大成』第19巻
八月秀吉公尾州中通奈良表江出張、取出を五三箇所有普請、家康公自清須出向、しげいしに令居陣給、信雄同之、軈て秀吉帰陣し給間、家康も清須江入馬給、	「當代記」『史籍雑纂』第二
同年八月下旬の事なるに秀吉卿十六万騎之着到にて、至于尾州参陣し、二宮山へ上らせ給ひけり、上奈良村より五郎丸於久地三井重吉近辺不余尺地陣とらせ給ふ、信雄卿ハ郡村に対陣、家康ハ小牧山におはしけり、翌日より、上奈良村河田村大野村三ケ所、要害の普請はしめ有、九月下旬大かた出来せしかハ、其城主を定られ、兵糧以下丈夫に沙汰し置、十月三日大柿まて人数を打納給ふ、其より直に至于勢州御参陣有、	「太閤記」 『改定史籍集覧』第六
八月下旬、秀吉公発大軍出尾州取上二宮陣、上奈良五郎丸尾口三井、信雄ハ郡村、家康ハ被陣小牧上奈良川田大野ニ搆要害入置城主、	「豊臣記」中巻『続群書類従』巻五百八十四（第二十輯上）
八月、秀吉尾州中通奈良表へ出張、取出ヲ五三箇処有普請、此秀吉ノ取出ハ、上奈良村・河田村・大野村等也、 家康公自清須出向、茂吉ニ令居陣給、信雄同之、一説、…廿八日、秀吉楽田辺ヲ放火ス、公清須ヨリ岩倉ニ移給、又一説、此時信雄ハ郡村に被陣取、九月七日、秀吉茂吉ニ陣ヲ移ス、公跡ヲツケテ御対陣、 九月十七日、秀吉兵ヲ引テ濃州へ退、家康公モ清須へ入馬給、同廿七日、公清須へ御帰、	「創業記考異」　内閣文庫 『長久手町史』資料編六 中世　長久手合戦史料集
（九月）　七日　秀吉移陣於茂吉、公躡跡、相対而陣、 十七日　敵引兵而退、 二十七日　公皈清須	「御年譜」二　蓬左文庫 『長久手町史』　同前
（八月）廿一日秀吉進デ丹羽郡上奈良村五郎丸久地三井茂吉ニ兵ヲ賦ス、信雄ハ秀吉ヲ邀ヘテ郡村ニ陣ヲ設ケ、神君ハ尚小牧山ニ屯セラレ奈良村近邊水石ニ砦ヲ築カル、 （九月）七日秀吉茂吉ニ陣ス、神君信雄ハ是ヲ追テ茂吉ニ到リ玉フ、 十七日　…　秀吉且怒リ且勝難キヲ察シ今夜陣ヲ退事数里、神君ハ敵ノ返リ討事ヲ慮リ玉ヒ尚茂吉ニ堂々ト陣ヲ設ケ玉フ	『武徳編年集成』上巻 巻之三十
（八月）同二十七日、秀吉楽田山ニ陣取、焼働アリ、同二十八日、源君信雄モ岩倉へ御出馬、重吉ニヲイテ秀吉ト対陣、九月十七日、秀吉美濃へ帰陣、同二十七日、源君并信雄清須へ帰城シ玉フ、	『武家事記』巻二十
（八月）廿一日秀吉軍ヲ進メテ丹羽郡上奈良村五郎丸久地三井茂吉ニ兵ヲ分ケ備フ、 （九月）七日秀吉本陣ヲ二ノ宮山へ出シ総軍五郎丸久地三井或ハ茂吉ニ出張ス　神祖信雄トトモニ兵ヲ勧メ茂吉ニ陣シ玉フ、十七日　…　秀吉大ニ怒ル然レトモ　神威ヲ感シ争戦ノ勝利持シ難カラント思惟シ夜ニ及ンテ数里陣ヲ引ク　神祖追討ント思慮シ玉トモ秀吉ノ返リ撃ンコトヲ察シ玉ヒ猶茂吉ニ陣シ玉フ、	『大三川志』巻二十三
九月、（秀吉）軍茂吉、数親覲東師、以其勢不可当、又退置戍於諸寨而還大垣	『野史』巻四十七　羽柴秀吉
九月、秀吉軍于宮山、出兵於五郎丸久地三井茂吉、公暨信雄移師于茂吉、	『野史』巻五十三　東照公
九月、信雄与東照宮徙師于茂吉、	『野史』巻六十九　織田信雄

第２表　「小牧・長久手の戦い」関係史料

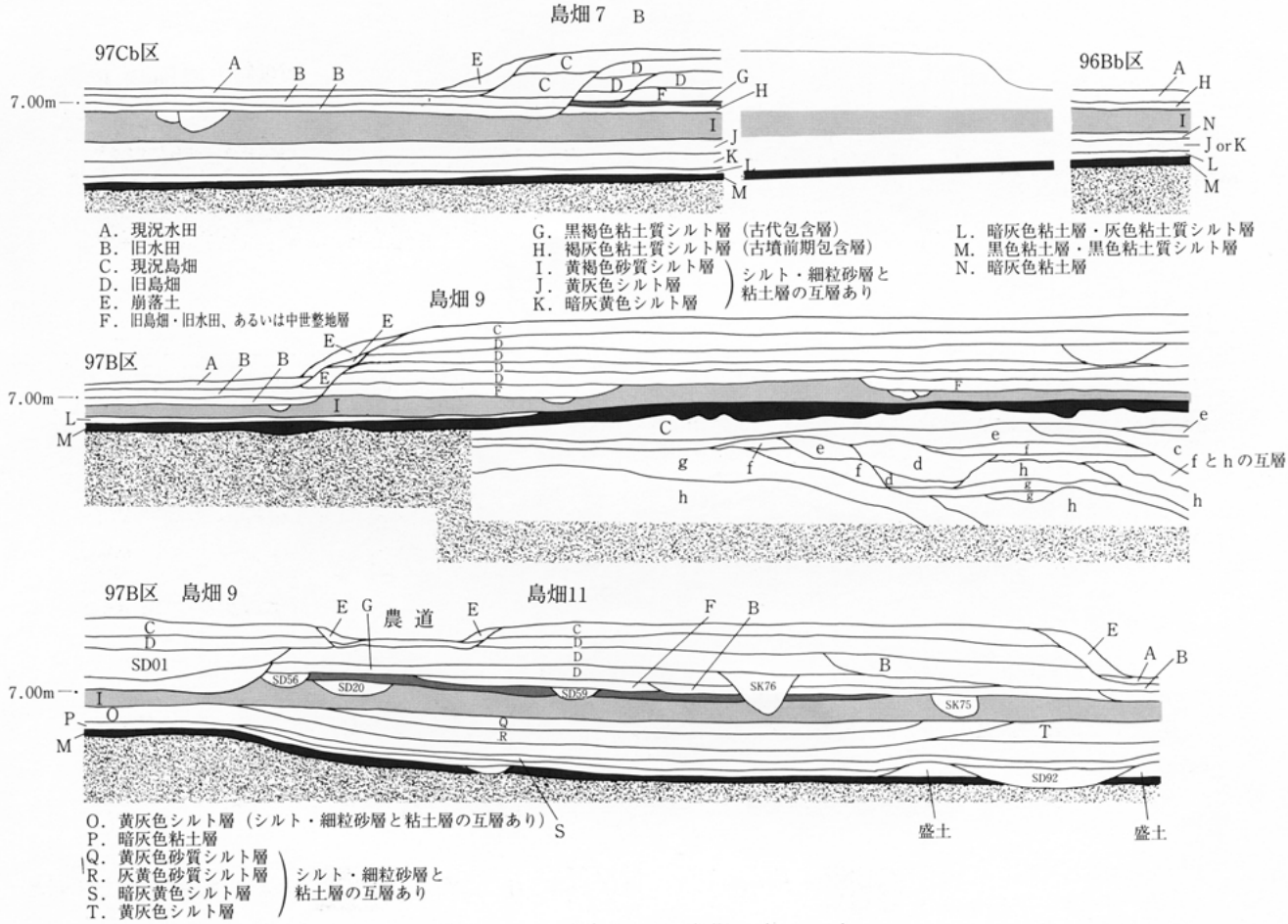
第７図　重吉村絵図（天保12年　原寸84.5mm×63.5mm「新編一宮市史」資料編９）

第８図　三ッ井村絵図（天保12年　原寸104×82.5cm「新編一宮市史」資料編９）

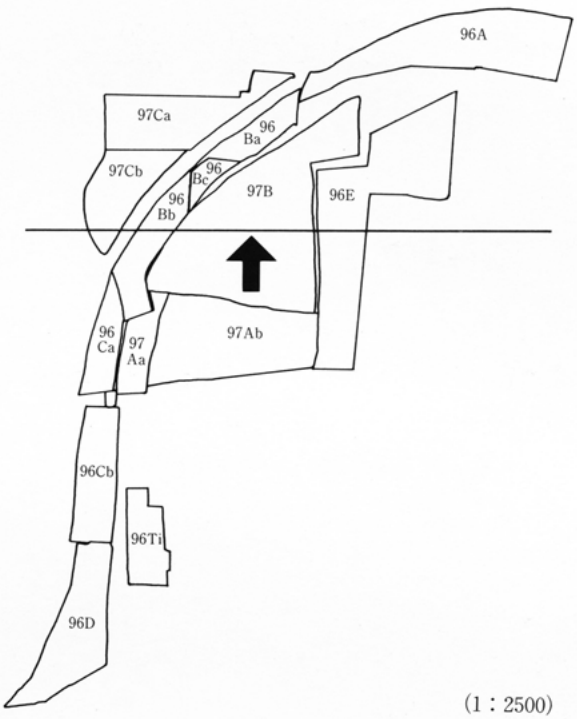
第2章　遺　　構

第1節　遺跡の基本層序

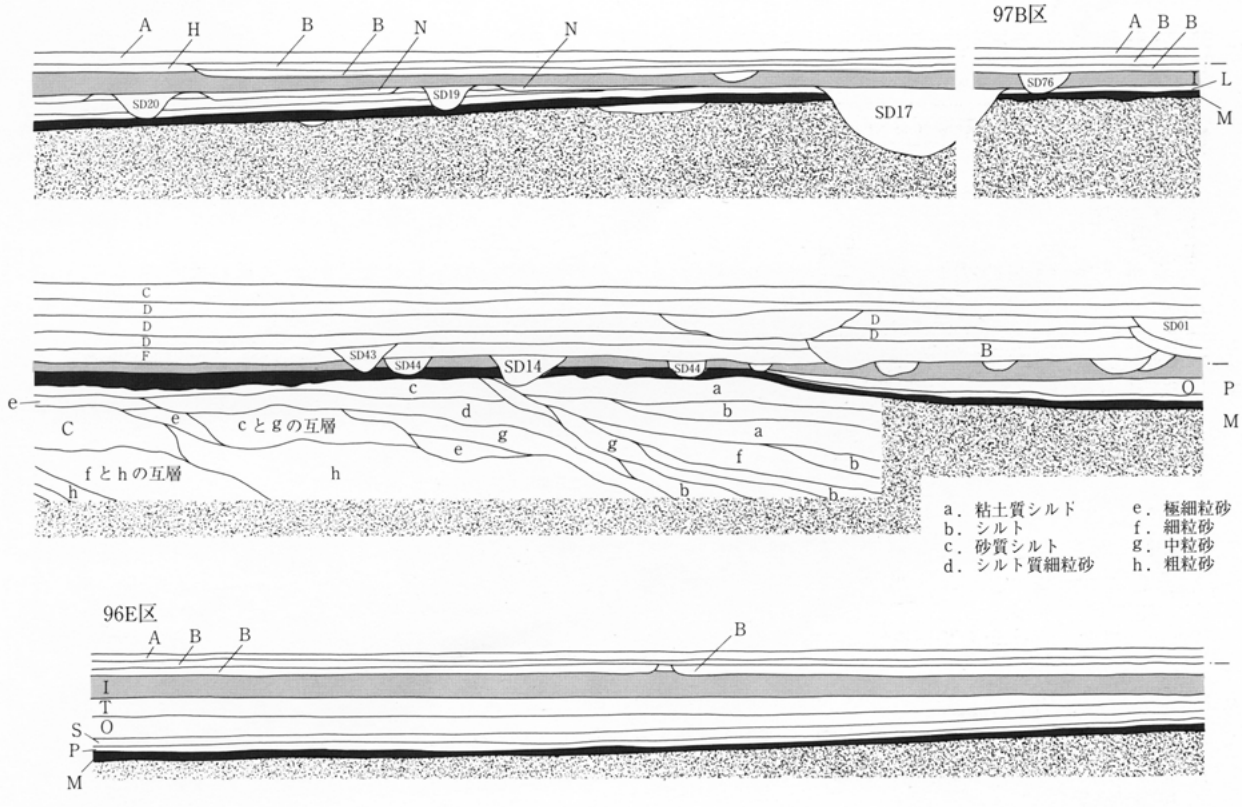
遺跡の基本層序は、旧地形が微高地で現況畑地の場合、第1層：耕作土（近世～現代島畑）、第2層：褐色シルト層（中世島畑）、または黄褐色シルト層（中世整地層か）、第3層：暗褐色粘土質シルト層（中世包含層か）、第4層：黒褐色粘土質シルト層（古代包含層）、第5層：褐灰色粘土質シルト層（古墳前期包含層）、第6層：黄褐色砂質シルト層（無遺物層であり、さらに細分化される。）、第7層：暗灰黄色シルト層、第8層：灰色粘土質シルト層、第9層：黒色粘土質シルト層、第10層：黄灰色砂質シルト層（またはシルト質細粒砂層）である。旧地形が低湿地部（谷部分）の所では、微高地上の堆積に比べて、第6・7層部分にシルト・細粒砂で構成されるラミナ部分と粘土層との互層が繰り返しみられる。また、第8層が暗灰色粘土層、第9層が黒色粘土層、第10層が緑灰色粘土層となり、第9層直上に薄い砂層が堆積している所もある。



第9図　三ツ井遺跡の土層堆積図（1：100）



(1：2500)



第4層(古代包含層)　第6層　上層　第9層(黒色粘土層・黒色粘土質シルト層)

第２節　遺構の概要と時期区分

時期区分

(1)　時期区分

調査の結果、本遺跡は縄文時代後期前葉から多少の断続はあるものの各時代にまたがる複合遺跡であることが明らかとなった。検出された遺構は、遺構の変遷から下記のように大きく８つの時期に区分して考えることができる。

①　縄文時代Ⅰ期：縄文時代後期前葉

②　縄文時代Ⅱ期：縄文時代後期中葉末～晩期中葉

③　弥生時代Ⅰ期：弥生時代前期

④　弥生時代Ⅱ期：層序より③～⑤の間（弥生時代前期～後期の間）に推定される時期（時期決定可能な遺物が出土していない。）

⑤　弥生時代後期～古墳時代

⑥　古　代

⑦　中世Ⅰ期：中世前半（島畑景観形成以前）

⑧　中世Ⅱ期以降：中世後半以降（島畑景観形成以降）

遺構検出

(2)　遺構検出

遺構検出は、中世以降は前節で記載した第３層～第６層直上で、古代は第４層～第６層直上で、弥生時代後期～古墳時代は第５層・第６層直上で行なった（以上、検出Ⅰ）。

弥生時代Ⅱ期は第６層がさらに細分化される各層及び第７層・第８層直上で行なった。縄文時代Ⅱ期及び弥生時代Ⅰ期の遺構の多くは、遺構埋土が近似する第９層（黒色土層）の層位中に展開し、遺構の検出がきわめて困難であった。そこで第９層直上で一度検出した（以上、検出Ⅱ）後、土層観察用のベルトを残して、第９層を掘削し、第10層直上で行なった（以上、検出Ⅲ）。このため、第９層に掘り込まれた遺構は明瞭さを欠くものが多くなってしまった。また、遺物が集中して出土したり、立位で出土したものもあり、出土状態から遺構出土の可能性が考えられたため、遺物を取り上げる際、できる限り出土地点の座標値とレベル値を計測した。縄文時代Ⅰ期の遺構検出も、第10層直上で行なった。

遺構の概要

(3)　遺構の概要

今回の調査において最も注目できる点は、弥生時代前期の水田跡の検出があげられる。平成９年度の調査段階で、その可能性は考えられたが、慎重を要する遺構のため、諸氏に現場調査中及び現場調査終了後にご指導・ご教示を賜り、自然科学分析結果を得て、遺構認定に至った。また、弥生時代前期の居住域と墓域に関連する遺構も検出された。その他、縄文時代の配石遺構、古墳時代・古代の居住域に関連する遺構、中世前半の墓域に関連する遺構、中世後半以降の島畑・水田に関連する遺構などがあげられる。（検出された島畑遺構・水田遺構は、幾度とない改変を受け、複雑で遺構数も膨大であった。そこで、96A区・96D区の一部（近世以降の水田遺構）を除き、個々の遺構番号を省略し、旧島畑・旧水田と呼称して調査を行なった。本書でも旧島畑・旧水田と呼称して取り扱うことにする。）

<table>
<tr><th colspan="2">関連する時代区分</th><th colspan="2">出土した土器編年型式
（対比・併行資料含む）</th><th>三ツ井遺跡の時期区分</th></tr>
<tr><td rowspan="11">縄　文</td><td rowspan="8">後　期</td><td rowspan="2">前　葉</td><td>北白川上層式１期</td><td rowspan="2">縄文時代Ⅰ期</td></tr>
<tr><td>北白川上層式２期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">中　葉</td><td>遺物未確認</td><td>遺構未確認</td></tr>
<tr><td>元住吉山Ⅰ式</td><td rowspan="7">（黒色土層の段階的堆積開始）

縄文時代Ⅱ期</td></tr>
<tr><td rowspan="3">後　葉</td><td>元住吉山Ⅱ式</td></tr>
<tr><td>宮　滝　式</td></tr>
<tr><td>寺津下層式</td></tr>
<tr><td rowspan="3">晩　期</td><td rowspan="2">前　葉</td><td>寺　津　式</td></tr>
<tr><td>元刈谷式</td></tr>
<tr><td>中　葉</td><td>稲荷山式</td></tr>
<tr><td>後　葉</td><td rowspan="2">遺物未確認</td><td>遺構未確認</td></tr>
<tr><td rowspan="3">弥　生</td><td rowspan="2">前　期</td><td></td><td>尾張編年Ⅰ－２期</td><td>弥生時代Ⅰ期</td></tr>
<tr><td>中　期</td><td colspan="2" rowspan="2">遺物未確認</td><td rowspan="2">弥生時代Ⅱ期</td></tr>
<tr><td>後　期</td></tr>
<tr><td rowspan="5">古　墳</td><td rowspan="3">前　期</td><td colspan="2">廻間Ⅰ式～廻間Ⅱ式</td><td>古墳時代前期①②</td></tr>
<tr><td colspan="2">遺物未確認</td><td>（古墳時代前期包含層の堆積）</td></tr>
<tr><td colspan="2">松河戸Ⅰ式</td><td>古墳時代前期③</td></tr>
<tr><td>中　期</td><td colspan="2">遺物未確認</td><td>遺構未確認</td></tr>
<tr><td>後　期</td><td colspan="2">東山61号窯式</td><td>古墳時代後期</td></tr>
<tr><td rowspan="4">古　代</td><td>飛　鳥</td><td colspan="2">遺物未確認</td><td>遺構未確認</td></tr>
<tr><td>奈　良</td><td colspan="2">東山50号窯式～</td><td rowspan="2">古　　代

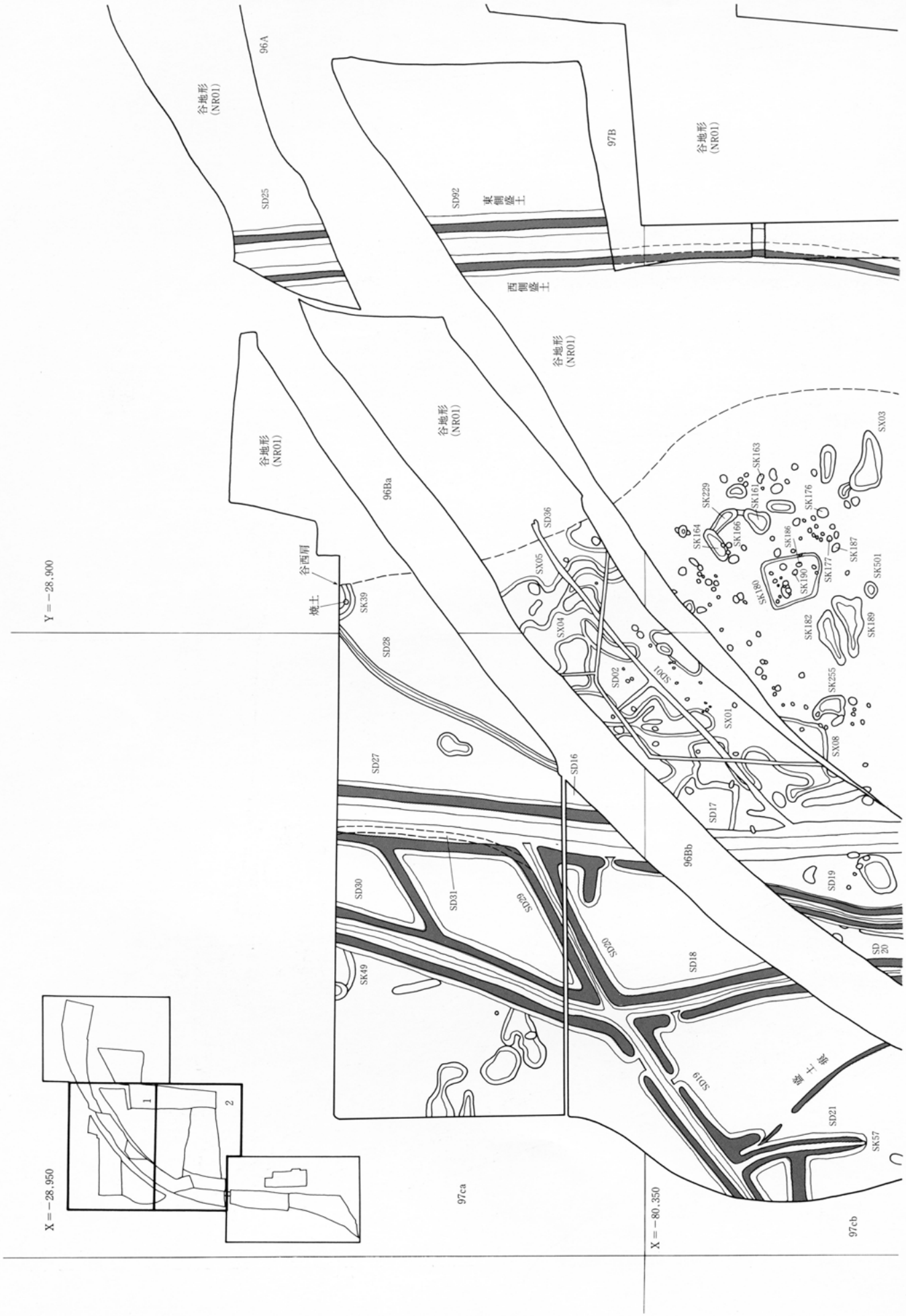
（古代包含層の堆積）</td></tr>
<tr><td rowspan="2">平　安</td><td colspan="2" rowspan="2">折戸10号窯式～黒笹90号窯式</td></tr>
<tr><td>折戸53号窯式～百代寺窯式</td></tr>
<tr><td rowspan="3">中　世
～</td><td rowspan="2">鎌　倉</td><td rowspan="2">尾張型
第４型式
～
第７型式</td><td rowspan="3">東濃型
窯洞窯式

～

生田窯式</td><td>中世Ⅰ期</td></tr>
<tr><td rowspan="2">（島畑景観の形成）

中世Ⅱ期
～</td></tr>
<tr><td>室　町
～</td><td></td></tr>
</table>

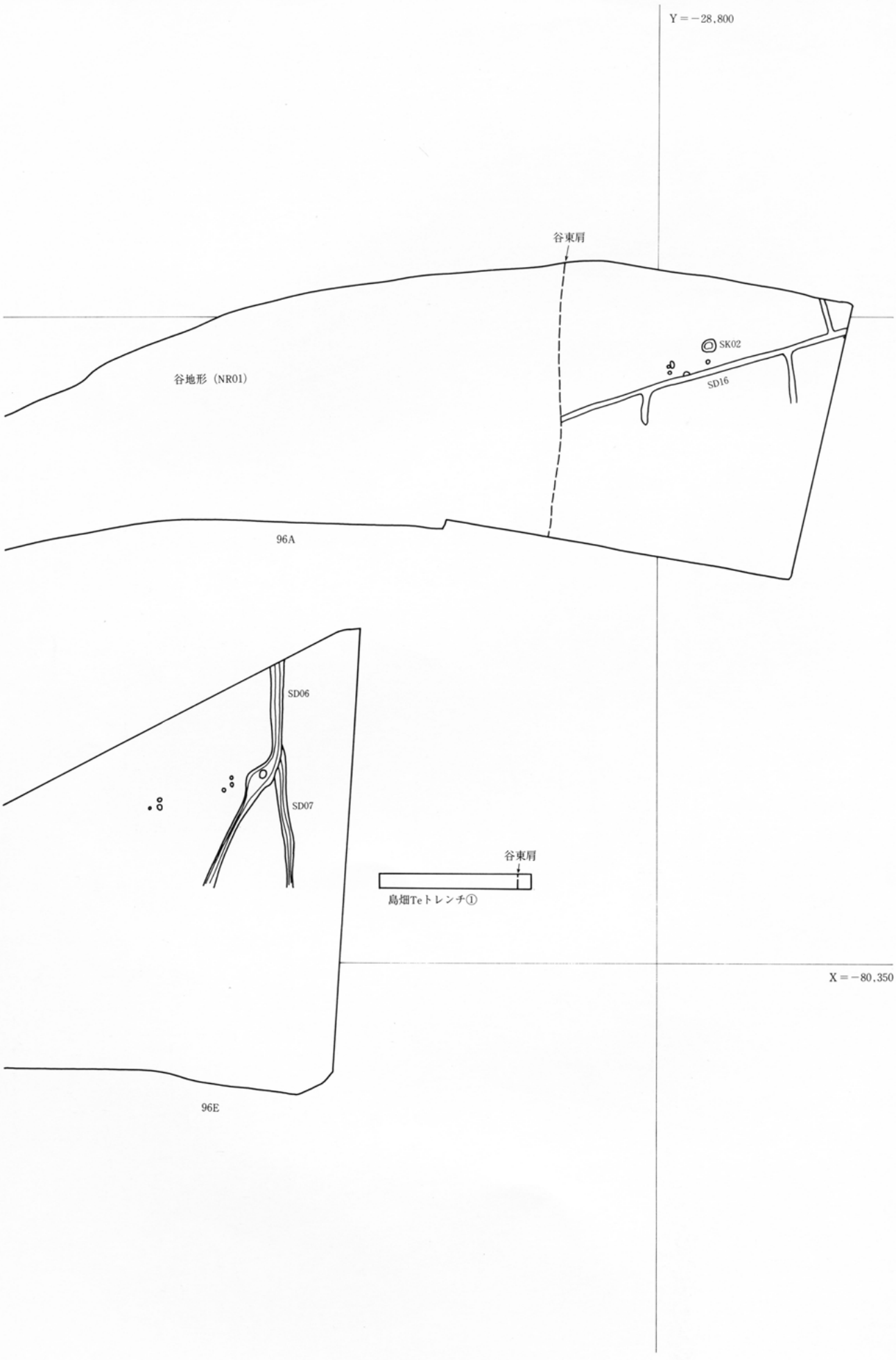
第３表　三ツ井遺跡の時期区分表



第10図　弥生時代Ⅱ期以前の基本遺構図(1)（1：400）



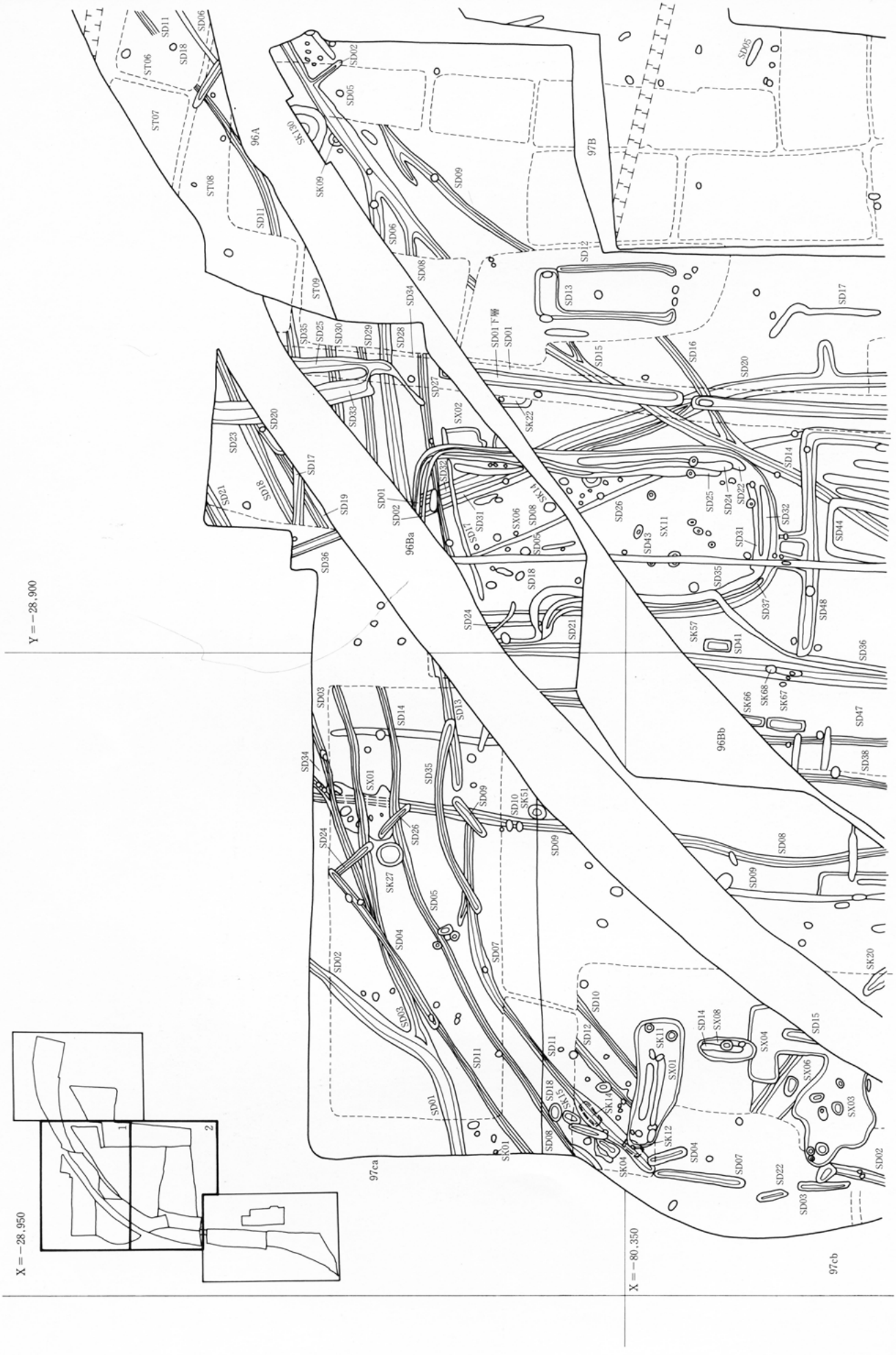
第11図　弥生時代Ⅱ期以前の基本遺構図(2)（１：400）



第12図　弥生時代Ⅱ期以前の基本構図(3)（１：400）



第13図　弥生時代Ⅱ期以前の基本遺構図(4)（1：400）

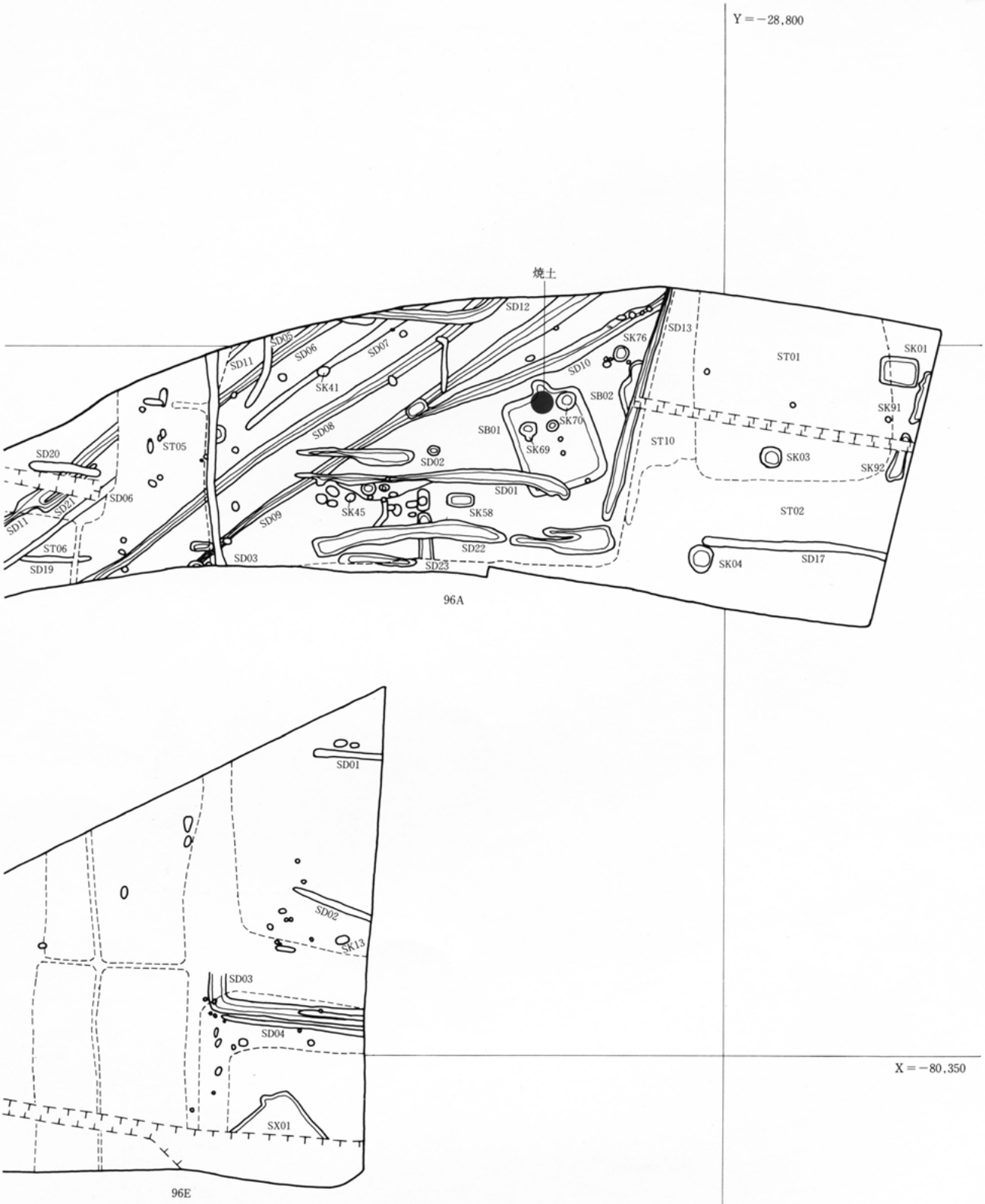


第14図　弥生時代後期以降の基本遺構図(1)（1：400）

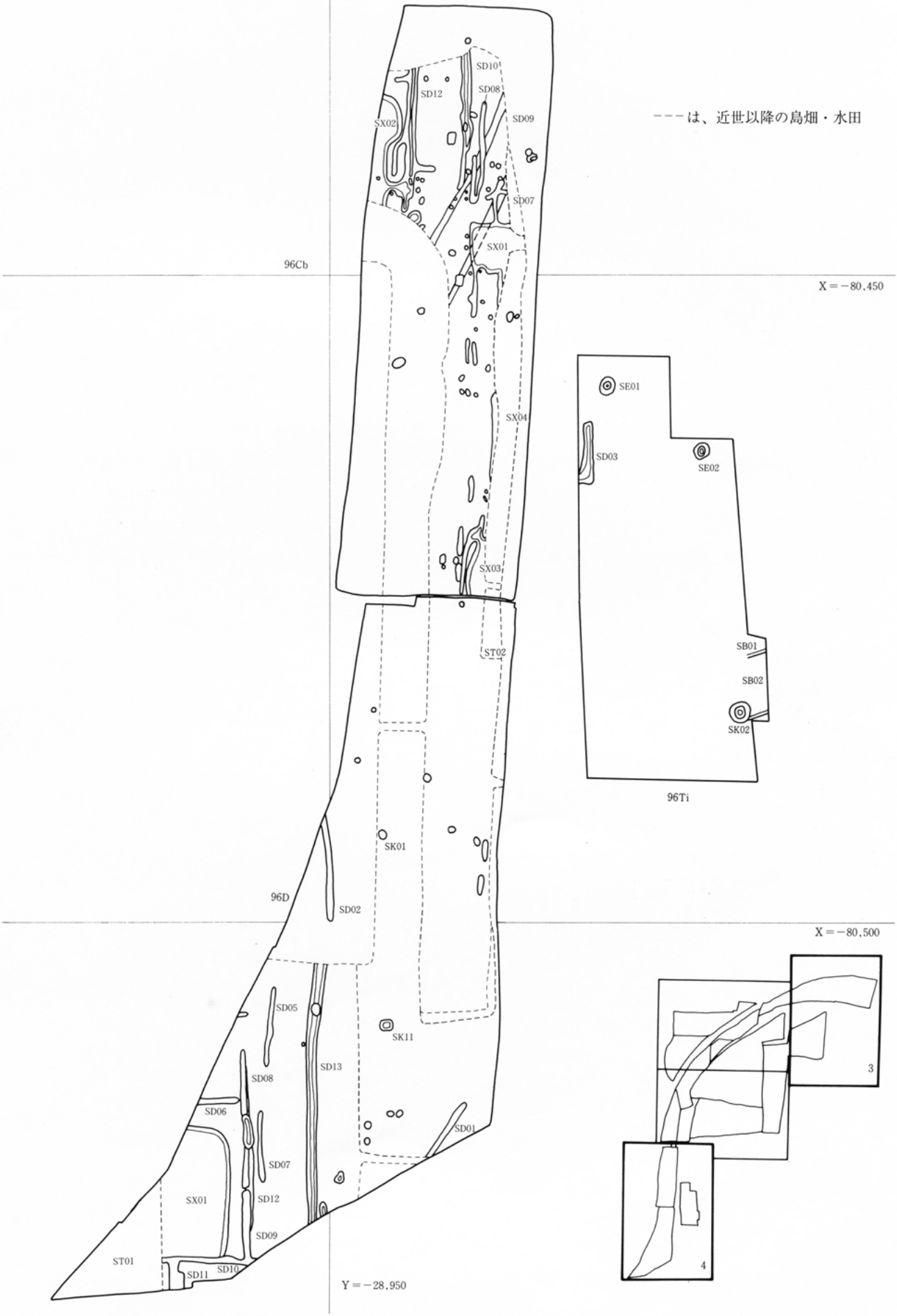


---は、近世以降の島畑・水田

第15図　弥生時代後期以降の基本遺構図(2)（1：400）



第16図　弥生時代後期以降の基本遺構図(3)（１：400）



第17図　弥生時代後期以降の基本遺構図(4)（１：400）

第３節　各時期の遺構

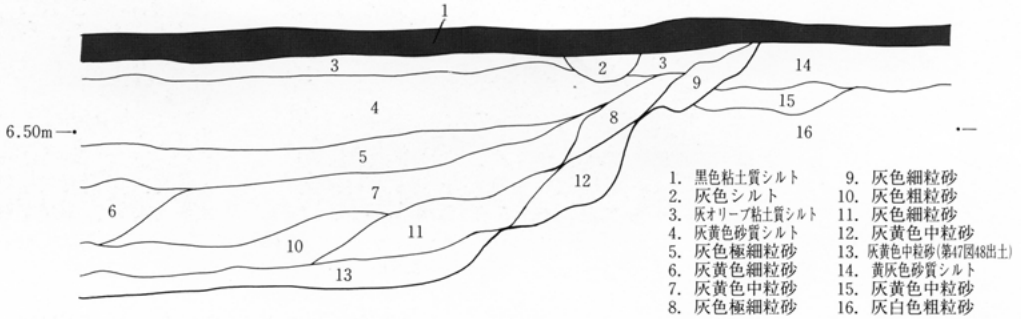
１．縄文時代

縄文時代Ⅰ期　(1)　縄文時代Ⅰ期

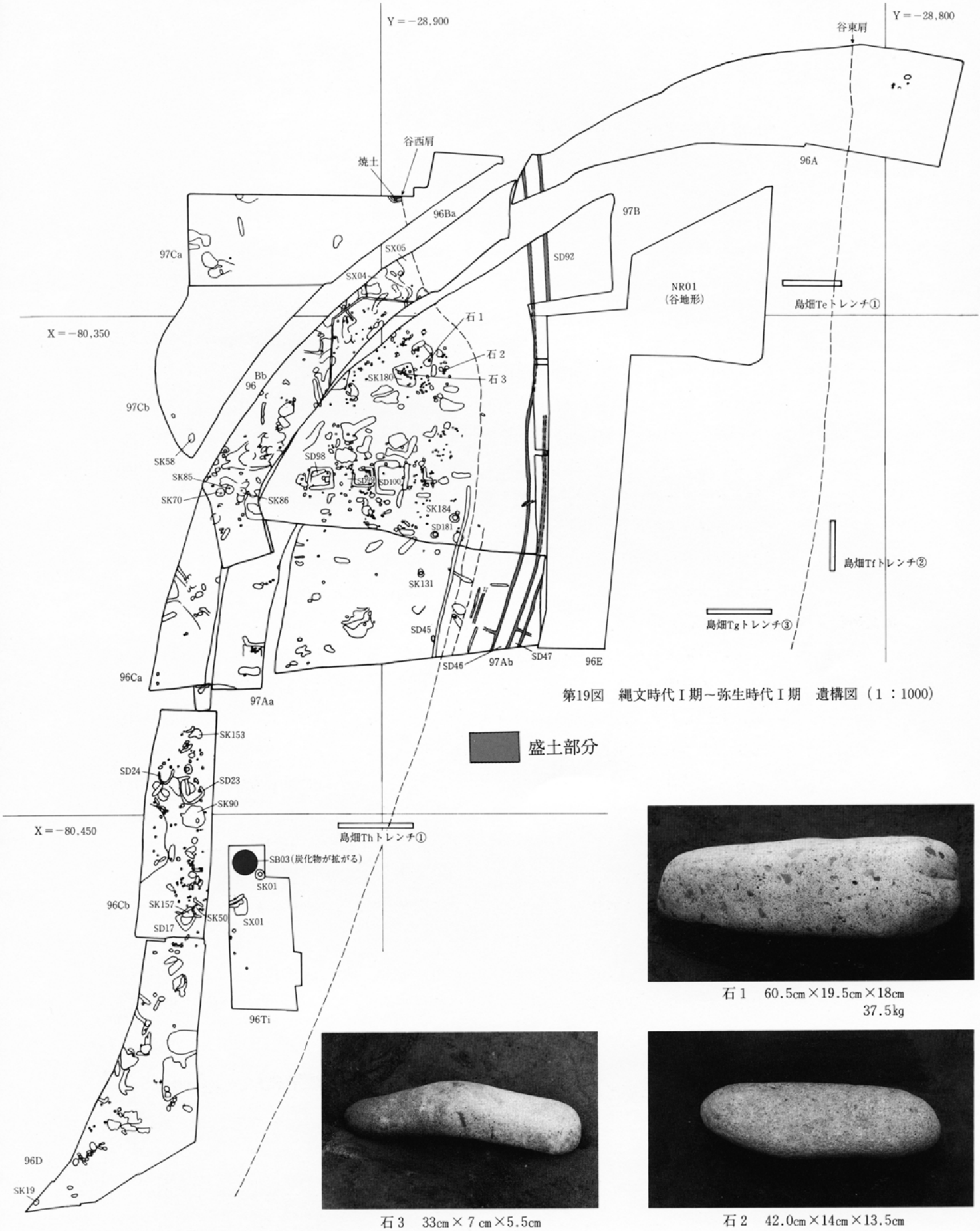
後期前葉の遺構としては、97B区の微高地上に土坑群（97B SK176・180・186・187・188・190など）を検出した。遺物は、深鉢・石鏃・磨製石斧などが出土した。後期前葉の土器のほとんどが97B区の微高地及びその周辺で出土している。また、人為的に運ばれ、配されたと推察される長さ30～60㎝程の自然石が４点確認された。そのうち最大のものは、一辺20㎝・長さ60㎝程で直方体を呈している。出土状態は、いずれも横置であったが、立柱状態あった可能性も想定される。その後、河川の流れに変化が生じ、幅約80m、最大高低差約１mの谷地形が形成され、地形全体に黒色土層（黒色粘土層・黒色粘土質シルト層）が段階的に堆積したと考えられる。97B NR01西端の黒色土層下約1.2mの地点の砂層から深鉢が２点（第47図48と49の破片）出土し、そのうち１点（第47図49と接合した土器片）は、洪水により埋没した立ち木脇の砂層から出土している。

縄文時代Ⅱ期　(2)　縄文時代Ⅱ期

後期中葉末から晩期中葉の土器・石器類が黒色土層及びその下位層より出土しているが、この時期の遺物量は相対的に少なく、遺構に伴うものは晩期中葉のものと推察される。先述したように、この時期の遺構検出は困難であり、弥生時代Ⅰ期の遺構との判別も難しかったが、96Ba・Bc区の溝状遺構（96BaSX04・05など）や96Cb区のSK90、97B区の小土坑群などが主な遺構としてあげられる。96Ba区の溝状遺構埋土などからイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が検出されたことから、付近で稲作が行なわれた可能性が高まったが、今回の調査ではこの時期の明確な水田遺構は確認できなかった。主な遺物としては、深鉢・浅鉢、石鏃・石錘・スクレーパー・垂飾などがあげられる。また、97B区の微高地上で、石器製作によって生じたと推察される剝片が多く出土し、原石も出土した。石材は下呂石が多く、他にチャート・サヌカイトの剝片も出土している。この微高地上で、弥生土器はほとんど出土せず、縄文土器の出土量は、他の地点よりも多い。縄文時代の遺構も確認されていることから、縄文時代の石器製作の場が想定される。



第18図　97B NR01下層（黒色土層堆積前）断面図（１：40）



第19図　縄文時代Ⅰ期～弥生時代Ⅰ期　遺構図（１：1000）

石１　60.5cm×19.5cm×18cm
37.5kg

石３　33cm×７cm×5.5cm
2.5kg

石２　42.0cm×14cm×13.5cm
12.5kg

第20図　縄文時代Ⅰ期の石、出土状況写真

(3)　縄文時代Ⅱ期～弥生時代Ⅰ期の間の時期に推定される遺構

性格不明の土坑群

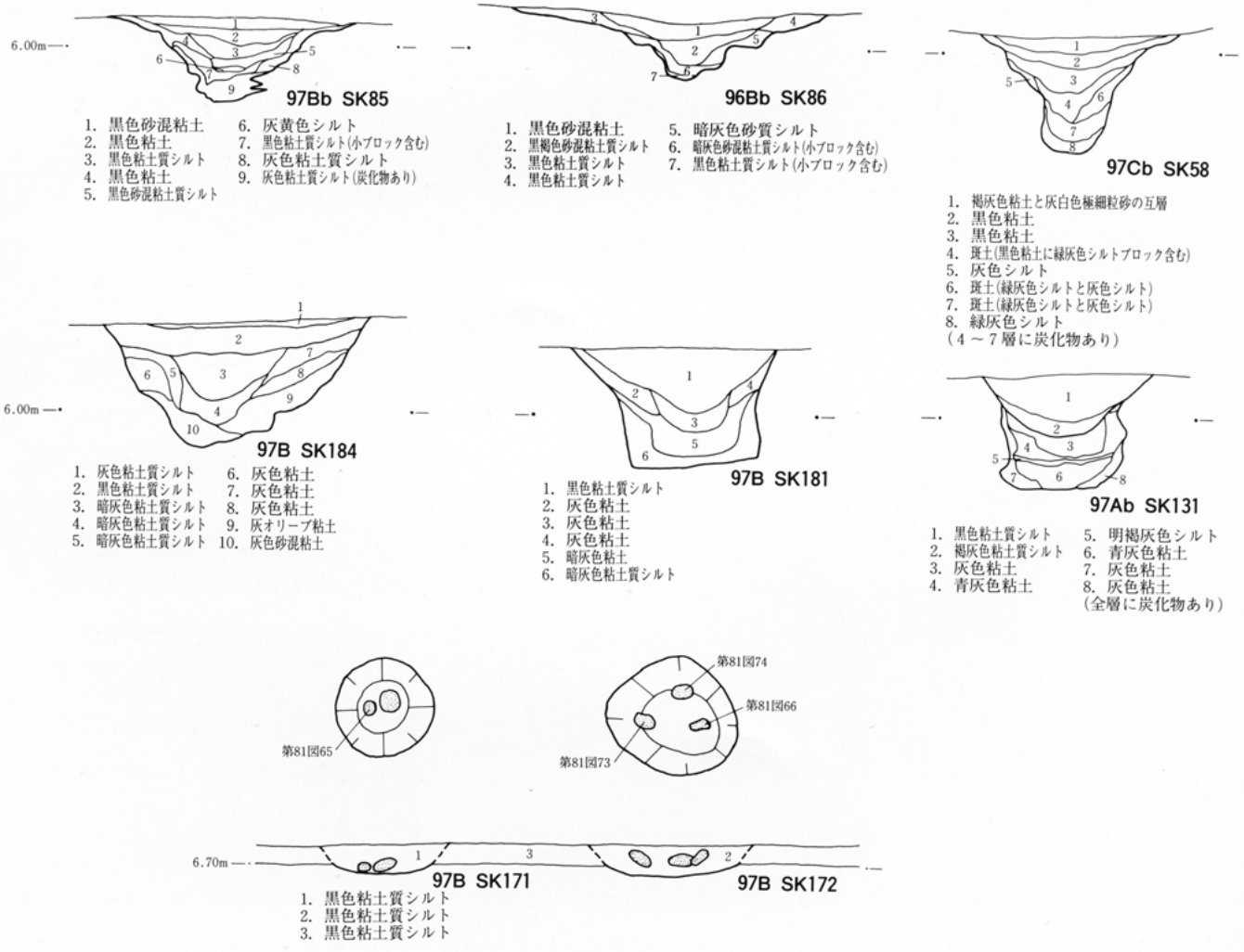
性格不明の土坑群

96Bb区・97Ab区・97B区の微高地縁辺で、性格不明の土坑群（96BbSK85・86、97AbSK131、97B SK181・184、97CbSK58など）が検出された。いずれも出土遺物がなく、明確な時期は不明であるが、層位より縄文時代Ⅱ期～弥生時代Ⅰ期の間の時期に推定される。この土坑群は、それぞれ形態が異なるため、同一の性格のものとは考え難い。推測ではあるが、井戸、貯蔵穴あるいは陥し穴か。

石器埋納土坑

石器埋納土坑

97B区の微高地上で、石器類（敲石と用途不明品（磨石または台石））がセットで埋納された土坑２基（97B SK171・172）が検出された。遺構の時期は、層位より縄文時代Ⅱ期～弥生時代Ⅰ期の間の時期に推定される。近辺から下呂石・チャートなどの剥片が多く出土していることから、石器製作の場に関連したものであろうか。あるいは、後述する弥生前期の墓域に関連したものであろうか。



第22図　石器埋納土坑平面図・断面図（１：40）

2．弥生時代Ⅰ期

弥生時代Ⅰ期　弥生時代Ⅰ期の遺構は、出土遺物より弥生時代前期（尾張編年に対比すると、Ⅰ－2期に相当する。出土遺物の詳細は、第3章第1節2を参照。）のものと考えられる。また、先述したように遺構の検出が極めて困難であったため、明瞭さを欠くものが多くなってしまった。遺構の性格は、居住域に関連するもの、水田域に関連するもの、墓域に関連するものの大きく3つの遺構群に分かれる。以下、それぞれの遺構群について報告する。

居住域　(1) 居住域

この時期の居住域は、谷地形西側の微高地上に展開し、その中心地は96Cb区とその東の96Ti付近と考えられる。主な出土遺物としては、遠賀川系壺型土器・甕型土器、条痕紋系壺型土器・甕型土器、氷式系削痕深鉢型土器、各種石器類などがあげられる。

居住域の遺構　居住域の遺構

96CbSD17・23・24などは、明瞭さを欠くが竪穴住居の周溝と考えられる。96TiSB03、SX01も竪穴住居の可能性が考えられる。96CbSK50・153・157、96TiSK01などの土坑群はこの時期の遺構と考えられる。他の調査区と比較して、96Cb区・96Ti付近からの遺物出土量は多い。96Cb区より出土した遺物は、その分布状況をみると出土地点が集中しているものがあり、黒色土層中から立位で出土したものもあった。これらのことから推察すると、これらの遺物は検出できなかった遺構出土の可能性が考えられる。

土器製作の場　土器製作の場

96TiSK01から遠賀川系土器（壺・蓋・鉢）、氷式系削痕深鉢型土器が出土した。このうち、

焼成剝離土器片　遠賀川系壺型土器は、焼成時の剝離痕と剝離した土器片が接合した。このことから、96TiSK01付近で土器焼成が行なわれ、本遺跡に土器製作の場が存在していたことが想定される。96TiSK01に隣接する96TiSB03は、炭化物が広範囲に拡がる遺構であり、土器製作との関係が推察される。

石器製作の場　石器製作の場

石器剝離廃棄土坑　96CbSK157は、下呂石の剝片98点が出土し、石器製作によって生じた剝片の廃棄土坑と考えられる。剝片・石核の出土分布状況（第3章第3節1の第83図参照）をみると、96Cb区・96Tiを中心とした微高地上に集中し、石器製作の場が想定される。97B区の微高地上では、下呂石の他にチャート・サヌカイトと思われる剝片なども出土しているが、96Cb区の微高地上で出土した剝片は、ほとんどが下呂石である。97B区の微高地上で出土した剝片を縄文時代のものと推定すると、縄文時代と弥生時代前期に使用された石材の変化が比較できよう。

遺構の時期　遺構の時期

遺構出土遺物を尾張編年に対照してみると、96CbSK50、96TiSX01はⅠ－2期古段階、96CbSK153 、96TiSB03はⅠ－2期中段階、96TiSK01はⅠ－2期新段階に比定できる。

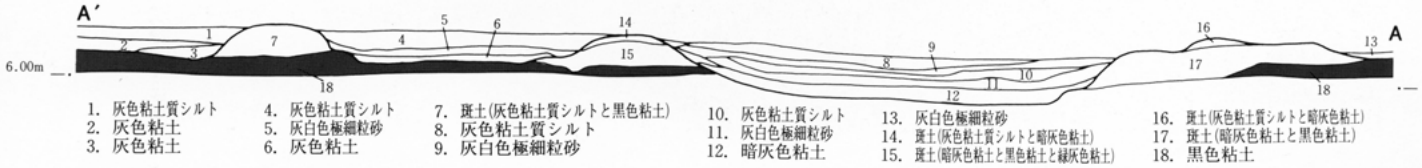
水田城　(2)　水田域

水田跡　水田跡

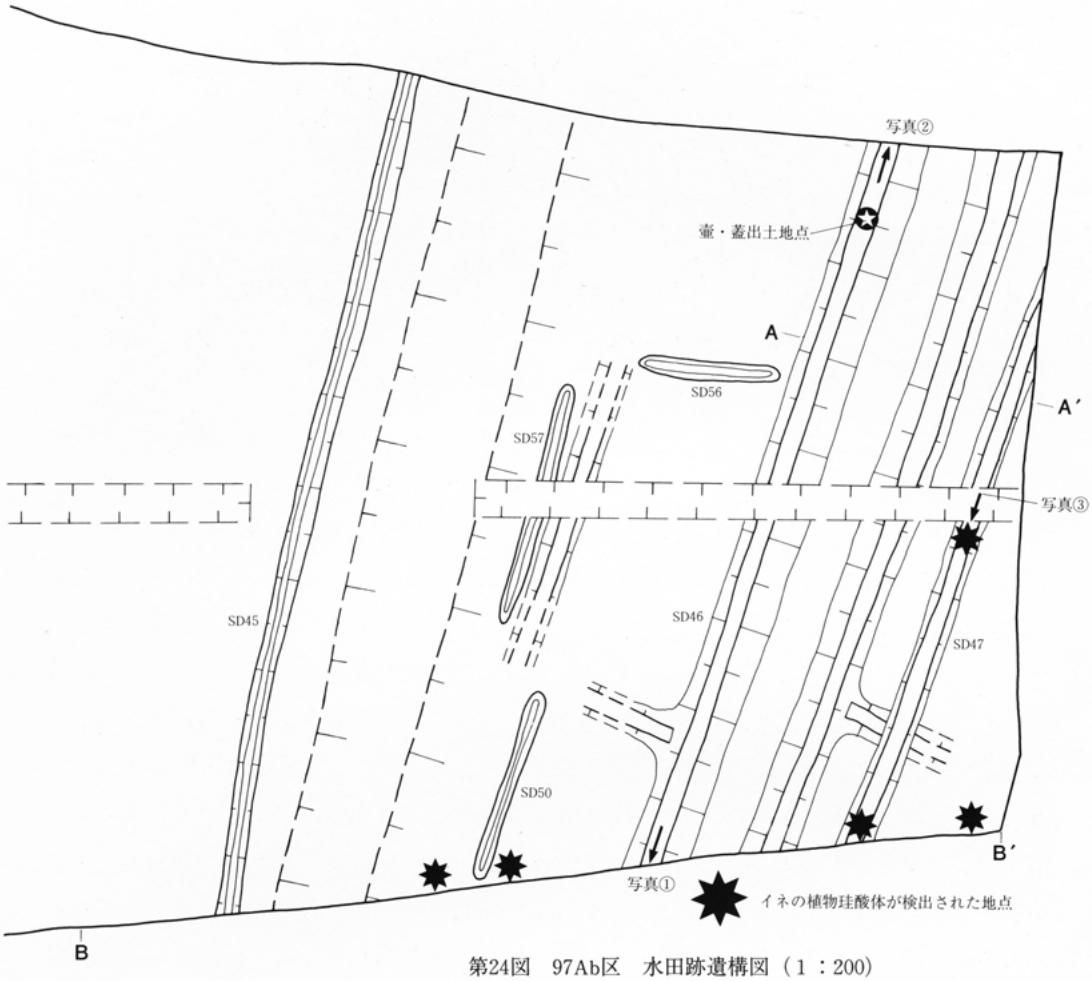
浅谷化した旧河道（NR01）の低湿地部で、南北方向に走り、両側に盛土を伴う幅３ｍ・深さ40㎝程の溝、97AbSD46（96A SD25、97B SD92と同溝）を検出した。地形の高低差が緩やかになる97Ab区では、97AbSD46両側盛土にそれぞれ直交する盛土と、西側の盛土から約５ｍ西に平行する盛土を検出した。平行する盛土は、その両脇に、造成時に土を掻き上げた痕跡と思われる浅い溝状の窪地（97AbSD50・57）を伴っている。97AbSD46西側盛土と平行する盛土との間で東西方向に走る97AbSD56も土を掻き上げた痕跡と思われる。97AbSD46東側に平行して走る97AbSD47は、97AbSD46より後の時期に掘削され、西側の盛土は97AbSD46東側盛土と共有している。この97AbSD47の東側盛土中及び、低湿地部の当該時期の土層中（97Ab区南壁）より、イネの植物珪酸体（プラント・オパール）が検出され、97B区・97Ab区の微高地縁辺から穂摘具と考えられる粗製剝片石器が４点出土している。これらのことから、97AbSD46両側盛土に直交・平行する盛土は大畦畔であり、盛土を伴う溝は水田に水を供給するための用水路であり、水田跡と考えられる。溝の両側盛土は、水位を水田面より高く設定するために土手状に高く築かれたものと推察される。小畦畔の有無は確認できなかったが、上位堆積の砂層より、その後の洪水により削平された可能性が考えられる。明確な排水路はなく、自然の緩傾斜地形による田面高低差を利用した田越し灌漑によって、順次、水を配していったものと推定される。遺構の遺存状態が悪く、水田耕作土層も確認できなかったが、先述したイネの植物珪酸体を検出した層が、水田床土層下部と推定される。明確な水田域は不明であるが、97Ab区の低湿地部を中心とした97AbSD46の東西両側に展開していたものと想定される。

また、97AbSD45は、層位的に97AbSD46・47より新しく、後の時期に水田用水路として利用されたものと推察される。弥生時代Ⅱ期の層位より下位の遺構のため、弥生時代Ⅰ期の遺構に含めた。

盛　土　97AbSD46両側盛土は下端幅120㎝、高さ20㎝程で、97AbSD47東側盛土及び平行する盛土は高さ15㎝程とやや低く、直交する盛土はさらに低く、高さ５㎝程であった。盛土は、基盤層の黒色粘土層とその下層の灰白色粘土層が掻き上げられ造成されたものと推察され、両者がブロック状に混じり合った斑土を呈している。大きなブロックで構成された部分は、造成当初の盛土部分と推察され、細かいブロックのみで構成される所、黒灰色を呈する所、盛土直下層の黒色粘土層が撹拌されている所は、再造成された盛土部分と推察される。盛土は分層可能な部分が多く、繰り返し修理され、利用されたものと思われる。



第23図　97AbSD46・47断面図（１：40）



第24図　97Ab区　水田跡遺構図（1：200）



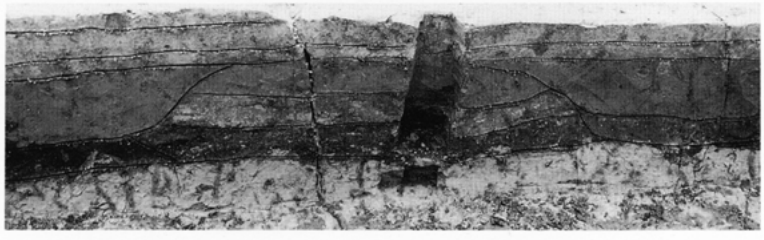
① SD46西側盛土

黒色粘土層下層の灰白色粘土層と思われる大ブロックがみられ、造成当初の盛土部分と推察される。



② SD46西側盛土

幾度か、造成され直されていることがわかる盛土部分。



③ SD47東側盛土

SD46盛土より、後に造成された盛土部分。
盛土の各層より、イネの植物珪酸体が検出された。

第26図　水田跡盛土断面写真

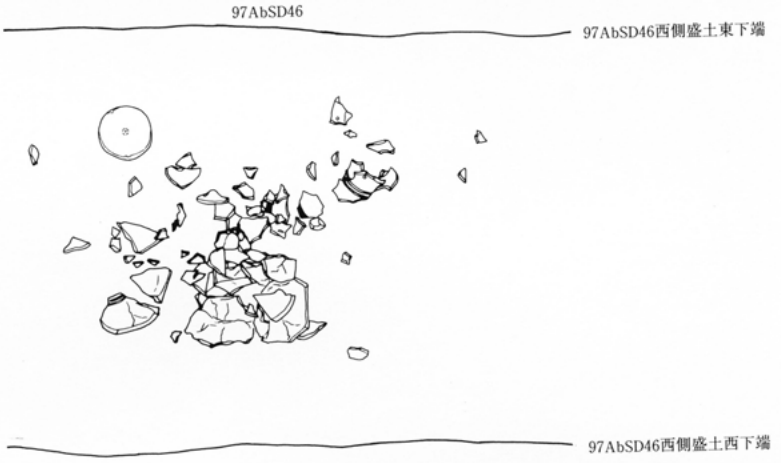


第25図　97Ab区　南壁断面図（1：100）

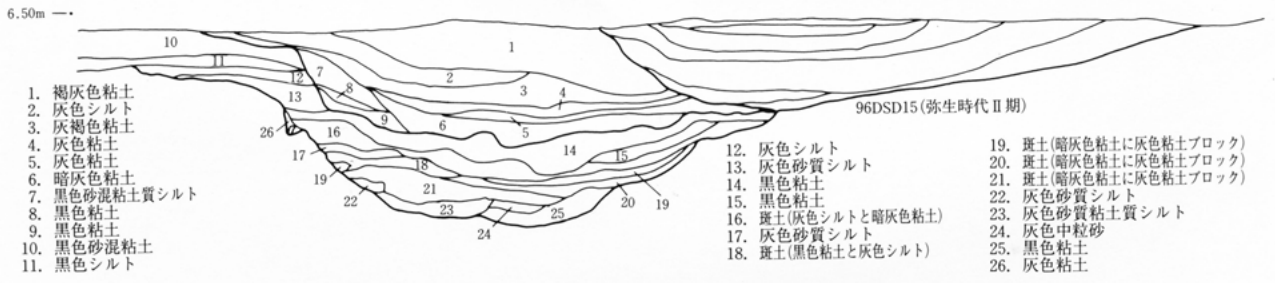
水田跡の時期　水田跡の時期

97AbSD46西側盛土中から遠賀川系の壺型土器と壺蓋型土器がセットで出土した。尾張編年に対照してみると、Ⅰ－2期中段階に比定できる。底部は残存せず、土器片は動いている。出土した盛土部分は、大きなブロックを含まず、細かいブロックで構成され、全体として黒灰色を呈しているため、再造成されたものと推察される。推測の域ではあるが、水田における祭祀目的で盛土内に埋設された可能性が考えられ、その後、盛土が再造成されたため、土器片が動いたものと推定される。時期決定可能な遺物は少なく、他に氷式系削痕深鉢型土器片が97Ab区の水田域から少量出土している。また、参考資料として掲載するが、14C年代測定結果によると、97AbSD46の埋土最下層はB.C.490年、同地点の基盤層（黒色粘土層）はB.C.960年の暦年代値を得た。

96D SK16　96D SK19は、その下層部の黒色粘土層などからイネの植物珪酸体が検出された。



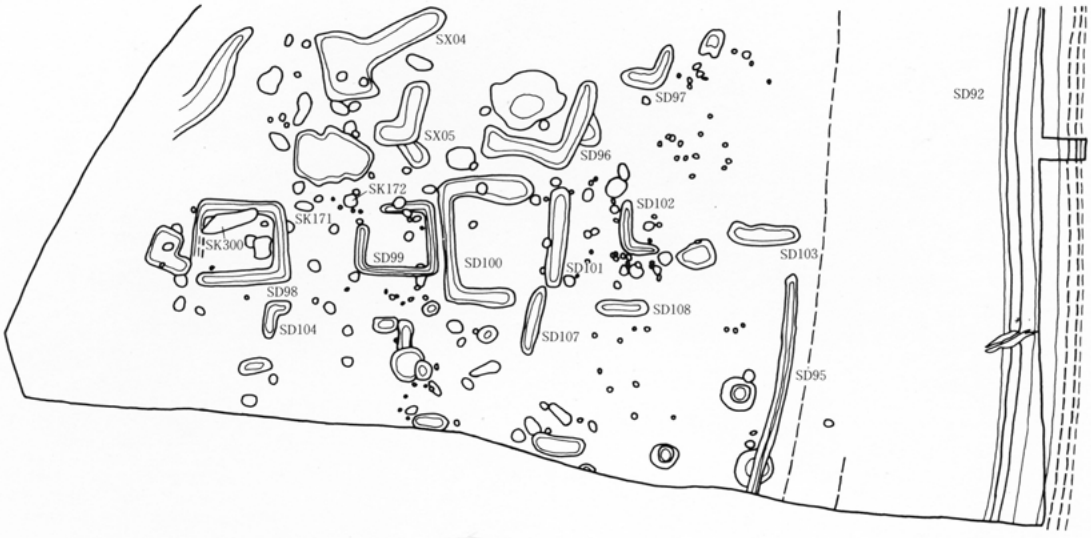
第27図　97Ab SD46西側盛土内遺物出土状態図（1：20）



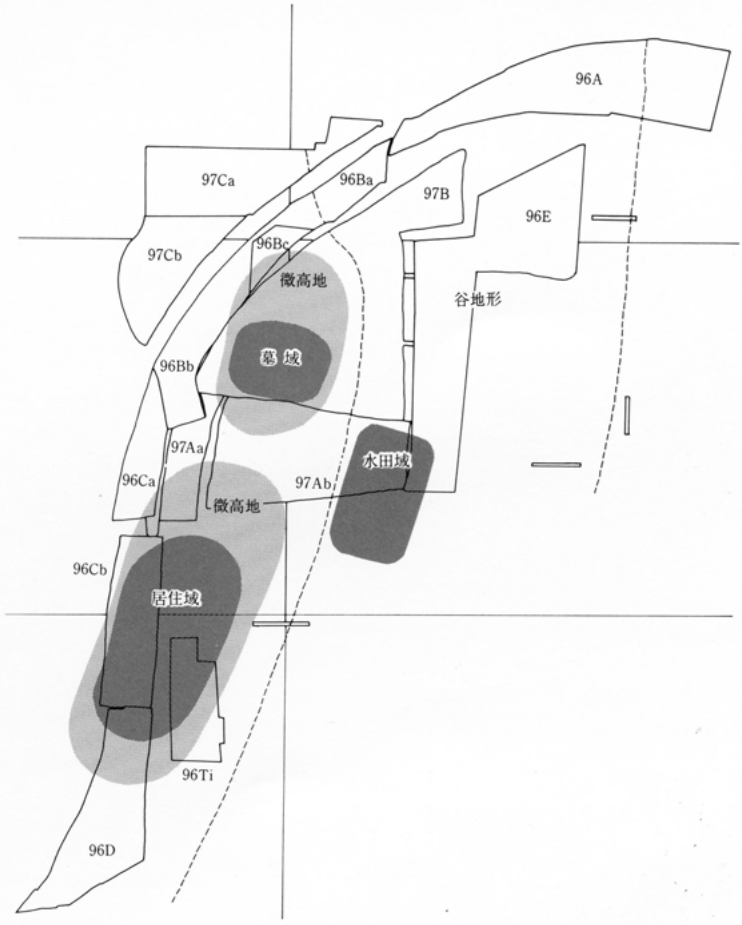
第28図　96D SK19断面図（1：40）

墓　域　(3) 墓　域

97B区の微高地上で方形周溝状を呈した遺構群を検出した。調査時は、竪穴住居の周溝を想定していたが、炭化物や柱穴らしい土坑がみられず、遺物も細片でほとんど出土しなかったため、諸氏に助言をいただき、再考した。遺構群が一定の方位を意識して造成されていること、96Cb区を中心とした微高地上に居住域を想定すると、やや離れた場所に位置していることなどから、墳丘及び主体部は確認できなかったが、非A4形の方形周溝墓群と考えられる。遺構の時期は、層位より弥生時代前期以前と推定される。また、出土遺物は細片で、供献土器と考えられるものは、確認できなかった。



第29図　97B区方形周溝墓群（1：400）



第30図　弥生時代Ⅰ期遺構模式図（1：2000）

3．弥生時代Ⅱ期

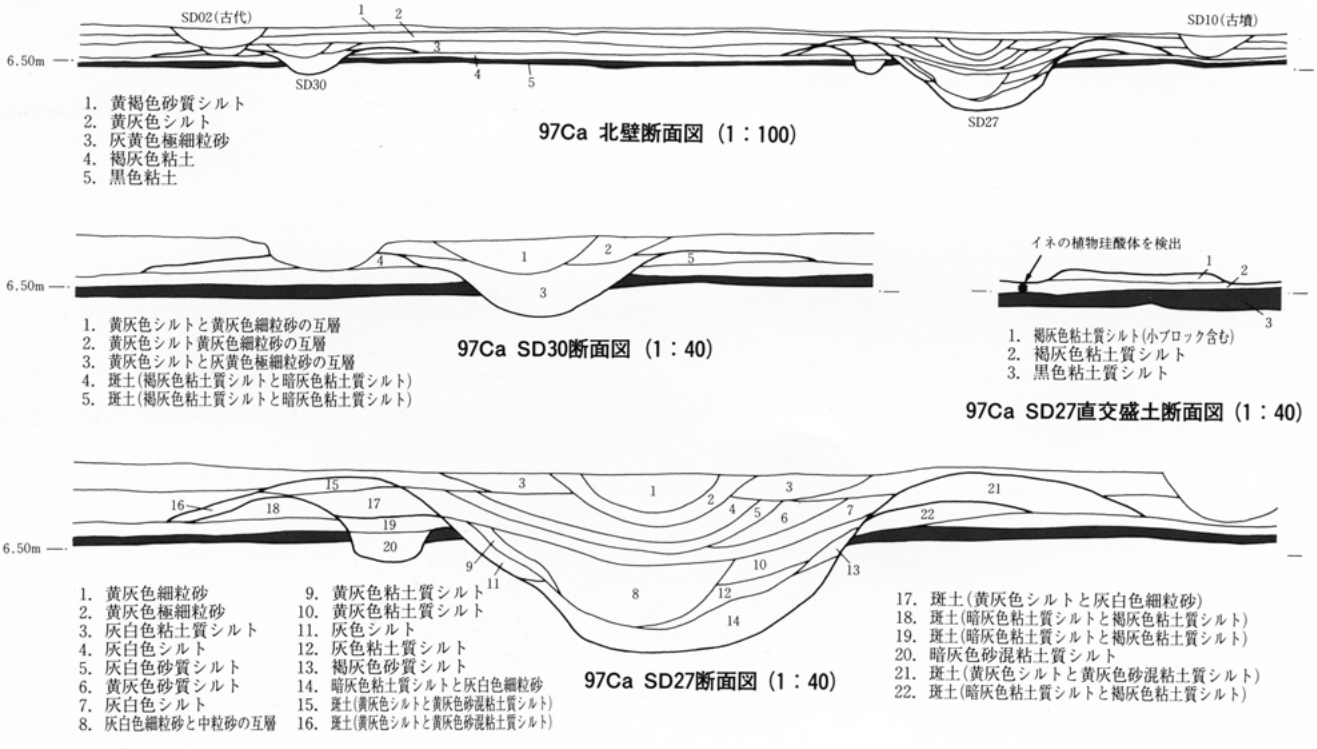
弥生時代前期から後期の間と考えられる時期に、再びNR01の活動が活発化したため、稲作は、微高地西側の縁辺部の緩傾斜地で展開するようになったと推察される。幅３m・深さ１m程の大溝、97CaSD27（96BbSD17、96CaSD06、96CbSD16、96DSD15、97BSD93、97AaSD06、97CbSD16と同溝）は盛土を伴い、大溝から分岐・合流する溝群のうち、97CaSD29（97CbSD20と同溝）・30、97CbSD18（96BbSD20、96CaSD05と同溝）・19・21、96BbSD19には盛土がみられたが、97CaSD28、96BaSD36（96BcSD01と同溝）、96E SD06・07には盛土がみられず、他の溝の盛土の有無は不明である。また、97CaSD27西側盛土と97CaSD30東側盛土に直交する盛土が確認されたこと、97CbSD16の西側盛土などに水口がみられたこと、溝の埋土や同層位の土層中からイネの植物珪酸体が確認されたことなどから、これらの溝群は水田用排水路として利用され、水田域は大溝の西側に展開されたものと想定される。Ⅰ期と同様、小畦畔の有無は確認できなかった。溝や同層位の土層中からの出土遺物は、弥生前期の土器細片のみで、明確な時期は不明であるため、層位より時期幅を設定した。弥生時代後期までの間に、幾度もの洪水性の堆積によって谷地形は段階的に埋没していき、その度に溝群は再掘削されたものと推察される。従って、各溝の掘削に時期差がみられた。また、この時期の居住域については不明である。

溝の掘削段階

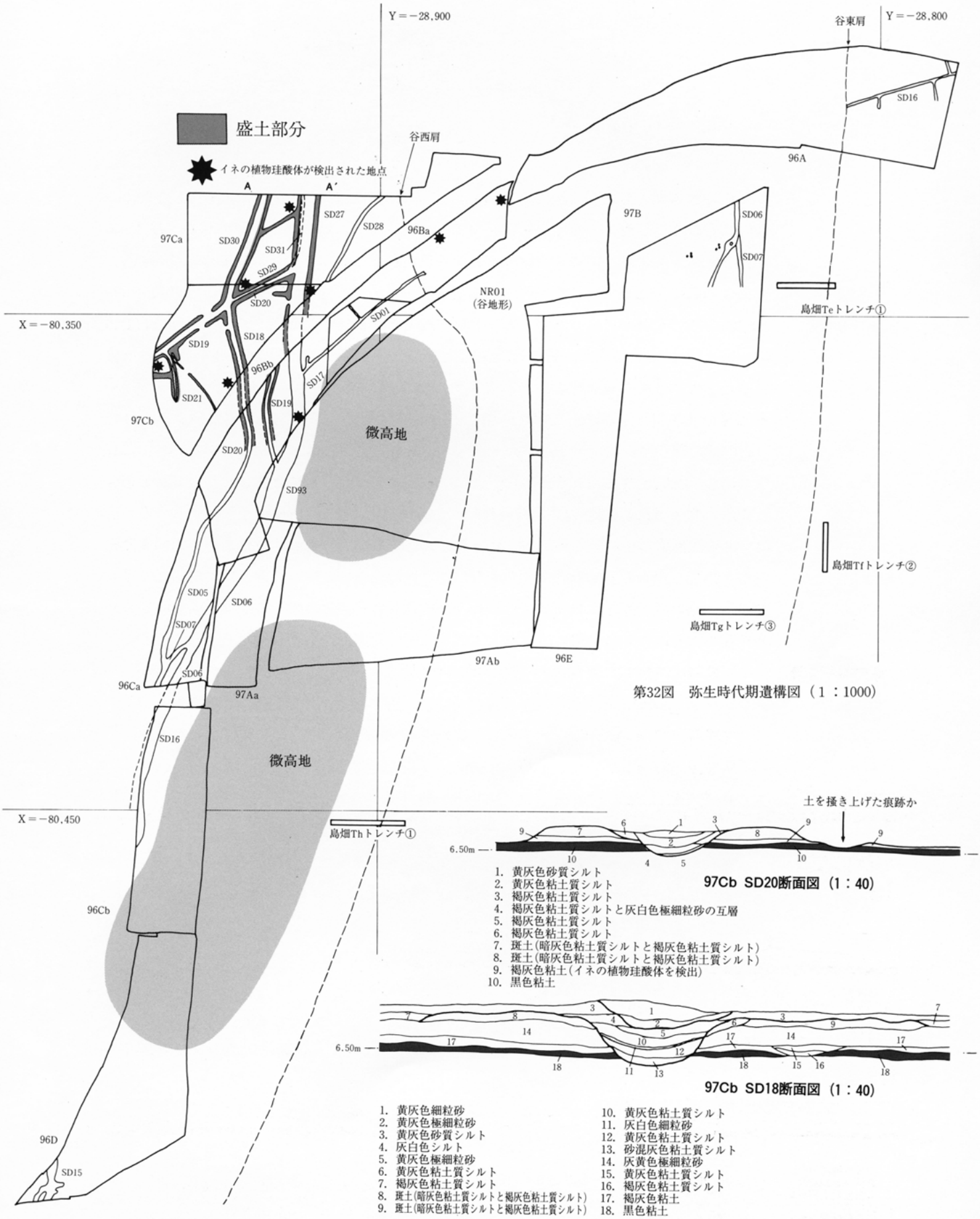
古段階　97CaSD27下層・28・29下層・30下層・31、97CbSD19下層、96A SD16、96BaSD36

中段階　97CaSD27中層・29上層・30上層、97CbSD18下層・19中層、96BbSD19、

新段階　97CaSD27上層、97CbSD18上層・19上層・21、96E SD06・07



第31図　弥生時代Ⅱ期遺構断面図(1)



第32図　弥生時代期遺構図（1：1000）

第33図　弥生時代Ⅱ期遺構断面図(2)（1：40）

4．弥生時代後期～古墳時代

弥生時代後期までに、洪水性の堆積によって谷地形は埋没したが、溝の方向性などから前時期とほぼ同位置に微高地が存在し、居住域が展開されていたものと想定される。

(1) 弥生時代後期（山中式後期）～古墳時代前期①（廻間Ⅰ式）の遺構

97B SK74　楕円形の浅い土坑。山中式後期の遺物（有段高杯、小型の広口壺など）のみ出土。

96Ti SK02　井戸の可能性が考えられる土坑。廻間Ⅰ式の有段高杯、浅鉢が出土。

97Ab SD33　97B SD20などと同溝。微高地東側の縁辺に沿い、南北に走る溝で、97B SD21・26と合流する。廻間Ⅰ式の有段高杯、く字甕、「パレス・スタイル」壺が出土。

他に96D SK01、96TiSB01・02、97AbSD29が同時期の遺構と思われる。

(2) 古墳時代前期②（廻間Ⅱ式）の遺構

97Ab SD30　97AbSD30直下に97AbSE01がある。97AbSE01近辺では、溝幅が広く、埋土に砂が多く混入している。97AbSE01は井戸と思われ、涌水施設が想定される。

他に97B SD38・47、97CaSD14など南北に走る溝が同時期の遺構と思われる。また、(2)の時期以降に、古墳時代前期包含層（褐灰色粘土質シルト層）が堆積している。

(3) 古墳時代前期③（松河戸Ⅰ式）の遺構（埋土は、黒褐色粘土質シルト）

97B SK88　井戸の可能性が考えられる土坑。S字状口縁台付甕C・D類、無透孔屈折脚、柳ヶ坪型壺、小型丸底鉢（完形）、小型器台などが出土。

97B SD76　96BbSD08などと同溝で、微高地西側の縁辺に沿い、南北に走る溝。97Ab区で97AbSD31

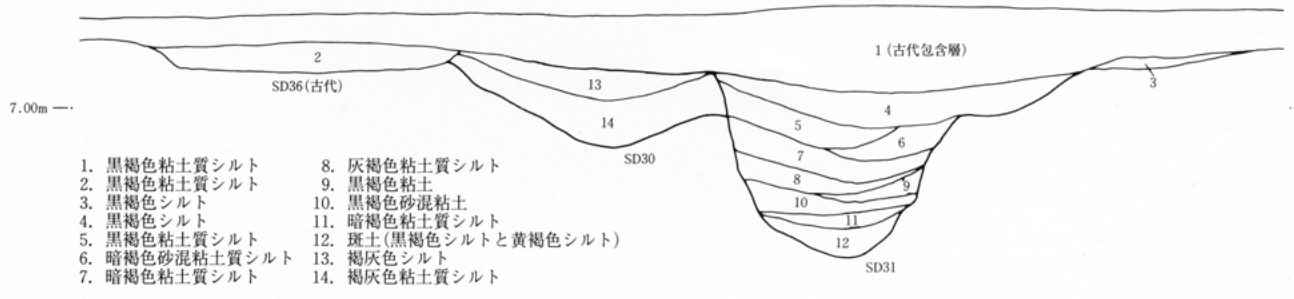
97Ab SD31　と97AbSD60（97AaSD01などと同溝）に分岐する。97AbSD31は、何度も掘削し直された溝で、遺物も多い。他の溝の出土遺物は少量で、細片。

他に96BaSK14、96TiSE01・02からも松河戸Ⅰ式の遺物が出土している。

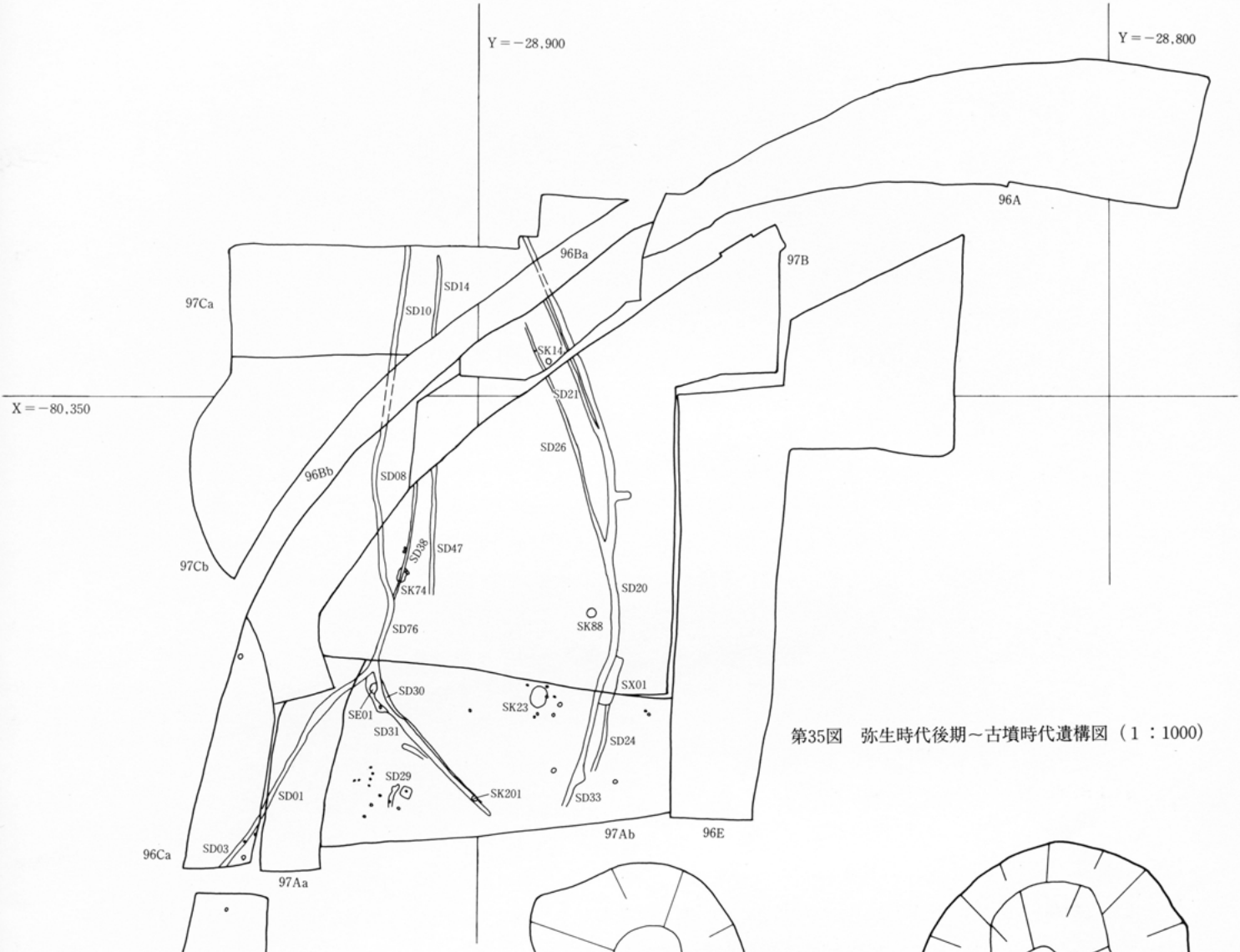
(4) 古墳時代後期の遺物を含む遺構

97Ab SK201　東山61号窯式の須恵器杯が出土。この時期の他の遺構は未確認。遺物も極少量。

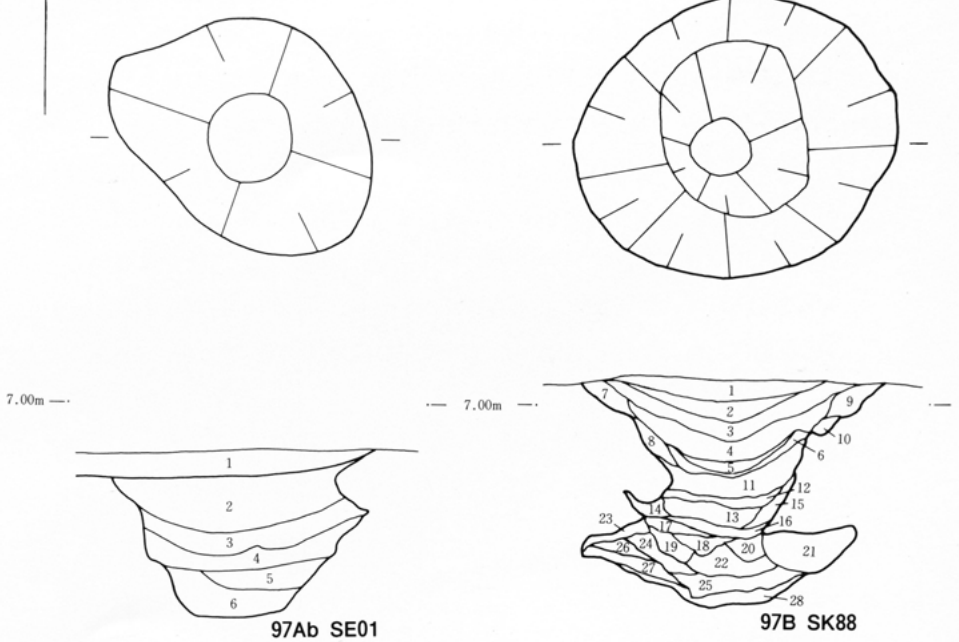
居住域　居住域は、97Ab区南側から96Cb区東側の微高地上に想定される。97B区を中心とした微高地上の遺構は希薄にみえるが、古代～中世の遺構や土層から、この時期の遺物が多く出土している。微高地上に古墳前期・古代包含層が残存しないことから、後世の開発により、大規模な削平を受けたことが推察されるので、ここにも居住の場が推測される。



第34図　古墳時代遺構断面図(3)（1：20）



第35図　弥生時代後期～古墳時代遺構図（1：1000）



1. 褐灰色砂混シルト(97Ab SD30)
2. 灰白色細粒砂と灰白色中粒砂の互層
3. 褐灰色砂混粘土
4. 褐灰色粘土と灰白色細粒砂の互層
5. 暗灰色砂混粘土
6. 暗灰色粘土と灰白色細粒砂の互層

1. 黒褐色粘土質シルト
2. 黒褐色粘土質シルト
3. 黒褐色粘土質シルト(ブロック含む)
4. 黒褐色粘土質シルト(第63図253出土)
5. 黒褐色粘土質シルト
6. 褐灰色粘土質シルト
7. 黒褐色粘土質シルト
8. 褐灰色シルト
9. 黒褐色粘土質シルト
10. 黒褐色粘土質シルト
11. 褐灰色シルト
12. 褐灰色シルト
13. 黒褐色シルト
14. 褐灰色粘土質シルト
15. 褐灰色粘土質シルト
16. 褐灰色粘土質シルト
17. 斑土(褐灰色粘土質シルトと黒褐色シルト)
18. 斑土(褐灰色粘土質シルトと黒色粘土)
19. 黒色粘土
20. 斑土(灰色粘土と黒色粘土)
21. 灰色粘土(黒色粘土混入)
22. 暗灰色粘土
23. 黒色砂混粘土
24. 黒色粘土
25. 黒色粘土
26. 灰色粘土
27. 灰白色細粒砂
28. 緑灰色中粒砂

第36図　古墳時代遺構平面図・断面図(2)（1：40）

5．古　代

古代の遺構と出土遺物は、96A区・96Ba区・97B区北部・97Ca区・97Cb区北部に集中し、この周辺に居住域が展開されたものと想定される。今回の調査では、猿投窯の東山50号窯式～美濃窯の丸石２号窯式の遺物を確認し、古墳時代後期の遺物（猿投窯の東山61号窯式）以降、およそ100年程の隔りがみられた。主な出土遺物としては、須恵器の杯・杯蓋・椀・盤・鉢、灰釉陶器の椀・皿類、土師器の甕の他、横瓶のミニチュア、刻印のある須恵器、製塩土器、都城形の土師器を模倣した杯などがあげられる。遺構出土の遺物は、猿投窯の折戸10号窯式～黒笹90号窯式のものに集中し、古代包含層（黒褐色粘土質シルト層）からは黒笹90号窯式までの遺物が出土している。猿投窯の折戸53号窯式から美濃窯の丸石２号窯式の遺物は、中世以降の遺構や土層より出土し、この時期の遺構は確認できなかった。

溝　群

検出された溝群は、残存良好な所で幅１m・深さ60cm程を測り、概ね北東から南西方向に走るが、96Ba区・97Ca区などで、一部東西方向のものもみられた。同じ溝で方向が変化するものもあり、自然微地形の起伏の影響であろうか。97Abでは、97AbSD28（97B SD14などと同溝）からほぼ垂直方向に分岐する 97Ab SD36を検出した。また、溝群は何度も掘削され直されたものが多い。折戸10号窯式までの遺物が出土した溝は、96A SD08、96BaSD27・28、97B SD05・09・14、97CaSD11・17、97CbSD11などがあげられる。その他、96A SD10から黒笹７号窯式までの遺物、96A SD09から黒笹14号窯式までの遺物、96BaSD17から黒笹90号窯式までの遺物が出土している。古代の溝群と古墳時代までの溝群を比較すると、その方向性に変化がみられる。古墳時代までは南北方向に走るものが多く、古代は概ね北東から南西方向に走るものが多い。自然微地形の変化以外に、上流河川流路の変化の可能性が推測される。それが自然環境変化か、人為的なものかは不明である。

その他の遺構

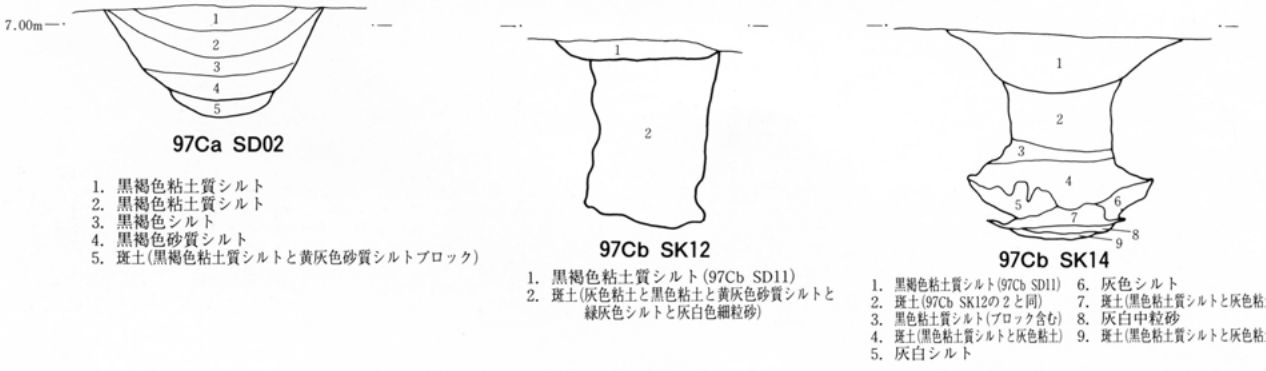
96A SB01

97B SK130

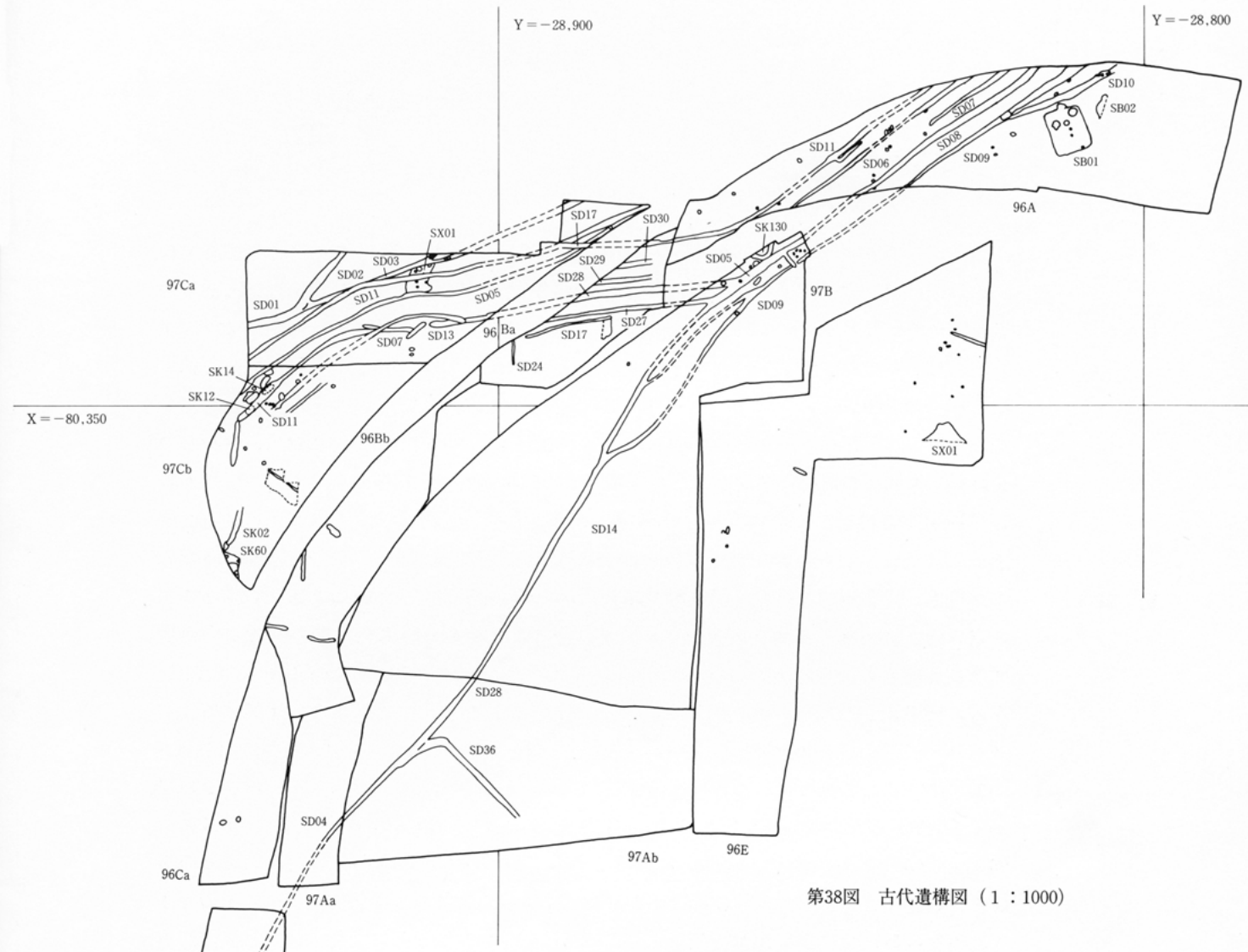
97Cb SK12

97Cb SK14

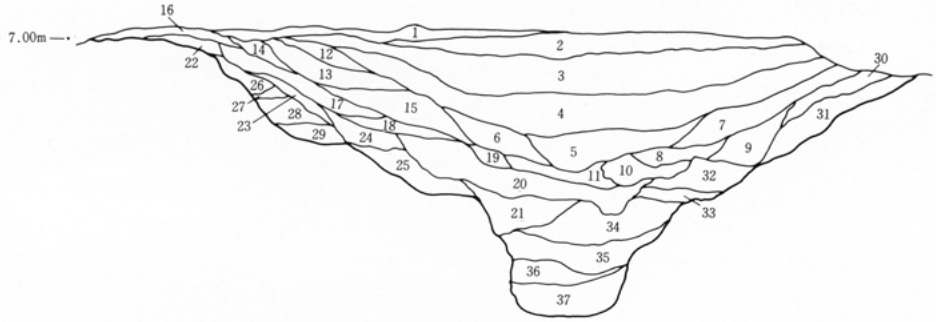
96A区の溝群の南側で竪穴住居２棟（96A SB01・02）を検出した。96A SB01は、北辺にカマドが造られたとみえ、焼土・炭化物が集積する。97B SK130は井戸の可能性がある土坑。97CbSK12と97CbSK14は、いずれも方形の土坑で97CbSD11直下に位置する。97CbSK14出土の須恵器片が97CbSD11出土のものと接合し、溝と土坑の時期差はあまりないものと推察される。97CbSK12・14は、共に深さ90cm程を測り、井戸のような性格をもつ遺構と思われる。直上の溝と関連するものと推定すれば、涌水施設の可能性が想定される。これらの遺構からは、いずれも折戸10号窯式までの遺物が出土している。



第37図　古代遺構断面図（１：40）



第38図　古代遺構図（1：1000）



1. 黒褐色粘土質シルト
2. 黒褐色粘土質シルト
3. 黒褐色粘土質シルト
4. 黒褐色粘土質シルト
5. 黒褐色粘土質シルト
6. 斑土(黒褐色粘土質シルトと灰色細粒砂)
7. 黒褐色砂混粘土質シルト
8. 斑土(黒褐色粘土質シルトと灰色シルト)
9. 斑土(黒褐色粘土質シルトと灰色シルト)
10. 斑土(黒褐色粘土質シルトと灰色シルト)
11. 斑土(黒褐色粘土質シルトと灰色極細粒砂)
12. 黒褐色粘土質シルト
13. 斑土(黒褐色粘土質シルトと灰色極細粒砂)
14. 黒褐色粘土質シルト
15. 斑土(黒褐色粘土質シルトと灰色極細粒砂)
16. 黒褐色粘土質シルト
17. 黒褐色粘土質シルト
18. 黒褐色粘土質シルト
19. 斑土(黒褐色粘土質シルトと灰色極細粒砂)
20. 黒褐色砂混粘土質シルト
21. 暗灰色砂混粘土質シルト
22. 黒褐色粘土質シルト
23. 黒褐色粘土質シルト
24. 黒褐色砂混粘土質シルト
25. 灰色細粒砂
26. 灰色シルト
27. 灰色シルト
28. 灰色細粒砂
29. 灰色砂質シルト
30. 黒褐色粘土質シルトと灰色極細粒砂の互層
31. 黒褐色粘土質シルトと灰色極細粒砂の互層
32. 斑土(灰色粘土質シルトと灰色細粒砂)
33. 斑土(灰色粘土質シルトと灰色細粒砂)
34. 灰色粘土質シルトと緑灰色中粒砂の互層
35. 灰色粘土質シルトと緑灰色中粒砂の互層
36. 斑土(灰色粘土質シルトと緑灰色砂混粘土)
37. 斑土(緑灰色中粒砂と灰色粘土)

第39図　97B SK130断面図（1：40）

6．中世以降

中世Ⅰ期

(1) 中世Ⅰ期（島畑景観形成以前）

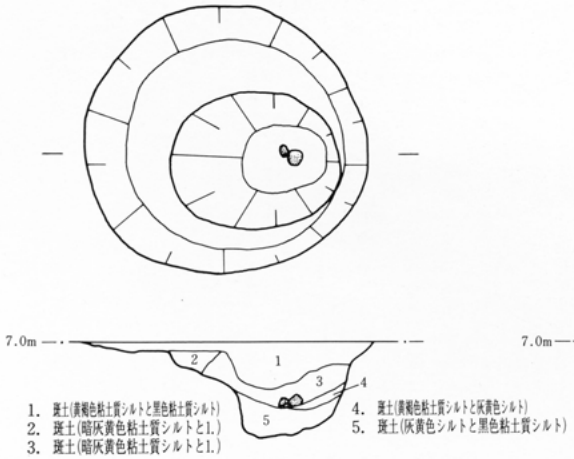
97Ab区で古代の溝群の軸線と同方向の畝状遺構と考えられる溝群を、97Ca区でも同方向の溝群を検出した。また、方形土壙群（97AaSK11・12・13、97AbSK01・02・03・04など）や97AbSX02内で自然石の集石（量的に多くないが、ほとんど重ならず、表面が焼けて赤く変色しているものが多かった。）など墓域を想起させる遺構を検出した。96Ba区から97B区にかけて、隅丸長方形状に掘削された凹地内（97B SX11）で柱穴と思われる土坑と周回する溝群を、その東側と南側で区画溝群を検出した。これらは島畑に関連する遺構としては考え難く、墓域と関連した特殊空間の可能性が考えられ、97B SD12・13は中世塚墓の周溝ではないかと諸氏にご教示を賜った。97B SX11と区画溝群からは、尾張型第4型式～第6型式の灰釉系陶器椀などが出土している。96E SK13から外面高台に墨書がある尾張型第6型式の完形の灰釉系陶器椀が、97B SK68から尾張型第5型式のほぼ完形の灰釉系陶器椀が出土し、いずれも埋納された可能性が高い。97B SK128は井戸の可能性が考えられる土坑である。中世Ⅰ期の遺構は、後世の開発により、かなり削平されている。

中世Ⅱ期以降

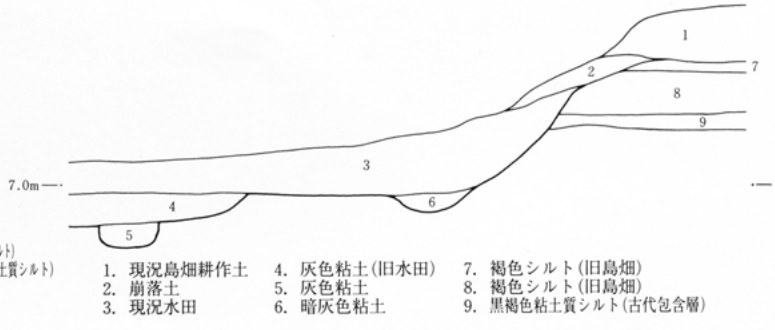
(2) 中世Ⅱ期以降（島畑景観形成以降）

概ね、東西・南北方向を維持し、正方位の条里地割に規制されたと思われる島畑・水田遺構及び、これらに伴う遺構群を検出した。島畑景観の形成時期について明確な時期決定は困難であるが、島畑に関連すると思われる遺構や旧島畑下層からの出土遺物より14世紀後半～15世紀頃と推定される。97CaSK01から東濃型脇之島窯式の完形の灰釉系陶器椀が出土した。伏せた状態で埋納され、豊作祈願の可能性が推察される。島畑景観は近世を経て現在まで続いているが、その間、島畑・水田遺構は幾度もの改変を受けている。

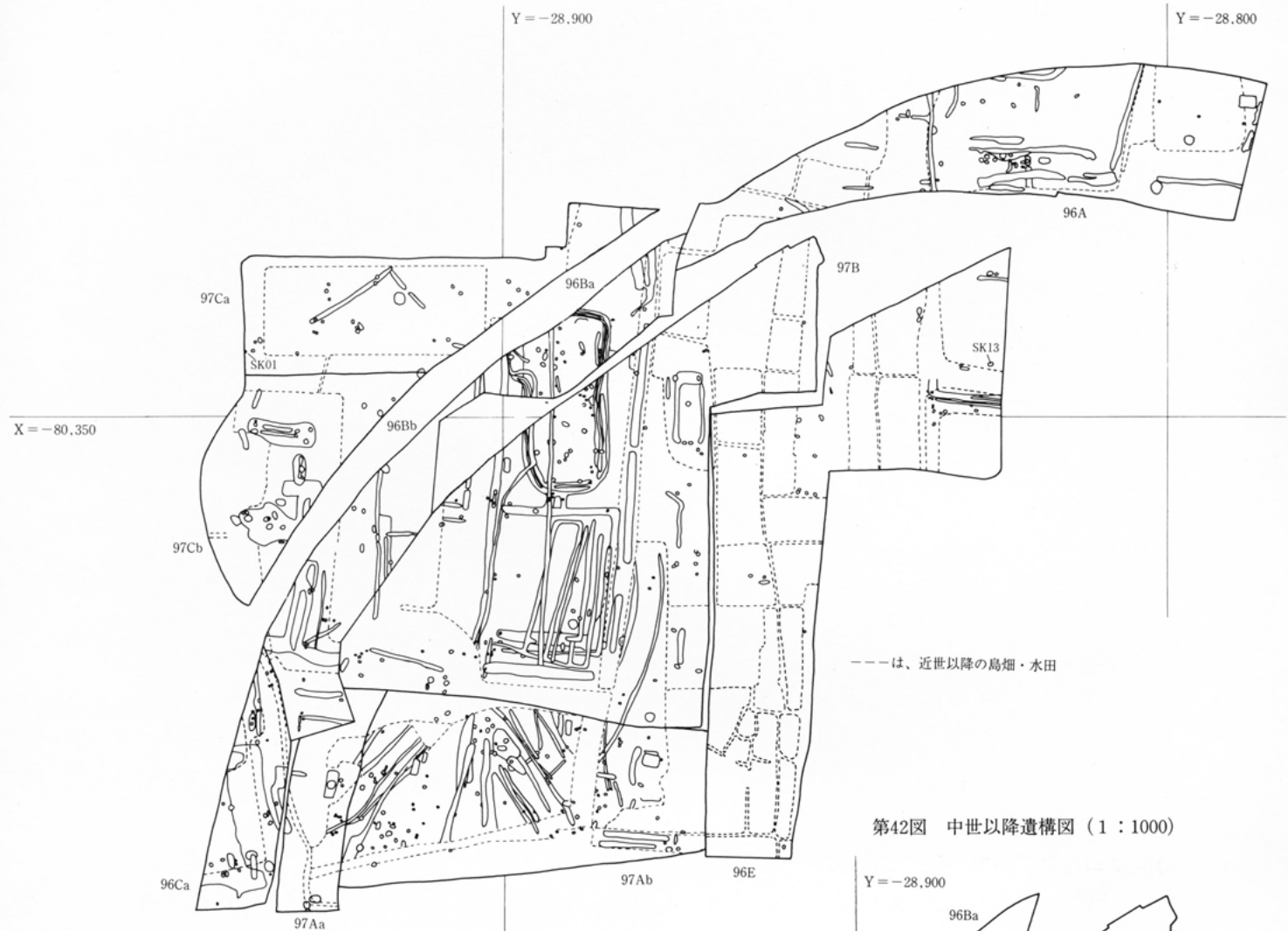
激しい河川流路の変化により形成された島状微高地が点在するこの地域では、水がかりが悪いため、「地下げ」をして水田開発を行ない、その土を掻き上げて盛った部分を畑として利用した結果、島畑が生まれたものと推測される。島畑遺構の多くは「地下げ型島畑」であった。島畑遺構の造成過程と形成時期の詳細は付論で述べることにする。



第40図　97BSK128平面図・断面図（1：40）



第41図　97Ab島畑10断面図（1：40）



第42図　中世以降遺構図（1：1000）



第43図　中世Ⅰ期遺構図（1：1000）

第3章　遺　物

第1節　土器・陶磁器類

1．縄文時代

遺物の時期

今回の調査で出土した土器は、後期前葉と晩期中葉のものにまとまりがあり、その他、後期中葉から晩期前葉のものがある。その殆どが砂混黒色粘土質シルト層・黒色粘土層などの黒色土層及びその直下からの出土で、その他、下位の遺構や上位の層からも出土した。黒色土層出土の土器は、埋土が近色・近質の遺構出土の可能性も考えられる。そこで、本報告では出土遺構や層位にこだわらず、従来の編年観に沿い、型式学的な操作に依拠した分類を加味し、記述することにする。なお、後期前葉の有文土器については、施文方法を中心にやや詳細に記述する。

時期		土器型式（参考資料）		三ツ井の出土遺物
		近畿地方	東海地方	
後期	初頭	中津式 福田K２式		未確認 未確認
	前葉	四ツ池・広瀬式 北白川上層式１期 北白川上層式２期	（林ノ峰C貝層） （林ノ峰B層２群）	未確認 確認(微量) 相対的に多い
	中葉	北白川上層式３期 一乗寺K式 元住吉山Ⅰ式	八王子式　（林ノ峰B層３群）	未確認 未確認 確認(微量)
	後葉	元住吉山Ⅱ式 宮滝式 滋賀里Ⅰ式	 寺津下層式	確認(微量) 確認 確認(微量)
晩期	前葉	滋賀里Ⅱ式 滋賀里Ⅲａ式	寺津式 元刈谷式　（雷）	確認 確認(微量)
	中葉	滋賀里Ⅲｂ式	稲荷山式	相対的に多い
	後葉	滋賀里Ⅳ式 滋賀里Ⅴ式	西之山式 五貫森式 馬見塚式	未確認 未確認 未確認

『先史時代の北白川』及び『比叡山山麓の縄文』を参考に補足改変

第4表　三ツ井遺跡出土の縄文土器と関連編年対比表

後期前葉　（A）後期前葉の縁帯文土器群で北白川上層式１期に対比できる資料

１は深鉢で、断面Ｔ字形の口縁部に渦巻文と重弧文が施され、それと縦位の数条の沈線に区画された間に横位の両端が繋る沈線が施された後、縄文が加えられている。口縁部の重弧文の左側の横位の沈線部分の施文の切り合い関係を観察すると、縄文施文によって、沈線の縁が潰れてしまったことがわかる。そのためか、再度沈線を引き直している。沈線施文後に、縄文施文され、再度沈線施文されることにより、沈線区画による横位平行の３本の縄文帯（中央の縄文帯は細長い島状を呈する）を構成している。外反する頸部は内外面ともに「磨き」調整され、無文である。胴部は、対向する縦位の弧線で区画され、横位の３条の沈線が施された後、沈線間に縄文が充填されている。沈線の縁が潰れてしまったためか、沈線そのものが不明瞭になってしまったためか、再度沈線が引き直され、沈線区画による横位平行の２本の縄文帯が作られている。また、充填された縄文が「磨き」調整済みの頸部と縄文帯下部に、はみ出していることが観察でき、「充填縄文」とよばれる施文手法であることがよくわかる。縄文帯の下部は「磨き」調整の後、横位の重弧文が施され、斜方向の多条沈線が施されている。今回の出土遺物の中で最古の資料と考えられる。３は１と同一個体の可能性が高い。２は深鉢の胴部で、「磨き」調整の後、多条沈線が施されている。

（B）後期前葉の縁帯文土器群で北白川上層式１期～２期に対比できる資料

４は深鉢の口縁部であり、縦位の数条の沈線が施された区画間に、横位の両端が繋る沈線とその中央に両末端に刺突を伴う沈線が施されている。沈線間には縄文が充填され、末端刺突の沈線を挟んで２本の縄文帯を作る。頸部は内外面ともに「磨き」調整され、無文である。５～９は縄文地に多条沈線が施されている資料であり、10～13は素文地に多条沈線が施されている資料である。５と６は同一個体の可能性がある。７は沈線で区画された部分の一部が磨消されている。12と13は同一個体の可能性がある。14は縄文施文後に、上・下部分を撫でているため、その部分の縄文が撫で消されている。15～19は縄文地に沈線が施されている資料であるが、縄文を充填し、再度沈線を引き直している可能性がある。17～19は、沈線を境に無文部分が見られ、沈線で区画された部分が縄文施文となる帯縄文手法の可能性がある。19は沈線を施した後、強めの「磨き」調整がされ、沈線の両肩の高さが違う。20・21は縄文施文が無文部分まで、はみ出していることから、縄文を充填し、再度沈線を引き直している可能性が高い。22～24は縄文施文により、沈線の縁が潰れているため、「磨き」調整後に沈線を施し、さらに縄文を加えた充填縄文が明確な資料である。23は補修孔とみられる穿孔がある。25・26は素文地に沈線が施されている資料である。27～32は若干丸く肥厚する口縁部外面に縄文帯をもつ深鉢の資料である。27は内外面ともに「削り」調整後に「撫で」調整してあり、口縁部外面に「撚り戻し」による無節の縄文（R）を施し、縄文帯を作る。縄文帯直下部は、再度「撫で」調整してある。縄文帯の幅を揃えるための調整かと思われる。28～32は内外面ともに「磨き」調整後に「撫で」調整してあり、口縁部外面に２段左撚の縄文を施し、縄文帯を作る。

縄文帯直下部は27と同様、再度「撫で」調整してある。32は補修孔とみられる穿孔がある。28～32の幾つかは同一個体の可能性も考えられるが、不明なため、口縁部資料のうち、5点を図示した。

（C）後期前葉の縁帯文土器群で北白川上層式 2期に対比できる資料

33～41は断面L字形（内折「く」字形）の口縁部資料である。（B）に含まれる可能性も考えられるが、ここにまとめて図示した。33～38は充填縄文が明確な資料である。33は突起部分に渦巻文と重弧文が施され、その左側に逆「コ」字形の沈線区画とその内に方形の沈線文が施されている。34は左側の横位の沈線と繋る縦位の沈線上に縄文施文され、右側の沈線は、沈線そのものが不明瞭になってしまったためか、再度沈線が引き直されている。35は横位平行の2条の沈線と沈線間に中心に刺突がある円文が施された後、縄文が加えられている。沈線の縁が潰れ、沈線・円文そのものも不明瞭であるが、沈線の引き直しは見られない。38は波状を呈している。39・40は縄文施文後、沈線が施されている資料であるが、再度沈線が引き直された可能性も考えられる。41は素文地に沈線が施されている。42～44は口縁部が屈曲しない平縁の資料である。42は横位平行の3条の沈線が施された後、沈線間に縄文が充填されている。43・44は沈線区画により無文部と縄文施文部に分かれる。また、口縁端部内面に段をもつ。45は波状縁の資料であり、「磨き」調整後に「撫で」調整され、無文である。46は口頸部が外反する深鉢で、内外面ともに「磨き」調整され、口縁端部内面に沈線が施され、一部、弧状に屈曲した沈線が続く。47は口縁が外反し、口縁端部内面に沈線が施されている。47は横位平行の2条の沈線間に縄文を充填して帯縄文を作る。沈線区画による帯縄文の上下に「磨き」調整された無文部分があり、北白川上層式2期の特徴を示す資料である。48・49は口縁部が丸く肥厚し、内外面ともに「磨き」調整された無文深鉢である。口縁部の肥厚の他、口頸部が外反し、頸部がくびれ、胴部が屈曲した形状で、近畿地方で北白川上層式2期に類例が多い資料のため、他の形式不明の無文土器と区別し、この分類に加えた。

後期中葉末～後葉

（D）後期中葉末～後葉の注口土器資料

50・51は後期中葉末～後葉に属すと考えられる注口土器である。50は屈曲する胴部に縦位の2条の沈線が施され、その沈線間に縄文が充填されて帯縄文が作られている。帯縄文は「たすきがけ状」に数ヶ所に施され、後期中葉の元住吉山Ⅰ式に対比できる資料の可能性が考えられる。注口部はないが、その形状より注口土器と考えられる。51は注口部が短く、「しもぶくれ」の形状を呈し、後期後葉に属するものと考えられる。

後期後葉

（E）後期後葉の凹線文系土器群の元住吉山Ⅱ式から宮滝式に対比できる資料

52は口縁部外面に口縁に平行した巻貝による3条の凹線文を施した後、凹線内を「撫で」により再調整している。そのため、太い凹線が密接し、輪郭も不明瞭となる。元住吉山Ⅱ式から宮滝式の古段階に対比できる。他にも少量出土しているが、小破片のため、

図示しなかった。53～57は口縁部外面などに口縁に平行した数条の凹線文（太い沈線）が施され、凹線が「磨き」や「撫で」により再調整されず、工具により引かれたままのものである。53と56は巻貝により３条の凹線が施されている。55は巻貝ではなく、半截竹管が用いられた可能性も考えられるが、ここに分類した。54は口縁部外面に２条の凹線と口縁部内面に１条の沈線が施されている。57は４条の凹線（沈線とよぶべきか）が施されている。

（F）型式不明であるが、後期後葉に属すと考えられる資料

58は波状口縁の深鉢で、口縁部外面に縄文施文された後、波頂部の口縁部外面に縦位に２個の瘤が貼り付けられ（下の瘤は頂部欠損）、波底部の口唇部分に瘤状突起が貼り付けられている。この瘤状突起の頂部には押圧が加えられている。外面は「磨き」調整され、内面は「撫で」調整されている。59はかなり緩やかな波状口縁の浅鉢で、口縁部内面に口縁に平行する１条の沈線が施された後、口縁端部と沈線との間の数ヶ所にボタン状の瘤が貼り付けられている。60は波状口縁の深鉢で、口縁部外面に縄文施文されている。瘤はないが、58に形状や施文手法などが類似した資料なのでこの分類に加えた。58～60は、他形式に類例がなく、時期も特定し難いが、出土層位と出土地点、他の資料との比較より、後期後葉に属するものと考えたい。

後期末

（G）後期末の寺津下層式併行（凹線文系土器群以外）の資料

61は肥厚した口縁部外面に文様帯として縄文が施された深鉢である。頸部は外反するが口縁部はほぼ直立する。

晩期初頭

（H）晩期初頭の寺津式併行の資料

62～69は半截竹管による施文をもつ資料である。62は半截竹管状施文具を用いて横方向に施文している。63は口縁部外面に縄文を施した後、半截竹管文が施されている。64～69は摩耗のため、地文としての縄文が確認できない。64～67は同一個体の可能性がある。68・69は半截竹管による波状文が施されている。70はヘラ状具で、波状口縁の波頂部外面に山形（逆Ｖ字形・ハの字形）の数条の沈線と波底部外面に区画する縦位の２条の沈線が施された後に横位の３条１単位の弧線文が施され、さらに縄文施文が加えられている。対向弧線文を構成している可能性がある。

晩期前葉

（I）晩期前葉に属すと考えられる資料

71は口縁部外面に口縁に平行して２条以上の連続刺突文が施され、72は押引文が施されいる。71・72は晩期前葉に属し、元刈谷式併行と考えられる。73は口縁部外面に三叉状の刻目隆帯が貼り付けられている。吉胡貝塚の晩期旧Ａ（大洞ＢＣ式近似）の土器に近似したものであり、中部高地で類例がよくみられる。

晩期中葉

（J）晩期中葉の稲荷山式併行の資料

74～78は無文深鉢である。74は「撫で」調整され、器面に粘土の輪積痕が明瞭に認められる。75・76は「削り」調整され、76は口縁部内面に種子痕がある。77・78は底部資料である。今回の調査で出土した縄文土器片の中で、図示しなかった資料を含めると、この時期に比定される破片数が最も多かった。後述する形式不明の無文土器群（M）の多くも、この時期のものと推定される。

（K）型式不明であるが、晩期中葉に属すと考えられる

資料79は口唇部に連続押圧が加えられ、小さな波文を描いている。内外面ともに「磨き」調整された後、「撫で」調整されている。口唇部に粘土が付け加えられ、ヘラ状具あるいは棒状具で口唇部を波状にえぐるような強く深い押圧が加えられている。強い押圧により粘土が外側にはみ出したためか、その部分を内外面ともに「削り」調整した後、「撫で」調整している。口唇部の山部分は指、または布のようなもので押えて整形され、「撫で」調整されている。口縁部内面は小波状帯の下部がヘラ状具のようなもので整形された後、丁寧に「撫で」調整され、浅い波状の凹線となっている。神郷下遺跡に圧痕波文の口唇を持つ土器例があるが、本遺跡の土器の方が、調整が丁寧なように思われる。80は口縁部内面に工具により広く浅い凹線が施してある深鉢である。内外面ともに「磨き」調整された後、「撫で」調整されている。口頸部の外反の形状が79と類似する。81は80と類似し、口縁部内面に広く浅い凹線が施してある。82は口縁部内面に沈線が施してあり、玉縁状の口縁をなすものである。内外面ともに「撫で」調整されている。馬見塚遺跡H地点のBトレンチ包含層出土土器に類例がある。

馬見塚遺跡の報告では、「稲荷山式ないし西之山式土器に比定される」としている。

今回の調査では西之山式土器に比定されるものは出土していないため、稲荷山式に比定される資料の可能性が考えられる。82～84は特定の形式名は不明ではあるが、口縁部付近の施文方法などから晩期中葉に属するものと考えたい。

時期不明の有文土器

（L）型式が不明であり、時期特定し難い有文土器資料

83～85は隆帯が貼り付けられて二枚貝の腹縁による刻目が施され、斜方向の数条で1単位の沈線が施されている。86・87は同種の沈線部分であろうか。83～87は同一個体の可能性が高い。88は口縁に平行する2条の沈線が施され、その上部は横位の羽状文が施され、下部は斜方向の2条1単位の沈線が施されている。83～88は同形式と考えられる。他に類例を知らず、時期は特定し難いが、晩期終末、あるいは縄文時代以外の可能性も考えなければならないかもしれない。

無文土器

（M）形式が不明であり、時期特定し難い無文土器資料

89は外面が「磨き」調整された無文精製壷であり、「く」の字状に屈曲した胴部に「ハ」の字状に内傾した頸部がつき、口縁部は緩やかな小波状（摩耗した突起の可能性も考え

られる）を呈している。大洞系の影響をうけた在地の土器であろう。76など晩期中葉の稲荷山式併行の土器群と同じ遺構から出土しているので、89も近い時期のものと推定される。90は「く」字形口縁で、内外面ともに荒い「削り」調整の深めの粗製浅鉢である。90も晩期中葉に属すと考えられる。91～97は外面が「磨き」調整された資料、98～100は「撫で」調整された資料、101～103は「削り」調整された資料である。101は外面は「削り」調整されているが、内面は「磨き」調整後に「撫で」調整された資料である。口唇部に面を持ち、補修孔とみられる穿孔がある。104は屈曲して口縁部が外傾する。内外面ともに「磨き」調整後に、「撫で」調整している。形状と調整などを他の資料と比較して、91は後期前葉、92は晩期前葉、102～104は晩期中葉に属するものと考えられる。

底部資料　（N）底部資料のうち、網代痕が明瞭に認められる資料として、105～107を図示した。

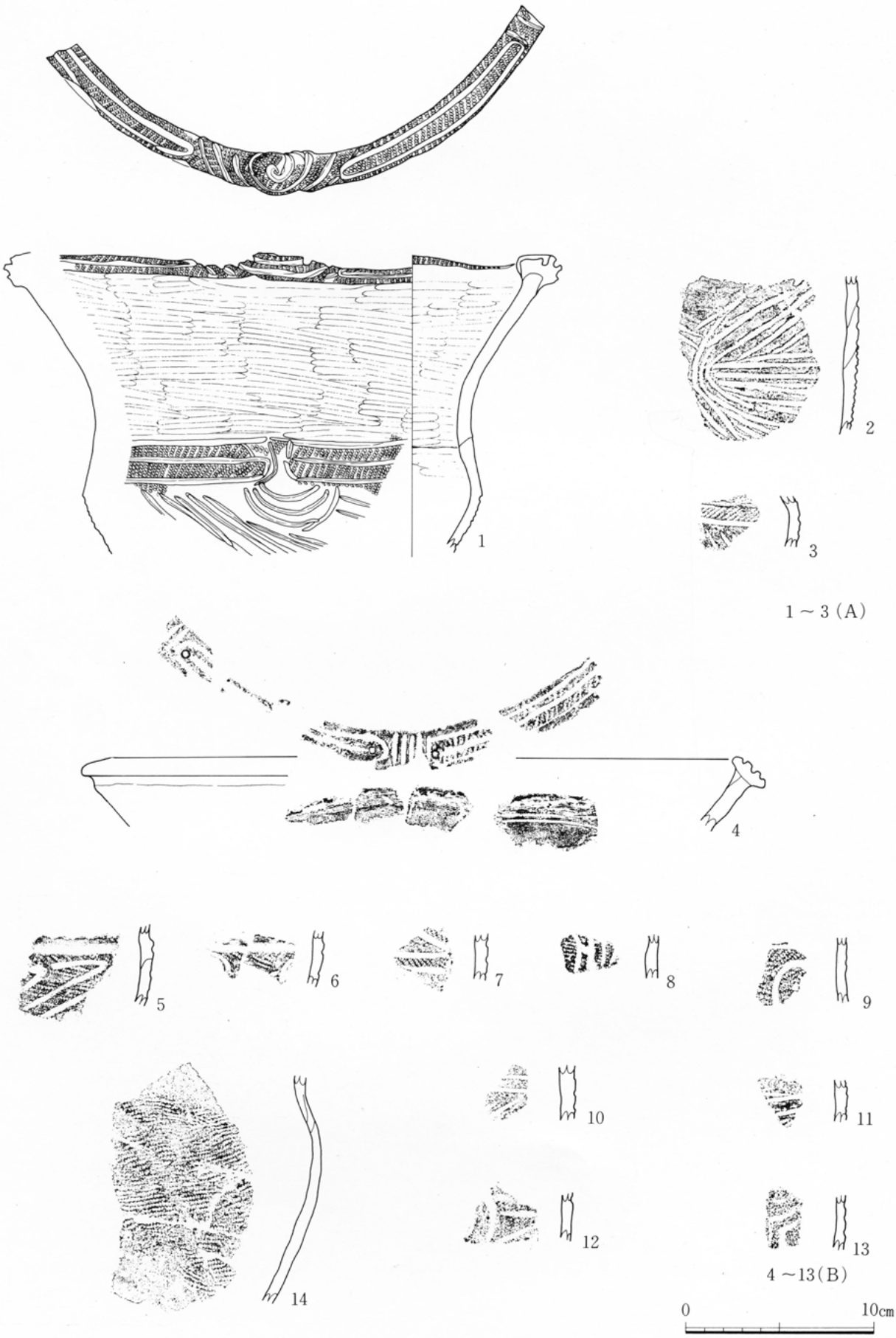
小　結

小　結

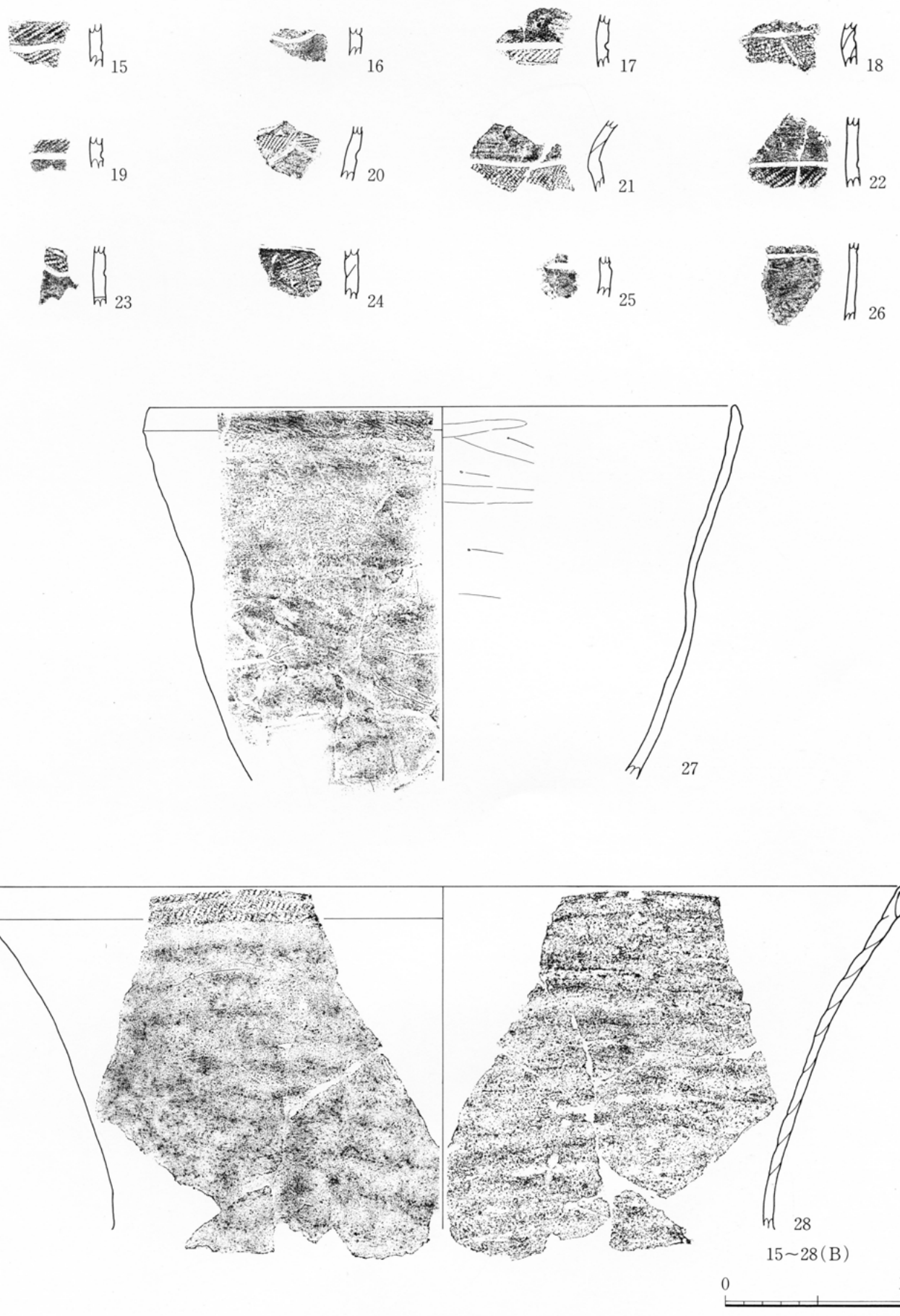
今回の調査で確認された縄文時代の遺物は後期前葉～晩期中葉にかけてのものであり、尾張低地部の出土例としては珍しく、資料的価値はかなり高い。また、従来の型式に適合しないものも出土し、今後の研究課題となろう。出土地点を概観してみると、後期前葉のものは97B区の微高地及びその周辺に集中している。後期中葉末～晩期前葉の遺物は97B区と97Ab区を中心に出土している。この時期の遺物量は少なく、周辺からの流れ込みの可能性も考えられるが、本遺跡周辺に人々が居住していたことは明確となった。晩期中葉の遺物は97B区と96Cb区の微高地及びその周辺に多くみられた。また、晩期後葉の時期に属する突帯文系土器は確認できなかった。本遺跡周辺に位置する中期の佐野遺跡、後期初頭の遺物が出土した権現山遺跡、晩期の馬見塚遺跡などとの関連性も考慮する必要があろう。

参考文献
千葉　豊　1989　「縁帯文系土器群の成立と展開」『史林』第72巻第６号
千葉　豊　1998　「後期縄文土器の施文手法ノート」『古代吉備』第20集
岩瀬彰利　1996　「縄文時代後期～晩期の煮炊具」『鍋と甕そのデザイン』　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
相賀徹夫編　1989　『縄文土器大観』４　後期　晩期　続縄文
紅村　弘編　1978　『東海先史文化の初段階』資料編Ⅱ
増子康真　1981　「東海地方西部の縄文文化」『東海先史文化の初段階』本文編・補足改定版
一宮市　1970　『一宮市史』資料編１　縄文時代
設楽博己編　1995　『東日本における農耕文化成立の研究　－愛知県一宮市馬見塚遺跡Ｈ地点の発掘調査－』
刈谷市教育委員会　1993　『本刈谷遺跡』
文化財保護委員会　1952　『吉胡貝塚』
田畑　勉・吉村睦志　1975　「神郷下遺跡」『豊田市埋蔵文化財調査集報第二集縄文Ⅰ』豊田市教育委員会
森川幸雄編　1995　『天白遺跡』三重県埋蔵文化財センター
南知多町教育委員会　1983　『林ノ峰貝塚』Ⅰ　南知多町文化財調査報告書第５集
余合昭彦編　1993　『三斗目・三本松遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第47集

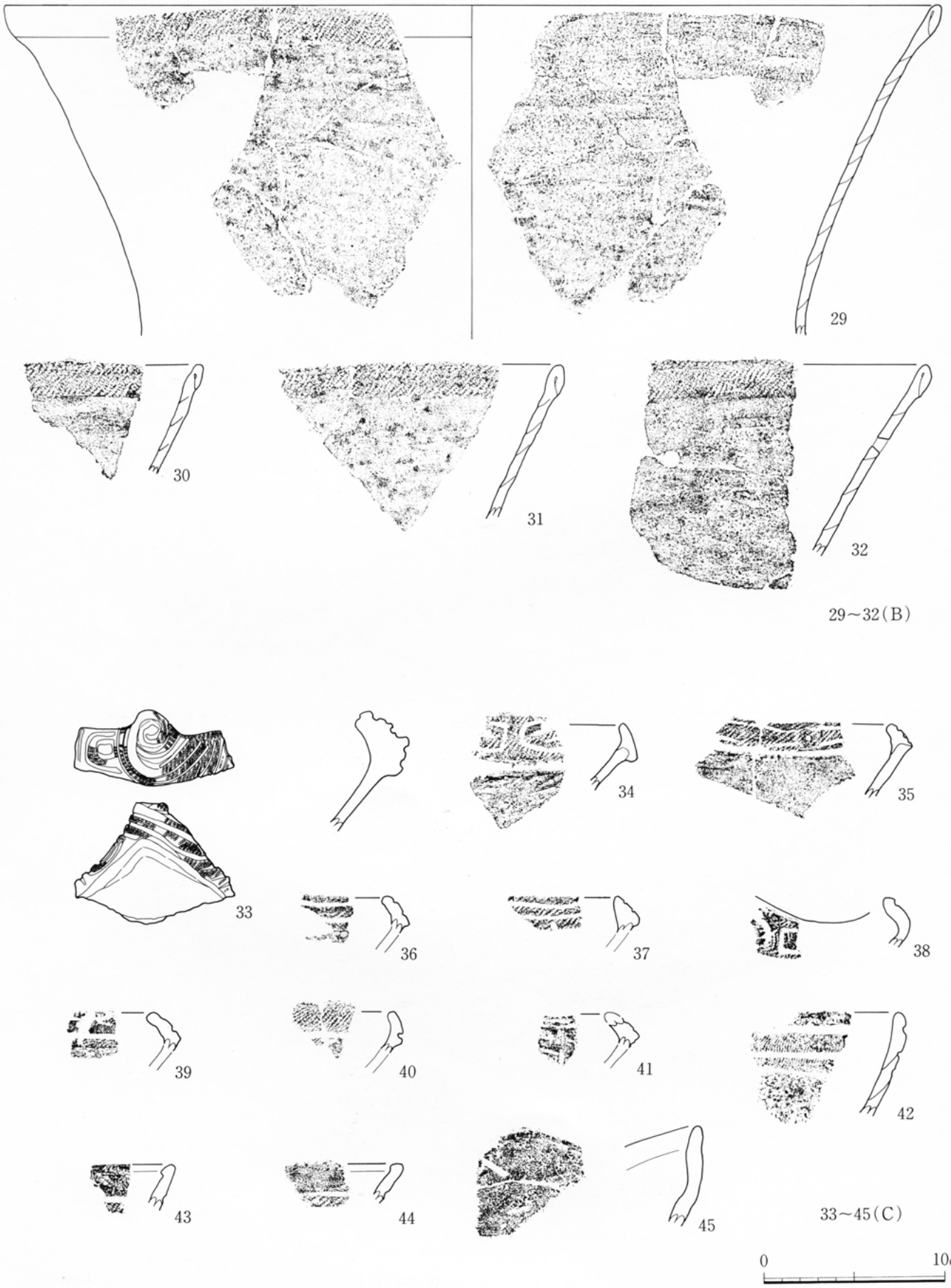
土器型式・施文・調整については、京都大学埋蔵文化財研究センターの千葉　豊氏、愛知県教育委員会文化財課の野口哲也氏にご教示を得た。



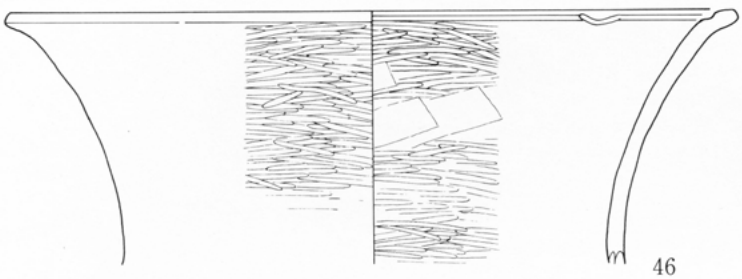
第44図　縄文時代の遺物実測図(1)（1：3）



第45図　縄文時代の遺物実測図(2)（１：３）

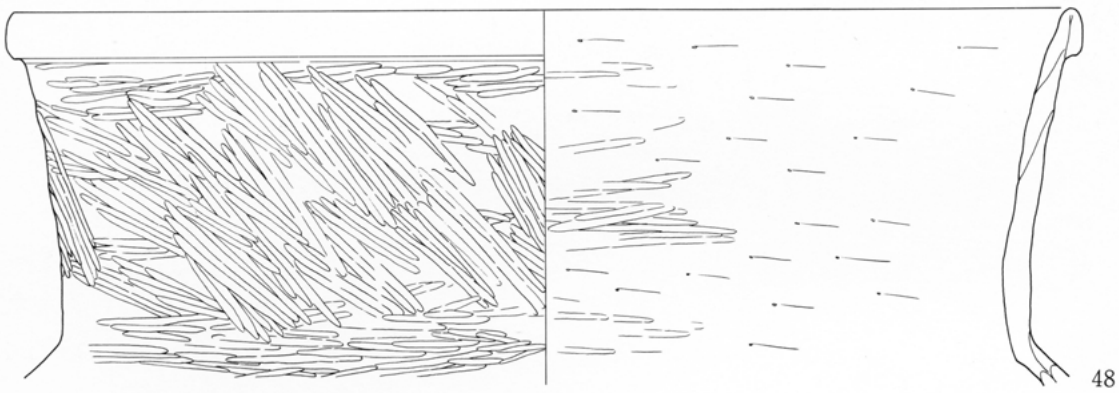


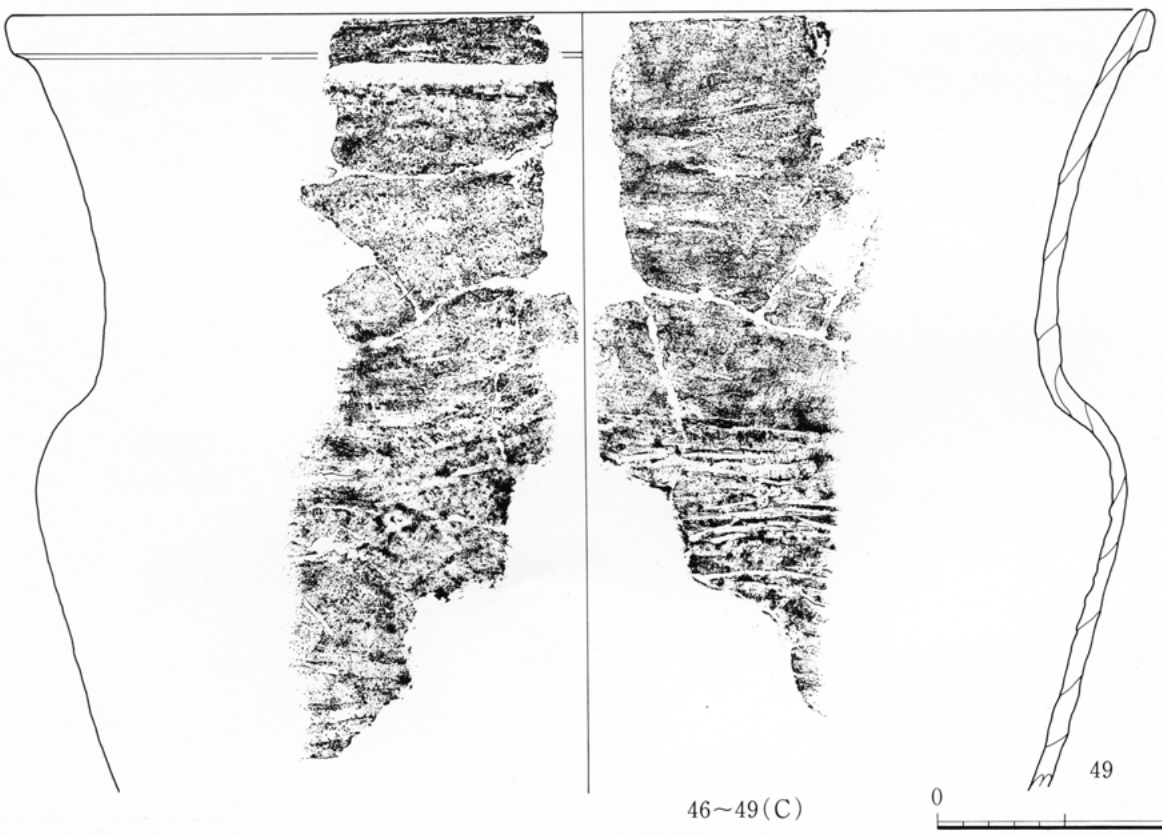
第46図　縄文時代の遺物実測図(3)（1：3）





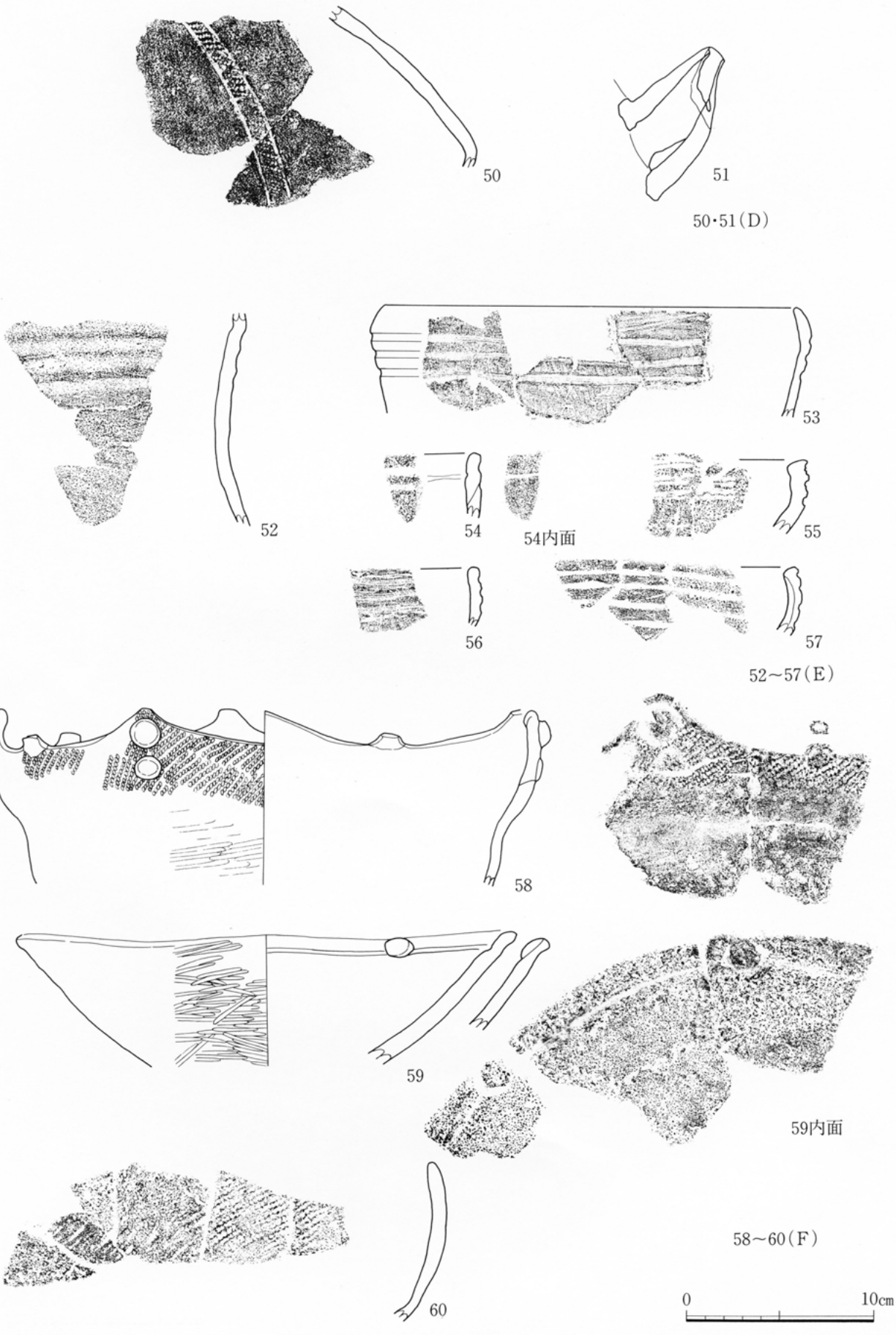






46～49(C)

第47図　縄文時代の遺物実測図(4)（1：3）

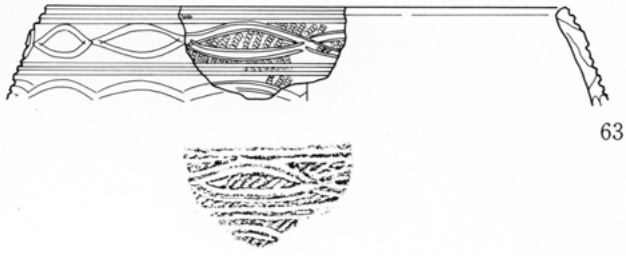


第48図　縄文時代の遺物実測図(5)（1 : 3）



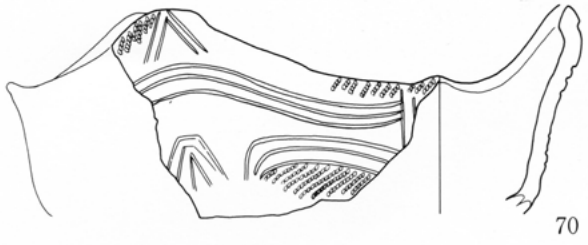
61(G)





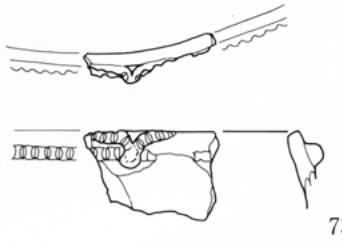






62～70(H)



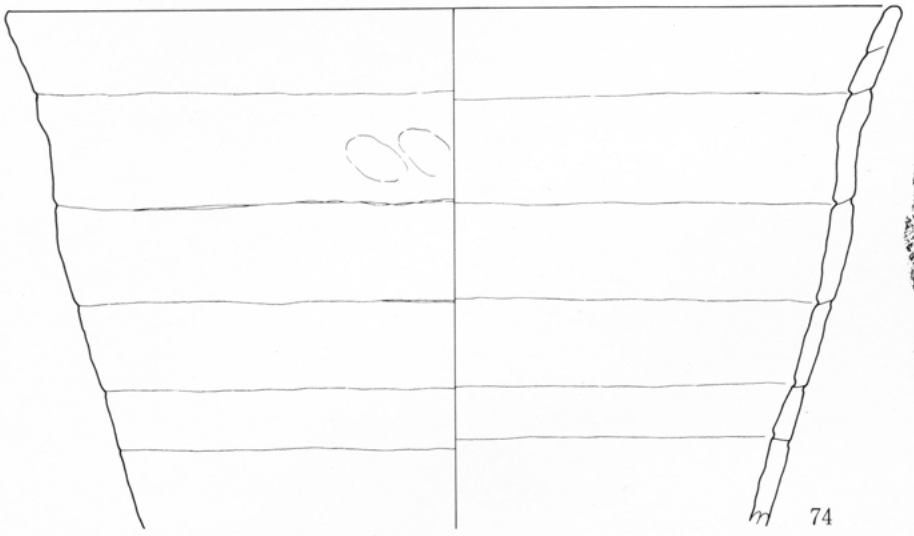


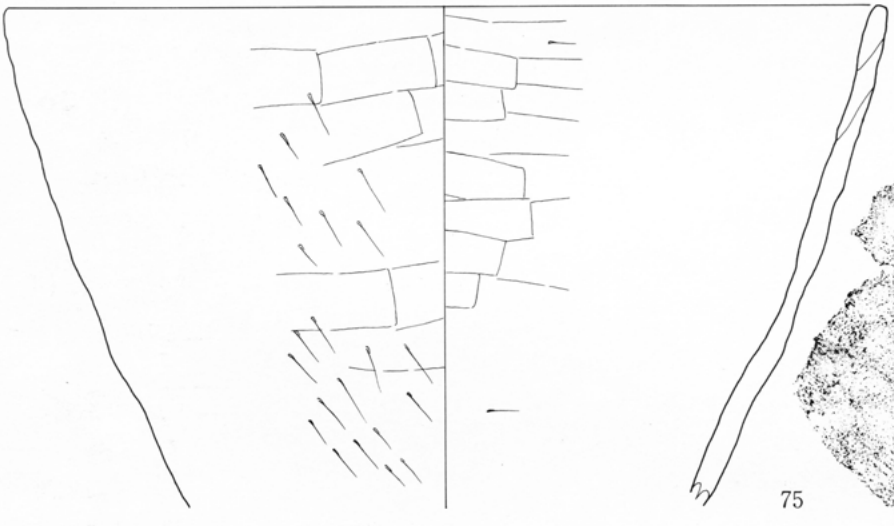


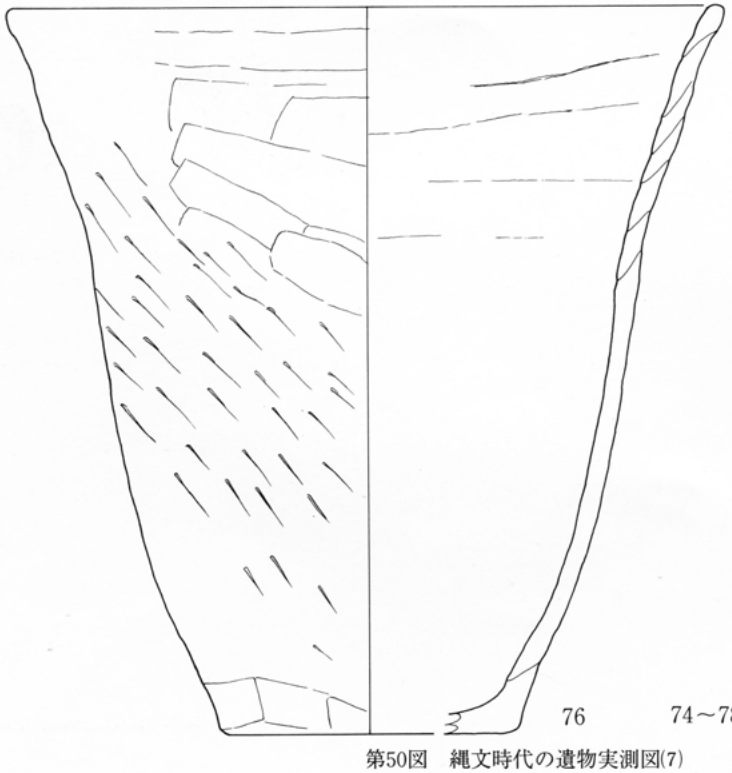
71～73(I)

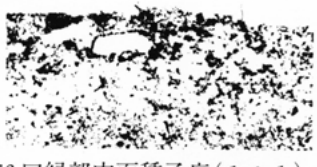


第49図　縄文時代の遺物実測図(6)（1：3）

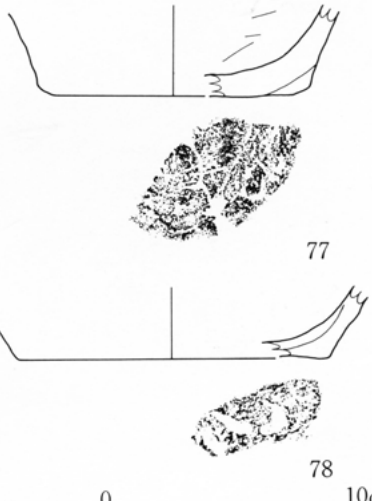








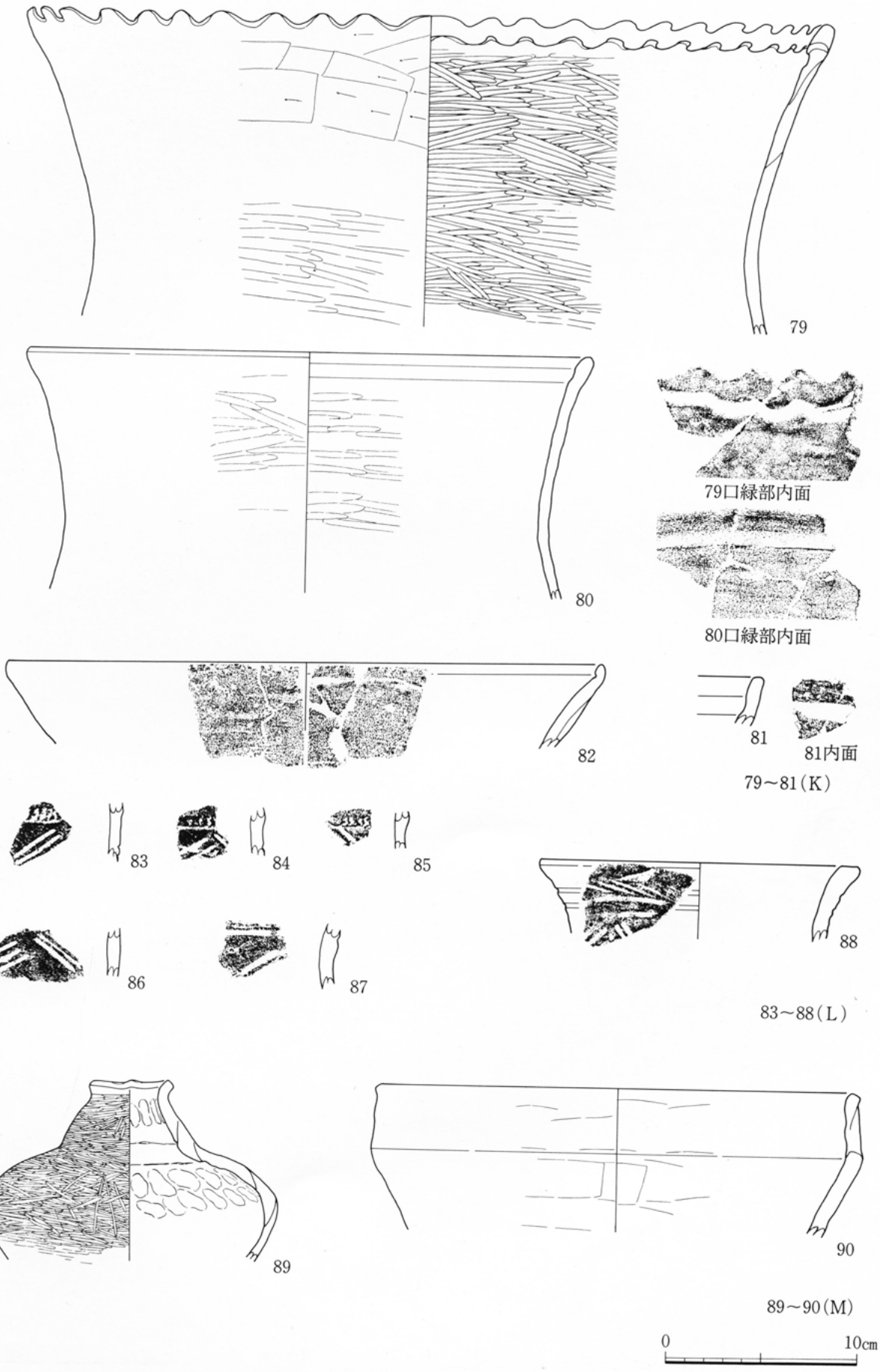
76口縁部内面種子痕（1：1）



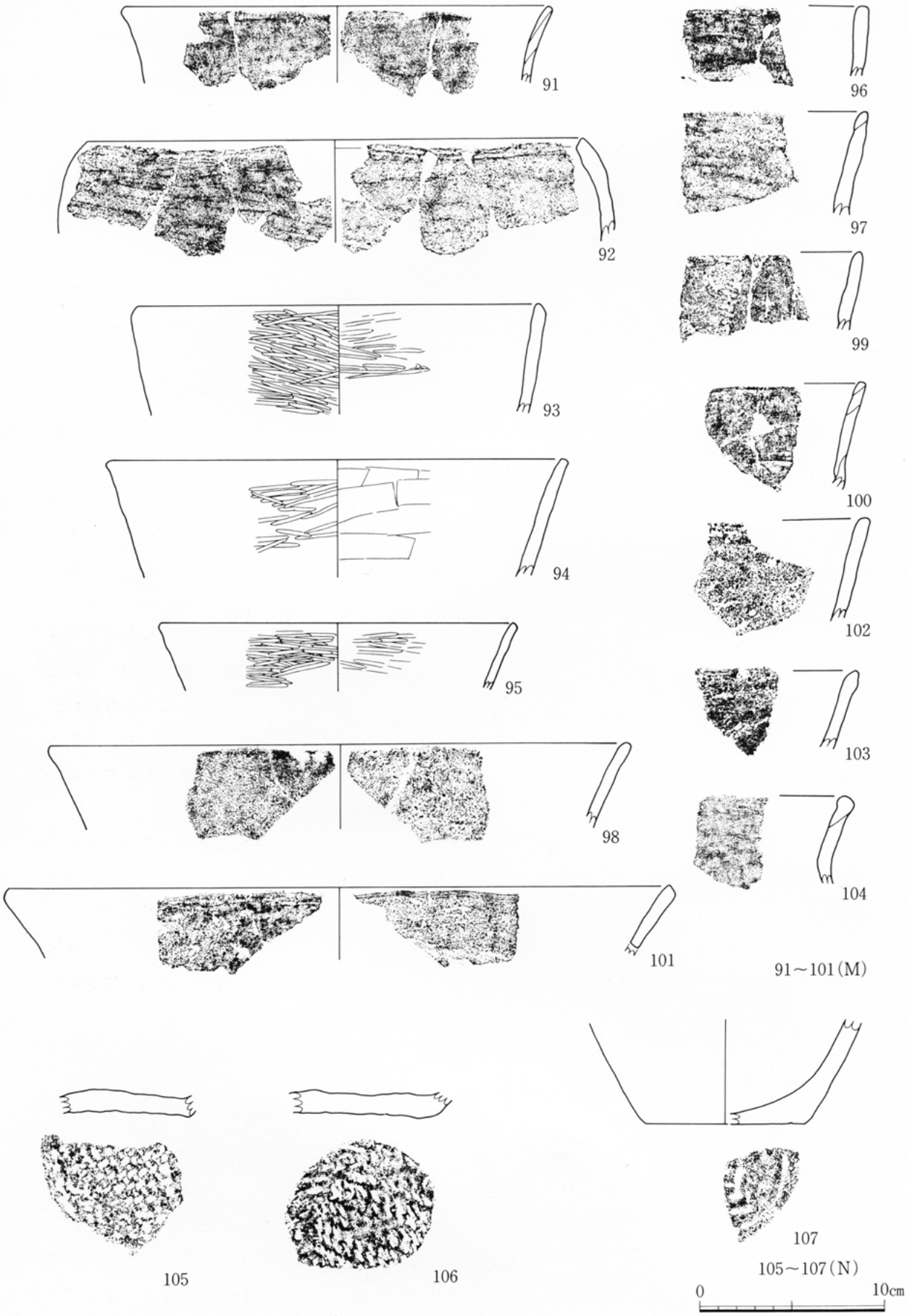
74～78（J）

0 10cm

第50図　縄文時代の遺物実測図(7)



第51図　縄文時代の遺物実測図(8)（１：３）



第52図　縄文時代遺物実測図(9)（1：3）

2．弥生時代前期

1．資料の概要

三ツ井遺跡の資料群は、名古屋市北区月縄手遺跡資料と比較すると、その前段階から古相にほぼおさまる。尾張編年（石黒・宮腰1997）に対比すると、Ⅰ－2期に相当する。朝日遺跡貝殻山地点の抽出資料を除けば、現状で尾張平野部最古相に位置づけられる。また、紅村弘の言う「元屋敷式」に類似する資料群ともいえる。その理由は、煮炊形態のほとんどが「削痕系深鉢形土器」という特徴を示すからだ。

尾張Ⅰ－2期

削痕系深鉢

さて、深鉢・甕形土器のなかに、従来の資料にあまり確認できなかった資料群がまとまって出土している。口縁端部に横長の連続押圧を施し、頚部がややくびれ、頚胴部の境目が明確な深鉢形土器である。胴部から底部にかけて板状工具などで、粗いケズリ調整を行う特徴をもつこの深鉢形土器は、氷式系深鉢形土器と「削痕系土器」との中間形態、すなわち折衷土器ともいえる。今回の三ツ井遺跡資料群により、削痕系土器を単に突帯紋系ケズリ深鉢形土器からの一元的な系譜を見直す必要性がでてきた。仮に「氷式系削痕深鉢形土器」とし、提示する。詳しくは付論で述べたい。

氷式系削痕深鉢形土器

次に注目できる資料として、条痕紋系壷形土器がある。尾張平野部には突帯紋系土器期後半に近畿地方から影響を受けた「長原系壷形土器」が散見する。いまだ資料数が安定していないため詳細な検討にはいたっていない。しかし、三ツ井遺跡の条痕紋系壷形土器は大口町西浦遺跡・知立市中長遺跡より古相を持つ資料として注目できる。すなわち、頚胴部の境目を意識した調整をもち、口縁部に押圧突帯紋がめぐる壷形土器である。三ツ井遺跡では最古相を示す土器でもある。

条痕紋系壷

長原系壷

以上、資料群のなかで注目できる事項を2つあげた。三ツ井遺跡の資料群は、従来の弥生前期資料に新たな視点を与えるものとなった。

2．資料の分類

以下、資料を提示する前提として、分類を示す。まず、三ツ井遺跡出土資料を系統別に示す。次に系統内の壷形土器・甕形土器など形態分類を示し、器形・調整・紋様を中心に諸要素の概要を示す。以上、2点に基づき資料を提示する。

系統分類

形態分類

(1) 系統分類

遠賀川系土器

遠賀川系土器とは、汎西日本に拡がる弥生時代前期の土器群を指し、「遠賀川系土器様式」として中期初頭までその系譜は残存する。伊勢湾周辺では「条痕紋系土器様式」の成立を促し、中期の「畿内櫛描紋系土器様式」の成立に関与する。

伊勢湾周辺の遠賀川系土器はさらに4つの系統に区分できる。「中部瀬戸内系」、「畿内系」、そして伊勢湾西岸域で突帯紋系土器と折衷して成立する「伊勢南部系（紅村の言う「亜流遠賀川式土器・金剛坂式」が相当する）」がある。ただし、今回は細分系統を示さず、

遠賀川系土器として一括りにした。また、もうひとつ尾張平野部を中心として見られる「削痕系土器（紅村の言う「元屋敷式」の甕形土器）は組成上は遠賀川系土器様式として捉えてもよい。しかし、系統区分上は「浮線紋系土器様式」の「氷式系深鉢形土器」から成立する土器として今回取り扱うため、遠賀川系土器から外す。

条痕紋系土器

伊勢湾北・東岸域の突帯紋系土器が遠賀川系土器、あるいは近畿地方の突帯紋系土器、とりわけ「長原式」との接触から成立する土器群。成立当初から北岸域と東岸域の地域相がみられるものの器面全面に遠賀川系土器とは相反する器面調整を施す土器群である。すなわち、遠賀川系土器がミガキ・ハケ調整を最終調整に用いて器面をととのえるのに対して、条痕紋系土器は二枚貝腹縁に代表される工具を用いた荒々しい最終調整を施す。

内傾口縁土器は中村友博によって提唱された土器で、全形がいまだ不明の土器。口縁部の特徴から中期前葉に相当する岩滑式の厚口鉢形土器に型式変化するとされている。三ツ井遺跡では、ナデ調整のものが3点出土している。内傾口縁土器は条痕をもつものとナデのみのものがあり、しかも出自がいまだ不明なため、ここではとりあえず条痕紋系土器の組成の一部として扱う。

氷式系土器

中部高地で縄文晩期後半の突帯紋系土器様式に影響を受けて成立する「浮線紋系土器様式」の土器群。伊勢湾周辺以西では、浅鉢形土器が縄文晩期後半から弥生前期の遺跡で散見する程度であるが、東日本と西日本を繋ぐ重要な位置づけを有する側面を持つ。ただし、伊勢湾北岸域、とりわけ尾張平野部には氷式系土器の系統を引く粗製深鉢形土器が存在する。

(2)　形態分類

上記した系統別に壷形土器・甕形土器など形態的側面から分類し、各形態の特徴と調整、紋様などの概要を示す。

遠賀川系土器

壷形土器のほとんどを占める。形態的特徴について、口縁部が大きく外反するものはなく、概して直立する頚部から短く折れる口縁部をもつ。胴部も大きく張り出すものはなく、球胴に近い算盤状となる。外面調整は、ハケ調整の後、ミガキ調整を行う。底部付近は縦方向、口縁部から胴部にかけて横方向を基本とする。口縁内面は横方向のミガキ調整を丁寧に行うが、胴部から底部は概して雑な調整である。紋様はヘラ描沈線によって構成される。概ね2～3条の横位沈線紋帯を基本とする。この沈線紋帯が上下のヘラ描沈線によって強調される「削出突帯」は壷形土器の特徴となる。また、胴部の横位沈線紋帯下に重弧紋をもつものもある。頚部あるいは胴部に紋様帯をもつ、遠賀川系土器通有の紋様構成となる。

横位沈線紋帯

甕形土器は煮炊形態のなかで劣性である。短く外反する口縁部をもち、胴部は底部に向かって緩やかに収束する形態。底部資料の中に脚状を呈するいわゆる上底となるものもみ

られる。調整は摩滅しているものの、ハケあるいはナデ調整と思われる。紋様は口縁端部に刻目を入れ、胴部上位にヘラ描沈線紋を施す。

鉢形土器は大型のものが目立つ。口縁部の形状や紋様帯は甕形土器と近似する。口縁部資料がほとんどで、全形は不明であるものの、内外面に概ねミガキ調整がみられ、甕形土器との調整による識別が比較的容易である。

条痕紋系土器

壷形土器と深鉢形土器が各1点と内傾口縁土器がある。壷形土器は長原系壷形土器に系譜をもつ突帯紋系土器の特徴を残す。一方、深鉢形土器は口縁部が外反しない、甕化指向を取り入れる以前の形態をもつ。両者ともに貝殻条痕の外面調整を全面に行う。

内傾口縁土器

内傾口縁土器は、いずれも口縁部資料である。口縁端部を内傾させ、強く横ナデを行う。その際、最上段の粘土紐が内面で巻き込むような形状として顕著に痕跡が認められる。したがって、口縁部資料は比較的容易に抽出できる。比較的全形が把握できる資料は名古屋市高蔵遺跡から出土している。

高蔵遺跡

氷式系土器

煮炊形態のほとんどを占める。今回提示する資料は氷式そのものではなく、在来の突帯紋系深鉢形土器を基盤に氷式系深鉢形土器、さらに遠賀川系甕形土器の3系統が融合し成立した削痕系深鉢形土器である。本報告では仮に「氷式系削痕深鉢形土器（以下、氷式系削痕深鉢）」と呼ぶ。形態は、頚部から口縁部にかけて緩やかに外反し、頚部がややくびれるものもある。調整は、頚胴部の境目を意識したもの、すなわち、頚部に横ナデ、胴部に縦方向のケズリ調整を行うものと、頚胴部の境目を意識しない口縁部直下まで縦方向のケズリ調整を行うものがある。様相としては、前者が古く、後者が新しい。口縁部は端部あるいは外面に横方向の連続指頭押圧を施すもの、端部に強い横ナデを行い面取りをするものとがある。様相としては前者が古く、後者が新しい。また、横方向の指頭押圧はさらに2者に細別できる。押圧のピッチが長いもの、短いものの2者がある。氷式系の深鉢形土器に見られる口外帯を意識していると捉えるならば、前者がより氷式系深鉢形土器に接近する特徴を有すると言えよう。

氷式系削痕深鉢

連続指頭押圧

3．資料の提示

掲載資料の総数は86点。実測可能なものはほとんど掲載した。遺構出土資料が第1～4図、その他検出資料を第57図にまとめた。ただし、第55図の150～155は同一グリット内に集中する土器群で、一つの遺構として取り扱った。この理由のひとつに、遺構検出が困難であったことがあげられる。詳しい遺構の検出状況は第2章を参照してもらいたい。

さて、遺構出土資料に関しては概ね古相から新相を配慮して掲載した。

第53図上段

108～112は96TiSX01資料。

108は条痕紋系壷形土器。口縁部はやや外反気味であるものの、頚部からほぼ直立して口縁部にいたる形態となる。頚部から胴部にかけて緩やかに開く。推定器高は約35cm口縁部には縦方向の押圧突帯がめぐる。押圧は指頭による下から上へ押し上げている。外面

調整は板ナデが頸部付近に若干見受けられる箇所があることから、まず、板状工具で一次調整を行い、後に二枚貝復縁による条痕調整を行うようである。条痕は頸部と胴部の境目に若干段を持つ。頸部は縦方向、胴部は横方向を基本に調整を行う。109は遠賀川系壷形土器。頸部が直立し、口縁部が短く外反する。外面調整は横方向のミガキを行う。110は内傾口縁土器。内外面ともにナデ調整。111～113は氷式系削痕深鉢形土器。111は口縁部が肥厚し短く外反する形態。口縁端部に幅約2cmの横方向の指頭押圧を連続して施す。口縁内面に面取りがみられる。外面調整は縦方向の板ケズリ。112は頸部がややくびれ、口縁部が外反する形態。口縁外面に幅約4cmの指頭押圧を連続して施す。頸胴部の境目が調整の違いによりわずかに確認できる。すなわち、頸部は横ナデ、胴部は縦方向の板ケズリがみられる。113は底部に木葉痕がみられる。

第53図中段　115～116は96CbSK50資料。

いずれも遠賀川系壷形土器。115は頸部に幅2cmの削出突帯を巡らす。116は頸部に3条の沈線帯を施す。沈線帯の上下が若干沈線帯よりくぼみ、削出突帯を表現する。116は最大径が35cmを超える大型品。頸胴部の境目に1条沈線をめぐらし、有段状となる。内外面ともに横方向のミガキ調整。

第53図下段　117～123は96CbSK153資料。

117～119は遠賀川系壷形土器。117は口縁部が短く外反する形態。内外面ともに横方向のミガキ調整を行う。118・119はいずれも胴部に沈線紋帯と重弧紋を施す。施紋順序は、①横方向の沈線紋帯を施す。②左回転で3重の弧紋を施す。外面のミガキ調整はいずれも施紋前に行っている。120は遠賀川系鉢形土器。通常、最終調整にミガキを行うが、胴部に横方向のハケ、頸部に板ナデがみられる。121・122は遠賀川系の壷か鉢形土器の底部。122はミガキ調整が認められるが、121は表面が磨耗して不明。123は氷式系削痕深鉢形土器。口縁端部に幅2.5～1.5cmの不揃いな押圧を施す。

第54図　124～149は96TiSB03資料。

124は遠賀川系壷蓋形土器で天井部を欠く。125～129は遠賀川系壷形土器。125は口縁部が短く外反し、頸部から胴部にかけて緩やかに開き、胴部最大径が器高の下部にある、下膨れの形態。外面調整は頸部に縦方向の板ナデと胴部の一部に横ハケを残すものの、最終調整は底部付近に縦方向のミガキ調整、胴部から口縁部付近に横方向のミガキ調整を行う。内面調整は胴部上位以外には横方向を基本とするミガキ調整を行っている。施紋はいずれも最終調整以後に施す。頸部には2条の沈線紋で区画された削出突帯がある。胴部上位には指頭による横方向の連続押圧がある貼付突帯がある。さらにその下には2条の沈線紋がめぐる。なお、頸部上位には焼成前穿孔が1カ所みられる。126は口縁部が強く外反しない。口縁端部以外は前面横方向のミガキ調整を行う。頸部紋様帯は不明。127は頸部に3条の沈線紋帯があり、128も同様の沈線帯を持つが、上下の沈線を深くし、削出突帯を作り出す。129は口縁形態がいびつになる。胴部上位に2条の沈線帯を持つ。130は内外面にミガキ調整を行う底部で、おそらく壷形土器であろう。131～133は遠賀川系鉢形土器の口縁部。外

面調整は不明なものの、内面調整は横方向のミガキ調整を行う。134～137は遠賀川系甕形土器。137以外は口縁端部に刻目を入れる。ただし137は口縁端部が無刻目であることや外面調整に横ハケを行うため、鉢形土器の可能性も否定できない。

第55図上段　138～148は氷式系削痕深鉢形土器。138～140は口縁外面に指頭による押圧が施させるもの、141～144は口縁端部に面取りをもち、押圧がないもの。前者は頚部が緩やかにくびれ、頚胴部の境目が調整の違いにより確認できる。一方、後者は口縁部が外反し、頚部を意識するものの調整による境目はない。145～148は底部。基本的には下から上へ板状工具を用いたケズリ調整を行う。148は底部付近に左回転の板ケズリを改めて行う。149は今回唯一実測可能であった条痕紋系深鉢形土器。口縁部がやや外反し、胴部がやや膨らみ底部にいたる形態。口縁端部に面取りを行い、調整は横方向の貝殻腹縁による条痕。

第55図下段　150～155は96Cbの土器集中地点（ⅤA11k）資料。

150は遠賀川系壷蓋形土器。天井部に穿孔がある。150以外はすべて氷式系削痕深鉢形土器。151と153は口縁外面に指頭押圧が施されている。両者とも頚胴部の境目が調整により意識されている。152と154は口縁端部を面取りし、指頭押圧がない。特に154は口縁部が短く折れ、甕化指向がみられる。155は底部。

第56図上段　156～162はSK01資料。

156は遠賀川系壷蓋形土器。天井部に穿孔がある。外面調整はおおよそ左回転でミガキ調整を行う。調整後、天井部から裾部にかけて2条の沈線がみられる。157は遠賀川系鉢形土器。口縁部が短く外反し、胴部最大径が上位にある。内外面ともに横方向のミガキ調整を行う。また、胴部上位に3条の沈線紋帯がある。158は遠賀川系壷形土器、口縁部を欠く資料。胴部最大径が上位になる形態。紋様は頚部に2条以上の沈線紋様帯の削出突帯と4条の削出突帯をもつ。外面に横方向のミガキ調整を比較的丁寧に行う。この資料の特徴として、焼成時の剝離痕と剝離した土器片（焼成剝離土器片）が接合した。これは三ツ井遺跡で土器焼成を行っていた傍証となり、実際、SK01に隣接して検出されたSB03は炭化物が広範囲に拡がる遺構であり、土器焼成に関わる遺構として注目される。159・160は遠賀川系壷あるいは鉢形土器の底部。161は遠賀川系鉢形土器。内外面の胴部にやや斜方のミガキ調整を行う。162は氷式系削痕深鉢形土器。口縁部が短く折れる形態で、甕形土器と呼ぶべきか。外面に下から上への板ケズリ（1次調整）後、胴部に縦方向、頚部に横方向のミガキ調整を行う。

第56図下段　163～167は水田の可能性がある地区から出土した資料。

水田出土資料　163と164は溝（SD46）の脇に積まれた盛土中からセットで出土している。164は遠賀川系壷蓋形土器。天井部に2つの突起があり摘部分と考えられる。この突起に挟まれて中心には穿孔がある。裾部には2条の沈線帯で区画された削出突帯がめぐる。163は遠賀川系壷形土器。口縁部が短く外反し、頚部は比較的短い、胴部最大径はほぼ中位にある。内外面のほとんどにミガキ調整がみられる。口縁部下に2ヶ所の穿孔がある。紋様は頚部に3条の削出突帯、胴部上位と最大径付近に4条の沈線紋帯がある。165～167は氷式系削痕深

鉢形土器の底部。

第57図

168～193は検出資料。168～179は遠賀川系土器。168～173は壷形土器。168は118・119と同様の紋様構成をもつ壷形土器。施紋順序も沈線紋帯の後、重弧紋と同じ規範ではあるが、口縁部が大きく外反し、端部が水平になることから、118・119より新相である。173は頚胴部の境目に若干段が付く。そこに2条の沈線紋が施されている。174～177は甕形土器の底部。175・176は脚状の底部。178・179は鉢形土器。180～191は氷式系削痕深鉢形土器。192・193は内傾口縁土器。

4．小　結

(1)　編年的位置付け

朝日遺跡
96SK238資料

資料の概要で記したように、遠賀川系土器が出土する遺構群としては最古段階となった。ただし、現在整理中の朝日遺跡貝殻山地点96SK238資料は三ツ井遺跡より1段階古い土器群となり、三重県中ノ庄遺跡の古相土器群と同時期に比定できる。

3段階設定

さて、三ツ井遺跡の遺構群は大きく2段階に土器群が捉えられる。指標となるのは氷式系削痕深鉢形土器である。口縁部外面あるいは端部に押圧がめぐるものと口縁端部を面取りし、押圧がないものとに分けられる。型式的に前者が古く、後者が新しい。根拠は押圧がめぐらない資料は口縁部の特徴がより甕化指向で、遠賀川系土器に接近する。逆に押圧がめぐる資料は頚胴部の境目を意識し、さらに氷式の口縁形態に接近する。実際、SK01の162は口縁部の屈曲が遠賀川系甕形土器と酷似するといった現象、月縄手資料と比較してもより甕化指向が強いものが新相となっている。また、氷式系削痕深鉢形土器に共伴する遠賀川系土器からみても、壷形土器の口縁形態など前述した古相・新相を逸脱しない。

甕化指向

ここで尾張編年に対照してみると、SX01·SK50・96Cb土器集中地点はⅠ－2期古段階、SK153・SB03·SK01・水田関連資料はⅠ－2期中段階に比定できる。

(2)　資料の特徴

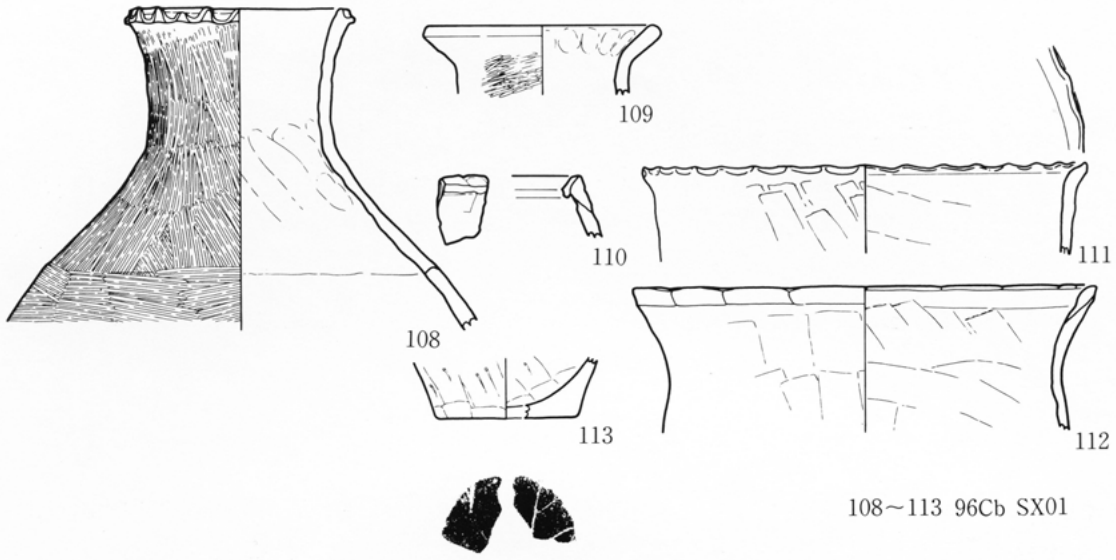
土器組成

土器組成は遠賀川系土器の壷形土器・鉢形土器、氷式系土器の深鉢形土器を主体とする。特徴的なのは、煮炊形態にほどんど遠賀川系甕形土器がみられないこと、条痕紋系土器が明らかに客体的存在であることが指摘できる。これは、隣接する元屋敷遺跡の土器組成と類似し、他の遺跡にはあまり見られない土器組成である。

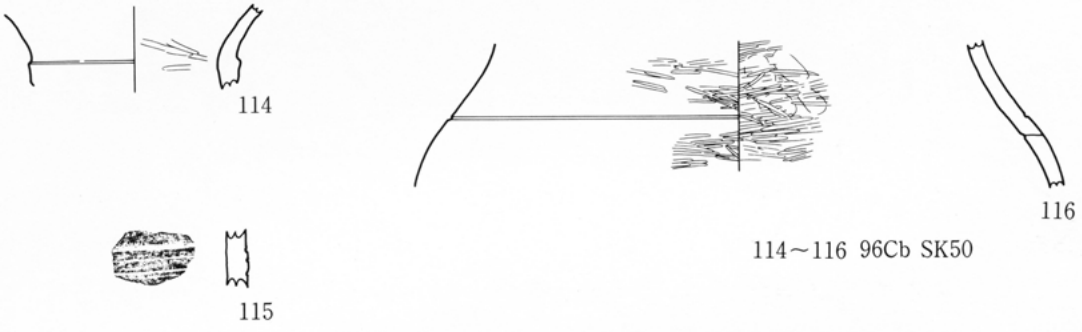
元屋敷遺跡

組成上客体的な存在ではあるが、108の条痕紋系壷形土器は近畿地方の長原式系壷形土器との比較検討するうえで重要な資料となった。また、内傾口縁土器が前期の古い段階からみられることが判明したことは今後の検討に新たな視点を持たせた。

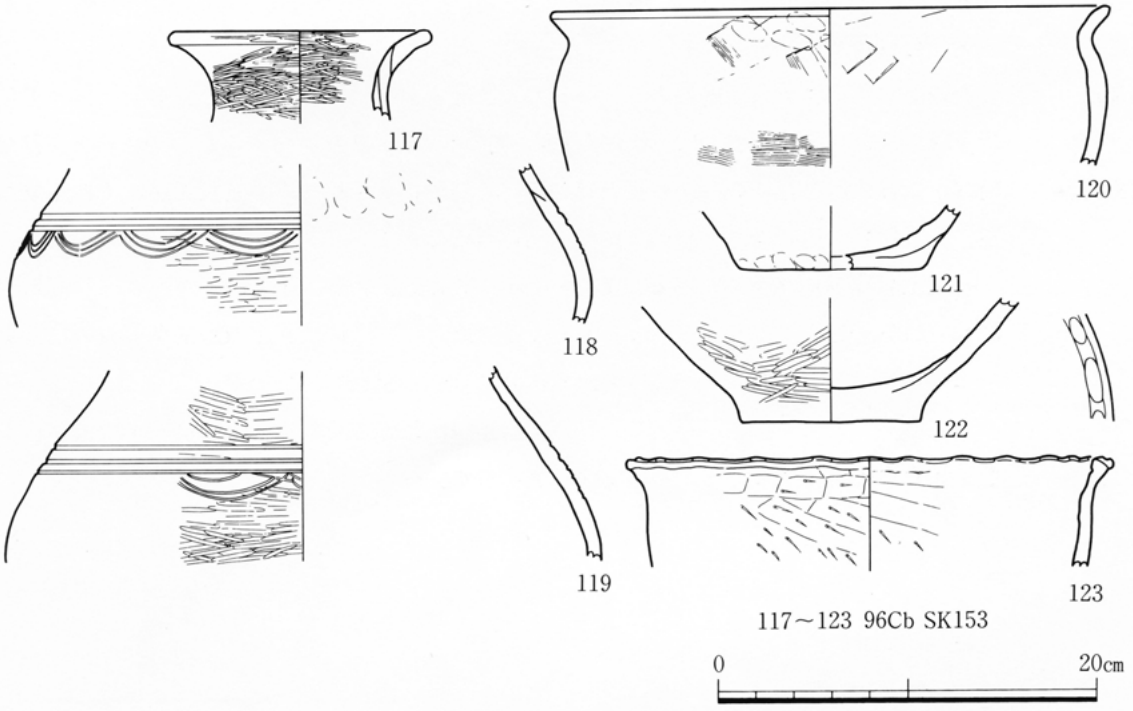
最後に、氷式系削痕深鉢形土器の存在は、尾張平野部の煮炊具を見ていく上でより複雑な多元的系統複合を考えていく必要性を提示した。



108～113 96Cb SX01



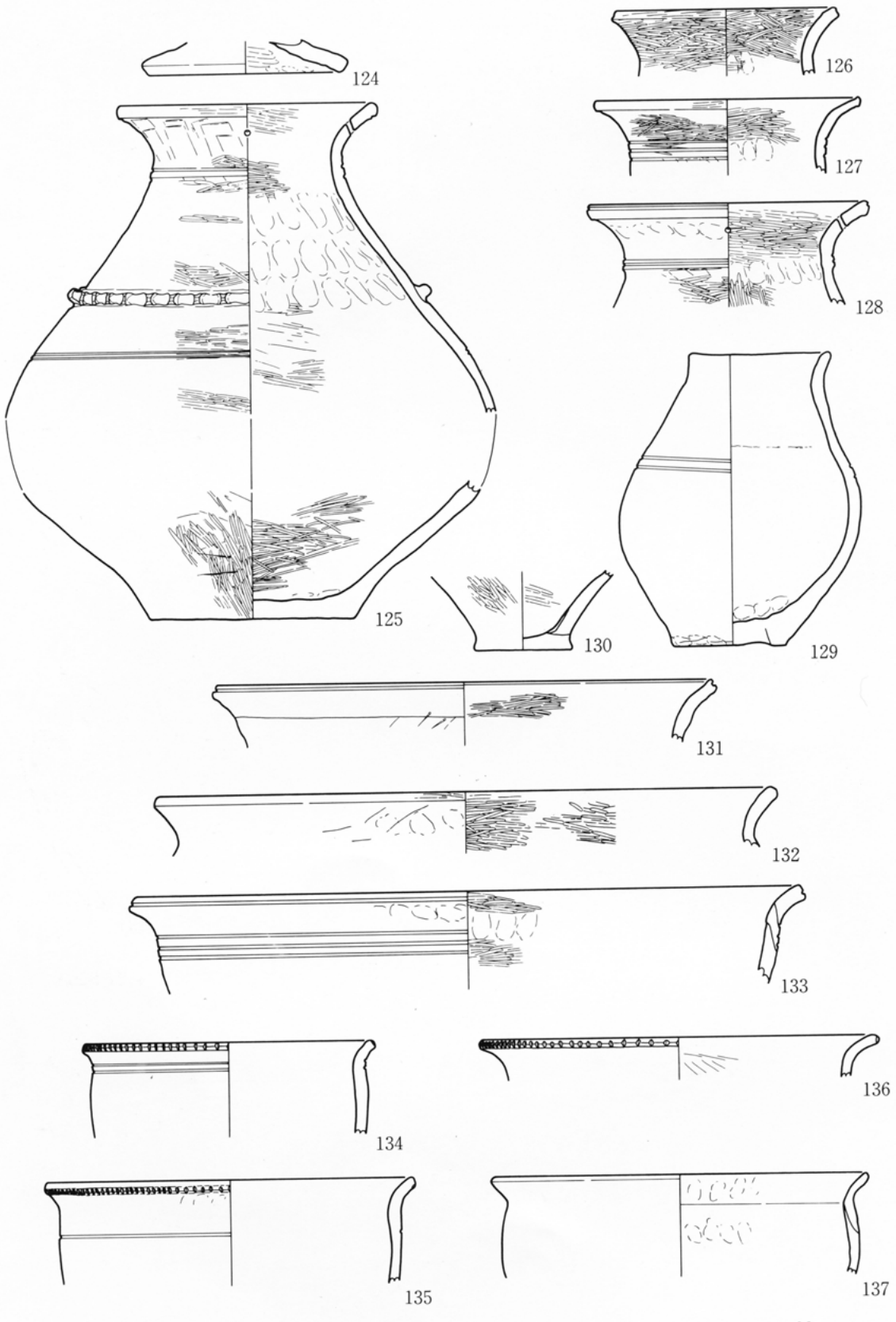
114～116 96Cb SK50



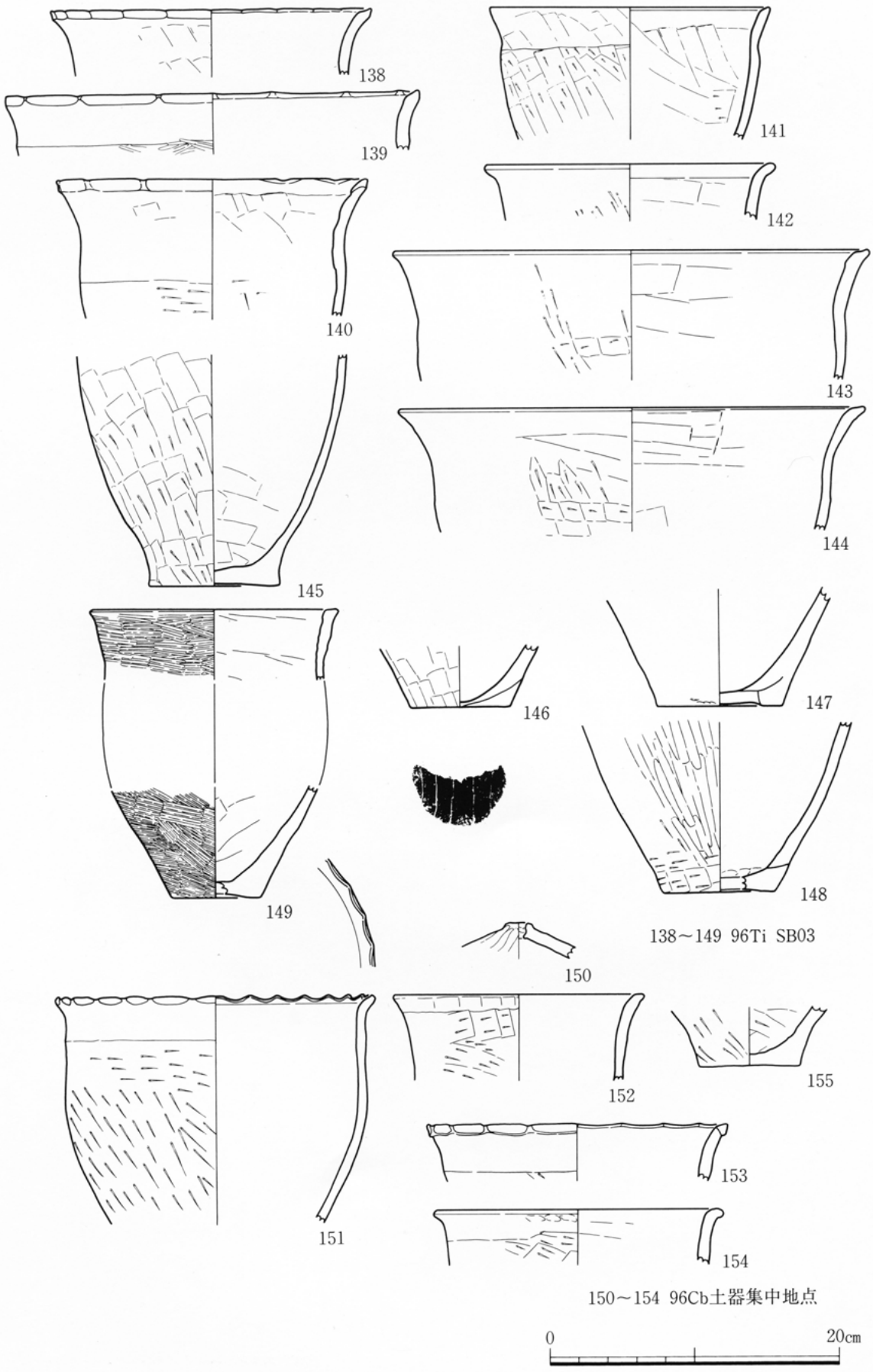
117～123 96Cb SK153

0 20cm

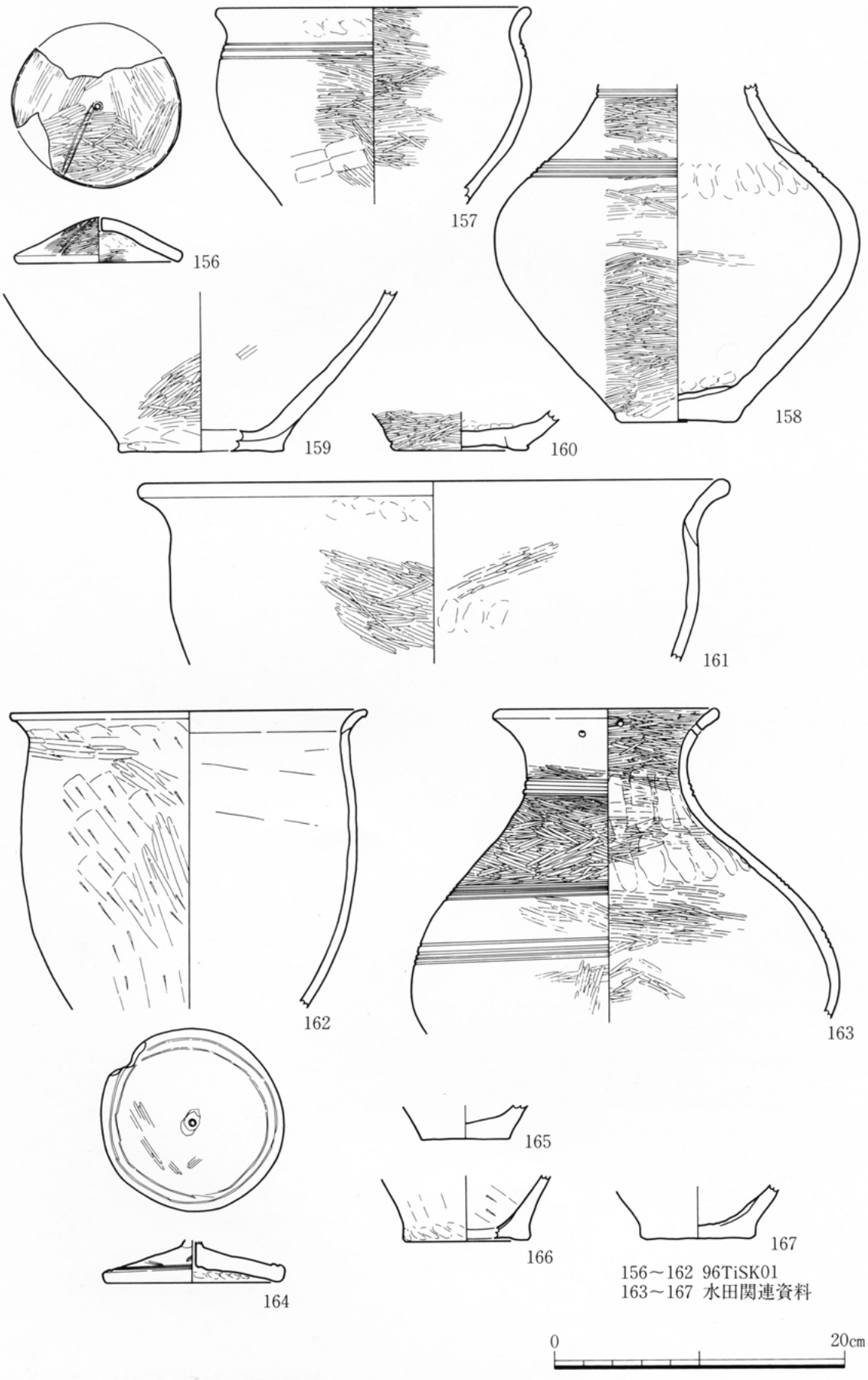
第53図　弥生時代前期の遺物実測図(1)（1：4）



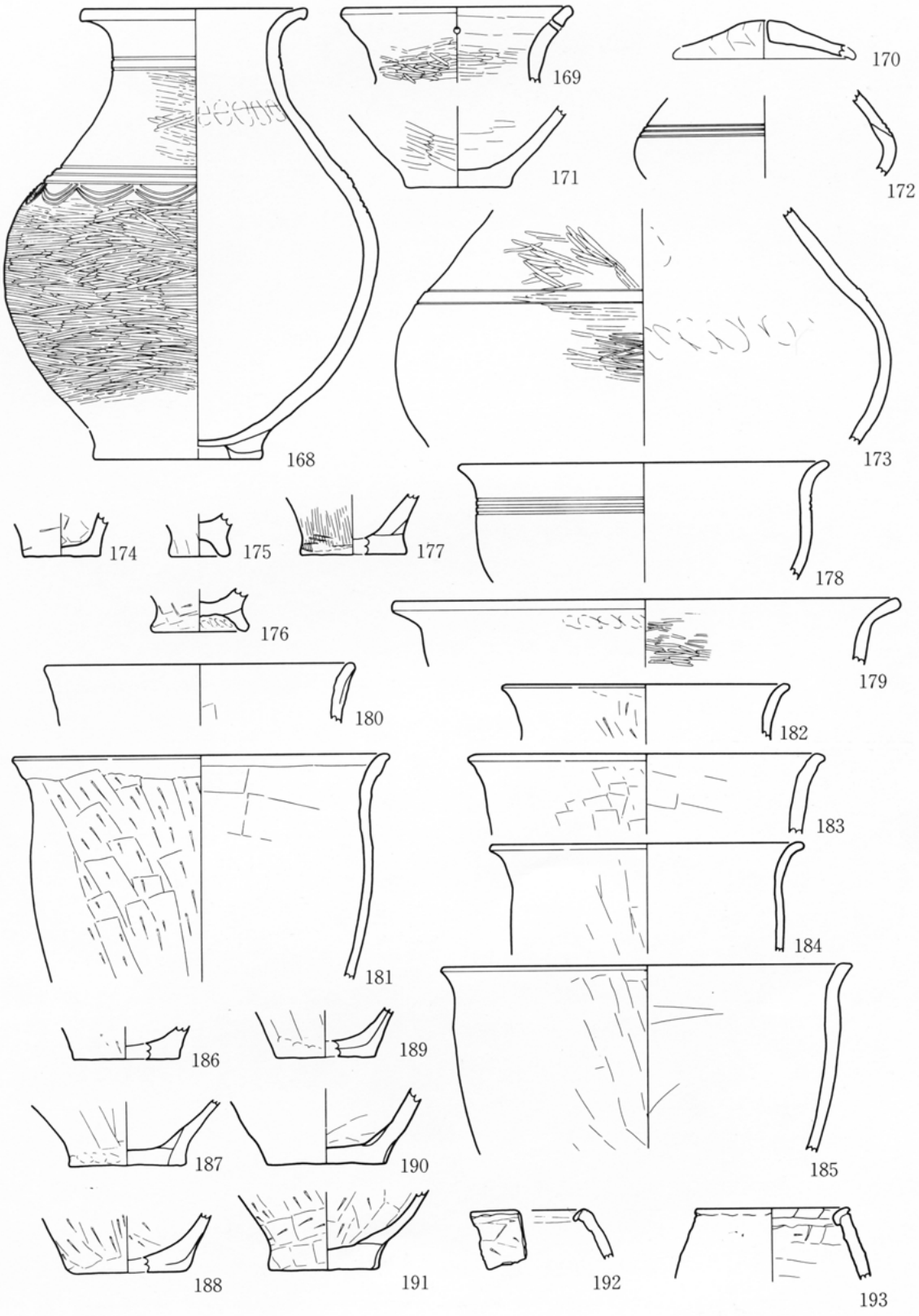
第54図　弥生時代前期の遺物実測図(2)（1：4）



第55図　弥生時代前期の遺物実測図(3)（1 : 4）



第56図　弥生時代前期の遺物実測図(4)（1：4）



168～193各調査区検出資料

0 20cm

第57図　弥生時代前期の遺物実測図(5)（1：4）

3．弥生時代後期～古墳時代

遺構出土遺物　三ツ井遺跡から出土する弥生時代後期から古墳時代にかけての遺物は、大きく二時期に分けられる。すなわち、Ⅰ期の遺物は山中式後期から廻間Ⅱ式（赤塚 1990・1992）までにおさまる時期の一群で、Ⅱ期の遺物は松河戸Ⅰ式前半（赤塚 1994）にまとまりをもつ一群である。遺構出土遺物の量はさほど多くはないが、近接した時期にまとまるものが多く、なかには一時期の器種の組み合わせを知ることのできる良好な資料も含まれる。そこで個体識別が可能な遺物については、できる限り資料化を行なった。

(1)　Ⅰ期の遺物

97Ab SK74　194は山中式後期の有段高杯で、口縁部外面に櫛描波状文、内面に丁寧なヘラミガキを施す。195は小型の広口壷で、頸部の屈曲は強い。

96Ti SK02　196は山中式に系譜が置かれる有段高杯。197、198は脚高の高い有段高杯の脚部。199は浅鉢で、口縁部は有段口縁状。底部周縁には、稜がつくようなヘラケズリが施される。

97Ab SD33　200は有段口縁甕の口縁部で、外面の刺突がみられないもの。201は口縁部が緩やかに外反する甕で、断続的な櫛描直線文とヘラによる刺突を肩部に施す。202はく字甕または有段口縁甕の脚台～体部下半。203は有段高杯で、杯高と脚高の比はほぼ１：１となる。口縁部と脚部の端部には細部彎曲調整技法（赤塚 1990）が見受けられるが、脚部の内彎志向はさほど顕著でない。204は器台もしくは高杯の脚部。205は「パレス・スタイル」壷の体部上半の破片で、直線文と櫛による刺突で文様が構成される。

97Ab SD29　206はく字甕で器壁は厚い。体部内面には幅１㎝のヘラ状工具による調整痕が明瞭に残る。207は口縁部外面に押し引き状の刺突が施されるＳ字状口縁台付甕（以下、S字甕とする）Ａ類。口縁部には段が認められず、体部外面のハケメは羽状にならない。208は高杯の脚部。脚部の下半でヘラミガキの方向を変化させる特徴的な技法がみられる。

97Ab SD30　209はＳ字甕Ｂ類（中～新段階）。210はＳ字甕を模倣した甕。体部外面のハケメの当たりは弱く、方向も通常のＳ字甕とは異なる。器壁が厚く、砂粒もあまり含まれない。211はＳ字甕の脚台。212は器台で、器受部は屈折気味に外反する。213は内彎直口壷の口縁部で、外面に擬凹線をめぐらす。

(2)　Ⅱ期の遺物

96Ti SE02　220はＳ字甕Ｃ類（新段階）。221は口縁部の下段が肥厚するＳ字甕Ｄ類（古段階）。222～224はＳ字甕の脚台。225は無透孔屈折脚高杯の杯部。226は柳ヶ坪型壷の口縁部。227は口縁端部をつまみ上げる壷で、内外面の文様帯には櫛による刺突を施す。文様構成、頸部の調整は柳ヶ坪型壷に共通することから、柳ヶ坪型壷の一種と考えておく。同様な柳ヶ坪型壷は稲沢市尾張国分寺跡SX05（北條1998）からも出土している。228は小型壷で、底部はわずかな上げ底状となる。外面はヘラケズリ調整。

96Ti SE01　230はＳ字甕Ｄ類（古～中段階）。口縁部は全体的に厚く、屈曲も鈍くなっている。231

はＳ字甕の脚台～体部下半。232は二重口縁壷で、頸部内外面はヘラミガキ調整。

97B SK88　233～239はＳ字甕の口縁部で、233がＣ類（新段階）、その他はＤ類（古段階）の特徴を有する。240～244はＳ字甕の脚台。245～249は無透孔屈折脚高杯。杯部にはヘラミガキがみられないが、脚柱状部外面には縦方向の細かい匙面状のヘラミガキが観察される。250は柳ヶ坪型壷の口縁部。有段口縁となるが、段は顕著でない。251は直口壷の口縁部。252は小型丸底鉢の口縁部で、内外面にはハケメを施したのち、細かい沈線状のヘラミガキを横方向に施す。色調橙色で、砂粒をほとんど含まない。製作工程、胎土の選択性（次山 1993）とも精製器種とするに相応しい。253も小型丸底鉢で、口縁部径が体部径を大きく凌駕する形態、252よりも法量が大きい。ヘラミガキが欠落し、体部外面下半はヘラケズリ調整のみ。254は小型器台の器受部で、ヘラミガキはみられない。

96Ba SK14　255は有段口縁状に外反する口縁部、下膨れの体部、底部木葉痕などの特徴を有する柳ヶ坪型壷の典型例。口縁部は薄作りとなる。256はＳ字甕Ｃ類（新段階）。

97Ab SD31　257～262はＳ字甕Ｄ類（古段階）。263はく字甕、264は小型のＳ字甕の脚台。265は柳ヶ坪型壷の口縁部。266は八の字状に外反する高杯の脚部で、透孔を有する。267～270は無透孔屈折脚高杯で、267、268の脚柱状部外面には、縦方向のヘラミガキがみられる。一方、269、270の脚柱状部外面の調整は、幅広のメントリ状のナデとなる。271は小型器台の器受部。

(3)　その他の遺物

包含層中や、古代～中世の遺構から出土した遺物。272～276がⅠ期に相当し、277～288がⅡ期に相当する。289、290は古墳時代後期の遺物。

272は山中式の高杯脚部。273は小型の浅鉢。274は杯部内面に沈線を施した高杯。275と276は別個体で、円形浮文を口縁外面の文様帯に貼り付けた加飾壷。

277～279はＳ字甕Ｃ類（新段階）で、280はＤ類（古段階）。281、282は柳ヶ坪型壷の口縁部で、281は227に形態が類似する。283、284は底部に木葉痕があることから、柳ヶ坪型壷の底部である可能性が高い。285は小型器台。286、287は無透孔屈折脚高杯。287は脚柱状部が中膨らみすることから、Ⅱ期より後出のもの。288はヘラミガキが欠落した小型丸底鉢。

古墳時代後期　290は97AbSK201から出土した須恵器杯で、東山61号窯式（斎藤 1989）。289はつまみ上げ口縁の甕で、東山61号窯式に併行する時期のものであろう。



第58図　技法　1、砂礫の補充(244)　2、ハケメ→ヘラミガキ(252)　3、ヘラケズリ(253)

(4) 考　察

Ⅰ期

Ⅰ期の各遺構出土遺物について、その編年的位置を明示しておく。SK74は櫛描波状文のある有段高杯から山中式後期に編年される。96TiSK02は脚高の高い内彎脚をもつ有段高杯、浅鉢という組成で、山中式に系譜の置かれる有段高杯を含む。組成や内彎脚高杯の形態は、西春日井郡師勝町能田旭遺跡溝状遺構（市橋 1991·1996）のそれに類似することから、廻間Ⅰ式2段階に近い時期を想定できる。97AbSD33・97BSD20は、杯高：脚高＝1：1で、口縁端部に細部彎曲調整技法をとめる有段高杯の存在と、甕のなかにS字甕が含まれないことから、廻間Ⅰ式3～4段階に比定できる。97AbSD29はS字甕A類を含むが、S字甕の形態はやや特異で、位置付けが難しい。97AbSD33・97BSD20と同時期、もしくは若干後出する時期か。97AbSD30はS字甕B類（中～新段階）、底径が口径を凌駕する形態の小型器台から、廻間Ⅱ式3～4段階。

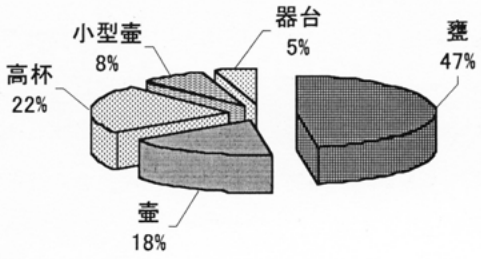
以上、三ツ井遺跡のⅠ期の遺物と廻間式土器の編年との対比を試みた。資料数の少なさを恐れなければ、山中式に系譜が置かれる有段高杯が内彎脚をもつ有段高杯とある一定の時間を共有する、定型化したS字甕が析出する過程が不明瞭、といった三ツ井遺跡独自の器種の変遷過程を指摘することも可能であるように思われる。この指摘は、犬山扇状地の末端近くに位置する三ツ井遺跡が尾張低地南部の遺跡と同一視できない土器製作環境にあったと想定することにもつながる。廻間Ⅰ～Ⅱ式における尾張低地内の地域差はこれまでにも指摘されており（早野 1998）、今後、このような小地域差をさらに明確にしたうえで、集落間の関係、ひいては地域社会の構造を復原していく作業が求められることになろう。

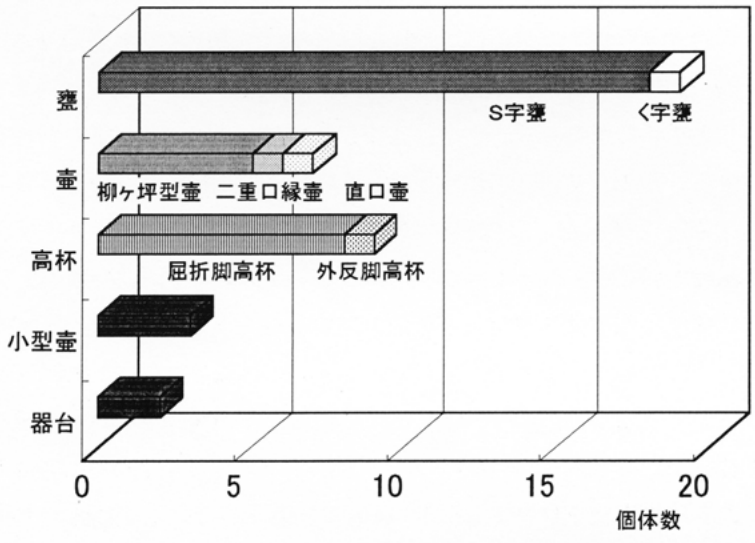
Ⅱ期

Ⅱ期とした各遺構出土遺物には、以下に列挙する概ね共通した特徴が認められる。S字甕はD類（古段階）が主体となり、C類（新段階）がわずかに残存する。高杯は無透孔屈折脚高杯がそのほとんどで、脚部に縦方向のヘラミガキがみられるものが多い。柳ヶ坪型壷が組成し、まれに二重口縁壷も組成に加わる。小型器台と口縁部径が体部径を大きく凌駕する形態の小型丸底鉢がみられる。これらの特徴は名古屋市月縄手遺跡SX02下層・SX01（樋上編 1994）、稲沢市尾張国分寺跡SX05、岩倉市西北出遺跡溝B（浅野・安達 1971）、一宮市大毛池田遺跡SD206（武部編 1996）の土器群にみられる特徴に最も近似するもので、三ツ井遺跡のⅡ期の遺物は総じて松河戸Ⅰ式1段階に位置づけることができる。

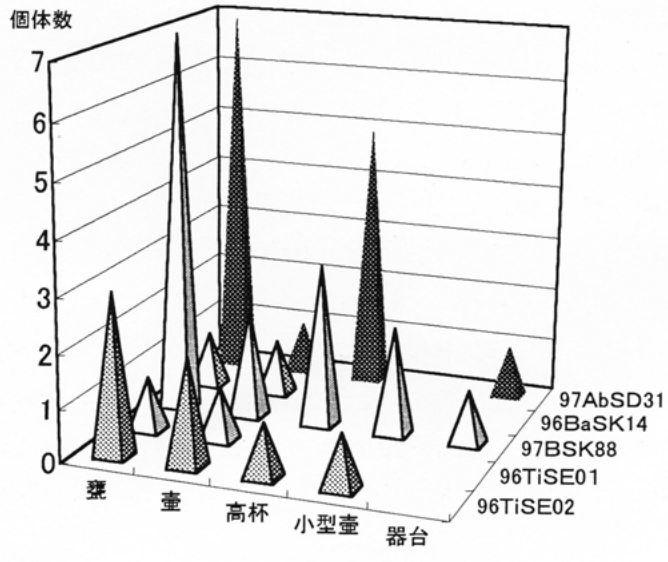
三ツ井遺跡のⅡ期の遺物はきわめて限定された時期の所産と考えられたので、個体識別が可能な40点の遺物について、その組成を確認しておくこととしたい（第59～60図）。三ツ井遺跡Ⅱ期（松河戸Ⅰ式1段階）の前後は、器種組成の変化が比較的短期間に広域で認められることがこれまでに明らかにされており、まさに「様式の移行期」との認識がされてきたからである（加納・浅野・北村 1988）。なお、様式の設定、画期の認識に関しては、加納俊介氏が松河戸様式を提唱する赤塚氏との立場の違いを明確にしている（加納 1991・1997）。

まず全体の組成をみると、甕の比率が全体の約5割を占め、その9割以上がS字甕である。一方、柳ヶ坪型壷などの中型以上の壷が全体の約六分の一、高杯、小型壷（小型丸底鉢）、





第59図　Ⅱ期の遺物の組成



第60図　Ⅱ期の遺物の組成（遺構別）

器台といった器種は合わせて全体の約三分の一を占める。こうした全体の組成の傾向に対しては、また、各遺構別の組成をみた場合においても、日常生活以外の営為を介在させて理解する必然性はないであろう。やや詳しくみると、注目されるのが高杯で、構成比は全体の約２割、甕の約半分の個体数を占め、そのほとんどが無透孔屈折脚高杯で占められる。前段階の廻間Ⅲ式後半には高杯（外反脚高杯）が激減することが指摘されているので、形式の交替、新形式の普及がこの段階に急速に進行したことが分かる。また、この段階に器台は減少傾向にあって、次段階には消滅すると指摘されているが、三ツ井遺跡においては、この段階もなお一定量、小型壷とほぼ１対１の割合で、その存在を確認できる。

これまでに述べたことをまとめると、前段階と同様、Ｓ字甕には段階的な変化と安定した組成を確認できる。柳ヶ坪型壷は基本的な器種として前段階から安定して存在する。器台については粗製化が看取されるも、確実に残存する。これらの現象は、様式を策定する基準とはなりにくいものである。その一方で、無透孔屈折脚高杯に代表される新形式の出現、普及が確認できる。なお、赤塚氏はこの現象を様式上の画期を設定する最大の拠り所とする（赤塚1994）。そこで、小型精製器種の一種である小型丸底鉢に注目すると、三ツ井遺跡97BSK88では精製品と調整手法の省略したものの共伴が確認できる。後者は口縁部径が体部径を大きく凌駕する形態で、西北出遺跡溝Ｂや尾張国分寺跡SX05、大毛池田遺跡SD206においても同様な形態の小型丸底鉢がみられる。つまり、この段階に精製の小型丸底鉢が残存する一方、精製品の形態を比較的忠実にとどめたまま、調整手法の省略がはじまると考えられるのである。

三ツ井遺跡Ⅱ期の遺物を材料として、「様式移行期」としての土器群の実相について述べ、この段階にあらゆる器種の変化がみな揃って実現したわけではないことを明らかにした。無透孔屈折脚高杯についても、その淵源地を絞りきるまでには至っていない現状にあるため、今回の検討をもとにして、様式の設定、画期の認定に関して明確な回答を用意することは難しい。この問題に関しては、より広域にみた土器の動態や集落や古墳の消長を視野に入れながら、機会を改めて論じることとしたい。（早野浩二）

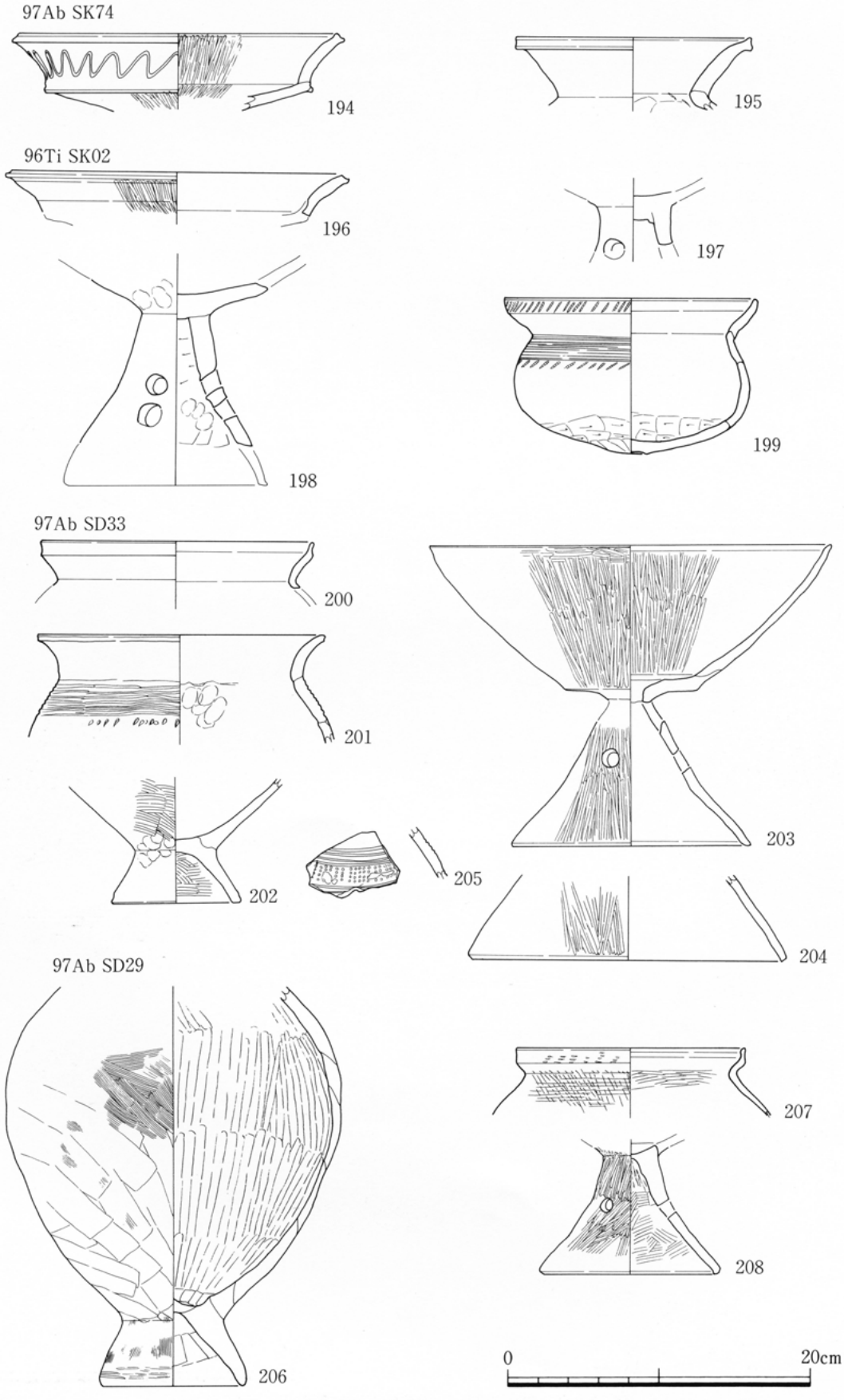
文　献

赤塚次郎 1990「考察」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第10集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
1992「山中式土器について」『山中遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第40集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
1994「松河戸様式の設定」『松河戸遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第48集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
浅野清春・安達厚三 1971「西北出遺跡の土師器」『いちのみや考古』No18
市橋芳則 1991『師勝町歴史民俗資料館 研究紀要Ⅰ』師勝町歴史民俗資料館
1996『師勝町歴史民俗資料館 研究紀要Ⅳ』師勝町歴史民俗資料館
加納俊介・浅野清春・北村和宏 1988「愛知県岩倉市小森遺跡出土の土器」『古代』第86号 早稲田大学考古学会

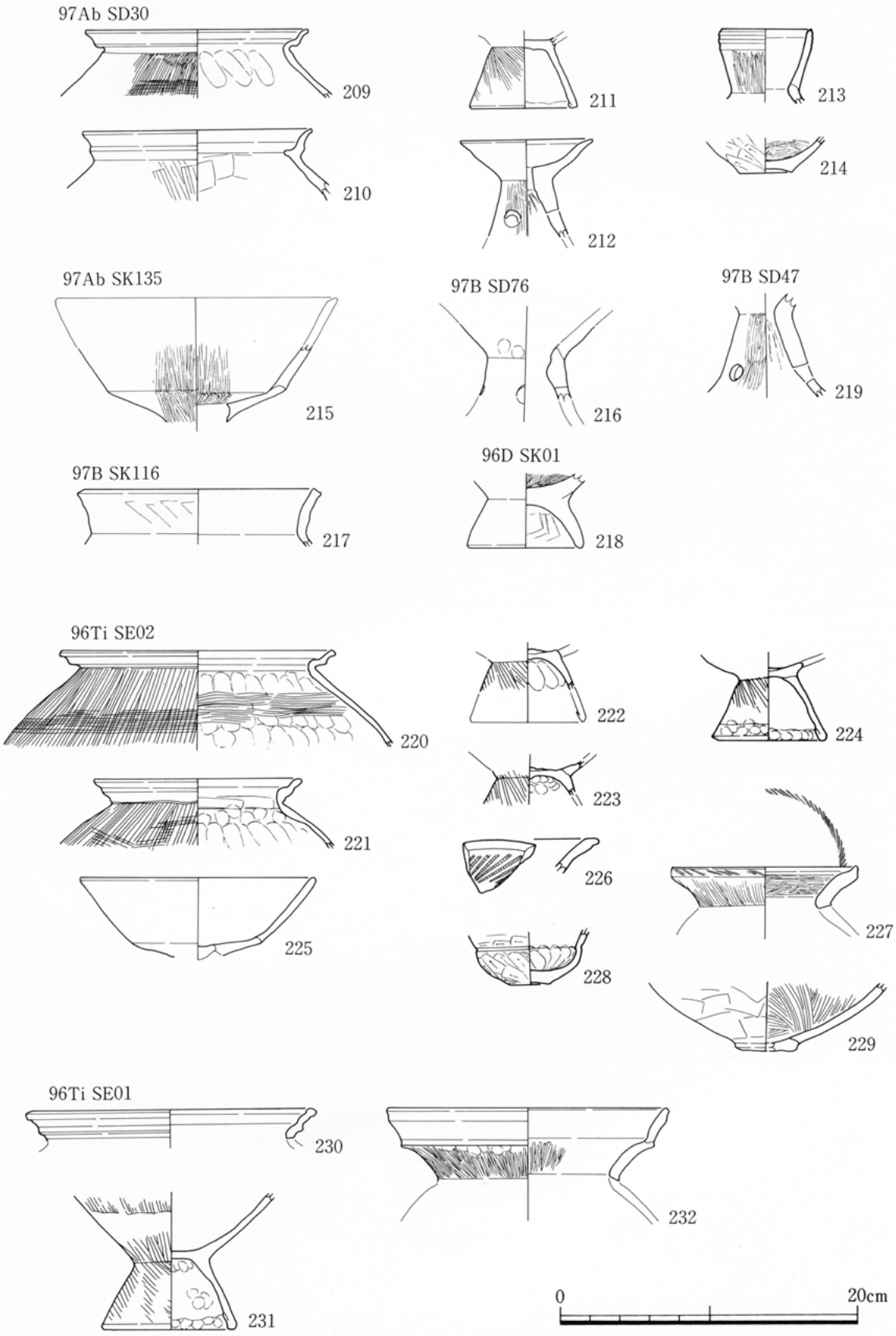
加納俊介 1991「東海」『古墳時代の研究 6 土師器と須恵器』 雄山閣
1997「廻間式か元屋敷式か－東国から見た弥生土器と土師器の境界－」『西相模考古』第6号 西相模考古学研究会
斎藤孝正 1989「古墳時代の猿投窯」『第6回東海埋蔵文化財研究会 断夫山古墳とその時代』愛知考古学談話会
武部真木編 1997『大毛池田遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
次山 淳 1993「布留式土器における精製器種の製作技術」『考古学研究』第40巻 第2号
早野浩二 1998「尾張低地部」『第6回東海考古学フォーラム岐阜大会 土器・墓が語る』東海考古学フォーラム岐阜大会実行委員会
樋上 昇編 1994『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ 月縄手遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第55集 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
北条献示 1998『稲沢市内遺跡発掘調査報告書（Ⅳ）－尾張国分寺跡第5次調査－』稲沢市文化財調査報告ＸＬⅣ 稲沢市教育委員会

赤塚90・92・94		尾張低地基準資料	三ツ井遺跡		
山中式後期	4	堀之内花ノ木遺跡SK50 岩倉城遺跡SB1206 八王子遺跡SK73 廻間遺跡SB75 能田旭遺跡溝状遺構 勝川遺跡SZ22 平松遺跡SK01 西上免古墳D・G・F地点 西上免古墳E・C地点 廻間遺跡SB60 廻間遺跡SK30 廻間遺跡SB45上層 廻間遺跡SB56 塔の越遺跡SX01 岩倉城下層SX1201 月縄手遺跡SX02下層 月縄手遺跡SX01 尾張国分寺跡SX05 西北出遺跡溝B 大毛池田遺跡SD206 大毛池田遺跡SB102 大毛池田遺跡SK104 松河戸遺跡SK201	Ⅰ	1	97B SK74
	5				
廻間Ⅰ式	0			2	96Ti SK02
	1				
	2				
	3			3	97Ab SD33・97B SD20 97Ab SD29
	4				
廻間Ⅱ式	1				
	2				
	3			4	97Ab SD30
	4				
廻間Ⅲ式	1				
	2				
	3				
	4				
松河戸Ⅰ式	1		Ⅱ		96Ti SE02 96Ti SE01 97B SK88 96Ba SK14 97Ab SD31
	2				
	3				
	4				

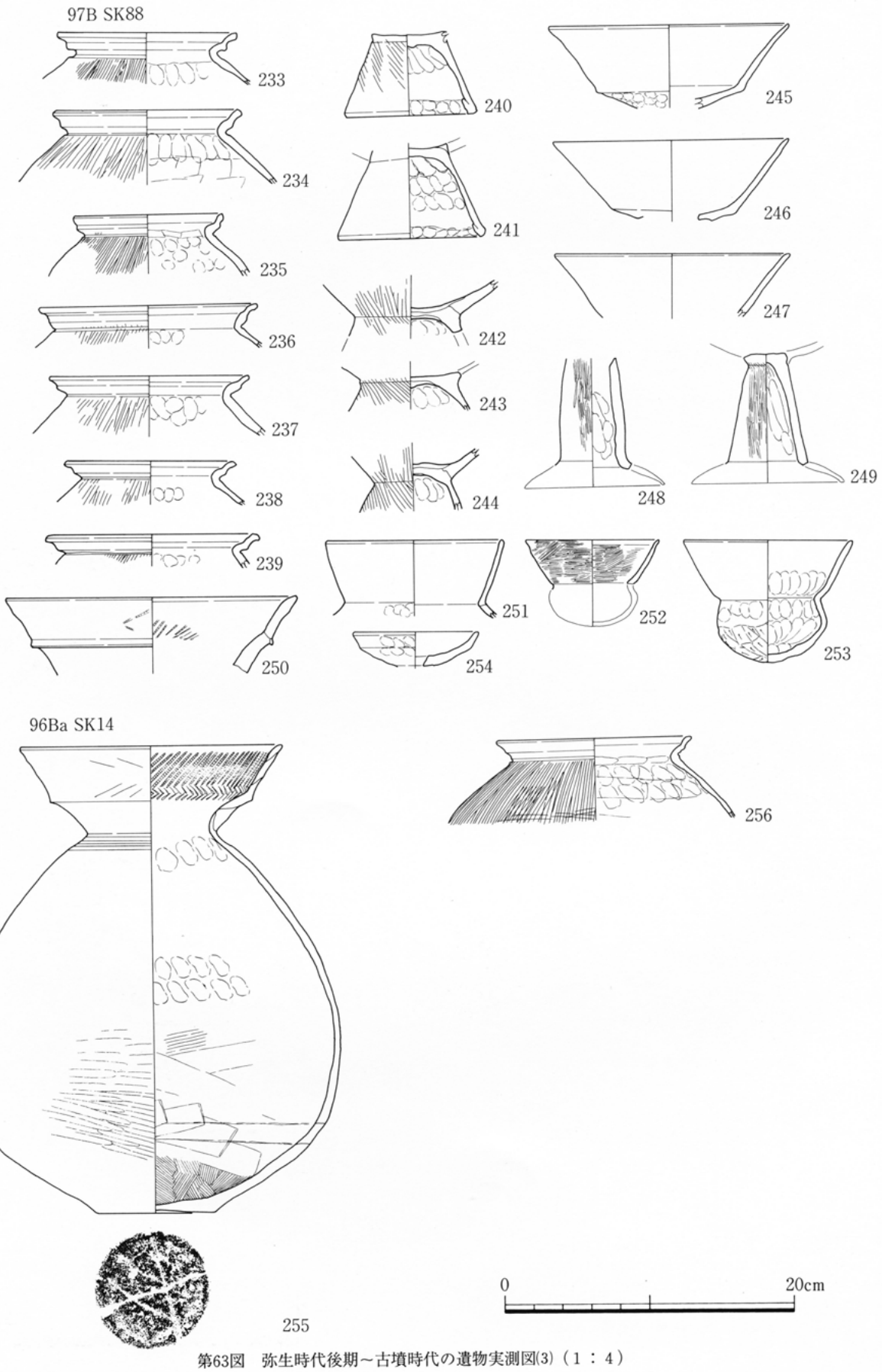
第5表 尾張低地編年対照表



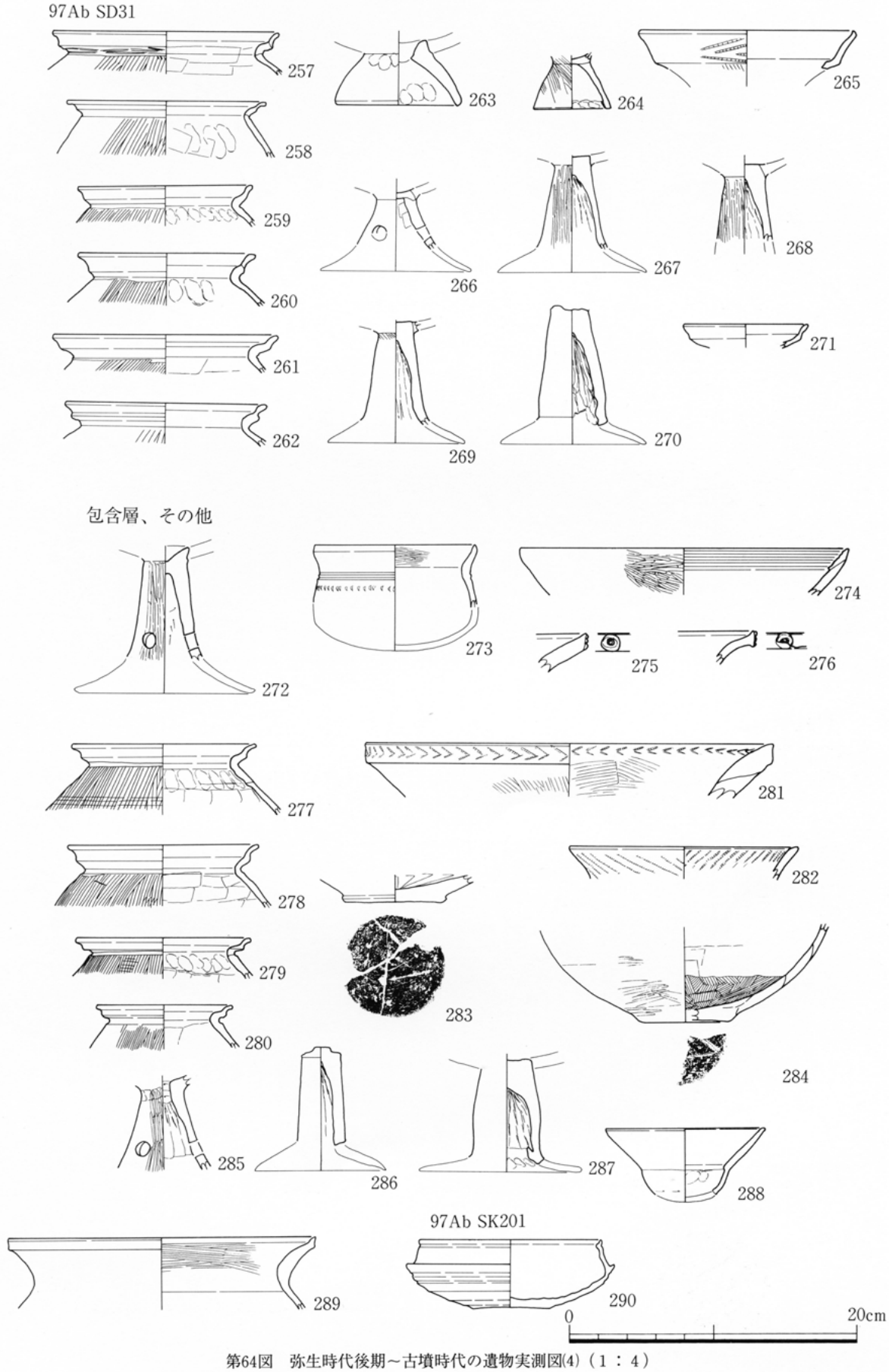
第61図　弥生時代後期～古墳時代の遺物実測図(1)（1：4）



第62図　弥生時代後期～古墳時代の遺物実測図(2)（1 : 4）



第63図　弥生時代後期～古墳時代の遺物実測図(3)（１：４）



第64図　弥生時代後期～古墳時代の遺物実測図(4)（1：4）

4．古　代

分類の基準　古代の遺物は、猿投窯の東山50号窯式から美濃窯の丸石２号窯式（猿投窯の百代寺窯式併行）までのものが出土した。遺構出土の大半は溝資料であり、概ね８世紀後半から９世紀後半が中心となる。分類の基準は、須恵器について城ヶ谷分類（城ヶ谷1993）を、灰釉陶器について斉藤分類（斉藤1994）を、土師器甕について永井分類（永井1995）を、都城形土師器について小森分類（小森1996）、製塩土器について立松分類（立松1994）を参考に提示する。

須恵器　須恵器の杯・椀・蓋・盤については、杯Ａ・杯Ｂなどの分類を使用し、細かな分類基準を示さない。以下に器種を示す。

古墳時代から続く器形で立ち上がりと蓋受けを持つ杯身とつまみを持たない杯蓋の杯Ｈ。高台の付かない杯Ａ。高台の付く杯Ｂ。つまみが付き、かえりがない杯蓋Ｂ。高台の付かない椀Ａ。高台の付く椀Ｂ。低い高台の付く盤Ｂ。盤Ｂに比べ、やや高い高台の付く盤Ｃ。上記以外に鉢・短頸鉢・短頸壺・甕・甑などがある。

灰釉陶器　灰釉陶器は、椀・皿・段皿・長頸瓶などがある。

土師器　土師器は、濃尾系甕、都城形の土師器を模倣した杯、製塩土器などがある。

	猿投窯				美濃窯		美濃須衛窯		
650年前後									
	第Ⅲ期	第１小期	東山50号窯式	○			Ⅲ期		－
		第２小期	岩崎17号窯式	△					
700年前後		第３小期	岩崎41号窯	○					
		第４小期	高蔵寺２号窯式	－			Ⅳ期	第１小期	
	第Ⅳ期	第１小期	岩崎25号窯式	○					
750年前後		第２小期	鳴海32号窯式	○				第２小期	○
		第３小期	折戸10号窯式	◎					
800年前後		第４小期	井ケ谷78号窯式 黒笹14号窯式①	◎				第３小期	
	第Ⅴ期	第１小期	黒笹14号窯式②	◎			Ⅴ期	第１小期	－
850年前後		第２小期	黒笹90号窯式	◎				第２小期	
900年前後					光ケ丘１号窯式	－			
950年前後	第Ⅵ期	第１小期	折戸53号窯式	△	大原２号窯式	－			
		第２小期	東山72号窯式	△	虎渓山１号窯式	△			
1000年前後		第３小期	百代寺窯式	△	丸石２号窯式	△			
					明和27号窯式	－			

永井宏幸編1996『大毛沖遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集をもとに一部改変
○は、古代の遺構及び古代包含層から出土した遺物の窯式・時期を示す。
◎は、古代の遺構及び古代包含層から相対的に多く出土した遺物の窯式・時期を示す。
△は、○・◎以外で、今回の調査で出土した遺物の窯式・時期を示す。（図示しなかった遺物を含む）
－は、今回の調査で確認できなかった遺物の窯式・時期を示す。（検出などの遺物を含む）

第６表　三ツ井遺跡出土の古代遺跡と関連編年対比表

96A SB01

291～301は96A SB01出土資料。291～294は焼土・炭化物が集積したカマド部分から出土。291・292は杯蓋Ｂ、293は杯Ａ、294は盤Ｂ。295・296は杯蓋Ｂで、296は内面にヘラ記号がある。297は杯Ｂ。298～300はSB01のカマド近くのSK68出土資料。

(SK68)

298・299は杯Ａで、298は底部外面に「大」という文字のヘラ書きがある。300は椀Ｂ。301はSB01内のSK70出土資料で杯。いずれも折戸10号窯式。

(SK70)

96A SD08

302・303は96A SD08出土資料。302は杯Ｂ、303は鉢。いずれも折戸10号窯式。

96A SD09

304～313は96A SD09出土資料。304・305は杯蓋Ｂで、いずれも折戸10号窯式。306は杯Ｂで折戸10号窯式から井ヶ谷78号窯式か。307は杯Ｂで、美濃須衛窯産で８世紀代。308は椀Ａで折戸10号窯式から井ヶ谷78号窯式か。309は椀Ｂで、底部外面にヘラ記号がある。310は盤Ｂで折戸10号窯式。311は盤Ｃで折戸10号窯式から井ヶ谷78号窯式か。312は角高台の灰釉陶器皿で重ね焼きの跡が見られ、黒笹14号窯式。313は小型短頸壺で鳴海32号窯式から折戸10号窯式か。

96A SD10

314～317は、96A SD10出土資料。314・315は杯蓋Ｂで、いずれも折戸10号窯式。316は横瓶のミニチュアで黒笹７号窯式（井ヶ谷78号窯式古段階併行）。317は把手付片口鉢で、内・外面に黄土塗布が認められる。猿投窯産で８世紀後半であろう。

96Ba SD17

318・319は96BaSD17出土資料。318は灰釉陶器輪花段皿で、刷毛塗り施釉され、黒笹90号窯式。319は盤Ｃで折戸10号窯式から井ヶ谷78号窯式か。

96Ba SD24

320は96BaSD24出土資料。灰釉陶器皿で刷毛塗り施釉され、黒笹90号窯式。

96Ba SD27

321・322は96BaSD27出土資料。321は盤Ｂで折戸10号窯式。322は甕で内・外面に黄土塗布が認められる。猿投窯産で８世紀代であろう。

96Ba SD28

323・324は96BaSD28出土資料。323は杯蓋Ｂ、324は短頸鉢で内・外面に黄土塗布が認められる。いずれも折戸10号窯式。

97B SD02

325は97B SD02出土資料。杯Ｈの杯身で東山50号窯式。

97B SD05

326～329は97B SD05出土資料。326は杯蓋Ｂ、327は盤Ｂで、いずれも折戸10号窯式。328・329は把手付甕の把手部で内面にタタキ調整が残る。美濃須衛窯産で８世紀後半。

97B SD09

330は97B SD09出土資料。杯蓋Ｂで岩崎25号窯式前後か。

97B SD14

331・332は97B SD14出土資料。331は杯Ｈの杯蓋で７世紀代であろう。332は杯Ａで折戸10号窯式。

97B SK09

333は97B SK09出土資料。杯Ａで岩崎41号窯式。

97B SK130

334は97B SK130出土資料。杯蓋Ｂで折戸10号窯式。

97Ca SD11

335は97Ca SD11出土資料。合子で岩崎25号窯式。

97Ca SD17

336は97Ca SD17出土資料。椀Ｂで折戸10号窯式。

97Cb SD11

337～345は97Cb SD11出土資料。337は杯蓋Ｂ、340・341は杯Ｂ、342・343は椀Ｂ、344・345は盤Ｂで、いずれも折戸10号窯式。338は杯蓋Ｂ、339は短頸壺の蓋か。

97Cb SD07

346は97Cb SD07出土資料。灰釉陶器長頸瓶で井ヶ谷78号窯式から黒笹14号窯式か。

97Cb SK04

347は97Cb SK04出土資料。甕で、タタキ調整が残る。美濃須衛窯産で８世紀後半。

古代包含層出土遺物

348～364は古代包含層出土資料。348～356は96A区出土。348は杯蓋Ｂ、349は杯Ｂで猿投窯産。350は椀Ａで、猿投窯産で８世紀後半。351は椀で、底部外面にヘラ記号があり、猿投窯産。352は盤Ｂで井ヶ谷78号窯式。353は甕で、猿投窯産で８世紀半ば。354は把手付甕の把手部で内面にタタキ調整が残り、美濃須衛窯産で８世紀後半。355は長頸壺で折戸10号窯式。356は灰釉陶器広口瓶で黒笹90号窯式。357～361は96Ba区出土。357・358は杯Ｂで、357は井ヶ谷78号窯式、358は猿投窯産で８世紀後半。359～361は灰釉陶器。359は小瓶、360・361は長頸瓶で、いずれも黒笹90号窯式。362～364は97Ca区出土。362は灰釉陶器皿、363は灰釉陶器椀、364は灰釉陶器段皿で、いずれも黒笹90号窯式。古代包含層からは、黒笹90号窯式までの遺物が出土している。

その他の出土遺物

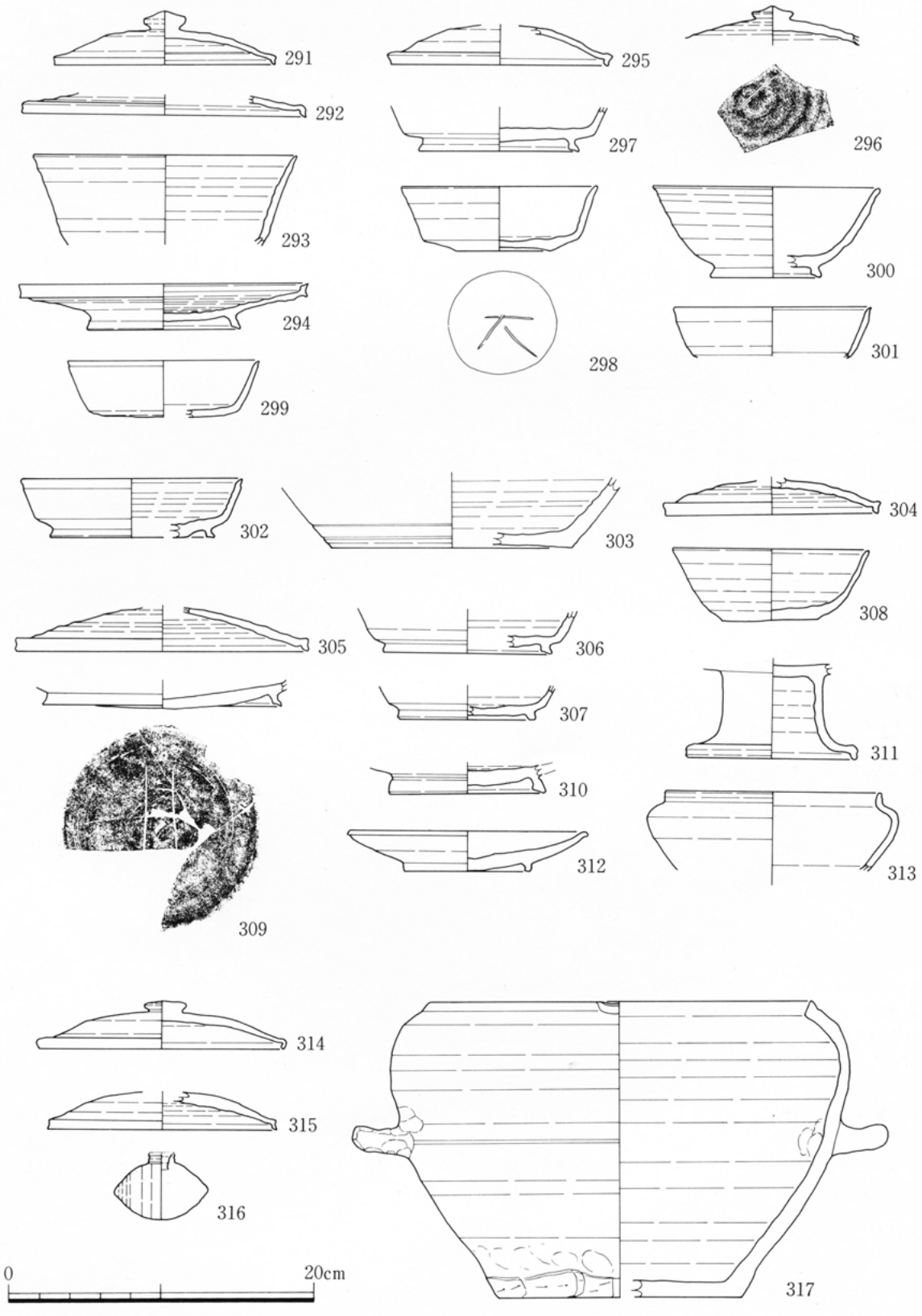
365～381は検出及び他時期の遺構出土資料。365～369は96A区出土。365は杯蓋Ｂで猿投窯産。366は高台が内傾する杯Ｂ。367は椀Ａ、368は椀Ｂで、猿投窯産で８世紀後半。369は灰釉陶器皿で黒笹90号窯式。370は96Ba区出土。灰釉陶器椀で美濃窯の丸石２号窯式。371～373は96Ca区出土。371は灰釉陶器段皿で猿投窯産。372は杯Ａで、猿投窯産で８世紀前半。373は杯Ｂで、底部外面にヘラ記号があり、猿投窯産。374・375は96Cb区出土。374は盤Ｂで猿投窯産。375は杯Ｈの杯身で岩崎17号窯式。376は96E区出土。三足盤で黒笹14号窯式から黒笹90号窯式か。377は97A区出土。盤Ｂで、内面中央部に刻印あり。私印か。８世紀代。378は97B区出土。灰釉陶器皿で折戸53号窯式。379～381は97Ca区出土。379は椀Ａで猿投窯産。380は灰釉陶器椀で浸け掛け施釉され、折戸53号窯式。381は甕で口縁部外面に施された波状文が荒く、折戸10号窯式。

土師器
96A SB01
96A SB02
97Ca SD11

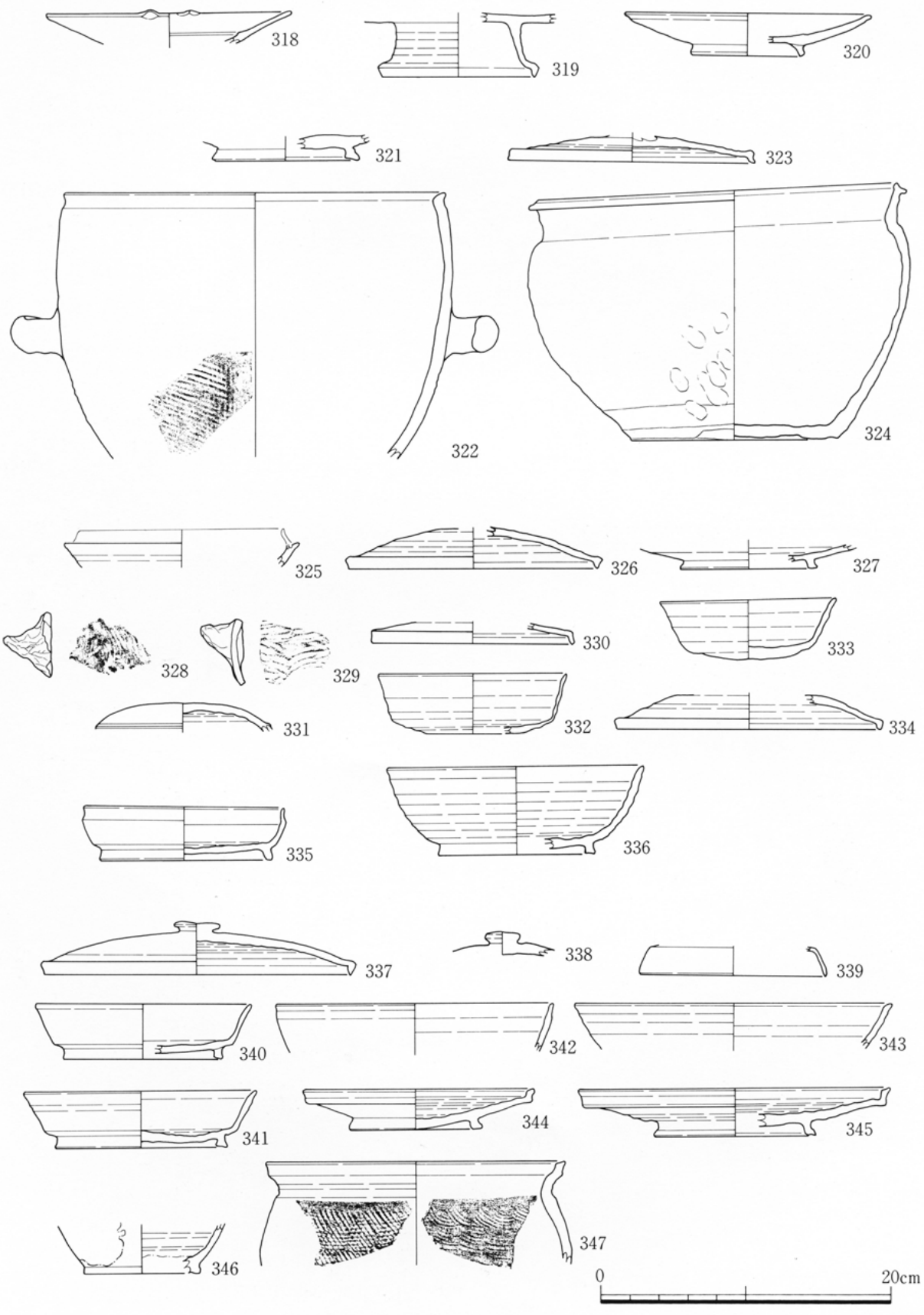
382～390は土師器資料。382は96A SB01のカマド部分、383は96A SB01内のSK70、384は96A SB02、385は97CaSD11から出土。いずれも濃尾系甕で、外面に荒々しいハケ調整がみられ器壁は薄い。382の底部外面に木葉痕、385の底部内面に有段接合痕がみられる。386は96Ba区の古代包含層出土。都城形の土師器を模倣して在地でつくられた可能性が高いと思われる杯。387は96D区から出土。いずれも８世紀代。388～390は製塩土器の脚部片。388・389は96A区、390は97B区出土。いずれも知多式４類。

参考文献
城ヶ谷和広 1993 「尾張における７世紀から９世紀半ばの須恵器」『古代の土器研究　須恵器』　古代の土器研究会
斉藤孝正 1994 「東海地方の施釉陶器生産」『古代の土器研究　施釉陶器』　古代の土器研究会
永井宏幸 1995 「尾張平野を中心とした煮炊具の変遷」『鍋と甕そのデザイン』　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
小森俊寛 1996 「都城跡出土の河内産の可能性のある土師器について」『第67回古代の土器研究報告』　第67回古代の土器研究会
渡辺博人 1984 『美濃須衛古窯群発掘調査報告書』　各務原市教育委員会
立松　彰 1994 「愛知県」『日本土器製塩研究』　近藤義郎編　青木書店

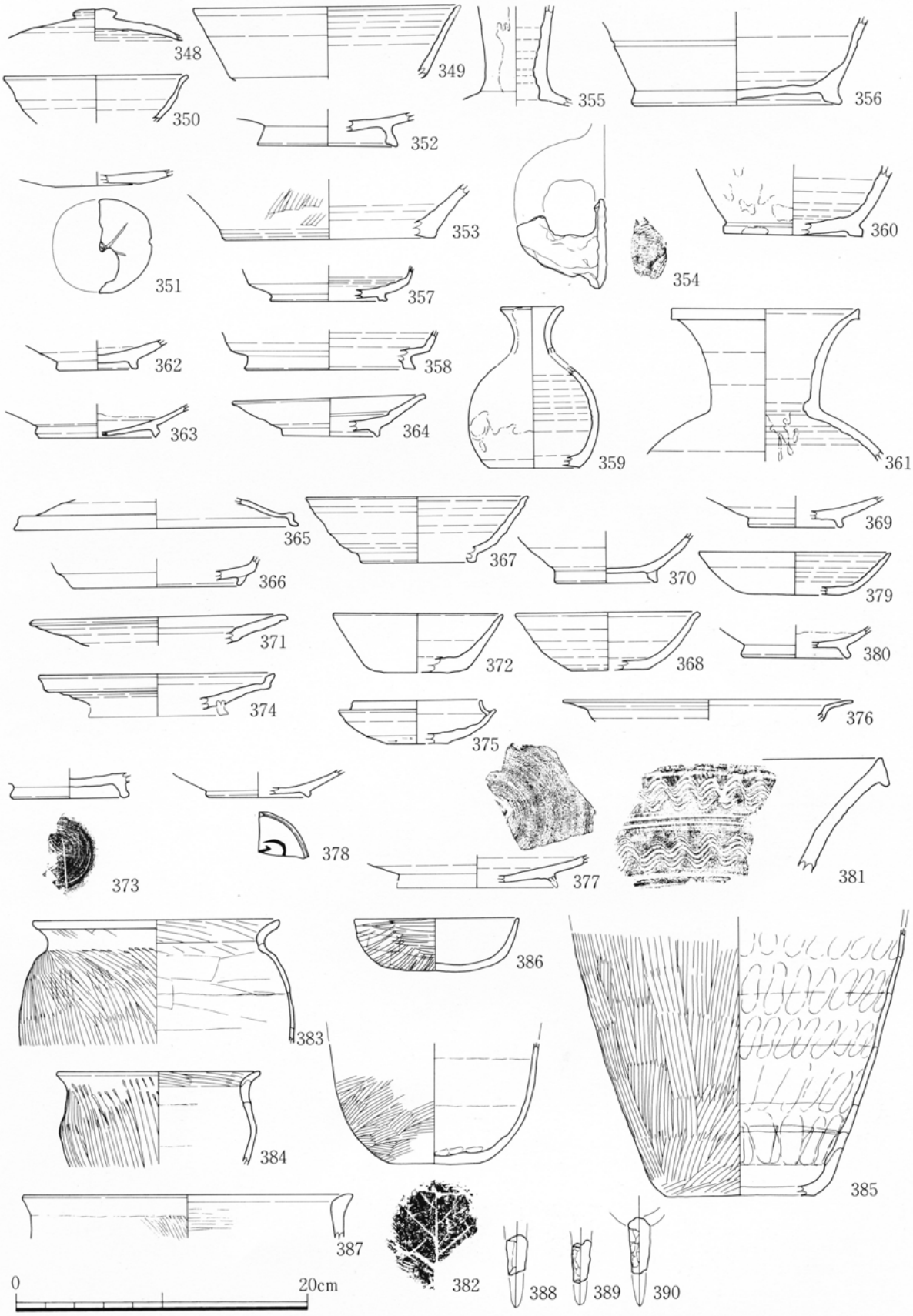
猿投窯産の須恵器・灰釉陶器の時期同定・産地同定については、愛知県史編纂室の城ヶ谷和広氏に、美濃須衛窯産の須恵器の時期同定については、各務原市埋蔵文化財調査センターの渡辺博人氏にご教示を得た。



第65図　古代の遺物実測図(1)（１：４）



第66図　古代の遺物実測図(2)（1 ： 4）



第67図　古代の遺物実測図(3)（1 ： 4）

5．中世以降

ここでは、11世紀後半から19世紀までのものを対象とする。島畑という性格上、出土遺物は時期幅を広く持つが、各遺構、旧島畑・旧水田の形成時期に関わるもの、あるいは、それ以後の時期のものを選び、記載しておく。

分類の基準　分類の基準は、灰釉系陶器については藤澤分類（藤澤1994）、古瀬戸窯については藤澤分類（藤澤1991）、内耳鍋については鈴木分類（鈴木1996）、伊勢型鍋については北村分類（北村1996）、知多窯については赤羽・中野分類（赤羽・中野1995）、焙烙については金子分類（金子1996）、貿易陶磁については横田・森田分類（横田・森田1978）・上田分類（上田1982）、瀬戸美濃窯産陶器及び土師質小皿については鈴木分類（鈴木1994）を参考に提示する。

灰釉系陶器　灰釉系陶器とは中世期の東海地方の窯で焼かれた無釉の陶器を指す。南部系では尾張型のものが、北部系では東濃型の椀・皿が出土している。尾張型のものは、第４型式から第７型式が東濃型では窯洞窯式のものから生田窯式のものがみられる。

施釉陶器　いわゆる古瀬戸窯のものとして、皿・擂鉢・印花四耳壺・卸皿などがみられる。

	尾張型 瀬戸	東濃型	古瀬戸	三ツ井
	第３型式		前Ⅰa期	
1150	第４型式古			中世Ⅰ期
	第４型式新	谷迫間		
	第５型式古	浅間窯下 丸石３ 窯洞		
1200	第５型式新			
	第６型式		前Ⅰb期	
		白土原	前Ⅱa期 前Ⅱb期	
1250	第７型式	明和	前Ⅱc期 前Ⅲ期	
	第８型式	大畑大洞(古)	前Ⅳ期	
1300			中Ⅰ期	
			中Ⅱ期	
	第９型式	大畑大洞(新)	中Ⅲ期	
1350			1360 中Ⅳ期	
			1380 後Ⅰ期	
1400	第10型式	大洞東	1420 後Ⅱ期	中世Ⅱ期
			1440 後Ⅲ期	
1450	第11型式	脇之島	1460 後Ⅳ期(古)	
		生田	1485 後Ⅳ期(新)	
			大窯Ⅰ	

永井宏幸編1996『大毛沖遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集をもとに一部改変

第７表　三ツ井遺跡出土の中世遺物の関連編年表

遺構出土　遺構出土の中近世土器

96A区　391～393は灰釉系陶器。391はSK41出土資料。東濃型大畑大洞（新）窯式。392・393はSK45出土資料。392は尾張型第6型式。393は東濃型白土原窯式。394はSD01出土資料。知多窯産陶器壺で7型式。14世紀中葉～後半。

96Ba区　395はSD01出土資料。396～398は灰釉系陶器。396はSD10出土資料。尾張型第6型式。397はSD18、398はSD21出土資料で共に尾張型第5型式。399はSD34出土資料。

96Ca区　400～405は灰釉系陶器。400～403はSX01出土資料。400は尾張型第5型式。401は東濃型脇之島窯式。402は東濃型生田窯式。403は古瀬戸窯産陶器擂鉢で後Ⅳ（古）期に比定できる。404はSX02出土資料。東濃型白土原窯式。405・406はSX03出土資料。405は東濃型明和窯式。406は古瀬戸窯産陶器で中Ⅰ期あるいはⅡ期の印花四耳壺。

96Cb区　407～413は灰釉系陶器。407はSD10出土資料。東濃型明和窯式。408・409はSX01出土資料で、いずれも外面高台内に墨書がみられる。408は尾張型第7型式。409は東濃型大畑大洞（古）窯式。410・411はSX02出土資料。410は東濃型大洞東窯式。411は東濃型白土原窯式。412はSX03出土資料。東濃型大畑大洞（古）窯式。413はSX04出土資料。尾張型第6型式。

96D区　414・415はSD02出土資料で灰釉系陶器。414は尾張型第5型式。415は東濃型生田窯式。416はSD10出土資料。

96E区　417～419は灰釉系陶器。417はSK13出土資料。外面高台内に墨書有り。尾張型第6型式。418・419はSD03出土資料。

97Ab区　420は灰釉系陶器。SD09出土資料。尾張型第5型式。

97B区　421・423～431は灰釉系陶器。422は古瀬戸窯産陶器。421はSK68出土資料。尾張型第5型式。422はSD01下層出土資料。大窯Ⅱ期。423はSD13出土資料。尾張型第4型式。424・425はSD48出土資料。いずれも尾張型第6型式。426はSD78出土資料。尾張型第5型式。427～431はSX11出土資料。427は東濃型窯洞窯式あるいは白土原窯式。428は尾張型第4型式。429・430は尾張型第5型式。431は尾張型第6型式。

97Ca区　432は灰釉系陶器。SK01出土資料で東濃型脇之島窯式。

旧島畑出土　旧島畑出土の中近世土器

旧島畑は主に現況島畑の下層より検出され、現況水田または旧水田の下層からは、水田開発による削平のため、一部を除き、その痕跡を留める程度であった。従って、調査区内の現況島畑（島畑1～11及び島畑Tg）に内包されている旧島畑について、形成時期にかかわる最下層からの出土資料を記載する。なお、調査区をまたがる島畑もあるので、調査区別ではなく、現況島畑別に記載する。

島畑1　433～438は灰釉系陶器。433は東濃型白土原窯式。434は東濃型明和窯式。435～437は東濃型大畑大洞（古）窯式。438は東濃型脇之島窯式。

島畑3　439・440は灰釉系陶器。439は東濃型生田窯式。441は内耳鍋。外面はユビオサエの後に

ナデ調整を施し、内面に細いハケ調整がみられる。B類に含まれるものと思われる。16世紀～18世紀代。

島畑 4　442～445は灰釉系陶器。442は外面高台内に墨書有り。東濃型明和窯式。444は東濃型大洞東窯式。445は東濃型脇之島窯式。446は瀬戸窯産陶器端反皿。口縁部2類。17世紀代中頃か。447は美濃窯産陶器蓋で18世紀末～19世紀。448は19世紀前半頃のものか。

島畑 5　449～453は灰釉系陶器。449は東濃型明和窯式。450は東濃型大畑大洞窯式。451は東濃型大洞東窯式。452・453は東濃型脇之島窯式。

島畑 6　454～461は灰釉系陶器。454・455は尾張型第6型式。456は東濃型大畑大洞（新）窯式。457～459は東濃型大畑大洞窯式。460・461は東濃型大洞東窯式。

島畑 7　462～464は灰釉系陶器。462は東濃型白土原窯式。463は東濃型大洞東窯式。464は東濃型生田窯式。

島畑 9　465～470は灰釉系陶器。465は尾張型第5型式。466は尾張型第6型式。467は尾張型第7型式。468は東濃型白土原窯式。469は東濃型大畑大洞（新）窯式。470は東濃型生田窯式。

島畑10　471～473は灰釉系陶器。471は尾張型第5型式。472は外面高台内に墨書有り。尾張型第6型式。

島畑11　474～476は灰釉系陶器。474は尾張型第5型式。475は東濃型脇之島窯式。476は東濃型生田窯式。

島畑Tg　477～488は灰釉系陶器。477は尾張型第6型式。478～480は東濃型白土原窯式。481は東濃型明和窯式。483は東濃型生田窯式。484は東濃型大畑大洞（古）窯式。485は東濃型大畑大洞（新）窯式。487は東濃型大洞東窯式。488は東濃型脇之島窯式。489は緑釉小皿。口縁部2類。古瀬戸窯の後Ⅲ期。490・491は重圏皿。大窯Ⅰ期。灯明皿として使用されたと思われる。492～495は灰釉系陶器。492は東濃型白土原窯式。494は東濃型大畑大洞窯式。495は尾張型第4型式で内面見込みに線刻あり。

畦畔基部　496は96Ca区で検出された畦畔基部（旧島畑最下層と思われる）より出土。灰釉系陶器。東濃型脇之島窯式。

旧水田出土　旧水田出土の中近世土器（調査区別に記載）

96A区　500はST01、497・499はST02、498はST04出土資料。500は犬山窯のものか。497は美濃窯産陶器。498は灯盞で、内面の突帯が口縁部より高いか低いかは不明。美濃窯産陶器。497・498・500は19世紀代。

96Ba・Bb区　501は伊勢型鍋。13世紀中頃のもの。502は古瀬戸窯産陶器の壺。後Ⅲ期かⅣ期。504は瀬戸窯産陶器。大窯Ⅰ期。505は瀬戸窯産陶器。18世紀末～19世紀。

96Ca・Cb区　506は菊皿。17世紀後半のものか。

96D区　508は灰釉系陶器。東濃型脇之島窯式。509はST01出土資料の焙烙。外面に回転ナデ、内面に不整方向のナデを施す。Ⅰ－1類。19世紀後半～明治時代。510は瀬戸窯産陶器。511は瀬戸窯産陶器。

96E区　512～516は灰釉系陶器。512は東濃型窯洞窯式。513は尾張型第６型式。底部外面に墨書有り。514は東濃型明和窯式。517は卸皿。古瀬戸窯の後期。519・520は瀬戸窯産陶器。鎧茶椀。522は美濃窯産陶器。519～522は18世紀後半～19世紀初頭頃のものと思われる。

97B区　523は美濃窯産陶器。見込みに印花文あり。17世紀代。524は瀬戸窯産陶器の灯明皿。19世紀代。

その他　その他の出土遺物

538は96D区の旧水田出土資料。水滴。540は96A区ST06、541は96Bb区旧水田出土資料。539は96E区旧水田出土資料。戸車。540・541は絵具皿。540の底部外面に「花廼家製」。526～528は紅皿。526は96Bb区、527は96Cb区旧水田、528は96Ca区旧水田出土資料。18世紀後半代。

貿易陶磁　542～547は貿易陶磁。542～544は白磁の椀。542は97B区旧水田、543は島畑３下層の旧島畑、544は島畑１下層の旧島畑出土資料。542・543は口縁部が玉縁を呈する。釉は灰色をびた白色で施釉する。大宰府編年のⅣ類。544は高台が高く直立し、内面見込みに段をもつ。545～547は青磁の椀。545は島畑５下層の旧島畑、546は島畑11下層の旧島畑、547は96E区旧水田出土資料。545は口縁部が外反する龍泉窯系Ｄ類。546は体部外面に蓮弁をもつ。龍泉窯系Ｂ１類。547は同安窯系Ⅰ類。外面に細い櫛目がみられる。釉は飴色。年代は542～543は11世紀中葉から12世紀代。545～547は13世紀代。

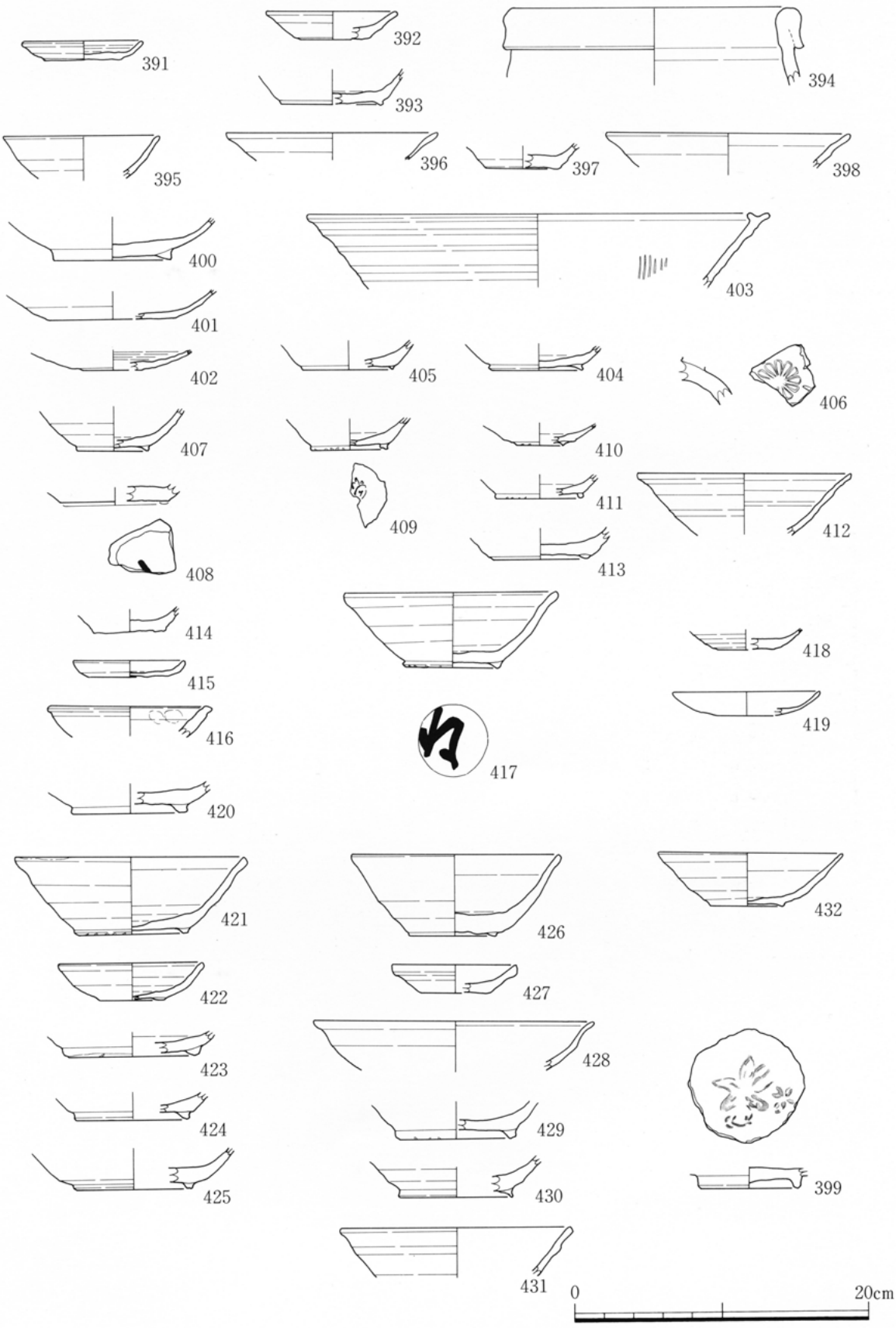
土師質小皿　529～537は土師質小皿である。529は島畑７下層の旧島畑、530は96Cb区旧水田、531は島畑８下層の旧島畑、532～537は島畑Tg下層の旧島畑出土資料で、532～535は隣接しあうグリッドから出土している。529はロクロ成型皿。口縁部は直線的に伸びる。口縁部２類。531～537は非ロクロ成型によると思われる。532～537は口縁部をヨコナデして体部をつくっている。口縁部１類。年代は概ね15世紀後半～16世紀代と思われる。

小　結　以上、各遺構、旧島畑、旧水田ごとに中近世の出土遺物を概観してみると、灰釉系陶器において、南部系の尾張型が第４形式から第７形式までみられるのに対し、北部系の東濃型のものが窯洞様式から生田窯式まで出土している。このことは、各窯の生産の消長と流通に起因するものと考えられる。18世紀後半～19世紀代の茶碗類、紅皿、また、人形・玩具類（第３章第２節２に記載）などにより当時の農村生活の一端をうかがい知ることが出来よう。　（仲井光代）

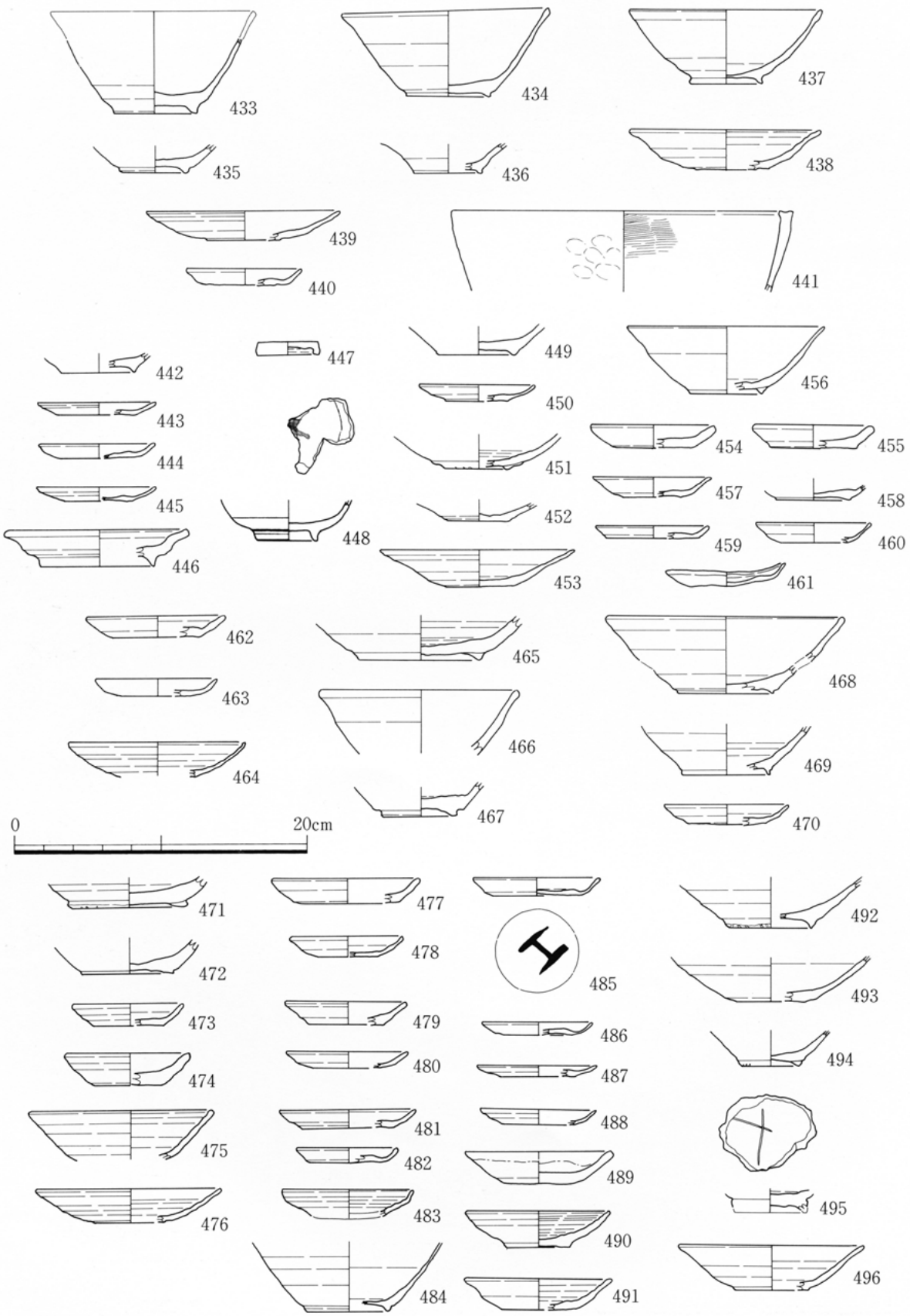
参考文献
藤澤良祐 1994 「山茶碗研究の現状と課題」『研究紀要』 3　三重県埋蔵文化財センター
藤澤良祐 1991 「瀬戸古窯址群Ⅱ－古瀬戸後期様式の編年－」『研究紀要』 X　瀬戸市歴史民俗資料館
鈴木正貴 1996 「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」『鍋と甕そのデザイン』　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
北村和宏 1996 「尾張の「伊勢型鍋」」『鍋と甕そのデザイン』　東海考古学フォーラム尾張大会実行委員会
赤羽一郎・中野晴久 1994 「生産地における編年」『「中世常滑焼」をおって』資料集　日本福祉大学知多半島総合研究所
金子健一 1996 「尾張出土のホウロクについて」『研究紀要』第４輯　㈶瀬戸市埋蔵文化財センター
横田堅次郎・森田勉 1978 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』
上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』２号
国立歴史民俗博物館 1994 『日本出土の貿易陶磁　東日本編２』
鈴木正貴編 1994 『清洲城下町遺跡Ⅳ』　愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第53集
永井宏幸編 1996 『大毛沖遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第66集
武部真木編 1997 『大毛池田遺跡』　愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第72集

中世・近世の陶磁器類の時期同定、産地同定については、㈶瀬戸市埋蔵文化財センターの藤澤良祐氏、金子健一氏、愛知県教育委員会文化財課の赤羽一郎氏にご教示を得た。

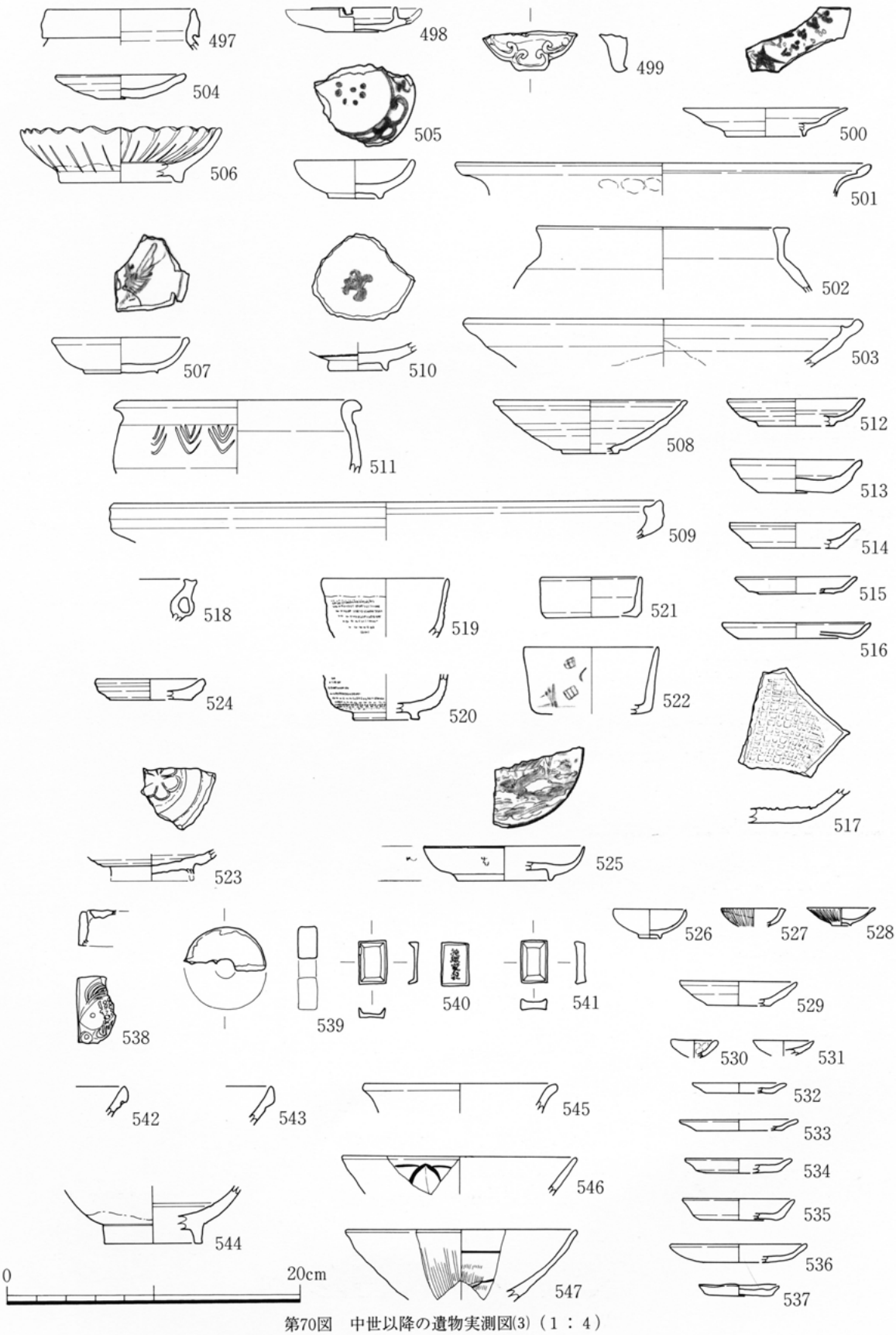
番　号	調査区	遺構・出土地	種類・器種	分　類	登録番号
542	97B	ⅣA19ｔ 旧水田	白磁　椀	太宰府編年Ⅳ類	E-542
543	97B	ⅣB９h 島畑３下層	白磁　椀	太宰府編年Ⅳ類	E-543
544	96A	ⅣB２h 島畑１下層	白磁　椀	－	E-544
545	96D	VA１j 島畑５下層	青磁　椀	龍泉窯系 D類	E-545
546	97B	ⅣB14e 島畑11下層	青磁　椀	龍泉窯系B１類	E-546
547	96E	ⅣB11i 旧水田	青磁　椀	同安窯系 Ⅰ類	E-547
	96A	ⅣB ２K 島畑２下層	青磁　椀	龍泉窯系B１類	
	96Ba	ⅣB ８c 島畑６下層	青磁　椀	龍泉窯系	
	96Bb	ⅣA15p 検Ⅰ	青磁　椀	龍泉窯系B１類	
	96Cb	SX03	青磁　椀	龍泉窯系B１類	
	96Cb	VA71 旧水田	青磁　椀	龍泉窯系 Ⅰ類	
	96Cb	VA81 島畑４下層	青磁　椀	龍泉窯系B１類	
	96Cb	VA12m 島畑４下層	青磁　椀	同安窯系 Ⅰ類	
	96E	ⅣB10n 島畑Tg下層	青磁　椀	龍泉窯系B１類	
	97B	SD01	青磁　椀	龍泉窯系B１類	
	97B	ⅣB11c 島畑６下層	青磁　椀	龍泉窯系B１類	
	97B	ⅣB17b 島畑９下層	青磁　椀	龍泉窯系B１類	



第68図　中世以降の遺物実測図(1)（1：4）



第69図　中世以降の遺物実測図(2)（１：４）



第70図　中世以降の遺物実測図(3)（1 ： 4）

第２節　その他の土製品類

ここでは、土錘、人形・玩具類、加工円盤類・陶丸、研磨痕土器類について取り扱う。なお、各項目で使用する一覧表及び各項目の分布図については、節末にまとめて記載する。

１．土　錘

土　錘　土錘はすべて管状土錘で49点出土。土錘の他に陶錘が２点出土している。

分　類　分類はその形態により分け、大毛沖遺跡の久保分類に一部準拠した。

分類１　A　孔径0.5cm以下で、重量が20g未満のもの（図548～567・571）
　　B　孔径0.5cm以上で、重量が20g以上のもの（図568～570）
分類２　A　中央部の幅が端部の２倍以上に膨らむもの（図548～559・568～570）
　　B　中央部の幅が端部の２倍未満のもの（図560～567・571）
分類３　A　長さが中央部の幅の２倍以上のもの（図548～556･558～568･570･571）
　　B　長さが中央部の幅の２倍未満のもの（図557・569）
分類４　A　端部を平坦に調整するもの（図560・566～568・571）
　　B　端部を平坦に調整しないもの（図550～553・556・557・559・570）

出土状況　土錘が一番多く出土した調査区は96Ca区の９点で、順に96Bb区の７点、96Ba区・96E区の各６点、96A区・97B区の各５点で、その他で13点出土している。

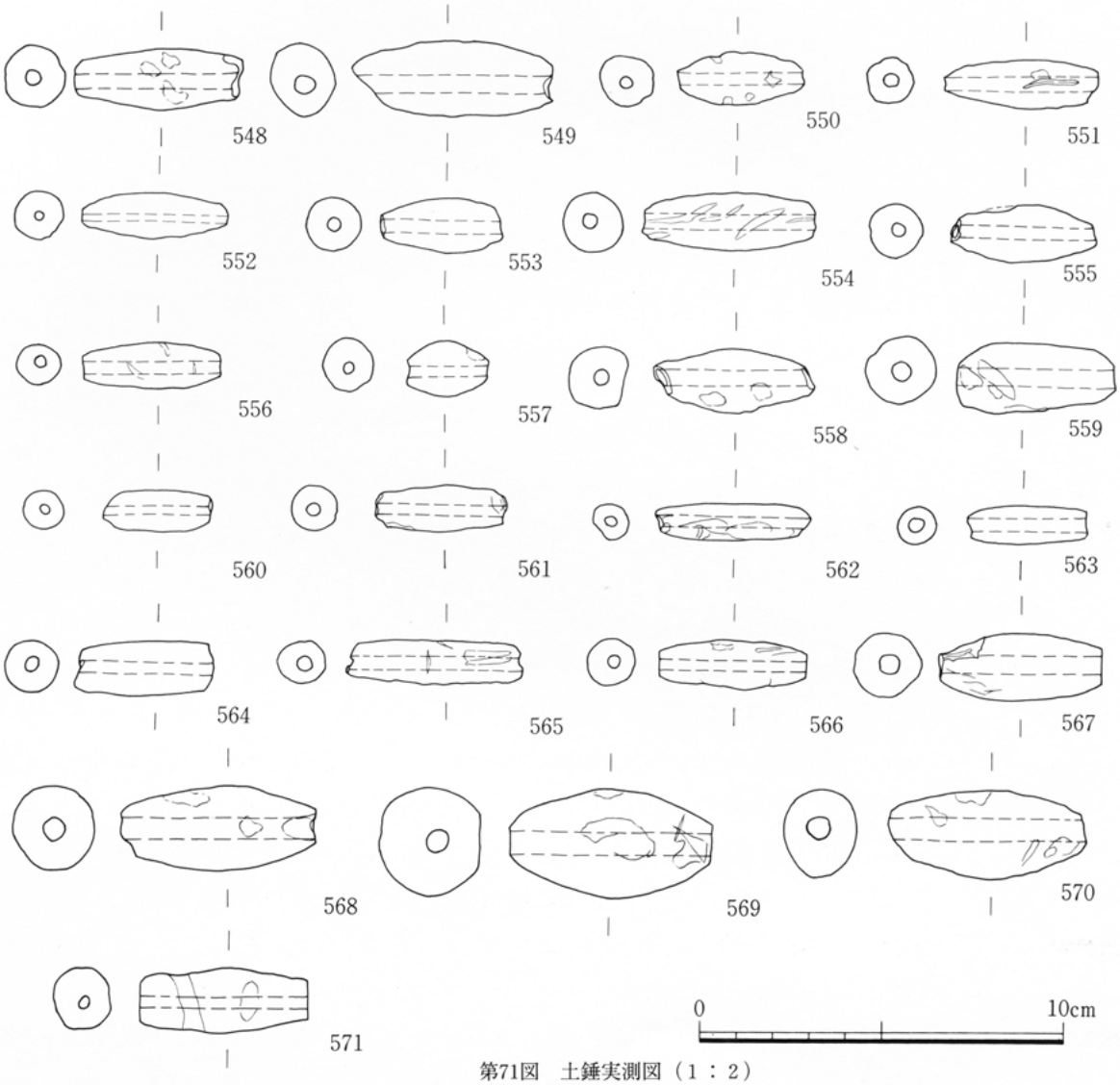
分類の傾向　分類４の調整・未調整が確認できるもの20点のうち、分類２Ａでは、分類４Ａが２点、分類４Ｂが11点、分類２Ｂでは、分類４Ａが 6点、分類４Ｂが１点であった。この結果、端部調整が不明瞭のものを除けば、分類２Ａ（中央部の幅が膨らむもの）は端部が未調整のものが多く、分類２Ｂ（端部と中央部の幅があまり変わらないもの）は端部が調整してあるものが多いことがわかった。

２．人形・玩具類

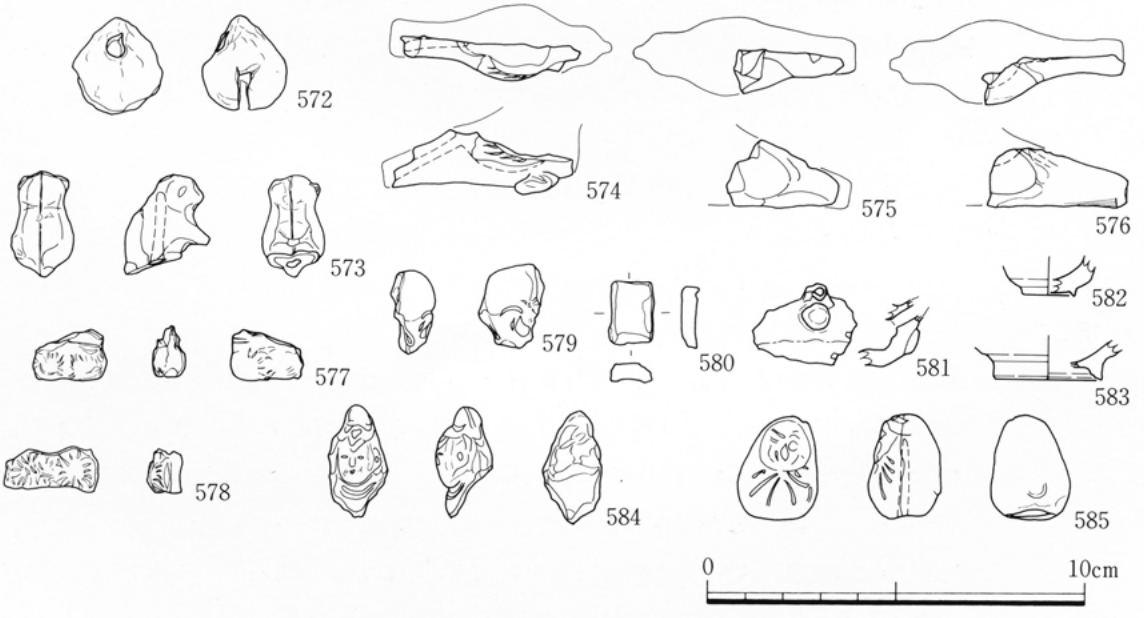
人形・玩具類　人形・玩具類は17点出土し、全て19世紀以降のものと考えられる。

572は土鈴。573は犬。574～576は鳩で、574・576には笛と思われる孔がある。577・578は大黒天の米俵部分。579は布袋の頭部。580は不明。581はミニチュア土瓶、582・583はミニチュア椀。584は天神の頭部。585は達磨。

その他、未実測のもの３点は人形底部である。出土状況をみると、96Ａ区で７点、その他で10点出土している。また、17点中、13点が近世以降の水田跡から出土している。



第71図　土錘実測図（1：2）



第72図　人形・玩具類実測図（1：2）

3．加工円盤類・陶丸

加工円盤類　陶器類の破片を打ち欠いて円形または、方形に調整したものなどを、加工円盤類としてここで取り扱う。今回の調査では、97点が出土した。

分　類　今回の調査で出土した加工円盤類を素材と使用部位を基準に次のように分類した。

- Aa　須恵器の甕を使用したもの（底部使用のものは未確認）
- Ab　須恵器の杯蓋を使用したもの
- Ｂ１　灰釉陶器の高台部を使用したもの
- Ｂ２　灰釉陶器のＢ１以外の部位を使用したもの
- Ca１　灰釉系陶器の高台部及び底部を使用したもの
- Ca２　灰釉系陶器のＣ１以外の部位を使用したもの
- Cb　灰釉系陶器以外の中世施釉陶器を使用したもの（底部使用のものは未確認）
- Da　近世施釉陶器のうち、擂鉢を使用したもの（底部使用のものは未確認）
- Db１　近世施釉陶器のうち、天目茶碗の高台部を使用したもの
- Db２　近世施釉陶器のうち、天目茶碗のDb１以外の部位を使用したもの
- Dc　近世施釉陶器のうち、徳利を使用したもの（底部使用のものは未確認）
- Dx１　近世施釉陶器のうち、器種不明のもので、高台部及び底部を使用したもの
- Dx２　近世施釉陶器のうち、器種不明のもので、Dx１以外の部位を使用したもの
- E　弥生土器・土師器を使用したもの（底部使用のものは未確認）
- F　平瓦を使用したもの

分類の傾向　その構成数は、Aaが９点、Abが１点。Ｂ１が１点、Ｂ２が３点。Ca１が12点、Ca２が２点、Cbが２点。Daが18点、Db１が４点、Db２が２点、Dcが１点、Dx１が４点、Dx２が31点、Eが３点、Fが４点であった。

加工方法　破面が研磨されているものは８点出土し、Aaで１点、Ca１で１点、Daで３点、Dx２で３点あった。方形状のものは４点出土し、Aaで２点（うち、破面が研磨されているもの１点）、Ca１で１点、Daで１点あった。

出土状況　加工円盤類の出土状況を調査区別に見ると、96A区で26点、96Ba区で４点、96Bb区で５点、96Ca区で８点、96Cb区で６点、96D区で９点、96E区で13点、97Aa区で１点、97Ab区で１点、97B区で13点、97Ca区で３点、97Cb区で２点、その他、96Tdで１点、96Teで１点、96Tgで３点、96Tiで１点出土している。

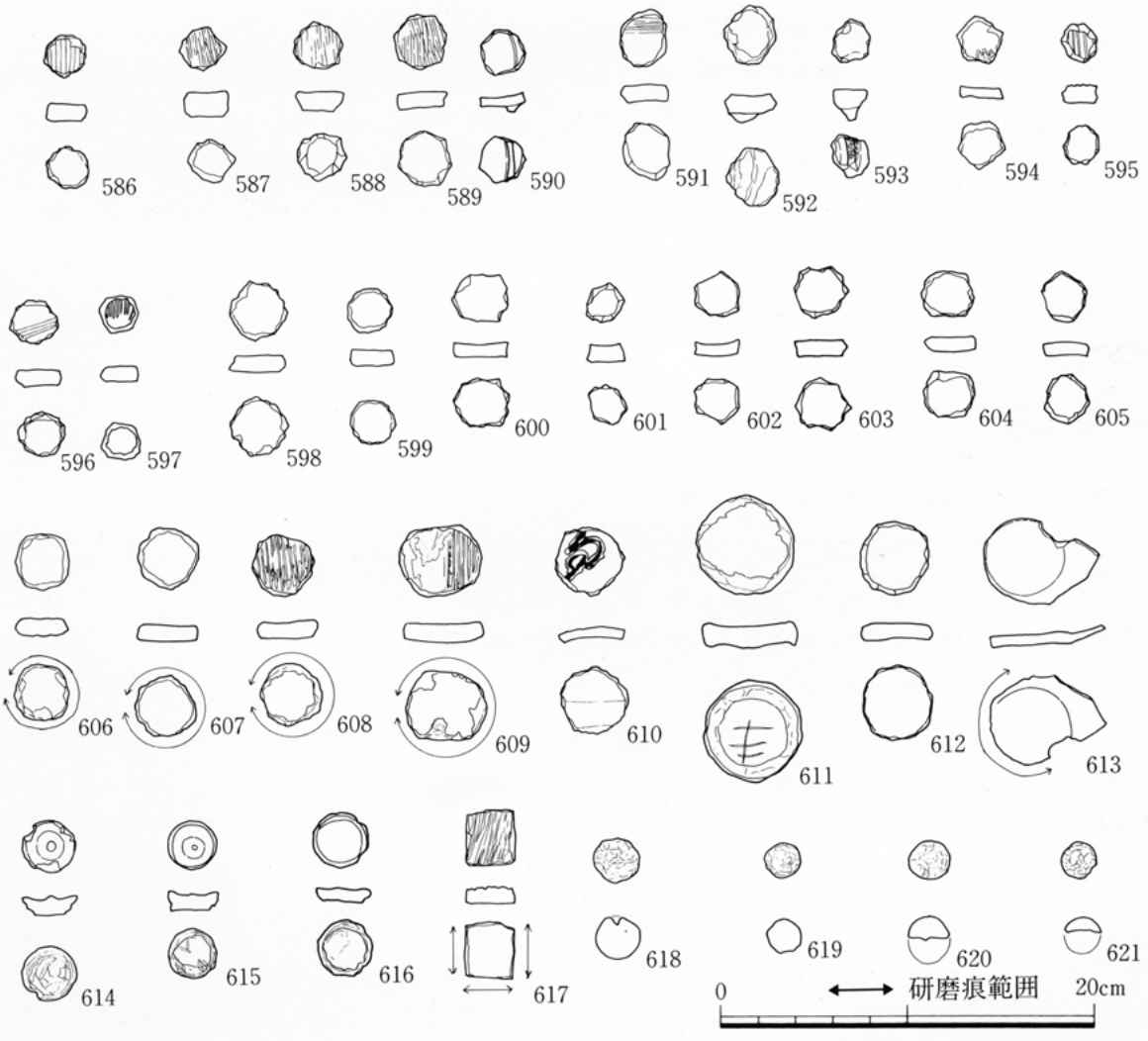
その他　今回の出土遺物のうち、須恵器の杯蓋のつまみ部分が中世以降の層位から36点出土した。つまみ部分は剝離しやすく、自然剝離の可能性が高いが、基部を打ち欠いたり、研磨したものも見られる。一覧表には記載しなかったが、加工円盤の一種として利用された可能性も考えられるので、各調査区ごとの出土点数を記しておく。

96A区で９点、96Ba区で４点、96Bb区で６点、96Ca区で６点、96Cb区で１点、96E区で２点、97Ab区で２点、97B区で２点、97Ca区で１点、97Cb区で３点出土した。

実測遺物　586～589はAa、590はＢ１、591はＢ２、592・593はCa１、594～597はDa、598～605はDx２である。606～609は破面が研磨されているもので、606はCa１、607・608はDa、609はDx２である。610はDcで文字部分を利用している。611はDb１で、底部外面にヘラによる線刻があるものを利用し、高台部分に打ち欠き痕が確認できる。612はＥの弥生土器であり、96TiのSB03付近で出土している。613はCa１の小皿で、一部にえぐりを入れるような打ち欠き痕が見られ、また研磨された部分も見られる。加工円盤の未製品か、別の製品か不明である。614～616は須恵器の杯蓋のつまみ部分で、614・615は基部に打ち欠いた跡が見られ、616は基部が研磨されている。617はAaで、方形で、かつ破面が研磨されている。

陶　丸　陶丸は４点出土した。618は97Ｂ区、619～621は96Ｅ区より出土。

小　結　加工円盤類97点中、60点が近世施釉陶器を素材にしている。近世の遺構は、水田と島畑に関連するものであり、本遺跡での近世以降に製作された加工円盤類の性格的意味付けは、そこに求められるのであろうか。



第73図　加工円盤類・陶丸実測図（１：４）

4．研磨痕土器類

今回出土した土器・陶器類の破片の中で、加工円盤類以外に研磨痕のある土器類を研磨痕土器類と総称してここで取り扱う。今回の調査では27点が出土し、素材を基準にして、次のように分類した。

A　須恵器の甕の体部片に研磨痕が認められるもの
C１　灰釉系陶器の高台部及び底部片に研磨痕が認められるもの
C２　灰釉系陶器のC１以外の部位の破片に研磨痕が認められるもの
Da１　近世施釉陶器のうち、擂鉢の底部片に研磨痕が認められるもの
Da２　近世施釉陶器のうち、擂鉢のDa１以外の部位の破片に研磨痕が認められるもの
Dd　近世施釉陶器のうち、甕の体部片に研磨痕が認められるもの
De　近世施釉陶器のうち、絵付皿の体部片に研磨痕が認められるもの
Dx　近世施釉陶器のうち、器種不明の体部片に研磨痕が認められるもの
E　土師器の体部片に研磨痕が認められるもの
F　平瓦の破片に研磨痕が認められるもの

その構成数は、Aが２点。C１が５点、C２が２点。Da１が２点、Da２が８点、Ddが１点、Deが１点、Dxが２点。Eが１点。Fが３点であった。研磨痕が破面以外に認められたり、同一面でも何回か角度を変えた跡が認められるものがあった。実測した遺物について、研磨痕が認められる部分の面数と回数を中心に記述していく。

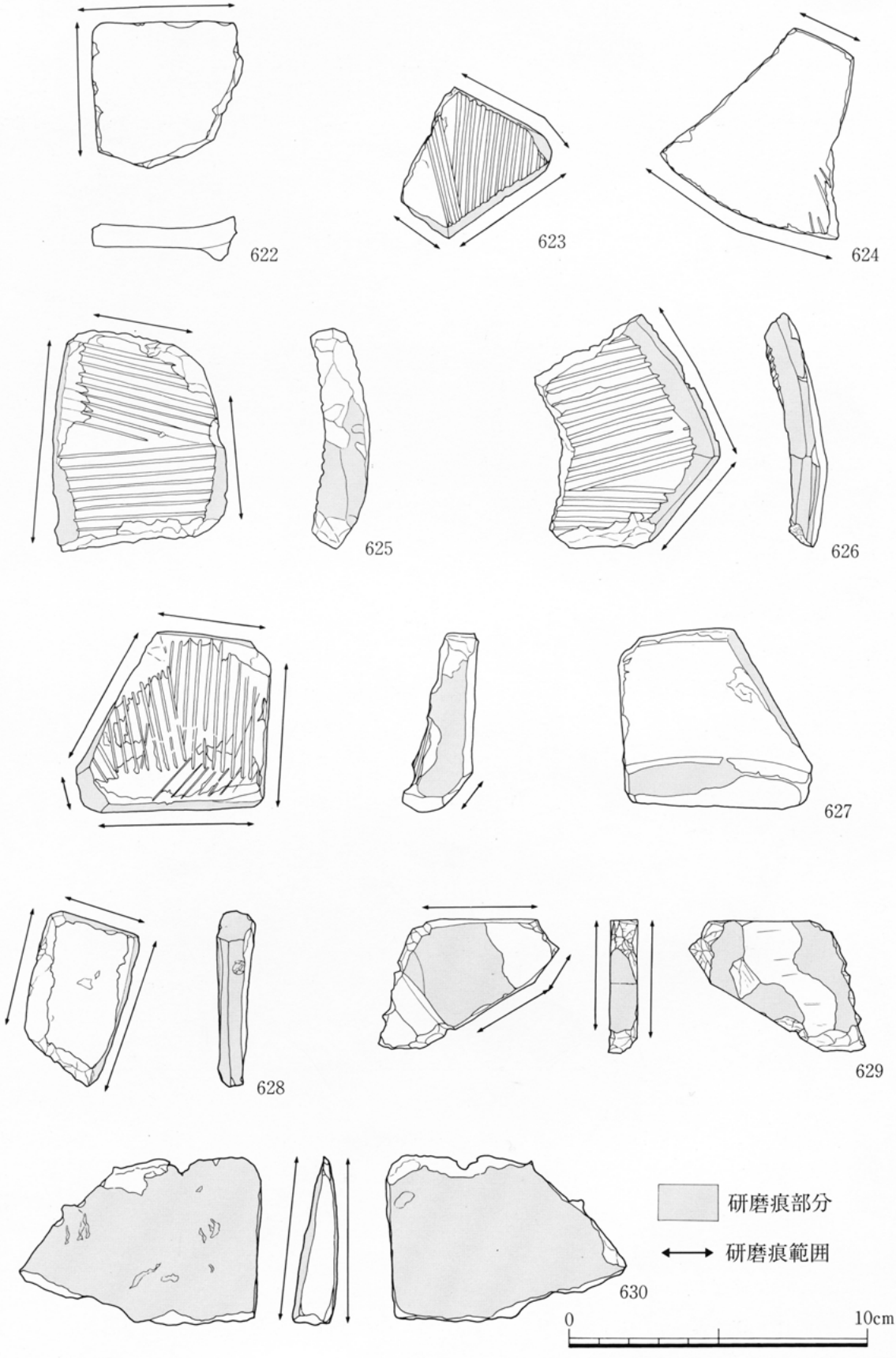
622はC１であり、底部をほぼ４分の１に分割した破面の２面に認められ、牛ノ松遺跡[1)]に類例がある。623～626はDa２である。研磨痕は破面部分に、623が３面、624が２面に認められる。625～629は同一面に何回か角度を変えた跡が認められる。625は３面に計４回、626は２面に計６回、627はDa１で５面に計６回、628はDdで３面に計４回、629はEで破面部分に２面、計３回認められる他、内・外面部分にも面的にそれぞれ認められる。630はFで、破面部分には認められず、表・裏面部分に２面認められる。

研磨痕土器類のうち、特にD・E・Fについては、以下の点で共通した特性がある。

①　破面部分に、ある程度の厚みがある。
②　磁器などと異なり、ある程度の吸水性がある。（破面など施釉されていない部分）
③　胎土が均質で、磁器ほど緻密でなく、硬くない。

これらの点と、何回か角度を変えた研磨痕跡が認められることなどから、研磨痕土器類の中で、特に擂鉢などは、砥石のような研磨具として転用された可能性が考えられる。破面部分の質感が砥石に似ているし、土器片なので砥石より入手しやすい。研磨痕には、製品の調整などによる意図的に磨かれた研磨痕と、研磨具として別のものを磨いた結果、生じた使用痕としての研磨痕の両者が考えられる。A・Cについては不明であるが、D・E・Fについては、近世の農道・溝付近で多く出土していることから、携帯用研磨具として、鎌・鋤・鍬など金属部分をもつ農具などの手入れに使用されたものと推察される。

[1)]宮腰健司編1995『牛ノ松遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第57集



第74図　研磨痕土器類実測図（1：2）

土錘

挿図	番号	調査区	遺構・出土地	分類1	分類2	分類3	分類4	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	残存状態	備　考	登録番号
71	548	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8c	A	A	A	／	(4.6)	1.7	0.4	11.5	両端少欠損		E-548
71	549	96Ba	検出Ⅰ ⅣB10a	A	A	A	／	(5.4)	2.0	0.5	18.6	両端少欠損		E-549
71	550	96Bb	検出Ⅰ ⅣA14q	A	A	A	B	3.5	1.5	0.3	6.7	完形		E-550
71	551	96Bb	検出Ⅰ ⅣA13p	A	A	A	B	(4.2)	1.4	0.4	(6.6)	両端少欠損		E-551
71	552	96Bb	検出Ⅰ ⅣA15o	A	A	A	B	4.0	1.3	0.2	6.6	完形		E-552
71	553	96Bb	検出Ⅰ ⅣA17m	A	A	A	B	4.0	1.5	0.3	7.2	片端少欠損		E-553
71	554	96E	東壁トレンチ	A	A	A	／	4.7	1.6	0.4	11.1	片端少欠損		E-554
71	555	96E	検出Ⅰ ⅣB11l	A	A	A	／	4.0	1.5	0.3	8.8	片端少欠損		E-555
71	556	96E	検出Ⅰ ⅣB13j	A	A	A	B	3.8	1.2	0.3	5.2	完形		E-556
71	557	97B	検出Ⅰ ⅣB10g	A	A	B	B	2.3	1.5	0.3	4.4	片端少欠損		E-557
71	558	97B	検出Ⅰ ⅣB15c	A	A	A	／	4.4	1.8	0.4	10.5	両端少欠損		E-558
71	559	96Td	島畑Tdトレンチ①	A	A	A	B	4.4	1.8	0.5	16.7	完形		E-559
71	560	96Ca	検出Ⅰ VA5m	A	B	A	A	3.0	1.2	0.2	4.5	片端少欠損		E-560
71	561	96D	検出Ⅰ ⅥA2m	A	B	A	B	3.6	1.3	0.3	5.3	片端少欠損		E-561
71	562	96D	検出Ⅰ ⅥA4l	A	B	A	／	(4.3)	1.0	0.3	(3.8)	1/3欠損		E-562
71	563	96D	検出Ⅰ ⅥA6h	A	B	A	／	3.3	1.0	0.4	3.6	片端少欠損	ひもずれ痕	E-563
71	564	97Ab	検出Ⅰ VA2s	A	B	A	／	(3.8)	1.5	0.4	7.1	両端少欠損		E-564
71	565	97B	SD12	A	B	A	／	(4.8)	1.2	0.4	5.4	両端少欠損		E-565
71	566	97Cb	検出Ⅰ ⅣA14m	A	B	A	A	4.1	1.3	0.3	7.0	完形		E-566
71	567	96Ti	島畑Tiトレンチ②	A	B	A	A	4.5	1.8	0.5	13.1	片端少欠損		E-567
71	568	96Ba	検出Ⅰ ⅣB9c	B	A	A	A	(5.4)	2.3	0.6	25.8	片端少欠損		E-568
71	569	96Cb	検出Ⅰ VA8l	B	A	B	／	5.6	3.0	0.6	44.0	完形		E-569
71	570	97Ca	SK15	B	A	A	B	5.4	2.4	0.6	23.2	片端少欠損		E-570
71	571	96Ca	検出Ⅰ VA5m	A	B	A	A	4.6	1.8	0.3	16.5	片端少欠損	陶質	E-571
		96A	検出Ⅰ ⅢB20p	A	A	A	／	(3.9)	1.4	0.4	(6.1)	1/3欠損		
		96A	検出Ⅰ ⅣB1o	A	B	A	／	(3.0)	1.1	0.3	(3.1)	1/3欠損		
		96A	検出Ⅰ ⅣB2k	A	A	A	／	(3.0)	1.2	0.3	(3.1)	1/3欠損		
		96A	検出Ⅰ ⅣB4h	A	B	A	／	(4.4)	2.1	0.9	(13.1)	1/3欠損		
		96A	検出Ⅰ ⅣB4i	A	／	A	／	(3.4)	(2.0)	(0.5)	(7.0)	破片		
		96Ba	SD21	A	／	／	／	(1.7)	1.5	0.8	(1.4)	破片		
		96Ba	検出Ⅰ ⅣB8b	A	A	A	B	(2.5)	1.6	0.4	(3.8)	破片		
		96Ba	検出Ⅰ ⅣB9b	A	／	／	／	(2.1)	2.0	(0.5)	(4.6)	破片		
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA12r	／	／	／	／	(1.8)	(1.3)	(0.5)	(1.8)	破片		
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA16m	A	A	(A)	／	(2.6)	1.9	0.6	(3.0)	破片		
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA20m	A	／	A	／	(2.6)	(1.1)	(0.4)	(1.8)	破片		
		96Bc	検出Ⅰ ⅣB10a	A	B	A	A	(2.9)	(1.7)	0.3	(7.0)	1/3欠損		
		96Bc	検出Ⅰ ⅣB11a	B	B	A	／	(4.5)	2.4	0.7	(22.0)	1/3欠損		
		96Ca	SX01	A	(A)	A	／	(2.0)	1.5	0.3	(2.2)	1/2欠損		
		96Ca	検出Ⅰ VA1m	A	A	A	B	(3.3)	1.4	0.3	(5.6)	1/2欠損		
		96Ca	検出Ⅰ VA2l	A	A	A	B	(3.8)	2.1	0.6	(14.0)	1/4欠損		
		96Ca	検出Ⅰ VA3l	A		A	／	(3.6)	1.8	0.7	(5.3)	破片		
		96Ca	検出Ⅰ VA4l	A	A	A	／	(2.5)	1.1	0.1	(2.4)	1/2欠損		
		96Ca	検出Ⅰ ⅣA19m	A	A	A	／	(3.9)	1.9	0.5	(10.3)	1/3欠損		
		96Ca	南壁トレンチ	A	B	A	A	(1.6)	1.0	0.2	(1.8)	2/3欠損		
		96Ca	島畑8トレンチ	A	B	A	／	(3.8)	(2.1)	(0.7)	(8.5)	破片		
		96Cb	検出Ⅰ VA7m	A	A	B	A	(4.0)	2.5	0.4	(7.6)	1/4欠損	陶質	
		96E	検出Ⅰ ⅣB12j	A	A	A	／	(3.1)	1.4	0.4	(4.6)	1/3欠損		
		96E	検出Ⅰ ⅣB9h	A	A	A	／	(2.3)	1.0	0.3	(1.3)	破片		
		96E	検出Ⅰ ⅣB20h	A	A	A	／	(4.7)	2.1	0.6	(12.9)	破片		
		97B	検出Ⅰ ⅣB12d	A	A	／	／	(3.2)	(2.3)	(0.4)	(5.3)	破片		
		97B	検出Ⅰ ⅣB15d	A	A	A	／	(3.1)	1.4	0.4	(4.6)	1/2欠損		

第9表　土錘一覧表

人形・玩具類

挿図	番号	調査区	遺構・出土地	材　質	種　別	形　状	高(cm)	幅(cm)	奥行(cm)	備　考	登録番号
72	572	96A	ST01	土師質土器	鈴		2.6	2.4	2.2		E-572
72	573	96Ca	旧水田 VA1n	土師質土器	人形	犬	2.8	1.7	2.2	底孔径0.3cm、奥行1.9cm	E-573
72	574	96A	ST01	土師質土器	人形		1.4	1.1	4.8	底部	E-574
72	575	96A	ST01	土師質土器	人形	鳩	1.9	1.9	2.9	尾部	E-575
72	576	96A	ST01	土師質土器	人形	鳩	1.9	1.2	3.6	尾部	E-576
72	577	96E	旧水田 ⅣB13i	軟質陶器	人形	大黒天	1.4	1.9	0.9	米俵部	E-577
72	578	96E	旧水田 ⅣB11l	軟質陶器	人形	大黒天	1.2	2.5	0.9	米俵部	E-578
72	579	96Cb	旧水田 VA8m	土師質土器	人形	布袋	2.1	1.7	1.2	頭部	E-579
72	580	96A	検出Ⅰ ⅣB1m	土師質土器	不明		0.4	1.1	1.6		E-580
72	581	96Ca	検出Ⅰ VA3m	陶器	ミニチュア	土瓶	2.1	2.8	1.4	注口部、施釉	E-581
72	582	97B	北壁トレンチ	軟質陶器	ミニチュア	碗	1.0	2.5	－	底部、施釉	E-582
72	583	96D	旧水田 ⅥA3m	陶器	ミニチュア	碗	1.0	3.9	－	底部、施釉	E-583
72	584	96E	東壁トレンチ	土師質土器	人形	天神	2.9	1.5	1.5	頭部、施釉	E-584
72	585	97B	旧水田 ⅣB8g	磁器	人形	達磨	2.8	2.1	1.9	底孔径0.4cm、奥行2.1cm	E-585
		96A	ST01	土師質土器	人形	人物	1.7	1.5	0.7	着物裾部	
		96A	ST06	土師質土器	人形	不明	1.9	1.7	1.0	底部	
		96Cb	旧水田 VA12n	土師質土器	人形	不明	1.3	3.1	1.2	底部	

第10表　人形・玩具類一覧表

加工円盤類・陶丸

挿図	番号	調査区	遺構・出土地	分類	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	登録番号
73	586	96Ba	SD34	Aa	2.2	2.1	1.0	6.0		E-586
73	587	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8c	Aa	2.5	2.3	1.3	8.4		E-587
73	588	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8e	Aa	2.6	2.3	1.1	7.5		E-588
73	589	96Ca	SX01	Aa	2.9	2.3	0.8	8.3		E-589
73	590	96A	検出Ⅰ ⅣB3r	B1	2.5	2.2	0.9	4.8		E-590
73	591	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8b	B2	2.8	2.6	0.9	8.5		E-591
73	592	96Ca	検出Ⅰ ⅤA4l	Ca1	3.1	2.2	1.5	11.7		E-592
73	593	97Cb	検出Ⅰ ⅣA11n	Ca1	2.2	2.0	1.7	6.6		E-593
73	594	96A	ST04	Da	2.4	2.3	0.7	4.6		E-594
73	595	96Ca	検出Ⅰ ⅤA2m	Da	2.1	1.7	0.9	3.9		E-595
73	596	96D	検出Ⅰ ⅥA2k	Da	2.6	2.3	0.9	6.1		E-596
73	597	97Ca	検出Ⅰ ⅣA6q	Da	2.1	1.9	0.8	3.8		E-597
73	598	96A	ST01	Dx2	3.0	2.5	0.9	11.4		E-598
73	599	96A	ST02	Dx2	2.4	2.3	0.8	6.3		E-599
73	600	96Bb	検出Ⅰ ⅣA12r	Dx2	3.0	2.3	0.6	6.8		E-600
73	601	96Ca	検出Ⅰ VA1n	Dx2	2.0	1.8	0.9	4.6		E-601
73	602	96Cb	検出Ⅰ VA7m	Dx2	2.4	2.2	0.7	4.7		E-602
73	603	96Cb	検出Ⅰ VA13l	Dx2	2.9	2.4	0.9	8.0		E-603
73	604	96E	検出Ⅰ ⅣB11n	Dx2	2.8	2.5	0.8	7.4		E-604
73	605	97B	検出Ⅰ ⅣB12e	Dx2	2.6	2.0	0.7	5.5		E-605
73	606	96A	検出Ⅰ ⅣB2m	Ca1	3.0	2.9	0.9	9.3	研磨痕	E-606
73	607	96D	検出Ⅰ ⅥA4l	Da	3.3	3.3	0.9	12.7	研磨痕	E-607
73	608	96E	東壁トレンチ ⅣB14j	Dx2	4.3	3.7	1.0	21.1	研磨痕	E-608
73	609	97B	検出Ⅰ ⅣB10g	Da	3.2	3.1	0.9	11.9	研磨痕	E-609
73	610	96A	ST01	Dc	3.5	3.3	0.7	10.5		E-610
73	611	97Ab	検出Ⅰ中央ベルト	Db1	5.2	5.1	1.3	45.2	線刻	E-611
73	612	96Ti	検出Ⅰ VA13o	E	3.9	3.6	0.9	14.0		E-612
73	613	96Bb	検出Ⅰ ⅣA14p	Ca1	6.1	4.6	0.6	19.8		E-613
73	614	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8e	Ab	2.9	2.8	1.0	6.9	須恵器の杯蓋のつまみ部分	E-614
73	615	97Ab	検出Ⅰ ⅣA20r	Ab	2.7	2.5	1.0	6.9	須恵器の杯蓋のつまみ部分	E-615
73	616	96Bb	検出Ⅰ ⅣA13q	Ab	2.9	2.8	0.6	7.2	須恵器の杯蓋のつまみ部分	E-616
73	617	96A	検出Ⅰ ⅣB1q	Aa	3.0	2.6	0.8	13.5	方形	E-617
73	618	97B	検出Ⅰ ⅣA17t	陶丸	2.4	2.2		13.2	陶丸	E-618
73	619	96E	検出Ⅰ ⅣB13j	陶丸	1.9	1.8		5.6	陶丸	E-619
73	620	96E	検出Ⅰ ⅣB11n	陶丸	2.2	2.0		4.9	陶丸	E-620
73	621	96E	検出Ⅰ ⅣB9o	陶丸	1.9	1.9		3.0	陶丸	E-621
		96A	ST01	Da	3.0	2.8	1.0	11.2		
		96A	ST01	E	2.4	2.1	1.1	7.4		
		96A	ST01	F	2.9	2.4	1.6	12.1		
		96A	ST02	Da	4.5	2.3	0.9	11.3	研磨痕	
		96A	ST02	Dx2	2.5	1.9	0.7	4.5		
		96A	ST04	Dx2	4.3	3.9	0.9	19.9		
		96A	ST05	F	2.3	2.2	1.6	11.5		
		96A	ST06	Dx2	2.2	2.0	0.9	4.6	研磨痕	
		96A	ST10	Db1	4.6	4.3	1.6	35.7		
		96A	ST04	Dx2	2.4	1.9	0.7	4.4		
		96A	検出Ⅰ ⅣB1q	Aa	3.8	3.8	0.8	22.2	方形	
		96A	ST05	Da	2.5	2.1	0.9	7.8	方形	
		96A	ST05	E	2.5	2.2	0.9	5.5		
		96A	ST01	Dx2	3.2	3.0	0.8	9.8		
		96A	検出Ⅰ	F	4.6	4.2	2.1	46.1		
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA14q	Ab	2.9	2.3	0.7	5.7		
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA15o	Dx1	4.4	4.2	1.4	31.2		
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA19o	Dx1	5.5	5.1	1.0	26.6		
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA20n	Ca1	2.6	2.5	0.7	6.9	方形	
		96Ca	検出Ⅰ VA1l	Dx2	2.6	2.1	0.8	5.2		
		96Ca	検出Ⅰ VA1l	Dx2	3.1	2.1	0.9	9.0		
		96Ca	検出Ⅰ VA1l	Dx2	2.0	1.5	1.0	4.1		
		96Ca	検出Ⅰ VA3l	Dx2	2.7		1.0	5.7		
		96Cb	検出Ⅰ VA9m	Da	2.2	2.0	1.4	8.5		
		96Cb	検出Ⅰ VA10m	Db1	3.2	2.9	1.7	20.4		
		96Cb	検出Ⅰ VA12m	Db2	2.6	1.9	0.7	5.2		
		96Cb	検出Ⅰ VA13l	F	2.2	1.8	1.3	6.3		
		96Cb	検出Ⅰ VA13l	Dx2	1.8	1.6	0.7	2.4		
		96Cb	検出Ⅰ VA15l	Ca1	2.5	2.3	1.0	7.4		
		96D	検出Ⅰ ⅥA1l	Da	2.4	2.0	1.0	7.1		
		96D	検出Ⅰ ⅥA2k	Da	2.5	2.0	1.5	8.5		
		96D	検出Ⅰ ⅥA3m	Aa	2.1	1.8	1.2	5.8		
		96D	検出Ⅰ ⅥA3m	B2	3.6	2.6	1.0	13.4		
		96D	検出Ⅰ ⅥA4k	Ca1	2.8	2.2	1.5	11.2		
		96D	検出Ⅰ ⅥA4m	Dx2	2.5	1.9	0.7	3.8		
		96D	検出Ⅰ	Dx2	3.1	2.9	1.0	13.9		
		96E	検出Ⅰ ⅣB10n	Dx2	2.7	1.9	0.7	4.8		
		96E	検出Ⅰ ⅣB10o	Ca2	2.5	2.4	0.8	4.7		
		96E	検出Ⅰ ⅣB11n	Da	2.0	1.9	1.0	3.9		

第11表 加工円盤類・陶丸一覧表(1)

加工円盤類・陶丸

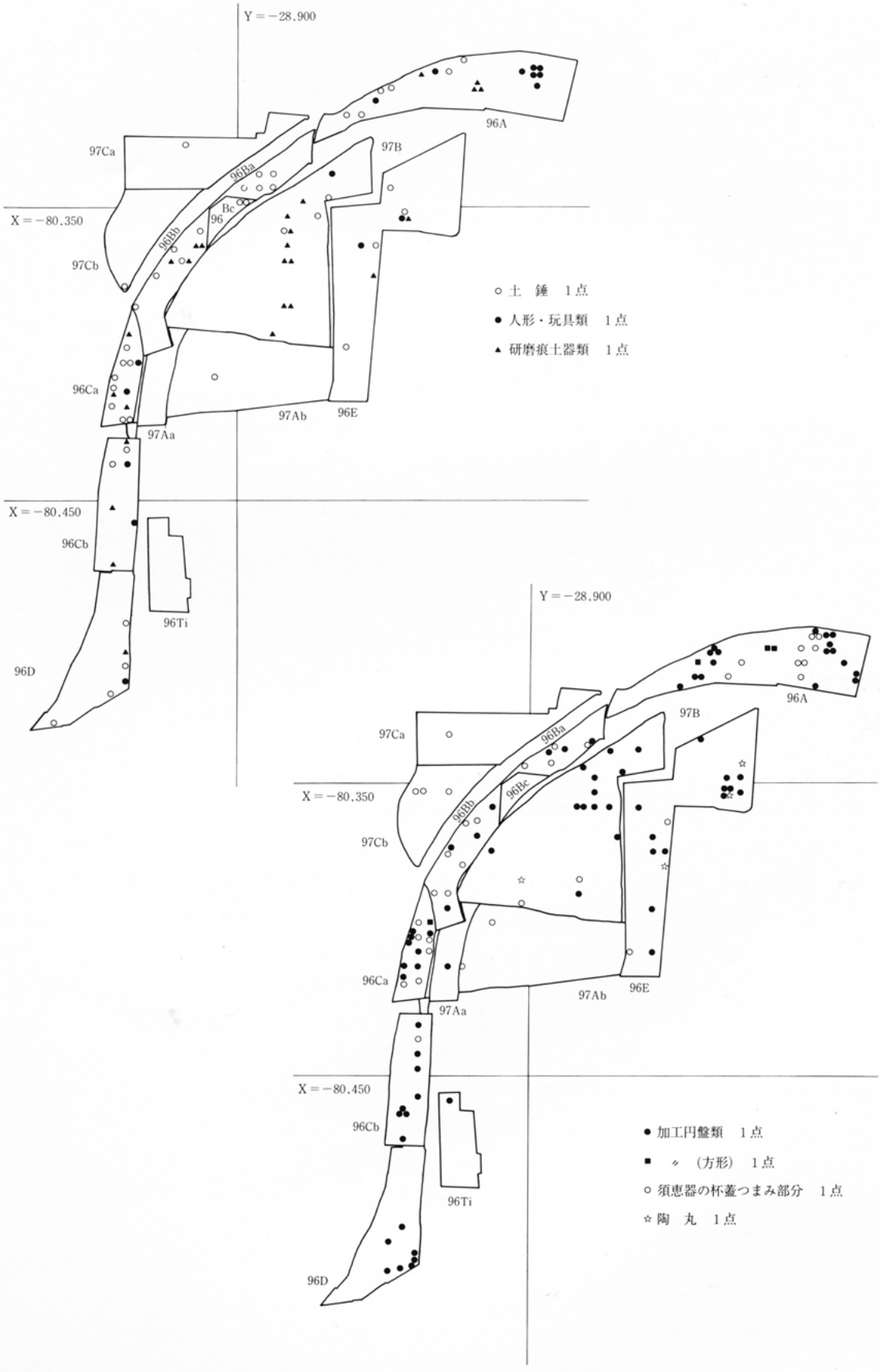
挿図	番号	調査区	遺構・出土地	分類	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	登録番号
		96E	検出Ⅰ ⅣB11o	Da	3.5	3.0	1.2	14.9		
		96E	検出Ⅰ ⅣB12h	Da	3.1	2.2	0.8	7.0		
		96E	検出Ⅰ ⅣB14i	Ca1	2.9	2.4	1.1	7.4		
		96E	検出Ⅰ ⅣB15i	Da	2.6	2.3	0.8	7.5		
		96E	検出Ⅰ ⅣB15j	Da	2.6	1.9	0.9	5.3		
		96E	検出Ⅰ ⅣB19i	Dx2	2.2	1.8	0.9	5.3		
		96E	検出Ⅰ ⅤB2i	Ca1	4.8	4.4	1.1	19.2		
		96E	東壁トレンチ	Dx2	2.6	2.1	0.8	5.3		
		97Aa	検出Ⅰ ⅤA3o	B2	2.3	2.0	0.5	3.0		
		97B	SD01	Dx1	4.1	3.7	1.2	19.3		
		97B	SD01	Dx2	3.5	2.3	0.8	9.4		
		97B	SD01	Cb	4.1	3.0	1.0	14.0		
		97B	SD54	Aa	4.5	3.2	0.3	29.3		
		97B	検出Ⅰ ⅣA15r	Aa	4.5	3.7	1.0	15.6		
		97B	検出Ⅰ ⅣB8f	Dx2	2.8	2.4	0.7	7.3		
		97B	検出Ⅰ ⅣB8h	Ca1	5.4	4.3	0.9	24.8		
		97B	検出Ⅰ ⅣB9d,10d	Dx2	5.1	4.2	1.2	35.6		
		97B	検出Ⅰ ⅣB10e	Dx2	2.3	1.7	1.0	7.1		
		97B	検出Ⅰ ⅣB14g	Cb	3.3	2.8	0.7	8.1		
		97B	検出Ⅰ	Dx1	4.5	4.3	0.8	15.5		
		97B	検出Ⅰ	Ca1	5.0	3.5	1.1	26.2		
		97Ca	検出Ⅰ	Dx2	3.3	2.6	1.1	11.4		
		97Ca	南北トレンチ	Da	2.0	1.5	1.1	4.6		
		97Cb	検出Ⅰ	Ca1	2.2	1.8	1.4	5.6		
		96Td	島畑Tdトレンチ①	Ca2	2.4	2.1	0.6	3.4		
		96Te	島畑Teトレンチ①	Db2	3.1	2.5	0.7	8.2		
		96Tg	島畑Tgトレンチ②	Dx2	2.3	2.1	1.0	7.1	研磨痕	
		96Tg	島畑Tgトレンチ③	Db1	5.3	4.5	1.3	33.4		
		96Tg	島畑Tgトレンチ②	Dx2	6.5	5.7	1.3	56.1		

第12表 加工円盤類・陶丸一覧表(2)

研磨痕土器類

挿図	番号	調査区	遺構・出土地	分類	面数	回数	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(cm)	登録番号
74	622	96A	ST04	C1	2	2	4.9	4.9	0.7	33.9	E-622
74	623	96D	検出Ⅰ ⅥA1m	Da2	3	3	4.5	3.3	1.0	23.0	E-623
74	624	96Ca	検出Ⅰ ⅤA4m	Da2	2	2	6.5	3.8	0.9	32.9	E-624
74	625	97B	SD01	Da2	3	4	7.1	5.7	1.5	81.8	E-625
74	626	96A	検出Ⅰ ⅣB2q	Da2	2	6	7.7	5.3	1.2	57.5	E-626
74	627	97B	SD01	Da1	5	6	6.0	5.3	1.6	81.7	E-627
74	628	96A	検出Ⅰ ⅣB2q	Db	3	4	5.2	3.3	1.0	23.3	E-628
74	629	97B	SD01	E	2	3	6.7	3.6	0.9	26.8	E-629
74	630	96Bb	検出Ⅰ ⅣA13r	F	2	2	7.9	5.5	1.2	55.6	E-630
		96A	検出Ⅰ ⅣB2q	F	1	1	5.8	4.9	1.7	67.1	
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA13r	F	1	1	3.9	2.3	1.6	16.9	
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA14p	C1	2	2	6.1	4.7	0.6	19.8	
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA14q	Da2	1	1	3.9	2.3	0.9	8.0	
		96Bb	検出Ⅰ ⅣA17m	A	2	2	7.0	3.0	1.3	33.5	
		96Ca	検出Ⅰ ⅣA19m	A	2	2	7.3	4.9	1.3	67.5	
		96Ca	検出Ⅰ VA3l	Dx	1	1	4.1	3.9	1.2	20.3	
		96Cb	検出Ⅰ VA6m	C1	1	1	5.6	5.1	1.8	39.6	
		96Cb	検出Ⅰ VA11l	C2	2	2	5.9	3.0	1.1	16.7	
		96Cb	検出Ⅰ VA15l	Da1	2	2	7.3	4.3	1.8	37.8	
		96E	検出Ⅰ ⅣB11l	Da2	1	1	6.0	3.0	1.7	35.9	
		96E	検出Ⅰ ⅣB15j	De	1	1	5.6	3.4	0.9	23.6	
		97B	SD01	Da2	2	2	4.6	2.6	0.7	11.2	
		97B	SD01	Dx	1	1	7.6	4.1	1.2	34.6	
		97B	SD01	Da2	1	1	4.2	4.0	0.8	14.2	
		97B	SD01	C1	2	2	3.5	3.3	1.3	10.4	
		97B	SD01	C2	22		3.0	2.1	0.5	3.7	
		97B	SD53	C1	2	2	4.1	2.7	1.2	11.1	

第13表 研磨痕土器類一覧表(3)



第75図　その他の土製品類分布図（1：2000）

第３節　石製品類

１．縄文・弥生時代の石器・石製品

ここで報告するものは、縄文時代後期前葉から弥生時代前期までの時期を中心に帰属すると思われる、石器・石製品である。明確な遺構内からの出土が少なく、出土状況にてさらに詳細な時期決定が可能な場合は限られている。従って、特に記載のない場合は上記の時期内として報告することとする。

石　鏃

今回、石器の中では最も多く、未製品２点を含む45点である。剥離による調整のみの打製石鏃のみである。形態は、Ⅰ：無茎のもの、Ⅱ：有茎のものに大きく分けることができる。前者はまた、ＩＡ：基部に抉入のあるもの、ＩＢ：基部が直線的なものとに細分ができ、後者もさらにⅡＡ：基部に抉入のあるもの、ⅡＢ：基部が直線的なもの、ⅡＣ：基部が舌状に突出する凸基のものとに細分される。

石鏃の中でも、ＩＡ類は最も多く、34点である。平面形態より、さらに分類が可能である。ＩＡ１：基部の抉入が明瞭であり、平面形態が三角形状を呈し、側縁部を鋸歯状に細かく加工されているもの（第77図１～３）。長さは、ほぼ２cm内外と小さめのもののみである。第77図１・３はチャート製、同図２はサヌカイト製かと思われる。３は縄文時代晩期中葉以前のものである。ＩＡ２：基部の抉入が明瞭であり、平面形態が三角形状を呈するもの（第77図４～18）。小型で抉入が深く脚部が長いもの（同図５）をも含める。第77図５・17はチャート製、同図７・15・18がサヌカイト製かと思われ、それ以外は下呂石製である。10は弥生時代前期以前、17は弥生時代前期のものである。ＩＡ３：基部の抉入がＩＡ１・ＩＡ２に比べわずかであり、平面形態が三角形状を呈するもの（第77図19～25）。第77図22・24・25はサヌカイト製かと思われ、それ以外は下呂石製である。同図24は弥生時代前期以前のものである。ＩＡ４：基部の抉入がわずかであり、平面形態が五角形状を呈するもの（第78図26～32）。先端部分が細く尖っている形態もみられる（第78図27・28・30）。第78図26がチャート製であり、同図29・32がサヌカイト製かと思われ、それ以外は下呂石製である。同図26が縄文時代後期後葉から晩期中葉のもの、同図31・32が弥生時代前期のものである。ＩＡ５：基部の抉入が明瞭であり、平面形態が三角形状を呈し、ＩＡ１・ＩＡ２類に比べて大型のもの（第78図33・34）。サヌカイト製かと思われる。

ＩＢ類とするのは１点のみである（第78図35）。ⅡＡ３類と思われるものの茎部欠損品を再調整して再び使用したもの思われる。基部が斜行する形状を呈する。下呂石製。

ⅡＡ類とするのは、さらに４形態に細分される。ⅡＡ１：鏃身部分が五角形に近い三角形状を呈するもの（第78図38・41）。基部の抉入は片側のみであり、他の一方は直線状に近い。下呂石製。同図41は弥生時代前期から後期までのものである。ⅡＡ２：鏃身部分が明瞭な五角形状であり、基部の抉入部分も明瞭なもの（第78図39・40）。いわゆる「飛行機鏃」であると思われる。第78図39は下呂石製で、同図40はサヌカイト製かと思われる。ⅡＡ３：鏃身部分が明瞭な五角形を呈し、ⅡＡ１・ⅡＡ２類に比べて寸胴な形態のもの（第78図42）。基部側の横への張り出しが特徴的であり、基部の片側に抉入がみられる。下呂石製。ⅡＡ４：鏃身部分が明瞭な五角形状を呈し、前三者に比べて長胴なもの（第78

図43)。鏃身に厚みがみられる。サヌカイト製か。

ⅡB類とするのは、1点のみである。鏃身部分が三角形状を呈している。チャート製。

ⅡC類とするのも、1点のみである。細かい調整が施されており、鏃身部分は三角形状を呈する。下呂石製。

石鏃未製品　石鏃の未製品とみられるものも2点ほどみられる（第78図44・45)。数度の調整により両面を大まかに形成した後、二次調整の途中で終わっている。A類の未製品である可能性が高い。第78図44が下呂石製であり、同図45がサヌカイト製かと思われる。

石　錐　石錐は4点見つかっている。第79図46は、頭部と錐部との境が不明瞭な棒状の形態を呈している。全体的に調整が施されている。下呂石製。同図47は頭部と錐部との境が明瞭であり、錐部は細かい調整によって細長く作り出されている。チャート製。同図48は、片側に自然面を残したまま、全体を三角形状に形成されている。辺縁部に調整が施されている。下呂石製。同図49は、頭部のみである。細長い錐部が続くものと思われる。側面に一部自然面が残されたままである。下呂石製。

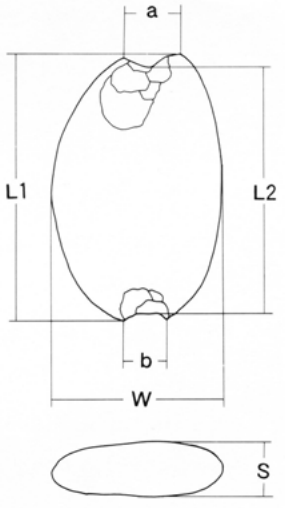
スクレイパー　スクレイパーは6点検出されている。第79図50は、両面を大まかに調整した後、一辺の縁辺部に細部調整が施されている。下呂石製。第79図51は、台形状に取られた剥片に、三辺に細部調整が施されている。片面には自然面を多く残す。ホルンフェルス製。第79図52は、全面に細部調整が施され、長方形状の形態を呈している。一辺には自然面が残されている。下呂石製。第79図53は、三角形状の横長剥片に、二辺にわたって細部調整が施されている。刃部は両面より細部調整が施されている。サヌカイト製かと思われ、弥生前期のものか。第79図54は、両面を数度の調整によって大まかな形を作り出し、一方にのみ細部調整が施されている。他辺には自然面を多く残す。チャート製。縄文時代晩期中葉以前。第79図55は全面を細部調整により、形成されている。周縁部にはさらに細かい細部調整が施されている。下呂石製。第79図56は、横長の一次剥片を使用している。刃部に調整剥離があり、刃角は鈍い。側辺に抉り状の剥離があるが、二次加工であるかは分からない。刃部はやや磨耗している。ホルンフェルス製。

粗製剥片石器　粗製剥片石器は4点検出されている。第80図57は、自然面と剥片面からなり、側辺上部から背部にかけて加工されている。刃部は、調整剥離が加えられない鋭い剥片の縁辺を、そのまま使用している。刃部縁辺には「ロー状光沢」が明瞭に観察される。濃飛流紋岩製。同図58は、自然面と剥離面からなる一次剥片の側辺に調整を施し、平面形は台形状を呈する。風化による石器表面の剥落が著しい。刃部縁辺には部分的に「ロー状光沢」が残存する。ホルンフェルス製。同図59は、円礫から打ち剥がした剥片の側辺に抉り状の剥離を施す。剥離面のバルブにより、刃部角はやや鈍くなっている。同図60は、円礫から打ち剥がされた一次剥片で、二次加工は施されていない。いわゆる「貝殻状剥片」である。表面はやや風化している。ホルンフェルス製。

打製石斧　打製石斧は1点のみである。第81図61は、刃部側の残存部だと思われる。両面とも剥離

面からなり、側面・刃部先端にさらに剝離が加えられている。曲線状の刃部を有し、側面観は平板状で側縁が直線状を呈する。ホルンフェルス製。弥生前期。

礫石錘　礫石錘は3点検出されている。第81図62は、丸みを持った礫の片側に打撃を加えて大きく材を整えた後、長軸端部に数度の剝離を加えている。片面は自然面をよく残し、丸みが強いために、厚みがある。濃飛流紋岩製。同図63は、自然面を残したままでも比較的扁平な片側はそのままに、もう片面を扁平にした材を使用し、長軸端部に数度の剝離を加えて成形している。角閃石安山岩。同図64は、片面を打撃により平坦にして大まかに整え、さらに両面を入念に研磨し材を整えた後、長軸端部に数度の剝離を加えている。擦り痕は両面のみならず、縁辺部にも見られる。大きさは前二者に比べてやや小振りであり、重さも前二者が60g強である一方で37.1gと軽量である。角閃石安山岩製。62・64は縄文時代後期後葉から晩期中葉、63は弥生時代前期以前。



第76図　礫石錘計測部位説明図
渡辺・小笠原(1982)より

敲　石　敲石は3点検出された。円礫を用いたものと、棒状の礫を用いたものの二形態に分けられる。第81図65は、円形の河原石の両面と一部側辺部に、敲打痕と思われる浅い凹みが残されている。河原石自体、片面は少し窪み、もう片面は丸みを帯びている。少し窪んだ面へは敲打痕が中心部に集中しているが、丸みを帯びた面へはそれが一方に片寄っている。黒雲母角閃石安山岩製。同図66・67は、棒状の河原石の一端に敲打痕と思われる浅い凹みが数カ所残されている。共に濃飛流紋岩製。

磨製石斧　磨製石斧は1点のみ検出されている。第82図68は、乳棒状を呈すると思われるもので頭部のみの残存である。全体によく研磨がかけられており、両面には丸みを、両側面には平面をそれぞれ丁寧につくり出している。蛇紋岩製。縄文時代晩期中葉以前のものではあるが、縄文時代後期のものか。

垂　飾　垂飾と思われるものが1点見られる。第82図69は、全面に研磨をかけ表面を滑らかにした後、両方向からの穿孔が加えられている。褐色を呈する。チャート製。縄文時代後期後葉から晩期中葉。

用途不明品　第82図70は、自然面と剝離面からなる石材に、さらに三方から数度の剝離を加え抉りをつけている。自然面には剝離痕がわずかにしか見られず、抉りを入れるにも剝離面側からの調整がほとんどである。全体的に扁平な形状を呈する。ホルンフェルス製。一端が欠損しているが、粗製剝片石器かもしれない。同図71は、扁平な材を研磨にて成形している。縁辺部の両端を刃部のように薄く作り出しているのが特徴である。ホルンフェルス製。同

図72は、両面を剝離による調整にて材を調整して、細部の調整も剝離により行っている。サヌカイト製か。石鏃などの未製品かもしれない。同図73・74は、それぞれＳＫ172・171から出土したものである。自然の河原石をそのまま用い、現段階では擦り痕などの観察も明瞭ではないが、磨石の可能性もある。73は黒雲母角閃石安山岩製、74は黒雲母安山岩製。

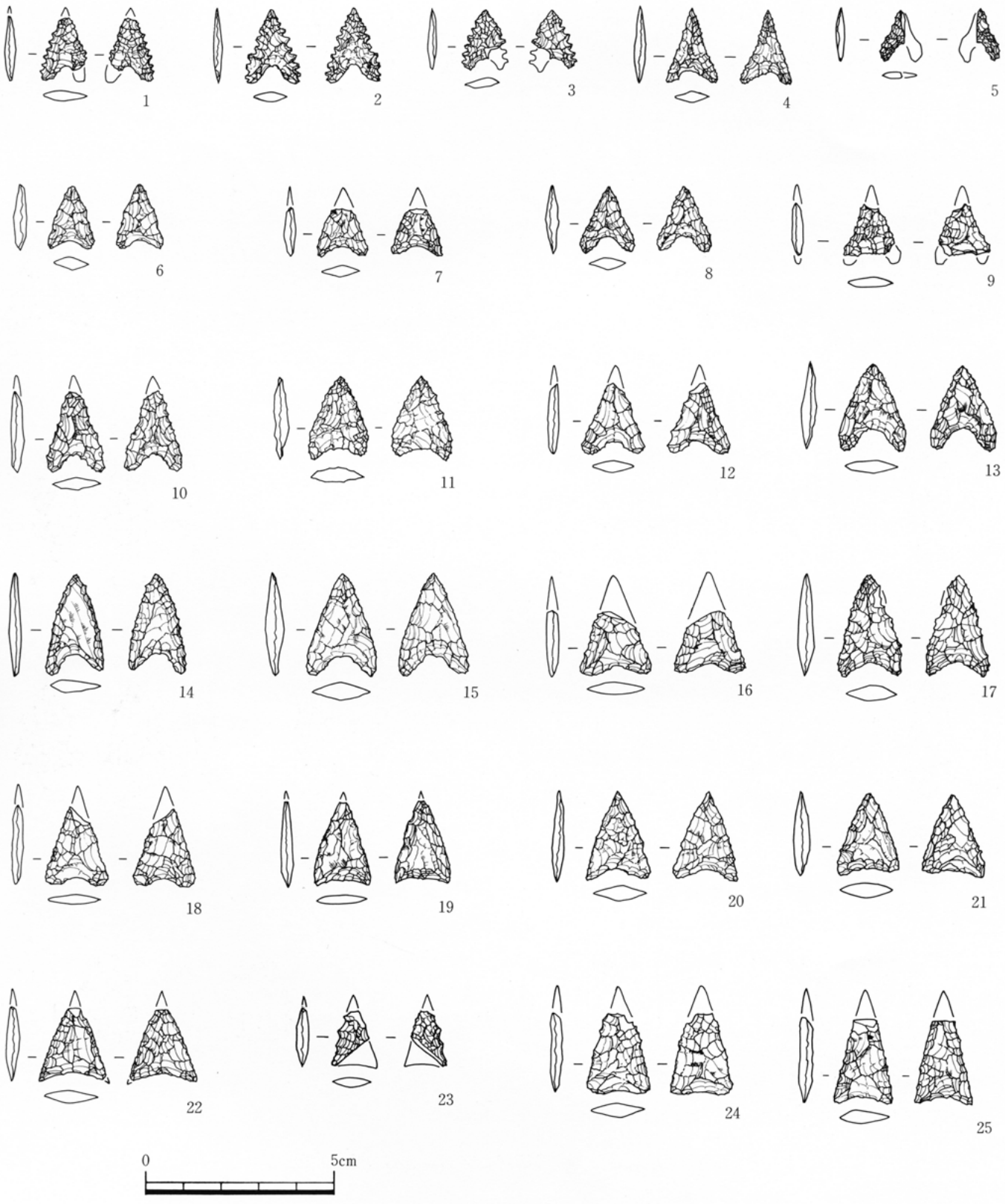
出土状況　出土状況は、全体の約半数を占める石鏃はほぼ全調査区にて見られ、その他の器種に関しては96Ｂ・96Ｃ・97Ａ区にて主に検出されている（第83図上）。これらの中で特に注目されるものは、97Ｂ区および96Ｃ・Ｄ区を中心にそれぞれ広がる２つの微高地上から出土したものであり、出土自体もその二ケ所に集中が見られる。前者は、縄文時代晩期まで居住地であり、弥生前期以降居住地・墓地として使用されたことから、特にそこから出土した３・５・10・11・12・17・18・19・24・31・32・40・41・45・46・49・52・53・54・63・65・66・68・71・73・74は縄文時代後期から弥生時代前期までの時期に帰属する可能性が高い。また後者も弥生時代前期以降の居住地であることから６・18・30・33・47・50・60・72は弥生時代前期以降である可能性が高い。

剝　片　今回検出されたのは、下呂石・チャート・サヌカイトと思われるものの三種類のみである（第14表）。剝片の出土分布に関して、97Ｂ区および96Ｃ・Ｄ区を中心にそれぞれ広がる２つの微高地上から集中的に出土している（第83図下）。前者からは下呂石の剝片が多いもののチャートやサヌカイトと思われる剝片も併せて出土している。一方後者からは、ほぼ下呂石の剝片のみとなり量も多くなる。残念ながら細かい剝片の分布状況など把握しきれなかったようであるが、生活の場としていた微高地上にて石器製作が行われ、縄文時代晩期までは下呂石のみならずチャート・サヌカイトと思われる石材をも使用していたが、弥生時代前期には下呂石の使用量がさらに多くなるようである。

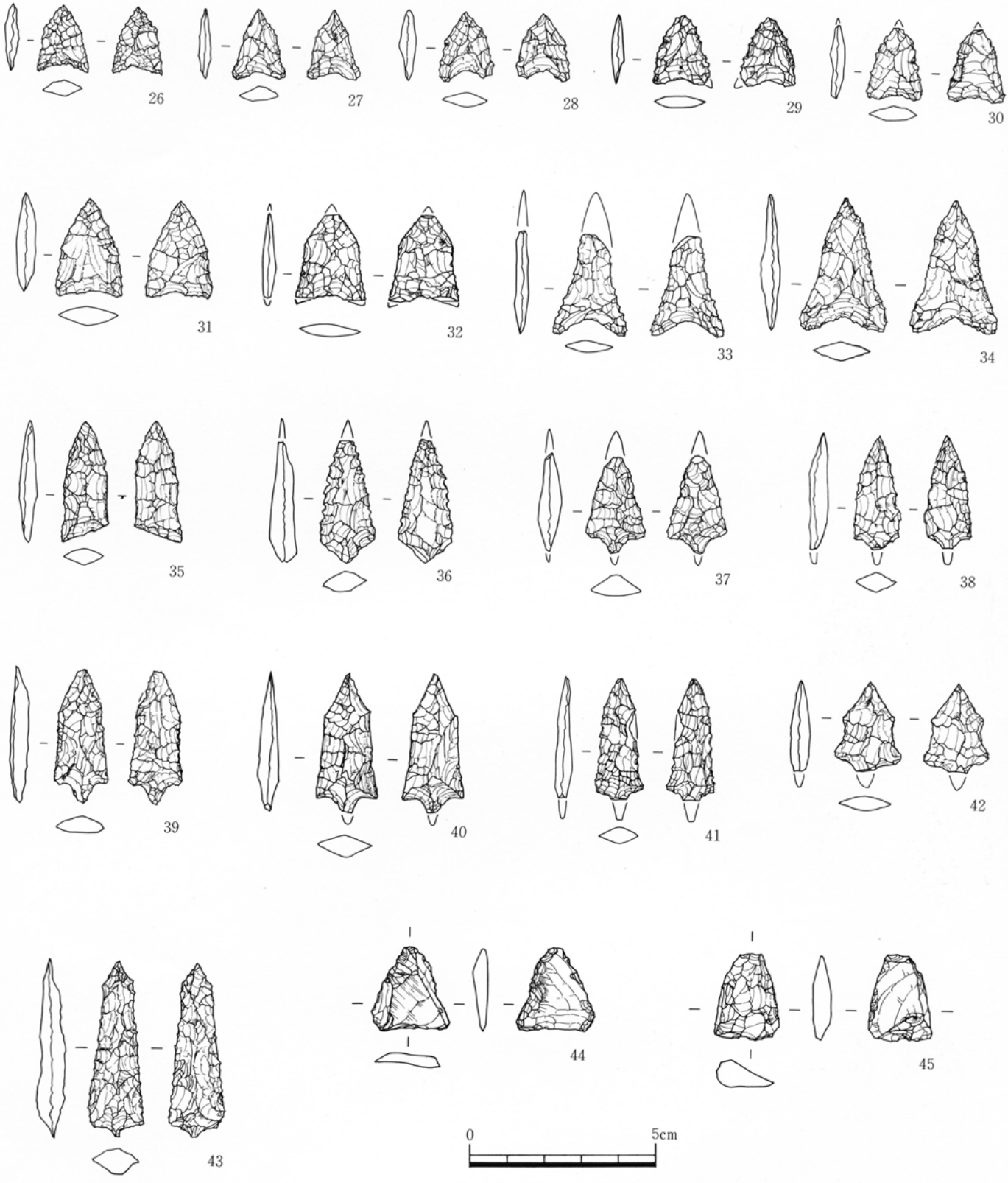
小　結　今回の検出資料の特徴は、全般的に狩猟具や生活用具が主体であり、縄文時代で言えば石棒・石刀・独鈷石などの石製品が見られないことである。三ツ井遺跡から約1.5km北に位置する馬見塚遺跡と比べても違いが明確であり、三ツ井遺跡の性格を考える上で重要となるであろう。石材は旧河川敷からなど、周辺から得られる石材を基本的に多く用いている。石鏃・スクレイパーなどにサヌカイトと思われる石材も使われているが、その剝片も検出されていることから、製品ではなく、石材を持ち込んで当地で製作されたものと思われる。また１点ではあるが蛇紋岩製の磨製石斧なども、他地域との交流を示唆するものである。

参考文献
石黒立人編 1993『朝日遺跡Ⅳ』㈶愛知県埋蔵文化財センター。
岩野見司ほか1977『新編　一宮市史　資料編１』一宮市教育委員会。
鈴木道之助 1974「縄文時代晩期における石器小考 －所謂飛行機鏃と晩期石鏃について－」『古代文化』26-7. 12～32頁。京都。
渡辺 誠・小笠原久和 1982『形原遺跡発掘調査報告書』蒲郡市教育委員会。

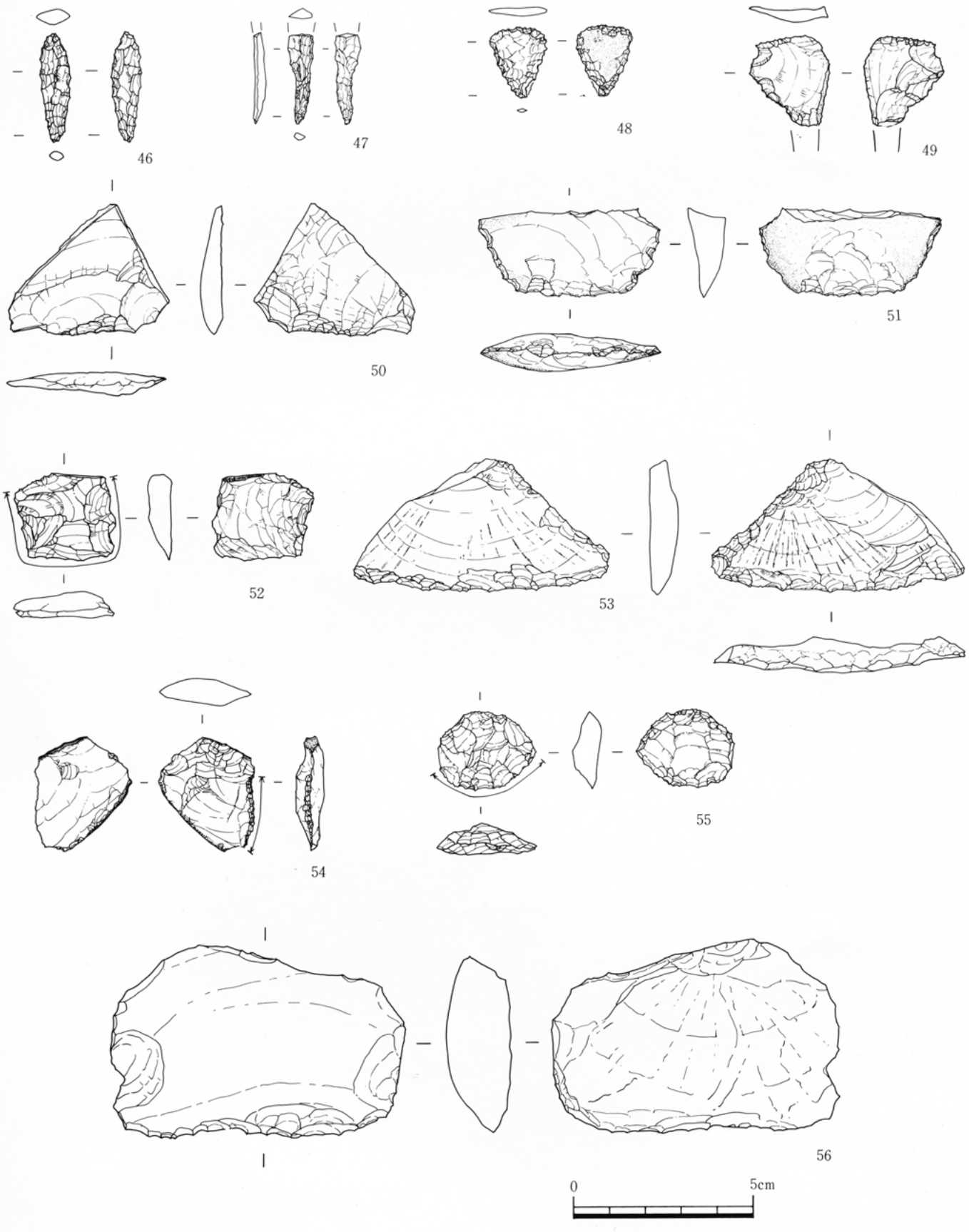
なお、第79図56のスクレイパーおよび粗製剝片石器の報告文・実測図は、愛知県教育委員会の原田幹氏作成の原本を基に作成したことを付記しておく。



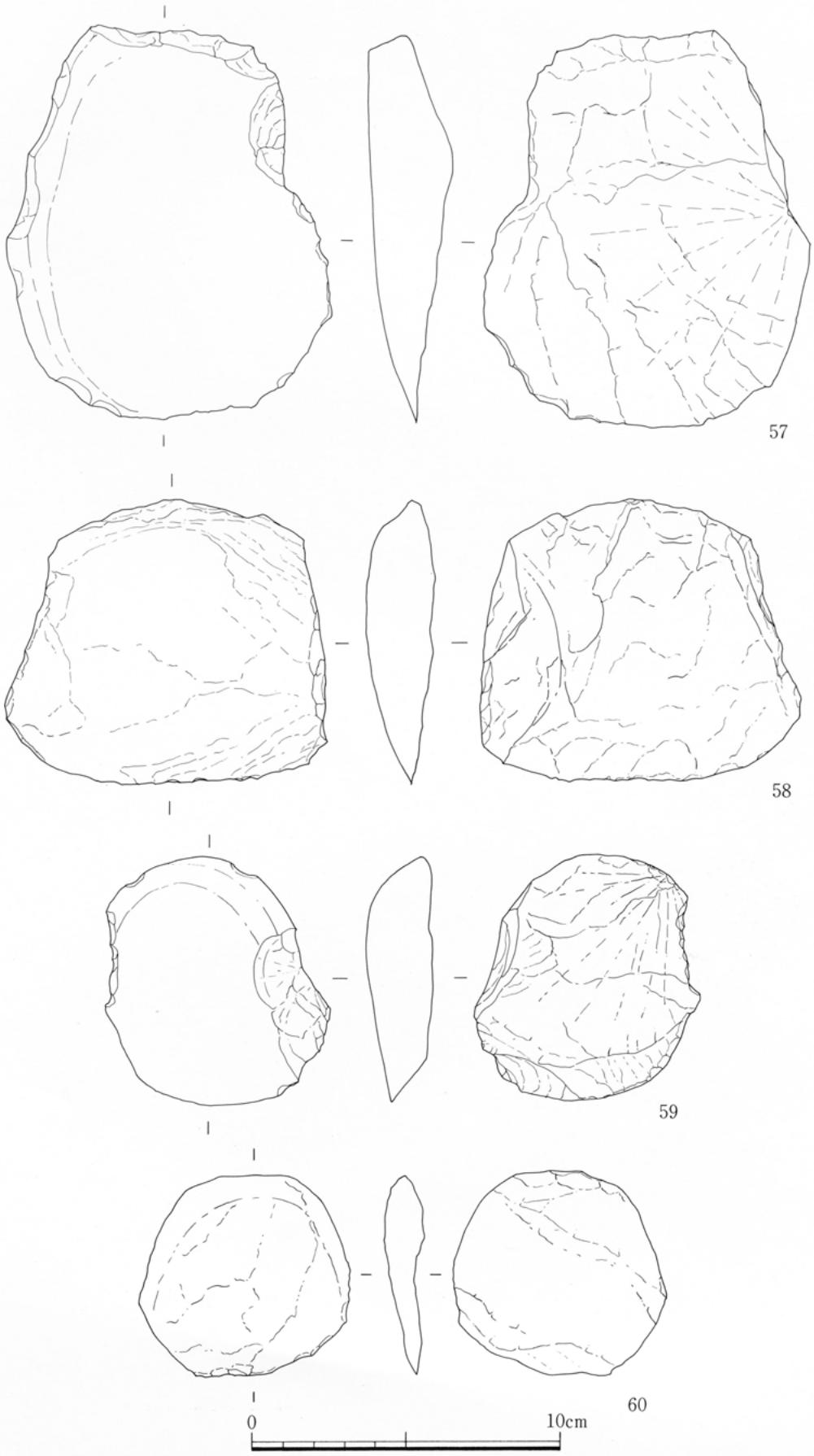
第77図　縄文・弥生時代の石器・石製品実測図(1)（２：３）



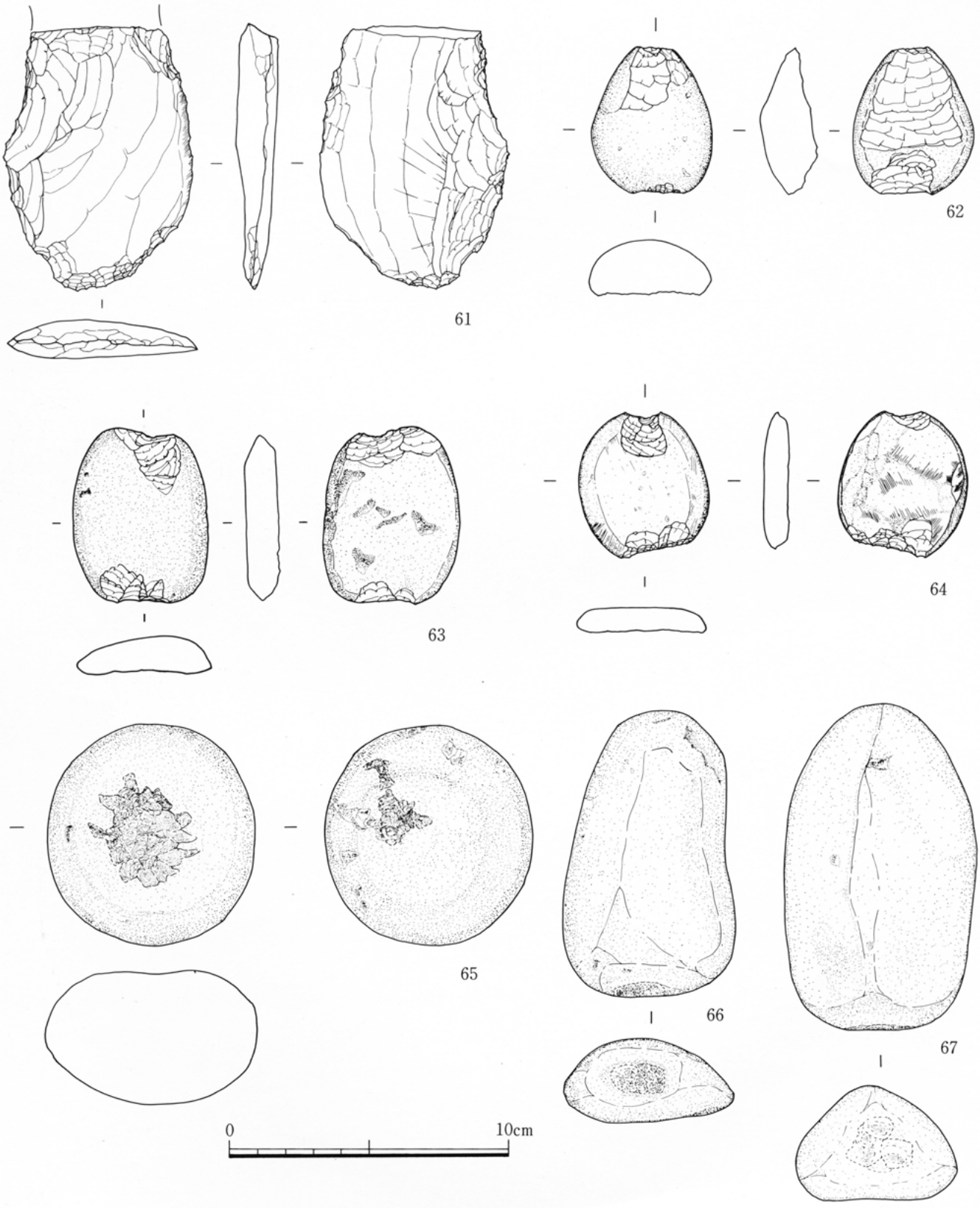
第78図　縄文・弥生時代の石器・石製品実測図(2)（2 : 3）



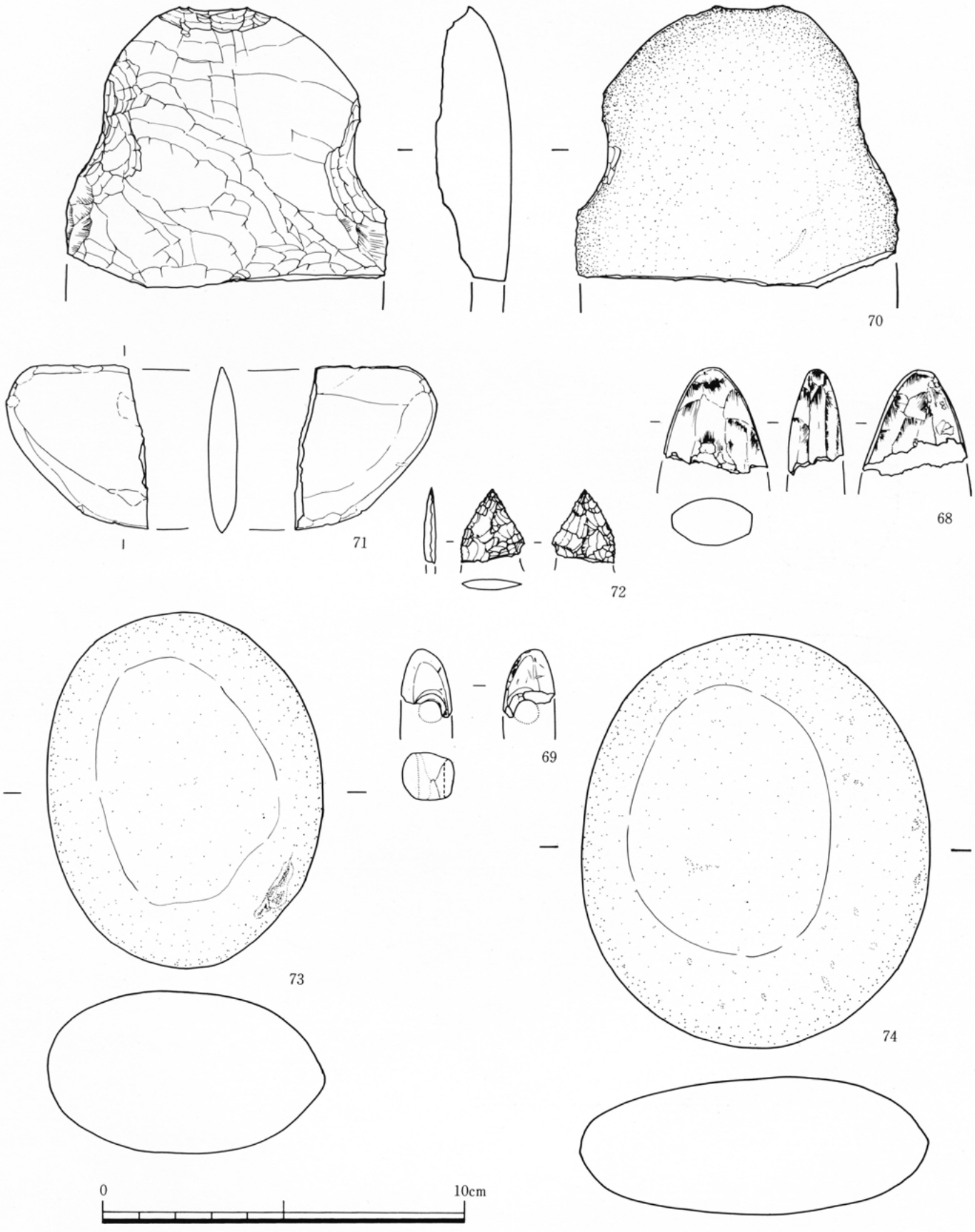
第79図　縄文・弥生時代の石器・石製品実測図(3)（２：３）



第80図　縄文・弥生時代の石器・石製品実測図(4)（1 ： 2）



第81図　縄文・弥生時代の石器・石製品実測図(5)（1 ： 2）

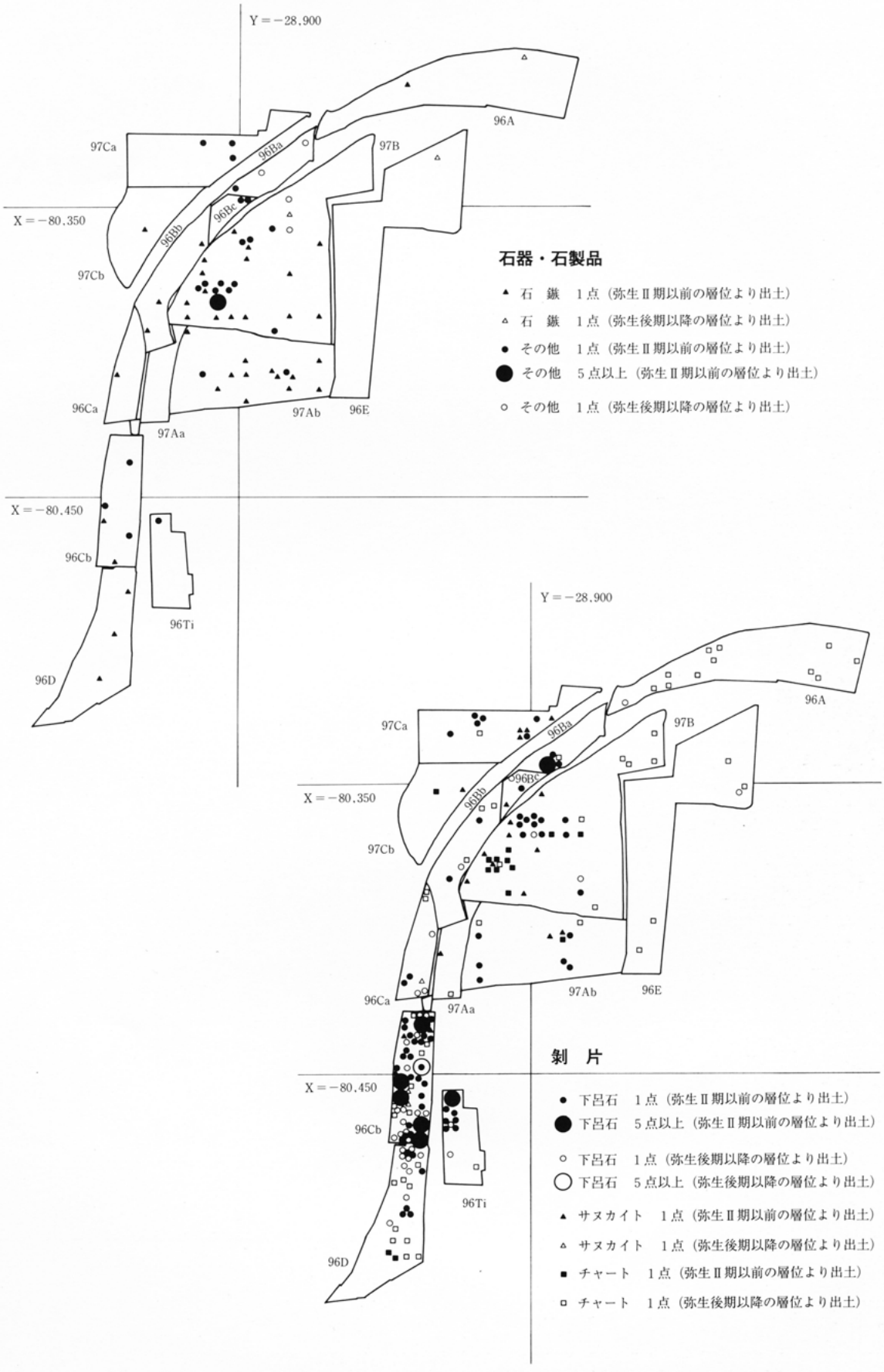


第82図　縄文・弥生時代の石器・石製品実測図(6)（２：３）

調査区	遺構・出土地	下呂石	サヌカイト?	チャート	計	備　考
96A	検出Ⅰ ⅣB1m			2	2	
96A	検出Ⅰ ⅣB1m			1	1	
96A	検出Ⅰ ⅣB3j			1	1	
96A	検出Ⅰ ⅣB3l			1	1	
96A	検出Ⅰ ⅣB3t			2	2	
96A	検出Ⅰ ⅣB4j			1	1	
96A	検出Ⅰ ⅣB4l			1	1	
96A	検出Ⅰ ⅣB5g	1			1	
96A	検出Ⅰ ⅣC2c			1	1	
96A	検出Ⅰ ⅣC1a			1	1	
96Ba	検出Ⅰ ⅣB9b			1	1	
96Ba	SX05	2			2	調整痕あり
96Ba	SX05	7		1	8	調整痕あり
96Bb	検出Ⅰ ⅣA12q			1	1	
96Bb	検出Ⅰ ⅣA12r			1	1	
96Bb	検出Ⅱ ⅣA13q	1			1	
96Bb	検出Ⅱ ⅣA15p		1		1	
96Bb	検出Ⅰ ⅣA16p	1		1	2	
96Bb	検出Ⅱ ⅣA17o	1			1	調整痕あり
96Bc	検出Ⅰ ⅣA10s	1			1	
96Bc	SX01	1			1	
96Bc	検出Ⅱ ⅣA12s		1		1	打点明瞭に限る
96Ca	SX01			2	2	
96Ca	－VA1n	1			1	
96Ca	SD05	2			2	
96Ca	検出Ⅰ VA4m		1		1	
96Ca	検出Ⅰ VA5m	2			2	
96Cb	SD03			1	1	
96Cb	検出Ⅰ VA6m	5		1	6	
96Cb	検出Ⅱ VA7l	1			1	
96Cb	SD16	1			1	
96Cb	検出Ⅰ VA7m	1			1	
96CB	検出Ⅲ VA7m	7	1		8	
96Cb	検出Ⅰ VA8l	1			1	
96Cb	検出Ⅱ VA8l	1	1		2	
96Cb	検出Ⅰ VA8m	1		1	2	
96Cb	検出Ⅲ VA8m	3			3	打点明瞭に限る
96Cb	検出Ⅱ VA9l	1			1	
96Cb	検出Ⅲ VA9l	2			2	
96Cb	検出Ⅰ VA9m			1	1	
96Cb	検出Ⅰ VA10k	1	1		2	
96Cb	検出Ⅲ VA10k	1			1	打点明瞭に限る
96Cb	検出Ⅰ VA10l	1			1	
96Cb	－VA10m	1			1	
96Cb	SX01	7			7	
96Bb	検出Ⅰ VA11k	1			1	
96Cb	検出Ⅱ VA11k	2			2	
96Cb	検出Ⅲ VA11k	42	1		43	打点明瞭に限る
96Cb	検出Ⅰ VA11l	1		1	2	
96Cb	検出Ⅲ VA11l	3			3	調整痕あり
96Cb	検出Ⅰ VA11m	2			2	
96Cb	検出Ⅰ VA12k	17	2		19	
96Cb	検出Ⅲ VA12k	7			7	
96Cb	検出Ⅰ VA12m	1			1	
96Cb	検出Ⅰ VA13k	1		2	3	
96Cb	検出Ⅰ VA13l	1		1	2	
96Cb	検出Ⅰ VA13m	2			2	
96Cb	検出Ⅲ VA13m	1			1	調整痕あり
96Cb	検出Ⅰ VA14l	1			1	
96Cb	検出Ⅲ VA14l	1			1	石核
96Cb	検出Ⅰ VA14m	3			3	
96Cb	SD02	9			9	
96Cb	SK157	98			98	一括取り上げ
96Cb	検出Ⅰ VA15k	1			1	
96Cb	検出Ⅰ VA15l	3			3	
96Cb	検出Ⅲ VA15l	3			3	
96Cb	検出Ⅰ VA15m	10			10	
96Cb	SD01	1			1	
96Cb	SD02	5			5	
96Cb	検出Ⅲ VA15m	9			9	
96Cb	SK157	4			4	
96D	検出Ⅰ ⅥA1k			1	1	
96D	－ⅥA2k			1	1	
96D	検出Ⅰ ⅥA2m			1	1	
96D	SK11			2	2	
96D	検出Ⅰ ⅥA3l			1	1	

調査区	遺構・出土地	下呂石	サヌカイト?	チャート	計	備　考
96D	検出Ⅰ ⅥA3m			1	1	
96D	－ VA16l	4			4	
96D	検出Ⅱ VA16l	1			1	
96D	SK23	1			1	
96D	検出Ⅰ VA16m	1			1	
96D	検出Ⅰ VA17l	2			2	
96D	検出Ⅰ VA17m			1	1	
96D	検出Ⅱ VA17m	1			1	
96D	検出Ⅰ VA18k			1	1	
96D	検出Ⅰ VA18l			2	2	剥離痕あり
96D	検出Ⅰ VA19l	1			1	
96D	検出Ⅱ VA20l	3			3	打点明瞭に限る
96D	検出Ⅱ VB8n	1			1	
96D	検出Ⅱ VA1k	1			1	
96E	検出Ⅰ ⅣB11o	1		1	2	
96E	検出Ⅰ ⅣB20i			1	1	
96E	検出Ⅰ VB2h			1	1	
96E	東西トレンチ ⅣB9n			1	1	原石
96Ti	SB03	7			7	
96Ti	SK01	2			2	
96Ti	SB02			1	1	
96Ti	SX01	4			4	
96Ti	検出Ⅱ VA14o	1			1	
96TI	検出Ⅱ VA16o	1			1	
96Td	Tdトレンチ①	1			1	
96Te	Teトレンチ①(黒色土層)	1			1	
96Th	Thトレンチ①(黒色土層)	2			2	
96Ti	Tiトレンチ①(黒色土層)	2	1		3	
96Ti	Tiトレンチ②(黒色土層)	1			1	
97Aa	検出Ⅱ VA2n		1		1	調整痕あり
97Aa	検出Ⅰ VA5o			1	1	調整痕あり
97Ab	検出Ⅱ VA1q	1			1	打点明瞭に限る
97Ab	検出Ⅱ VA3r	1			1	
97Ab	SK130	1			1	
97Ab	検出Ⅱ VB1b		1		1	
97Ab	検出Ⅱ VB2c	1	1	1	3	
97Ab	検出Ⅱ VB3c	2			2	
97Ab	検出Ⅰ ⅣA20q			1	1	
97Ab	北壁トレンチ ⅣB20d			1	1	
97B	中央北トレンチ	1			1	
97B	検出Ⅲ ⅣA13s		1		1	
97B	SK182	1			1	
97B	検出Ⅲ ⅣA13t	2			2	
97B	検出Ⅱ ⅣA14s		1		1	調整痕あり
97B	検出Ⅱ ⅣA14t	1			1	
97B	SK74			1	1	
97B	検出Ⅱ ⅣA16r		1	4	5	接合資料含む
97B	SK526			2	2	
97B	検出Ⅱ ⅣA17p		1		1	
97B	検出Ⅱ ⅣA18s			1	1	
97B	検出Ⅱ ⅣA18t		1		1	調整痕あり
97B	検出Ⅰ ⅣB7g			1	1	
97B	検出Ⅰ ⅣB7i			1	1	
97B	検出Ⅰ ⅣB9g			2	2	
97B	検出Ⅰ ⅣB9i			1	1	
97B	検出Ⅱ ⅣB11a		1		1	
97B	検出Ⅲ ⅣB13a	1			1	
97B	SK182	2			2	打点明瞭に限る
97B	検出Ⅲ ⅣB13c	1			1	
97B	SD01			1	1	
97B	SK189	1			1	
97B	SD01	1			1	
97B	検出Ⅲ ⅣB14b			1	1	原石
97B	検出Ⅱ ⅣB14c	1			1	
97B	検出Ⅱ ⅣB14b			1	1	
97B	検出Ⅱ ⅣB15a		1		1	調整痕あり
97B	SK88	1			1	打点明瞭に限る
97B	検出Ⅲ ⅣB18d	1			1	
97B	検出Ⅰ ⅣB19e			1	1	
97B	検出Ⅱ ⅣA15s			1	1	
97Ca	検出Ⅱ ⅣA6q	3			3	
97Ca	検出Ⅱ ⅣA7o	1			1	
97Ca	検出Ⅲ ⅣA7t	1	3		4	
97Ca	SK39	1			1	
97Ca	検出Ⅲ ⅣB6b		1		1	石器未製品の可能性
97Cb	検出Ⅱ ⅣA11p		1		1	打点明瞭に限る
	計	349	25	64	438	

第14表　剥片出土地・種類の一覧表



第83図　石器・石製品、剝片分布図（1：2000）

2．その他の石製品

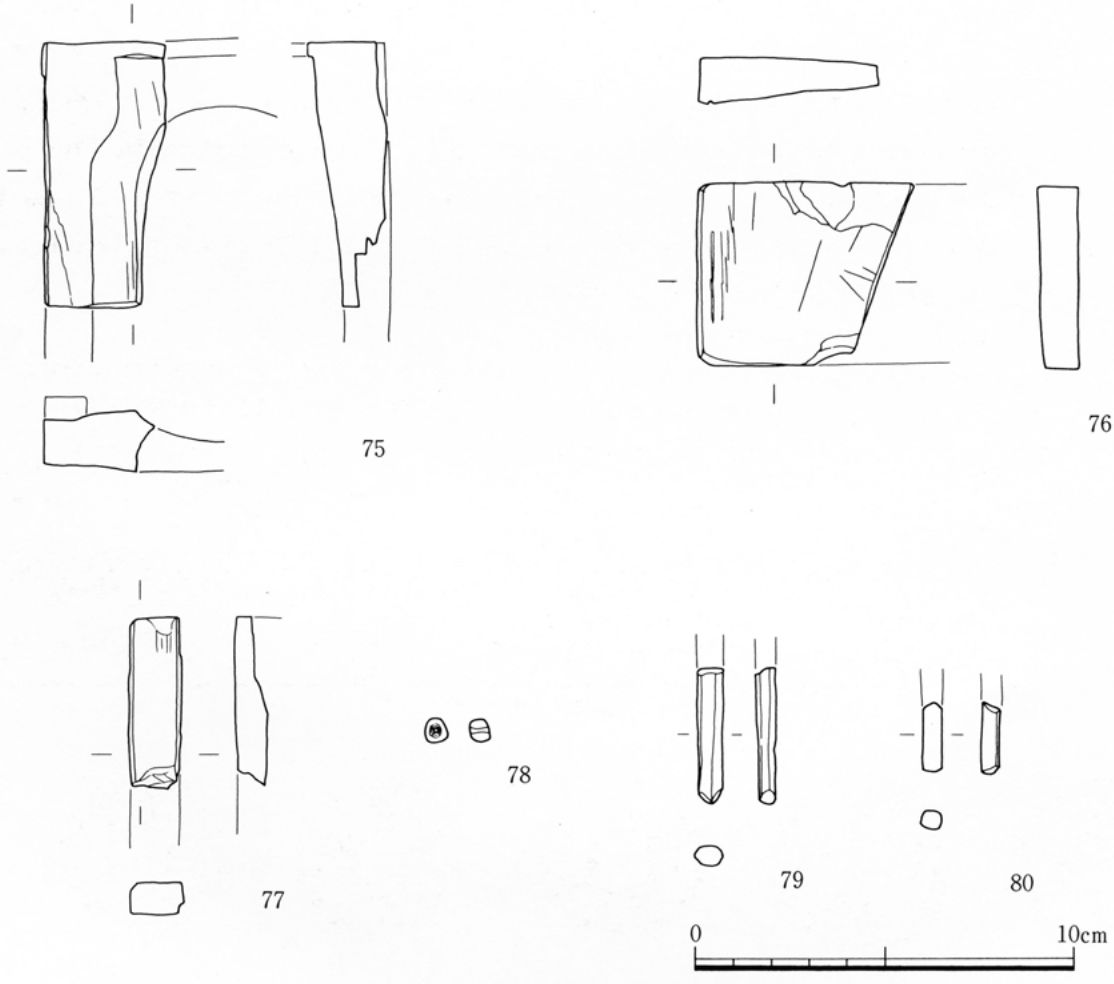
縄文・弥生時代以外の石製品について、ここでは取り扱う。遺物の時期を特定することはできなかったが、全て中世以降の時期と考えられる。

硯　75は硯で、97Ca区出土。石材は泥質凝灰岩。

砥石　76・77は砥石。76は96BaSD34出土。77は96E区の島畑Tg下層出土。石材はともに泥質凝灰岩。

水晶製小玉　78は水晶製小玉で、97Ca区出土。両側に孔をあけた時の加工痕が観察できる。

用途不明品　79・80は細長い棒状を呈し、側面と先端が研磨されている用途不明品。79は96D ST01出土で、石材は珪質岩。80は96A ST05出土で、石材は溶結凝灰岩。



第84図　その他の石製品実測図（1：2）

第４節　金属製品類

１．銭　貨

銭貨は、総数８枚出土し、銭種は元豊通寶１枚、寛永通寶６枚、文久永寶１枚が認められる。元豊通寶は、材質・書体などから渡来銭の北宋銭と考えられる。初鋳は北宋の元豊元年（1078年）である。文久永寶は、文久３年（1863年）に四文通用として鋳造され、数種類あるが、今回のものは、「文」が草書で、「宝」が「寶」の略字であり、いわゆる「草文略宝」の書体である。

元豊通寶

文久永寶

寛永通寶

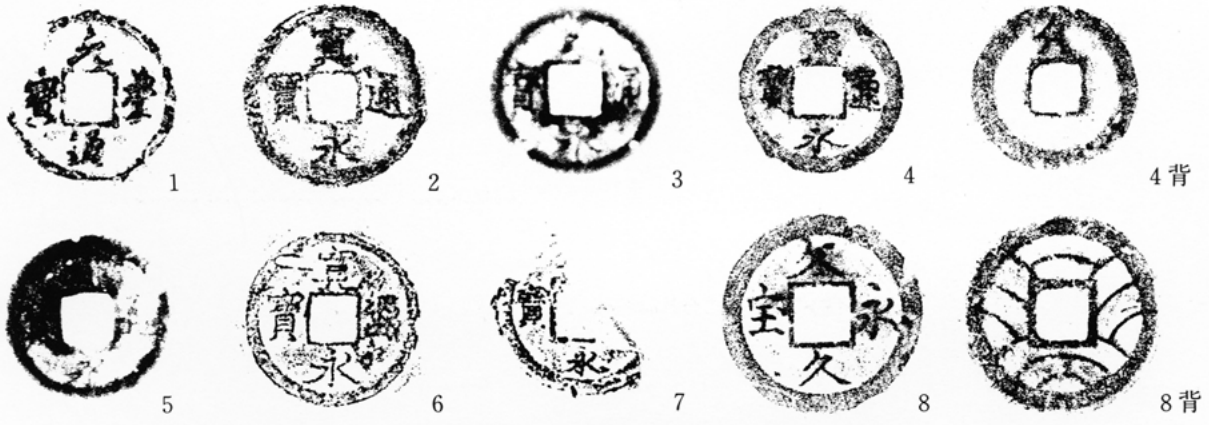
寛永通寶は、近世における代表的通貨である。多量に発行されたため、渡来銭に代わり、明治の初めまで銭貨の主役となって流通した。日本各地に銭座が設けられ、銅・鉄・真鍮を素材として鋳造された。背に波紋を持つ四文銭とその他の一文銭があり、鋳造年代より、「古寛永」と「新寛永」に大別できる。長期に渡り、各地で鋳造されたため、その鋳型・様式などは多様・雑多となったが、書体・材質・大きさなどの違いから、年代・鋳銭地がわかるものもある。分類の仕方にもよるが、一説に、「古寛永」は約1000種類、「新寛永」は一文銭で約350種類、四文銭を含めると、500種類ほどにもなるといわれている。寛永通寶など銭貨の年代・鋳銭地が判明すれば、出土層位時期の上限を決める際の判断材料となり、遺構の時期決定の一助となるであろう。

参考文献　松岡輝幸1998『貨幣の歴史と江戸時代の銭勘定』

銭貨の種類・鋳造地・鋳造年代などについては、松岡輝幸氏（稲沢市文化財保護審査会委員）に鑑定して頂き、ご教示を得た。全体的に錆び・摩耗がひどく、Ｘ線写真を利用しても判読困難なものもあった。

番号	調査区	出土地点	銭種	銭名・内容	銭造初年	西暦	備考
1	96Ca	VA11 SX01	元豊通寶	渡米銭の北栄銭	元豊元年	1078年	
2	96A	ⅣB4k ST06	寛永通寶	新寛永の江戸亀戸銭	延宝２年	1674年	
3	96A	ⅣB3t ST02	寛永通寶	新寛永の江戸荻原銭	元禄13年	1700年	
4	96D	ⅥA4l 旧水田	寛永通寶	新寛永の佐渡国相川銭	享保２～19年	1717～1734年	背「佐」文字あり
5	97Ab	ⅣA20q 旧水田	寛永通寶	新寛永の山城国鳥羽(七条か？)銭	元文元年？	1736年？	判読困難
6	96E	VB17k 旧水田	寛永通寶	新寛永の江戸亀戸銭	元文２年	1737年	
7	96D	VA17k 旧水田	寛永通寶	新寛永の下野国日光銭	元文２年	1737年	「永寶」のみ銭
8	96D	ⅥA2j 島畑５下層	文久永寶	「草文略宝」で四文銭	文久３年	1863年	

第15表　銭貨一覧表



第85図　銭貨拓本（１：１）（３と５はＸ線写真）

2．その他の金属関連資料

銭貨を除く金属製品およびその関連遺物としては、鉄製品、銅製品、鉄滓などがある。なお、一覧表の凡例や分析方法については『門間沼遺跡』（註１）を参照されたい。

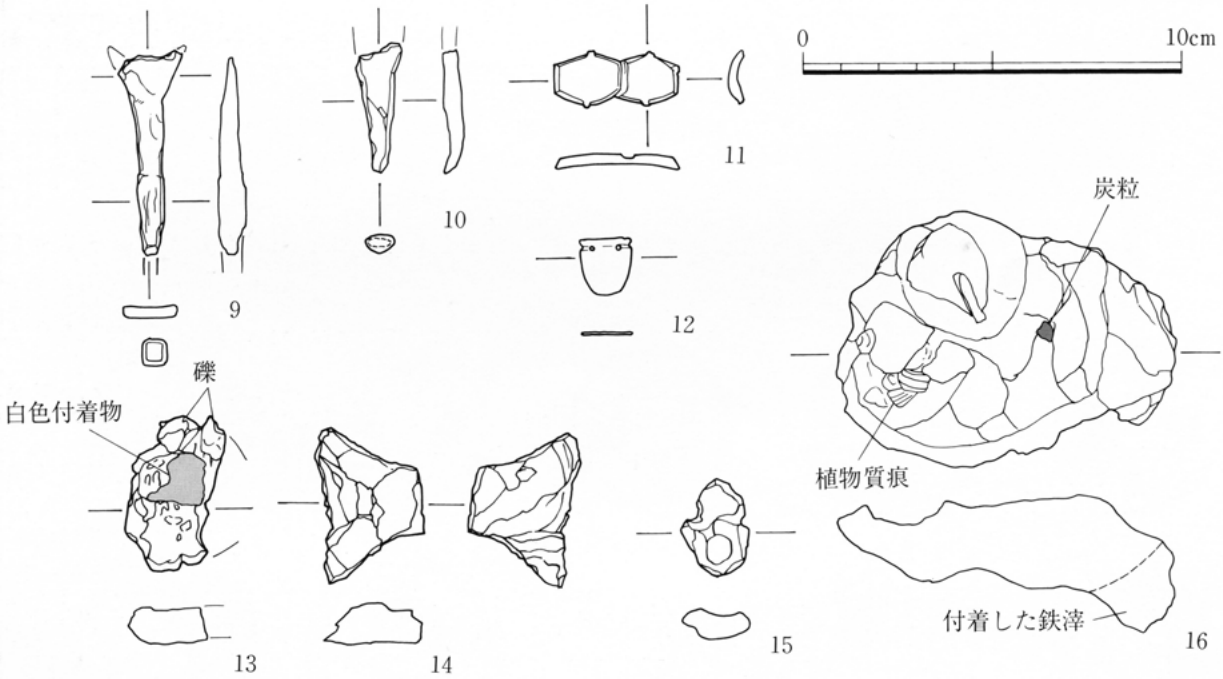
鉄製品　鉄製品には鉄鏃、鉄釘などがある。９はＹ字形の刃部を持つ凸基有茎鉄鏃で刃部先端を欠く。基部の断面形は方形となっている。10は上部を欠く鉄製品で鉄鏃または鉄釘と考えられるが、下部の断面形からみて鉄釘の可能性が高い。いずれも中世後期に属する。

銅製品　銭貨を除く銅製品には飾金具と留金具などがある。11は扁六角形を２つ重ねたような形状の飾金具で刀装具の目貫と考えられる。中世後期に属する。12は上端部に孔を２つ穿ちその付近に糸などで固定した痕跡が残存する。近世以降の足袋の留金具であろう。

鉄関連資料　鉄器製作に関連する資料には椀型鉄滓、流動滓、炉壁などがあり、これらは以下の２群に大別できる。１群は質感が軽く表面に白色付着物などがあるもので、近代以降に属すると推定される。２群は質感が重く黒灰色を呈したもので、中世まで遡る可能性がある。

13は１群の椀型鉄滓で96A ST06から出土した。小石粒をかみ込み表面に白色付着物が認められるが、質感は非常に軽いものである。14は質感が軽い扁平な炉壁で断面が層状となっている。この種の炉壁は水田や島畑などで多く出土しており、近代以降に属するだろう。15は２群の流動滓で緑がかった灰色を呈している。ガラス質の質感が重く、気泡が少ない特徴を持つ。16は完形の椀型鉄滓で、下端部に別の鉄滓が重複している。表面に植物質痕や炭粒が認められる。　（鈴木正貴・藤山誠一）

（註１）藤山誠一・鈴木正貴1999「金属製品」『門間沼遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第80集



第86図　金属関連　遺物実測図（１：２）

番号	保存番号	調査区	グリッド	遺構	日付	種　別	形状	重量	長径	短径	厚さ	着磁度	メタル1	メタル2	メタル3	残存	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス質	備　考
9	980210	96D	ⅥA1m	検Ⅰ	960620	含鉄遺物	棒状	2.7	3.5	1	0.5	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	鉄鏃？
10	980242	97Ca	ⅣB5d	検Ⅰ	971205	含鉄遺物	棒状	3.9	5.5	1.5	0.6	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	鉄鏃？
11	980191	96A	ⅣB2o	検Ⅰ	960425	銅製品（飾金具）		5.9	3.3	1.5	0.2	0	1	2	3	完	×	×	×	×	×	0	
12	980211	96D	ⅣA4l	検Ⅰ	960619	銅製品（留金具）		0.4	1.5	1.3	0.1	0	1	2	1	完	×	×	×	×	×	0	
13		96A	ⅣB4k	ST06	960510	椀型鉄滓		6.4	4.3	2.2	1.1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
14	980176	96A	ⅣC1a	ST01	960507	炉壁	扁平	5.8	3.7	2	1.1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
15	980205	96Ca	ⅣA4m	SX01	961218	流動滓	礫状	4.4	2.5	1.8	0.8	1	0	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
16	980239	97B		検Ⅰ		椀型鉄滓		190	9.1	6.8	3.2	3	0	0	0	完	○	×	×	×	×	1	
	980175	96A	ⅣC2a	ST01	960507	鉄製品（戸車か滑車）		36.7	4.3	4.1	1	3	1	2	3	完	×	×	×	×	×	0	新しい
	980176	96A	ⅣC1a	ST01	960507	炉壁	扁平	7.9	4.1	2.6	1.4	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980176	96A	ⅣC1a	ST01	960507	炉壁（石製）	礫状	3	2.1	2	1.4	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980176	96A	ⅣC1a	ST01	960507	炉壁	礫状	12.4	3.8	3.2	2	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980180	96A	ⅣC2a	ST01	960507	炉壁	扁平	7.7	3.7	2.5	1.3	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980180	96A	ⅣC2a	ST01	960507	炉壁	扁平	2.7	2.8	2.1	1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980181	96A	ⅣB1t	ST01	960430	炉壁	扁平	4.2	2.6	2.3	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着、白色付着物
	980181	96A	ⅣB1t	ST01	960430	炉壁	礫状	1.4	2.3	1.3	1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980182	96A	ⅣC1a	ST01	960507	炉壁	扁平	6.4	2.3	1.5	0.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	他７点あり
	980183	96A	ⅣC4b	ST02	960514	炉壁	礫状	3.4	2.4	2.2	1.3	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980184	96A	ⅣC3c	ST02	960426	炉壁	棒状	2.4	2.5	1.6	0.9	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980185	96A	ⅣC3c	ST02	960430	炉壁	礫状	3	2.9	1.8	1.1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980186	96A	ⅣC4b	ST02	960430	炉壁	礫状	0.5	1.7	1.2	0.6	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980187	96A	ⅣB4t	ST02	960426	炉壁	礫状	3.5	2.9	1.4	1.5	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980188	96A	ⅣB4l	ST05	960510	炉壁	礫状	2.1	2.6	1.7	1.3	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980189	96A	ⅣB3l	ST05	960510	炉壁	礫状	4	3	1.8	1.3	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980189	96A	ⅣB3l	ST05	960510	炉壁	礫状	1	1.8	1.3	1.2	0	0	0	0	欠	×	○	×	×	×	2	流動滓付着
		96A	ⅣB4k	ST06	960510	炉壁	扁平	2.3	2.4	2	0.8	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	流動滓付着
		96A	ⅣB3k	ST06	960510	炉壁	棒状	0.3	1.5	0.7	0.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
		96A	ⅣB3k	ST06	960510	流動滓	扁平	2	2.3	1.2	0.7	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
		96A	ⅣB3j	ST06	960513	炉壁	扁平	10.9	5.8	2.3	1.5	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
		96A	ⅣB3k	ST06	960513	炉壁	礫状	5.1	2.7	2.4	1.4	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
		96A	ⅣB3k	ST06	960513	炉壁	扁平	0.7	1.8	1.3	0.4	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	10.4	3.9	2.8	2.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	3	2.8	1.7	1.5	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	2.8	2	1.8	1.3	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	扁平	1.8	2.3	1.5	0.9	0	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	流動滓付着
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	9	2.3	2	1.7	0	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	1.4	2.5	1.9	1.1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	扁平	0.4	1.4	1	0.5	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	0.6	1.5	1.2	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	0.7	1.5	1	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	扁平	0.9	2	1.2	0.4	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	1.2	1.7	1.2	1	0	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	

第16表　その他の金属関連資料　一覧表(1)

番号	保存番号	調査区	グリッド	遺構	日付	種　別	形状	重量	長径	短径	厚さ	着磁度	メタル1	メタル2	メタル3	残存	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス質	備　考
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	0.5	1.2	0.8	0.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	0.7	1.4	1.2	0.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	礫状	0.3	1.5	1.1	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	炉壁	扁平	1.5	2	1.3	0.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	流動滓	礫状	0.3	1.7	1.1	0.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	流動滓	礫状	1	1.7	1.1	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980192	96A	ⅣB3l	表採	960508	流動滓	礫状	0.3	1.2	1.2	0.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980193	96A	ⅣB3j	表採	960510	炉壁	礫状	6.9	2.5	1.9	1.5	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980193	96A	ⅣB3j	表採	960510	流動滓	礫状	2.3	3.2	1.6	1.3	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980194	96A	ⅣB3k	表採	960510	炉壁	扁平	1.8	2.3	1.4	0.7	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980194	96A	ⅣB3k	表採	960510	炉壁	扁平	2.8	2.2	1.7	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980194	96A	ⅣB3k	表採	960510	炉壁	扁平	1.4	2.8	1.8	0.7	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980194	96A	ⅣB3k	表採	960510	炉壁	礫状	1.8	2.1	1.9	1.1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980194	96A	ⅣB3k	表採	960510	炉壁	棒状	1.5	2.3	1.2	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980194	96A	ⅣB3k	表採	960510	流動滓	礫状	1.8	2	1.3	1.1	1	0	0	0	完	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980194	96A	ⅣB3k	表採	960510	流動滓	礫状	0.7	1.2	0.8	0.6	2	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980194	96A	ⅣB3k	表採	960510	流動滓	礫状	0.7	0.9	0.9	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980196	96A		表採	960418	含鉄遺物	棒状	4.2	2.5	1.5	1.2	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	ひび割れ有り
	980197	96A	ⅣB2k	表採	960510	流動滓	扁平	3.4	2.5	2	0.9	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980198	96A		表採	960418	炉壁	扁平	14.2	5.1	3	1.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980199	96A	ⅣB4k	表採	960510	炉壁	扁平	20.7	4.7	4.1	1.8	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980199	96A	ⅣB4k	表採	960510	炉壁	礫状	1.4	2.2	1.1	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980199	96A	ⅣB4k	表採	960510	炉壁	礫状	2.6	2.2	1.5	1.3	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980199	96A	ⅣB4k	表採	960510	炉壁	扁平	0.3	1.3	1.1	0.4	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980199	96A	ⅣB4k	表採	960510	流動滓	礫状	4	2.4	2	1.3	0	0	0	0	完	○	×	×	×	×	2	
	980199	96A	ⅣB4k	表採	960510	流動滓	礫状	5.2	2.6	2.3	1.9	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980199	96A	ⅣB4k	表採	960510	流動滓	扁平	5.9	2.9	2.7	0.7	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980199	96A	ⅣB4k	表採	960510	流動滓	礫状	5.8	3.1	2	1.7	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980199	96A	ⅣB4k	表採	960510	流動滓	礫状	0.2	0.9	0.5	0.5	0	0	0	0	完	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980200	96A	ⅣB3j	表採	960510	銅製品	扁平	4.3	6	1.2	0.1	0	1	2	3	欠	×	×	×	×	×	0	板状
	980204	96Ba	東辺	表採	960919	鏃		14.4	7.3	1.5	0.5	4	1	2	3	欠	×	×	×	×	×	0	新しい
	980208	96Cb	VA7m	検Ⅰ	961210	含鉄遺物	棒状	0.3	1.3	0.6	0.4	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980209	96Cb	VA14l	検Ⅰ	961211	鏃または刀子		15.7	8.3	1.6	0.5	4	1	2	3	欠	×	×	×	×	×	0	新しい
	980211	96D	ⅣA4l	検Ⅰ	960619	銅製品（不明）		0.5	1.3	0.9	0.1	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	他３点
	980213	96D	南トレンチ	島畑4	960613	鏃？		10.2	10	2	0.7	4	1	2	3	欠	×	×	×	×	×	0	新しい
	980217	96Td		島畑d	960603	炉壁	扁平	4.4	3.1	2.5	1.2	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
		96Te		島畑e	960524	炉壁	扁平	15.5	4.8	3.5	1.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980218	97Ab	西側拡張	検Ⅰ	971217	含鉄遺物	棒状	2.3	2.8	0.8	0.5	3	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980219	97Ab		島畑10ベルト	971118	流動滓	礫状	6.9	2.5	1.7	1.4	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
	980221	97Ab		島畑10ベルト	971118	含鉄遺物	棒状	1.1	2.5	0.5	0.5	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980225	97B	ⅣB11e	SD01	970424	炉壁	扁平	1.6	2.9	1.3	0.7	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着、白色付着物
	980224	97B	ⅣB12d	SD01 上層	970424	含鉄遺物	棒状	7.7	5.5	1.5	0.6	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	

第17表　その他の金属関連資料　一覧表(2)

番号	保存番号	調査区	グリッド	遺構	日付	種別	形状	重量	長径	短径	厚さ	着磁度	メタル1	メタル2	メタル3	残存	発泡	小石	植物	木炭	炉材	ガラス質	備考
	980226	97B	ⅣB10e	SD01 上層	970423	含鉄遺物	棒状	19.8	9.6	1.1	1	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980227	97B	ⅣB14e	SD48	970506	含鉄遺物	扁平	1.5	1.8	1.4	0.3	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980228	97B	ⅣB18a	SD55	970522	含鉄遺物	棒状	3.8	3	0.9	0.8	3	1	2	3	欠	×	×	×	×	×	0	
	980228	97B	ⅣB18a	SD55	970522	含鉄遺物	棒状	0.5	2.9	0.4	0.4	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980228	97B	ⅣB18a	SD55	970522	流動滓	扁平	2.7	2.3	1.8	0.9	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980228	97B	ⅣB18a	SD55	970522	流動滓	礫状	25.5	6	2.9	2.4	0	0	0	0	欠	○	○	×	×	×	2	白色付着物
	980231	97B	ⅣB17a	SK142	970625	流動滓	礫状	0.1	0.6	0.3	0.2	0	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	2	
	980230	97B	ⅣB17d	SK88	970527	銅製品（不明）		0.1	1	0.8	0.1	0	1	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980233	97B	ⅣB9g	検Ⅰ	970417	鉄片	扁平	1.4	2.4	1.6	0.1	3	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980234	97B	ⅣB17d	検Ⅰ	970519	流動滓	礫状	6.6	2.5	2.1	1.5	1	0	0	0	完	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980232	97B	ⅣA18t	島畑9	970521	流動滓	扁平	4.7	4	2.2	1.1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	白色付着物
	980236	97B	ベルト北	島畑9	970430	含鉄遺物	棒状	1.2	2.4	0.8	0.5	1	0	0	0	完	×	×	×	×	×	0	
	980238	97B		表土はぎ	970404	1／4分割椀型鉄滓		18	3.4	2.8	1.7	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	1	
	980239	97B		表土はぎ		鉄塊系遺物	棒状	41.2	6	1.4	1.3	3	1	2	3	欠	×	×	×	×	×	0	
	980237	97B		北壁T	970415	羽口		1.3	1.9	1.1	0.8	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	先端部
	980240	97Ca	ⅣA8t	SD13	971210	炉壁	礫状	9.7	3	2.8	1.5	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	✕	2	
	980241	97Ca	ⅣA7s	SK24	971210	含鉄遺物	棒状	10.9	6.1	1.6	1	2	1	2	1	欠	×	×	×	×	×	0	
	980241	97Ca	ⅣA7s	SK24	971210	含鉄遺物	棒状	13.5	11	1.2	1	5	1	2	2	欠	×	×	×	×	×	0	
	980241	97Ca	ⅣA7s	SK24	971210	含鉄遺物	棒状	4.2	3.4	1.3	0.9	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980241	97Ca	ⅣA7s	SK24	971210	含鉄遺物	棒状	2	2.2	1	0.8	2	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980241	97Ca	ⅣA7s	SK24	971210	含鉄遺物	棒状	8	5.6	1.3	1.1	3	1	2	2	欠	×	×	×	×	×	0	
	980243	97Ca	ⅣA8r	検Ⅰ	971203	炉壁	礫状	3.9	2.9	2.1	1.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980243	97Ca	ⅣA8r	検Ⅰ	971203	炉壁	礫状	3.7	2.8	1.7	1.3	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980243	97Ca	ⅣA8r	検Ⅰ	971203	炉壁	礫状	2.3	2	1.6	1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980243	97Ca	ⅣA8r	検Ⅰ	971203	炉壁	礫状	0.7	1.8	1.3	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980244	97Ca	ⅣA7r	検Ⅰ	971203	含鉄遺物	棒状	1.4	3.9	0.6	0.5	2	1	2	0	完	×	×	×	×	×	0	
	980245	97Ca		検出	971120	炉壁	礫状	3.1	3.1	1.6	1.5	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980245	97Ca		検出	971120	炉壁	礫状	1.3	2.6	1.6	0.9	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980245	97Ca		検出	971120	キセル吸口		2.8	3.7	0.9	0.9	0	1	2	3	欠	×	×	×	×	×	0	
	980242	97Ca	ⅣB5d	島畑6	971205	含鉄遺物	棒状	1.4	2.3	0.8	0.4	1	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	鉄鏃？
	980246	97Ca	東壁T	島畑6	971127	含鉄遺物	棒状	1.8	1.9	1.1	0.9	3	0	0	0	欠	×	×	×	×	×	0	
	980247	97Ca		東西トレンチ	971112	炉壁？	扁平	15.1	4.5	2.6	1.3	0	1	1	0	欠	×	×	×	×	×	2	白色付着物
	980247	97Ca		東西トレンチ	971112	炉壁	扁平	7	2.9	2.7	1.3	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980247	97Ca		東西トレンチ	971112	炉壁	礫状	2.7	1.9	1.6	1.5	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980247	97Ca		東西トレンチ	971112	炉壁	礫状	0.7	1.3	1	0.8	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980247	97Ca		東西トレンチ	971112	炉壁	礫状	0.3	1.3	0.8	0.6	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980247	97Ca		東西トレンチ	971112	炉壁	礫状	1	1.8	1.2	1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	流動滓付着
	980247	97Ca		東西トレンチ	971112	流動滓	扁平	0.7	2	1.3	0.7	1	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
		97Cb	ⅣA11l	SD07	980203	流動滓	礫状	3.8	2.4	2	1.3	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980248	97Cb	ⅣA11o	SX02	980206	炉壁	礫状	0.8	1.3	1.1	1	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980248	97Cb	ⅣA11o	SX02	980206	炉壁	礫状	0.3	1.1	0.9	0.5	0	0	0	0	欠	○	×	×	×	×	2	
	980249	97Cb	ⅣA11o	検Ⅰ	980202	ボルト		23.1	5	1.7	1.4	4	1	2	3	完	×	×	×	×	×	0	新しい

第18表　その他の金属関連資料　一覧表(3)

第４章　自然科学分析

第１節　三ツ井遺跡の古環境解析

はじめに

濃尾平野表層に分布する第四系の層序は岩相層序学的研究によって組み立てられてきた。濃尾平野に伏在する第四系は多田・井関（1955）や杉崎・柴田（1961a，1961b）によって地下層序の概要が報告されて以降、建築物の基礎調査ボーリングの資料が増加するとともに、平野地下に分布する完新統の層序が明らかになってきた（桑原，1975；濃尾平野第四系研究グループ，1977；坂本ほか，1984）。また、濃尾平野内の公共事業に伴う事前調査（発掘調査）が進むにつれ、縄文時代から近世にいたる多数の遺跡が発見されており、地表下数mに分布する上部完新統の層序学的・古環境学的研究が進展した。それらは花粉・珪藻・植物珪酸体化石などの微化石調査や^{14}C年代測定・火山灰調査を主体とするもので、先史～歴史時代にかけての層序および古環境情報が明らかにされている（海津，1992；森，1992，1998；鬼頭ほか，1998）。しかし、発掘調査件数が増加したとはいえ、濃尾平野における先史～歴史時代の古環境データに関しては未だ資料が少なく、各地域における植生や分布拡大の過程が充分に明らかにされているとは言いがたい。

今回報告する三ツ井遺跡は愛知県一宮市丹陽町三ツ井に位置している。濃尾平野北東部の青木川と五条川とに囲まれた沖積低地に立地し、濃尾平野上部完新統の層序・古環境を研究する上で貴重な情報を与えてくれる。本章では、発掘調査によって得られた岩相層序・微化石分析・^{14}C年代測定結果を報告し、愛知県一宮市三ツ井地域の古環境について検討する。

試　料

各調査区において微化石および^{14}C試料を75地点から採取した。今回は全ての地点の分析層位を掲載することができなかったが、一部の地点に関しては各分析結果の項に層位分布図として表わした。なお、パリノ・サーヴェイ㈱には花粉・植物珪酸体分析および^{14}C年代測定、古環境研究所㈱には植物珪酸体分析および^{14}C年代測定、パレオ・ラボ㈱には^{14}C年代測定をそれぞれ依頼した。

分析方法

採取した試料は以下の手順により微化石を抽出した。

花粉化石については、試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.13）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集した。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡で出現する全ての種類について同定・計数した。出現率の算出において木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数として用いた。

珪藻化石は試料１gを過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学的処理を

施し、珪藻化石を濃集した。希釈後、カバーガラスに滴下し乾燥させ、プリュウラックスで封入し、プレパラートを作製した。油浸600倍あるいは1000倍の光学顕微鏡で行ない、200個体以上を同定・計数した。種の同定にはK.Krammer and Lange-Bertalot(1986・1988・1991a・1991b)、K.Krammer(1992)などを用いた。堆積環境の解析にあたっては、淡水生種については安藤（1990)、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991)、汚濁耐性についてはAsai and Watanabe（1995）の環境指標種を参考とした。

植物珪酸体の抽出と定量は、試料約５gについて過酸化水素水と塩酸による有機物の除去、超音波処理（80W、250KHz、１分間）による試料の分散、沈降法による粘土分の除去、ポリタングステン酸ナトリウム（比重2.5）による重液分離を順に行ない、物理・化学処理で植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡しやすい濃度に希釈した後、カバーガラスに滴下し、乾燥させる。その後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。検鏡は光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現するイネ科植物の葉部（葉身と葉鞘）の短細胞に由来する植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身の機動細胞に由来する植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）を、同定・計数する。なお、同定には藤原（1976・1986)、近藤・佐瀬（1986）の分類を参考にした。分析にあたり、分析試料の乾燥重量、プレパラート作製に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物１gあたりの植物珪酸体量を求めた。また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１㎝あたりの植物体生産量を算出した。イネ（赤米）の換算係数は2.94、ヨシ属（ヨシ）は6.31、ススキ属（ススキ）は1.24、メダケ節は1.16、ネザサ節は0.48、クマザサ属（チシマザサ節・チマキザサ節）は0.75、ミヤコザサ節は0.30である。

^{14}C年代測定はパリノ・サーヴェイ㈱、パレオ・ラボ㈱、古環境研究所㈱に依頼した。なお、年代値の算出には放射性炭素の半減期として、Libbyの半減期5,570年を使用した。測定結果を第20～22表に示す。

分析結果

花粉

花粉分析を行なった地点は多岐にわたるが、分析を行なった地点や遺構に関しては第19表にまとめた。なお、本試料の分析はパリノ・サーヴェイ㈱が行なった。ほとんどの試料で花粉化石の出現は極めて悪い（第24～27表)。その中で、比較的花粉を算出した地点の花粉ダイアグラムのみを第87図に示す。以下に各地点ごとの分析結果を述べる。

97B区 P-5

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

97B区 P-2

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

97Ab区 P-1

試料番号４～10ではシダ類胞子は全ての試料から検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。試料１・２では草本花粉の割合が極めて高い。草本花粉ではイネ科の割合が

第19表　分析試料一覧（パリノ・サーヴェイ㈱による）

	試料名			植物珪酸体	花粉
IMT96Ba	SX03			○	
	SX04		③	○	
	SX05		③	○	
			⑨	○	
IMT97B	P-5		1	○	○
			2	○	○
			3	○	○
			4	○	○
			5	○	○
	P-2		1	○	○
			2	○	○
			3	○	○
			4	○	○
			5	○	○
			6	○	○
			7	○	○
IMT97Ab	P-1		1	○	○
			2	○	○
			3	○	○
			4	○	○
			5	○	○
			6	○	○
			7	○	○
			8	○	○
			9	○	○
			10	○	○
	P-4		3	○	
			4	○	
			5	○	
	SD46埋土		最下層		○
	南壁ｾｸｼｮﾝ		64	○	
	島畑10 中央ﾍﾞﾙﾄ		1	○	○
			2	○	○
			3	○	○
			4	○	○
			5	○	○
			6	○	
			7	○	
			8	○	
			9	○	
			10	○	
IMT97Ca	SD27		最下層	○	
	Bｻﾝﾌﾟﾙ		2	○	○
			3	○	○
			4	○	○
			5	○	○
	SD27		中層	○	○
	SX02			○	
	SX06(2層)	黒褐色粘土		○	
IMT97Ca	SX06(2層)	灰褐色粘土		○	
	SX04			○	
IMT97Cb	No.1北壁		1	○	
			2	○	
			3	○	
	No.2北壁		3	○	○
			4	○	○
			5	○	○
			6	○	
	No.3西壁		5	○	
			6	○	
			7	○	
			8	○	
	No.5		3	○	○
			4	○	○
			5	○	○
	No.6北壁		1	○	
	No.7		4	○	○
	No.8		1	○	○
			2	○	○
			3	○	○
			4	○	○
			5	○	○
			6	○	
			7	○	
			8	○	
			9	○	
			10	○	
			11	○	
			12	○	
			13	○	
	1地点		①-1	○	○
			①-2	○	○
			②-1	○	○
			②-2	○	○
	2地点		①	○	
			②	○	
	3地点		①	○	○
	4地点		①	○	
			②	○	
	5地点		①-1	○	
			①-2	○	○
	6地点		②-1	○	
			②-2	○	
			②-3	○	
	7地点		①-1	○	
			①-2	○	
	9地点		①	○	○
	合　計			96	66

第20表　^{14}C年代値（パリノ・サーヴェイ㈱による）

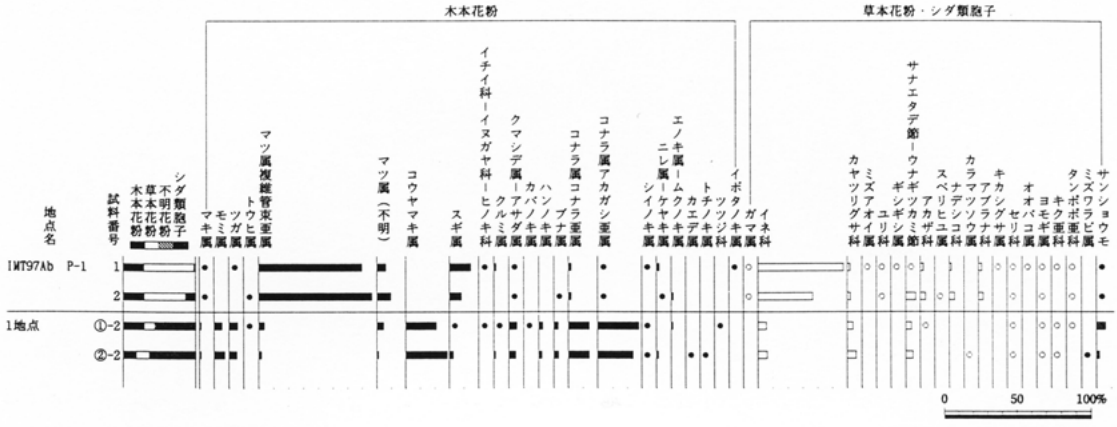
調査区	地点（遺構・試料名）	種類	14C年代値（yrs B P）	Code No.
96Bb区	SK28（VA16m）	炭化物混じりシルト	3400±70	1450B.C. Gak-20050
96Ti区	SK02	炭化材混じりシルト	2600±60	650B.C. Gak-20051
96Ti区	SB02焼土	砂混じりシルト	3310±80	1360B.C. Gak-20052
96Ti区	SB03　第3層	炭化物混じり泥	3120±110	1170B.C. Gak-20053
97Ab区	SD46　埋土下層黒色土	炭化物混じり泥	2910±50	960B.C. Gak-20054
97B区	SK166（VB12b）	炭化材	3260±60	1310B.C. Gak-20055
97B区	P-1	砂混じり粘土	2990±60	1040B.C. Gak-20056
97B区	P-4	砂混じり粘土	2900±60	950B.C. Gak-20057
97B区	樹種No. 1	木材	3670±60	1720B.C. Gak-20058
97B区	樹種No.2	木材	3440±60	1490B.C. Gak-20059
97B区	樹種No.3	木材	3080±90	1130B.C. Gak-20060
96Ti区	SK01	炭化物混じりシルト	2950±110	1000B.C. Gak-20040
97Ab区	SD46　埋土最下層	炭化物混じり泥	2440±80	490B.C. Gak-20041
97Ab区	SK131　No.6	炭化物混じり泥	3340±90	1390B.C. Gak-20042
97B区	P-2	砂混じり粘土	2540±90	590B.C. Gak-20043
97Ca区	SD27　中層炭化物	炭化物混じり粘土	2770±150	820B.C. Gak-20044
97Ca区	SD27　最下層炭化物	炭化物混じり粘土	2320±120	370B.C. Gak-20045
97Ca区	SK39	炭化物混じりシルト	2890±90	940B.C. Gak-20046
97Cb区	SK58	炭化物混じりシルト	3390±80	1440B.C. Gak-20047
96D区	西壁No.15	砂混じり泥	3140±120	1190B.C. Gak-20048
96Ti区	SX01	砂質シルト	2630±90	680B.C. Gak-20049

第21表　^{14}C年代値（古環境研究所㈱による）

試料番号	地点・層準	種類	測定法	14C年代 (yrs B P)	δ13C（‰）	補正14C年代 (yrs B P)	暦年代 交点（1σ）	測定No. (Beta-)
No. 1	96E区東壁 11層	土壌	β線法	2580±50	-25.8	2560±50	BC785 (BC800～765) (BC615～600)	105387
No. 2	96E区東壁 14層	木材	β線法	3410±70	-28.0	3360±70	BC1645 (BC1730～1530)	105388
No. 3	96Ba区北側東西トレンチ北壁 (P-1) 5層	土壌	β線法	2470±60	-21.1	2530±60	BC775 (BC795～745) (BC700～530)	105389
No. 4	96Ba区中央トレンチ西壁 (P-2) 10層	土壌	β線法	2710±50	-24.0	2730±50	BC845 (BC910～820)	105390
No. 5	96Ba区東側南北トレンチ西壁 (P-3) 9層	土壌	β線法	2770±50	-26.1	2750±50	BC890 (BC925～825)	105391

第22表　^{14}C年代値（パレオ・ラボ㈱による）

測定No.	試料	14C年代値	補正暦年代
PLD-371	木材　IMT96E Ⅳ B11K 検Ⅲ特　流木2-①	2,540±90yrBP (BC 590年)	交点年代値　BC　770年 1σ年代幅　BC 800 to 520
PLD-372	木材　IMT96E Ⅳ B11K 検Ⅲ特　流木2-②	2,900±90yrBP (BC 950年)	交点年代値　BC　1,050年 1σ年代幅　BC 1,250 to 1,240 BC1,210 to 930
PLD-373	木材　IMT96E Ⅳ B81 検Ⅲ特　流木1-①	2,400±90yrBP (BC 450年)	交点年代値　BC　410年 1σ年代幅　BC 760 to 680 BC 650 BC 550 to 390
PLD-374	木材　IMT96E Ⅳ B81 検Ⅲ特　流木1-②	2,930±90yrBP (BC 980年)	交点年代値　BC　1,120年 1σ年代幅　BC 1,260 to 990
PLD-375	木材　IMT97B Ⅳ B9g NR01上層（弥生時代Ⅱ期）	2,160±80yrBP (BC 210年)	交点年代値　BC　190年 1σ年代幅　BC 360to280 BC260 to 60



第87図　主要花粉化石群集
出現率は、木本花粉は木本花粉化総数、草木花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、○●は１％未満の試料について検出した種類を示す。

高く、ガマ属、ミズアオイ属、サンショウモなども検出される。一方、木本花粉ではマツ属が高率で検出される。試料３では、これら２試料に比べて花粉化石の数は少ないが、傾向は類似する。

97Ab区 SD46埋土

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

97Ab区　島畑10中央ベルト

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

97Ca区 Bサンプル

試料２と３でシダ類胞子が多く見られるものの、花粉化石はほとんど見られない。

97Ca区 SD27中層

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

97Cb区 No. 2 北壁

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

97Cb区 No. 5

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

97Cb区 No. 7

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

97Cb区 No. 8

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

１地点

①-1と②-1ではシダ類胞子が比較的多く検出されるものの、花粉化石はほとんど検出されない。一方、①-2と②-2では花粉化石が比較的多く検出されるが、①-1や②-1同様、シダ類胞子が多い。木本花粉ではコウヤマキ属、コナラ亜属、アカガシ亜属の割合が高い。一方、草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科などが検出される。シダ類胞子の中で種類の

判明しているものはミズワラビ属とサンショウモであるが、サンショウモの出現率が比較的高い。

3地点

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

5地点

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

9地点

シダ類胞子が少量検出されるが、花粉化石はほとんど検出されない。

植物珪酸体(1)　植物珪酸体分析を行なった地点は多岐にわたる（第19表）。なお、本試料の分析はパリノ・サーヴェイ㈱が行なった。花粉や珪藻化石と比較すると、保存状態はよい。結果を第28～34表、第88～89図に示す。以下に各地点ごとの分析結果を述べる。

96Ba区 SX03、SX04、SX05

これらの遺構はほぼ同様な組成を示す。タケ亜科（ネザサ節、クマザサ属を含む）、ウシクサ族（ススキ属を含む）などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。

97B区 P-5

タケ亜科（ネザサ節、クマザサ属を含む）、ウシクサ族（ススキ属を含む）、ヨシ属などが比較的多く見られるが、特に試料2・4でススキ属の短細胞が多産し、20,000個/g程度検出される。イネ属は全ての試料から検出され、短細胞で平均2,000個/g程度、機動細胞で平均3,000個/g程度検出される。

97B区 P-2

タケ亜科（ネザサ節、クマザサ属を含む）、ウシクサ族（ススキ属を含む）、ヨシ属の短細胞、機動細胞珪酸体などは検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。イネ属は試料4・5以外で検出されるが、平均的に数は少ない。最も多い試料1で短細胞が5,000個/g程度、機動細胞で2,000個/g程度である。

97Ab区 P-1

タケ亜科（ネザサ節、クマザサ属を含む）、ウシクサ族（ススキ属を含む）、ヨシ属の短細胞、機動細胞珪酸体などは検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。イネ属は試料5より上位で検出され、上位ほど増加する傾向にある。最も多い試料1で、短細胞が10,000個/g程度、機動細胞で7,000個/g程度である。

97Ab区　P-4

タケ亜科（ネザサ節、クマザサ属を含む）、ウシクサ族（ススキ属を含む）、ヨシ属の短細胞、機動細胞珪酸体などは検出されるが、試料3でヨシ属短細胞の検出数が高く、約20,000個/g検出される。イネ属は全ての試料で検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。

97Ab区　南壁セクション

タケ亜科（ネザサ節、クマザサ属を含む）、ウシクサ族（ススキ属を含む）、ヨシ属の短細胞、機動細胞珪酸体などは検出されるが、１gあたりの検出数は概して低い。

97Ab区　島畑10中央ベルト

タケ亜科（ネザサ節、クマザサ属を含む）、ウシクサ族（ススキ属を含む）、ヨシ属の短細胞、機動細胞珪酸体などは検出されるが、１gあたりの検出数は概して低い。その中でも試料９ではタケ亜科の短細胞珪酸体が、試料８ではウシクサ属の短細胞珪酸体が多産する。

97Ca区　SD27最下層

タケ亜科（ネザサ節、クマザサ属を含む）、ウシクサ族（ススキ属を含む）、ヨシ属の短細胞、機動細胞珪酸体などは検出されるが、１gあたりの検出数は概して低い。

97Ca区　Bサンプル

ヨシ属、ススキ属、タケ亜科などが検出されるが、特に試料３・4においてヨシ属とススキ属の短細胞珪酸体の検出数が多い。イネ属は試料３で短細胞珪酸体がわずかにみられるのみである。

97Ca区　SX02

タケ亜科（ネザサ節、クマザサ属を含む）の短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、１gあたりの検出数は概して低い。

97Ca区　SX06（２層）

ウシクサ族（ススキ属を含む）の短細胞、機動細胞珪酸体が多く検出され、その他タケ亜科やヨシ属などもみられる。イネ属は全ての試料から検出されるが、検出量は少ない。

97Ca区　SX04

タケ亜科、ウシクサ族、ヨシ属、イネ属などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、１gあたりの検出数は概して低い。

97Cb区　No.１北壁

タケ亜科、ウシクサ族、ヨシ属、イネ属などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、１gあたりの検出数は概して低い。

97Cb区　No.２北壁

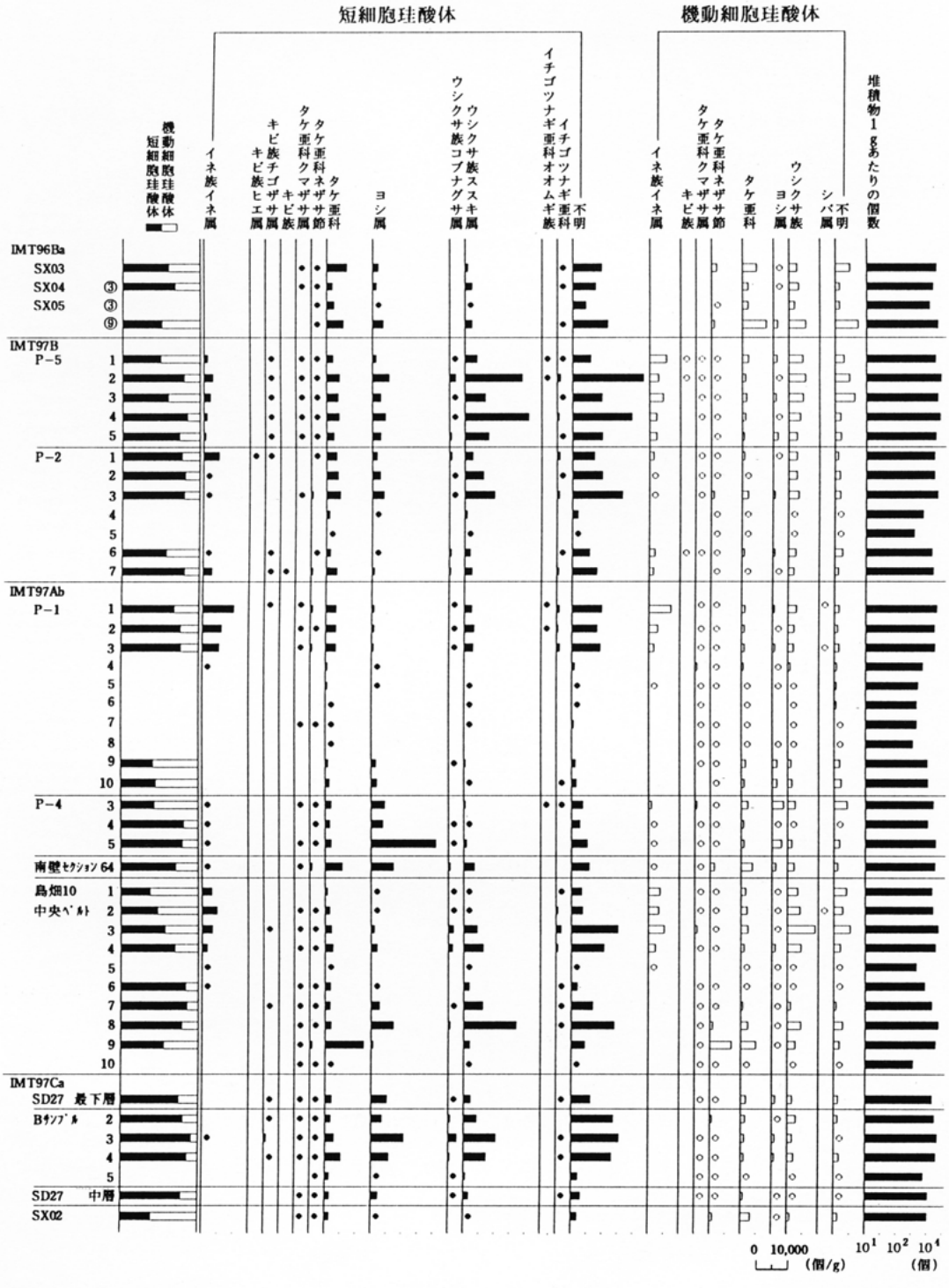
試料６でヨシ属の短細胞が多産し、約30,000個/gの産出を示す。また、試料５～６ではススキ属の短細胞珪酸体が約15,000個/g検出される。その他の試料では目立って多い種類はない。なお、イネ属は試料５で少量検出されるのみである。

97Cb区　No.３西壁

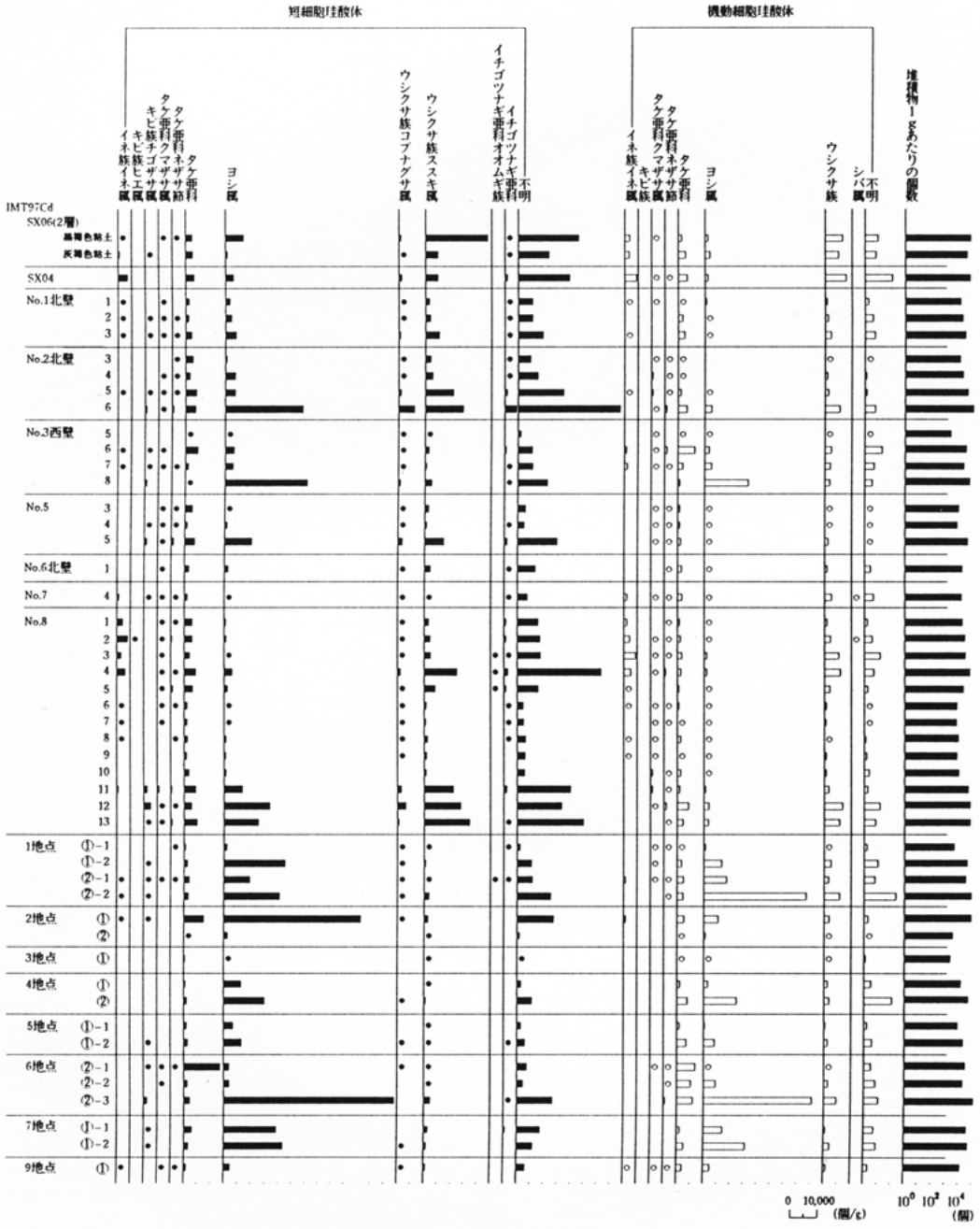
試料８でヨシ属の機動細胞・短細胞珪酸体が多産し、特に短細胞では約30,000個/ｇの産出を示す。その他の試料ではヨシ属のほか、タケ亜科やウシクサ属などが検出されるが、目立って多い種類はない。なお、イネ属は試料６、７で少量検出されるのみである。

97Cb区　No.５

試料５でヨシ属とススキ属の短細胞が多産するが、その他の試料では目立って多い種類



第88図　植物珪酸体含量の層位的変化(1)
堆積物1gあたりの個数に換算した。



第89図　植物珪酸体含量の層位的変化(2)
堆積物1gあたりの個数に換算した

はない。

97Cb区　No. 6 北壁

タケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。

97Cb区　No. 7

タケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。

97Cb区　No. 8

試料11～13でヨシ属とススキ属の短細胞珪酸体、ウシクサ属の機動細胞珪酸体が多産する。特にヨシ属とススキ属の短細胞珪酸体は顕著であり、約15,000個/g程度の検出量を示す。また、ウシクサ族（ススキを含む）に関しては、試料4・5でも多産する。イネ属は試料9より上位で検出され、上位ほど増加傾向にある。イネ属は短細胞、機動細胞ともに、多い試料でも4,000個/g程度である。

1地点

試料①-1ではタケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。他の試料ではヨシ属の短細胞、機動細胞珪酸体が目立ち、特に②-2のヨシ属機動細胞珪酸体は約35,000個/g検出される。イネ属は試料②-1、②-2で検出されるが、数は少ない。

2地点

試料②ではタケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。試料①ではヨシ属の短細胞珪酸体が目立ち、約50,000個/g検出される。イネ属は試料①で検出されるが数は少ない。

3地点

タケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。

4地点

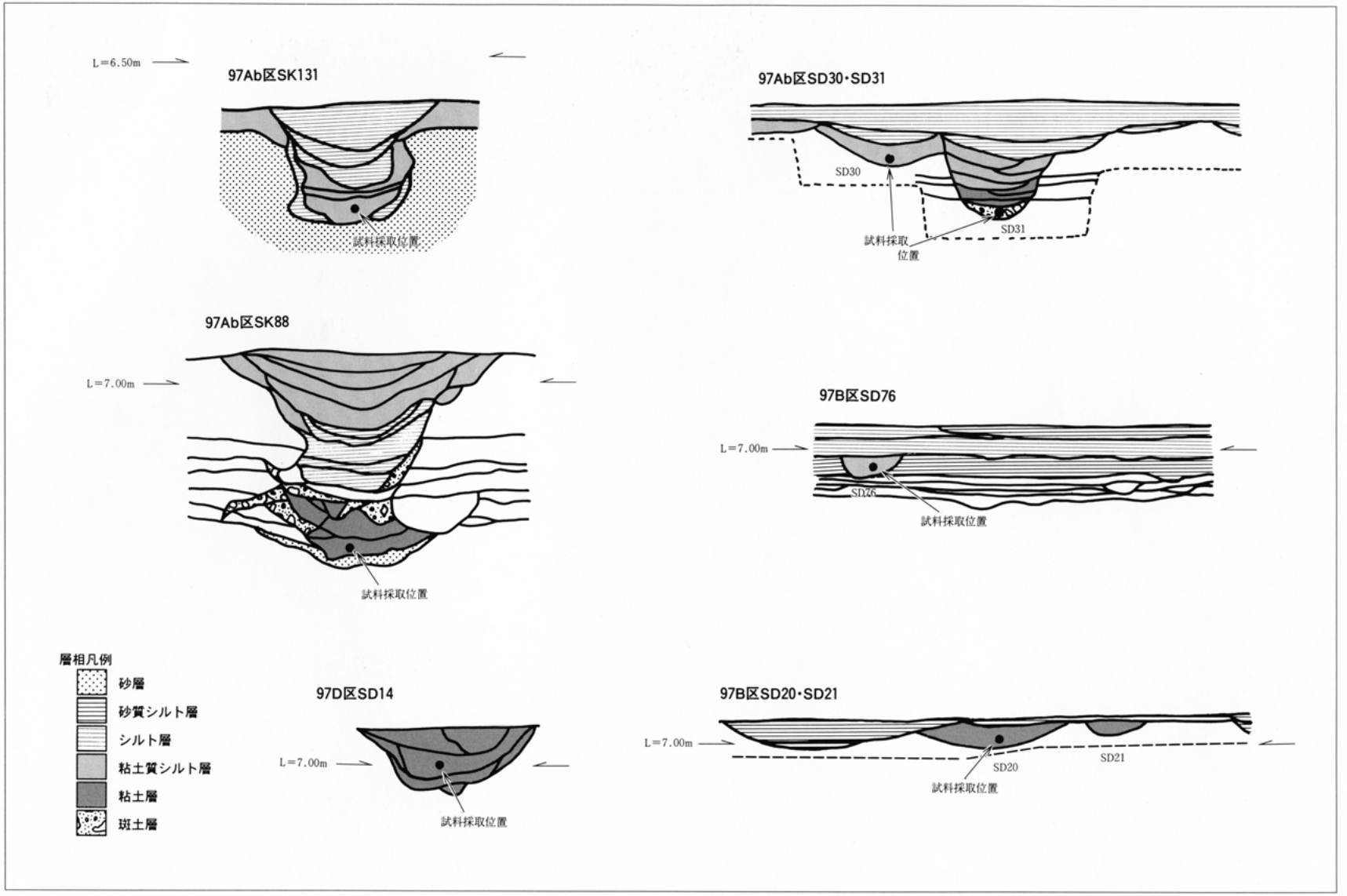
ヨシ属の短細胞珪酸体、機動細胞珪酸体ともに目立ち、多い試料で約15,000個/gほど検出される。他はタケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。

5地点

タケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。

6地点

試料②-3でヨシ属の短細胞、機動細胞珪酸体ともに目立ち、機動細胞で約40,000個/g、短細胞で約65,000個/gほど検出される。他はタケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が比較的多く検出される。



第90図　珪藻化石分析試料採取位置図

7地点

ヨシ属の短細胞珪、機動細胞珪酸体ともに目立ち、機動細胞で約20,000個/gほど検出される。他はタケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。

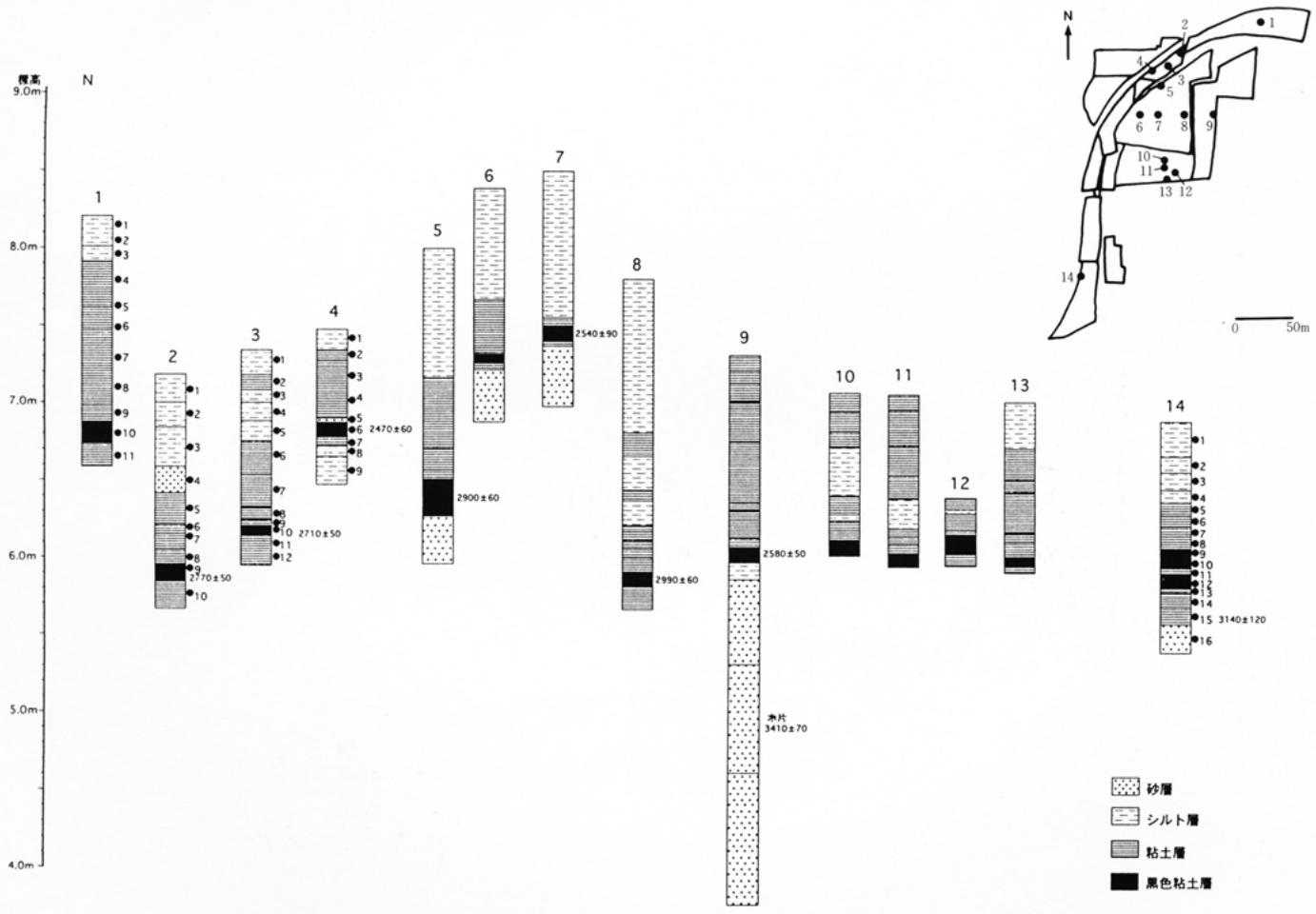
9地点

タケ亜科、ウシクサ族などの短細胞、機動細胞珪酸体が検出されるが、1gあたりの検出数は概して低い。

花粉・珪藻分析

97Ab区SK131・SK88・SD30・SD31、97D区SD14、97B区SD20・SD76の各遺構から採取した試料の花粉・珪藻化石分析を行なった。検鏡は花粉化石を堀木が、珪藻化石を鬼頭・尾崎が行なった。各遺構の試料採取位置を第90図に示す。各遺構試料からの花粉・珪藻化石の出現は極めて悪く、特に花粉化石は全く検出されなかった。珪藻化石においても、統計的に有意な200個体を計数できたのは97Ab区のSK131のみである（第23表）。

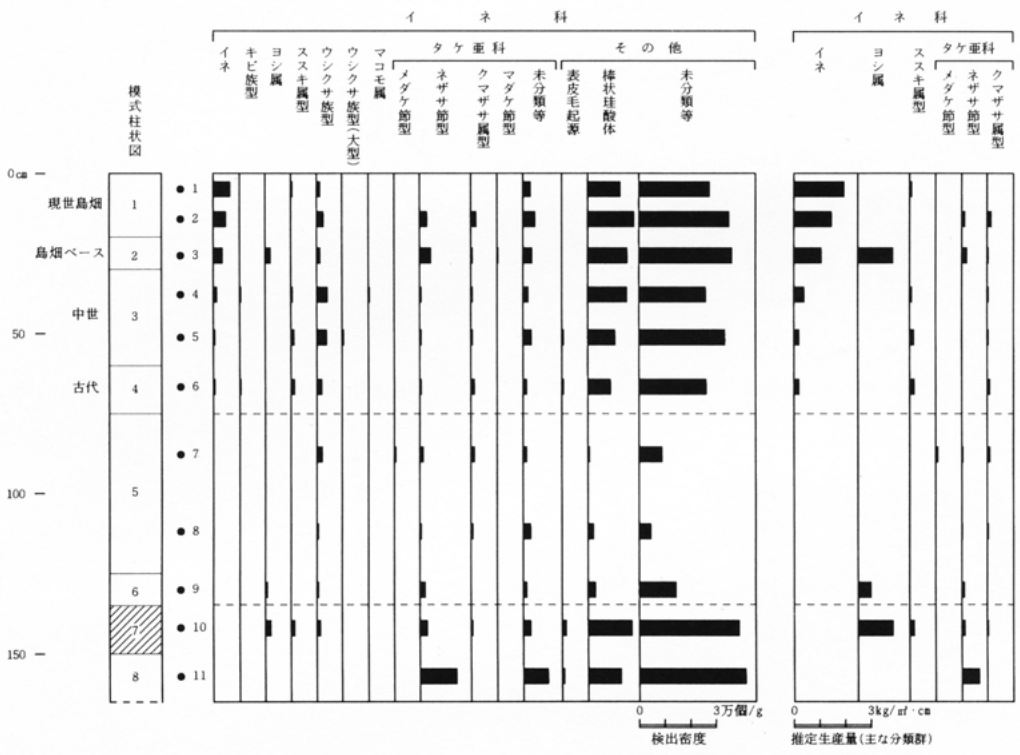
97Ab区SK131からは8属15種の珪藻殻が同定される。生態性では底生種が全体の92%を占める。優占種として底生種・塩分不定性種の*Stauroneis anceps*が全体の65.5%と高い出



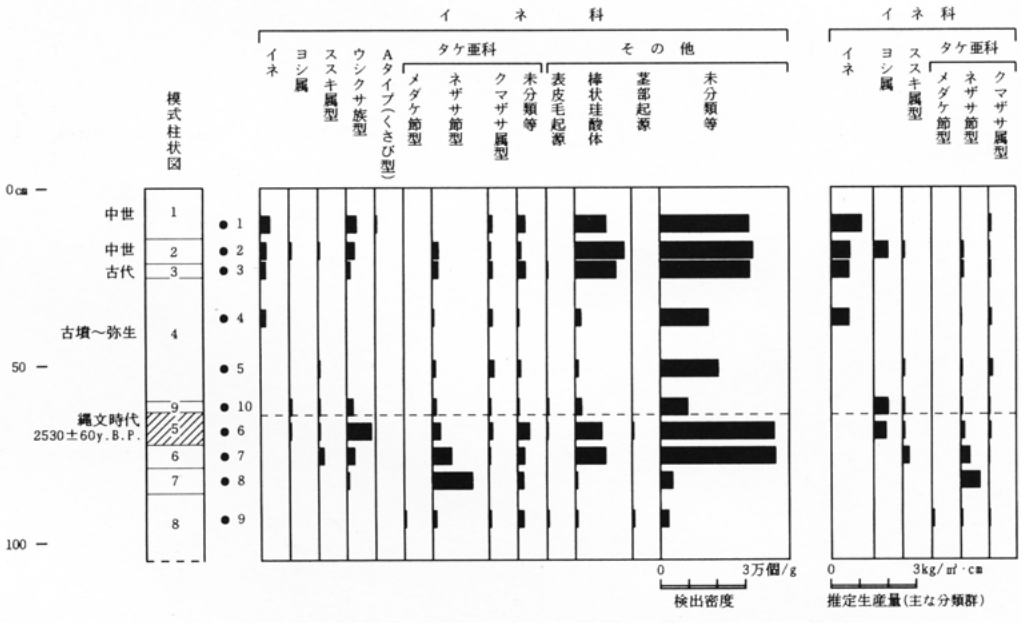
第91図　三ツ井遺跡層序断面図

1：96A区，2～4：96Ba区，5～8：97B区，9：96E区，10～13：97Ab区，14：96D区

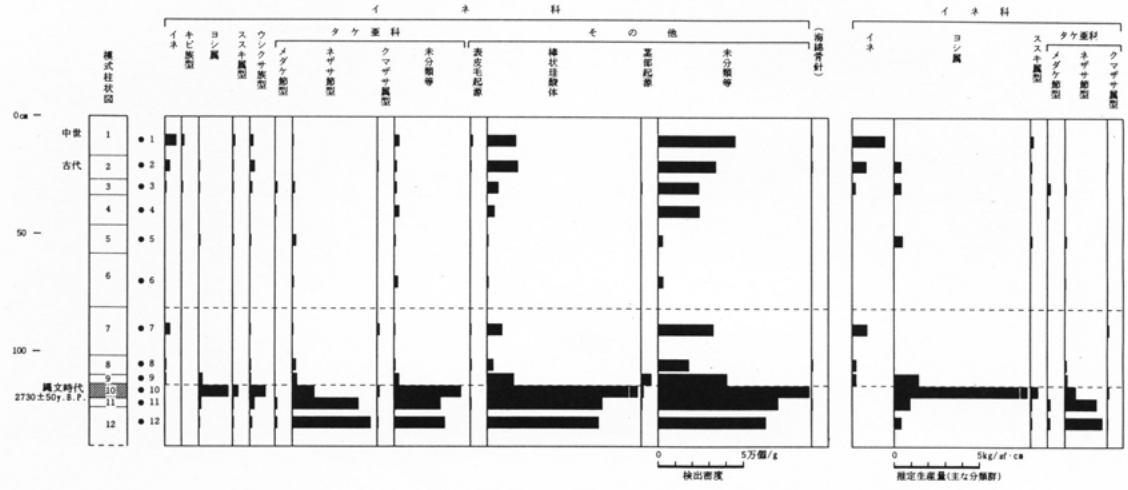
（層序断面の右側に古環境研究所㈱による植物珪酸体試料採取位置と^{14}C年代値を記す。）



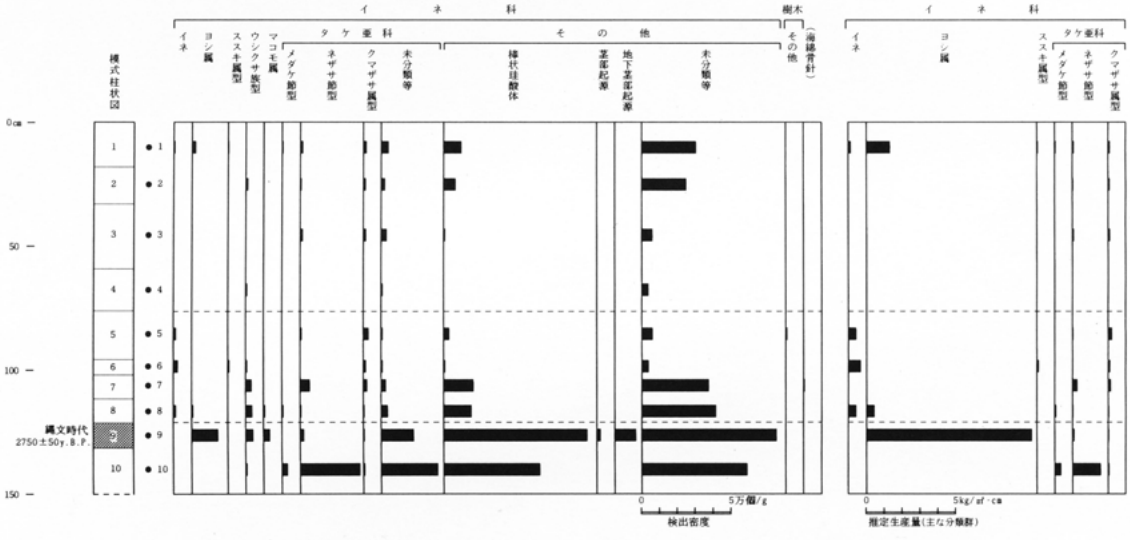
第92図　96A区、中央ベルト中央部における植物珪酸体分析結果



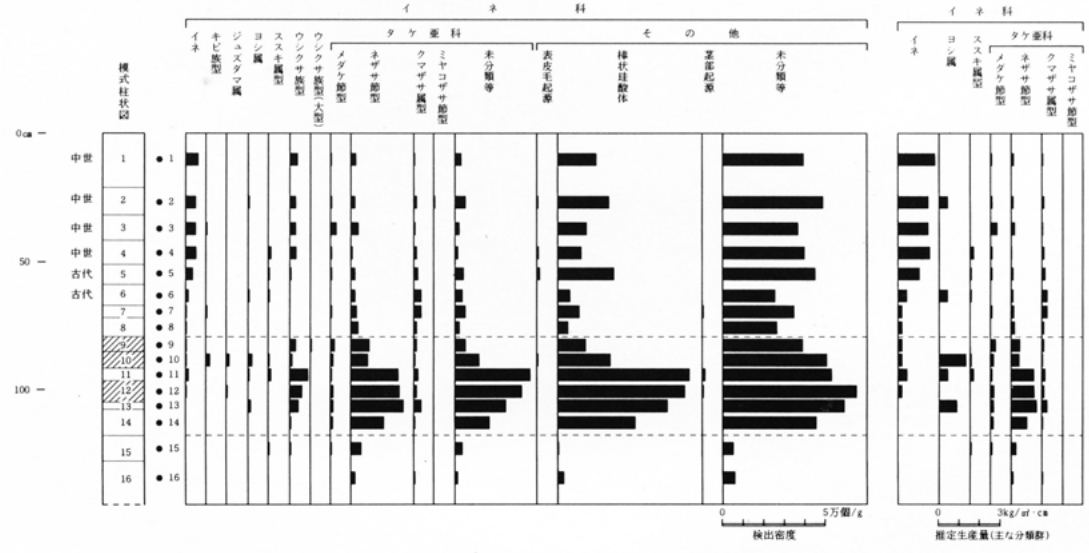
第93図　96Ba区、北側東西トレンチ北壁（P1）における植物珪酸体分析結果
（^{14}C年代は補正^{14}C年代値）



第94図　96Ba区、中央トレンチ西壁（P2）における植物珪酸体分析結果
（^{14}C年代は補正^{14}C年代値）



第95図　96Ba区、東側西壁南北トレンチ（P3）における植物珪酸体分析結果
（^{14}C年代は補正^{14}C年代値）



第96図　96D区、西壁深掘トレンチにおける植物珪酸体分析結果

現率を示す。97Ab区SK88・SD31、97D区SD14からは24～31個体、97Ab区SD30、97B区SD20・SD76では１～４個体のみで珪藻殻はほとんどみられない。

植物珪酸体(2)　96A区で１地点、96Ba区で３地点、96D区で１地点において植物珪酸体化石分析を行なった。分析は古環境研究所㈱による。採取地点および採取層準を第91図に示す。本地点でも花粉・珪藻化石と比較すると、保存状態はよい。試料全体から検出された植物珪酸体の分類群は以下の通りである。

〔イネ科〕機動細胞由来：イネ、キビ族型、ジュズダマ属、ヨシ属、ススキ属型（ススキ属など）、ウシクサ族型、ウシクサ族型（大型）、マコモ属、Aタイプ（くさび型）

〔イネ科-タケ亜科〕機動細胞由来：メダケ節型（メダケ属メダケ節・リュウキュウチク節、ヤダケ属）、ネザサ節型（おもにメダケ属ネザサ節）、クマザサ属型（チシマザサ節やチマキザサ節など）、ミヤコザサ節型（おもにクマザサ属ミヤコザサ節）、マダケ属型（マダケ属、ホウライチク属）、未分類等

〔イネ科-その他〕表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、茎部起源、地下茎部起源、未分類、樹木等

これらの分類群について定量を行なった。結果を第35～37表、第92～96図に示す。以下に各地点ごとの分析結果を述べる。

96A区中央ベルト中央部では、１層（試料１）から８層（試料11）までの層準について分析を行った（第92図）。その結果、１層（試料１）から４層（試料６）までの各層からイネが検出された。

96Ba区北側東西トレンチでは、１層（試料１）から８層（試料９）までの層準について分析を行った（第93図）。１層（試料１）から４層（試料４）までの各層からイネが検出された。

96Ba区中央トレンチ西壁において、１層（試料１）から12層（試料12）までの層準について分析を行ない（第94図）、１層（試料１）～３層（試料３）、７層（試料７）～９層（試料９）の各層からイネが検出された。

96Ba区東側西壁南北トレンチでは、1層（試料１）から10層（試料10）までの層準について分析を行った（第95図）。１層（試料１）、５層（試料５）、６層（試料６）、８層（試料８）の各層からイネが検出された。

96D区西壁深掘トレンチでは、１層（試料１）から16層（試料16）までの層準について分析を行ない、１層（試料１）から12層（試料12）までの各層からイネが検出された（第96図）。

考　察　古環境解析を目的として微化石を行なった。その結果、花粉・珪藻化石の保存状態は極めて悪く、ほとんどの試料で、解析に必要な統計処理を行なえる数の微化石を抽出することができなかった。以下では、堆積層序・堆積構造から読み取れる古環境情報と、保存状態の比較的良好であった植物珪酸体化石の結果をもとに考察を加える。

古地理変遷　三ツ井遺跡では漆黒色～黒色の粘土層の下位に粗粒～細粒砂層が確認される（第91図）。本砂層には層理全体が一方向に傾斜するイプシロン型斜層理が確認された（第２章第９

図)。このような堆積構造は河川流路縁辺部に特有のものであり、流路全体が徐々に側方移動しながら堆積物を埋積させるために生じる（側方付加堆積物と呼ぶ)。側方付加堆積物は、一般に蛇行河川の滑走斜面側に顕著に認められ、ポイントバーを形成する内部堆積構造のひとつである。三ツ井遺跡で見られる斜層理は10～30度の幅の傾斜角をもって全体に東方向へ傾斜する。層理が東傾斜を示すことから、流路は西から東へ徐々に移動しながらポイントバーを形成させたことがわかる。また、砂層は層厚20～30cm程度の漆黒色～黒色粘土層、あるいは灰色粘土層と黒色粘土層とのセットによってほぼ水平かつ不整合的に覆われる。標高5.0m付近の砂層中から採取した木片の^{14}C年代が3410±70yrs B.P.、砂層を覆う標高6.0m前後を示す黒色粘土層では2990～2580yrs B.P.を示す。縄文後期頃に当地域を流下していた河川は、縄文晩期において後背湿地的な環境に変化したことがわかる。

稲作跡の検討　水田跡（稲作跡）の検証や探査を行う場合、一般にイネの植物珪酸体が試料1gあたりおよそ5,000個以上と高い密度で検出された場合に、そこで稲作が行われていた可能性が高いと判断している。また、その層にイネの密度のピークが認められれば、上層から後代のものが混入した危険性は考えにくくなり、その層で稲作が行われていた可能性はより確実なものとなる。以上の判断基準にもとづいて稲作の可能性について検討を行った。

96A区中央ベルト中央部からは、1層（試料1）から4層（試料6）までの各層からイネが検出され、1層（現世島畑、試料1）では密度が6,700個/gと高い値であり、2層（島畑ベース・試料3）でも3,700個/gと比較的高い値である。これらは、比較的最近の稲作に由来するものと考えられる。3層（中世、試料4、5）および4層（古代、試料6）では密度が1,000個/g前後と、上位の試料に比べると密度は低いが、これらの層で稲作が行われていた可能性もある（第92図)。96Ba区北側東西トレンチでは、1層（試料1）から4層（試料4）までの各層からイネが検出された。このうち、1層（中世、試料1）では密度が3,700個/gと比較的高い値である。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその周辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。2層（中世、試料2)、3層（中世、試料3)、4層上部（古墳～弥生、試料4）でも、1層（試料1）と比較すると密度が2,200～2,300個/gと比較的低いが、これらの層で稲作が行われていた可能性も考えられる。96Ba区中央トレンチ西壁からは、1層（試料1）～3層（試料3)、7層（試料7）～9層（試料9）の各層からイネが検出された。このうち、1層（中世、試料1）では密度が6,600個/gと高い値である。したがって、同層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。7層（試料7）では、密度が3,000個/gと比較的低い値であるが、直上の4層～6層ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、同層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。その他の層では、密度が比較的低いことから、稲作が行われていた可能性は考えられるものの、上層もしくは他所からの混入の可能性も否定できない（第94図)。

96Ba区東側西壁南北トレンチでは、1層（試料1)、5層（試料5)、6層（試料6)、

8層（試料8）の各層からイネが検出された。このうち、5層（試料5）と7層（試料7）では密度が1,500個/gと比較的低い値であるが、それぞれの直上層ではまったく検出されないことから、上層から後代のものが混入したことは考えにくい。したがって、これらの層の時期に調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていた可能性が考えられる。その他の層でも密度が比較的低いものの、稲作が行われていた可能性が考えられる（第95図）。

96D区西壁深堀トレンチからは、1層（試料1）から12層（試料12）までの各層からイネが検出された。1層（中世、試料1）から4層（中世、試料4）までの各層では、密度が5,100～6,200個/gと高い値であり、5層（古代、試料5）でも3,600個/gと比較的高い値である。したがって、これらの層では稲作が行われていた可能性が高いと考えられる。その他の層でも密度が1,000個/g程度と、1～5層の試料と比較して密度が低いものの、稲作が行われていた可能性は考えられる（第96図）。

栽培植物の検討

植物珪酸体分析で同定される分類群のうち栽培植物が含まれるものには、イネ以外にもオオムギ族（ムギ類が含まれる）、ヒエ属型（ヒエが含まれる）、エノコログサ属型（アワが含まれる）、ジュズダマ属（ハトムギが含まれる）、オヒシバ属型（シコクビエが含まれる）、モロコシ属型などがある。このうち、本遺跡の試料からはジュズダマ属が検出された。

ジュズダマ属型は、西壁深掘トレンチの10層（試料10）と12層（試料12）の2試料から検出された。ジュズダマ属型には食用や薬用となるハトムギが含まれるが、現時点では栽培種と野草のジュズダマとを完全に識別するには至っていない。また、密度も1,000個/g程度と低い値であることから、ここでハトムギが栽培されていた可能性は考えにくい。イネ科栽培植物の中には未検討のものもあるため、その他の分類群の中にも栽培種に由来するものが含まれている可能性が考えられる。これらの分類群の給源植物の究明については今後の課題としたい。

植生と環境

中央トレンチ西壁（P2）および東側西壁南北トレンチ（P3）では、最下層の灰色粘土層から棒状珪酸体やネザサ節型、タケ亜科（未分類等）が多量に検出され、ヨシ属やススキ属型、ウシクサ族型、メダケ節型なども検出された。棒状珪酸体はおもにイネ科植物の結合組織細胞に由来しているが、イネ科以外にもカヤツリグサ科やシダ類などでも形成される。棒状珪酸体の形態についてはこれまであまり検討がなされていないことから、その給源植物の究明については今後の課題としたい。

縄文時代とされる黒色粘土では、ネザサ節型が大幅に減少し、ヨシ属が急激に増加している。同層準の試料では放射性炭素年代測定でBC775～BC890年頃の暦年代値が得られており、縄文時代晩期に堆積したものと考えられる。黒色粘土の直上層では、各分類群とも大幅に減少しており、前述のようにイネが出現している。

おもな分類群の推定生産量によると、灰色粘土層ではネザサ節型、黒色粘土層ではヨシ属が卓越しており、その上位層ではイネが優勢となっていることが分かる。その他の地点については、土層の対比が不明であるものの、おおむね同様の傾向であったものと考えられる。

以上のことから、下位の灰色粘土層の堆積当時は、ネザサ節などのタケ亜科を主体としたイネ科植生であり、比較的乾燥した堆積環境であったものと推定される。縄文時代晩期とされる黒色粘土層の堆積当時は、ヨシ属などが生育する湿地的な環境であったと考えられ、ネザサ節はあまり見られなくなったものと推定される。黒色粘土層の上層の時期には、このような湿地を利用して水田稲作が開始されたものと推定される。

文　献

Asai, K. and Watanabe, T., 1995, Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution(2)Saprophilous and saproxenous taxa, Diatom, 10, 35-47.

安藤一男, 1990, 淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用, 東北地理, 2, 73-88.

藤原宏志, 1976, プラント・オパール分析法の基礎的研究(1)－数種イネ科栽培　植物の珪酸体標本と定量分析法－. 考古学と自然科学, 9, 15－29.

藤原宏志・杉山真二, 1984, プラント・オパール分析法の基礎的研究(5)－プラント・オパール分析による水田址の探査－. 考古学と自然科学, 17, 73－85.

伊藤良永・堀内誠示, 1991, 陸生珪藻の現在に於ける分布古環境解析への応用, 珪藻学会誌,, 23-45.

鬼頭　剛・尾崎和美・辻本裕也・伊藤良永・馬場健司, 1998, 微化石分析による一色青海遺跡の古環境, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第79集「一色青海遺跡, 自然科学・考察編」, 13-36.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1986, Bacillariophyceae, Teil1, Navivulaceae. Band 2/1von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, GustavFischer Verlag., 876p.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1988, Bacillariophyceae, Teil2, Epithemiaceae,. Bacillariaceae. Surillaceae. Band2/ 2von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag., 536p.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991a, Bacillariophyceae, Teil3, Epithemiaceae,. Centrales, Fragilariaceae, Eunotiaceae. Band2/3von：Die Suesswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag., 230p.

Krammer, K. and Lange-Bertalot, H., 1991b, Bacillariariophyceae, Teil 4, Achnanthaceae, Kritische Ergaenzungen zu Navicula(Lineolatae)und Gomohonema. Band 2/4 von：Die Susswasserflora von Mitteleuropa, Gustav Fischer Verlag, 248p.

Krammer, K., 1992, PUNNULARIA, eine Monographie der europaischen Taxa, BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26, BERLIN・STUTTGART, 1-353.

桑原　徹, 1975, 濃尾平野における地下水利用と地下水変動の実態, 愛知県地盤沈下研究会報告書, 愛知県, 58-88.

近藤錬三・佐瀬　隆, 1986, 植物珪酸体分析, その特性と応用, 第四紀研究, 25, 31-64.

森　勇一, 1992, 朝日遺跡およびその周辺地域の地質と古環境, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡・自然科学編」, 9-40.

森　勇一, 1998, 一色青海遺跡から産出した昆虫化石分析, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第79集「一色青海遺跡, 自然科学・考察編」, 47-56.

濃尾平野第四系研究グループ, 1977, 濃尾平野第四系の層序と微化石分析, 第四紀研究, 20, 64-78.

坂本　亨・桑原　徹・糸魚川淳二・高田康秀・脇田浩二・尾上　亨, 1984, 名古屋北部地域の地質, 地域地質研究報告（5万分の1図幅）, 地質調査所, 64p.

杉崎隆一・柴田　賢, 1961a, 地下水の地球化学的研究（第1報）, 濃尾平野の地下構造と帯水層の分布, 地質雑, 67, 335-345.

杉崎隆一・柴田　賢, 1961b, 地下水の地球化学的研究（第2報）, 濃尾平野における地下水と地質構造の関連性, 地質雑, 67, 427-439.

多田文男・井関弘太郎, 1955, 濃尾平野の地形発達と地盤沈下, 総理府資源調査会事務局, 1-82.

海津正倫, 1992, 濃尾平野における縄文・弥生時代の環境変化と朝日遺跡, 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第31集「朝日遺跡・自然科学編」, 41-57.

第23表　珪藻分析結果

学名	pH	水流性	生態性	塩分	試料番号 1	2	3	4	5	6	7
Amphora libyca Ehrenberg	Al-ph	Ind.	Bent.	Ind.				1			
Caloneis sp.	–	–	–	–				1			
Cymbella aspera (Ehrenberg) Cleve	Al-ph	Ind.	Epip.	Ind.					6		
Cymbella naviculiformis Auerswald	Ind.	Ind.	Epip.	Ind.	1						
Cymbella turgidula Grunow	Ind.	R-ph	Epip.	Ind.				1			
Cymbella sp.	–	–	–	–				2			
Diploneis ovalis (Hilse) Cleve	Ind.	Ind.	Bent.	Ind.		1			2		
Epithemia turgida (Ehrenberg) Kutzing	Al-ph	Li-ph	Epip.	Ind.				1			
Eunotia pectinalis (Dillwyn) Rabenhorst	Ac-ph	Ind.	Epip.	Hp-ho	5						
Eunotia pectinalis var.undulata (Ralfs) Rabenhors	Ac-ph	Ind.	Epip.	Hp-ho				2			
Eunotia sp.	–	–	–	–					1		
Fragilaria ulna (Nitzsch) Lange-Bertalot	Al-ph	Ind.	Epip.	Ind.	1	2	1	3	6		
Fragilaria sp.	–	–	–	–				1		3	
Gomphonema acuminatum Ehrenberg	Ind.	Li-ph	Epip.	Ind.					2		
Gomphonema gracile Ehrenberg	Ind.	Li-ph	Epip.	Ind.		1					
Gomphonema parvulum Kutzing	Al-ph	R-ph	Epip.	Ind.	7	2			3		
Gomphonema sp.	–	–	–	–				2			
Hantzschia amphioxys (Ehrenberg) Grunow	Al-ph	Ind.	Bent.	Ind.	2	6		1			
Hantzschia sp.	–	–	–	–				1			
Navicula mutica Kutzing	Ind.	Ind.	Bent.	Ind.		1					
Neidium bisulcatum (Lagerstedt) Cleve	–	–	Bent.	–	1						
Neidium iridis (Ehrenberg) Cleve	Ind.	Li-ph	Bent.	Hp-ho		2		1			
Pinnularia acrosphaeria W.Smith	Ind.	Ind.	Bent.	Ind.	1						
Pinnularia borealis Ehrenberg	Ind.	Ind.	Bent.	Ind.	2	1					
Pinnularia brevicostata Cleve	Ac-ph	Ind.	Bent.	Ind.	2						
Pinnularia gibba Ehrenberg	Ac-ph	Ind.	Bent.	Ind.	22	3		1			
Pinnularia nobilis Ehrenberg	Ac-ph	Ind.	Bent.	Ind.	4						
Pinnularia viridis (Nitzsch) Ehrenberg	Ind.	Ind.	Bent.	Ind.	12	4		1	3		1
Pinnularia subcapitata Gregory	Ind.	Li-bi	Bent.	Ind.					2		
Pinnularia sp.	–	–	–	–	2	1		1	4	1	2
Rhopalodia gibba (Ehrenberg) O.Muller	Al-ph	Ind.	Epip.	Ha-ph		1					
Rhopalodia gibberula (Ehrenberg) O.Muller	Al-ph	Ind.	Epip.	Me-ha		1					1
Stauroneis anceps Ehrenberg	–	–	Bent.	Ind.	131						
Stauroneis phoenicenteron (Nitzsch) Ehrenberg	Ind.	Li-ph	Bent.	Ind.	7			3			
Surirella sp.	–	–	–	–				1	2		
Total					200	26	1	24	31	4	4

pH		流水性		生態性		塩分に対する適応性	
Al-bi	真アルカリ性種	Li-bi	真止水性種	Bent.	底生種	Euha.	真塩性種
Al-ph	好アルカリ性種	Li-ph	好止水性種	Epip.	付着生種	Meha.	中塩性種
Ind.	不定性種	Ind.	不定性種	Plan.	浮遊性種	Ha-ph	好塩性種
Ac-ph	好酸性種	R-ph	好流水性種	Ind.	不定性種	Ind.	不定性種
Ac-bi	真酸性種	R-bi	真流水性種	–	不明種	Hp-ho	嫌塩性種
–	不明種	–	不明種			–	不明種

試料番号

1. 97Ａｂ,ＳＫ131,シルト質粘土層（炭化物含む）
2. 97Ａｂ，ＳＫ88,粘土層
3. 97Ａｂ,ＳＤ30,粘土質シルト層
4. 97Ａｂ，ＳＤ31,斑土
5. 97Ｄ,ＳＤ14,黒褐色粘土質シルト層
6. 97Ｂ,ＳＤ20,粘土層～シルト質粘土層
7. 97Ｂ,ＳＤ76,粘土質シルト層

第24表　花粉分析結果(1)

種類 ＼ 調査区名	IMT97B													IMT97Ab																
	P-5					P-2								P-1										SD46 港土	南壁 セクション	島畑10中央ベルト				
試料名	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	最下層	64	2	3	4	5	
木本花粉																														
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	1	2	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	4	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
トウヒ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
マツ属複維管束亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		158	161	17	-	-	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	
マツ属（不明）	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-		14	20	3	-	-	-	1	1	-	1	-	-	-	-	-	-	
コウヤマキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	1	5	8	1	-	-	-	-	
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		33	17	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
クマシデ属－アサダ属	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-		2	1	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ハンノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-	
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		4	4	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	1	-	-	-	-	-	-	-	1	5	-	-	-	-	-	
シイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ニレ属－ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		4	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
エノキ属－ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
草本花粉																														
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	4	-	-	-	-	-	
イネ科	-	-	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-		455	269	69	-	-	-	-	-	-	7	7	1	-	-	-	-	
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		16	17	1	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ユリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		7	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	

第25表　花粉分析結果(2)

種類 ＼ 調査区名	IMT97B													IMT97Ab																
	P-5					P-2								P-1										SD46 港土	南壁 セクション	島畑10中央ベルト				
試料名	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5	6	7		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	最下層	64	2	3	4	5	
ギシギシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		6	51	20	-	-	-	-	-	-	4	2	-	-	-	-	-	
タデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		18	28	5	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
スベリヒユ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		9	27	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		20	26	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
フウロソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ワタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	11	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キカシグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
アリノトウグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		3	2	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-	
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キュウリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		3	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-		7	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-	-	-	
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		2	1	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		6	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シダ類胞子																														
ミズワラビ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
サンショウモ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		1	4	22	-	-	-	-	-	1	3	1	-	-	-	-	-	
他のシダ類胞子	5	13	15	26	7	3	12	4	8	4	3	3		12	91	120	4	14	6	28	30	196	335	182	143	8	5	10	5	
合　計																														
木本花粉	-	-	-	-	-	-	2	-	1	-	-	-		227	211	29	-	-	1	1	1	2	9	22	1	-	-	-	1	
草本花粉	-	-	6	-	-	-	-	-	-	1	-	-		553	425	116	-	-	-	-	-	1	11	18	1	-	-	-	-	
不明花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-		6	6	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
シダ類胞子	5	13	15	26	7	3	12	4	8	4	3	3		13	95	142	4	14	6	28	30	197	338	183	143	8	5	10	5	
総計（不明を除く）	5	13	21	26	7	3	14	4	9	5	3	3		793	731	287	4	14	7	29	31	200	358	223	145	8	5	10	6	

第26表　花粉分析結果(3)

調査区名	IMT97Ca					IMT97Cb																				
		Bｻﾝﾌﾟﾙ				No. 2 北壁ｾｸｼｮﾝ			No. 5			No. 7	No. 8					1地点		1地点		3地点	5地点	9地点
種　類					SD27																				
試料名	2	3	4	5	中層	3	4	5	3	4	5	4	1	2	3	4	5	⑪-1	⑪-2	⑭-1	⑭-2	⑪	⑪-2	⑭
木本花粉																								
マキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	2	-	1	-
モミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	13	1	11	-	1	-
ツガ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	14	-	8	-	2	-
トウヒ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
マツ属複維管束亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	1	9	2	3	-	-	-
マツ属（不明）	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	11	-	2	-	1	-
コウヤマキ属	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	50	3	44	-	4	-
スギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	4	-	1	-
イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
クルミ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	2	-	-	-
クマシデ属－アサダ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	13	-	7	-	-	-
カバノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
ハンノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	3	-	-	1
ブナ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	7	-	5	-	-	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	1	34	-	22	-	1	-
コナラ属アカガシ亜属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	67	1	37	-	1	-
シイノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
ニレ属－ケヤキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-
エノキ属－ムクノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	-
カエデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
トチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	-
イボタノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
草本花粉																								
ガマ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イネ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	47	-	54	-	2	-
カヤツリグサ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	34	-	54	-	-	-
ミズアオイ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ユリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-

第27表　花粉分析結果(4)

調査区名	IMT97Ca					IMT97Cb																				
		Bｻﾝﾌﾟﾙ				No. 2 北壁ｾｸｼｮﾝ			No. 5			No. 7	No. 8					1地点		1地点		3地点	5地点	9地点
種　類					SD27																				
試料名	2	3	4	5	中層	3	4	5	3	4	5	4	1	2	3	4	5	⑪-1	⑪-2	⑭-1	⑭-2	⑪	⑪-2	⑭
ギシギシ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
サナエタデ節－ウナギツカミ節	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	33	2	43	-	4	1
タデ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
ソバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アカザ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
スベリヒユ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ナデシコ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
カラマツソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
アブラナ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
フウロソウ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ワタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キカシグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
アリノトウグサ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
セリ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	6	-	6	-	-	-
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キュウリ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
ヨモギ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3	-	2	-	-	-
キク亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-
タンポポ亜科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-
不明花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	-	9	-	-	-
シダ類胞子																								
ミズワラビ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
サンショウモ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	49	-	17	-	2	-
他のシダ類胞子	296	77	8	1	3	3	2	9	5	2	5	14	4	2	3	20	11	147	405	99	535	30	61	93
合　計																								
木本花粉	2	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	2	-	-	1	7	241	7	155	-	12	1
草本花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	3	126	2	161	-	6	1
不明花粉	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	11	-	9	-	-	-
シダ類胞子	296	77	8	1	3	3	2	9	5	2	5	14	4	2	3	20	11	148	454	99	553	30	63	93
総計（不明を除く）	298	77	9	1	3	3	2	9	6	2	6	15	4	4	3	20	12	158	821	108	869	30	81	95

第28表　植物珪酸体分析結果(1)

調査区名	IMT96Ba				IMT97B									
					P-5					P-2				
試料番号	SX03	SX04 ③	SX05 ③	SX05 ⑨	1	2	3	4	5	1	2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体														
イネ族イネ属	-	-	-	-	19	21	28	15	7	70	2	2	-	-
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
キビ族チゴザサ属	-	-	-	-	1	2	1	1	1	1	-	-	-	-
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	2	1	-	-	1	1	1	1	1	-	-	1	-	-
タケ亜科ネザサ節	3	1	3	3	3	3	3	4	4	3	-	8	-	-
タケ亜科	47	12	18	47	32	30	50	56	31	45	49	62	15	8
ヨシ属	13	8	2	30	18	39	35	57	33	19	32	53	6	-
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	-	6	15	3	6	9	11	1	4	-	-
ウシクサ族ススキ属	7	15	1	20	62	134	88	286	99	36	80	135	13	1
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	4	1	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	1	3	-	1	7	8	4	8	5	13	2	12	-	-
不明キビ型	20	13	13	38	34	74	56	113	53	48	56	93	14	4
不明ヒゲシバ型	18	17	8	26	26	41	19	58	27	13	38	62	7	4
不明ダンチク型	30	19	12	34	34	51	52	94	42	39	33	72	6	7
イネ科葉身機動細胞珪酸体														
イネ族イネ属	-	-	-	-	85	21	57	31	28	18	4	4	-	-
キビ族	-	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	-	-	-	-	1	3	2	3	-	3	1	3	-	-
タケ亜科ネザサ節	12	-	3	7	5	3	1	3	1	2	2	13	4	3
タケ亜科	33	12	14	66	30	8	18	15	8	10	4	26	7	5
ヨシ属	3	1	-	11	18	2	12	5	18	5	-	7	-	-
ウシクサ族	18	21	13	47	71	39	61	52	33	38	34	45	1	3
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	33	9	10	64	44	33	83	24	24	13	21	25	1	7
合　計														
イネ科葉部短細胞珪酸体	141	89	57	199	247	420	340	699	312	299	293	504	61	24
イネ科葉身機動細胞珪酸体	99	43	40	195	255	110	234	133	112	89	66	123	13	18
総　計	240	132	97	394	502	530	574	832	424	388	359	627	74	42
組　織　片														
イネ属類珪酸体	-	-	-	-	8	3	2	-	-	8	-	-	-	-
堆積物１ｇあたりの個数	33200	19900	12600	45500	31900	73700	43400	60500	33700	27900	27400	44900	5120	1340

第29表　植物珪酸体分析結果(2)

調査区名	IMT97B		IMT97Ab											
	P-2		P-1										P-4	
試料番号	6	7	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	3	4
イネ科葉部短細胞珪酸体														
イネ族イネ属	7	42	130	80	75	2	-	-	-	-	-	-	2	3
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族チゴザサ属	5	1	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	-	-	3	1	2	-	-	-	1	-	-	-	1	-
タケ亜科ネザサ節	4	8	9	1	7	-	-	-	1	-	-	-	3	2
タケ亜科	27	50	41	43	45	8	10	4	7	2	16	22	35	24
ヨシ属	9	10	8	8	7	4	3	-	-	-	28	29	81	60
ウシクサ族コブナグサ属	13	8	1	5	4	-	-	-	-	-	2	-	-	2
ウシクサ族ススキ属	36	36	31	42	39	-	1	3	2	-	10	3	10	8
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	2	3	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
イチゴツナギ亜科	6	10	12	7	15	-	-	-	-	-	-	1	1	-
不明キビ型	44	53	46	40	47	6	2	-	5	-	6	6	17	11
不明ヒゲシバ型	10	26	31	25	20	-	1	1	1	-	11	8	20	23
不明ダンチク型	57	38	47	40	58	7	2	3	4	-	6	11	30	12
イネ科葉身機動細胞珪酸体														
イネ族イネ属	35	19	90	38	22	-	2	-	-	-	-	-	16	3
キビ族	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	2	-	4	1	3	7	3	5	2	1	2	-	11	1
タケ亜科ネザサ節	4	2	2	1	3	6	2	-	2	1	5	3	7	1
タケ亜科	13	3	13	11	13	7	5	4	3	6	25	14	39	11
ヨシ属	10	3	7	3	9	1	1	-	-	2	28	24	68	6
ウシクサ族	47	25	34	24	25	10	2	6	2	4	20	22	45	7
シバ属	-	-	2	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	50	16	18	12	19	8	10	9	4	6	31	34	76	4
合　計														
イネ科葉部短細胞珪酸体	218	285	362	295	319	27	19	11	21	2	79	80	201	145
イネ科葉身機動細胞珪酸体	162	68	170	90	95	39	25	24	13	20	111	97	262	33
総　計	380	353	532	385	414	66	44	35	34	22	190	177	463	178
組　織　片														
イネ属類珪酸体	2	1	10	9	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-
堆積物１ｇあたりの個数	19400	24300	41800	29800	30400	511	2560	2020	2000	1170	10300	11200	25000	10900

第30表　植物珪酸体分析結果(3)

調査区名	IMT97Ab												IMT97Ca	
	P-4	南壁セクション	畠畑10 中央ベルト										SD27	Bサンプル
試料番号	5	64	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	最下層	2
イネ科葉部短細胞珪酸体														
イネ族イネ属	3	2	51	67	23	24	2	4	-	-	-	-	-	-
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族チゴザサ属	-	-	-	-	2	-	-	-	1	-	-	-	3	2
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	1	1	-	5	3	1	-	3	4	5	2	1	3	2
タケ亜科ネザサ節	1	12	-	3	2	2	-	1	6	6	7	3	6	5
タケ亜科	26	93	11	20	14	36	9	46	50	36	125	11	41	26
ヨシ属	296	121	5	3	7	27	-	2	85	133	6	-	106	52
ウシクサ族コブナグサ属	2	10	1	3	12	20	-	-	5	11	-	-	5	11
ウシクサ族ススキ属	14	58	8	5	30	92	11	48	197	318	20	1	47	66
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	-	-	4	8	12	8	-	1	5	8	-	-	4	-
不明キビ型	48	41	20	18	50	85	3	28	154	90	16	3	44	68
不明ヒゲシバ型	19	39	6	12	14	29	1	10	43	130	18	4	53	77
不明ダンチク型	6	16	28	20	39	38	5	14	24	39	10	4	31	62
イネ科葉身機動細胞珪酸体														
イネ族イネ属	4	1	61	45	35	32	1	-	-	-	-	-	-	-
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	4	5	2	1	5	1	-	4	5	5	3	3	1	-
タケ亜科ネザサ節	3	23	3	4	3	1	-	4	5	15	69	5	6	8
タケ亜科	12	59	23	27	15	15	5	7	20	42	48	4	32	19
ヨシ属	41	20	8	4	3	15	4	1	15	9	1	-	22	6
ウシクサ族	19	34	55	56	60	61	6	8	31	81	25	3	29	40
シバ属	-	-	-	3	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	24	18	66	39	35	29	4	7	21	53	18	4	25	18
合　計														
イネ科葉部短細胞珪酸体	416	393	134	164	208	362	31	157	574	776	204	27	343	371
イネ科葉身機動細胞珪酸体	107	160	218	179	156	154	20	31	97	205	164	19	115	91
総　計	523	553	352	343	364	516	51	188	671	981	368	46	458	462
組　織　片														
イネ属類珪酸体	-	-	36	42	-	4	-	-	-	-	-	-	-	-
堆積物１ｇあたりの個数	37100	33000	21500	29400	53800	36300	2040	7130	21100	52900	36800	1260	22200	30500

第31表　植物珪酸体分析結果(4)

調査区名	MT97Ca					IMT97Cb								
	Bサンプル			SD27	SX02	SX06(2層)		SX04	.1北壁			.2北壁		N
試料番号	3	4	5	中層		褐色粘	褐色粘		1	2	3	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体														
イネ族イネ属	2	-	-	-	-	2	4	23	1	1	1	-	-	1
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族チゴザサ属	11	3	-	-	-	-	1	-	-	1	1	-	-	7
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	1	3	-	6	2	1	-	-	1	1	1	-	1	6
タケ亜科ネザサ節	7	6	2	7	1	1	-	-	-	2	1	8	2	7
タケ亜科	40	77	18	49	28	19	19	21	19	17	30	80	14	66
ヨシ属	149	85	3	69	8	50	5	19	21	29	51	16	29	59
ウシクサ族コブナグサ属	40	8	2	1	-	6	3	7	4	3	7	1	3	16
ウシクサ族ススキ属	148	110	9	56	5	175	33	30	22	26	68	60	22	167
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	6	5	-	1	-	3	1	6	1	1	3	6	1	14
不明キビ型	121	122	20	48	15	75	36	56	30	33	50	43	33	138
不明ヒゲシバ型	63	43	4	31	7	52	20	23	22	16	36	50	14	86
不明ダンチク型	36	30	5	17	15	42	25	45	21	22	35	41	10	47
イネ科葉身機動細胞珪酸体														
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	14	11	29	1	-	1	-	-	1
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	4	3	2	13	-	1	-	1	1	-	-	2	5	8
タケ亜科ネザサ節	2	2	3	6	18	-	-	1	-	-	-	1	1	3
タケ亜科	15	14	6	21	59	10	20	22	6	23	31	4	3	17
ヨシ属	12	11	-	15	6	9	13	7	8	2	2	-	-	5
ウシクサ族	21	28	2	10	16	49	35	51	10	17	29	5	7	22
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	7	23	3	14	24	36	28	65	17	38	48	6	4	10
合　計														
イネ科葉部短細胞珪酸体	624	492	63	285	81	426	147	230	142	152	284	305	129	614
イネ科葉身機動細胞珪酸体	61	81	16	79	123	119	107	176	43	80	111	18	20	66
総　計	685	573	79	364	204	545	254	406	185	232	395	323	149	680
組　織　片														
イネ属類珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-
堆積物１ｇあたりの個数	48300	38400	5770	11500	10800	73300	36300	63200	13500	17300	30200	11300	19300	43100

第32表　植物珪酸体分析結果(5)

調査区名	IWT97Cb														
	2北壁	No. 3西壁				No. 5			No. 6	No. 7	No. 8				
試料番号	6	5	6	7	8	3	4	5	1	4	1	2	3	4	
イネ科葉部短細胞珪酸体															
イネ族イネ属	-	-	1	7	-	-	-	-	-	20	33	71	21	20	
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
キビ族チゴザサ属	4	-	1	2	5	-	1	12	-	1	-	-	-	-	
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科クマザサ属	1	-	2	1	-	1	3	6	1	2	1	5	1	1	
タケ亜科ネザサ節	5	-	-	1	-	1	6	13	-	2	1	9	-	3	
タケ亜科	31	7	36	19	3	64	31	50	23	34	47	53	26	29	
ヨシ属	231	2	26	44	188	7	28	134	18	12	8	14	3	19	
ウシクサ族コブナグサ属	48	1	3	5	5	1	3	23	6	8	7	7	4	7	
ウシクサ族ススキ属	114	3	12	10	16	35	27	97	30	15	26	41	30	80	
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	
イチゴツナギ亜科	36	-	4	1	2	-	2	15	5	5	11	14	2	10	
不明キビ型	144	6	19	26	40	41	43	127	45	51	44	60	36	100	
不明ヒゲシバ型	100	6	2	18	15	15	18	46	21	21	41	37	23	59	
不明ダンチク型	61	5	21	38	13	10	18	23	20	43	33	54	51	45	
イネ科葉身機動細胞珪酸体															
イネ族イネ属	-	-	6	15	-	-	-	-	-	34	16	39	55	17	
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科クマザサ属	2	1	3	1	-	10	6	4	-	6	-	2	1	1	
タケ亜科ネザサ節	6	-	7	5	-	1	5	2	1	3	1	4	3	4	
タケ亜科	27	1	49	29	5	17	26	16	19	51	12	21	22	9	
ヨシ属	21	3	13	40	101	2	4	2	6	9	1	4	13	6	
ウシクサ族	45	2	19	32	12	6	8	18	13	80	16	42	70	39	
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	2	-	-	
不明	31	1	49	52	16	8	8	4	28	99	17	51	74	22	
合　計															
イネ科葉部短細胞珪酸体	775	30	127	172	287	175	180	546	169	214	252	366	199	374	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	132	8	146	174	134	44	57	46	67	284	63	165	238	98	
総　計	907	38	273	346	421	219	237	592	236	498	315	531	437	472	
組　織　片															
イネ属類珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	1	2	2	-	
堆積物１ｇあたりの個数	114000	2460	35400	23300	68800	9610	7530	45000	18500	16300	21000	29800	34500	72600	

第33表　植物珪酸体分析結果(6)

調査区名	IWT97Cb														
	No. 8									1地点				2地点	
試料番号	5	6	7	8	9	10	11	12	13	①-1	①-2	②-1	②-2	①	
イネ科葉部短細胞珪酸体															
イネ族イネ属	-	2	1	1	-	-	5	-	-	-	-	3	1	3	
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
キビ族チゴザサ属	-	-	-	-	-	-	11	22	2	-	2	1	1	2	
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科クマザサ属	4	1	3	-	-	-	6	3	2	-	-	1	-	-	
タケ亜科ネザサ節	10	5	-	3	-	-	4	4	6	1	-	2	-	-	
タケ亜科	42	27	36	20	19	27	34	24	44	19	10	27	11	46	
ヨシ属	17	2	10	10	10	9	53	141	115	35	169	123	126	310	
ウシクサ族コブナグサ属	6	1	5	2	4	-	11	27	6	1	2	1	3	2	
ウシクサ族ススキ属	54	21	18	20	18	12	86	115	154	5	4	5	11	9	
イチゴツナギ亜科オオムギ族	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
イチゴツナギ亜科	9	1	2	1	-	-	8	-	3	1	-	1	-	-	
不明キビ型	41	21	40	26	26	23	89	63	91	5	23	35	27	42	
不明ヒゲシバ型	28	11	4	7	14	6	37	44	83	14	7	18	16	36	
不明ダンチク型	34	23	23	12	13	8	30	32	51	19	10	22	33	5	
イネ科葉身機動細胞珪酸体															
イネ族イネ属	4	5	-	1	1	-	-	-	-	-	-	8	-	4	
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
タケ亜科クマザサ属	-	3	4	1	1	9	6	3	-	1	1	1	-	-	
タケ亜科ネザサ節	-	3	2	-	-	1	1	8	2	4	-	2	1	-	
タケ亜科	7	16	13	20	5	18	7	36	20	12	13	31	14	16	
ヨシ属	3	4	2	4	3	3	5	16	16	20	50	110	232	33	
ウシクサ族	29	20	18	6	13	11	13	57	52	5	20	23	35	12	
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
不明	17	12	11	8	14	24	9	48	38	33	38	52	72	9	
合　計															
イネ科葉部短細胞珪酸体	246	115	142	102	104	85	374	475	557	100	227	240	229	455	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	60	63	50	40	37	66	41	168	128	75	122	227	354	74	
総　計	306	178	192	142	141	151	415	643	685	175	349	467	583	529	
組　織　片															
イネ属類珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
堆積物１ｇあたりの個数	23200	7400	6820	9730	8030	11000	53300	77500	76000	55700	47200	36400	96400	87400	

第34表　植物珪酸体分析結果(7)

調査区名	2地点	3地点	4地点		5地点		6地点			7地点		9地点
試料番号	②	①	①	②	①-1	①-2	②-1	②-2	②-3	①-1	①-2	①
イネ科葉部短細胞珪酸体												
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
キビ族ヒエ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
キビ族チゴザサ属	-	-	-	-	-	2	1	-	4	1	1	-
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	-	-	-	-	-	-	2	2	-	-	-	2
タケ亜科ネザサ節	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	4
タケ亜科	6	14	7	7	20	25	199	17	7	23	12	35
ヨシ属	38	13	82	90	59	104	29	26	201	143	156	81
ウシクサ族コブナグサ属	-	-	-	1	-	2	1	-	-	-	1	1
ウシクサ族ススキ属	2	1	1	4	2	6	7	1	8	11	7	25
イチゴツナギ亜科オオムギ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
イチゴツナギ亜科	-	-	-	-	-	1	-	-	1	4	-	-
不明キビ型	13	2	9	12	9	17	17	6	19	27	21	41
不明ヒゲシバ型	12	2	6	10	12	22	18	9	12	15	12	28
不明ダンチク型	2	7	3	11	5	7	19	14	11	23	10	33
イネ科葉身機動細胞珪酸体												
イネ族イネ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	3
キビ族	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
タケ亜科クマザサ属	-	-	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1
タケ亜科ネザサ節	-	-	-	-	-	-	2	2	2	-	-	8
タケ亜科	1	4	15	23	16	54	102	67	19	9	19	71
ヨシ属	17	12	20	73	9	64	5	56	128	52	112	81
ウシクサ族	7	1	17	11	9	21	7	19	15	5	17	35
シバ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
不明	3	15	32	61	19	44	37	52	17	27	32	52
合　計												
イネ科葉部短細胞珪酸体	73	39	108	135	107	186	296	75	263	247	220	253
イネ科葉身機動細胞珪酸体	28	32	84	168	53	183	155	196	181	93	180	251
総　計	101	71	192	303	160	369	451	271	444	340	400	504
組　織　片												
イネ属類珪酸体	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
堆積物1ｇあたりの個数	3820	2630	15300	51500	9250	23900	30700	21500	141000	46100	56100	15300

第35表　96A区中央ベルト中央部96Ba区北側東西トレンチの植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

	中央ベルト中央部											北側東西トレンチ									
分類群 ＼ 試料	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科																					
イネ	67	50	37	14	7	7						37	23	22	22						
キビ族型				7		7															
ジュズダマ属																					
ヨシ属			22						8	22			8				7				8
ススキ属型	7			7	13	15				15			8			7	7	20			8
ウシクサ族型	15	29	15	43	40	22	23	8	8	15		37	30	14			87	27	8		23
ウシクサ族型(大型)					7																
マコモ属				7																	
Aタイプ(くさび型)												7									
タケ亜科																					
メダケ節型							8													8	
ネザサ節型		29	44	7	7	7	15	8	23	30	143		23	22	7	13	29	68	143	15	15
クマザサ属型		22	7	7	7	15	15	8		7		15	8	14	15	20	14	7		8	8
ミヤコザサ節型																					
マダケ属型			7																		
未分類等	30	50	37	22	34	15	15	31	15	30	98	30	15	29	7	13	43	27	23	23	8
その他のイネ科																					
表皮毛起源					7	7				15	8			7			7			8	8
棒状珪酸体	126	180	155	152	107	90	8	23	30	172	128	112	175	144	22	13	94	108	8	8	23
基部起源																	7			8	
地下茎部起源																					
未分類等	274	352	362	260	335	262	90	46	144	389	415	314	327	317	171	207	398	406	45	30	99
樹木起源																					
その他																					
（海綿骨針）																					
植物珪酸体総数	518	712	686	528	563	448	173	123	227	695	793	554	615	569	245	274	694	664	225	107	197

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）

イネ	1.96	1.48	1.09	0.43	0.20	0.22						1.10	0.67	0.64	0.66						
ヨシ属			1.40						0.48	1.42			0.48				0.46				0.48
ススキ属型	0.09			0.09	0.17	0.19				0.19			0.09			0.08	0.09	0.25			0.09
メダケ節型							0.09													0.09	
ネザサ節型		0.14	0.21	0.03	0.03	0.04	0.07	0.04	0.11	0.14	0.69		0.11	0.10	0.04	0.06	0.14	0.33	0.68	0.07	0.07
クマザサ属型		0.16	0.06	0.05	0.05	0.11	0.11	0.06		0.06		0.11	0.06	0.11	0.11	0.15	0.11	0.05		0.06	0.06
ミヤコザサ節型																					

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型							32													40	
ネザサ節型		46	79	39	39	24	27	39	100	72	100		66	49	24	30	56	86	100	33	56
クマザサ属型		54	21	61	61	76	41	61		28		100	34	51	76	70	44	14		26	44
ミヤコザサ節型																					

第36表　96Ba区中央トレンチ西側、96Ba区東側西壁南北トレンチの植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

分類群 ＼ 試料	中央トレンチ西壁												東側西壁南北トレンチ									
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科																						
イネ	66	29	7				30	8	8				5				15	23		15		
キビ族型	15		7																			
ジュズダマ属																						
ヨシ属		7	7		8				23	176	15	7	21							7	146	
ススキ属型	15	7	7		8					37	7	7	5					8				
ウシクサ族型	22	29	15		8		7	8	8	95	30	14		13		8		8	34	37	42	8
ウシクサ族型(大型)																						
マコモ属																				7	35	
Aタイプ(くさび型)																						
タケ亜科																						
メダケ節型			15	7							15	14	5							7		30
ネザサ節型	7		15		23	8	7	23	30	132	393	463	16	7	15		8		55	7	21	332
クマザサ属型		7					15			15		7	16	13	15		30	15	20	7	7	8
ミヤコザサ節型																						
マダケ属型																						
未分類等	29	14	15	29	8	23	7	8	30	396	274	299	41	20	30	8	8	8	27	37	181	316
その他のイネ科																						
表皮毛起源	15	7					7	8			7											
棒状珪酸体	169	179	66	43	8	8	89	38	158	1043	674	653	98	66	8		30	8	164	155	799	535
茎部起源			7						60	15	7										21	
地下茎部起源																					118	
未分類等	456	344	242	246	30	31	327	182	407	888	704	633	305	251	61	38	61	38	375	413	750	588
樹木起源																						
その他																	8					
（海綿骨針）	7	7						8			7								7			
植物珪酸体総数	795	623	404	325	90	69	490	274	724	2797	2126	2095	512	370	129	53	160	108	675	694	2119	1816

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）

イネ	1.95	0.84	0.22				0.87	0.22	0.22				0.15				0.45	0.68		0.43		
ヨシ属		0.45	0.46		0.47				1.43	11.12	0.93	0.43	1.31							0.47	9.21	
ススキ属型	0.18	0.09	0.09		0.09					0.46	0.09	0.08	0.06					0.10				
メダケ節型			0.17	0.08							0.17	0.16	0.06							0.09		0.35
ネザサ節型	0.04		0.07		0.11	0.04	0.04	0.11	0.14	0.63	1.88	2.22	0.07	0.03	0.07		0.04		0.26	0.04	0.10	1.59
クマザサ属型		0.05					0.11			0.11		0.05	0.12	0.10	0.11		0.23	0.12	0.15	0.06	0.05	0.06
ミヤコザサ節型																						

タケ亜科の比率（%）

メダケ節型			71	100							8	6	24							49		18
ネザサ節型	100		29		100	100	24	100	100	85	92	91	30	24	39		14		63	20	66	80
クマザサ属型		100					76			15		2	46	76	61		86	100	37	31	34	3
ミヤコザサ節型																						

第37表　96D区西側深掘トレンチの植物珪酸体分析結果

検出密度（単位：×100個/g）

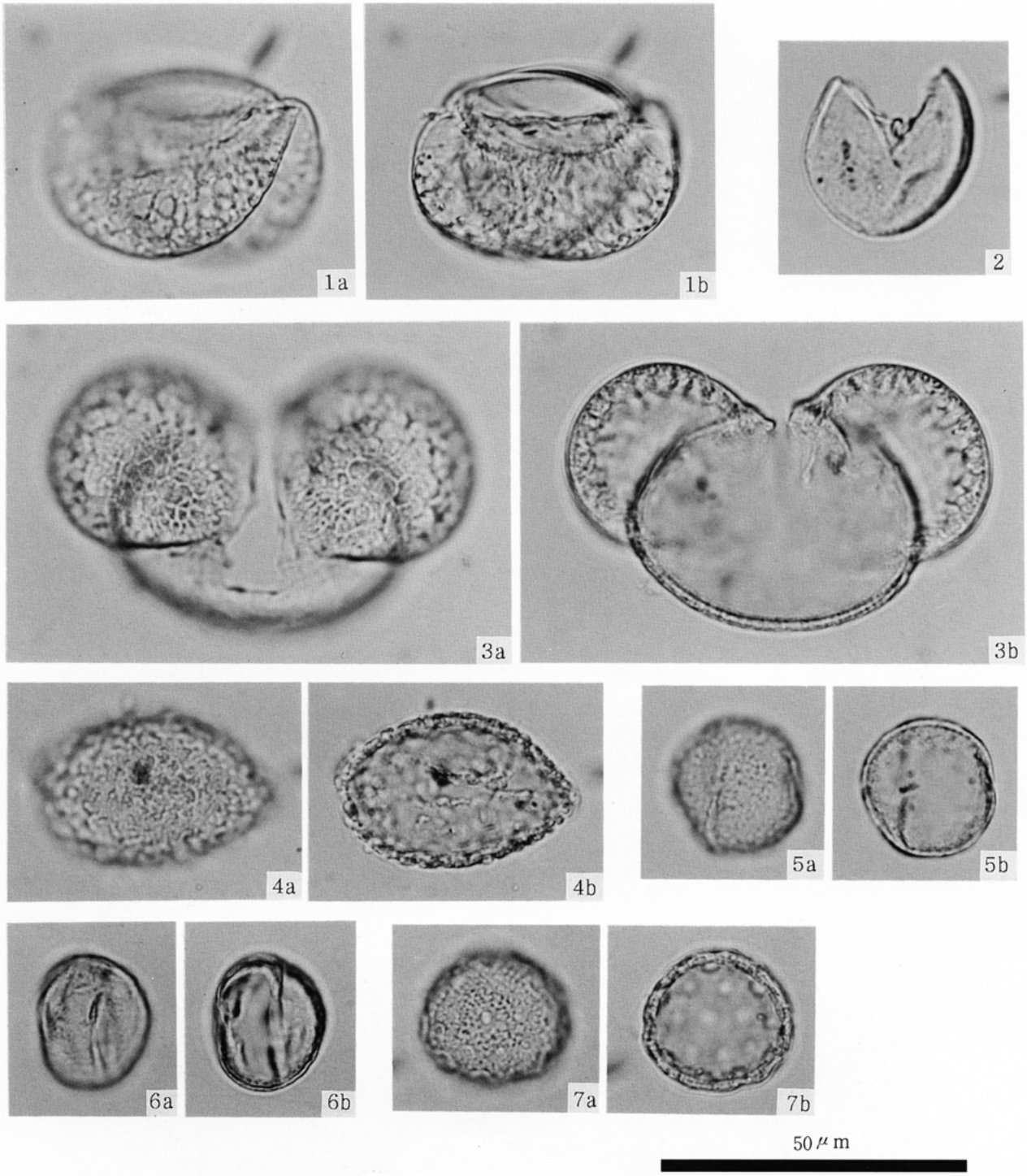
分類群 ＼ 試料	西壁深堀トレンチ															
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16
イネ科																
イネ	62	51	51	53	36	15	7	7	7	7	15	7				
キビ族型			7				7			21						
ジュズダマ属										14		7				
ヨシ属		7				7				21	7		14			
ススキ属型				15	7	7				7	15				7	
ウシクサ族型	37	29	29	31	7				30	14	90	59	43	7	7	
ウシクサ族型(大型)									7							
マコモ属																
Aタイプ(くさび型)																
タケ亜科																
メダケ節型	6	7	29	8	7		7		22	14	7	15	14	13	7	
ネザサ節型	25	22	37	8	21	22	30	37	90	83	231	236	256	161	52	22
クマザサ属型	6	15	7	15	21	37	37	15	15	7	22	15	36	7		7
ミヤコザサ節型		7														
マダケ属型																
未分類等	31	51	22	15	43	37	52	22	52	118	366	325	249	168	37	15
その他のイネ科																
表皮毛起源		7		8	14					7						
棒状珪酸体	187	248	139	114	271	60	104	51	135	256	642	620	533	376	7	30
茎部起源							7				15	7				
地下茎部起源																
未分類等	393	489	366	397	449	254	348	263	389	505	530	650	590	456	52	60
樹木起源																
その他																
（海綿骨針）																
植物珪酸体総数	749	933	689	664	877	442	599	395	749	1073	1941	1942	1734	1187	172	135

おもな分類群の推定生産量（単位：kg/㎡･cm）

イネ	1.84	1.50	1.51	1.57	1.05	0.44	0.22	0.21	0.22	0.20	0.44	0.22				
ヨシ属		0.46				0.47				1.31	0.47		0.90			
ススキ属型				0.19	0.09	0.09				0.09	0.19				0.09	
メダケ節型	0.07	0.08	0.34	0.09	0.08		0.09		0.26	0.16	0.09	0.17	0.16	0.16	0.09	
ネザサ節型	0.12	0.11	0.18	0.04	0.10	0.11	0.14	0.18	0.43	0.40	1.11	1.13	1.23	0.77	0.25	0.11
クマザサ属型	0.05	0.11	0.05	0.11	0.16	0.28	0.28	0.11	0.11	0.05	0.17	0.11	0.27	0.05		0.06
ミヤコザサ節型		0.02														

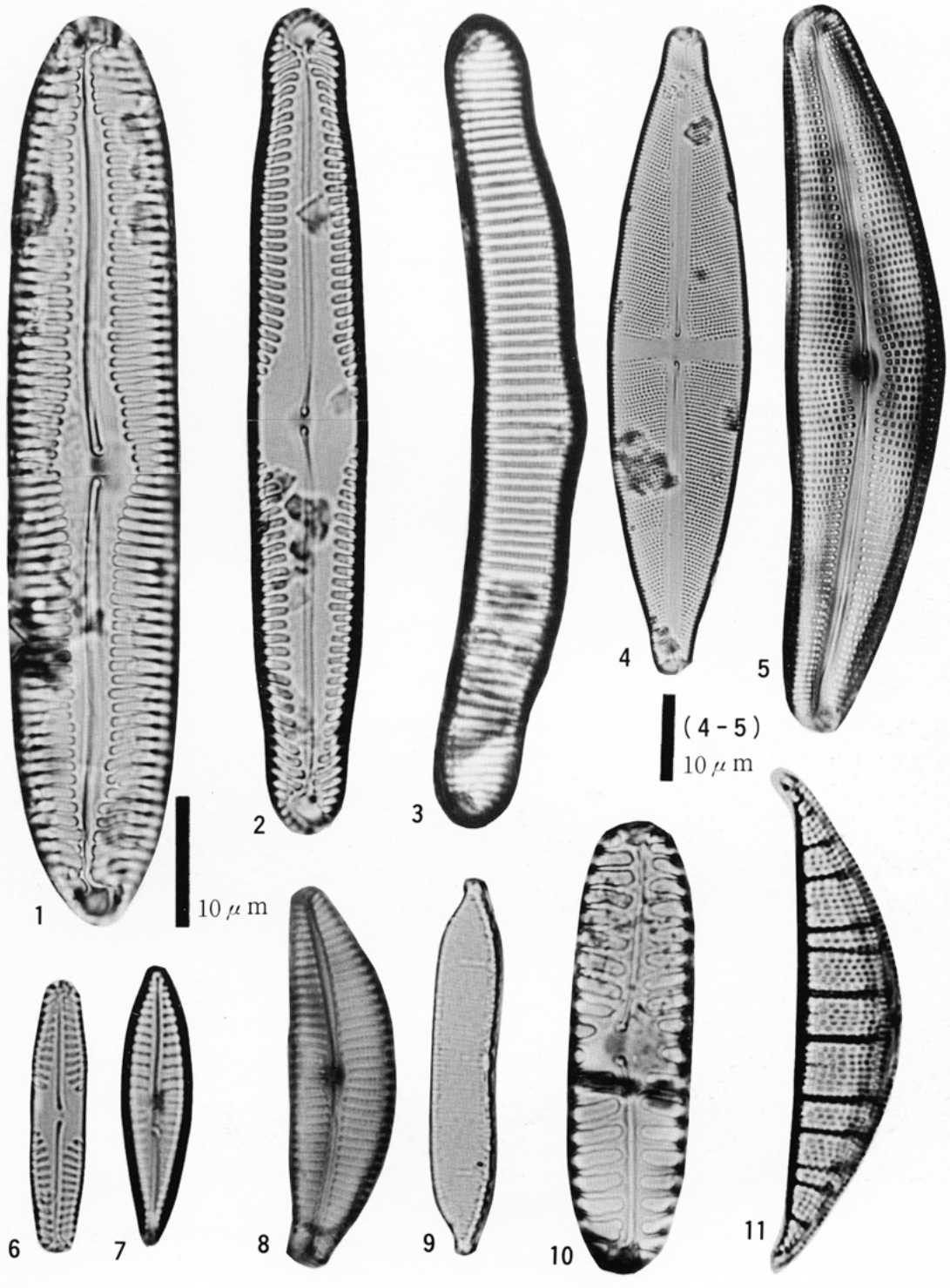
タケ亜科の比率（%）

メダケ節型	30	26	60	37	24		17		32	26	6	12	10	16	26	
ネザサ節型	50	33	31	15	30	28	28	62	54	65	81	80	74	79	74	66
クマザサ属型	20	34	10	48	46	72	55	38	14	8	12	8	16	5		34
ミヤコザサ節型		7														



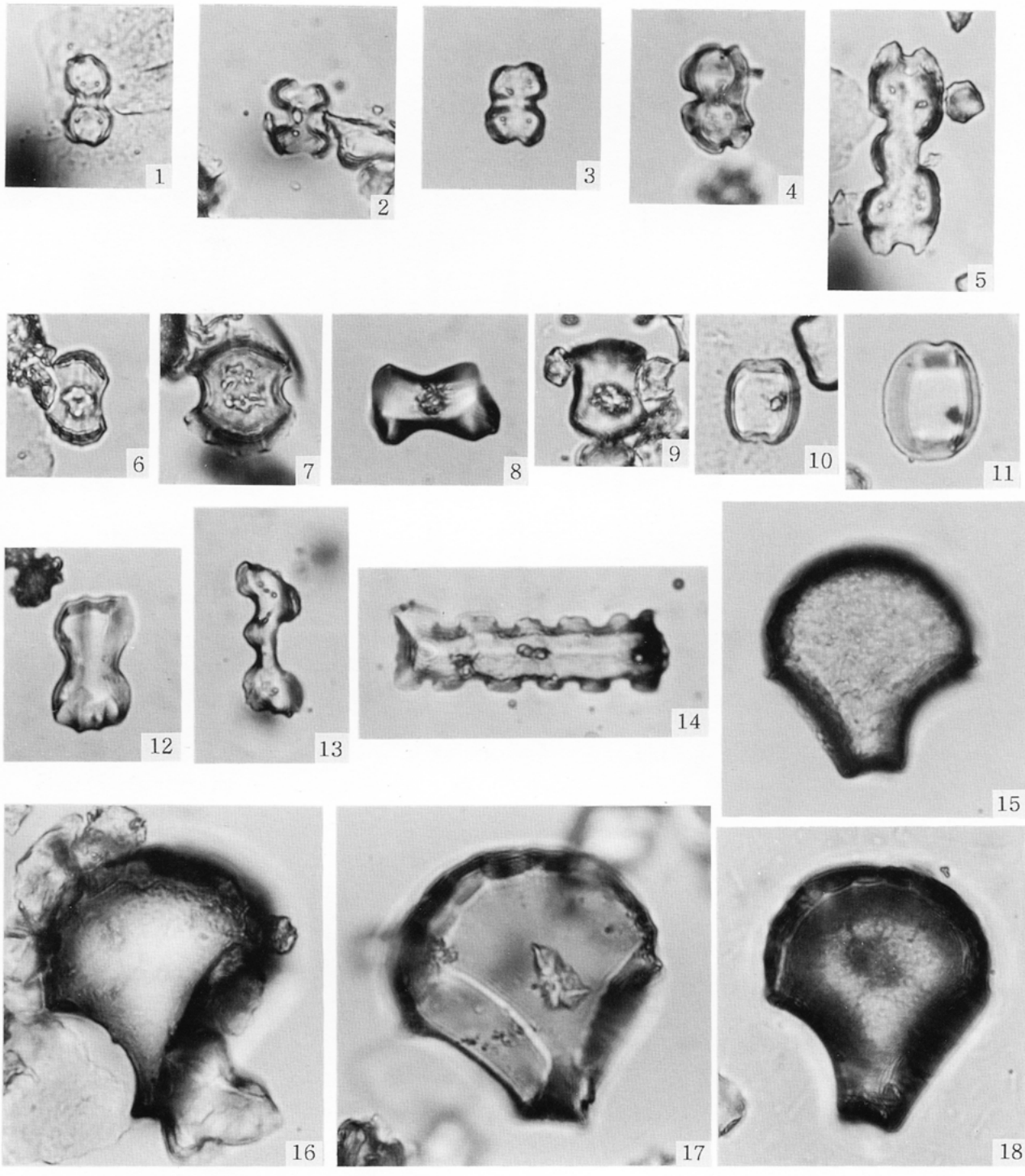
1．マキ属　　2．スギ属
3．マツ属複推管束亜属　　4．コウヤマキ属
5．コナラ属コナラ亜属　　6．コナラ属アカカシ亜属
7．アカザ科

第97図　花粉化石の顕微鏡写真



1. *Pinnularia viridis* (Nitz.) Ehrenberg
2. *Pinnularia gibba* Ehrenberg
3. *Eunotia pectinalis* var. *undulata* (Ralfs) Rabenhorst
4. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg
5. *Cymbella aspera* (Ehr.) Cleve
6. *Pinnularia subcapitate* Gregory
7. *Gomphonema parvulum* Kuetzing
8. *Cymbella turgidula* Grunow
9. *Hantzschia amphioxys* (Ehr.) Ehrenberg
10. *Pinnularia borealis* Ehrenberg
11. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) O.Muller

第98図　珪化石の顕微鏡写真



1．イネ属短細胞珪酸体　2．イネ属短細胞珪酸体
3．イネ属短細胞珪酸体　4．イネ属短細胞珪酸体
5．ヒエ属短細胞珪酸体　6．チゴザサ属短細胞珪酸体
7．チゴザサ属短細胞珪酸体　8．クマザサ属短細胞珪酸体
9．ネザサ節短細胞珪酸体　10．ヨシ属短細胞珪酸体
11．ヨシ属短細胞珪酸体　12．コブナグサ属短細胞珪酸体
13．ススキ属短細胞珪酸体　14．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体
15．イネ属機動細胞珪酸体　16．イネ属機動細胞珪酸体
17．イネ属機動細胞珪酸体　18．イネ属機動細胞珪酸体

第99図　植物珪酸体化石の顕微鏡写真

第２節　堆積物微細構造による土地利用状況の検討

はじめに

三ツ井遺跡は濃尾平野中央部の五条川と青木川が合流する氾濫原に位置する。今回の発掘調査では、調査区西部の蛇行洲に由来する微高地から東部の埋没河川に向かう蛇行洲斜面部において、縄文時代の配石遺構、弥生時代前期の生産域・居住域・墓域に関する遺構、古墳時代・古代の居住域に関連する遺構、中世前半の墓域に関連する遺構、中世後半以降の島畑に関連する遺構など、縄文時代後期から近世に至る遺構・遺物が確認されている。

このように本遺跡では、本地域の土地利用状況を検討する上で有効な情報が多数得られている。特に調査区斜面部で検出された弥生時代の生産域に関連する遺構は、濃尾平野における水田稲作の定着過程の様相を検討する上で重要である。そこで、今回は蛇行洲斜面およびそれを覆う堆積物の軟Ｘ線写真撮影観察を行い、堆積物の微細構造からみた弥生時代における土地利用状況に関する検討を行う。

地形・層序概要

調査地点である97Ａｂ区は浅谷化した旧河道（NR01）に向かう斜面部にあたる。この斜面を構成する堆積物は、河道側に向かって側方堆積した粗砂～シルト（下部から上部にかけて粒径は細粒化している）からなる。このことから、本斜面は蛇行河川の凸側岸側に生ずる蛇行洲の斜面であると判断される。斜面の状態は、凸側岸辺から緩く傾斜する斜面で階段状に傾斜している。このことは当時の蛇行河川が小河川であったことを示唆する。

この斜面部の堆積層は、発掘調査時に遺物・遺構の検出状況などから、第１～第10層に区分されている（本報告第２章第１節参照）。それによると、第１層が耕作土（近世～現代島畑）、第２層が褐色シルト層（中世島畑）、または黄褐色シルト層（中世整地層）、第３層が暗褐色粘土質シルト層（中世包含層）、第４層が黒褐色粘土質シルト層（古代包含層）、第５層が褐灰色粘土質シルト層（古墳時代前期包含層）、第６・７層がシルト・微粒砂で構成される葉理部分と粘土層の互層（無遺物層）、第８層が灰色粘土質シルト層、第９層が黒色粘土層（第９層上部に砂の薄層が堆積する層準もある）、第10層が緑灰色粘土層と記載されている。本報告では、調査成果との混乱を避けるために、この層名を踏襲して報告する。

今回の調査対象となる弥生時代の生産域に関連する遺構は、上記層序の第９層で確認されている。主な遺構は、斜面に対して垂直方向（南北方向）に構築されている溝である。このうち、SD46は両側に盛土を伴う幅３ｍ・深さ40cm程度の溝である。この溝埋積物最下部の腐植質堆積物の放射性炭素年代測定値は2,440±80年前、同地点の基盤となっている第９層の黒色粘土層は2,910±50年前を示している。また、溝脇の盛土堆積物からは遠賀川系の壺型土器と壺蓋型土器が検出されている。

この遺構が確認されている第９層および下位の第10層と上位の第８層は、上記した蛇行洲堆積物の上部に相当する。この蛇行洲堆積物は堆積上面で西から東方向に順次堆積している。斜面上にみられた階段状地形面の段差は、堆積単位の境界となっており、堆積時期は西側から東側に向かって新しくなっていることになる。現段階では、調査区西部と東部で堆積時間差がどの程度あったかは不明である。ただし、上記した斜面下部に構築されて

いる溝SD46の放射性炭素年代測定に基づくと、調査区内の斜面地形は2,900年前頃に既に形成されていたことが推定される。

第８層より上位の堆積物は、基本的に斜面を覆って堆積している。堆積物の粒径は細粒砂～シルトを主体とし、水平方向への連続性は良く、級化構造が認められることなどから、河川の氾濫堆積物である可能性が高い。

試　料

試料は、蛇行洲堆積物の横断面にあたる97Ａｂ区南壁から採取した。西側より１・２・４・５・６・７地点を設定して、10層～８層層準を中心に柱状試料として採取した（第100図）。以下の各地点の試料堆積物の層相について記載する。

１地点：調査区最東部の蛇行洲斜面下部に位置する地点である。試料は第10層～第8層から採取した（試料長27cm）。第10層はオリーブ灰色微粒砂混じりの粘土・シルトからなり、塊状である。第９層は層厚６cmで２層に細分される。下部（層厚2.0cm）が微粒砂ないしシルトのパッチを挟む暗灰色シルトからなる。上部（層厚2.5cm）は灰色微粒砂シルトの薄層ないしパッチを挟む、黒色の有機物に富む微粒砂質シルトからなる。部分的に葉理が認められる。第８層は細粒砂混じり灰色粘土質シルトからシルト質微粒ないし細粒砂からなる。下部2.5cmの層準は有機物を含み、灰白色の微粒砂がレンズ状ないしパッチ状に混入する。上部で斑状ないし点状の酸化鉄が沈着する。

２地点：溝ＳＤ47の東側の盛土部分にあたる。試料は盛土部分を挟んで第10層上部～第８層から採取した（試料長33cm）。第10層はオリーブ灰色の微粒砂混じりの粘土質シルトからなり、塊状である。上部２cmは乱れている。第９層は層厚７cmで２層に細分される。下部（2.5cm）が微粒砂ないしシルトパッチを挟む暗灰色シルトからなる。上部（4.0cm）は黒色の有機物に富む、灰色微粒砂～シルトの薄層ないしパッチを挟む微粒砂質シルトからなる。本層の上位を覆う盛土（５cm）は暗灰色シルトと黒色粘土質シルトのブロック土からなり、各ブロック土には偽礫状の細粒砂のパッチが混じる。第８層は細粒砂混じり灰色シルト質微粒砂からなり、塊状である。斑状ないし点状の酸化鉄が沈着する。

４地点：ＳＤ46東側の盛土部分にあたる。試料は盛土部分を挟んで第10層～第８層から採取した（試料長34cm）。第10層はオリーブ灰色の微粒砂混じりの粘土・シルトからなり、塊状である。上部２cmは乱れている。本地点では第９層葉盛土の影響を受け著しく変形している。層厚は10cmで黒色の有機物に富む粘土質シルトからなる。本層中には盛土の際に混入したとみられる暗灰色微粒砂質シルトないし細粒砂質シルトがレンズ状ないしパッチ状に混じる。本層の上位を覆う盛土（11cm）は明オリーブ灰色粘土・シルトと暗灰色粘土シルトのブロック土からなり、乱れた状態で堆積する。第８層は細粒砂が混じる灰色シルト質微粒砂から細粒砂質シルトからなる。塊状である。斑状ないし点状の酸化鉄が沈着している。

５地点：溝ＳＤ46内埋積物にあたる。試料は溝埋積物を挟んで第10層から第８層にかけて採取した（試料長28cm）。第10層はオリーブ灰色の微粒砂混じりの粘土質シルトからなり、塊状である。上面は溝により切られている。溝を充填する埋積物は下位より細粒砂～微粒砂、暗灰色細粒砂質シルト、細粒砂～微粒砂、有機物を含む暗灰～黒色微粒砂質シルト、暗灰色シルト質微粒砂からなり、部分的に葉理が残存している。第８層は細粒砂が混じる灰色シルト質微粒砂からなる。

6地点：本地点はＳＤ46の西側の盛土部分にあたる。試料は盛土部分を挟んで第10層上部～第８層から採取した（試料長35cm）。第10層はオリーブ灰色微粒砂混じりの粘土・シルトからなる。上部約１cmは横方向の管状酸化鉄の沈着が認められる。第９層は層厚６cmで２層に細分される。下部（1.5cm）が微粒砂ないしシルトのレンズないしパッチを挟む暗灰色シルトからなる。上部（4.5cm）は黒色の有機物に富む、灰色微粒砂～シルトの薄層を挟む微粒砂質シルトからなる。部分的に葉理が認められる。本層の上位を覆う盛土（12cm）は明オリーブ灰色粘土・シルトと暗灰色粘土シルトのブロック土からなり、乱れている。第８層は細粒砂が混じる灰色シルト質微粒砂からなる。塊状である。斑状ないし点状の酸化鉄が沈着している。

7地点：第10層～第８層までの堆積物を採取した（試料長26cm）。第10層はオリーブ灰色の微粒砂混じりの粘土・シルトからなり、塊状である。第９層は層厚６cm、黒色で粗砂混じりの有機物に富む微粒砂質シルトからなり、暗灰色シルト質微粒砂のブロック土が混入する。第８層は細粒砂混じり灰色シルト質微粒砂からなり、下部４cmに有機物を含み、灰白色の微粒砂薄層がレンズ状に堆積する。その上位５cmには斑状ないし点状の酸化鉄が沈着する。

軟Ｘ線写真撮影方法

土壌断面から採取したブロック試料の一部を、縦20～25cm、幅５cm、厚さ１cmの大きさに成形して撮影用試料とした。撮影はＸ線透影装置（SOFTEX M-150WM）を使用して、電圧90KVP、電流３mA、時間90秒の条件で撮影した（撮影にあたっては、株式会社ニッテツファインプロダクツの協力を得た）。撮影した写真をもとに、堆積構造などの検討を行う。

観察結果

各地点の軟Ｘ線写真観察による堆積物微細構造について以下に述べる（第101～103図）。

１地点：調査区最東部の蛇行洲斜面下部の地点。第10層は微粒砂混じりの粘土・シルトからなり、斜面東側に向かって傾斜する葉理構造が確認される。生物擾乱が及んでいるが著しい擾乱ではなく、人為的な擾乱の影響は及んでいないと判断される。

２層に区分される第９層は、下部（層厚2.0cm）が微粒砂シルトのパッチを挟む暗灰色シルトで、斜面に平行な軽微の平行葉理が認められるが、ペレット状に分離している。本層堆積後に形成されたとみられる小動物による生痕化石も認められる。第９層上部（層厚2.5cm）は分解質の植物遺体（有機物）に富む微粒砂質シルトからなり、葉理構造が認められるが、各葉理は細かく分離しており、ペレット状の構造を呈している。このペレット状の単位は方向性を持っており、西側方向に傾斜している。この構造は、堆積時に形成された葉理が、堆積時・後に何らかの擾乱作用を受けて形成されたものと考えられる。本層中に上位の堆積物が混入していないことから、上層からの擾乱作用に由来するものではない。おそらく地下水位の変動などが起こり、本層が乾燥したことにより、成層していた葉理が分離し形成された構造である可能性が高く、有機物の多い堆積物における乾痕の可能性が高い。また、ペレット状の構造が方向性を持っていたのも、このような作用を受けた際に斜面側に各ペレット状の単位が移動したことによると考えられる。

第８層は細粒砂混じり灰色微粒砂質シルトからなる。本層下部（2.5cm）は上記の第９

層上部と同様のペレット状の構造を呈することから同様な作用を受けていることが推定される。また、本層は第9層を浸食しておらず、整合に覆っていることになる。この点は、第9層の土地利用状況を検討する上で重要であり、考察の稿で詳述する。

その上位の第8層には縦方向および横方向の植物根が多数認められる。擾乱によるとみられる径7mm程度の団子状の集合体が認められる。この集合体は土壌学でいうところのペッド（孔隙とか自然にできている壊れやすい面により分けられた比較的永続性のある集合体と、表層での耕作または永続性のある集合体を指す：久馬ほか，1989）に相当する可能性が高い。堆積物と軟X線写真の観察から、このペッドは孔隙に完全に囲まれている状態ではない。発達弱度の不完全ペッド状を呈しており、その分布密度は粗い。このような構造は、作土層下部に認められる構造に近似している。

2地点：溝SD47の東側の盛土部分にあたる。第10層は微粒砂混じりの粘土質シルトからなり、斜面側に傾斜する葉理構造が確認される。生物擾乱の程度は人為的な耕作の高い擾乱でなく、小動物や植物根による擾乱と推定される。

第9層は、下部（2.5cm）の微粒砂～シルトと上部の有機物に富む微粒砂質シルトともに葉理構造が認められるが細かく分離しておりペレット状のマトリクスになっている。この成因は上記した1地点の第9層と同様な成因が考えられる。本層の上面は、盛土により著しく乱れている。盛土部分は有機質に富む微粒砂質シルトと微粒砂～細粒砂～シルトのブロック土からなる。下位の第9層と第8層下部の堆積物を材料としている可能性が高いく、堆積していた土壌を掻き上げて構築していることが推定される。

第8層は微粒砂～細粒砂からなる。縦方向・横方向の微細な植物痕が密に分布している。生物擾乱の影響が及んでおり、径7mm程度の団子状の集合体が認められる。このような構造は、上記したように作土層下部に認められる構造に近似している。

4地点：SD46東側の盛土部分にあたる。第10層は微粒砂混じりの粘土・シルトからなり、斜面側に傾斜する葉理構造が確認される。生物擾乱の影響が認められる。

第9層は有機物に富む微粒砂質シルトからなり、葉理が認められるが、細かく分離しておりペレット状を呈する。方向性ももっている。この構造は上記した地点の第9層の構造と類似するもので同様の成因が考えられる。また、本層上部はブロック状の構造を呈しており、盛土の際に掻き上げられていることが窺える。

盛土は有機物に富む微粒砂質シルトと微粒～細粒砂質シルトのブロック土の混土からなり、大きく2回の盛土に区分することができる。最初の段階の盛土は、第9層の有機物に富む微粒砂質シルトを主体に掻き上げて構築している。2回目の盛土は微粒～細粒砂質シルトと有機物に富む微粒砂質シルトからなり、ブロック状の構造が下位の盛土とは異なり顕著に認められる。盛土を構成する堆積物は、第9層とその上位を整合に覆う第8層最下部の堆積物に由来する可能性が高い。また、盛土上部には植物痕が認められるが、これらは上位の第8層に認められる植物痕と同じものである。このような2時期にわたる盛土状況は後述する6地点の西側盛土部分でも同様である。

盛土を覆っている第8層は微粒砂～細粒砂からなる。縦方向・横方向の微細な植物痕が密に分布している。生物擾乱の影響が及んでおり、径7mm程度の団子状の集合体が認められる。このような構造は、上記したように作土層下部に認められる構造に近似している。

5地点：溝ＳＤ46内埋積物にあたる。第10層は微粒砂混じりの粘土質シルトからなり、斜面側に傾斜する葉理構造が確認される。生物擾乱の影響が認められるが人為的な撹乱など極端な擾乱は認められない。本層上面の層界は明瞭であるが、これは溝の掘削だけでなく、溝内に生じていた水流により浸食されたためと考えられる。

溝を充填する埋積物は上位・下位の２時期に区分される。下位埋積物は細粒砂から中部層準の有機物を含む細粒砂質泥までが相当する。下部埋積物には比較的明瞭な平行葉理や斜交葉理が認められる。このことは溝内に水流があったことを示している。また、本埋積物上部には擾乱に起因する集合体や植物根が認められることから、ある程度埋積した段階で溝としての機能は有さなくなり、植生が覆った可能性がある。なお、本堆積物は下位の第10層と第９層の有機質に富む微粒砂質シルトが再堆積したものであると推定される。

上位の溝埋積物は細粒砂とシルトの葉層からなる。肉眼でも観察されたが葉理が顕著である。ただし、埋積物上部では生物擾乱により葉理構造が不明瞭となっており、約７mm程度の集合体が認められる。また、手てょうこう・横方向の植物根が多数認められる。これらのことから、本埋積物もまた水成堆積したことが推定される。この堆積物は２回目の盛土と指交していることが確認されることから、盛土部分の崩落土に由来する堆積物も含まれていることが推定される。

第８層は微粒砂～細粒砂からなる。縦方向・横方向の微細な植物痕が密に分布している。生物擾乱の影響が及んでおり、径７mm程度の団子状の集合体が認められる。このような構造は、上記したように作土層下部に認められる構造に近似している。

６地点：ＳＤ46西側の盛土部分にあたる。本地点が蛇行洲堆積物端に位置し、この段差部分に溝が構築されているため、東側の盛土地点の堆積状況とは多少異なる。

第10層は微粒砂混じりの粘土・シルトからなり、斜面側に傾斜する葉理構造が確認され、生物擾乱の影響が認められる。上記してきた10層と同様の成因が考えられる。本層上面は比較的成層しており、第９層が整合に覆っている。

第９層は下部（層厚2.0cm）が微粒砂混じりのシルトからなり、斜面に平行な軽微の平行葉理が認められる。この葉理は細かく分類している。上部は有機物に富む微粒砂質シルトからなり、葉理構造が認められる。各葉理は細かく分離しており、ペレット状の構造を呈している。ペレット状のマトリクスは方向性を持っており、西側方向に傾斜している。この構造は、上記した第１地点などと同様に堆積時・後に本層が乾燥したことにより、成層していた葉理が分離し形成されsy構築時の影響とみられる。

同様に盛土の時期は２時期に区分される。最初の段階の盛土は、第９層の有機物に富む微粒砂質シルトを主体に掻き上げて構築しているが、西側の盛土ほど上部の一部を材料として利用しているにすぎない。これは本地点が上記したように蛇行洲堆積物の段差部分に位置することに由来する。２回目の盛土は微粒砂質シルトと有機物に富む微粒砂質シルトからなり、細かなブロック状の構造が認められる。本盛土には下位の盛土を構成する堆積物は断面観察と合わせると第10層・第９層と第８層最下部の堆積物を材料として利用している可能性が高い。また、盛土上部には植物痕が認められるが、これらは上位の第８層に認められる植物痕と同じものである。このような２時期にわたる盛土状況は後述する６地点の西側盛土部分でも同様である。

盛土を覆う第８層は微粒砂～細粒砂混じりシルトからなり、東側盛土地点と同様の構造を示す。縦方向・横方向の微細な植物痕が密に分布し、生物擾乱の影響が及んでいる。径７mm程度の団子状の集合体が認められる。このような構造は作土層下部に認められる構造に近似している。

７地点：第10層は微粒砂混じりの粘土・シルトからなり、斜面側に傾斜する葉理構造が確認され、生物擾乱の影響が認められる。上記してきた10層と同様の成因が考えられる。本層上面は比較的成層しており、第９層が整合に覆っている。

第９層は下部（層厚2.0cm）が微粒砂混じりのシルトからなり、斜面に平行な軽微の平行葉理が認められる。この葉理は細かく分類している。上部は有機物に富む微粒砂質シルトからなり、葉理構造が認められる。各葉理は細かく分離しており、ペレット状の構造を呈している。ペレット状のマトリクスは方向性を持っており、西側方向に傾斜している。この構造は、上記した各地点などと同様に堆積時・後に本層が乾燥したことで、成層していた葉理が分離し形成された構造である可能性が高い。

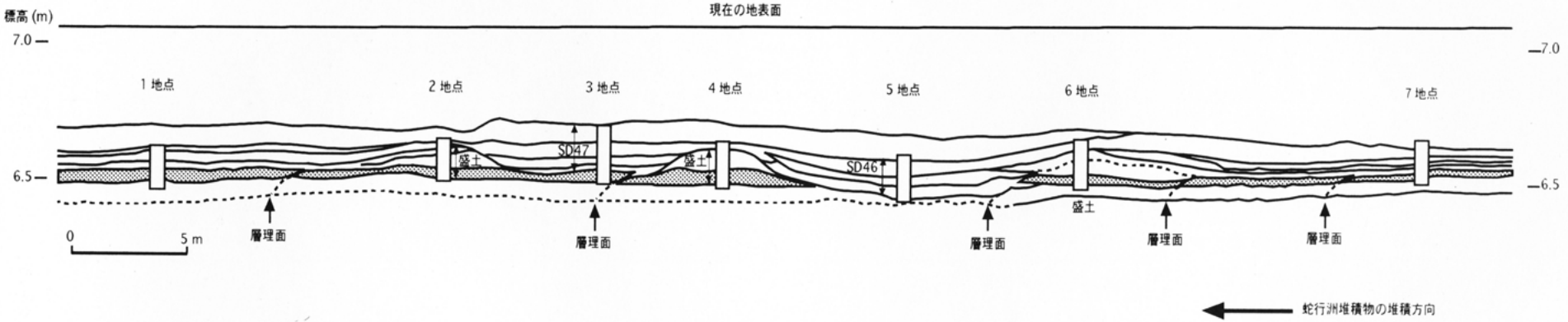
第８層は微粒砂～細粒砂からなる。縦方向・横方向の微細な植物痕が密に分布している。生物擾乱の影響が及んでおり、径７mm程度の団子状の集合体が認められる。このような構造は、上記したように作土層下部に認められる構造に近似している。

土地利用状況　上記してきた各地点の堆積物微細構造からみた堆積環境や擾乱の状況などの情報を総合的に捉えることで調査区内の土地利用状況について検討する。

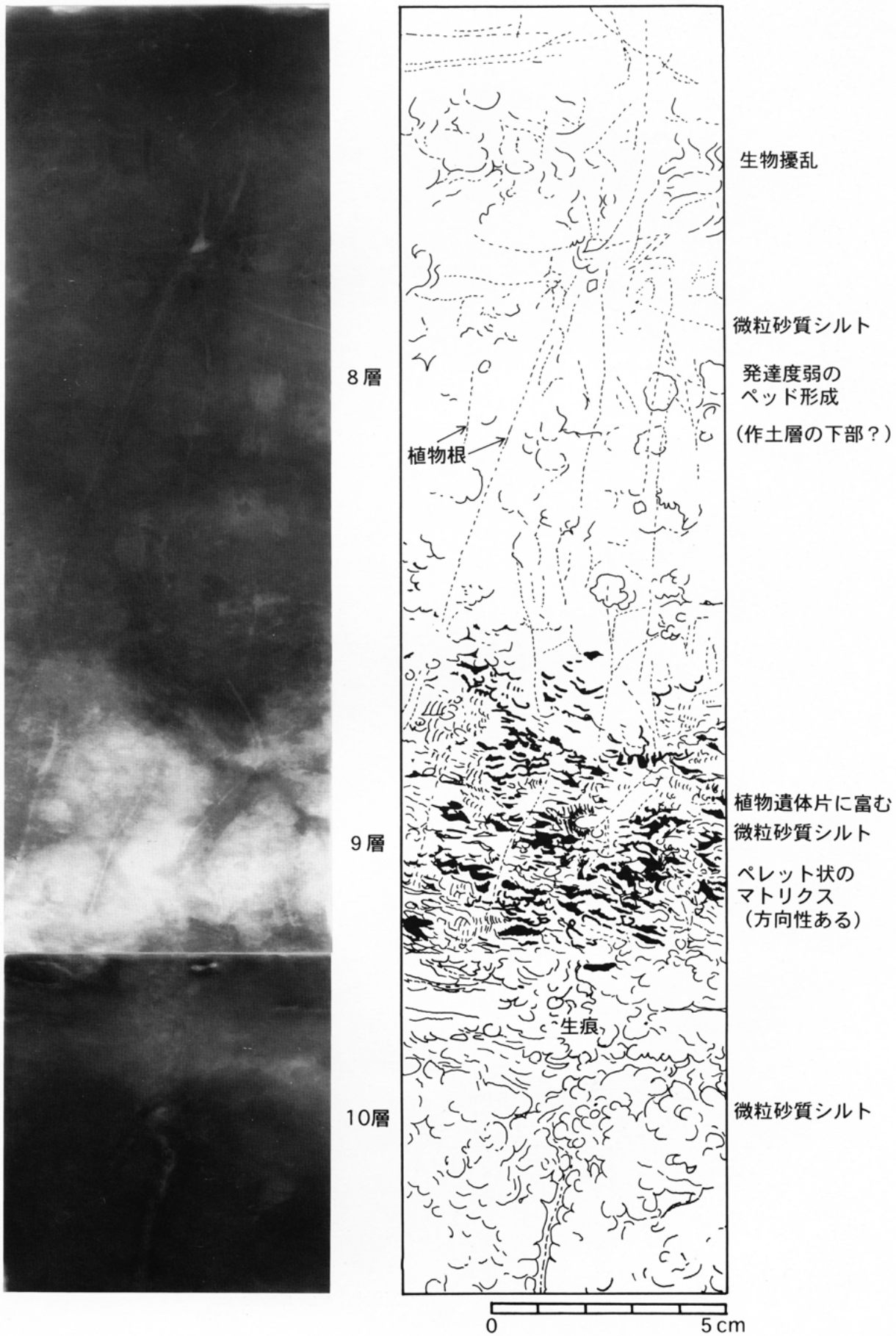
調査を実施した地形は、97Ａｂ区は旧河道（NR01）の蛇行洲に位置する。この蛇行洲は西側から東側にかけて発達しており、放射性炭素年代測定や出土遺物の時代観から、縄文時代晩期頃には調査区内は氾濫時以外は河川の流水の影響を直接受けることはない、湿地のような状態に変化した。また、この湿地は常に湛水しているような湿地ではなく、乾燥することのある湿地であったことが堆積物の微細構造から推定される。蛇行洲堆積物の上部には有機物を多く含む微粒砂質シルトが堆積するが、本層中には植物遺体がほとんど認められなかったのも、このような乾燥により植物遺体の分解が進行したことを示している可能性がある。

このように縄文時代晩期頃に調査区内は、河川の流水域であった場所から乾燥することのある湿地へと変化した。この環境変化は、人間の低湿地への進出を容易にしたと推測される。その後、湿地は微粒砂・シルトからなる氾濫堆積物が覆う。このような氾濫堆積がみられた後、弥生時代頃に人間が調査区内へ進出し、溝を構築した。この溝は当時の環境から湛水用などとして利用されていた可能性がある。また、溝の構築に際しては、蛇行洲堆積物上部の有機物に富む黒色シルト層（第９層）までの堆積物を掻き寄せて盛土し、畦畔状の高まりを２回の時期に亘って構築したことが推定される。黒色シルト層からは栽培種イネ属の植物珪酸体が検出されているが、黒色シルト層中には上位層の影響がほとんど及んでいないこと、擾乱の影響が及んでいるのは黒色シルト層上位の第８層下部の堆積物であることから、耕８層最下部の暗灰色シルト層以上の可能性が高い。

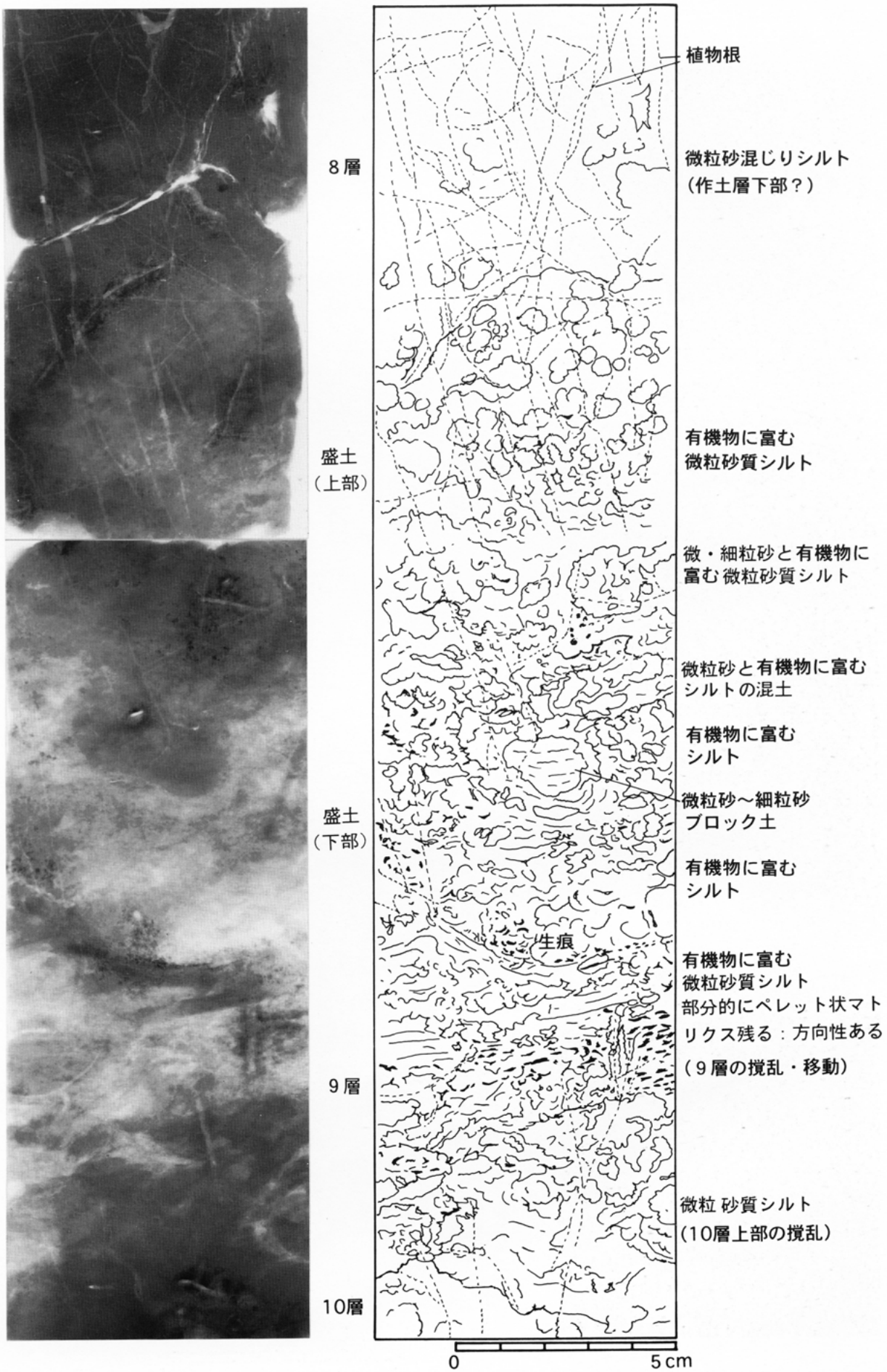
引用文献
久馬一剛・八木久義，1989，土壌薄片記載ハンドブック，博友社，176p.



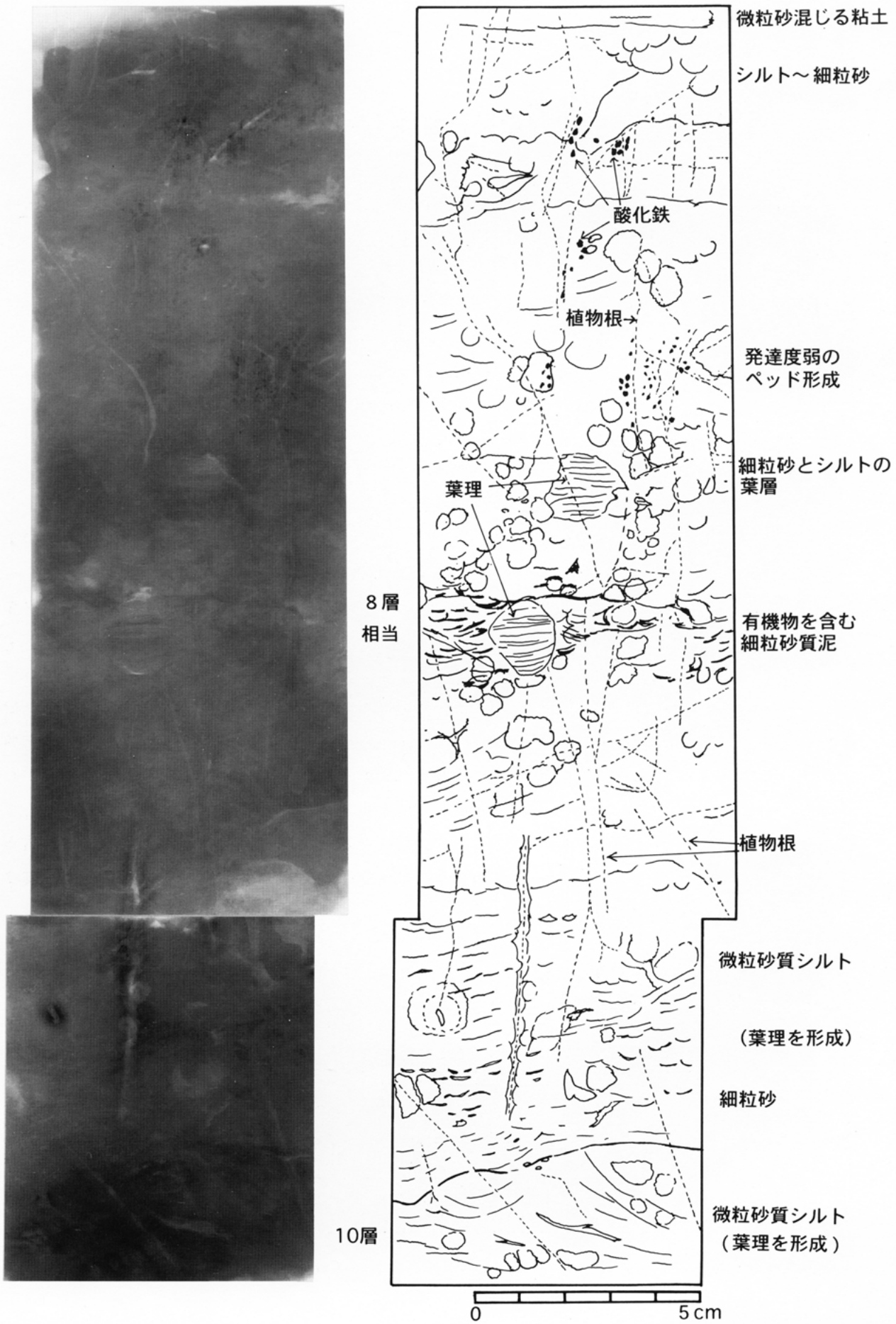
第100図　97Ab区南壁地点の堆積断面模式図および試料採取位置



第101図　97Ab区南壁１地点の軟Ｘ線写真による堆積物微細構造



第102図　97Ab区南壁SD46西側盛土（4地点）の軟X線写真による堆積物微細構造



第103図　97Ab区南壁SD46埋積物（5地点）の軟X線写真による堆積物微細構造

第３節　三ツ井遺跡出土木材の樹種同定

三ツ井遺跡から出土した流木の樹種計５点を報告する。これらは、96E，97B区の流路に付随する流木である。これらの樹種を明らかにする事により、遺跡の性格を明らかにする一端となすことを目的として樹種を調べた。

分析方法

同定には、木製品から直接、もしくは切り欠いたサンプルから片歯剃刀を用いて、木材組織切片を横断面（木口と同義・第104図1-ａ）、接線断面（板目と同義・第104図1-ｂ）、放射断面（柾目と同義・第104図1-ｃ）の３方向作成した。これらの切片は、ガムクロラールにて封入し、永久標本とした。樹種の同定は、これらの標本を光学顕微鏡下で観察し、原生標本との比較により樹種を決定した。

結　果

ヒノキ１点、カヤ、クヌギ各２点の計５点が同定された。結果を第38表に示す。

愛知県内ではヒノキは、標高80～2,200mと丘陵部～山地に分布しており（林、1969)、遺跡では製品・自然木ともに弥生時代から多く確認される樹種である。自然木でも坂戸遺跡の様に調査点数中半数を超える場合も見られる（山田、1993)。カヤは、標高５～1,550mの暖温帯に分布し、耐陰性が強いが針葉樹であるモミ・イヌガヤ・スギ・ヒノキや落葉広葉樹であるコナラ節・クヌギ節、常緑広葉樹のアカガシ亜属・シイ属等と混交する事が多く、他２種と同様の環境に生育する。

落葉広葉樹であるクヌギ節は、県内の遺跡では古墳時代以降に比較的多く検出される樹種である（豊田市：伊保遺跡など)。濃尾平野では、アカガシ亜属等の常緑広葉樹林が極相林であると考えられており、陽樹であるクヌギ節は２次林であると考えられている。しかし、開発の様な伐採以外でもオープンなスペースが提供されれば、林の中の林分として侵入する事は可能であり、今回の結果だけでは、点数も少なく２次林を指標するとは言えない。いずれの樹種も、濃尾平野周辺に生育しており比較的近い地域から供給された物であると考えられる。

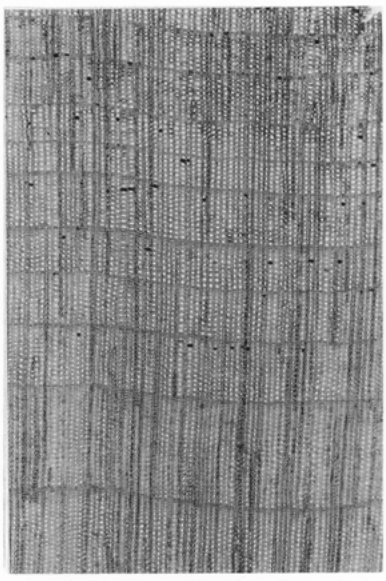
林　弥栄，1969，有用樹木図説，誠文堂新光社，472p.
山田昌久，1993，日本列島における木質遺物出土遺跡文献集成ー用材から見た人間・植物関係史，植生史研究，特別一号，242p.

第38表　三ツ井遺跡の樹種同定結果

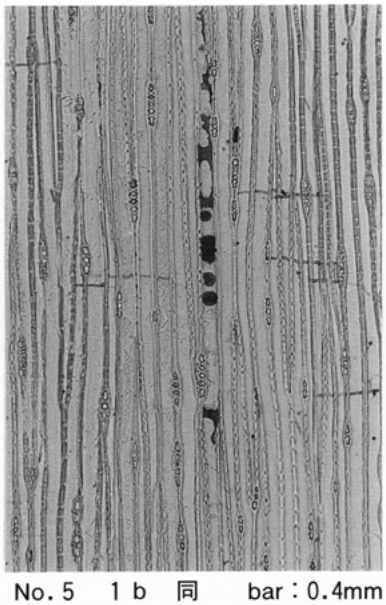
No.	樹　種	遺　構　番　号	遺物番号等
1	カヤ	IMT96E Ⅳ B11K 検Ⅲ	流木２-①
2	カヤ	IMT96E Ⅳ B11K 検Ⅲ	流木２-②
3	クヌギ節	IMT96E Ⅳ B8l 検Ⅲ	流木１-①
4	クヌギ節	IMT96E Ⅳ B8l 検Ⅲ	流木１-②
5	ヒノキ	IMT97B Ⅳ B9g NR01上層	

（弥生時代Ⅱ期）

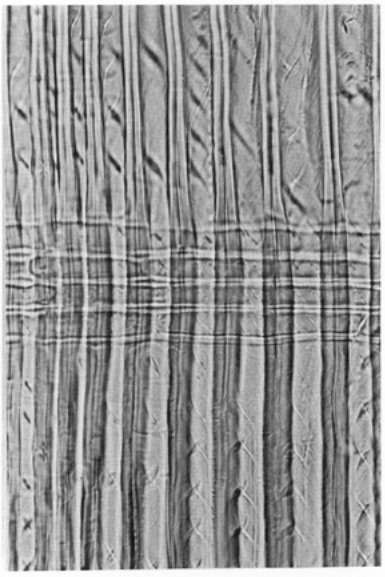
bar：



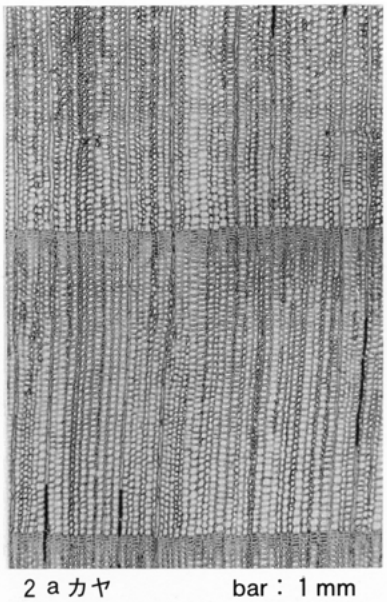
1 a ヒノキ　　bar：1 mm



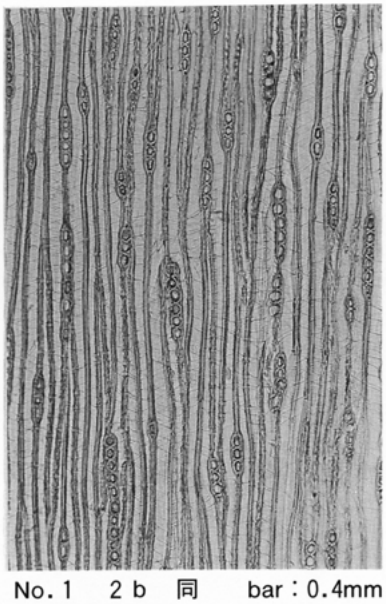
No. 5　1 b　同　　bar：0.4mm



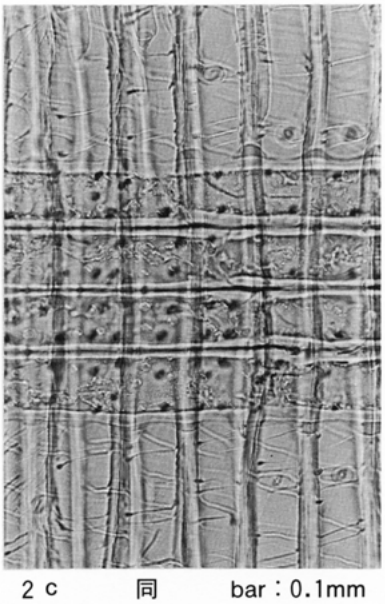
1 c　　同　　bar：0.1mm



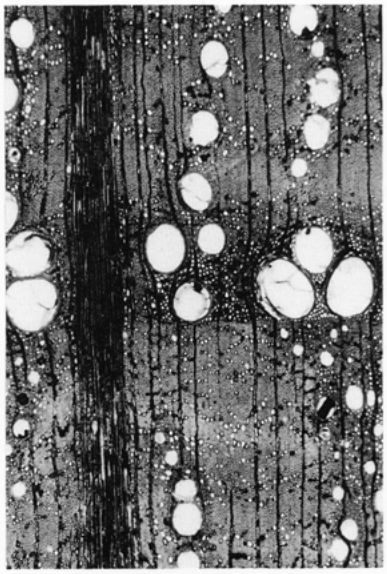
2 a カヤ　　bar：1 mm



No. 1　2 b　同　　bar：0.4mm



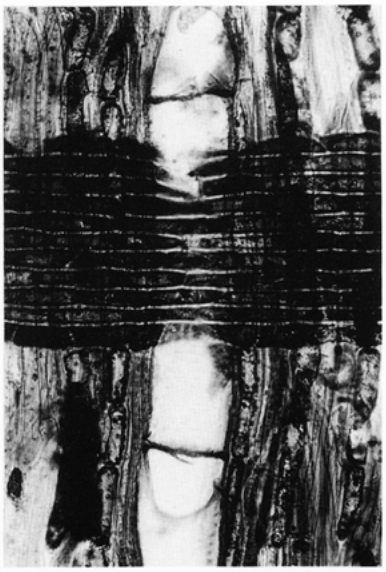
2 c　　同　　bar：0.1mm



3 a コナラ属クヌギ節　bar：1 mm



No. 4　3 b　同　　bar：0.4mm



3 c　　同　　bar：0.2mm

第104図　三ツ井遺跡の木材組織顕微鏡写真

第4節　三ツ井遺跡出土土器の胎土分析

三ツ井遺跡から出土した土器は、縄文時代から古代までにいたり、それぞれの時代において、濃尾平野と周辺地域との関係を示唆する資料が得られている。縄文土器では後期から晩期において近畿地方の影響のあるものや在地系の型式とされているものなどが混在し、弥生土器では、遠く北九州の影響とされている遠賀川系の土器が確認されている。また、古代の土師器では濃尾平野を分布の中心とする濃尾系の甕などが出土している。ここでは、それらの胎土を分析することにより、形態や技法の違いと材質の違いとの対応関係を検証する。材質の違いは、材料採取地の違いであり、土器製作地を知るための重要な手がかりでもある。したがって、胎土分析の結果から、実際に土器がどの程度移動していたのかという問題についても検討してみたい。

試　料

試料は、三ツ井遺跡から出土した縄文土器12点、弥生土器16点および古代の土師器2点である。縄文土器は、後期前葉から晩期中葉までであり、深鉢が9点、鉢が2点、浅鉢が1点である。弥生土器は、16点のうち11点までが遠賀川系の土器であり、そのうち甕形土器は1点あり、他は壷形土器である。遠賀川系土器以外の弥生土器は、氷式系削痕深鉢形土器が3点、条痕紋系壷形土器が2点である。古代の土師器は2点とも濃尾系甕とされている。各試料の図版番号、出土遺構、時期、器種等は、胎土重鉱物組成を示した第105図に併記する。

分析方法

試料は、適量をアルミナ製乳鉢を用いて粉砕、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩により水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後、篩別し、得られた1/4mm－1/8mmの粒子をポリタングステン酸ナトリウム（比重約2.96に調整）により重液分離、重鉱物のプレパラートを作製した後、偏光顕微鏡下にて同定した。鉱物の同定粒数は250個を目標とした。同定の際、不透明な粒については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものを「不透明鉱物」とし、それ以外の不透明粒および変質等で同定の不可能な粒子は「その他」とした。

結　果

胎土の分類

分析結果を第39表に示し、それを棒グラフにして第105図に示す。なお、同定粒数が100個に満たない試料については、多い傾向のある鉱物を図中に表示した。今回の試料では、図版番号27、29、92、383の4点である。

分析結果の全体的な傾向としては、斜方輝石を主体とする組成が多いが、角閃石を比較的多く含む試料も認められる。また、試料によってはジルコンやザクロ石、緑レン石などが少量ではあるが含まれる。このような状況を整理するために、主体となる鉱物の組合せとその量比から組成の分類を行った。

なお、分類の際には酸化角閃石は角閃石に準ずる扱いとし、また「その他」の量比は分類の基準としては他の鉱物と同等の扱いとはしない。酸化角閃石は普通角閃石（本文では単に角閃石とした）が800℃以上の高温酸化により生成される鉱物であることから、胎土中の酸化角閃石は、土器の焼成の際に素地に含まれていた角閃石が変化したものである可能性もある。「その他」は、落射光下では赤褐～黒褐色を呈し不定形であり、自然堆積物中にはほとんど認められない粒である。また、不透明鉱物（磁鉄鉱やチタン鉄鉱）の結晶の形が残っているものも認められる。これらのことから、「その他」は焼成により生じた土器胎土の未粉砕粒や不透明鉱物が変質した粒であると考えられる。したがって、酸化角閃石も「その他」もその量比は焼成状態に影響されるものであり、焼成前の素地の状態を考慮する場合には、上記のような扱いをすることが適当であると考えられる。以下に今回の分類結果を示す。各試料の分類は第１図に示す。

a類　斜方輝石が最も多く、少量の単斜輝石、角閃石、緑レン石を含み、微量または少量の黒雲母と不透明鉱物を含む。今回の試料では最も多く、30点中14点がこれに分類される。さらに14点中12点は弥生土器である。なお、図版番号116は「その他」がほとんどであるが、それを除くと斜方輝石と緑レン石が多いことからａ’類とした。

b類　斜方輝石が最も多く、少量の角閃石と微量の単斜輝石および不透明鉱物を伴う。図版番号61の１点のみである。

c類　斜方輝石が最も多く、少量の単斜輝石を伴う。それ以外の鉱物はほとんど含まれない。図版番号382の１点のみである。

d類　斜方輝石と角閃石が同量程度に多く、少量の単斜輝石を伴う。図版番号79、80の２点がこれに分類される。

e類　角閃石が最も多く、少量の斜方輝石、微量の単斜輝石および不透明鉱物を含む。角閃石は少量の酸化角閃石を含む。図版番号49の１点のみである。

f類　角閃石が最も多く、少量のザクロ石、不透明鉱物、微量の斜方輝石、黒雲母、ジルコン、緑レン石、電気石、紅柱石など多種の鉱物を含む。図版番号66の１点のみであるが、同定粒数100個未満の図版番号27および29もその傾向からｆ類に近いと考えることができるためｆ’類とした。

g類　角閃石と黒雲母がほぼ同量程度に多く、微量の斜方輝石、ザクロ石、緑レン石、紅柱石、不透明鉱物を含む。図版番号102の１点のみであるが、同定粒数100個未満の図版番号92および383もその傾向からｇ類に近いと考えることができるためｇ’類とした。

h類　角閃石が非常に多く、少量のザクロ石と不透明鉱物を伴う。図版番号90の１点のみである。

i類　処理後に得られた粒のほとんどが「その他」とした変質粒である。これも胎土の特徴であるとしてｉ類とした。試料番号125、135、173の３点である。

分類別の胎土状況

上記の胎土９分類のうちｃ類とｉ類を除く７類が含まれている。時期が異なる試料が混在していることもあるが、同じ時期のものでも胎土は異なっている。後述する弥生土器の様相とは対照的である。

縄文土器

弥生土器

前述のように16点の試料のうちａ’類も含めれば13点がａ類である。この中には遠賀川系、氷式系、条痕文系の３者が含まれている。ａ類でない３点は全てｉ類である。ｉ類の３点のうち、２点は遠賀川系壷形土器であるが、１点は遠賀川系甕形土器である。また、そのうちの２点は「シャモット」が多いとされている。

古代土師器

図版番号382はｃ類であり、図版番号383はｇ’類である。同じ濃尾系甕ではあるが、後述するように全く性格の異なる胎土である。

考　察

これまでに継続的に愛知県およびその周辺（主に三重県）の遺跡から出土した土器について重鉱物分析による胎土分析を行ってきた。また、最近では㈶愛知県埋蔵文化財センターの協力により、伊勢湾岸地域の河川砂の重鉱物分析例も蓄積されつつある（例えば矢作ほか（1997）など）。これらの分析例により、愛知県の遺跡から出土した土器の胎土について、その重鉱物組成からある程度までの地域性を推定することができる。

両輝石型

今回分類した胎土のうち、ａ～ｄ類までの特徴は、斜方輝石が多いことである。これに少量の単斜輝石と角閃石を伴うことも特徴となる。このような組成は、これまでの分析例において「両輝石型」と呼び、濃尾平野地域で生産あるいは濃尾平野地域が生産に深く関わっていることを示すと考えている。また、今回認められた両輝石型の中でのａ～ｄ類までの多様性は、濃尾平野地域内での局地性を示唆すると考えられる。今回の試料のうち、縄文土器では両輝石型の胎土を示す試料は12点の中で５点ある。５点の試料の内訳は、後期後葉？の深鉢の図版番号60、後期末の寺津下層式併行の深鉢である図版番号61、晩期中葉の稲荷山式併行の深鉢の図版番号74、晩74、晩期中葉？の深鉢２点（図版番号79、80）となっている。これらの分類の中で、寺津式は在地系とされ、稲荷山式は近畿系とされているが、上述のようにこれら５点の縄文土器は、濃尾平野で生産された可能性がある。

西三河型

一方、両輝石型でない胎土のうち、ｆ類の胎土は、これまでの分析例において角閃石とジルコンとザクロ石を特徴とする「西三河型」と呼んできた胎土に相当し、その名の通り岡崎平野を中心とする西三河地域で作られた可能性が非常に高いことを示唆する。ｆ類の胎土である晩期初頭の寺津式併行の浅鉢である図版番号66は、西三河地域から搬入された土器である可能性がある。また、ｆ’類の胎土である図版番号27と29はどちらも近畿地方の型式である北白川上層式に対比されるとしてあるが、その生産地は西三河地域であるかも知れない。今回の試料でもう１点北白川上層式とされている図版番号49は、ｅ類の胎土であるが、これと類似する重鉱物組成は北伊勢～中伊勢地域の河川砂に認められている。また、ｇ類の胎土の重鉱物組成も同様に北～中伊勢地域の河川砂に認められているが、ｇ類の胎土は晩期中葉？の深鉢の図版番号102に認められている。同じ晩期中葉？の鉢である図版番号90の胎土であるｈ類の組成は、これまでの分析例では、弥生末から古墳時代に

かけての濃尾平野の遺跡で大量に出土するS字状口縁台付甕に多く認められる組成に相当する。この組成はまた、中伊勢地域の雲出川の河川砂に認められている。

まとめ

以上の状況をまとめると、今回選択された三ツ井遺跡の縄文土器は、近畿系の型式では濃尾平野産や西三河産および北伊勢～中伊勢産のものが混在し、在地系の型式でも濃尾平野産に西三河などの他地域産のものが混在している状況が窺える。すなわち、様々な型式が混在している状況は、様々な産地のものが混在している状況を示唆している。ただし、搬入品については近畿地方から直接もたらされたというよりは、伊勢地域や西三河地域など近傍の地域から搬入された可能性が高い。

弥生土器については、今回の試料が三ツ井遺跡の弥生土器全体を代表しているものならば、遠賀川系も氷式系も条痕紋系も濃尾平野内のある地域で作られたものが圧倒的に多いことになる。この場合、その製作地域においては何らかの理由で様々なデザインのものが作られていたということになる。なお、a類の組成はこれまでの愛知県における土器胎土の分析例ではあまり認められていないため、現時点では濃尾平野内でのa類が示す地域性を特定することはできない。三ツ井遺跡の弥生土器で注目しなければならないのは、a類以外の土器である。今回の試料では、a類以外の土器は全てi類である。i類については、その地質学的背景を推定することはできないから、その地域性も考えることができない。今後、周辺の遺跡における同時期の土器の分析例を蓄積する中で課題として考えたい。

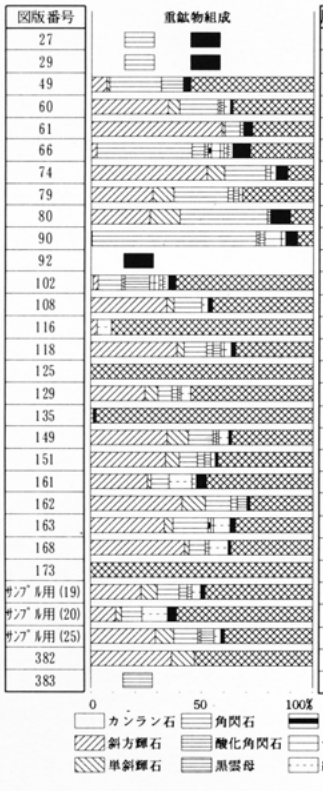
古代土師器については、今回は2点のみであるが、同じ濃尾系甕とされているにも関わらず、全く異なる胎土となっている。図版番号382は両輝石型であるから、濃尾系という分類とは調和的である。しかし、図版番号383は黒雲母を特徴とする胎土であり、濃尾平野の地質学的背景とは合わない。黒雲母の由来する岩石としては、花崗岩類が最も有力であるが、その分布地域は領家帯の花崗岩類が分布する三河地域かあるいは同じ領家帯の花崗岩類と鈴鹿花崗岩などが分布する伊勢地域になる。

今後濃尾系とされる古代の土師器の分析例を蓄積することで、その胎土の地域性や縄文土器および弥生土器の胎土との違いなどを明らかにしたい。

引用文献
矢作健二・服部俊之・赤塚次郎（1997）東海地域におけるS字状口縁台付甕の産地について－胎　土分析による予察－．日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集，p.126-127.

表39表　胎土重鉱物分析結果

図版番号	カンラン石	斜方輝石	単斜輝石	角閃石	酸化角閃石	角閃石族	黒雲母（緑色）	黒雲母（褐色）	ジルコン	ザクロ石	緑レン石	電気石	紅柱石	不透明鉱物	その他	合計
27	−	−	−	34	−	−	−	−	2	−	2	−	−	15	5	59
29	−	2	1	22	2	−	−	−	1	−	2	1	−	10	5	46
49	−	17	3	58	25	−	−	−	−	1	−	2	−	8	136	250
60	−	86	13	43	3	−	−	4	−	−	7	−	−	3	91	250
61	−	147	3	17	4	−	−	−	−	−	−	−	1	10	68	250
66	−	3	1	54	7	−	2	−	2	5	2	2	3	10	35	126
74	−	130	20	46	6	−	1	−	2	−	6	−	−	13	26	250
79	−	69	24	61	6	−	6	−	−	2	4	1	−	2	75	250
80	−	66	34	98	1	1	4	−	1	−	2	−	−	22	21	250
90	−	1	1	185	3	−	−	6	−	19	5	1	1	13	15	250
92	−	2	1	1	−	−	3	−	1	−	−	−	−	7	12	27
102	2	4	1	20	2	−	−	21	1	4	4	3	5	6	113	186
108	−	83	8	30	−	−	−	1	−	−	7	2	−	5	107	243
116	1	4	1	1	1	−	−	1	−	1	9	−	−	−	122	141
118	−	97	8	25	7	−	−	9	−	4	8	1	1	5	85	250
125	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	250	250
129	2	54	13	14	6	−	−	3	−	−	10	−	−	2	118	222
135	−	1	−	3	−	−	−	−	−	−	−	−	1	3	242	250
149	−	80	22	26	3	−	−	3	1	−	10	1	−	3	83	232
151	−	84	16	20	8	−	−	7	−	−	5	−	−	3	107	250
161	−	64	4	20	1	−	−	−	1	−	26	5	−	11	118	250
162	2	103	26	29	7	−	−	11	−	−	2	−	−	3	67	250
163	−	83	10	39	−	−	−	2	3	3	19	1	1	6	83	250
168	1	106	5	18	4	−	−	1	1	−	22	−	−	3	89	250
173	1	2	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	247	250
サンプル用 (19)	−	57	18	25	9	−	−	5	2	−	10	2	−	5	117	250
サンプル用 (20)	−	28	7	23	−	−	−	2	−	−	29	1	−	10	150	250
サンプル用 (25)	−	73	21	27	3	−	−	15	−	−	8	2	−	4	97	250
382	−	91	26	1	−	−	−	1	−	−	−	−	−	−	131	250
383	1	1	−	3	2	−	−	36	−	−	−	−	−	3	26	72



胎土	分類	調査区	遺構・出土地	時期	備考
f'	縄文土器	97 B	SK188	後期前葉	北白川上層式１期～２期に対比できる深鉢
f'	縄文土器	96 Bc	SK26	後期前葉	北白川上層式１期～２期に対比できる深鉢
e	縄文土器	97 B	SK176	後期前葉	北白川上層式２期に対比できる深鉢
a	縄文土器	97 B	SD49	後期後葉？	深鉢
b	縄文土器	97 Ab	Ⅳ B20c・検Ⅲ	後期末	寺津下層式併行の深鉢
f	縄文土器	97 Ab	Ⅴ B1b・検Ⅱ	晩期初頭	寺津式併行の浅鉢
a	縄文土器	96 Bb	Ⅳ A20o・検Ⅲ	晩期中葉	稲荷山式併行の深鉢
d	縄文土器	96 Cb	SK90	晩期中葉？	深鉢
d	縄文土器	96 Cb	SK90	晩期中葉？	深鉢
h	縄文土器	97 B	Ⅳ A16t・検Ⅱ	晩期中葉？	鉢
g'	縄文土器	96 Ba	Ⅳ B9a・検Ⅱ	晩期前葉？	鉢
g	縄文土器	97 B	Ⅳ A17r・検Ⅲ	晩期中葉？	深鉢
a	弥生土器	96 Ti	SX01	前期	条痕紋系壺形土器
a'	弥生土器	96 Cb	SK50	前期	遠賀川系壺形土器
a	弥生土器	96 Cb	SK153	前期	遠賀川系壺形土器
i	弥生土器	96 Ti	SB03	前期	遠賀川系壺形土器
a	弥生土器	96 Ti	SB03	前期	遠賀川系壺形土器
i	弥生土器	96 Ti	SB03	前期	遠賀川系甕形土器（シャモット多い）
a	弥生土器	96 Ti	SB03	前期	条痕紋系深鉢形土器
a	弥生土器	96 Cb	Ⅴ A11k・検Ⅲ	前期	水式系削痕深鉢形土器
a	弥生土器	96 Ti	SK01	前期	遠賀川系壺形土器
a	弥生土器	96 Ti	SK01	前期	水式系削痕深鉢形土器
a	弥生土器	97 Ab	SD46西側盛土	前期	遠賀川系壺形土器
a	弥生土器	97 Ab	Ⅴ A3q・検Ⅱ	前期	遠賀川系壺形土器
i	弥生土器	97 B	Ⅳ B16f・検Ⅱ	前期	遠賀川系壺形土器（シャモット多い）
a	弥生土器	96 Ti	SB03	前期	遠賀川系壺形土器
a	弥生土器	96 Ti	SB03	前期	遠賀川系壺形土器
a	弥生土器	96 Ti	Ⅴ A14P・検Ⅰ	前期	水式系削痕深鉢形土器
c	古代土師器	96 A	SB01カマド部分	古代	濃尾系甕
g'	古代土師器	96 A	SK70 (SB01内)	古代	濃尾系甕

第105図　土器胎土の重鉱物組成

第5章　まとめ

縄文時代Ⅰ期　縄文時代後期前葉の遺構・遺物は、そのほとんどが97B区の微高地及びその周辺で確認された。検出された主な遺構は土坑群であり、遺物は北白川上層式に対比できる深鉢・石鏃・磨製石斧などが出土している。また、人為的に配された可能性が高い長さ30～60cm程の自然石が4点確認された。その後、河川の流れに変化が生じ、幅約80m、最大高低差約1mの谷地形が形成され、やがて地形全体に黒色土層が段階的に堆積したと推察される。

縄文時代Ⅱ期　縄文時代後期中葉末～晩期中葉の深鉢・浅鉢・石鏃・石錐・礫石錘・スクレーパー・石製垂飾などが黒色土層及び遺構より出土した。後期中葉末～晩期前葉の遺物は少量であり、遺構に伴うものは少ないが、当時期、本遺跡周辺に人々が居住していたことは明確となった。晩期中葉の遺物は96Ba・Bc区、97B区、96Cb区で多く出土し、検出された遺構は97B区微高地の土坑群、96Ba・Bc区の微高地縁辺の溝状遺構などがあげられる。この溝状遺構埋土からイネの植物珪酸体（プラント・オパール）が検出され、明確な水田遺構は確認できなかったものの付近で稲作が行なわれた可能性が高まった。また、97B区の微高地上で石器製作の場を想定させる下呂石・チャート・サヌカイトの剥片・原石が出土した。晩期後葉の時期に属する突帯文系土器は確認できず、弥生時代前期まで空白期となる。

縄文時代Ⅱ期～弥生時代Ⅰ期の間の時期に推定される性格不明の土坑群、石器埋納土坑を検出した。

弥生時代Ⅰ期　弥生時代前期の遺構としては、浅谷化した旧河道の低湿地部で、南北方向に走り、両側に盛土を伴う幅3m・深さ40cm程の溝を検出した。地形の高低差が緩やかになる地帯で、この溝の盛土に直交及び平行する盛土が検出され、イネの植物珪酸体も検出された。溝の西側盛土中から遠賀川系土器の壺形土器と壺蓋形土器がセットで出土し、微高地縁辺部から穂摘具と考えられる粗製剥片石器が4点出土した。これらのことから、直交・平行する盛土は大畦畔であり、盛土を伴う溝は水田に水を供給するための用水路であり、弥生時代前期の水田跡と考えられる。小畦畔の有無は確認できなかったが、その後の洪水により削平された可能性が考えられる。明確な排水路はなく、田面高低差を利用した田越し灌漑によって、順次、水を配していったものと推察される。この時期の居住域は、谷地形西側の微高地上に展開し、その中心地は96Cb区とその東の96Ti付近と想定され、尾張編年に対比すると、Ⅰ－2期に比定できる遠賀川系土器の壺形土器・鉢形土器、氷式系削痕深鉢形土器、条痕紋系壺形土器、内傾口縁土器などが出土した。土器焼成時の剝離片が出土し、土器製作の場も想定される。また、石器製作によって生じたと推察される剥片・原石が多数出土した。そのほとんどが下呂石であり、縄文時代の剥片・原石と比較すると使用され

た石材の変化がみられることは興味深い。また、97B区の微高地上で方形周溝状遺構群を検出した。遺構群は、一定の方位を意識して掘削され、居住域からやや離れた場所に位置していることなどから、非Ａ４形の方形周溝墓の周溝と考えられる。上層は削平され、墳丘及び主体部は確認できなかったが、少なくとも３基以上はあろう。供献土器と考えられる遺物は確認できなかった。出土遺物は少量の細片であるが、層位より弥生時代前期と推定される。非Ａ４形の方形周溝墓がこの時期に確認されたことは、興味深い。

弥生時代前期の集落跡で、居住域・水田域・墓域が揃って確認されたことは、この時期の集落形態を考える上で重要であろう。南の微高地上には土器製作や石器製作の場を伴う居住域が、微高地東側の浅谷化した旧河道の低湿地部には水田域が、居住域からやや離れた北の微高地上には墓域が展開している（第30図弥生時代Ⅰ期遺構模式図参照）。縄文時代の遺物が北の微高地上で多く確認されたのに対し、弥生時代前期の遺物は南の微高地上に集中して確認されている。北の微高地上で確認された遺構は、洪水と思われる浸食を頻繁に受けている。この時期、北の微高地は居住域に適さない場所であり、そこに墓域が形成されたものと推察される。また、遺物の時期幅が限定されることより、集落の存在期間は極めて短かったものと推定される。

弥生時代Ⅱ期　弥生時代前期から後期の間と考えられる時期に、再びNR01の活動が活発化したため、稲作は、微高地西側の縁辺部の緩傾斜地で展開するようになったと推察される。幅３ｍ・深さ１ｍ程の大溝は、盛土を伴い、並行する溝及び大溝から分岐・合流する溝群にも盛土がみられた。大溝の盛土と並行する溝の盛土に直交する大畦畔と思われる盛土が検出され、盛土に水口と思われる部分がみられたこと、溝の埋土や同層位の土層中からイネの植物珪酸体が確認されたことなどから、これらの溝群は水田用排水路として利用され、水田域は大溝の西側に展開されたものと想定される。小畦畔の有無は確認できなかったが、弥生時代Ⅰ期と同様、洪水により削平されたものと推定される。弥生時代前期の土器細片が少量出土したのみで、明確な時期は不明であるが、層位より弥生時代前期以降、弥生時代後期以前の時期に推定される。弥生時代Ⅰ期の水田域は、浅谷化した旧河道の低湿地部に展開し、明確な排水路を伴わない田面高低差を利用した田越し灌漑による水田に対し、その後の弥生時代Ⅱ期の水田域は、微高地縁辺部の緩傾斜地で展開し、排水路を伴う水田と考えられ、時期による違いがみられることは興味深い。この時期の居住域については不明であるが、遺構及び同層位の土層中から遺物がほとんど確認できなかったことより、ここから離れた場所に展開していたものと想定される。溝群の掘削時期は、それぞれ数段階の時期差がみられた。弥生時代後期までの間に、幾度もの洪水性の堆積によって段階的に埋没し、その度に再掘削されたものと推察される。この時期の最後の遺構面と弥生時代後期以降の遺構面との間には数層に分層される黄褐色砂質シルトの無遺物層があり、空白期の存在が推定される。

弥生時代後期～古墳時代

弥生時代後期までに、谷地形は埋没したものと推察される。この時期の遺構群は、断続的であり、大きく4つの時期に細区分され、微高地の縁辺に沿う方向に走る溝群や土坑・井戸などを検出した。弥生時代後期から古墳時代前期①の遺物は山中式後期～廻間Ⅰ式の有段高杯・く字甕・「パレス・スタイル」壺などがあげられる。古墳時代前期②の遺物は廻間Ⅱ式の甕類・壺類などが出土している。古墳時代前期③の時期以前に古墳時代前期包含層が堆積している。古墳時代前期③の遺物は、松河戸Ⅰ式の甕類・壺類・高杯・器台などが出土し、これらは極めて限定された時期のものと考えられる。古墳時代後期の遺構と遺物は他時期に比べるとかなり少ない。東山61号窯式の須恵器の杯などが出土している。遺構・遺物は、97B区と97Ab区の微高地及び96Cb区とその東の96Tiの微高地を中心に確認された。特に遺物は、97Ab区・96Tiから集中して出土し、96A区・96E区・97Ca区・97Cb区では、ほとんど確認できなかった。前時期の微高地以外の部分は、この時期も湿地状で居住域に適さなかったものと推察される。また、97B区の微高地上の遺構は希薄にみえるが、古代～中世の遺構や土層から、この時期の遺物が多く出土している。古墳時代前期包含層や後の古代包含層は、微高地縁辺部及び微低地によく残存し、微高地上には残存していないことから、微高地部分は後世の開発により大規模な削平を受けたものと推定される。従って、微高地部分の遺構も削平されたものと推察される。

古　代

古代の遺構と遺物は、96A区・96Ba区・97B区北部・97Ca区・97Cb区に集中し、この周辺に居住域が展開されたものと想定される。主な遺構としては、概ね北東から南西方向に走る溝群や竪穴住居・土坑などを検出した。主な遺物としては、須恵器の杯・杯蓋・椀・盤・鉢、灰釉陶器の椀・皿類、土師器の甕の他、刻印のある須恵器・製塩土器・都城形の土師器を模倣した杯などがあげられる。遺構出土遺物のほとんどが猿投窯の折戸10号窯式～黒笹90号窯式のものであり、古代包含層からは黒笹90号窯式までの遺物が出土している。

古墳時代までの溝群は概ね南北方向に走り、古代の溝群は概ね北東から南西方向に走り、溝群の方向性に変化がみられる。推測ではあるが、自然微地形の起伏の変化の影響以外に、上流河川流路の変化の影響も考えられる。それが自然的なものか、人為的なものかは不明であるが、古代の溝群は現在の青木川の方向性に類似している。

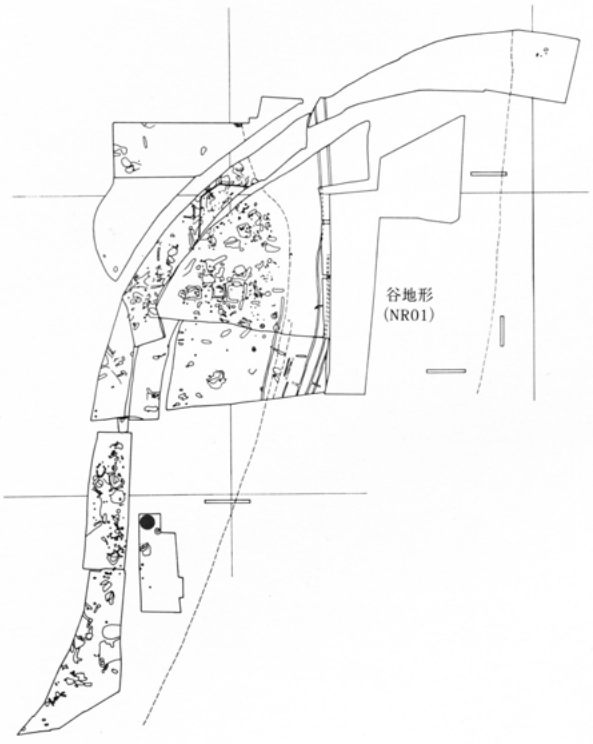
中世Ⅰ期

島畑景観形成以前の遺構としては、古代の溝の軸線と同方向の溝群と方形土壙群や集石など墓域を想起させる遺構を検出した。また、96Ba区から97B区にかけて、隅丸長方形状に掘削された凹地内で柱穴と思われる土坑と周回する溝群を、その東側と南側で区画溝群を検出した。これらは島畑に関連する遺構として考え難い。遺構の性格は不明であるが、墓域と関連した特殊空間の可能性が考えられ、東側の溝は中世塚墓の周溝と思われる。この時期の遺構は、後世の開発によりかなり削平されている。遺構出土遺物としては、尾張型第4型式～第6型式の灰釉系陶器椀などが出土している。外面高台に墨書がある尾張型第6型式の灰釉系陶器椀が土坑より完形で出土した。

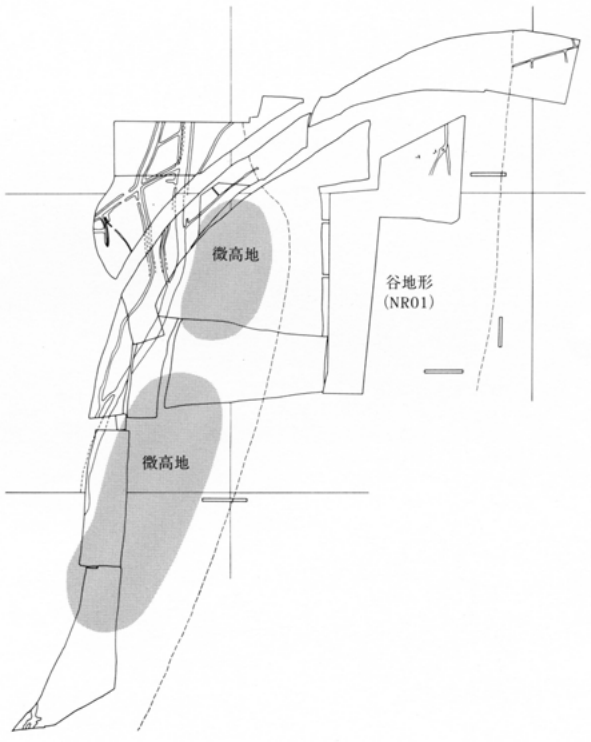
中世Ⅱ期以降　水がかりが悪いこの地域では「地下げ」による水田開発に伴い、水田と畑地を共に利用する集約的な島畑が造成されたと考えられる。検出された島畑遺構の多くは「地下げ型」であった。この時期の遺構群は、概ね東西・南北方向を維持しており、地表の条里地割と同じ方向性になる。本遺跡周辺では、この時期以降、正方位条里地割に規制された耕地が形成された可能性が高い。その後、近世を通じてさらに水田開発が進み、島畑景観が発展していったものと考えられる。島畑景観の形成時期について明確な時期決定は困難であるが、島畑に関連すると思われる遺構からの出土遺物や現況島畑に内包された旧島畑下層の出土遺物から14世紀後半～15世紀頃と推定される。概ね、古い時期（中世Ⅱ期）に造成された島畑遺構は旧地形の微高地部分で検出され、新しい時期（近世以降）に造成された島畑遺構及び水田遺構は旧地形の旧河道など低湿地部分で検出された。また、近世施釉陶器などを素材にした加工円盤類が近世の水田遺構から多く出土し、豊作祈願の可能性が推察される。近世の農道・溝などからは、研磨痕のある土器類が出土している。携帯用研磨具として鎌・鋤・鍬など金属部分をもつ農具などの手入れに使用されたものと推察される。

発掘調査の成果　以上、調査結果をまとめてみたが、今回の発掘調査の成果として、次の点があげられる。

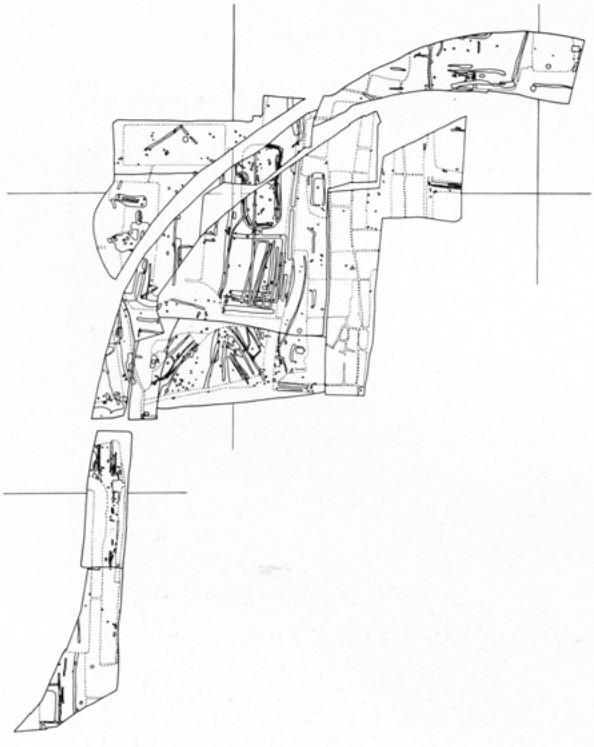
① 縄文時代後期前葉、後期中葉末～晩期中葉の土器類が遺構・その他より出土したこと。
② 弥生時代前期の土器製作の場や石器製作の場を伴う居住域を確認したこと。
③ 弥生時代前期の水田跡を確認したこと。
④ 弥生時代前期の非Ａ４形の方形周溝墓と考えられる遺構群を確認したこと。
⑤ ②～④より、居住域・水田域・墓域が揃った弥生時代前期の集落跡を確認したこと。
⑥ 尾張編年に対比すると、Ⅰ－２期に比定できる遠賀川系土器の壺形土器・鉢形土器、氷式系削痕深鉢形土器、条痕紋系壺形土器、内傾口縁土器などが出土したこと。
⑦ 縄文・弥生時代の石器・石製品が各種出土したこと。石器埋納土坑を検出したこと。
⑧ 弥生時代後期～古墳時代の遺構に伴う遺物が各種出土したこと。
⑨ 古代の遺構に伴う須恵器・灰釉陶器・土師器などが各種出土したこと。
⑩ 地表の正方位条里地割が古代まで遡らず、中世以降に形成された可能性が高いこと。



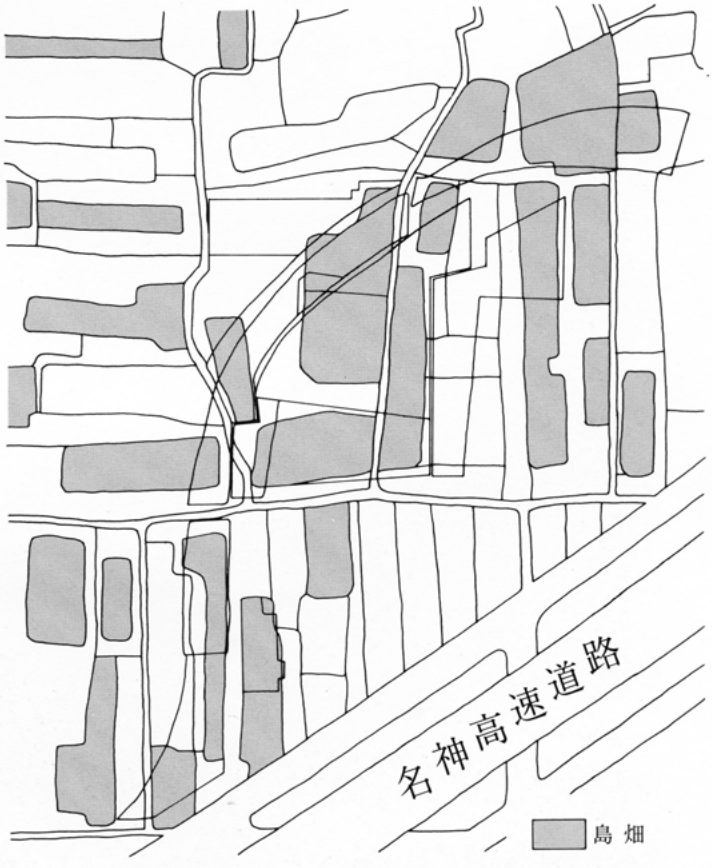
第100図　縄文時代Ⅰ期～弥生時代Ⅰ期遺構図（1：2500）



第101図　弥生時代Ⅱ期遺構図（1：2500）



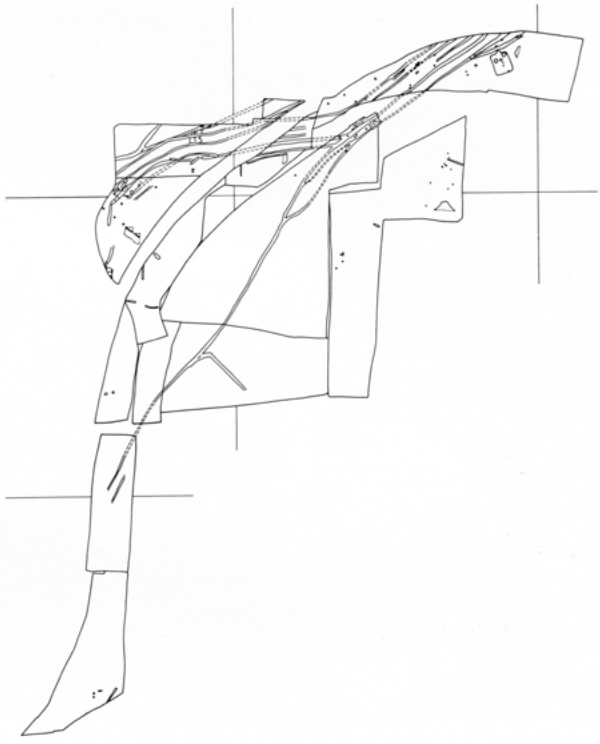
第104図　中世以降遺構図（1：2500）



第105図　現代の島畑・水田位置図（1：2500）



第102図　弥生時代後期～古墳時代遺構図（1：2500）



第103図　古代遺構図（1：2500）



第106図　1999年1月31日現在（一宮パーキングエリア，97B区のあたり）

弥生時代前期の諸問題
～三ツ井遺跡からの検討～

はじめに
1．氷式系削痕深鉢形土器について
2．長原系壷形土器について
おわりに

はじめに

三ツ井遺跡は尾張平野部における弥生時代前期の良好な基準資料となった。特に、尾張平野部の遠賀川系土器受容期の様相を考えるうえで重要な資料となろう。今回は三ツ井遺跡で出土した資料から派生する２つの問題点を整理してみよう。

まず、氷式系削痕深鉢形土器。今回改めて認識できた削痕系土器の出自について、三ツ井遺跡からの検討を行い、周辺部の遺跡、さらに中部高地との比較検討を試みる。

次に、長原系壷形土器。三ツ井遺跡SX01出土の条痕紋系壷形土器がどのような背景で生まれたかを整理し、その後の展開を探る。

以上の２点について、三ツ井遺跡から出土した資料に基づいて検討する。

１．氷式系削痕深鉢形土器について

(1)　問題の所在

削痕系土器は、遠賀川系土器と在来の突帯紋系土器とが折衷して成立した深鉢・甕形土器として考えられてきた（永井1996など）。そして、その分布は尾張平野部周辺のごく限られた地域にのみ定着すると考えられてきた。時期的に見ても尾張編年Ⅰ－２～３期の間に見られるのみである（石黒・宮腰1996）。また、削痕系土器は深鉢・甕形土器のみ、すなわち煮炊具のみで、他の形態にはない。

さて、三ツ井遺跡では、従来削痕系土器と考えられていた資料に加え、氷式系深鉢形土器が共伴している。この氷式系深鉢形土器と削痕系土器を比較検討した結果、削痕系土器はより氷式系深鉢形土器に接近していることが明らかになった。

ここでは、まず三ツ井遺跡から出土した資料のうち、氷式系深鉢形土器と削痕系土器の類似点整理し、どのような変遷を考えられるのかを整理する。そのうえで、氷式系深鉢形土器と削痕系土器が同一の系統であるかを検討していく。

まず、今回「氷式系削痕深鉢形土器」とした事例を提示する。これには削痕系土器と称されてきた土器も含む。私はかつて削痕系土器を「突帯紋系ケズリ甕形土器」として扱い、在来の突帯紋系土器と遠賀川系土器が折衷した土器として考えてきた（永井1996）。しかし、今後は氷式系土器と遠賀川系土器、さらに在来の突帯紋系土器、３つの系統が折衷した土器として考えを改める。特に、氷式系深鉢形土器に接近し、成立すると考えるため「氷式系削痕深鉢形土器」と称した。

(2)　三ツ井遺跡の事例

三ツ井遺跡では、５つの遺構から出土している。本文で時期比定したとおり、Ⅰ－２期に相当する資料群である。ここでは、氷式系削痕深鉢形土器を中心に、細分した３段階、古・中・新の順に三ツ井遺跡の事例を提示してみよう。

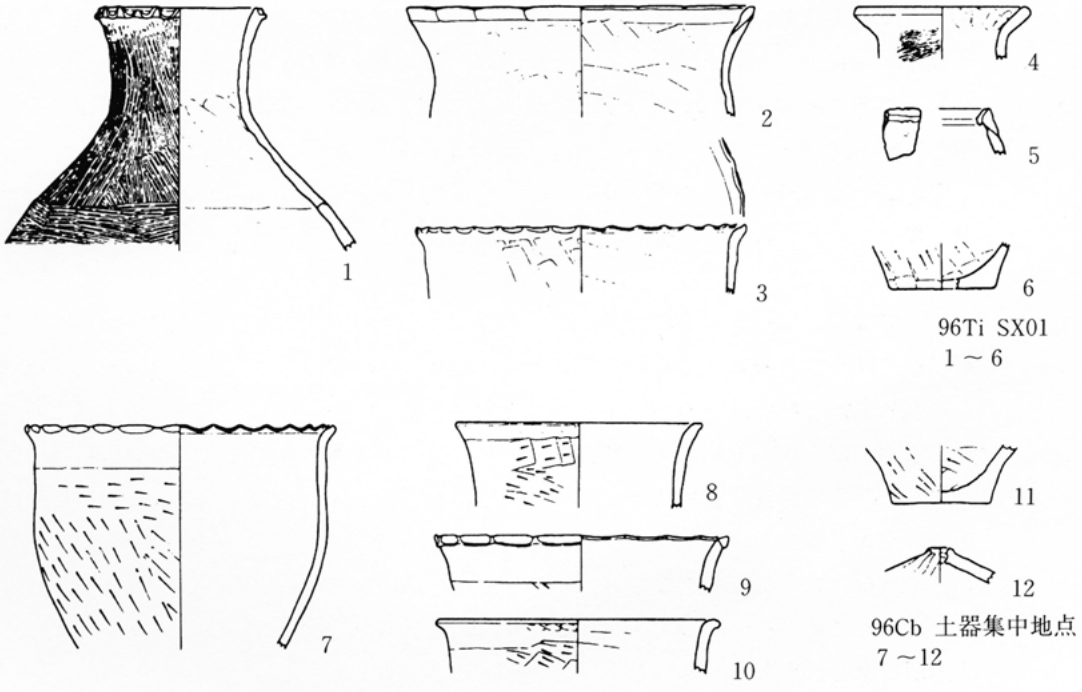
Ⅰ－２期古段階（第１図）

96TiSX01資料は条痕紋系壷形土器・内傾口縁土器・遠賀川系壷形土器が共伴する。

氷式系削痕深鉢形土器は２・３・６。２は口縁外面に連続指頭押圧を施すタイプ。頚部がややくびれる器形。外面調整は縦方向の板ケズリを行い、頚部にその後横ナデを行う。３は口縁端部に連続指頭押圧を施すタイプ。頚部はくびれず、口縁内面を強く横ナデしたためか、口縁部が外反傾向にある。外面調整は縦方向の板ナデを行う。６は底部。外面調整は縦方向の板ケズリ、底部付近はその後板ケズリを行う。

96Cb土器集中地点は遠賀川系壷蓋形土器と共伴する。

氷式系削痕深鉢形土器は７～11。７は口縁端部に連続指頭押圧を施すタイプ。頚胴部の境目が調整によって明確に分かれる。頚部は板ケズリ調整の後、横ナデを行う。胴部は上位が横方向の板ケズリ、下位は縦方向を基本に板ケズリを行う。９は口縁外面に連続指頭押圧を施すタイプ。頚胴部の境目は７と同様に、調整によって明確に分かれる。８・10は口縁部に連続指頭押圧を持たないタイプ。口縁端部に面取りを行う。外面調整は縦方向の板ケズリ、その後、口縁部周辺に横ナデを行う。11は底部。外面に縦方向を基本とする板ケズリ調整を行う。



第１図　三ツ井遺跡出土Ⅰ－２期古段階資料（S＝１／６）

Ⅰ－2期中段階（第2図・第3図上段）

96CbSK153は遠賀川系壷形土器・鉢形土器と共伴する。

氷式系削痕深鉢形土器は16。口縁端部に連続指頭押圧を施すタイプ。頚部を意識しているためか、外面の口縁直下に横方向の板ケズリを行う。胴部はやや斜方向の板ケズリを行う。

96CbSB03は遠賀川系壷蓋・壷・鉢・甕形土器と条痕紋系深鉢形土器が共伴する。

氷式系削痕深鉢形土器は28～35。28～30は口縁外面に連続指頭押圧を施すタイプ。29は28・30に比べ、頚胴部の境目が上位にある。また、頚部を横ナデしたのち、胴部にミガキ調整を行う。32～35は口縁部に連続指頭押圧を持たないタイプ。32は頚部から口縁部周辺に横ナデを行い、その後口縁内面に面取りを行う。33～35は胴部に縦方向のケズリ調整を行い、その後口縁部周辺に弱い横ナデを行う。

Ⅰ－2期新段階（第3図下段）

96TiSK01は遠賀川系壷蓋・壷・鉢形土器が共伴する。

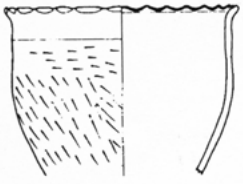
氷式系削痕深鉢形土器は37。甕化指向が強く、三ツ井遺跡のなかでは異質な器形。名古屋市北区月縄手遺跡出土資料の新相に比較的多い器形。頚部に横方向のミガキ調整を行う。

胴部は縦方向の板ケズリ調整を行い、その後、ミガキ調整を胴部上位に行う。

A類



B類



C類



(3)　三ツ井遺跡の氷式系削痕深鉢形土器について

他の遺跡と比較する前堤として、三ツ井遺跡内での変遷を試みる。

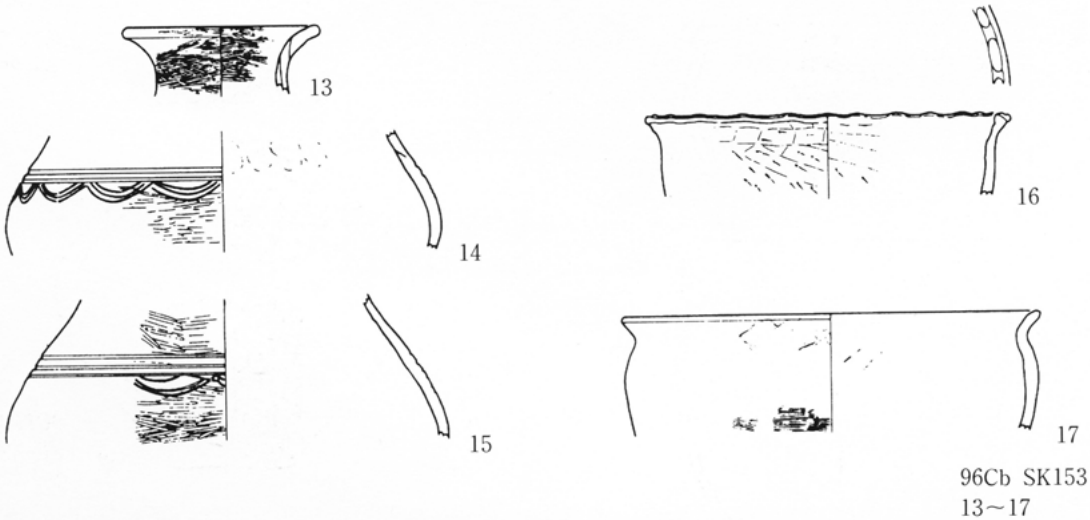
時間的な位置づけは、前項で示した。これに基づき、氷式系削痕深鉢形土器を分類し、その変遷過程を以下に示す。

分　類

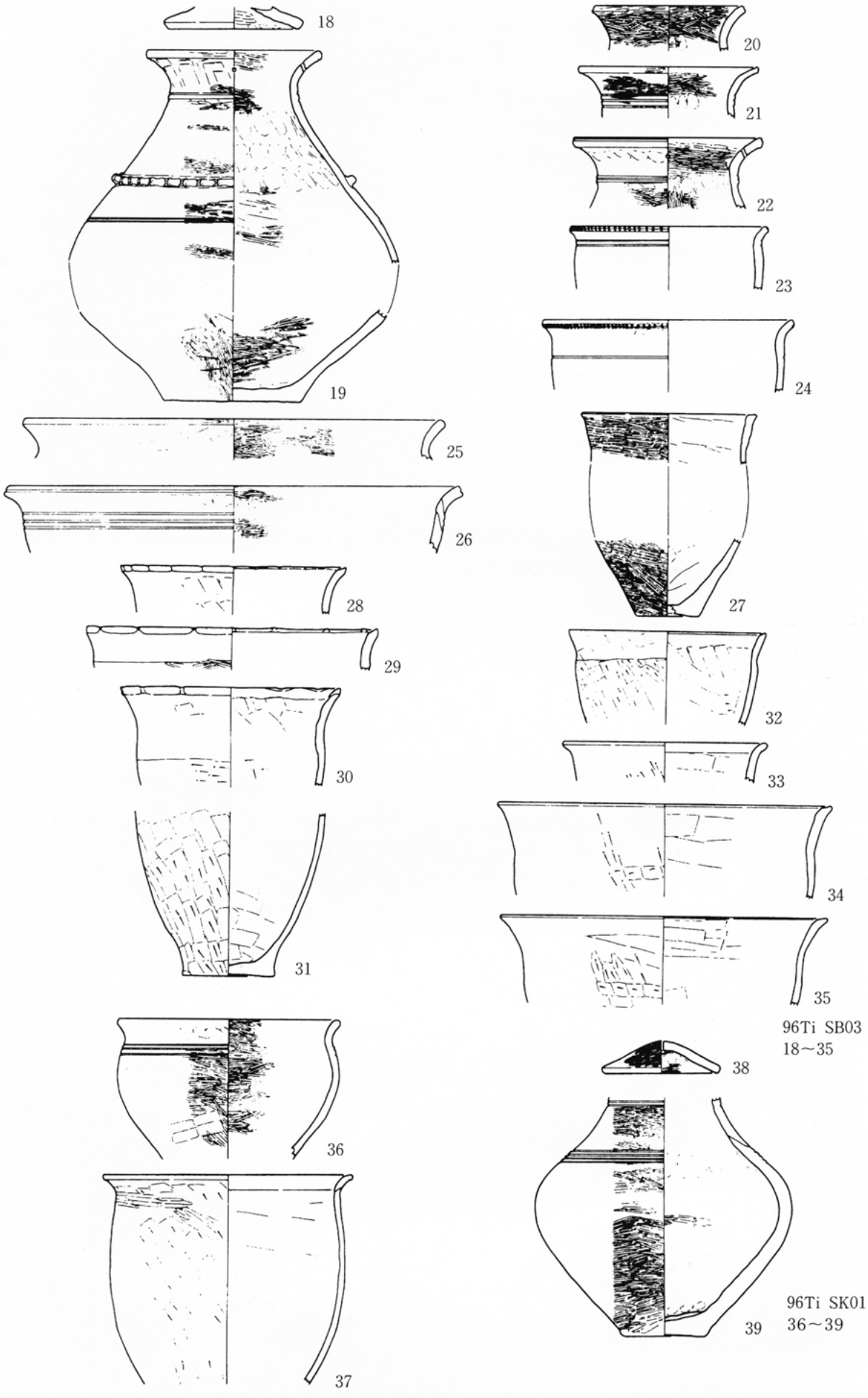
分類は基本的に口縁部の特徴で行う。

口縁外面に連続指頭押圧を施すタイプを**A類**、口縁端部に連続指頭押圧を施すタイプを**B類**、口縁部に連続指頭押圧を持たないタイプを**C類**とする。

氷式系土器と遠賀川系土器との類似性に置き換えれば、A・B類は氷式系深鉢形土器に接近するタイプ、C類は遠賀川系甕形土器に接近するタイプとなる。



第2図　三ツ井遺跡出土Ⅰ－2期中段階資料（S＝1／6）



第3図　三ツ井遺跡出土Ⅰ－2期中～新段階資料（S＝1／6）

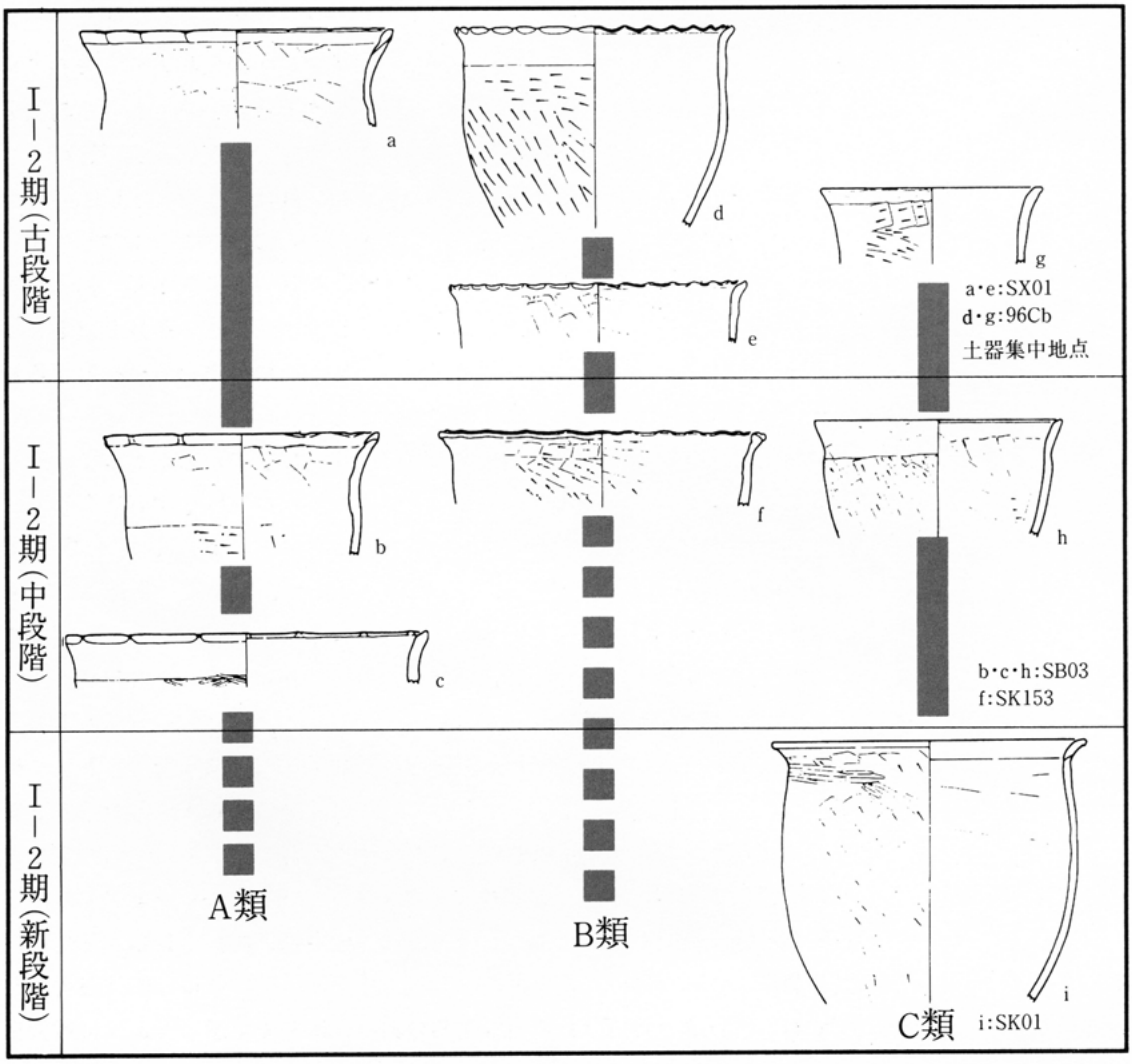
変　遷

A類：口縁外面の連続指頭押圧については、ピッチの長短（3～5cm）があるものの、時期的な変遷ではなく、口径の大小によるものと考えられる。すなわち、ピッチの長いものは口径が大きく、短いものは口径が小さい傾向にある。型式学的な視点からみると、以下の2点が指摘できる。まず、頸部のくびれ度について見てみると、強いものが古相、弱いものが新相。次に、頸部と胴部の境目の位置について見てみると、下位になるものが古相、上位になるものが新相。これら2点について、現状では相関関係が認められる。すなわち、頸部のくびれが強く、頸胴部の境目が下位になるものが古相、頸部のくびれが弱く、頸胴部の境目が上位になるものが新相となる。

B類：A類と同様な変遷が考えられる。ただ、頸胴部の境目がA類よりも変化が早く、古段階には弱い横ナデ程度になる。

C類：頸胴部の境目を意識した調整が中段階まで続く。その後、新段階には甕化指向が加わる。

A～C類、すべてに共通する変遷は、頸胴部の境目を意識した調整の変化である。この変遷は三ツ井遺跡以外では確認できない。また、A・B類は尾張周辺地域で三ツ井遺跡のみ見られる資料でもある。



第4図　三ツ井遺跡における氷式系削痕深鉢の変遷図（縮尺1：6）

(4) 尾張平野部の氷式系削痕深鉢形土器について

ここでは、遺構出土の確認できる名古屋市月縄手遺跡と一宮市山中遺跡を中心に三ツ井遺跡との比較検討を試みる。また、尾張平野部において浮線紋系浅鉢形土器以外に氷式系深鉢土器がⅠ－1期に確認できる。これも含めて検討していく。

分　類

先に示した三ツ井遺跡のA～C類に、D類を付け加える。

D類



D類：基本的にはC類と共通する要素を持つ。相違点は、口縁端部の刻みである。これは、遠賀川系土器により接近する要素として注目できる。遠賀川系土器との相違点をあげれば、頚部の沈線紋帯が見られないこと、粘土帯が内傾接合、以上2点である。

変　遷

Ⅰ－1期に併行する突帯紋系土器の遺跡は尾張平野北西部に位置する山中遺跡・下り松遺跡、北東部に位置する松河戸遺跡、名古屋台地に位置する古沢町遺跡があげられる。また、朝日遺跡では貝殻山地点の抽出資料のほか、96SK238から遠賀川系土器の良好な一括資料が確認されている。しかしながら、遠賀川系土器と突帯紋系土器、あるいは氷式系土器の共伴例はいまだ確認されておらず、Ⅰ－1期を設定する条件は整っていない。したがって、氷式系深鉢形土器の時期比定も推測の域を出ない。

さて、変遷図に示した氷式系深鉢形土器（1・2）は、形態・紋様・調整などの共通性、あるいは共伴する浮線紋系浅鉢形土器の時期比定からⅠ－1期に相当する資料である。これらは、いわゆる細密条痕を胴部に持つ深鉢形土器であるが、一方でケズリ調整を行う深鉢形土器が共伴する。中部高地においても、同時期に比定できる御社宮司遺跡や石行遺跡などで細密条痕を持たない、粗製深鉢形土器とされる一群の土器が一定量認められる。ただ、Ⅰ－2期以降にみられる氷式系削痕深鉢形土器のA・B類のように頚部にくびれを持つ形態がⅠ－1期には見られない。したがって、現状においてⅠ－1期に遡る氷式系削痕深鉢形土器の存在は確認できず、氷式系細密条痕深鉢形土器からの系譜を想定しておく。3は三ツ井遺跡ではB類とした氷式系削痕深鉢形土器が条痕紋系土器に接近する資料で、条痕紋系土器と氷式系土器の折衷土器として注目できる。

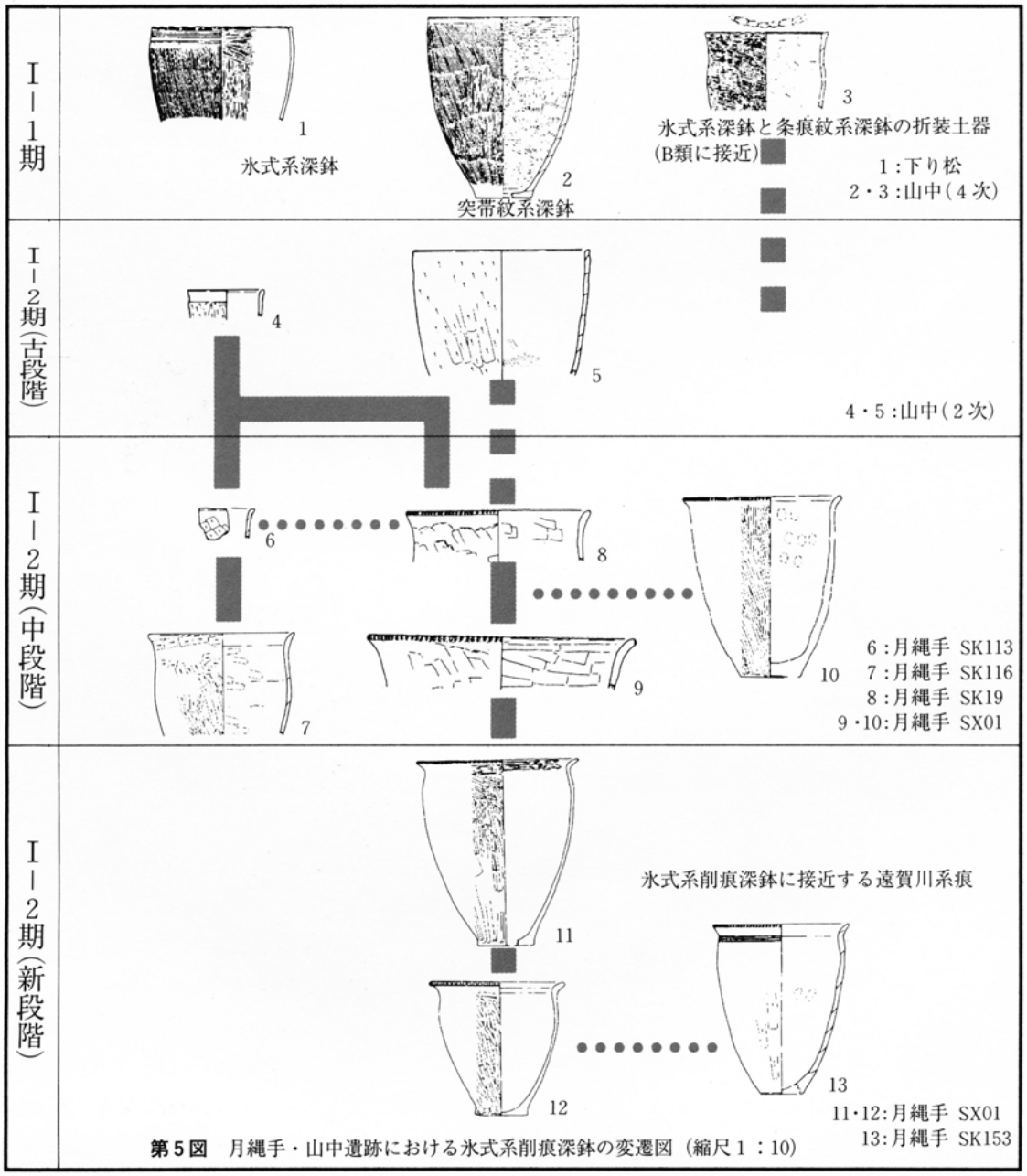
Ⅰ－2期古段階の資料は三ツ井遺跡以外に良好な資料はない。したがって、三ツ井遺跡との併行関係から導き出さなければならない。4・5は山中遺跡2次調査資料で、従来突帯紋期の終末、Ⅰ－1期に比定されていた資料である。本稿では、三ツ井遺跡SX01・96Cb土器集中地点の資料との比較からⅠ－2期古段階とした。三ツ井遺跡では遠賀川系土器と共伴するが、山中遺跡では不明である。これは単に確認されていないだけなのか、あるいは遺跡の実態なのかは今後の資料増加を待たねばならない。5の突帯紋系深鉢形土器は、朝日遺跡貝殻山地点の抽出資料からも裏付けされるように、遠賀川系土器と共伴する深鉢形土器である。氷式系削痕深鉢形土器を突帯紋系ケズリ深鉢形土器として想定していた祖形に相当する土器でもある。したがって、氷式系削痕深鉢形土器の系譜を考える上で、在来の突帯紋系土器と氷式系深鉢形土器との折衷土器である可能性は否定できない。

Ⅰ－2期中段階の資料としては、月縄手遺跡SK113・SK116・SK19などがある。C類は三ツ井遺跡と同様な変遷が認められる。一方、この段階に出現するD類は月縄手遺跡における氷式系削痕深鉢形土器の主体を占めるタイプである。三ツ井遺跡では確認されなかったタイプである。D類の特徴である口縁端部の刻み目は、先に示したように遠賀川系甕形

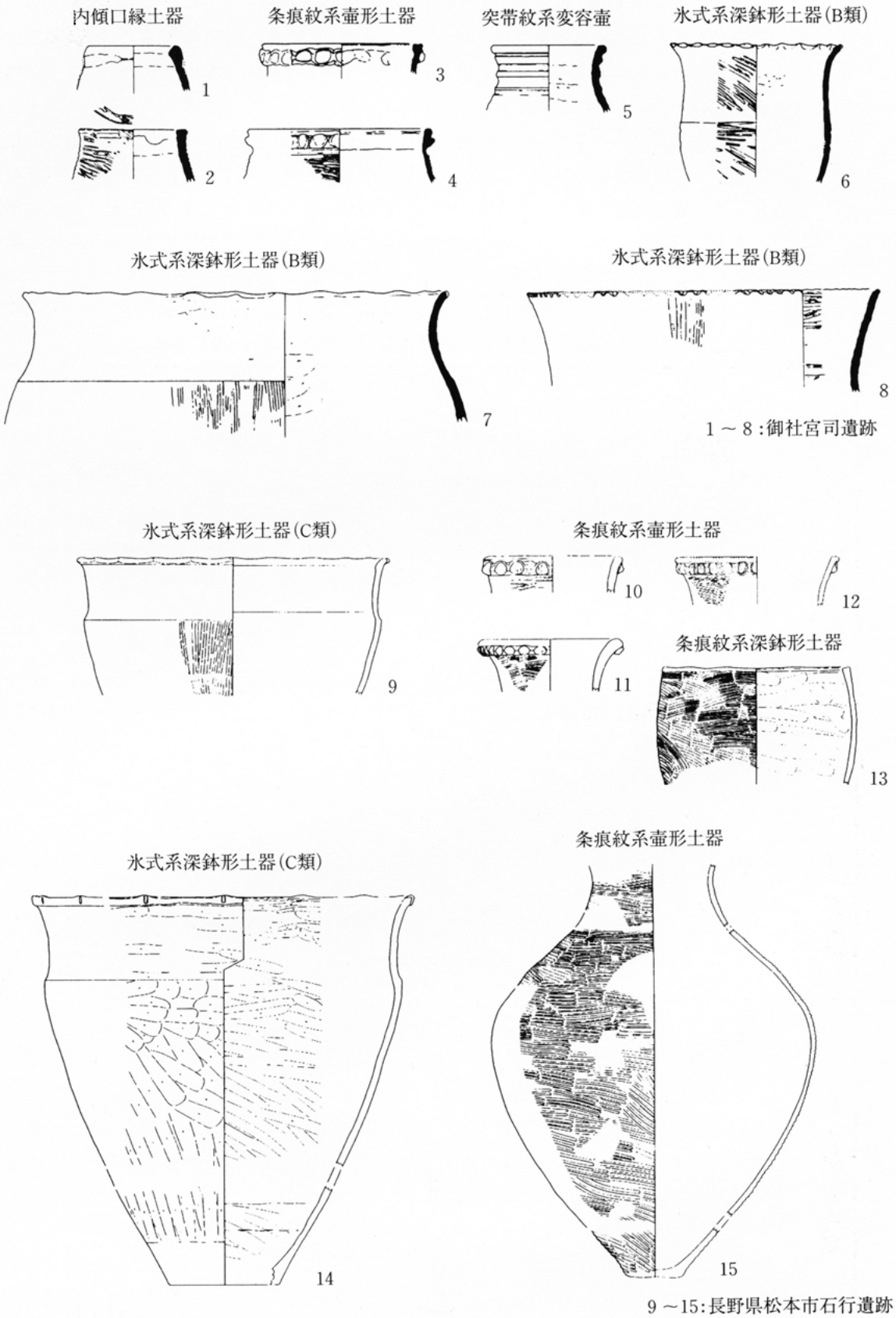
土器に接近する特徴である。したがって、C類とD類の差異はどれだけ遠賀川系甕形土器に接近するかといった評価につながり、2つのタイプの出土頻度は氷式系削痕深鉢形土器の遺跡差として考えられる。換言すると、氷式系削痕深鉢形土器は三ツ井遺跡より月縄手遺跡の方がより遠賀川系甕形土器に接近していると言えよう。

Ⅰ－2期新段階の資料は月縄手遺跡SX01がある。三ツ井遺跡ではC類の甕化指向を指摘したが、月縄手遺跡の場合、形態は遠賀川系甕形土器と酷似する。また、板ケズリの後にミガキ調整を行う例が顕著に見られる。さらに、13のように頸部に沈線紋帯を施す類例もあり、内傾接合である点を除けば氷式系削痕深鉢形土器に接近する遠賀川系甕形土器と言っても過言ではない。

このように、氷式系削痕深鉢形土器は遠賀川系甕形土器と折衷する事象が読み取れる資料群であり、尾張平野部の煮炊具を考えるうえで重要な意味を持っている。



第5図　月縄手・山中遺跡における氷式系削痕深鉢の変遷図（縮尺1：10）



第6図　中部高地の氷式系深鉢形土器と関連資料（縮尺１：６）

2．長原系壷形土器について

(1)　長原系壷形土器の認識

近畿地方の縄文時代晩期後半に長原式とされている土器群がある。そのなかでも今回注目するのは、壷形土器である。長原式の壷形土器は突帯紋系土器様式のなかで、甕・深鉢変容壷として出現すると言われている。この変容壷は、口酒井式から船橋式を経て壷形土器として定着する。したがって、伊勢湾周辺に影響を与える段階の壷の形態は、変容壷ではなく、壷形土器の形態として捉えることができる。また、伊勢湾周辺には長原式以前に存在する変容壷がある。この伊勢湾周辺の変容壷との違いを明確にするために、近畿地方の壷形土器あるいはその影響下で成立する伊勢湾周辺の壷形土器に対して「長原系壷形土器」と称し、その特徴を次項に3点あげた。

ここでは、長原系壷形土器における近畿地方と伊勢湾周辺の比較検討を通して、伊勢湾周辺における壷形土器の成立・展開を考えてみた。

(2)　近畿地方の長原系壷形土器（第7図）

近畿地方の突帯紋系壷形土器については、佐藤による詳細な分析がある（佐藤1994）。本稿は、伊勢湾周辺の壷形土器と比較する要素として、（A）頚部と胴部の境目を意識した調整手法、（B）底部付近のケズリ手法、（C）胴頚部から口縁部の形態、以上3点について突帯紋3期（長原式）の壷形土器を検討してみたい。これらの資料の時期的な根拠は概ね佐藤論文（佐藤1994）に拠る。また、突帯紋系土器編年は泉拓良の広域編年に拠る（泉1990）。

A．頚部の境目を意識した調整手法

佐藤の分析した資料、11点のうち唐古・鍵遺跡資料（第7図16）を除くすべて頚部と胴部の調整が明確に違う。基本的には全体をケズリ調整をしたのち、頚部にナデ調整をする。このナデ調整により頚胴部の境目が明瞭に現れる。他の資料、長原遺跡第9層資料（第7図9～11）や口酒井11次東群資料（第7図21）などからも追認できる。

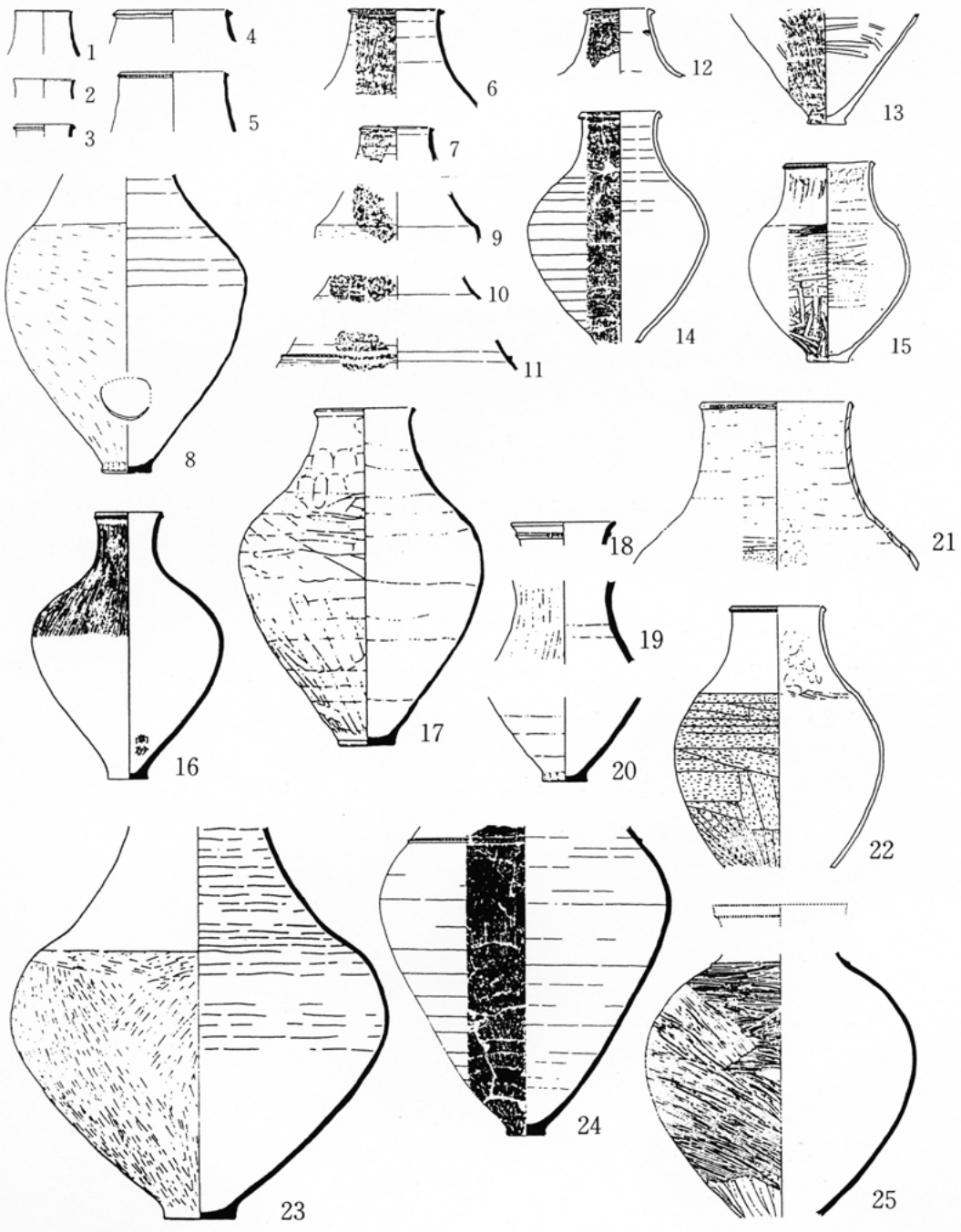
B．底部付近のケズリ手法

底部付近と胴部下位のケズリ方向の異なる資料が一定量確認できる（第7図22・25）。底部付近は基本的にタテ方向のケズリ、その後ヨコ方向あるいは右下がりの斜位方向のケズリ調整をする。なお、伊勢湾周辺の条痕紋系壷形土器は底部付近にタテ方向のケズリをするが、胴部調整ののち、最終調整の場合が多い。

C．頚胴部から口縁部の形態

ほとんどの資料は、胴部が張り、頚部に向かってゆるやかに内傾し、口縁部付近で直立する形態となる。口縁部には貼付突帯がめぐり、刻目を入れる資料が多い。また、突帯は口縁端部に連続する。唐古・鍵資料（第7図16）は、突帯部分がやや下位に見える。これは、口縁端部周辺の強いヨコナデにより、突帯上面が押され、口縁端部から離れて見えるためである（佐藤1994）。ほかの資料に関しても、口縁端部をヨコナデする資料が多く、突帯の形状は断面が下向きの三角形となる。

以上、3点を伊勢湾周辺との比較要素とする。基本的には、従来から指摘があるように、同時期の深鉢形土器の調整手法と類似する。ただ、佐藤が指摘する（佐藤1994c）ように、突帯紋2期から壷形土器として型式変化したもので、長原系壷形土器には1条突帯が優性である。



1～5 長原Ⅱ調査区 I･E区　6～11 長原Ⅲオ9層　12～14 久宝北　15 若江北　16 唐古　17 今里
18～20 大開SD402上層　21 口酒井11次東群　22 口酒井6次　23 北白川追分町　24 弘川　25 雲井

第7図　近畿地方の長原系壷形土器（S＝1／10）

(3) 伊勢湾周辺における長原系壷形土器の系譜と変遷

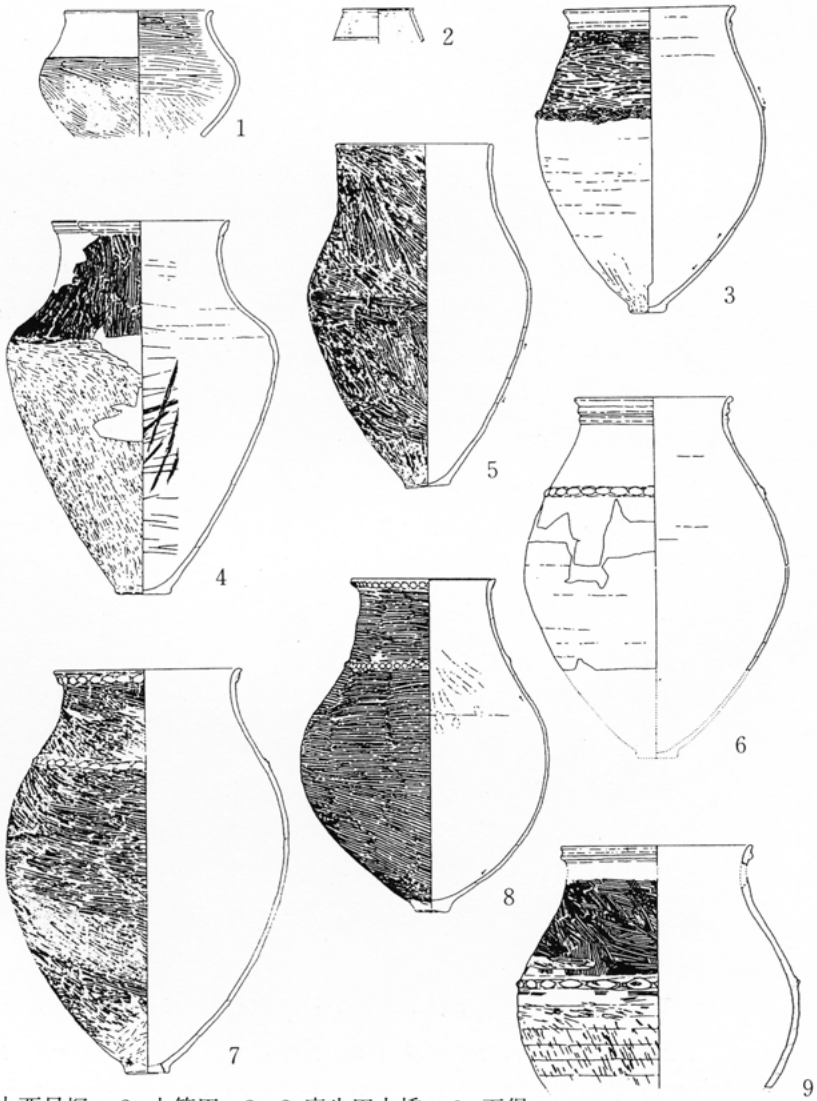
壷形土器の2系統

伊勢湾周辺の壷形土器は大きく2つの系統が存在する。その2系統とは変容壷と長原系壷形土器である。これをまず、整理してみよう。

A．変容壷（第8図）

変容壷は突帯紋3期前半に相当する麻生田大橋遺跡資料からの検討によって認識された（安井1991・前田1992・佐藤1997）。本稿では、変容壷の詳細な検討を目的としないため、要点をまとめて以下の検討に備える。

伊勢湾周辺の変容壷は、突帯紋2期後半に出現し3期で消失する。基本的には甕・深鉢変容壷が主体となるが、出現期は浅鉢変容壷（第8図1・2）も見られる（岩瀬1994・新田1993）。また、伊勢湾西岸域で成立したとされる「伊勢形壷」は変容壷のなかでも特異な存在である（第8図3・6・9）。2条突帯深鉢形土器から変容した伊勢形壷は条痕紋期まで継続する。したがって、変容壷は甕・深鉢変容壷、浅鉢変容壷、伊勢形壷、以上3系統を考えなければならない。



1 大西貝塚 2 上箕田 3～8 麻生田大橋 9 天保
（1・2は浅鉢形変容壷、4・5・7・8は深鉢形変容壷、3・6・9は伊勢形壷）

第8図 伊勢湾周辺の変容壷（S＝1／10）

Ｂ．長原系壷形土器（第９・10図）

伊勢湾周辺の長原系壷形土器は、近畿地方の土器そのものではない。先に示した近畿地方の長原系壷形土器の３要素と共通する一群の壷形土器である。ただし、必ず３要素が含まれるとは限らない。この近畿地方と共通する３要素を個別に取り上げ、検討してみよう。

ａ．頚胴部の境目を意識した調整

頚部と胴部の境目を意識して、調整方向あるいは調整手法を変えている。ただ、近畿地方は胴部に板ケズリする手法が一般的であるが、伊勢湾周辺の長原系壷形土器は、おおむね器面調整に貝殻条痕を用いる。その意味では条痕紋系土器である。該期の壷形土器は、器面全面にヨコ方向の条痕を施す条痕紋系土器が主流となるにもかかわらず、この流れに逆らう一群が長原系壷形土器だ。

ｂ．底部付近のケズリ手法

西浦遺跡（第10図14）、炉畑遺跡（第９図５）、中長遺跡（第10図11～13）、鰻水遺跡（第10図16）、零岩寺遺跡（第10図15）で確認できる。突帯紋期から条痕紋期の変容壷や深鉢形土器にはあまり見られない手法で、長原系壷形土器に目立つ手法。

ｃ．頚胴部から口縁部の形態

長原系壷形土器は少なくとも２型式認められる。胴部の肩が張り細頚となるもの、胴部の肩が張らず太頚となるものがある。概して前者が多くみられ、近畿地方と共通する。

以上、３要素に近畿地方の長原系壷形土器との共通要素を見いだした。

次に変容壷との相違点を検討してみよう。変容壷は佐藤の分析が示すとおり、深鉢形土器・甕形土器と共通する調整手法で捉えることができる。換言すると、形態上の相違はあっても調整手法には差がない。したがって、くびれ度の違いによって形態上は判別できるが、調整手法からは判別しにくい。一方、長原系壷形土器は条痕紋系の深鉢形土器や甕形土器と共通する調整手法がなく、近畿地方の壷形土器と共通する要素が主体となる。

このように、変容壷と長原系壷形土器は別系統で捉えることができる。変容壷は、汎西日本的な広範囲にわたる壷化指向のなかで、各地独自の変遷が指摘されている。一方、伊勢湾周辺の長原系壷形土器は、共通要素が強い近畿地方の壷形土器と接近する。したがって長原系壷形土器は、変容壷のように在来要素から成立するものではなく、壷形土器として確立した状況で近畿の壷形土器、すなわち長原系壷形土器の諸要素から成立する土器である。

長原系壷形土器の変遷

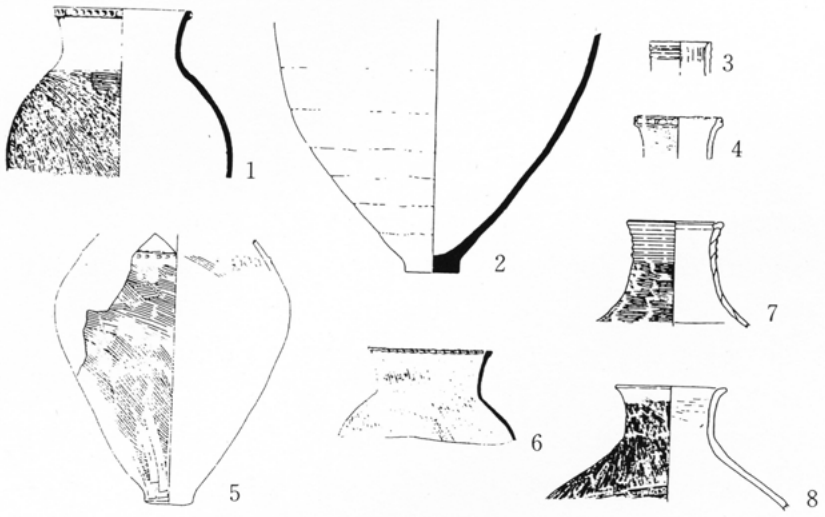
長原系壷形土器の特徴と系譜は前述した通り。以下、古相・新相を示す。

【古相】

頚部に条痕調整がなく、ナデあるいは板ケズリで頚胴部の境目が意識されているもの。さらに、胴部最大径の近く境目があるものが古相、頚部が直立するところに調整の境目がくるものが新相となる。胴部に張りがあり、最大径が胴部上位になるもの。押圧突帯の位置は口縁端部直下になる。口縁端部の面取りは強くなく、弱いナデ調整を行う。

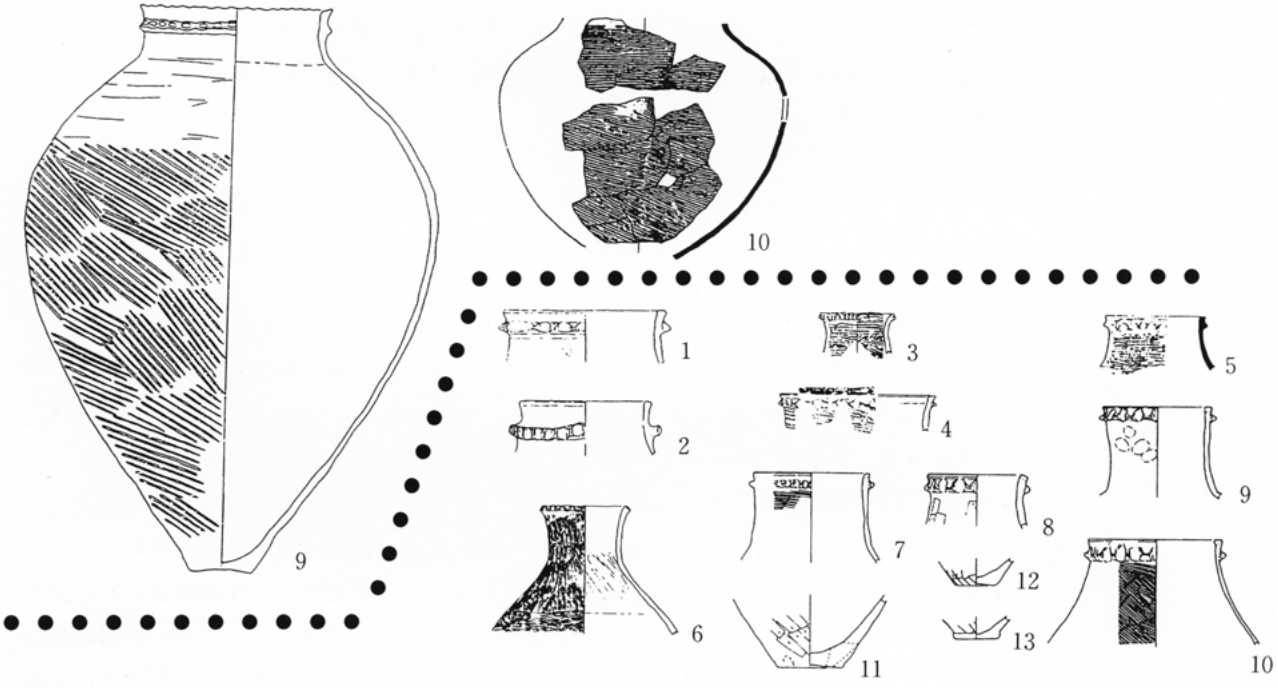
【新相】

頚胴部の境目が調整によって区別されない。器面全面にヨコ方向の条痕調整を施すものが優位となる。ただし、境目が区別されても頚部・胴部ともに条痕調整となる。胴部は球胴形に近いのものがある。太頚になるものは新相。押圧突帯の位置は口縁端部から少し下



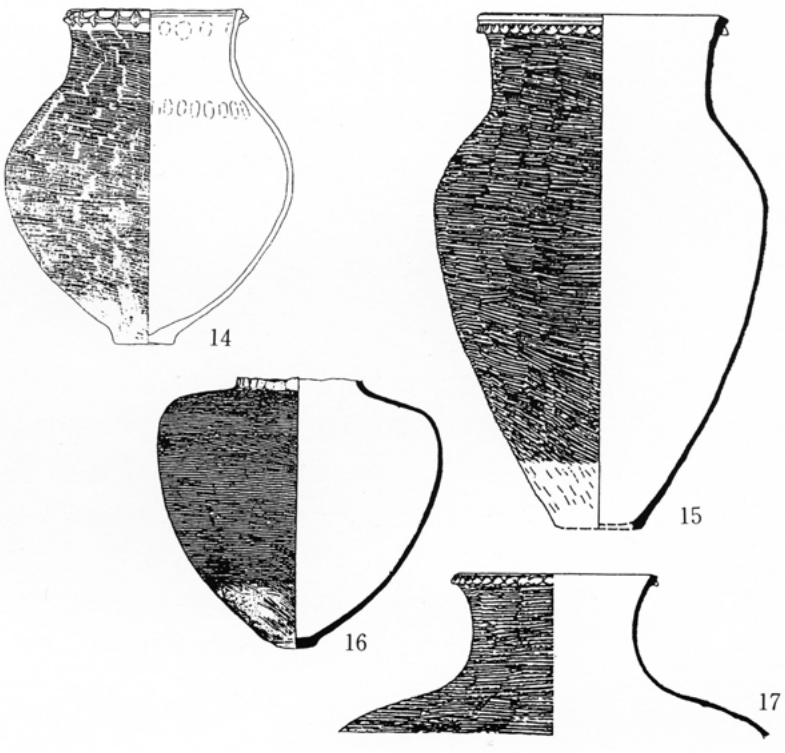
第9図
伊勢湾周辺における突帯紋期の長原系壷形土器
S＝1／10

1・2 阿弥陀堂
3・4 はいづめ
5・6 炉 畑
7 山中 SD01下層
8 西 浦
9 芋 川
10 鑓 水



第10図
伊勢湾周辺における条痕紋期の長原系壷形土器
S＝1／10

1・2 はいづめ
3・4 大 牧
5 炉 畑
6 三ツ井
7～13 中 長
14 西 浦
15 零岩寺
16 鑓 水
17 京ヶ峰



がるものが多い。口縁部の面取りが強く、口縁内面に折り返しが付くものが多い。

次に、古相・新相を考慮して、個々の資料に時期的な変遷を当てはめてみる。

【突帯紋期】

泉の広域編年では突帯紋３期が当てはまる。ただ、３期の古い部分では見られない。伊勢湾周辺で器面全面条痕調整の壷形土器・深鉢形土器がセットで確認できる、新しい部分に伴う。この新しい部分を仮に後半としよう。

現状では、西浦遺跡をはじめ、７遺跡10例。阿弥陀堂遺跡資料（第９図１）は、最も古い資料としてあげられる。胴部があまり張らない器形であることを除けば、頚胴部の境目に段を持ち、頚部はミガキ、胴部はヘラ状工具の条痕調整、口縁端部直下の押圧突帯といった、古い様相を兼ね備えている。また、はいづめ遺跡資料（第９図３・４）もおそらく古い段階に考えられる。

これらの資料より若干新しい様相を含む資料が５例ある（第９図６・７・８・９・10）。頚胴部の境目は意識されるものの、頚部と胴部の調整手法が同じとなり、調整方向によって区別を付ける例が増える。また、新相となりうる例が炉畑遺跡（第９図５）である。２条突帯になる例は、東岸域（東三河部）以外になく、北岸域では唯一となる。近畿地方に目を向けると、滋賀県弘川遺跡の例（第７図24）が類似する。

【条痕紋期】

従来の樫王式がほぼ相当し、突帯紋シンポの条痕紋Ⅰ期（突帯紋土器研1993）。ここでは、２段階に分けて示す。

古相の要素を持つ例は、三ツ井遺跡など４例（第10図３・６・14・16）。

三ツ井遺跡の例は、遠賀川系土器を伴う資料のなかで、最も古い例。頚部はユビあるいは板による調整ではなく、貝殻条痕による調整。ただ、タテ方向という点、胴部との調整方向の違いでは、頚胴部の境目を意識し、わずかながら段を持つといった古い様相が残っている。共伴する遠賀川系土器は壷形土器の口頚部が１点のほか、氷式系削痕深鉢形土器も数点ある（SX01資料）。尾張編年（石黒・宮腰　1996）のⅠ－２期古段階に相当する資料として注目できる。

鑓水遺跡の例（第10図16）は、肩部が張り、頚胴部の境目が頚部の直立するところまで上がるものの、頚胴部の境目が明瞭なもの。京ヶ峰遺跡の例（第10図17）は、鑓水遺跡の頚胴部の境目を意識しないことから新相とも考えられる。

明らかに新相を示す資料（第10図１・２・４・５・７～10）としては、押圧突帯が口縁部から少し下がる位置になるものがあげられる。中長遺跡の２例（第10図８・９）を除いて頚胴部の境目を意識する調整はない。

⑷　三ツ井遺跡の条痕紋系壷形土器を取り巻く様相

三ツ井遺跡から出土した条痕紋系壷形土器は、上記のように突帯紋系壷形土器、すなわち長原系壷形土器の特徴を色濃く残す土器である。従来の樫王式とされていた壷形土器のなかでも最も古い土器である。共伴した資料からもⅠ－２期古段階に比定できる。

さて、三ツ井遺跡のように条痕紋系土器様式のなかに近畿地方の突帯紋系土器様式が系統融合して成立する土器群がどのような位置を占めているのか？そして、この現象が一過性のものなのか？を問い直してみよう。

伊勢湾周辺の長原系壷形土器の分布を見てみると、概ね美濃・尾張北部・西三河地域を中心に拡がっている。すなわち、尾張南部を取り巻く地域に分布の中心がある。そしてこの地域には、変容壷が主流ではなく、長原系壷形土器が主流になる。

ところで、伊勢湾東岸域にあたる伊勢地域には現状では見当たらない。突帯紋期には変容壷と伊勢形壷が主流、条痕紋期には遠賀川系壷形土器が主流となる。また伊勢湾東岸域、特に東三河地域では、突帯紋期には変容壷と伊勢形壷が主流、条痕紋期になっても基本的には変容壷の延長上にあり、ようやく条痕紋Ⅱ期になって長原系壷形土器の系譜を持つ壷形土器が定着する。東三河地域の条痕紋Ⅱ期以前に長原系壷形土器が全くないとは言い切れない。それは、変容壷の形態を持つ土器の中に、長原系壷形土器の特徴を示す土器もあるからだ。しかし、主流にはならず、あくまでも長原系壷形土器に接近する土器が存在する程度である。

ここで問題としたいのは、尾張北部・美濃地域を中心に展開する長原系壷形土器のその後である。今回は、突帯紋期から条痕紋Ⅰ期を対象に検討を行ったが、条痕紋Ⅱ期以降の壷形土器、特に条痕紋系細頸壷の系譜が問題となる。尾張編年で示せば、Ⅱ－1期以降の壷形土器の系譜である。佐藤は条痕紋系細頸壷について、Ⅱ－3期に出現し、Ⅲ－1期以降に続条痕紋系土器と平沢型の長頸壷に分離すると言う（佐藤1996）。佐藤は、朝日遺跡、すなわち尾張南部の資料から細頸壷の系譜を考えている。たしかに、Ⅱ期の資料で検討できる資料が朝日遺跡以外にあまりない。しかし、条痕紋系壷形土器の成立・展開を尾張北部あるいはその周辺に求める立場では、尾張南部に持ち込まれた細頸壷と想定する。いずれにせよ、結論は資料増加を待つしかない。特に尾張南部を取り巻く周辺地域の資料に期待される。

おわりに

以上、氷式系削痕深鉢形土器と長原系壷形土器について問題提示した。いずれも、三ツ井遺跡から出土した良好な資料をどのように整理したらよいか？を考えた中間報告である。いずれ資料の増加を待ち、再検討する必要性もあろう。最後に、本稿の要点を記して今後の課題と展望としたい。

(1) 従来、削痕系土器（突帯紋系ケズリ甕）とされてきた遠賀川系土器の甕形土器は三ツ井遺跡の資料によって、氷式系深鉢形土器に系譜を持つ土器から成立したと考えられる。

(2) 氷式系深鉢形土器は遠賀川系土器に接近する尾張北部地域で急速に甕化指向が進み、氷式系削痕深鉢形土器を出現させた。

(3) 氷式系削痕深鉢形土器の出現時期は尾張北部地域に遠賀川系土器が展開するⅠ－2期古段階であり、中～新段階で急速に拡がる。

(4) 長原系壷形土器は、伊勢湾周辺の条痕紋系壷形土器の成立展開に多大な影響を与える。

(5) 西日本全域において壷化指向が突帯紋期に始まり、伊勢湾周辺にも独自の変容壷が展開する。一方、美濃・尾張北部・西三河といった、遠賀川系土器が主体となる地域の周縁部の条痕紋系壷形土器は、突帯紋系土器様式の長原系壷形土器の特徴を採用する。さらにその後の壷形土器、特に細頸壷へと継承され条痕紋系壷形土器の主要な形態として長原系壷形土器の特徴は残存する。

(6) このような壷形土器の成立・展開に、三ツ井遺跡の条痕紋系壷形土器は、突帯紋系土器から条痕紋系土器への移行過程をよく示す資料として注目できる。

参考・引用文献

愛知考古学談話会編　1985　『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編Ⅰ
浅岡俊夫　1988　「伊丹市口酒井遺跡の凸帯文土器」(高井悌三郎先生喜寿記念事業会編『歴史学と考古学』)
石川日出志　1982　「三河・尾張における弥生文化の成立」(『駿台史学』第52号)
石黒立人・宮腰健司　1996　「編年編・尾張」(『ＹＡＹ！(やいっ！)』弥生土器を語る会)
泉　拓良　1989　「中国・四国以東の突帯紋系土器様式」(『縄文土器大観』第４巻)
泉　拓良　1990　「西日本凸帯文土器の編年」(『文化財学報』第八集　奈良大学文学部文化財学科)
一宮市史編纂室編　1970　『新編一宮市史』資料編一
岩瀬彰利編　1995　『大西貝塚』(豊橋市埋蔵文化財調査報告書第19集)
岩野見司編　1982　『尾張病院山中遺跡発掘調査報告』一宮市教育委員会
大江まさる　1965　『飛騨の考古学Ⅰ』
大江まさる編　1973　『炉畑遺跡』各務原市教育委員会
大参義一編　1989　『はいづめ遺跡』岐阜県教育委員会
岡本茂史編　1987　『知立市西中遺跡群発掘調査報告書』知立市教育委員会
岡本茂史　1988　「樫王式土器の新例」(愛知考古学談話会編『〈条痕文系土器〉文化をめぐる諸問題』資料編Ⅱ・研究編)
小田桐　淳　1991　「縄文時代」(『長岡京市史』資料編１)
刈谷市教育委員会編　1987　『芋川遺跡第２・３次発掘調査概報』
紅村　弘　1978　『東海先史文化の諸段階』資料編Ⅱ
紅村　弘　1987　『西日本・中部日本における弥生時代成立論』
小林秀夫・百瀬長秀　1982　『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書茅野市その５』長野県教育委員会
佐藤由紀男　1994a　「長頚壷の出現とその意義」(『地域と考古学』向坂鋼二先生還暦記念論集)
佐藤由紀男　1994b　「煮炊きする壷」(『考古学研究』第40巻第４号)
佐藤由紀男　1994c　「近畿地方の突帯紋土器の壷、覚書き」(『みずほ』第14号)
佐藤由紀男　1996a　「縄文・弥生変換期の壷形土器」(坂詰秀一先生還暦記念会編『考古学の諸相』)
佐藤由紀男　1996b　「長頚壷の出現に関する覚書き」(『ＹＡＹ！(やいっ！)』弥生土器を語る会)
滋賀県教育委員会編　「高島郡今津町弘川遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書Ⅷ－３』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会)
設楽博巳　1982　「中部地方における弥生土器の成立過程」(『信濃』第34巻第４号)
末永雅雄・小林行雄ほか　『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第16冊)
竹原　学ほか　1987　『松本市赤木山遺跡群Ⅱ』松本市教育委員会
谷口　肇　1996　「条痕壷覚書」(『ＹＡＹ！(やいっ！)』弥生土器を語る会)
田村陽一編　1991　『近畿自動車道埋蔵文化財発掘調査報告』第３分冊６(三重県埋蔵文化財調査報告87-12)
丹治康明編　1991　『雲井遺跡　第１次発掘調査報告書』神戸市教育委員会
突帯文土器研究会編　1993　『突帯文土器から条痕文土器へ』(第１回東海考古学フォーラム・豊橋大会)
突帯文土器研究会事務局編　1995　『縄文/弥生　変換期の考古学』(第１回　東海考古学フォーラム豊橋大会の記録)
寺川史郎・金光正裕編　1987　『久宝寺北(その１～３)』大阪府教育委員会・財団法人大阪文化財センター
中村友博　1987　「中部地方の弥生土器　３．水神平式土器」(『弥生文化の研究』第４巻弥生土器)
永井宏幸　1993　「条痕文土器成立期をめぐる諸問題」(『突帯文土器から条痕文土器へ』第１回東海考古学フォーラム)
永井宏幸　1996　「変容・変換する土器」(『ＹＡＹ！(やいっ！)』弥生土器を語る会)
長島暉愼編　1982　『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告書Ⅱ』財団法人大阪市文化財協会
新田　剛編　1993　『上箕田遺跡』(鈴鹿市埋蔵文化財調査報告12)
服部信博編　1992　『山中遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第40集)
浜崎一志・千葉　豊　「京都大学北部構内BD33区の発掘調査」(京都大学埋蔵文化財研究センター編『京都大学構内遺跡調査研究年報　1987年度』)
樋上　昇編　1994　『貴生町遺跡Ⅱ・Ⅲ　月縄手遺跡Ⅱ』(財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第55集)
松尾信裕編　1983　『大阪市平野区長原遺跡発掘調査報告Ⅲ』財団法人大阪市文化財協会
松田　訓編　1990　『月縄手遺跡　貴生町遺跡』(財団法人愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第12集)
前田佳久編　1993　『神戸市兵庫区大開遺跡発掘調査報告書』神戸市教育委員会
豆谷和之　1994　「弥生壷成立以前」(『古代文化』VOL.46)
南　博史編　1988　『伊丹市口酒井遺跡　第11次発掘調査報告書』伊丹市教育委員会・財團法人古代學協會
三好孝一編　1996　『巨摩・若江北遺跡　第５次』(財団法人大阪府文化財調査研究センター調査報告書　第15集)
家根祥多　1982　「縄文土器」(『長原遺跡発掘調査報告Ⅱ』財団法人大阪市文化財協会)
家根祥多　1996　「遠賀川式土器の成立をめぐって」(『論苑考古学』坪井清足さんの古希を祝う会編)

三ツ井遺跡出土剝片石器の使用痕分析

原田　幹（愛知県教育委員会）

三ツ井遺跡出土の剝片石器について、金属顕微鏡による使用痕の観察を実施した。いわゆる「高倍率法」と呼ばれる分析方法で、使用光沢面（ポリッシュ）、線状痕等の観察により、石器の機能、使用対象物を推定するものである。

資料の概要

分析対象は、三ツ井遺跡出土石器のうち粗製剝片石器4点（57～60）とスクレーパー4点（50・51・53・56）である。粗製剝片石器は濃飛流紋岩（57）、ホルンフェルス（58～60）を石材とし、刃部に調整剝離を施さず、石器の片側に自然面を残している。57～59は両側縁に抉り状の調整を施している。60は円礫から割り取った一次剝片で二次的な加工は施されていない。スクレーパーは下呂石（50）、サヌカイト（53）、ホルンフェルス（51・56）が石材として用いられており、刃部を形成する明瞭な調整剝離が施されている。

使用痕の観察と記録

使用痕の観察には落射照明付き金属顕微鏡（オリンパス製BX30M）を使用し、100倍、200倍と300倍（接眼レンズ15倍使用時）の各倍率で観察を行った。観察対象は主に使用光沢面（ポリッシュ）と線状痕である。観察資料となる石器について特に薬品等による処理は行っていないが、観察の前に手の油分、汚れ等を除去するためにエタノールを含ませた脱脂綿で軽くふき取っている。写真撮影は顕微鏡用撮影装置SC35、撮影レンズはPE2.5を使用し、フィルムはISO400の高感度フィルムを用いた。

各資料の観察にあたっては主に刃部を中心として光沢面の有無を確認し、光沢面の確認された資料についてその特徴、分布範囲、線状痕の有無と方向等必要な情報を記録し、写真撮影を行った。光沢面の分類については東北大学使用痕研究チームによる分類（阿子島・梶原 1981）、御堂島による分類（御堂島 1988）を参考にしている。また、使用光沢面が刃部から石器内側へ広い範囲で確認されたものについては、光沢強度分布図（阿子島 1989）を作成している（図1）。

観察結果の概要

観察の結果、57～59の3点について使用による光沢面が観察された。以下、各石器の観察結果について個別に記述していく。

50　石器表面は風化の影響を強く受けている。光沢、線状痕等の使用痕は観察されなかった。

51　光沢、線状痕等の使用痕は観察されなかった。

53　石器表面は風化の影響を強く受けている。光沢、線状痕等の使用痕は観察されなかった。

56　刃部の凸部に弱い光沢が認められる（写真15・16）。光沢面は明るさに欠け、表面はやや凸凹している。光沢の形成される面はやや丸味を帯びて変化しているようにもみえる。光沢タイプは特定できず、あるいは自然作用による光沢の可能性もある。

57　刃縁の広い範囲に使用光沢面が認められ、肉眼でもロー状光沢として観察が可能である。光沢面は非常に明るく表面のきめがなめらかで、光沢の縁辺は丸味を帯びている（写真１・２）。これはＡタイプに分類される光沢で、イネ科植物との強い関係が指摘されている。光沢面上にはハケでなでたような線状痕が刃部と平行して観察される。光沢の分布範囲は刃縁の広い範囲に及び、刃部中央で最も強く発達しており、刃部の左右、石器の内側にいくにしたがって漸移的に弱くなる。光沢の「弱」の範囲では水滴状の光沢が散在的にみられる部分が多く、これはＢタイプの光沢に相当するものであろう（写真６）。「中」の範囲ではＢタイプが連接しつつ発達しておりＡタイプとの中間的なものも多い（写真３）。光沢の分布状況は自然面側、剝離面側ともほぼ同様な分布をしており、刃部の表裏対称に形成されている。

58　石材はホルンフェルスであるが、石器表面が風化しており所々剝落している。使用光沢面は刃部縁辺の原面が残存している部分に断片的に観察された。光沢分布図は断片的に残された光沢面の状況から復元的に作成している。光沢面は非常に明るくなめらかなＡタイプの光沢が主で（写真７・９）、石器の内側ではＢタイプの光沢も確認される（写真８）。光沢面上に刃部と平行する線状痕が観察される。光沢の分布は57と同様で、刃部にそった表裏対称に形成されている。

59　ホルンフェルス製。肉眼での光沢の観察はできなかったが、顕微鏡下では使用光沢面が観察された。光沢面は丸味を帯びたパッチ状の光沢が散在的に広がっており、Ｂタイプの光沢が主である（写真11・12）。刃部では部分的に光沢密度の高い部分があり、Ａタイプの光沢が観察される（写真14）。線状痕は発達部で確認され、刃部と平行する。光沢の分布範囲は弱から中で、刃縁の表裏対称に形成されている。

60　石器表面はやや風化している。使用光沢、線状痕等の使用痕は観察されなかった。

石器の機能

ここでは使用光沢面が観察された３点の粗製剝片石器の機能を中心に検討したい。

いずれの資料においてもＡタイプ、Ｂタイプの光沢面が観察された。Ａタイプはイネ科植物を被対象物として形成されることが、実験により明らかになっている。Ｂタイプの光沢は木を対象物とした場合の他、イネ科植物の初期段階、乾燥したイネ科植物の場合にも確認されている。本資料で確認された光沢面はいずれも線状痕が少なく滑らかな外観を呈し、木よりも生のイネを対象物とした場合の実験結果に類似する。光沢の形成が刃部の広い範囲に及んでいることから、対象物は水分を含んだ柔らかいイネ科植物であったと推定される。また、線状痕が刃部と平行すること、光沢分布が表裏対称に形成されていることから、刃部の両面に対象物が接触し、刃部と平行する方向に石器が操作されたことが推定される。つまり、刃部を平行に操作するイネ科植物の切断に用いられた石器と考えられる。

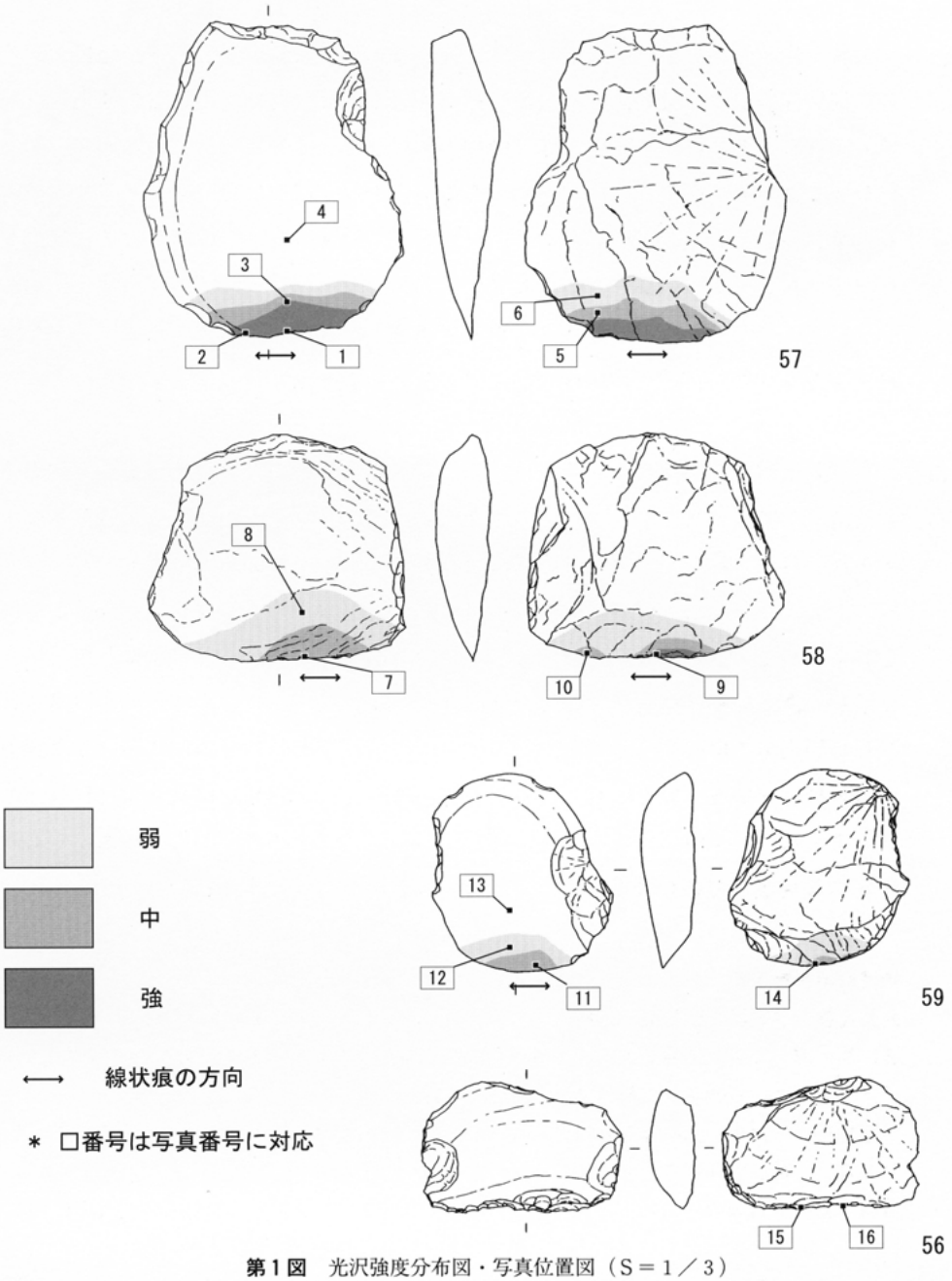
粗製剝片石器の具体的な用途については、この種の石器の出現が弥生時代であることから、稲作等の農耕作業に関わる農具と考えている。具体的な使用方法の推定については各種の実験をもとに検討を行い、弥生時代の収穫法として想定されている穂首を対象とした刈り取りよりも、根株のような厚みのある部分の刈り取りに用いられた石器と推定している（原田 1999)。本資料の場合57・58の光沢分布範囲は明らかに厚みのある部位への使用が想定されるものであるが、小型の60については光沢の形成範囲は他の２点に比べ狭いものとなっている。この資料はＢタイプ光沢が主であり、使用頻度の少なさから光沢の形成範囲が対象物との接触範囲全体に及んでいない可能性も考えられる。

三ツ井遺跡出土粗製剝片石器の意義

三ツ井遺跡出土の粗製剝片石器は、いずれも包含層中の出土であったり、弥生時代以降の遺構への混入であるが、出土土器の年代から推定すれば弥生前期を下ることはないと考えられ、時期的には限定される良好な資料を考えられる。弥生前期の資料として使用痕分析によるイネ科植物との関係が明らかになったことは、粗製剝片石器の農具としての出現を考えるうえでも重要な成果である。また、本調査では弥生前期の遺構として微高地縁辺に沿った溝、畦畔状の盛土遺構等が検出され、イネのプラントオパールも検出されている。これは微高地の縁辺に営まれた水田遺構と考えられており、当地域における弥生前期の生産域の様相を知る貴重な資料である。粗製剝片石器の出土地点は水田遺構に近接し、居住域と考えられる地点の外縁部にあたる。このことは、遺跡の空間的な側面からも粗製剝片石器の農具としての在り方に言及しうる出土事例として注目される。

参考引用文献

阿子島香　『石器の使用痕』考古学ライブラリー56　ニュー・サイエンス社　1989
梶原洋・阿子島香　「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－」『考古学雑誌』第67巻第１号　日本考古学会　1981
斎野裕彦　「弥生時代の大型直縁刃石器（上・下)」『大阪府立弥生文化博物館研究報告』第２集・第３集　大阪府立弥生文化博物館　1993・1994
原田　幹　「粗製剝片石器研究ノート(Ｉ)」『年報　平成８年度』　㈶愛知県埋蔵文化財センター　1997
原田　幹　「朝日遺跡出土の石庖丁をめぐって－石器使用痕からみた尾張地域における石製収穫具の問題－」『貞末堯司先生古稀記念論集　文明の考古学』　貞末堯司先生古稀記念論集編集委員会　1998
原田　幹　「門間沼遺跡出土粗製剝片石器の使用痕分析」『門間沼遺跡』　㈶愛知県埋蔵文化財センター　1999
御堂島正　「使用痕と石材－チャート、サヌカイト、凝灰岩に形成されるポリッシュー」『考古学雑誌』第74巻第２号　日本考古学会　1988



第1図　光沢強度分布図・写真位置図（S＝1／3）

第1票　観察資料一覧

石器No.	調査区	遺構等	光沢		線状痕	法量				石材	備考
			A面	B面		長さ	幅	厚さ	重さ		
50	96Cb	検Ⅲ	－	－	－	4.5	4.7	0.6	8.3	下呂石	
51	96T	Th2トレンチ	－	－	－	5.0	2.4	1.0	12.4	ホルンフェルス	
53	97B	検Ⅱ	－	－	－	7.1	3.8	0.7	20.4	サヌカイト	
56	96Ba	検Ⅰ	－	－	－	8.2	5.2	1.8	94.3	ホルンフェルス	
57	97B	SD14	AB	AB	平行	10.7	12.9	2.9	400.7	濃飛流紋岩	
58	97B	検Ⅱ	AB	AB	平行	10.5	9.3	2.1	254.4	ホルンフェルス	表面の風化剝落
59	97B	SD20	BA	BA	平行	7.3	8.1	2.2	154.0	ホルンフェルス	
60	97Ab	検Ⅱ	－	－	－	6.8	6.6	1.3	63.0	ホルンフェルス	

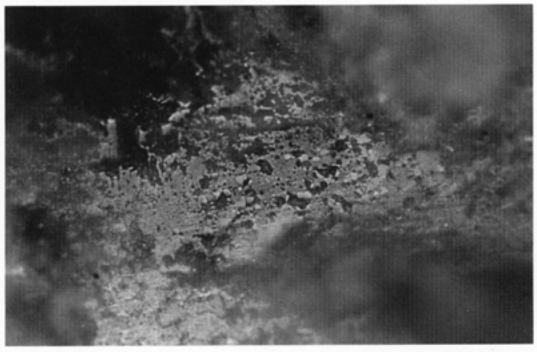


写真 1



写真 2

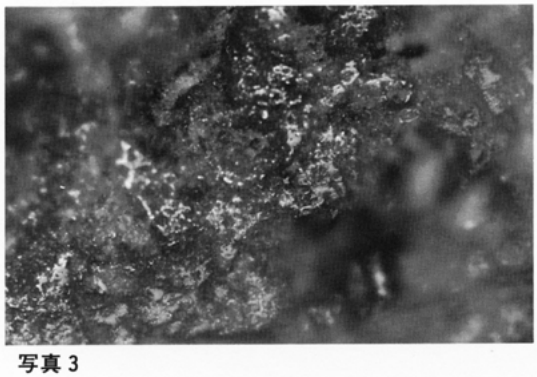


写真 3

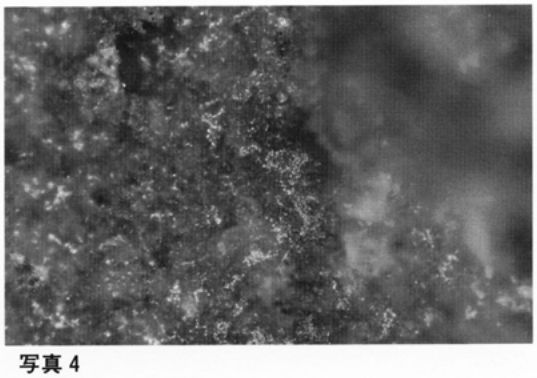


写真 4

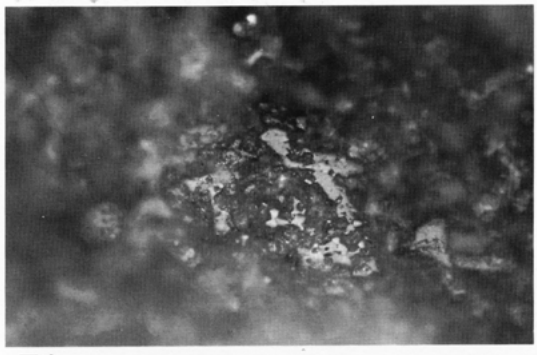


写真 5

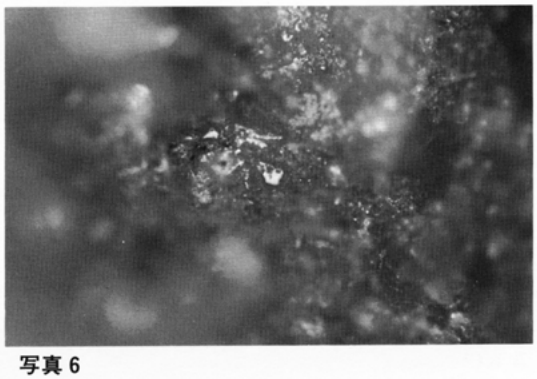


写真 6



写真 7

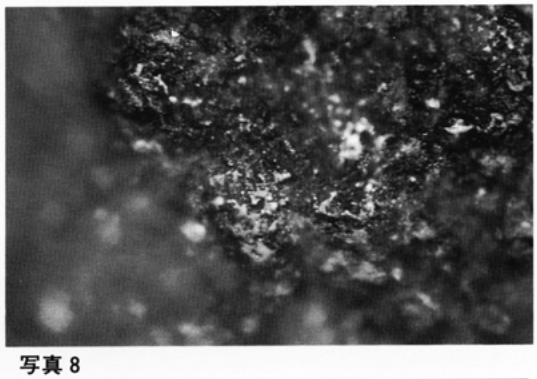


写真 8

200ミクロン

第 2 図　顕微鏡写真(1)

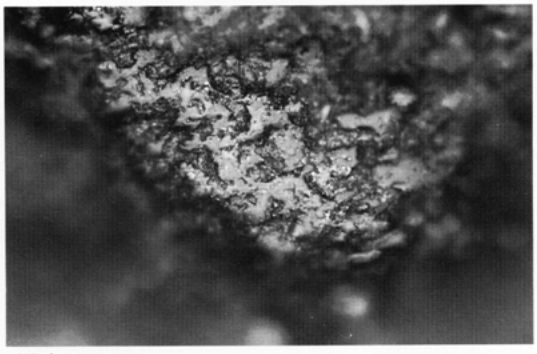


写真 9

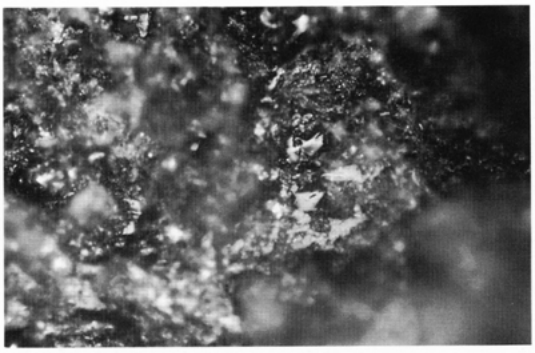


写真10

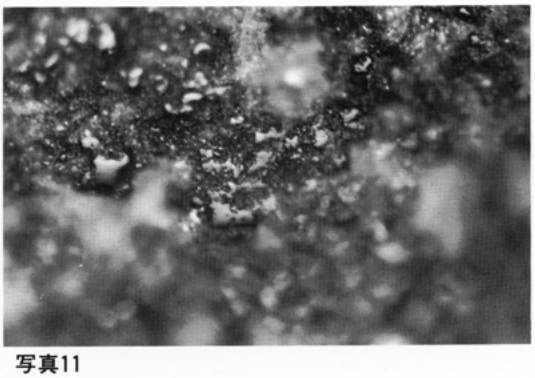


写真11

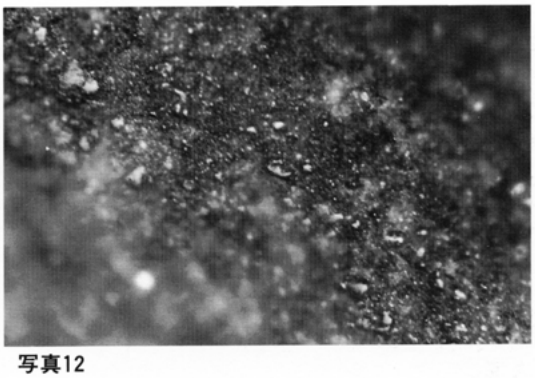


写真12

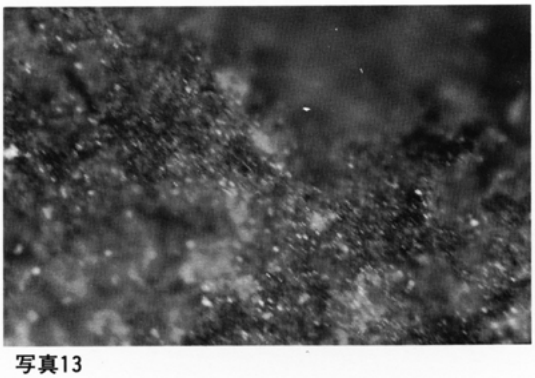


写真13

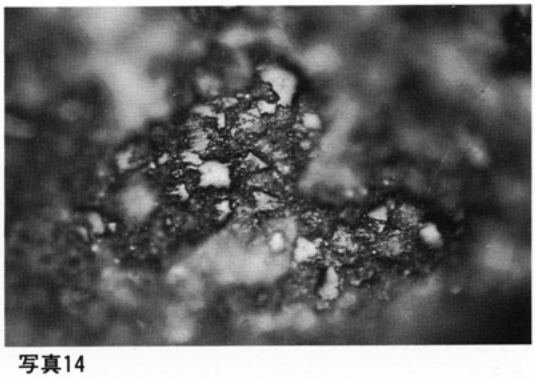


写真14



写真15

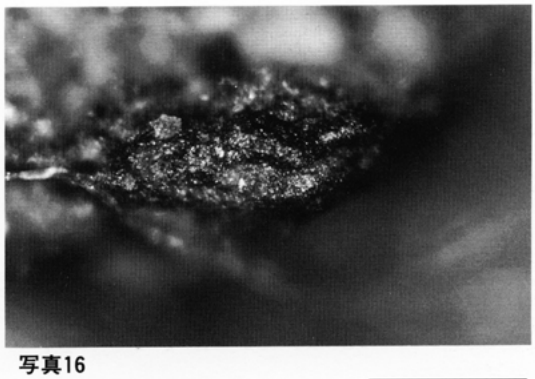


写真16

200ミクロン

第 3 図　顕微鏡写真(2)

島畑景観の形成と発展について

1．はじめに

三ツ井遺跡は、木曽川水系の青木川と五条川に挟まれた標高７～８mの自然堤防と後背湿地上に展開し、現況は水田と畑地の交錯する島畑景観を良好に留めている。遺跡付近一帯は、１町方格の正方位条里地割に規制された耕地であり、地割内部の田畑も概ね正方位に位置し、明治17年の地籍図もほぼ同様の地割形態を呈している。このことから古代の条里遺構を大規模に残存している地域とされてきた。しかし、発掘調査の結果、古代までの溝などの遺構群は、旧地形条件に規制された方向性が異なる軸線で検出され、地表の条里地割にみられるような正方位の方向性をもつ遺構群が検出されるのは中世以降であった。激しい河川流路の変化によって形成された、大小様々な島状の微高地（自然堤防）が数多く点在するこの地域では、砂地で起伏が多いため、水田開発が困難であったと推察される。中世後半以降、水がかりが悪いため、「地下げ」をして水田開発を行ない、その土をやや高い微高地部分に掻き上げ、盛った部分を畑として利用した結果、島畑が生まれ、水田と畑地を共に利用する集約的な島畑景観がしだいに形成されていったと考えられる[1)]。この時期の溝などの遺構群は、概ね東西・南北方向を維持しており、地表の条里地割と同じ方向性になる。本遺跡周辺では、中世以降、正方位の条里地割に規制された耕地が形成された可能性が高い。その後、近世を通じて、さらに耕地開発が進み、島畑景観が展開していったものと考えられる。そこで、今回は、発掘調査結果をもとに文献史料も利用しながら、当地域の水田開発と島畑景観の形成について、考えてみたい。

2．水田開発と島畑景観の形成について

本遺跡での島畑形成過程について、金田章裕氏の研究[2)]にもとづいて考えてみる。

金田氏は尾張国での島畑初見史料として、応永６年（1399年）の「藤原安義等連署賣券[3)]」に見える「沽却　永代田畠事　合四段者　在所大嶋々畠三反、廾田壹反」をあげている。さらに、永正12年（1515年）の「宗成寄進状[4)]」に見える「合五段者坪本ハ中ニ西東へ有透路田四段嶋畠一反也、嶋大小七ツ在之」と大永５年（1525年）の「織田達清寄進状[5)]」に見える「合三段者此内有嶋」をあげ、島畑の文献での史料を紹介している[6)]。金田氏は、様々な文献史料を中心とした検討の結果、島畑景観の島畑の形成起源を13～14世紀頃に推定している[7)]。本遺跡での島畑形成の起源は、島畑に関連すると思われる遺構からの出土遺物や現況島畑に内包された旧島畑下層からの出土遺物より14世紀後半～15世紀頃に推定されるので金田氏が推定された時期と一致する。

また、この時期の史料で、応安元年（1368年）の「禅光等連署寄進状[8)]」には、次のように記されている。

寄進　　妙興寺
　尾張国中嶋郡寺本法城内田畠等事
　　合　七段小者
一所　参段田　　東田　杉本
一々　参段畠　　嶋畠　屋敷
一々　壹段小田　江越　　（以下略、字体は正字を使用）

「寺本法城」は貞治６年（1367年）の「高階直経・経久等連署売券」[9]に見える「寺本法城寺」と同じ地名と考えられ、現在の稲沢市稲島町字法成寺を中心とした周辺地域に比定できる。「杉本」と「江越」の地名が天保12年の村絵図[10]に見えることから、「嶋畠」も地名として考えてよいであろう。土地の景観から地名が付けられることもあるので、14世紀後半頃には、この地域に島畑景観が形成されていた可能性が考えられる。稲島町の北に島町が隣接しているが、文政５年（1822年）の樋口好古撰の『尾張徇行記』[11]の旧中島郡島村の部分には、「子生和村ノ地トツツキ、砂地ナリ。畠多キ村故ニ、畠ニハ茶木モ栽ル也。」と記されている。この辺りは、木曽川水系の三宅川の自然堤防に位置し、法成寺は、本遺跡より西4.5km程のところである。

さて、島畑景観形成の過程については、どう考えるべきであろうか。金田氏は、『尾張徇行記』の旧丹羽郡三ツ井村の部分に「一体地高ナル所故ニ用水カカリア（悪）シシ、サレハ地下（サゲ）ヲシタル田ハヨク実ルト也」と記されている部分を指摘し、水がかりの悪い地域では、「地下げ」をして良田となし、一方で、その土を掻き上げて、島畑が造成されたと考えている[12]。

また、金田氏は、島畑造成のタイプを次のように分類している[13]。

①　水がかりの悪い自然堤防の部分で水田の「地下げ」を主目的とするような形で形成
②　自然堤防の縁辺部から後背湿地の部分において、水田の一部に土を掻きあげて造成
③　条里制の施行・水田化作業の進行する中で、それ以前に形成された自然堤防があたかも島のように水田中にとり残され、そこが畠地となったもの

本遺跡の島畑造成のタイプはどうであろうか。現況の島畑は、従来の島畑部分にさらに盛土をして造成されたり、従来の水田部分に盛土をして造成されている。旧島畑（発掘調査によって検出された島畑遺構）は、主に現況島畑の下層から検出されている。現況水田または旧水田（発掘調査によって検出された水田遺構）の下層で検出された旧島畑は、上層が削平され、一部を除いてその痕跡を留める程度であった。そこで、調査区内の現況島畑に内包されているそれぞれ最古の旧島畑について、その造成過程と時期を調べてみた。（第１表参照）島畑は幾度かの拡大・縮小を経ているので、その内部構造はかなり複雑であり、部分的には、旧水田の下層から旧島畑が検出されたり、逆に旧島畑の下層から旧水田が検出された。旧島畑の両側方が後世の水田開発により、かなり削られているものもあ

	畑・未耕地 ➡ 島畑	水田 ➡ 島畑
中世後半に最古の旧島畑が造成	島畑１　島畑５　島畑６ 島畑７　島畑９　島畑10	島畑11
近世以降に最古の旧島畑が造成	（島畑４）　島畑８　島畑Tg	島畑２　島畑３

第１表　現況島畑に内包されている最古の旧島畑の造成課程と時期

った。

島畑１・５・６・７・10は、最古の旧島畑の下層に古代包含層が一部残存していた。中世後半に最古の旧島畑が造成され、その後、幾度かの拡大・縮小を経て現在に至る。

島畑２・３は、近世以降、水田部分に盛土をして最古の旧島畑が造成され、その後、幾度かの拡大・縮小を経て現在に至る。

島畑４・９は微高地部分を利用して最古の旧島畑が造成され、その後、幾度かの拡大・縮小を経て現在に至る。古代包含層は残存せず、中世以降、削平されたものと推察される。島畑４は、下層から近世の遺物が出土し、最古の旧島畑は近世期に利用されているが、その造成時期が中世後半まで遡るのか、近世以降であるかは不明である。島畑９に内包されている最古の旧島畑は、中世後半に造成されたものと推定される。

島畑８は、近世以降に最古の旧島畑が造成され、その後、幾度かの拡大・縮小を経て現在に至る。

島畑11は、中世後半に、その大部分は水田であったと推定されるが、その後、最古の旧島畑が造成され、近世以降、その一部が水田となり、更にその部分に土が盛られ、島畑が造成されている。部分的には、さらに幾度かの拡大・縮小を経て、かなり複雑である。

島畑Tgは、最古の旧島畑の下層に古代包含層が残存している。近世以降に、最古の旧島畑が造成された後、その大部分が水田化され、その後、再び島畑が造成されている。部分的には、さらに幾度かの拡大・縮小を経て、かなり複雑である。

本遺跡での初期の島畑造成のタイプは、全体的には金田氏が分類された①の「地下げ型」が多く、②に該当するものは少なかったと思われる。これは、本遺跡調査区の大部分が旧地形の微高地（自然堤防）上に位置することに起因するからであろうか。概ね、古い時期に造成された島畑遺構は旧地形の微高地周辺部分で検出され、近世以降の新しい時期に造成された島畑遺構及び水田遺構は旧地形の旧河道などの低湿地部分で検出された。また、島畑の断面を観察すると、盛土が数層に分かれているものが多く、数cmの砂層が数回堆積している所もあった。洪水などで水田部分が土砂で埋もれた際、島畑部分に更に土を掻き上げてできたものや、水がかりをよくするために水田部分を更に地下げし、土を掻き上げてできたものと推察される。

今回の調査の結果、中世以降の明確な水田遺構は、近世の水田遺構まで、ほとんど確認

できなかった。このことは、近世以後も近世以前と同じ水田面を続けて利用したか、後世の水田開発のため、更なる「地下げ」により削平されて遺構として残らなかったという理由などが考えられるが、現況水田や旧水田の下層面から水田遺構以外の溝・土坑などの遺構が検出されたことから、近世以前の水田面積は近世以後の水田面積よりも少なかったという理由も考えられる。すなわち、本遺跡周辺地域の水田開発は、近世以降、積極的に進められていったのではないだろうか。寛文12年（1672年）の「寛文村々覚書」[14]に「三井重吉村」（江戸時代は北に隣接する重吉村と併せて、三井重吉村として取り扱われていた）の田畑167町８反７畝21歩の内、田は57町７反５畝16歩、畑は110町１反２畝５歩とあり、田畑合計面積に対する田の比率は、34.4％となり、この地域が畑作地帯であったことが窺える[15]。現況では、水田中にあたかも島のように点在する島畑景観であるが、島畑が形成された初期の頃は、耕地に占める畑・島畑の面積が多く、しだいに未耕地・畑地部分が水田開発の進展により水田化され、水田面積が拡大していったと推察される。また、天正11年（1583年）の「織田信雄判物」[16]が、「三ツ井」の地名としての初見史料であり、「三ツ井」の地名の由来は、「用水」の「井」に関連するという説[17]がある。時期は不明であるが、「用水」など水利施設の開設も、この地域で水田開発が推進されていった要因の１つと考えられる。

３．まとめ

砂地で地形の起伏が激しいこの地域では、水田開発が困難であり、畑地としての土地利用が発達し、荒地も多かったと推察される。中世後半以降、水がかりが悪いこの地域では、「地下げ」をして水田開発を行ない、その土を掻き上げて盛った部分を畑として利用した結果、島畑が生まれ、島畑景観がしだいに形成されていったものと思われる。その際、正方位の条里地割に規制された耕地開発がなされたということは、「用水」など水利施設を開設し、耕地を把握して年貢収益を得る在地領主層の存在を窺わせる。従って、本遺跡周辺地域において、現況の土地景観や地籍図の地割形態などから、古代の条里遺構を復原することは難しいであろう[18]。水田開発のための副産物として造成された島畑は、その後、その利用価値に目がつけられ、商品作物栽培の格好の場となっていったものと推察される。さらに、開発された水田部分にも土盛りをして、島畑を拡大することもあったが、それは、近代以降、本遺跡の所在する一宮市の繊維産業の発展を促すことにもなっていったと思われる。しかし、現在、島畑は社会経済の変化の影響を受け、消滅の一途をたどり、年々、島畑景観がみられる地域が少なくなってきている。

註

1）金田章裕「条里地割内部における島畑景観の形成」,『条里と村落の歴史地理学研究』, 大明堂, 1985年, 323～331頁。

2）金田, 前掲1）, 307～338頁。

3）『新編一宮市史資料編五』, 一宮市, 1963年, 203号文書。

4）前掲3）, 461号文書。

5）前掲3）, 484号文書。

6）金田, 前掲1）, 313～314頁。

7）金田, 前掲1）, 315頁。

8）前掲3）, 143号文書。

9）前掲3）, 140号文書。

10）「稲島村絵図」,「子生和村絵図」,『新修稲沢市史資料編一村絵図上』, 稲沢市, 1979年, 所収。天保12年の稲島村絵図に「枝郷法成寺」と「枝郷江越」、同年の子生和村絵図に「杉本」の地名が見える。また、前掲3）の140号文書で、「寺本法城寺内田地」の四至を示す所に「砥墓村」と見え、「寺本法城寺」と隣接していたことがわかる。「砥墓（とつか）村」は近世の「戸塚村」（現在の一宮市大和町戸塚と周辺地域）に比定される。これらの地名分布から推察すると、「寺本法城（寺）」は、稲島村絵図の「枝郷法成寺」の地に限定するよりも、現在の稲沢市の稲島町・島町・子生和町、一宮市の一部などを含む広範囲の地域一帯に、比定して考えた方がよいであろう。「東田」・「嶋畠」・「屋敷」の現在位置は不明であるが、この周辺地域内の地と考えてよいであろう。「杉本」と「屋敷」は、史料の地名配列から考えると、「杉本」は「東田」内の地、「屋敷」は「嶋畠」内の地であろう。

11）樋口好古『尾張徇行記』,『名古屋叢書続編』第四～八巻（第六巻部分）, 所収。

12）金田, 前掲1）, 323～325頁。

13）金田, 前掲1）, 補注, 337頁。

14）「寛文村々覚書」,『名古屋叢書続編』第一～三巻（第二巻部分）, 所収。

15）『新編一宮市史本文編上』, 一宮市, 1977年, 776～778頁で、塚本学氏は、近世から近代を通じて、一宮市域の畑地が綿作・桑園として、多く利用されてきたことを述べている。

16）『新編一宮市史資料編六』, 一宮市, 1970年, 215号文書に「ミツ井」とみえる。

17）津田正生,『尾張国地名考』, 文化13年（1816年）,

18）本遺跡の発掘調査では、正方位の条里地割に規制された遺構が中世の時期まで確認できなかった。このことで、この地域での古代の条里制施行を否定するつもりはないし、今後の発掘調査によっては、古代の条里遺構が検出される可能性もあるだろう。また、地表の条里地割と古代の条里遺構が重なる例も、各地で報告されている。発掘調査などにより、古代の条里遺構が、後世の遺構や現況の土地景観に影響を与えたということは指摘できても、現況の土地景観や地籍図などの資料から、古代の条里遺構を復原するということは、難しい場合があるといえよう。

現地調査及び報告書作成の過程において、京都大学の金田章裕氏、㈶大阪府文化財調査研究センターの小野久隆氏、岡本茂史氏、河角龍典氏、亀井聡氏に島畑遺構に関してのご指導・ご教示を賜った。記して深く感謝の意を表します。

遺構一覧表

調査区	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期
96A	SD01	1880	95	26	中世Ⅱ期
96A	SD02	820	105	16	中世Ⅱ期
96A	SD03	−	70	21	近世以降
96A	SD05	−	40	9	中世
96A	SD06	−	80	23	古代
96A	SD07	−	70	24	古代
96A	SD08	−	105	33	古代
96A	SD09	−	105	54	古代
96A	SD10	−	88	40	古代
96A	SD11	−	90	35	古代
96A	SD12	−	60	14	中世
96A	SD13	−	85	25	中世Ⅱ期
96A	SD14	725	180	28	中世Ⅱ期
96A	SD16	−	35	41	弥生Ⅱ期
96A	SD17	−	60	9	近世以降
96A	SD18	−	65	4	近世以降
96A	SD19	475	25	6	中世
96A	SD20	495	55	27	中世
96A	SD21	505	50	25	古代
96A	SD22	1340	110	20	中世Ⅱ期
96A	SD23	495	65	18	中世Ⅱ期
96A	SD25	−	310	45	弥生Ⅰ期
96A	SK01	270	190	79	中世Ⅰ期
96A	SK02	100	80	27	弥生Ⅰ期
96A	SK03	140	125	55	中世
96A	SK04	190	165	39	中世
96A	SK41	80	50	18	中世
96A	SK45	55	50	22	中世
96A	SK58	−	25	36	中世
96A	SK69	90	110	13	古代
96A	SK70	140	120	11	古代
96A	SK76	120	100	6	古代
96A	SK91	380		12	中世
96A	SK92	350	100	11	中世
96A	SB01	750	540	26	古代
96A	SB02	−	−	8	古代
96A	ST01	1375	1250	49	近世以降
96A	ST02	−	−	55	近世以降
96A	ST03	−	−	49	近世以降
96A	ST04	−	−	56	近世以降
96A	ST05	−	−	57	近世以降
96A	ST06	1050	675	55	近世以降
96A	ST07	−	−	56	近世以降
96A	ST08	−	−	57	近世以降
96A	ST09	−	−	58	近世以降
96A	ST10	−	−	48	近世以降
96Ba	SD01	−	30	11	中世Ⅰ期
96Ba	SD02	−	30	9	中世Ⅰ期
96Ba	SD05	−	50	42	中世Ⅱ期
96Ba	SD08	−	30	14	古墳
96Ba	SD17	1150	36	5	古代
96Ba	SD18	−	70	9	中世Ⅰ期
96Ba	SD21	−	110	26	中世Ⅰ期
96Ba	SD24	−	30	11	古代
96Ba	SD25	760	120	38	中世Ⅱ期

調査区	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時期
96Ba	SD27	−	70	21	古代
96Ba	SD28	−	126	42	古代
96Ba	SD29	−	80	11	古代
96Ba	SD30	−	86	32	古代
96Ba	SD31	−	40	13	古墳
96Ba	SD32	−	110	35	古墳
96Ba	SD33	−	140	30	中世Ⅱ期
96Ba	SD34	−	180	52	近世以降
96Ba	SD35	−	120	17	古代
96Ba	SD36	−	46	26	弥生Ⅱ期
96Ba	SK14	100	90	61	古墳
96Ba	SX02	−	300	11	古代
96Ba	SX04	−	−	16	縄文Ⅱ期
96Ba	SX05	−	−	12	縄文Ⅱ期
96Bb	SD01	−	60	25	中世
96Bb	SD03	−	96	35	中世
96Bb	SD04	−	22	6	中世
96Bb	SD05	−	64	7	中世
96Bb	SD06	−	46	8	中世
96Bb	SD08	−	82	46	古墳
96Bb	SD09	−	70	39	中世Ⅱ期
96Bb	SD10	−	50	46	古代
96Bb	SD11	−	144	44	中世
96Bb	SD12	−	50	47	古代
96Bb	SD16	−	36	35	古代
96Bb	SD17	−	280	92	弥生Ⅱ期
96Bb	SD19	−	90	30	弥生Ⅱ期
96Bb	SD20	−	120	35	弥生Ⅱ期
96Bb	SD23	−	90	19	弥生Ⅰ期以前
96Bb	SD29	−	110	13	弥生Ⅰ期以前
96Bb	SK20	240	90	30	古代
96Bb	SK54	−	125	32	弥生Ⅰ期以前
96Bb	SK70	180	165	56	弥生Ⅰ期以前
96Bb	SK77	−	180	65	弥生Ⅰ期以前
96Bb	SK85	140	170	42	弥生Ⅰ期以前
96Bb	SK86	185	165	36	弥生Ⅰ期以前
96Bc	SD01	−	30	24	弥生Ⅱ期
96Bc	SD02	−	15	22	弥生Ⅱ期
96Bc	SX01	−	−	12	縄文Ⅱ期
96Ca	SD01	−	60	38	中世
96Ca	SD03	−	80	52	古墳
96Ca	SD04	−	40	41	中世
96Ca	SD05	−	110	37	弥生Ⅱ期
96Ca	SD06	−	210	78	弥生Ⅱ期
96Ca	SD07	−	90	46	弥生Ⅱ期
96Ca	SK17	250	110	55	中世Ⅰ期
96Ca	SK27	380	80	32	中世
96Ca	SX01	−	−	39	中世Ⅱ期
96Ca	SX02	−	−	30	中世Ⅱ期
96Ca	SX03	−	−	37	中世Ⅱ期
96Cb	SD07	−	50	32	古代
96Cb	SD08	785	30	10	中世Ⅱ期
96Cb	SD09	−	40	31	古代
96Cb	SD10	1080	70	34	中世Ⅱ期
96Cb	SD12	840	20	35	中世Ⅱ期

遺構一覧表 2

調査区	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時　期
96Cb	SD16	−	230	89	弥生Ⅱ期
96Cb	SD17	−	85	16	弥生Ⅰ期
96Cb	SD19	−	35	4	弥生Ⅰ期
96Cb	SD20	285	90	19	弥生Ⅰ期
96Cb	SD21	−	40	11	弥生Ⅰ期
96Cb	SD23	−	55	12	弥生Ⅰ期
96Cb	SD24	−	35	8	弥生Ⅰ期
96Cb	SD28	−	40	11	弥生Ⅰ期
96Cb	SK02	50	36	36	中世
96Cb	SK03	130	30	33	中世
96Cb	SK50	20	20	8	弥生Ⅰ期
96Cb	SK60	25	20	12	弥生Ⅰ期
96Cb	SK74	120	165	12	弥生Ⅰ期
96Cb	SK90	430	380	16	縄文Ⅱ期
96Cb	SK91	355	235	33	弥生Ⅰ期
96Cb	SK94	120	115	6	弥生Ⅰ期
96Cb	SK136	215	175	11	弥生Ⅰ期
96Cb	SK140	170	155	22	弥生Ⅰ期
96Cb	SK153	250	165	8	弥生Ⅰ期
96Cb	SK157	220	130	24	弥生Ⅰ期
96Cb	SX01	−	−	18	中世Ⅱ期
96Cb	SX02	−	−	32	中世Ⅱ期
96Cb	SX03	−	−	24	中世Ⅱ期
96Cb	SX04	−	−	21	中世Ⅱ期
96D	SD01	−	30	17	古代
96D	SD02	−	44	15	中世Ⅱ期
96D	SD05	580	32	7	中世Ⅱ期
96D	SD06	−	46	5	中世Ⅱ期
96D	SD07	540	38	8	中世Ⅱ期
96D	SD08	1060	50	7	中世Ⅱ期
96D	SD09	520	60	6	中世Ⅱ期
96D	SD10	−	40	6	中世Ⅱ期
96D	SD11	−	220	12	中世Ⅱ期
96D	SD12	−	60	9	中世Ⅱ期
96D	SD13	−	80	24	中世Ⅱ期
96D	SD15	−	150	55	弥生Ⅱ期
96D	SD16	515	110	48	弥生Ⅰ期以前
96D	SD17	−	20	5	弥生Ⅰ期
96D	SD18	455	90	12	弥生Ⅰ期
96D	SD19	−	70	18	弥生Ⅰ期
96D	SD21	−	60	33	縄文Ⅱ期
96D	SD22		100	32	弥生Ⅰ期以前
96D	SD26	−	40	46	弥生Ⅰ期以前
96D	SK01	56	54	49	古墳
96D	SK11	90	80	10	中世
96D	SK19	−	296	18	弥生Ⅰ期
96D	SK23	280	90	21	弥生Ⅰ期
96D	SK24	310	130	8	弥生Ⅰ期
96D	SK25	310	120	14	弥生Ⅰ期
96D	SK45	138	94	21	縄文Ⅱ期
96D	SK48	200	172	26	弥生Ⅰ期以前
96D	SK57	420	385	45	弥生Ⅰ期以前
96D	SK71	142	120	49	弥生Ⅰ期以前
96D	SK86	234	70	42	弥生Ⅰ期以前
96D	SK87	316	145	43	弥生Ⅰ期以前
96D	SK88	240	160	51	弥生Ⅰ期以前
96D	SK90	160	130	50	弥生Ⅰ期以前
96D	ST01	−	−	28	近世以降
96D	ST02	−	−	32	近世以降
96D	SX01	−	−	14	中世Ⅱ期
96D	SX03	−	470	12	弥生Ⅰ期
96D	SX04	−	850	11	弥生Ⅰ期
96E	SD01	−	48	5	中世
96E	SD02	−	26	25	古代
96E	SD03	−	110	27	中世
96E	SD04	−	40	21	中世
96E	SD05	220	42	5	古代
96E	SD06	−	110	33	弥生Ⅱ期
96E	SD07	−	90	31	弥生Ⅱ期
96E	SK13		46	37	中世
96E	SX01				古代
96Ti	SD03	470	75	27	古墳
96Ti	SK01	190	175	51	弥生Ⅰ期
96Ti	SK02	155	145	91	古墳
96Ti	SE01	125	105	56	古墳
96Ti	SE02	135	110	81	古墳
96Ti	SB01	−	−	17	古墳
96Ti	SB02	−	−	11	古墳
96Ti	SB03	−	−	−	弥生Ⅰ期
96Ti	SX01	345	220	8	弥生Ⅰ期
97Aa	SD01	−	120	52	古墳
97Aa	SD03	−	34	17	中世Ⅰ期
97Aa	SD04	−	46	39	古代
97Aa	SD06	−	186	71	弥生Ⅱ期
97Aa	SD07	−	64	14	弥生Ⅰ期以前
97Aa	SD08	−	−	15	弥生Ⅰ期以前
97Aa	SK11	136	118	64	中世Ⅰ期
97Aa	SK12	148	68	47	中世Ⅰ期
97Aa	SK13	114	−	31	中世Ⅰ期
97Aa	SK14		62	26	中世Ⅰ期
97Aa	SK15	416	114	18	弥生Ⅰ期以前
97Aa	SK16	−	−	12	弥生Ⅰ期以前
97Ab	SD02	−	100	12	中世Ⅱ期
97Ab	SD03	1345	100	17	中世Ⅱ期
97Ab	SD04	1190	55	12	中世Ⅰ期
97Ab	SD05	960	55	11	中世Ⅰ期
97Ab	SD06	−	40	15	中世Ⅰ期
97Ab	SD07	−	140	14	中世Ⅱ期
97Ab	SD08	−	40	10	中世Ⅰ期
97Ab	SD09	−	45	22	中世Ⅰ期
97Ab	SD10	−	70	11	中世Ⅰ期
97Ab	SD11	−	50	24	中世Ⅰ期
97Ab	SD12	350	150	19	中世Ⅰ期
97Ab	SD13	−	55	15	中世Ⅰ期
97Ab	SD14	1860	50	11	中世Ⅰ期
97Ab	SD15	870	60	23	中世Ⅰ期
97Ab	SD17	−	25	11	中世Ⅰ期
97Ab	SD18	−	40	8	中世Ⅰ期
97Ab	SD19	−	30	9	中世Ⅰ期
97Ab	SD20	−	30	8	中世Ⅰ期

調査区	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時　期
97Ab	SD21	−	40	6	中世Ⅰ期
97Ab	SD22	520	35	8	中世Ⅰ期
97Ab	SD23	400	50	4	中世Ⅰ期
97Ab	SD24	580	60	9	中世Ⅱ期
97Ab	SD25	995	80	16	中世Ⅱ期
97Ab	SD26	850	70	20	中世Ⅱ期
97Ab	SD27	−	60	7	中世Ⅱ期
97Ab	SD28	−	145	48	古代
97Ab	SD29	−	−	19	古墳
97Ab	SD30	−	130	32	古墳
97Ab	SD31	−	190	54	古墳
97Ab	SD32	−	60	12	中世Ⅱ期
97Ab	SD33	−	75	16	古墳
97Ab	SD34	−	70	23	古墳
97Ab	SD36	−	120	24	古代
97Ab	SD40	−	55	7	中世Ⅱ期
97Ab	SD43	−	45	12	古墳
97Ab	SD45	−	65	20	弥生Ⅰ期以降
97Ab	SD46	−	330	40	弥生Ⅰ期
97Ab	SD47	−	150	20	弥生Ⅰ期
97Ab	SD48	−	60	14	縄文Ⅱ期
97Ab	SD49	−	−	21	縄文Ⅱ期
97Ab	SD50	520	35	6	弥生Ⅰ期
97Ab	SD53	−	130	27	古代
97Ab	SD56	−	40	8	弥生Ⅰ期
97Ab	SD57	670	40	4	弥生Ⅰ期
97Ab	SD58	−	60	17	中世Ⅰ期
97Ab	SD59	−	−	15	縄文Ⅱ期
97Ab	SD60	−	85	16	古墳
97Ab	SK01	250	90	32	中世Ⅰ期
97Ab	SK02	−	62	30	中世Ⅰ期
97Ab	SK03	235	60	45	中世Ⅰ期
97Ab	SK04	225	170	28	中世Ⅰ期
97Ab	SK06	158	155	15	古墳
97Ab	SK23	250	200	32	古墳
97Ab	SK131	160	100	69	弥生Ⅰ期以前
97Ab	SK135	32	30	8	古墳
97Ab	SK153	100	82	25	弥生Ⅰ期以前
97Ab	SK154	115	75	22	弥生Ⅰ期以前
97Ab	SK175	314	100	19	弥生Ⅰ期以前
97Ab	SK177	385	120	16	弥生Ⅰ期以前
97Ab	SK201	120	110	35	古墳
97Ab	SE01	155	125	76	古墳
97Ab	SX01	245	180	26	弥生Ⅰ期
97Ab	SX02	515	320	34	中世Ⅰ期
97B	SD01	−	270	51	中世Ⅱ期以降
97B	SD02	−	46	15	古代
97B	SD05	−	110	25	古代
97B	SD06	−	100	16	古代
97B	SD08	−	60	15	古代
97B	SD09	−	80	21	古代
97B	SD12	960	45	21	中世Ⅰ期
97B	SD13	−	50	23	中世Ⅰ期
97B	SD14	−	110	45	古代
97B	SD15	−	35	18	古代

調査区	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時　期
97B	SD16	−	70	19	古代
97B	SD17	880	50	22	中世Ⅱ期
97B	SD20	−	120	38	古墳
97B	SD21	−	60	23	古墳
97B	SD22	1320	60	14	中世Ⅰ期
97B	SD24	−	40	15	中世Ⅰ期
97B	SD25	−	45	14	中世Ⅰ期
97B	SD26	−	30	25	古墳
97B	SD31	−	40	10	中世Ⅰ期
97B	SD32	−	55	12	中世Ⅰ期
97B	SD35	−	60	11	中世Ⅰ期
97B	SD36	−	60	15	中世Ⅰ期
97B	SD37	−	30	9	中世Ⅰ期
97B	SD38	−	55	12	古墳
97B	SD41	−	120	35	中世Ⅰ期
97B	SD43	−	80	45	中世Ⅱ期
97B	SD44	−	55	25	中世Ⅰ期
97B	SD47	−	60	18	古墳
97B	SD48	−	120	38	中世Ⅰ期
97B	SD55	1650	160	35	近世以降
97B	SD56	−	60	14	中世Ⅰ期
97B	SD57	−	70	13	中世Ⅰ期
97B	SD58	−	25	11	中世Ⅰ期
97B	SD59	−	35	15	中世Ⅰ期
97B	SD60	550	80	24	中世Ⅱ期
97B	SD62	−	50	17	中世Ⅰ期
97B	SD63	−	50	18	中世Ⅰ期
97B	SD68	−	55	15	中世Ⅰ期
97B	SD72	−	95	18	中世Ⅰ期
97B	SD76	−	76	32	古墳
97B	SD78	−	60	18	中世Ⅰ期
97B	SD80	−	60	17	中世Ⅰ期
97B	SD88	1150	55	15	近世以降
97B	SD89	−	20	25	中世Ⅱ期
97B	SD92	−	320	45	弥生Ⅰ期
97B	SD93	−	290	85	弥生Ⅱ期
97B	SD95	−	60	20	弥生Ⅰ期以降
97B	SD96	−	100	21	弥生Ⅰ期
97B	SD97	−	200	8	弥生Ⅰ期
97B	SD98	−	70	16	弥生Ⅰ期
97B	SD99	−	50	15	弥生Ⅰ期
97B	SD100	−	70	12	弥生Ⅰ期
97B	SD101	540	95	14	弥生Ⅰ期
97B	SD102	−	50	9	弥生Ⅰ期
97B	SD103	350	90	30	弥生Ⅰ期以前
97B	SD104	−	65	5	弥生Ⅰ期以前
97B	SD107	350	60	6	弥生Ⅰ期以前
97B	SD108	270	90	7	弥生Ⅰ期以前
97B	SD109	300	100	15	弥生Ⅰ期以前
97B	SK09	−	−	8	古代
97B	SK22	−	−	12	中世
97B	SK58	200	90	15	中世Ⅰ期
97B	SK66	−	70	25	中世Ⅰ期
97B	SK67	290	80	39	中世Ⅰ期
97B	SK68	70	45	32	中世Ⅰ期

遺構一覧表 4

調査区	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時　期
97B	SK74	240	140	35	弥生後期
97B	SK82	30	25	15	中世Ⅰ期
97B	SK88	1740	1520	122	古墳
97B	SK128	140	130	51	中世Ⅰ期
97B	SK130	－	440	152	古代
97B	SK161	230	130	25	弥生Ⅰ期以前
97B	SK163	85	50	23	弥生Ⅰ期以前
97B	SK164	275	100	25	弥生Ⅰ期以前
97B	SK166	45	35	24	弥生Ⅰ期以前
97B	SK170	320	250	10	弥生Ⅰ期以前
97B	SK171	35	30	6	弥生Ⅰ期以前
97B	SK172	60	50	8	弥生Ⅰ期以前
97B	SK174	72	64	31	縄文Ⅱ期
97B	SK176	95	65	10	縄文Ⅰ期
97B	SK177	50	48	6	縄文Ⅰ期
97B	SK180	480	360	15	縄文Ⅰ期
97B	SK181	142	132	70	弥生Ⅰ期以前
97B	SK182	445	120	74	弥生Ⅰ期以前
97B	SK184	172	165	76	弥生Ⅰ期以前
97B	SK186	40	34	5	縄文Ⅰ期
97B	SK187	82	45	15	縄文Ⅰ期
97B	SK188	68	38	15	縄文Ⅰ期
97B	SK189	450	150	42	弥生Ⅰ期以前
97B	SK190	50	48	55	縄文Ⅰ期
97B	SK191	210	160	25	弥生Ⅰ期以前
97B	SK229	－	72	12	弥生Ⅰ期以前
97B	SK255	300	120	15	弥生Ⅰ期以前
97B	SK300	310	60	41	弥生Ⅰ期
97B	SK303	120	80	23	弥生Ⅰ期以前
97B	SK383	204	144	31	弥生Ⅰ期以前
97B	SK501	110	105	11	弥生Ⅰ期以前
97B	SK506	150	85	7	弥生Ⅰ期以前
97B	SK512	390	330	25	弥生Ⅰ期以前
97B	SK526	402	316	11	弥生Ⅰ期以前
97B	SK556	252	205	5	弥生Ⅰ期以前
97B	SX01	810	210	22	古墳
97B	SX03	－	190	16	弥生Ⅰ期
97B	SX04	－	－	21	弥生Ⅰ期
97B	SX05	－	130	5	弥生Ⅰ期
97B	SX07	－	170	26	弥生Ⅰ期以前
97B	SX08	－	－	9	縄文Ⅱ期
97B	SX11	2840	1360	25	中世Ⅰ期
97Ca	SD01	－	120	60	古代
97Ca	SD02	－	125	62	古代
97Ca	SD03	－	80	40	古代
97Ca	SD04	1510	70	16	中世Ⅰ期
97Ca	SD05	－	80	25	古代
97Ca	SD07	－	72	18	古代
97Ca	SD09	－	64	11	古代
97Ca	SD10	－	80	41	古墳
97Ca	SD11	－	90	32	古代
97Ca	SD13	－	60	15	古代
97Ca	SD14	－	56	12	古墳
97Ca	SD17	－	96	38	古代
97Ca	SD18	－	76	23	古代

調査区	遺構番号	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	時　期
97Ca	SD19	－	42	18	古代
97Ca	SD20	－	－	15	古代
97Ca	SD21	－	88	56	古代
97Ca	SD23	－	80	20	中世Ⅱ期
97Ca	SD24	－	52	18	中世Ⅰ期
97Ca	SD26	302	44	11	中世Ⅰ期
97Ca	SD27	－	355	95	弥生Ⅱ期
97Ca	SD28	－	70	22	弥生Ⅱ期
97Ca	SD29	－	130	30	弥生Ⅱ期
97Ca	SD30	－	185	40	弥生Ⅱ期
97Ca	SD31	－	60	25	弥生Ⅱ期
97Ca	SD34	－	54	14	古代
97Ca	SD35	－	56	15	古代
97Ca	SD36	－	90	4	古墳
97Ca	SK01	25	22	21	中世Ⅱ期
97Ca	SK13	120	80	72	中世
97Ca	SK27	190	150	62	中世
97Ca	SK39	－	－	25	弥生Ⅰ期以前
97Ca	SK49	－	－	30	弥生Ⅰ期以前
97Ca	SK51	145	105	46	中世Ⅰ期
97Ca	SX01	－	－	52	古墳
97Cb	SD02	－	66	22	古代
97Cb	SD03	400	56	11	近世以降
97Cb	SD04	332	76	10	中世
97Cb	SD07	716	56	12	古代
97Cb	SD08	－	－	13	古代
97Cb	SD09	－	74	34	古墳
97Cb	SD10	－	54	23	古代
97Cb	SD11	－	76	32	古代
97Cb	SD12	－	54	11	古代
97Cb	SD14	312	48	22	中世
97Cb	SD15	－	74	34	中世
97Cb	SD16	－	350	90	弥生Ⅱ期
97Cb	SD18	－	190	42	弥生Ⅱ期
97Cb	SD19	－	140	45	弥生Ⅱ期
97Cb	SD20	－	130	25	弥生Ⅱ期
97Cb	SD21	－	90	15	弥生Ⅱ期
97Cb	SD22	226	48	12	近世以降
97Cb	SK02	－	－	6	古代
97Cb	SK03	180	70	21	古代
97Cb	SK04	210	70	11	古代
97Cb	SK11	－	62	45	中世
97Cb	SK12	154	92	91	古代
97Cb	SK14	196	84	85	古代
97Cb	SK15	165	90	41	古代
97Cb	SK18	138	95	16	古代
97Cb	SK57	130	80	28	弥生Ⅰ期以前
97Cb	SK58	155	115	75	弥生Ⅰ期以前
97Cb	SK60	－	－	15	古代
97Cb	SX01	990	210	21	中世
97Cb	SX04	－	－	20	中世
97Cb	SX05	－	－	213	中世
97Cb	SX06	－	－	13	古代
97Cb	SX07	－	－	10	古代
97Cb	SX08	420	180	13	中世

遺物一覧表

縄文

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	備考	登録番号
44	1	深鉢	97B	SK187	30.0	−	16.1	後期前葉	北白川上層式に対比	E-1
44	2	深鉢	97B	SK190	−	−	8.4	後期前葉	北白川上層式に対比	E-2
44	3	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13b	−	−	1.5	後期前葉	北白川上層式に対比	E-3
44	4	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB11c	33.1	−	4.0	後期前葉	北白川上層式に対比	E-4
44	5	深鉢	97B	SK180	−	−	5.4	後期前葉	北白川上層式に対比	E-5
44	6	深鉢	97B	SK180	−	−	5.4	後期前葉	北白川上層式に対比	E-6
44	7	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13a	−	−	2.4	後期前葉	北白川上層式に対比	E-7
44	8	深鉢	97B	検出Ⅱ ⅣB18c	−	−	2.4	後期前葉	北白川上層式に対比	E-8
44	9	深鉢	97B	検出Ⅱ ⅣB12c	−	−	3.5	後期前葉	北白川上層式に対比	E-9
44	10	深鉢	97B	SK180	−	−	3.0	後期前葉	北白川上層式に対比	E-10
44	11	深鉢	97B	SK180	−	−	2.2	後期前葉	北白川上層式に対比	E-11
44	12	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13a	−	−	2.6	後期前葉	北白川上層式に対比	E-12
44	13	深鉢	97B	検出Ⅱ ⅣB12a	−	−	3.0	後期前葉	北白川上層式に対比	E-13
44	14	深鉢	96Bc	検出Ⅲ ⅣB10a	−	−	12.3	後期前葉	北白川上層式に対比	E-14
45	15	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13a	−	−	2.4	後期前葉	北白川上層式に対比	E-15
45	16	深鉢	97B	SK180	−	−	1.5	後期前葉	北白川上層式に対比	E-16
45	17	深鉢	97B	SK177	−	−	3.9	後期前葉	北白川上層式に対比	E-17
45	18	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13a	−	−	2.5	後期前葉	北白川上層式に対比	E-18
45	19	深鉢	97Ca	検出Ⅱ ⅣA7o	−	−	1.7	後期前葉	北白川上層式に対比	E-19
45	20	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13c	−	−	2.9	後期前葉	北白川上層式に対比	E-20
45	21	深鉢	96Bc	検出Ⅲ ⅣB10a	−	−	3.9	後期前葉	北白川上層式に対比	E-21
45	22	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB12c	−	−	3.8	後期前葉	北白川上層式に対比	E-22
45	23	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB12c	−	−	3.1	後期前葉	北白川上層式に対比	E-23
45	24	深鉢	97B	SK166	−	−	2.7	後期前葉	北白川上層式に対比	E-24
45	25	深鉢	97B	SK180	−	−	2.2	後期前葉	北白川上層式に対比	E-25
45	26	深鉢	97B	検出Ⅱ ⅣB13a	−	−	4.2	後期前葉	北白川上層式に対比	E-26
45	27	深鉢	97B	SK188	32.0	−	20.4	後期前葉	北白川上層式に対比	E-27
45	28	深鉢	97B	SK186	50.0	−	18.6	後期前葉	北白川上層式に対比	E-28
46	29	深鉢	96Bc	SK26	52.4	−	18.4	後期前葉	北白川上層式に対比	E-29
46	30	深鉢	96Ba	検出Ⅱ ⅣB9a	−	−	5.5	後期前葉	北白川上層式に対比	E-30
46	31	深鉢	96Ba	SX05	−	−	8.5	後期前葉	北白川上層式に対比	E-31
46	32	深鉢	96Ba	SX04	−	−	10.8	後期前葉	北白川上層式に対比	E-32
46	33	深鉢	97B	SK180	−	−	6.6	後期前葉	北白川上層式に対比	E-33
46	34	深鉢	97B	NR01	−	−	3.8	後期前葉	北白川上層式に対比	E-34
46	35	深鉢	97B	検出Ⅱ ⅣB13a	−	−	4.2	後期前葉	北白川上層式に対比	E-35
46	36	深鉢	97B	SD91	−	−	2.0	後期前葉	北白川上層式に対比	E-36
46	37	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13a	−	−	1.7	後期前葉	北白川上層式に対比	E-37
46	38	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13a	−	−	2.3	後期前葉	北白川上層式に対比	E-38
46	39	深鉢	97B	SD91	−	−	2.1	後期前葉	北白川上層式に対比	E-39
46	40	深鉢	96Ba	SX04	−	−	2.2	後期前葉	北白川上層式に対比	E-40
46	41	深鉢	97B	SK189	−	−	1.5	後期前葉	北白川上層式に対比	E-41
46	42	深鉢	97B	検出Ⅱ ⅣB12b	−	−	5.7	後期前葉	北白川上層式に対比	E-42
46	43	深鉢	97B	SD30	−	−	2.5	後期前葉	北白川上層式に対比	E-43
46	44	深鉢	97B	SK180	−	−	2.3	後期前葉	北白川上層式に対比	E-44
46	45	深鉢	96E	NR01	−	−	5.5	後期前葉	北白川上層式に対比	E-45
47	46	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13a	28.8	−	10.0	後期前葉	北白川上層式に対比	E-46
47	47	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13a	−	−	4.8	後期前葉	北白川上層式に対比	E-47
47	48	深鉢	97B	NR01（下層）	41.8	−	14.9	後期前葉	北白川上層式に対比	E-48
47	49	深鉢	97B	SK176	45.0	−	31.0	後期前葉	北白川上層式に対比	E-49
48	50	注口土器	97Ab	検出Ⅱ VA1r	−	−	10.4	後期中葉末	元住吉山Ⅰ式に対比	E-50
48	51	注口土器	96E	NR01	−	−	5.8	後期後葉		E-51
48	52	深鉢	97B	SK174	−	−	11.8	後期後葉	元住吉山Ⅱ式に対比	E-52
48	53	深鉢	96Ba	検出Ⅱ ⅣB9a	23.2	−	5.7	後期後葉	宮滝式に対比	E-53
48	54	深鉢	96A	検出Ⅰ ⅣB1t	−	−	3.5	後期後葉	宮滝式に対比	E-54
48	55	深鉢	97Ab	検出Ⅱ VB4a	−	−	4.0	後期後葉	宮滝式に対比	E-55
48	56	深鉢	96Td	鳥畑Tdトレンチ①(黒色土層)	−	−	3.3	後期後葉	宮滝式に対比	E-56
48	57	深鉢	96Td	鳥畑Tdトレンチ①(黒色土層)	−	−	3.8	後期後葉	宮滝式に対比	E-57
48	58	深鉢	97B	NR01	28.6	−	9.5	後期後葉		E-58
48	59	浅鉢	97Ab	検出Ⅱ VB2a	26.8	−	7.1	後期後葉		E-59
48	60	深鉢	97Ab	SD49	−	−	5.0	後期後葉		E-60
49	61	深鉢	97Ab	検出Ⅲ ⅣB20c	28.0	−	18.9	後期末	寺津下層式併行	E-61
49	62		97B	検出Ⅲ ⅣA12t	21.2	−	3.6	晩期初頭	寺津式併行	E-62
49	63		97Ab	検出Ⅱ VB1d	20.8	−	3.8	晩期初頭	寺津式併行	E-63
49	64		97Ab	検出Ⅱ VB1b	−	−	4.0	晩期初頭	寺津式併行	E-64

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　考	登録番号
49	65		97Ab	検出Ⅱ VB1b	−	−	2.2	晩期初頭	寺津式併行	E-65
49	66		97Ab	検出Ⅱ VB1b	−	−	2.7	晩期初頭	寺津式併行	E-66
49	67		97Ab	検出Ⅱ VB1b	−	−	2.4	晩期初頭	寺津式併行	E-67
49	68		97Ab	検出Ⅱ VA1t	−	−	3.2	晩期初頭	寺津式併行	E-68
49	69		97B	NR01	−	−	3.6	晩期初頭	寺津式併行	E-69
49	70		96E	NR01	22.0	−	8.3	晩期初頭	寺津式併行	E-70
49	71		96A	検出Ⅰ ⅣC1a	−	−	2.4	晩期前葉	元刈谷式併行	E-71
49	72		97Aa	検出Ⅱ VA1n	−	−	4.2	晩期前葉	元刈谷式併行	E-72
49	73		96Cb	検出Ⅲ VA7l	−	−	2.9	晩期前葉		E-73
50	74	深鉢	96Bb	検出Ⅲ ⅣA20o	35.2	−	20.5	晩期中葉	稲荷山式併行	E-74
50	75	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣA19t	34.4	−	18.0	晩期中葉	稲荷山式併行	E-75
50	76	深鉢	96Ba	SX04	28.4	12.0	28.5	晩期中葉	稲荷山式併行	E-76
50	77	深鉢	96Ba	SX04	−	10.4	3.6	晩期中葉	稲荷山式併行	E-77
50	78	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB12b	−	12.2	2.9	晩期中葉	稲荷山式併行	E-78
51	79	深鉢	96Cb	SK90	42.4	−	26.6	晩期中葉		E-79
51	80	深鉢	96Cb	SK90	30.0	−	7.1	晩期中葉		E-80
51	81	深鉢	96Bb	検出Ⅲ ⅣA14p	−	−	2.6	晩期中葉		E-81
51	82	鉢	97Ca	検出Ⅱ ⅣA7p	30.4	−	2.9	晩期中葉		E-82
51	83		96Cb	検出Ⅲ VA11k	−	−	3.3			E-83
51	84		96Cb	検出Ⅲ VA11k	−	−	2.6			E-84
51	85		96Cb	検出Ⅲ VA11k	−	−	1.8			E-85
51	86		96Cb	検出Ⅲ VA11k	−	−	2.4			E-86
51	87		96Cb	検出Ⅲ VA11k	−	−	3.4			E-87
51	88		96Cb	検出Ⅲ VA11k	18.6	−	4.0			E-88
51	89	壺	96Ba	SX04	4.4	−	9.5			E-89
51	90	鉢	97B	検出Ⅱ(黒色土) ⅣA16t	25.4	−	7.6			E-90
52	91	深鉢	96Cb	SK90	23.2	−	4.2	後期前葉		E-91
52	92	鉢	96Ba	検出Ⅱ ⅣB9a	27.0	−	5.6	晩期前葉		E-92
52	93	深鉢	97B	SK189	21.8	−	6.0			E-93
52	94	深鉢	97B	SK164	24.2	−	6.4			E-94
52	95	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣA16r	19.2	−	3.7			E-95
52	96	深鉢	97B	検出Ⅱ ⅣB13b	−	−	3.9			E-96
52	97	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB13a	−	−	5.7			E-97
52	98	深鉢	97B	検出Ⅱ ⅣB16d	31.4	−	4.6			E-98
52	99	深鉢	96D	SK45	−	−	4.2			E-99
52	100	深鉢	97B	SK174	−	−	6.0			E-100
52	101	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB12b	35.8	−	3.8			E-101
52	102	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣA17r	−	−	5.5	晩期中葉		E-102
52	103	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣA17r	−	−	4.3	晩期中葉		E-103
52	104	深鉢	97Ab	検出Ⅱ(黒色土) VA3r	−	−	4.8	晩期中葉		E-104
52	105	深鉢	96Cb	検出Ⅰ VA11m	−	7.2	1.2		網代痕	E-105
52	106	深鉢	97B	検出Ⅲ ⅣB14b	−	8.8	1.5		網代痕	E-106
52	107	深鉢	96Td	鳥畑Tdトレンチ①(黒色土層)	−	8.8	5.8		網代痕	E-107

弥生時代前期

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　考	登録番号
53	108	壺	96Ti	SX01	11.4	−	17.0	前期	条痕紋系	E-108
53	109	壺	96Ti	SX01	11.6	−	3.7	前期	遠賀川系	E-109
53	110	内傾口縁土器	96Ti	SX01	−	−	3.3	前期	条痕紋系	E-110
53	111	深鉢	96Ti	SX01	23.4	−	4.9	前期	氷式系削痕	E-111
53	112	深鉢	96Ti	SX01	24.6	−	7.6	前期	氷式系削痕	E-112
53	113	深鉢	96Ti	SX01	−	7.4	3.2	前期	氷式系削痕	E-113
53	114	壺	96Cb	SK50	−	−	4.5	前期	遠賀川系	E-114
53	115	壺	96Cb	SK50	−	−	3.0	前期	遠賀川系	E-115
53	116	壺	96Cb	SK50	−	7.6	4.1	前期	遠賀川系	E-116
53	117	壺	96Cb	SK153	13.2	−	4.8	前期	遠賀川系	E-117
53	118	壺	96Cb	SK153	−	−	8.5	前期	遠賀川系	E-118
53	119	壺	96Cb	SK153	−	−	9.7	前期	遠賀川系	E-119
53	120	鉢	96Cb	SK153	29.2	−	8.4	前期	遠賀川系	E-120
53	121	壺 or 鉢	96Cb	SK153	−	9.6	3.4	前期	遠賀川系	E-121
53	122	壺 or 鉢	96Cb	SK153	−	9.4	6.4	前期	遠賀川系	E-122
53	123	深鉢	96Cb	SK153	24.6	−	5.7	前期	氷式系削痕	E-123
54	124	壺蓋	96Ti	SB03	12.8	−	2.1	前期	遠賀川系	E-124
54	125	壺	96Ti	SB03	16.8	34.2	13.6	前期	遠賀川系	E-125

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　考	登録番号
54	126	壺	96Ti	SB03	14.6	−	4.5	前期	遠賀川系	E-126
54	127	壺	96Ti	SB03	17.2	−	4.7	前期	遠賀川系	E-127
54	128	壺	96Ti	SB03	18.2	−	6.9	前期	遠賀川系	E-128
54	129	壺	96Ti	SB03	−	7.5	19.4	前期	遠賀川系	E-129
54	130	壺	96Ti	SB03	−	6.4	5.2	前期	遠賀川系	E-130
54	131	鉢	96Ti	SB03	36.0	−	3.1	前期	遠賀川系	E-131
54	132	鉢	96Ti	SB03	40.4	−	3.0	前期	遠賀川系	E-132
54	133	鉢	96Ti	SB03	44.2	−	5.4	前期	遠賀川系	E-133
54	134	甕	96Ti	SB03	19.0	−	6.2	前期	遠賀川系	E-134
54	135	甕	96Ti	SB03	24.2	−	7.0	前期	遠賀川系	E-135
54	136	甕	96Ti	SB03	35.2	−	2.9	前期	遠賀川系	E-136
54	137	甕	96Ti	SB03	24.6	−	6.8	前期	遠賀川系	E-137
55	138	深鉢	96Ti	SB03	22.0	−	4.6	前期	氷式系削痕	E-138
55	139	深鉢	96Ti	SB03	28.4	−	4.1	前期	氷式系削痕	E-139
55	140	深鉢	96Ti	SB03	21.6	−	4.8	前期	氷式系削痕	E-140
55	141	深鉢	96Ti	SB03	19.4	−	8.9	前期	氷式系削痕	E-141
55	142	深鉢	96Ti	SB03	20.0	−	3.9	前期	氷式系削痕	E-142
55	143	深鉢	96Ti	SB03	33.0	−	9.0	前期	氷式系削痕	E-143
55	144	深鉢	96Ti	SB03	32.2	−	8.5	前期	氷式系削痕	E-144
55	145	深鉢	96Ti	SB03	−	8.8	6.1	前期	氷式系削痕	E-145
55	146	深鉢	96Ti	SB03	−	6.8	4.3	前期	氷式系削痕	E-146
55	147	深鉢	96Ti	SB03	−	8.6	7.4	前期	氷式系削痕	E-147
55	148	深鉢	96Ti	SB03	−	7.6	11.7	前期	氷式系削痕	E-148
55	149	深鉢	96Ti	SB03	17.0	7.7	−	前期	条痕紋系	E-149
55	150	壺蓋	96Cb	検出Ⅲ VA11k	−	−	2.5	前期	遠賀川系	E-150
55	151	深鉢	96Cb	検出Ⅲ VA11k	21.6	−	15.6	前期	氷式系削痕	E-151
55	152	深鉢	96Cb	検出Ⅲ VA11k	17.2	−	6.0	前期	氷式系削痕	E-152
55	153	深鉢	96Cb	検出Ⅲ VA11k	20.6	−	3.9	前期	氷式系削痕	E-153
55	154	深鉢	96Cb	検出Ⅲ VA11k	20.0	−	3.9	前期	氷式系削痕	E-154
55	155	深鉢	96Cb	検出Ⅲ VA11k	−	7.0	4.0	前期	氷式系削痕	E-155
56	156	壺蓋	96Ti	SK01	11.0	−	3.1	前期	遠賀川系	E-156
56	157	鉢	96Ti	SK01	21.8	−	13.6	前期	遠賀川系	E-157
56	158	壺	96Ti	SK01	−	7.8	23.4	前期	遠賀川系	E-158
56	159	壺 or 鉢	96Ti	SK01	−	11.2	11.0	前期	遠賀川系	E-159
56	160	壺 or 鉢	96Ti	SK01	−	9.2	2.6	前期	遠賀川系	E-160
56	161	鉢	96Ti	SK01	39.6	−	12.5	前期	遠賀川系	E-161
56	162	深鉢	96Ti	SK01	24.5	−	20.4	前期	氷式系削痕	E-162
56	163	壺	97Ab	SD46 西側盛土	14.9	−	21.5	前期	遠賀川系	E-163
56	164	壺蓋	97Ab	SD46 西側盛土	12.0	−	19.0	前期	遠賀川系	E-164
56	165	壺？	97Ab	水田域 VB3d	−	6.0	2.3	前期	遠賀川系	E-165
56	166	深鉢	97Ab	水田域 VB3d	−	9.0	4.5	前期	氷式系削痕	E-166
56	167	甕	97Ab	SD49	−	7.2	3.6	前期	遠賀川系	E-167
57	168	壺	97Ab	検出Ⅱ VA3q	14.6	−	28.8	前期	遠賀川系	E-168
57	169	壺	96Ti	検出Ⅲ VA15no	14.4	−	4.9	前期	遠賀川系	E-169
57	170	壺蓋	96Cb	検出Ⅲ VA8l	−	−	−	前期	遠賀川系	E-170
57	171	壺	96Cb	検出Ⅲ VA15l	−	7.8	5.2	前期	遠賀川系	E-171
57	172	壺	96Cb	検出Ⅲ VA14l	−	−	5.3	前期	遠賀川系	E-172
57	173	壺	97B	検出Ⅱ ⅣB16f	−	−	15.0	前期	遠賀川系	E-173
57	174	甕	96D	検出Ⅰ VA16m	−	4.8	2.8	前期	遠賀川系	E-174
57	175	甕	96D	検出Ⅱ VA16m	−	3.8	2.8	前期	遠賀川系	E-175
57	176	甕	96Cb	検出Ⅲ VA7l	−	6.0	2.7	前期	遠賀川系	E-176
57	177	甕	97Ab	検出Ⅰ VA1r	−	9.0	3.9	前期	遠賀川系	E-177
57	178	鉢	96Cb	検出Ⅲ VA13m	24.0	−	7.6	前期	遠賀川系	E-178
57	179	鉢	96Cb	検出Ⅲ VA9k	32.4	−	4.2	前期	遠賀川系	E-179
57	180	深鉢	96Cb	検出Ⅱ VA8l	19.8	−	4.0	前期	氷式系削痕	E-180
57	181	深鉢	96Cb	公団水路内 VA15j	24.2	14.7	−	前期	氷式系削痕	E-181
57	182	深鉢	96D	SK24	18.8	−	3.7	前期	氷式系削痕	E-182
57	183	深鉢	96D	検出Ⅱ ⅥA6h	23.2	−	5.0	前期	氷式系削痕	E-183
57	184	深鉢	96D	検出Ⅱ VA17m	20.0	−	7.1	前期	氷式系削痕	E-184
57	185	深鉢	96Cb	検出Ⅲ VA15l	26.8	−	11.8	前期	氷式系削痕	E-185
57	186	深鉢	96Cb	検出Ⅱ VA7l	−	6.8	2.1	前期	氷式系削痕	E-186
57	187	深鉢	96Cb	検出Ⅱ VA10m	−	7.6	4.1	前期	氷式系削痕	E-187
57	188	深鉢	96Cb	検出Ⅲ VA8l	−	7.2	3.8	前期	氷式系削痕	E-188
57	189	深鉢	96D	検出Ⅰ VA16m	−	6.4	3.2	前期	氷式系削痕	E-189
57	190	深鉢	97Ab	検出Ⅱ VA2r	−	7.6	4.9	前期	氷式系削痕	E-190
57	191	深鉢	97B	SX03	−	7.0	5.0	前期	氷式系削痕	E-191

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　考	登録番号
57	192	内傾口縁土器	97B	検出Ⅱ ⅣA19q	−	−	3.3	前期	条痕紋系	E-192
57	193	内傾口縁土器	96Ti	検出Ⅲ VA15no	9.8	−	4.9	前期	条痕紋系	E-193

弥生時代後期～古墳時代

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　考	登録番号
61	194	弥生土器 有段高杯	97B	SK74	20.8	−	5.0	山中式後期		E-194
61	195	弥生土器 広口壺	97B	SK74	15.6	−	4.8	山中式後期		E-195
61	196	土師器 有段高杯	96Ti	SK02	22.8	−	3.8	廻間Ⅰ式		E-196
61	197	土師器 有段高杯	96Ti	SK02	−	−	3.7	廻間Ⅰ式		E-197
61	198	土師器 有段高杯	96Ti	SK02	−	−	10.8	廻間Ⅰ式		E-198
61	199	土師器 浅鉢	96Ti	SK02	16.7	1.8	10.3	廻間Ⅰ式		E-199
61	200	土師器 有段口縁甕	96Ti	SK02	18.2	−	3.0	廻間Ⅰ式		E-200
61	201	土師器 く字甕	97B	SD20	19.2	−	6.1	廻間Ⅰ式		E-201
61	202	土師器 有段口縁(く字)甕	97B	SD20	−	8.6	7.8	廻間Ⅰ式		E-202
61	203	土師器 有段高杯	97B	SD20	26.6	15.8	18.6	廻間Ⅰ式		E-203
61	204	土師器 有段高杯(器台)	97B	SD20	−	21.2	6.6	廻間Ⅰ式		E-204
61	205	土師器 パレス壺	97Ab	SD33	−	−	2.0	廻間Ⅰ式		E-205
61	206	土師器 く字甕	97Ab	SD29	−	9.4	26.5	廻間Ⅰ式		E-206
61	207	土師器 S字甕	97Ab	SD29	15.2	−	4.4	廻間Ⅰ式	A類（新）	E-207
61	208	土師器 有段高杯	97Ab	SD29	−	11.8	8.4	廻間Ⅰ式		E-208
62	209	土師器 S字甕	97Ab	SD30	17.0	−	5.6	廻間Ⅱ式	B類（新）	E-209
62	210	土師器 S字甕	97Ab	SD30	17.4	−	4.8	廻間Ⅱ式	模倣品	E-210
62	211	土師器 S字甕	97Ab	SD30	−	7.0	4.5	廻間Ⅱ式		E-211
62	212	土師器 小型器台	97Ab	SD30	9.0	−	6.5	廻間Ⅱ式		E-212
62	213	土師器 内湾直口壺	97Ab	SD30	6.0	−	4.9	廻間Ⅱ式	口縁部外面擬凹線	E-213
62	214	土師器 小型壺	97Ab	SD30	−	3.6	2.3	廻間Ⅱ式		E-214
62	215	土師器 有段高杯	97Ab	SK135	−	−	5.1	廻間Ⅰ式		E-215
62	216	土師器 器台	97B	SD76	−	−	4.8	廻間Ⅰ式		E-216
62	217	土師器 く字甕	97B	SK116	15.4	−	3.8	廻間Ⅰ式		E-217
62	218	土師器 く字甕	96D	SK01	−	7.5	5.1	廻間Ⅰ式		E-218
62	219	土師器 器台	97B	SD47	−	−	6.8	廻間Ⅱ式		E-219
62	220	土師器 S字甕	96Ti	SE02	18.4	−	6.3	松河戸Ⅰ式	C類（新）	E-220
62	221	土師器 S字甕	96Ti	SE02	14.0	−	4.6	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-221
62	222	土師器 S字甕	96Ti	SE02	−	−	3.0	松河戸Ⅰ式		E-222
62	223	土師器 S字甕	96Ti	SE02	−	−	2.8	松河戸Ⅰ式		E-223
62	224	土師器 S字甕	96Ti	SE02	−	7.8	5.2	松河戸Ⅰ式		E-224
62	225	土師器 無透孔屈折脚高杯	96Ti	SE02	15.7	−	5.6	松河戸Ⅰ式		E-225
62	226	土師器 柳ケ坪型壺	96Ti	SE02	−	−	−	松河戸Ⅰ式		E-226
62	227	土師器 柳ケ坪型壺	96Ti	SE02	12.6	−	2.5	松河戸Ⅰ式		E-227
62	228	土師器 小型壺	96Ti	SE02	−	2.5	3.5	松河戸Ⅰ式		E-228
62	229	土師器 壺	96Ti	SE02	−	4.2	4.7	松河戸Ⅰ式		E-229
62	230	土師器 S字甕	96Ti	SE01	19.6	−	1.9	松河戸Ⅰ式	D類（古～中）	E-230
62	231	土師器 く字甕	96Ti	SE01	−	9.1	9.2	松河戸Ⅰ式		E-231
62	232	土師器 二重口縁壺	96Ti	SE01	19.0	−	4.9	松河戸Ⅰ式		E-232
63	233	土師器 S字甕	97B	SK88	12.4	−	3.2	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-233
63	234	土師器 S字甕	97B	SK88	13.2	−	4.9	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-234
63	235	土師器 S字甕	97B	SK88	10.4	−	4.1	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-235
63	236	土師器 S字甕	97B	SK88	15.0	−	2.8	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-236
63	237	土師器 S字甕	97B	SK88	13.8	−	3.8	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-237
63	238	土師器 S字甕	97B	SK88	12.0	−	2.8	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-238
63	239	土師器 S字甕	97B	SK88	−	−	2.6	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-239
63	240	土師器 く字甕	97B	SK88	−	9.2	5.7	松河戸Ⅰ式		E-240
63	241	土師器 く字甕	97B	SK88	−	10.2	6.5	松河戸Ⅰ式		E-241
63	242	土師器 く字甕	97B	SK88	−	−	4.0	松河戸Ⅰ式		E-242
63	243	土師器 く字甕	97B	SK88	−	−	2.6	松河戸Ⅰ式		E-243
63	244	土師器 く字甕	97B	SK88	−	−	4.0	松河戸Ⅰ式		E-244
63	245	土師器 無透孔屈折脚高杯	97B	SK88	16.6	−	5.8	松河戸Ⅰ式		E-245
63	246	土師器 無透孔屈折脚高杯	97B	SK88	16.4	−	5.6	松河戸Ⅰ式		E-246
63	247	土師器 無透孔屈折脚高杯	97B	SK88	16.4	−	4.4	松河戸Ⅰ式		E-247
63	248	土師器 無透孔屈折脚高杯	97B	SK88	−	−	7.8	松河戸Ⅰ式		E-248
63	249	土師器 無透孔屈折脚高杯	97B	SK88	−	−	7.7	松河戸Ⅰ式		E-249
63	250	土師器 柳ケ坪型壺	97B	SK88	−	−	7.7	松河戸Ⅰ式		E-250
63	251	土師器 直口壺？	97B	SK88	12.2	−	5.1	松河戸Ⅰ式		E-251
63	252	土師器 小型丸底鉢	97B	SK88	9.2	−	3.0	松河戸Ⅰ式		E-252

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　考	登録番号
63	253	土師器 小型丸底鉢	97B	SK88	11.8	－	8.4	松河戸Ⅰ式		E-253
63	254	土師器 小型器台	97B	SK88	13.2	－	4.9	松河戸Ⅰ式		E-254
63	255	土師器 柳ケ坪型壺	96Ba	SK14	18.0	7.0	32.2	松河戸Ⅰ式	底部外面木葉痕	E-255
63	256	土師器 S字甕	96Ba	SK14	13.1	－	5.6	松河戸Ⅰ式	C類（新）	E-256
64	257	土師器 S字甕	97Ab	SD31	15.6	－	2.9	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-257
64	258	土師器 S字甕	97Ab	SD31	13.8	－	3.8	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-258
64	259	土師器 S字甕	97Ab	SD31	12.2	－	2.8	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-259
64	260	土師器 S字甕	97Ab	SD31	12.4	－	3.5	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-260
64	261	土師器 S字甕	97Ab	SD31	15.6	－	2.7	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-261
64	262	土師器 S字甕	97Ab	SD31	14.0	－	2.9	松河戸Ⅰ式	D類（古）	E-262
64	263	土師器 く字甕	97Ab	SD31	－	－	3.8	松河戸Ⅰ式		E-263
64	264	土師器 S字甕	97Ab	SD31	－	5.4	3.7	松河戸Ⅰ式		E-264
64	265	土師器 柳ケ坪型壺	97Ab	SD31	14.8	－	2.7	松河戸Ⅰ式		E-265
64	266	土師器 外反脚高杯	97Ab	SD31	－	－	4.1	松河戸Ⅰ式		E-266
64	267	土師器 無透孔屈折脚高杯	97Ab	SD31	－	－	6.4	松河戸Ⅰ式		E-267
64	268	土師器 無透孔屈折脚高杯	97Ab	SD31	－	－	5.3	松河戸Ⅰ式		E-268
64	269	土師器 無透孔屈折脚高杯	97Ab	SD31	－	－	7.1	松河戸Ⅰ式		E-269
64	270	土師器 無透孔屈折脚高杯	97Ab	SD31	－	－	8.1	松河戸Ⅰ式		E-270
64	271	土師器 小型器台	97Ab	SD31	8.8	－	1.6	松河戸Ⅰ式		E-271
64	272	弥生土器 有段高杯	97Ab	SD31	－	－	7.0	山中式後期		E-272
64	273	土師器 浅鉢	97Ab	検出Ⅰ VA1r	11.2	－	4.4	廻間Ⅰ～Ⅱ式		E-273
64	274	土師器 有段高杯	97Ab	検出Ⅰ VB3c	22.6	－	3.2	廻間Ⅰ～Ⅱ式	口縁部内面多条沈線	E-274
64	275	土師器 有段口縁加飾壺	96Ti	SE02	－	－	2.4	廻間Ⅰ～Ⅱ式	口縁部外面円形浮文	E-275
64	276	土師器 有段口縁加飾壺	97Ca	SD10	－	－	2.3	廻間Ⅰ～Ⅱ式	口縁部外面円形浮文	E-276
64	277	土師器 S字甕	97Ab	検出Ⅰ VA1s	12.4	－	4.9	松河戸Ⅰ式	C類（新）	E-277
64	278	土師器 S字甕	97Ab	検出Ⅰ VB1e	13.2	－	4.2	松河戸Ⅰ式	C類（新）	E-278
64	279	土師器 S字甕	97Ab	検出Ⅰ VB1e	12.0	－	2.9	松河戸Ⅰ式	C類（新）	E-279
64	280	土師器 S字甕	97Ab	検出Ⅰ VB2e	9.2	－	3.0	松河戸Ⅰ式	C類（古）	E-280
64	281	土師器 柳ケ坪型壺	96Ba	SD25	28.0	－	3.7	松河戸Ⅰ式		E-281
64	282	土師器 柳ケ坪型壺	97B	検出Ⅰ ⅣB15e	16.0	－	2.2	松河戸Ⅰ式		E-282
64	283	土師器 柳ケ坪型壺？	97Ab	検出Ⅰ VA1r	－	7.2	1.9	松河戸Ⅰ式	底部外面木葉痕	E-283
64	284	土師器 柳ケ坪型壺？	97Ab	検出Ⅰ VA2t	－	6.0	6.6	松河戸Ⅰ式	底部外面木葉痕	E-284
64	285	土師器 小型器台	97B	SK110	－	－	6.5	松河戸Ⅰ式		E-285
64	286	土師器 無透孔屈折脚高杯	97B	SD01	－	－	6.3	松河戸Ⅰ式		E-286
64	287	土師器 無透孔屈折脚高杯	97B	SD43	－	－	7.2	松河戸Ⅰ式		E-287
64	288	土師器 小型丸底鉢	97B	検出Ⅰ ⅣB19e	－	－	4.3	松河戸Ⅰ式		E-288
64	289	土師器 甕	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8b	21.0	－	5.0			E-289
64	290	須恵器 杯	97Ab	SK201	12.6	－	4.8	東山61号窯式		E-290

古　代

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　考	登録番号
65	291	須恵器 杯蓋B	96A	SB01(カマド部分)	14.4	－	3.5	O-10		E-291
65	292	須恵器 杯蓋B	96A	SB01(カマド部分)	18.6	－	－	O-10		E-292
65	293	須恵器 杯A	96A	SB01(カマド部分)	17.2	－	－	O-10		E-293
65	294	須恵器 盤B	96A	SB01(カマド部分)	18.8	10.0	3.0	O-10		E-294
65	295	須恵器 杯蓋B	96A	SB01	14.2	－	－	O-10		E-295
65	296	須恵器 杯蓋B	96A	SB01	－	－	－	O-10	内面にヘラ記号	E-296
65	297	須恵器 杯B	96A	SB01	－	10.4	－	O-10		E-297
65	298	須恵器 杯A	96A	SB01(SK68)	12.5	6.2	4.2	O-10	底部外面にヘラ書き「大」	E-298
65	299	須恵器 杯A	96A	SB01(SK68)	12.6	9.8	3.6	O-10		E-299
65	300	須恵器 椀B	96A	SB01(SK68)	15.7	8.2	6.0	O-10		E-300
65	301	須恵器 杯	96A	SB01(SK70)	12.8	－	－	O-10		E-301
65	302	須恵器 杯B	96A	SD08	14.5	10.7	3.8	O-10		E-302
65	303	須恵器 鉢	96A	SD08	－	15.8	－	O-10		E-303
65	304	須恵器 杯蓋B	96A	SD09	13.9	－	－	O-10		E-304
65	305	須恵器 杯蓋B	96A	SD09	19.2	－	－	O-10		E-305
65	306	須恵器 杯B	96A	SD09	－	11.0	－	O-10～IG-78		E-306
65	307	須恵器 杯B	96A	SD09	－	8.6	－	8世紀	美濃須衛窯産	E-307
65	308	須恵器 椀A	96A	SD09	12.8	6.3	4.7	O-10～IG-78		E-308
65	309	須恵器 椀B	96A	SD09	－	15.8	－		底部外面にヘラ記号	E-309
65	310	須恵器 盤B	96A	SD09	－	10.0	－	O-10		E-310
65	311	須恵器 盤C	96A	SD09	－	11.1	－	O-10～IG-78		E-311
65	312	灰釉陶器 Ⅲ	96A	SD09	15.2	8.2	2.6	K-14		E-312
65	313	須恵器 小型短頸壺	96A	SD09	14.2	－	－	NN-32～O-10		E-313

挿図	番号	種類・器類		調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　考	登録番号
65	314	須恵器	杯蓋B	96A	SD10	16.0	—	3.1	O-10		E-314
65	315	須恵器	杯蓋B	96A	SD10	—	14.8	—	O-10		E-315
65	316	須恵器	横瓶ミニチュア	96A	SD10	—	—	—	K-7		
65	317	須恵器	把手付片口鉢	96A	SD10	25.0	8.0	19.5	8世紀後	内外面に黄土塗布	E-317
66	318	灰釉陶器	輪花段皿	96Ba	SD17	17.0	—	—	K-90		E-318
66	319	須恵器	盤C	96Ba	SD17	—	10.4	—	O-10～IG-78		E-319
66	320	灰釉陶器	皿	96Ba	SD24	17.2	7.6	2.9	K-90		E-320
66	321	須恵器	盤B	96Ba	SD27	—	9.8	—	O-10		E-321
66	322	須恵器	甑	96Ba	SD27	12.8	—	—	8世紀	内外面に黄土塗布	E-322
66	323	須恵器	杯蓋B	96Ba	SD28	17.0	—	—	O-10		E-323
66	324	須恵器	短頸鉢	96Ba	SD28	24.7	14.3	17.2	O-10	内外面に黄土塗布	E-324
66	325	須恵器	杯H杯身	97B	SD02	16.0	—	—	H-50		E-325
66	326	須恵器	杯蓋B	97B	SD05	17.2	—	—	O-10		E-326
66	327	須恵器	盤B	97B	SD05	—	9.3	—	O-10		E-327
66	328	須恵器	把手付甕	97B	SD05	—	—	—	8世紀後	美濃須衛窯産	E-328
66	329	須恵器	把手付甕	97B	SD05	—	—	—	8世紀後	美濃須衛窯産	E-329
66	330	須恵器	杯蓋B	97B	SD09	13.8	—	—	I-25		E-330
66	331	須恵器	杯H杯蓋	97B	SD14	—	3.0	—	7世紀		E-331
66	332	須恵器	杯A	97B	SD14	12.9	6.6	4.1	O-10		E-332
66	333	須恵器	杯A	97B	SK09	12.2	6.9	4.2	I-41		E-333
66	334	須恵器	杯蓋B	97B	SK130	18.2	—	—	O-10		E-334
66	335	須恵器	合子	97Ca	SD11	13.5	11.7	3.7	I-25		E-335
66	336	須恵器	椀B	97Ca	SD17	17.6	10.6	6.1	O-10		E-336
66	337	須恵器	杯蓋B	97Cb	SD11	—	21.1	3.6	O-10		E-337
66	338	須恵器	杯蓋B	97Cb	SD11	—	—	—			E-338
66	339	須恵器	短頸壺の蓋	97Cb	SD11	12.6	—	—			E-339
66	340	須恵器	杯B	97Cb	SD11	14.8	11.0	3.8	O-10		E-340
66	341	須恵器	杯B	97Cb	SD11	15.9	11.7	3.9	O-10		E-341
66	342	須恵器	椀B	97Cb	SD11	19.0	—	—	O-10		E-342
66	343	須恵器	椀B	97Cb	SD11	21.8	—	—	O-10		E-343
66	344	須恵器	盤B	97Cb	SD11	15.8	9.0	2.8	O-10		E-344
66	345	須恵器	盤B	97Cb	SD11	21.5	11.1	3.3	O-10		E-345
66	346	灰釉陶器	長頸瓶	97Cb	SD07	—	8.0	—	I-78～K-14		E-346
66	347	須恵器	甕	97Cb	SK04	20.6	—	—	8世紀後	美濃須衛窯産	E-347
67	348	須恵器	杯蓋B	96A	古代包含層 ⅣB3o	—	—	—			E-348
67	349	須恵器	杯B	96A	古代包含層 ⅣB1r	17.4	—	—			E-349
67	350	須恵器	椀A	96A	古代包含層 ⅣB1r	12.6	—	—	8世紀後		E-350
67	351	須恵器	椀	96A	古代包含層 ⅣB2o	—	5.9	—		底部外面ヘラ記号	E-351
67	352	須恵器	盤B	96A	古代包含層 ⅣB2p	—	9.6	—	IG-78		E-352
67	353	須恵器	甕	96A	古代包含層 ⅣB2q	—	14.4	—	8世紀中		E-353
67	354	須恵器	把手付甕	96A	古代包含層 ⅣB3p	—	—	—	Ⅳ-2～3	美濃須衛窯産	E-354
67	355	須恵器	長頸瓶	96A	古代包含層 ⅣB2o	—	—	—	O-10		E-355
67	356	灰釉陶器	広口瓶	96A	古代包含層 ⅣB1q	—	13.9	—	K-90		E-356
67	357	須恵器	杯B	96Ba	古代包含層 ⅣB7d	—	7.9	—	IG-78		E-357
67	358	須恵器	杯B	96Ba	古代包含層 ⅣB8d	—	11.5	—	8世紀後		E-358
67	359	灰釉陶器	小瓶	96Ba	古代包含層 ⅣA9t	4.1	6.1	—	K-90		E-359
67	360	須恵器	長頸瓶	96Ba	古代包含層 ⅣB9a	—	9.6	—	K-90		E-360
67	361	須恵器	長頸瓶	96Ba	古代包含層 ⅣA9t	12.9	—	—	K-90		E-361
67	362	灰釉陶器	皿	97Ca	古代包含層 ⅣA6q	—	5.3	—	K-90		E-362
67	363	灰釉陶器	椀	97Ca	古代包含層 ⅣA6q	—	8.0	—	K-90		E-363
67	364	灰釉陶器	段皿	97Ca	古代包含層 ⅣB5d	13.4	6.5	—	K-90		E-364
67	365	須恵器	杯蓋B	96A	検出Ⅰ ⅣB1m	21.4	—	—			E-365
67	366	須恵器	杯B	96A	検出Ⅰ ⅣB2g	—	11.3	—			E-366
67	367	須恵器	椀A	96A	検出Ⅰ ⅣB1p	15.3	8.0	4.5			E-367
67	368	須恵器	椀B	96A	検出Ⅰ ⅣB4t	12.4	5.0	3.9	8世紀後		E-368
67	369	灰釉陶器	皿	96A	検出Ⅰ ⅣB5h	—	6.3	—	K-90		E-369
67	370	灰釉陶器	椀	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8c	—	6.8	—	丸石2	美濃窯	E-370
67	371	灰釉陶器	段皿	96Ca	検出Ⅰ VA1m	17.2	—	—			E-371
67	372	須恵器	杯A	96Ca	検出Ⅰ ⅣA20l	11.7	4.4	4.0	8世紀前		E-372
67	373	須恵器	杯B	96Ca	検出Ⅰ ⅣA19m	—	7.6	—		底部外面ヘラ記号	E-373
67	374	須恵器	盤B	96Cb	検出Ⅰ VA9l	16.0	—	—			E-374
67	375	須恵器	杯H杯身	96Cb	SD10	10.6	4.0	—	I-17		E-375
67	376	須恵器	三足盤	96E	検出Ⅰ ⅣB7o	20.0	—	—	K-14～K-90		E-376
67	377	須恵器	盤B	97Ab	検出Ⅰ ⅣA20r	—	—	—	8世紀	内面中央部に刻印	E-377
67	378	灰釉陶器	皿	97B	SD48	—	7.0	—	O-53	墨書	E-378
67	379	須恵器	椀A	97Ca	SD24	13.0	6.4	2.9			E-379

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	備　考	登録番号
67	380	灰釉陶器 椀	97Ca	検出Ⅰ ⅣA7q	−	7.0	−	O-53		E-380
67	381	須恵器 甕	97Ca	検出Ⅰ ⅣA9m	−	−	−	O-10		E-381
67	382	土師器 濃尾系甕	96A	SB01（カマド部分）	−	6.3	8.3	8世紀		E-382
67	383	土師器 濃尾系甕	96A	SB01（SK70）	16.6	8.5	−	8世紀		E-383
67	384	土師器 濃尾系甕	96A	SB02	14.0	6.3	−	8世紀		E-384
67	385	土師器 濃尾系甕	97Ca	SD11	−	10.0	19.3	8世紀		E-385
67	386	土師器 杯	96Ba	古代包含層 ⅣB7d	11.0	3.6	−	8世紀	都城形の土師器を模倣	E-386
67	387	土師器 甕	96D	検出Ⅰ ⅥA6g	22.4	3.0	−	8世紀		E-387
67	388	製塩土器	96A	検出Ⅰ ⅣB1m	−	−	3.1	8世紀	知多式4類	E-388
67	389	製塩土器	96A	検出Ⅰ ⅣB1m	−	−	2.9	8世紀	知多式4類	E-389
67	390	製塩土器	97B	SD01下層	−	−	4.2	8世紀	知多式4類	E-390

中世以降

挿図	番号	種類・器類	調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時期	備　考	登録番号
68	391	灰釉系陶器 皿	96A	SK41	7.8	5.0	1.2	中世	東濃型大畑大洞(新)窯式	E-391
68	392	灰釉系陶器 皿	96A	SK45	8.7	5.2	1.9	中世	尾張型第6型式	E-392
68	393	灰釉系陶器 椀	96A	SK45	−	6.7	−	中世	東濃型白土原窯式	E-393
68	394	知多窯産陶器 壺	96A	SD01	19.3	−	−	中世	7型式	E-394
68	395	灰釉系陶器	96Ba	SD01	10.4	−	−	中世		E-395
68	396	灰釉系陶器 椀	96Ba	SD10	14.3	−	−	中世	尾張型第6型式	E-396
68	397	灰釉系陶器 皿	96Ba	SD18	−	4.8	−	中世	尾張型第4型式	E-397
68	398	灰釉系陶器 椀	96Ba	SD21	16.4	−	−	中世	尾張型第5型式	E-398
68	400	灰釉系陶器 椀	96Ca	SX01	−	8.0	−	中世	尾張型第5型式	E-400
68	401	灰釉系陶器 椀	96Ca	SX01	−	8.4	−	中世	東濃型脇之島窯式	E-401
68	402	灰釉系陶器 椀	96Ca	SX01	−	4.0	−	中世	東濃型生田窯式	E-402
68	403	古瀬戸窯産陶器 擂鉢	96Ca	SX01	31.2	−	−	中世	後Ⅳ(古)期	E-403
68	404	灰釉系陶器 椀	96Ca	SX02	−	6.0	−	中世	東濃型白土原窯式	E-404
68	405	灰釉系陶器 椀	96Ca	SX03	−	6.0	−	中世	東濃型明和窯式	E-405
68	406	古瀬戸窯産陶器 四耳壺	96Ca	SX03	−	−	−	中世	中Ⅰ期か中Ⅱ期、印花	E-406
68	407	灰釉系陶器 椀	96Ca	SD10	−	4.7	−	中世	東濃型明和窯式	E-407
68	408	灰釉系陶器 椀	96Cb	SX01	−	7.4	−	中世	尾張型第7型式、墨書	E-408
68	409	灰釉系陶器 椀	96Cb	SX01	−	5.2	−	中世	東濃型大畑大洞(古)窯式、墨書	E-409
68	410	灰釉系陶器 椀	96Cb	SX02	−	3.0	−	中世	東濃型大洞東窯式	E-410
68	411	灰釉系陶器 椀	96Cb	SX02	−	3.8	−	中世	東濃型白土原窯式	E-411
68	412	灰釉系陶器 椀	96Cb	SX03	14.5	−	−	中世	東濃型大畑大洞(古)窯式	E-412
68	413	灰釉系陶器 椀	96Cb	SX04	−	6.2	−	中世	尾張型第6型式	E-413
68	414	灰釉系陶器 皿	96D	SD02	−	4.8	−	中世	尾張型第5型式	E-414
68	415	灰釉系陶器 皿	96D	SD02	7.5	4.7	1.1	中世	東濃型生田窯式	E-415
68	416	陶器	96E	SD10	10.4	−	−	中世		E-416
68	417	灰釉系陶器 椀	96E	SK13	14.5	5.2	6.1	中世	尾張型第6型式、墨書	E-417
68	418	灰釉系陶器	96E	SD03	−	3.8	−	中世		E-418
68	419	灰釉系陶器 皿	97Ab	SD03	9.8	4.4	1.6	中世		E-419
68	420	灰釉系陶器 椀	97B	SD09	−	7.5	−	中世	尾張型第5型式	E-420
68	421	灰釉系陶器 椀	97B	SK68	15.6	7.3	5.3	中世	尾張型第5型式	E-421
68	422	古瀬戸窯産陶器	97B	SD01	9.6	4.3	2.5	中世	大窯Ⅱ期	E-422
68	423	灰釉系陶器 椀	97B	SD13	−	9.0	−	中世	尾張型第4型式	E-423
68	424	灰釉系陶器 椀	97B	SD48	−	7.6	−	中世	尾張型第6型式	E-424
68	425	灰釉系陶器 椀	97B	SD48	−	7.8	−	中世	尾張型第6型式	E-425
68	399	陶器	96Ba	SD34	−	6.6	−	近世		E-399
68	426	灰釉系陶器 椀	97B	SD78	14.0	5.8	5.5	中世	尾張型第5型式	E-426
68	427	灰釉系陶器 皿	97B	SX11	8.4	4.7	2.0	中世	東濃型窯洞か白土原窯式	E-427
68	428	灰釉系陶器 椀	97B	SX11	19.0	−	−	中世	尾張型第4型式	E-428
68	429	灰釉系陶器 椀	97B	SX11	−	7.6	−	中世	尾張型第5型式	E-429
68	430	灰釉系陶器 椀	97B	SX11	−	7.6	−	中世	尾張型第5型式	E-430
68	431	灰釉系陶器 椀	97B	SX11	15.5	−	−	中世	尾張型第6型式	E-431
68	432	灰釉系陶器 椀	97Ca	SX11	12.5	5.0	3.6	中世	東濃型脇之島窯式	E-432
69	433	灰釉系陶器 椀	96A	島畑1下層 ⅣB3o	−	5.5	−	中世	東濃型白土原窯式	E-433
69	434	灰釉系陶器 椀	96A	島畑1下層 ⅣB3o	14.1	5.8	6.0	中世	東濃型明和窯式	E-434
69	435	灰釉系陶器 椀	96A	島畑1下層 ⅣB2q	−	4.3	−	中世	東濃型大畑大洞(古)窯式	E-435
69	436	灰釉系陶器 椀	96A	島畑1下層 ⅣB1o	−	4.6	1.9	中世	東濃型大畑大洞(古)窯式	E-436
69	437	灰釉系陶器 椀	96A	島畑1下層 ⅣB3o	13.1	4.9	5.0	中世	東濃型大畑大洞(古)窯式	E-437
69	438	灰釉系陶器 椀	96A	島畑1下層 ⅣB1o	13.0	−	2.7	中世	東濃型脇之島窯式	E-438
69	439	灰釉系陶器 椀	97B	島畑3下層 ⅣB6h	13.2	5.0	2.0	中世	東濃型生田窯式	E-439
69	440	灰釉系陶器	97B	島畑3下層 ⅣB9h	7.8	5.2	1.1	中世		E-440

挿図	番号	種類・器類		調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　　考	登録番号
69	441	内耳鍋		97B	島畑3下層 ⅣB7h	29.8	−	−	近世	B類	E-441
69	442	灰釉系陶器	椀	96Cb	島畑4下層 VA10m	−	5.0	−	中世	東濃型明和窯式、墨書	E-442
69	443	灰釉系陶器	Ⅲ	96Cb	島畑4下層 VA7m	8.1	5.1	0.9	中世		E-443
69	444	灰釉系陶器	Ⅲ	96D	島畑4下層 ⅥA2m	7.9	4.9	1.0	中世	東濃型大洞東窯式	E-444
69	445	灰釉系陶器	Ⅲ	96Cb	島畑4下層 VA10m	8.2	4.2	1.0	中世	東濃型脇之島窯式	E-445
69	446	瀬戸窯産陶器	端反Ⅲ	96Cb	島畑4下層 VA10m	12.2	7.8	2.6	近世	口縁部2類	E-446
69	447	美濃窯産陶器	蓋	96D	島畑4下層 ⅥA1m	4.1	−	0.9	近世		E-447
69	448	美濃窯産陶器	丸椀	96D	島畑4下層 ⅥA1n	−	4.0	−	近世		E-448
69	449	灰釉系陶器	椀	96D	島畑5下層 ⅥA1j	−	5.2	−	中世	東濃型明和窯式	E-449
69	450	灰釉系陶器	Ⅲ	96D	島畑5下層 ⅥA3i	7.8	4.2	1.1	中世	東濃型大畑大洞窯式	E-450
69	451	灰釉系陶器	椀	96D	島畑5下層 ⅥA5k	−	3.8	−	中世	東濃型大洞東窯式	E-451
69	452	灰釉系陶器	椀	96D	島畑5下層 ⅥA3k	−	4.0	−	中世	東濃型脇之島窯式	E-452
69	453	灰釉系陶器	椀	96D	島畑5下層 ⅥA5k	13.1	5.0	2.6	中世	東濃型脇之島窯式	E-453
69	454	灰釉系陶器	Ⅲ	96Ba	島畑6下層 ⅣB8c	8.4	5.0	1.6	中世	尾張型第6型式	E-454
69	455	灰釉系陶器	Ⅲ	96Ba	島畑6下層 ⅣB8c	8.4	5.8	1.6	中世	尾張型第6型式	E-455
69	456	灰釉系陶器	椀	96Ba	島畑6下層 ⅣB8c	13.4	4.8	4.6	中世	東濃型大畑大洞(新)窯式	E-456
69	457	灰釉系陶器	Ⅲ	96Ba	島畑6下層 ⅣB6e	8.0	4.0	1.4	中世	東濃型大畑大洞窯式	E-457
69	458	灰釉系陶器		96Ba	島畑6下層 ⅣB9a	−	5.1	−	中世	東濃型大畑大洞窯式	E-458
69	459	灰釉系陶器	Ⅲ	97B	島畑6下層 ⅣB9d	7.7	6.4	0.9	中世	東濃型大畑大洞窯式	E-459
69	460	灰釉系陶器	Ⅲ	97B	島畑6下層 ⅣB9d	7.8	4.6	1.3	中世	東濃型大洞東窯式	E-460
69	461	灰釉系陶器	Ⅲ	96Ba	島畑6下層 ⅣB6e	8.1	5.2	1.6	中世	東濃型大洞東窯式	E-461
69	462	灰釉系陶器	Ⅲ	96Bb	島畑6下層 ⅣA15q	9.4	6.0	1.4	中世	東濃型白土原窯式	E-462
69	463	灰釉系陶器	Ⅲ	96Bb	島畑6下層 ⅣA19o	8.2	4.6	1.2	中世	東濃型大洞東窯式	E-463
69	464	灰釉系陶器	椀	96Bb	島畑6下層 ⅣA14p	12.0	−	−	中世	東濃型生田窯式	E-464
69	465	灰釉系陶器	椀	97B	島畑9下層 ⅣB17c	−	8.2	−	中世	尾張型第5型式	E-465
69	466	灰釉系陶器	椀	97B	島畑9下層 ⅣA17t	15.2	−	−	中世	尾張型第6型式	E-466
69	467	灰釉系陶器	椀	97B	島畑9下層	−	4.8	−	中世	尾張型第7型式	E-467
69	468	灰釉系陶器	椀	97B	島畑9下層	16.0	6.4	5.2	中世	東濃型白土原窯式	E-468
69	469	灰釉系陶器	椀	97B	島畑9下層 ⅣB14b	−	6.0	−	中世	東濃型大畑大洞(新)窯式	E-469
69	470	灰釉系陶器	椀	97B	島畑9下層 ⅣB15d	8.5	5.4	1.5	中世	東濃型生田窯式	E-470
69	471	灰釉系陶器	椀	97Ab	島畑10下層 VA3q	−	8.3	−	中世	尾張型第5型式	E-471
69	472	灰釉系陶器	椀	97Ab	島畑10下層 ⅣA20t	−	6.1	−	中世	尾張型第6型式	E-472
69	473	灰釉系陶器		97Ab	島畑10下層 VA3q	7.6	4.8	1.5	中世		E-473
69	474	灰釉系陶器	Ⅲ	97B	島畑11下層 ⅣB16f	8.3	4.6	2.2	中世	尾張型第5型式	E-474
69	475	灰釉系陶器	椀	97B	島畑11下層 ⅣB19e	11.0	−	−	中世	東濃型脇之島窯式	E-475
69	476	灰釉系陶器	椀	97B	島畑11下層 ⅣB13e	12.4	4.8	2.3	中世	東濃型生田窯式	E-476
69	477	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB7o	9.8	7.2	1.7	中世	尾張型第6型式	E-477
69	478	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB10m	7.5	4.2	1.4	中世	東濃型白土原窯式	E-478
69	479	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB10n	8.1	5.2	1.6	中世	東濃型白土原窯式	E-479
69	480	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB11m	8.2	4.6	1.1	中世	東濃型白土原窯式	E-480
69	481	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層	9.2	6.3	1.2	中世	東濃型明和窯式	E-481
69	482	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB11n	6.8	4.6	1.0	中世		E-482
69	483	灰釉系陶器	椀	96E	島畑Tg下層 ⅣB11n	9.0	−	−	中世	東濃型生田窯式	E-483
69	484	灰釉系陶器	椀	96E	島畑Tg下層 ⅣB9n	−	5.6	−	中世	東濃型大畑大洞(古)窯式	E-484
69	485	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB7o	8.6	5.7	1.2	中世	東濃型大畑大洞(新)窯式、墨書	E-485
69	486	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB8o	7.4	4.8	0.9	中世		E-486
69	487	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB10o	8.1	5.0	0.8	中世	東濃型大洞東窯式	E-487
69	488	灰釉系陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB9n	7.9	5.0	1.0	中世	東濃型脇之島窯式	E-488
69	489	古瀬戸窯産陶器	緑釉Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB7o	10.0	5.0	2.2	中世	後Ⅲ期	E-489
69	490	古瀬戸窯産陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層	9.6	4.4	2.5	中世	大窯Ⅰ期	E-490
69	491	古瀬戸窯産陶器	Ⅲ	96E	島畑Tg下層 ⅣB18h	9.6	5.0	2.1	中世	大窯Ⅰ期	E-491
69	492	灰釉系陶器	椀	96E	島畑Tg下層 ⅣB16j	−	5.6	−	中世	東濃型白土原窯式	E-492
69	493	灰釉系陶器	椀	96E	島畑Tg下層 ⅣB8k	−	4.8	−	中世		E-493
69	494	灰釉系陶器	椀	96E	島畑Tg下層 ⅣB11j	−	4.0	−	中世	東濃型大畑大洞窯式	E-494
69	495	灰釉系陶器	椀	96E	島畑Tg下層	−	−	−	中世	尾張型第4型式、見込みに線刻	E-495
69	496	灰釉系陶器	椀	96Ca	畦畔基部 ⅣA19n	12.5	4.9	3.1	中世	東濃型脇之島窯式	E-496
70	497	美濃窯産陶器	壺？	96A	ST02	10.0	−	−	近世		E-497
70	498	美濃窯産陶器		96A	ST04	−	4.0	−	近世		E-498
70	499	陶器		96A	ST02	−	−	−	近世		E-499
70	500	陶器		96A	ST01	10.8	5.0	2.0	近世		E-500
70	501	伊勢型鍋		96Bb	旧水田 ⅣA16p	36.5	−	−	中世		E-501
70	502	古瀬戸窯産陶器	壺	96Bb	旧水田 ⅣA18n	15.6	−	−	中世	後Ⅲ期かⅣ期	E-502
70	503	陶器		96Bb	旧水田 ⅣA18n	26.5	−	−	中世		E-503
70	504	古瀬戸窯産陶器	緑釉Ⅲ	96Bb	旧水田	8.6	3.0	1.6	中世	大窯Ⅰ期	E-504
70	505	瀬戸窯産陶器	椀	96Ba	旧水田	7.9	3.8	2.1	近世		E-505
70	506	陶器	菊Ⅲ	96Cb	旧水田 VA10k	13.0	8.0	3.8	近世		E-506

挿図	番号	種類・器類		調査区	遺構・出土地	口径(cm)	底径(cm)	器高(cm)	時　期	備　考	登録番号
70	507	陶器		96Cb	旧水田 VA13m	9.0	4.8	2.4	近世		E-507
70	508	灰釉系陶器	椀	96D	旧水田 VA16k	12.8	3.8	3.6	中世	東濃型脇之島窯式	E-508
70	509	焙烙		96D	ST01	36.9	−	−	近世以降	Ⅰ−1類	E-509
70	510	瀬戸窯産陶器	椀	96D	旧水田 VA17l	−	3.9	−	近世		E-510
70	511	瀬戸窯産陶器		96D	旧水田 VA16k	15.6	−	−	近世		E-511
70	512	灰釉系陶器	皿	96E	旧水田 ⅣB15i	9.2	5.1	1.8	中世	東濃型窯洞窯式	E-512
70	513	灰釉系陶器	皿	96E	旧水田 ⅣB9k	8.9	5.0	2.2	中世	尾張型第6型式、墨書	E-513
70	514	灰釉系陶器	皿	96E	旧水田 ⅣB13i	8.8	5.7	1.7	中世	東濃型明和窯式	E-514
70	515	灰釉系陶器	皿	96E	旧水田 VB2i	8.2	5.2	1.1	中世		E-515
70	516	灰釉系陶器	皿	96E	旧水田 VB3i	8.0	7.8	1.0	中世		E-516
70	517	古瀬戸窯産陶器	卸皿	96E	旧水田	−	−	−	中世	後期	E-517
70	518	内耳鍋		96E	旧水田 ⅣB18i	−	−	−	近世		E-518
70	519	瀬戸窯産陶器	椀	96E	旧水田 ⅣB16i	8.4	−	−	近世		E-519
70	520	瀬戸窯産陶器	椀	96E	旧水田 ⅣB16i	−	4.4	−	近世		E-520
70	521	陶器		96E	旧水田 ⅣB11l	6.8	6.2	2.7	近世		E-521
70	522	美濃窯産陶器	椀	96E	旧水田 ⅣB14g	9.1	−	−	近世		E-522
70	523	美濃窯産陶器		97B	旧水田 ⅣB18c	−	−	−	近世		E-523
70	524	瀬戸窯産陶器	皿	97B	旧水田 ⅣA15r	7.2	5.5	1.4	近世		E-524
70	525	陶器		97Aa	旧水田 VA5o	11.0	6.4	2.3	近世以降		E-525
70	526	磁器	紅皿	96Bb	旧水田 ⅣA11r	4.8	2.0	1.4	近世		E-526
70	527	磁器	紅皿	96Cb	旧水田 VA14k	4.4	−	−	近世		E-527
70	528	磁器	紅皿	96Ca	旧水田 VA1n	4.7	1.2	1.2	近世		E-528
70	529	土師質	皿	96Bb	島畑7下層 ⅣA19o	7.8	4.4	1.6	中世～近世	ロクロ成形	E-529
70	530	土師質	皿	96Cb	旧水田 VA14l	3.2	−	−	中世～近世	非ロクロ成形	E-530
70	531	土師質	皿	96Ca	島畑8下層 VA2l	4.2	−	−	中世～近世	非ロクロ成形	E-531
70	532	土師質	皿	96E	島畑Tg下層 ⅣB8o	6.4	4.6	0.7	中世～近世	非ロクロ成形	E-532
70	533	土師質	皿	96E	島畑Tg下層 ⅣB7n	8.0	5.8	0.8	中世～近世	非ロクロ成形	E-533
70	534	土師質	皿	96E	島畑Tg下層 ⅣB7o	7.2	4.7	1.0	中世～近世	非ロクロ成形	E-534
70	535	土師質	皿	96E	島畑Tg下層 ⅣB7o	7.6	5.3	1.4	中世～近世	非ロクロ成形	E-535
70	536	土師質	皿	96E	島畑Tg下層 ⅣB11o	9.2	5.0	1.2	中世～近世	非ロクロ成形	E-536
70	537	土師質	皿	96E	島畑Tg下層	5.5	4.2	0.7	中世～近世	非ロクロ成形	E-537
70	538	陶器	水滴	96D	旧水田 ⅥA3m	奥行 4.5	幅 2.6	2.4	近世		E-538
70	539	陶器	戸車	96E	旧水田 ⅣB10m	直径 5.6		厚さ 1.3	近世		E-539
70	540	磁器	絵具皿	96A	ST06	奥行 2.9	幅 1.7	0.7	近代		E-540
70	541	磁器	絵具皿	96Bb	旧水田	奥行 2.9	幅 1.8	0.7	近代		E-541
70	542	白磁	椀	97B	旧水田 ⅣA19t	−	−	2.0	中世	大宰府編年Ⅳ類	E-542
70	543	白磁	椀	97B	島畑3下層 ⅣB9h	−	−	2.8	中世	大宰府編年Ⅳ類	E-543
70	544	白磁	椀	96A	島畑1下層 ⅣB2n	−	6.6	4.0	中世		E-544
70	545	青磁	椀	96D	島畑5下層 ⅥA1j	13.2	−	2.0	中世	龍泉窯系D類	E-545
70	546	青磁	椀	97B	島畑11下層 ⅣB14e	16.2	−	2.6	中世	龍泉窯系B1類	E-546
70	547	青磁	椀	96E	旧水田 ⅣB11i	15.9	−	5.0	中世	同安窯系Ⅰ類	E-547

土　錘

挿図	番号	種別	調査区	遺構・出土地	分類1	分類2	分類3	分類4	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	残存状態	備考	登録番号
71	548	土錘	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8c	A	A	A	／	(4.6)	1.7	0.4	11.5	両端少欠損		E-548
71	549	土錘	96Ba	検出Ⅰ ⅣB10a	A	A	A	／	(5.4)	2.0	0.5	18.6	両端少欠損		E-549
71	550	土錘	96Bb	検出Ⅰ ⅣA14q	A	A	A	B	3.5	1.5	0.3	6.7	完形		E-550
71	551	土錘	96Bb	検出Ⅰ ⅣA13p	A	A	A	B	(4.2)	1.4	0.4	(6.6)	両端少欠損		E-551
71	552	土錘	96Bb	検出Ⅰ ⅣA15o	A	A	A	B	4.0	1.3	0.2	6.6	完形		E-552
71	553	土錘	96Bb	検出Ⅰ ⅣA17m	A	A	A	B	4.0	1.5	0.3	7.2	片端少欠損		E-553
71	554	土錘	96E	東壁トレンチ	A	A	A	／	4.7	1.6	0.4	11.1	片端少欠損		E-554
71	555	土錘	96E	検出Ⅰ ⅣB11l	A	A	A	／	4.0	1.5	0.3	8.8	片端少欠損		E-555
71	556	土錘	96E	検出Ⅰ ⅣB13j	A	A	A	B	3.8	1.2	0.3	5.2	完形		E-556
71	557	土錘	97B	検出Ⅰ ⅣB10g	A	A	B	B	2.3	1.5	0.3	4.4	片端少欠損		E-557
71	558	土錘	97B	検出Ⅰ ⅣB15c	A	A	A	／	4.4	1.8	0.4	10.5	両端少欠損		E-558
71	559	土錘	96Td	島畑Tdトレンチ①	A	A	A	B	4.4	1.8	0.5	16.7	完形		E-559
71	560	土錘	96Ca	検出Ⅰ VA5m	A	B	A	A	3.0	1.2	0.2	4.5	片端少欠損		E-560
71	561	土錘	96D	検出Ⅰ ⅥA2m	A	B	A	B	3.6	1.3	0.3	5.3	片端少欠損		E-561
71	562	土錘	96D	検出Ⅰ ⅥA4l	A	B	A	／	(4.3)	1.0	0.3	(3.8)	1/3欠損		E-562
71	563	土錘	96D	検出Ⅰ ⅥA6h	A	B	A	／	3.3	1.0	0.4	3.6	片端少欠損	ひもずれ痕	E-563
71	564	土錘	97Ab	検出Ⅰ VA2s	A	B	A	／	(3.8)	1.5	0.4	7.1	両端少欠損		E-564
71	565	土錘	97B	SD12	A	B	A	／	(4.8)	1.2	0.4	5.4	両端少欠損		E-565
71	566	土錘	97Cb	検出Ⅰ ⅣA14m	A	B	A	A	4.1	1.3	0.3	7.0	完形		E-566
71	567	土錘	96Ti	島畑Tiトレンチ②	A	B	A	A	4.5	1.8	0.5	13.1	片端少欠損		E-567

挿図	番号	種別	調査区	遺構・出土地	分類1	分類2	分類3	分類4	長さ(cm)	幅(cm)	孔径(cm)	重さ(g)	残存状態	備考	登録番号
71	568	土錘	96Ba	検出Ⅰ ⅣB9c	B	A	A	A	(5.4)	2.3	0.6	25.8	片端少欠損		E-568
71	569	土錘	96Cb	検出Ⅰ VA8l	B	A	B	／	5.6	3.0	0.6	44.0	完形		E-569
71	570	土錘	97Ca	SK15	B	A	A	B	5.4	2.4	0.6	23.2	片端少欠損		E-570
71	571	土錘	96Ca	検出Ⅰ VA5m	A	B	A	A	4.6	1.8	0.3	16.5	片端少欠損	陶質	E-571

人形・玩具類

挿図	番号	種別	調査区	遺構・出土地	材質	種別	形状	高(cm)	幅(cm)	奥行(cm)	備考	登録番号
72	572	土製品	96A	ST01	土師質土器	鈴		2.6	2.4	2.2		E-572
72	573	土製品	96Ca	旧水田 VA1n	土師質土器	人形	犬	2.8	1.7	2.2	底孔径0.3cm、奥行1.9cm	E-573
72	574	土製品	96A	ST01	土師質土器	人形	鳩	1.4	1.1	4.8	底部	E-574
72	575	土製品	96A	ST01	土師質土器	人形	鳩	1.9	1.9	2.9	尾部	E-575
72	576	土製品	96A	ST01	土師質土器	人形	鳩	1.9	1.2	3.6	尾部	E-576
72	577	土製品	96E	旧水田 ⅣB13i	軟質陶器	人形	大黒天	1.4	1.9	0.9	米俵部	E-577
72	578	土製品	96E	旧水田 ⅣB11l	軟質陶器	人形	大黒天	1.2	2.5	0.9	米俵部	E-578
72	579	土製品	96Cb	旧水田 VA8m	土師質土器	人形	布袋	2.1	1.7	1.2	頭部	E-579
72	580	土製品	96A	検出Ⅰ ⅣB1m	土師質土器	不明		0.4	1.1	1.6		E-580
72	581	土製品	96Ca	検出Ⅰ VA3m	陶器	ミニチュア	土瓶	2.1	2.8	1.4	注口部、施釉	E-581
72	582	土製品	97B	北壁トレンチ	軟質陶器	ミニチュア	碗	1.0	2.5	－	底部、施釉	E-582
72	583	土製品	96D	旧水田 ⅥA3m	陶器	ミニチュア	碗	1.0	3.9	－	底部、施釉	E-583
72	584	土製品	96E	東壁トレンチ	土師質土器	人形	天神	2.9	1.5	1.5	頭部、施釉	E-584
72	585	土製品	97B	旧水田 ⅣB8g	磁器	人形	達磨	2.8	2.1	1.9	底孔径0.4cm、奥行2.1cm	E-585

加工円盤類・陶丸

挿図	番号	種別	調査区	遺構・出土地	分類	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	備考	登録番号
73	586	加工円盤	96Ba	SD34	Aa	2.2	2.1	1.0	6.0		E-586
73	587	加工円盤	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8c	Aa	2.5	2.3	1.3	8.4		E-587
73	588	加工円盤	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8e	Aa	2.6	2.3	1.1	7.5		E-588
73	589	加工円盤	96Ca	SX01	Aa	2.9	2.3	0.8	8.3		E-589
73	590	加工円盤	96A	検出Ⅰ ⅣB3r	B1	2.5	2.2	0.9	4.8		E-590
73	591	加工円盤	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8b	B2	2.8	2.6	0.9	8.5		E-591
73	592	加工円盤	96Ca	検出Ⅰ VA4l	Ca1	3.1	2.2	1.5	11.7		E-592
73	593	加工円盤	97Cb	検出Ⅰ ⅣA11n	Ca1	2.2	2.0	1.7	6.6		E-593
73	594	加工円盤	96A	ST04	Da	2.4	2.3	0.7	4.6		E-594
73	595	加工円盤	96Ca	検出Ⅰ VA2m	Da	2.1	1.7	0.9	3.9		E-595
73	596	加工円盤	96D	検出Ⅰ ⅥA2k	Da	2.6	2.3	0.9	6.1		E-596
73	597	加工円盤	97Ca	検出Ⅰ ⅣA6q	Da	2.1	1.9	0.8	3.8		E-597
73	598	加工円盤	96A	ST01	Dx2	3.0	2.5	0.9	11.4		E-598
73	599	加工円盤	96A	ST02	Dx2	2.4	2.3	0.8	6.3		E-599
73	600	加工円盤	96Bb	検出Ⅰ ⅣA12r	Dx2	3.0	2.3	0.6	6.8		E-600
73	601	加工円盤	96Ca	検出Ⅰ VA1n	Dx2	2.0	1.8	0.9	4.6		E-601
73	602	加工円盤	96Cb	検出Ⅰ VA7m	Dx2	2.4	2.2	0.7	4.7		E-602
73	603	加工円盤	96Cb	検出Ⅰ VA13l	Dx2	2.9	2.4	0.9	8.0		E-603
73	604	加工円盤	96E	検出Ⅰ ⅣB11n	Dx2	2.8	2.5	0.8	7.4		E-604
73	605	加工円盤	97B	検出Ⅰ ⅣB12e	Dx2	2.6	2.0	0.7	5.5		E-605
73	606	加工円盤	96A	検出Ⅰ ⅣB2m	Ca1	3.0	2.9	0.9	9.3	研磨痕	E-606
73	607	加工円盤	96D	検出Ⅰ ⅥA4l	Da	3.3	3.3	0.9	12.7	研磨痕	E-607
73	608	加工円盤	96E	東壁トレンチ ⅣB14j	Dx2	4.3	3.7	1.0	21.1	研磨痕	E-608
73	609	加工円盤	97B	検出Ⅰ ⅣB10g	Da	3.2	3.1	0.9	11.9	研磨痕	E-609
73	610	加工円盤	96A	ST01	Dc	3.5	3.3	0.7	10.5		E-610
73	611	加工円盤	97Ab	検出Ⅰ中央ベルト	Db1	5.2	5.1	1.3	45.2	線刻	
73	612	加工円盤	96Ti	検出Ⅰ VA13o	E	3.9	3.6	0.9	14.0		E-612
73	613	加工円盤	96Bb	検出Ⅰ ⅣA14p	Ca1	6.1	4.6	0.6	19.8		E-613
73	614	加工円盤	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8e	Ab	2.9	2.8	1.0	6.9	須恵器の杯蓋のつまみ部分	E-614
73	615	加工円盤	97Ab	検出Ⅰ ⅣA20r	Ab	2.7	2.5	1.0	6.9	須恵器の杯蓋のつまみ部分	E-615
73	616	加工円盤	96Bb	検出Ⅰ ⅣA13q	Ab	2.9	2.8	0.6	7.2	須恵器の杯蓋のつまみ部分	E-616
73	617	加工円盤	96A	検出Ⅰ ⅣB1q	Aa	3.0	2.6	0.8	13.5	方形	E-617
73	618	陶丸	97B	検出Ⅰ ⅣA17t		2.4	2.2		13.2	陶丸	E-618
73	619	陶丸	96E	検出Ⅰ ⅣB13j		1.9	1.8		5.6	陶丸	E-619
73	620	陶丸	96E	検出Ⅰ ⅣB11n		2.2	2.0		4.9	陶丸	E-620
73	621	陶丸	96E	検出Ⅰ ⅣB9o		1.9	1.9		3.0	陶丸	E-621

研磨痕土器類

挿図	番号	種別	調査区	遺構・出土地	分類	面数	回数	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	登録番号
74	622	研磨痕土器	96A	ST04	C1	2	2	4.9	4.9	0.7	33.9	E-622
74	623	研磨痕土器	96D	検出Ⅰ ⅥA1m	Da2	3	3	4.5	3.3	1.0	23.0	E-623
74	624	研磨痕土器	96Ca	検出Ⅰ ⅤA4m	Da2	2	2	6.5	3.8	0.9	32.9	E-624
74	625	研磨痕土器	97B	SD01	Da2	3	4	7.1	5.7	1.5	81.8	E-625
74	626	研磨痕土器	96A	検出Ⅰ ⅣB2q	Da2	2	6	7.7	5.3	1.2	57.5	E-626
74	627	研磨痕土器	97B	SD01	Da1	5	6	6.0	5.3	1.6	81.7	E-627
74	628	研磨痕土器	96A	検出Ⅰ ⅣB2q	Db	3	4	5.2	3.3	1.0	23.3	E-628
74	629	研磨痕土器	97B	SD01	E	2	3	6.7	3.6	0.9	26.8	E-629
74	630	研磨痕土器	96Bb	検出Ⅰ ⅣA13r	F	2	2	7.9	5.5	1.2	55.6	E-630

石製品類

挿図	番号	器種・形態	調査区	遺構・出土地	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備考	登録番号
77	1	石鏃 ⅠA1	96Bb	検出Ⅲ ⅣA19n	先端部・脚部欠	(1.7)	1.2	(0.3)	(0.4)	チャート	鋸歯状	S-01
77	2	石鏃 ⅠA1	97Ab	検出Ⅲ VB2d	完形	1.9	1.5	0.2	0.4	サヌカイト？	鋸歯状	S-02
77	3	石鏃 ⅠA1	97B	SK180	脚部欠	(1.6)	(1.3)	0.2	(0.3)	チャート	鋸歯状	S-03
77	4	石鏃 ⅠA2	97Ab	SD59	完形	2.0	1.4	0.3	0.4	下呂石		S-04
77	5	石鏃 ⅠA2	97B	検出Ⅱ ⅣA16r	半欠	1.4	(0.6)	0.2	(0.1)	チャート		S-05
77	6	石鏃 ⅠA2	97Ab	検出Ⅱ VA3s	完形	1.7	2.0	0.3	0.5	下呂石		S-06
77	7	石鏃 ⅠA2	97B	検出Ⅱ ⅣB15d	半欠	(1.3)	1.9	0.3	(1.0)	サヌカイト？		S-07
77	8	石鏃 ⅠA2	97Ab	検出Ⅱ VB2a	完形	1.8	1.5	0.3	0.5	下呂石		S-08
77	9	石鏃 ⅠA2	97Cb	検出Ⅱ ⅣA12n	先端部・脚部欠	(1.4)	(1.4)	0.3	(0.6)	下呂石		S-09
77	10	石鏃 ⅠA2	97B	SK506	先端部欠	(2.1)	1.6	0.4	0.7	下呂石		S-10
77	11	石鏃 ⅠA2	97B	検出Ⅱ VA18s	先端部欠	(1.9)	1.7	0.3	0.7	下呂石		S-11
77	12	石鏃 ⅠA2	97Ab	検出Ⅲ VA2t	完形	3.0	1.8	0.4	0.9	下呂石		S-12
77	13	石鏃 ⅠA2	97B	検出Ⅱ ⅣB18f	完形	2.7	1.5	0.3	1.0	下呂石		S-13
77	14	石鏃 ⅠA2	97Ab	検出Ⅱ VB3b	完形	2.7	1.9	0.5	1.6	下呂石		S-14
77	15	石鏃 ⅠA2	97B	検出Ⅱ VB1f	半欠	(1.5)	1.9	0.3	(1.0)	サヌカイト？		S-15
77	16	石鏃 ⅠA2	96Bb	検出Ⅱ ⅣA14r	ほぼ完形	2.7	1.8	0.4	1.5	下呂石		S-16
77	17	石鏃 ⅠA2	97B	SD95	完形	2.3	1.6	0.4	1.1	チャート		S-17
77	18	石鏃 ⅠA2	97B	検出Ⅱ ⅣB12c	先端部欠	(2.1)	1.7	0.3	(0.9)	サヌカイト？		S-18
77	19	石鏃 ⅠA3	97B	検出Ⅱ ⅣA18q	先端部欠	(2.1)	1.5	0.4	0.9	サヌカイト？		S-19
77	20	石鏃 ⅠA3	97Ca	検出Ⅱ ⅣA7t	完形	2.4	1.7	0.3	0.9	サヌカイト？		S-20
77	21	石鏃 ⅠA3	96Cb	検出Ⅲ VA12k	完形	2.2	1.6	0.4	1.2	サヌカイト？		S-21
77	22	石鏃 ⅠA3	97Ca	検出Ⅱ ⅣA6t	先端部欠	(1.9)	1.8	0.3	(0.9)	下呂石		S-22
77	23	石鏃 ⅠA3	97Ab	検出Ⅱ VB1a	先端部・基部欠	(1.5)	(0.9)	(0.3)	(0.4)	サヌカイト？		S-23
77	24	石鏃 ⅠA3	97B	SK402	先端部欠	(2.2)	1.7	0.3	(1.1)	下呂石		S-24
77	25	石鏃 ⅠA3	97Ab	検出Ⅱ VB2c	先端部欠	(2.3)	1.6	0.4	1.1	下呂石		S-25
78	26	石鏃 ⅠA4	96Bc	SX01	完形	1.8	1.4	0.4	0.7	チャート		S-26
78	27	石鏃 ⅠA4	96D	検出Ⅱ VA20l	完形	1.9	1.4	0.4	0.6	下呂石		S-27
78	28	石鏃 ⅠA4	97Ab	検出Ⅱ VB4a	完形	1.9	1.5	0.4	0.8	下呂石		S-28
78	29	石鏃 ⅠA4	96D	検出Ⅱ ⅥA3k	脚部端欠	1.9	1.5	0.3	0.8	サヌカイト？		S-29
78	30	石鏃 ⅠA4	96Cb	検出Ⅲ VA15l	先端部欠	(2.0)	1.5	0.4	0.9	下呂石		S-30
78	31	石鏃 ⅠA4	96Bb	SD25	完形	2.6	1.8	0.5	1.9	下呂石		S-31
78	32	石鏃 ⅠA4	97B	SD100	先端部・脚部欠	(2.4)	1.9	0.4	(1.5)	サヌカイト？		S-32
78	33	石鏃 ⅠA5	96D	検出Ⅱ VA17m	先端部欠	(2.7)	2.0	0.3	1.5	サヌカイト？		S-33
78	34	石鏃 ⅠA5	96Bb	検出Ⅲ ⅣA17o	完形	3.6	2.3	0.5	2.5	サヌカイト？		S-34
78	35	石鏃 ⅠB	97B	検出Ⅱ VB13f	完形	3.4	1.3	0.5	1.7	下呂石	再加工品	S-35
78	36	石鏃 ⅡC	96E	検出Ⅰ ⅣB7n	先端部欠	(3.3)	1.4	0.7	(2.7)	下呂石		S-36
78	37	石鏃 ⅡB	97B	検出Ⅰ ⅣB11d	先端部・脚部欠	(2.6)	1.7	0.6	(2.1)	チャート		S-37
78	38	石鏃 ⅡA1	96A	検出Ⅰ ⅢB20t	脚部端欠	(3.1)	1.3	0.5	1.6	下呂石		S-38
78	39	石鏃 ⅡA2	96Tg	島畑Tgトレンチ①	完形	3.6	1.4	0.5	2.3	サヌカイト？		S-39
78	40	石鏃 ⅡA2	97Ab	検出Ⅲ ⅣA19q	脚部端欠	(3.7)	1.7	0.7	(2.6)	下呂石		S-40
78	41	石鏃 ⅡA1	97B	SD93	脚部欠	3.3	1.3	0.4	1.6	下呂石		S-41
78	42	石鏃 ⅡA3	97Ab	検出Ⅱ ⅣB3f	脚部端欠	(2.5)	1.8	0.5	(1.7)	下呂石		S-42
78	43	石鏃 ⅡA4	96Ca	検出Ⅱ ⅣA2l	完形	4.7	1.5	0.8	4.3	サヌカイト？		S-43
78	44	石鏃 －	97B	検出Ⅲ ⅣB14a	完形	2.3	1.8	0.7	2.6	下呂石	未製品	S-44
78	45	石鏃 －	97Ca	SD27 東側盛土	完形	2.3	2.1	0.4	1.6	サヌカイト？	未製品	S-45
79	46	石錘	97B	検出Ⅱ ⅣB13a	完形	3.0	0.8	0.4	1.1	下呂石		S-46
79	47	石錘	96Cb	検出Ⅲ VA11k	頭部欠損	(2.5)	(0.7)	0.3	(0.5)	下呂石		S-47
79	48	石錘	97B	検出Ⅰ ⅣA16t	ほぼ完形	2.0	1.5	0.2	0.9	下呂石		S-48
79	49	石錘	97B	検出Ⅱ ⅣB13a	頭部のみ	(2.6)	2.3	0.4	(2.5)	チャート		S-49
79	50	スクレイパー	96Cb	検出Ⅲ VA8m	完形	4.1	4.5	0.6	8.3	下呂石		S-50

挿図	番号	器種・形態	調査区	遺構・出土地	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備考	登録番号
79	51	スクレイパー	96Th	島畑Thトレンチ②	完形	2.4	5.0	1.0	12.4	ホルンフェルス		S-51
79	52	スクレイパー	97B	検出Ⅲ ⅣA16r	ほぼ完形	3.0	2.8	0.7	4.7	下呂石		S-52
79	53	スクレイパー	97B	検出Ⅱ ⅣA16t	完形	3.8	7.1	0.7	20.4	サヌカイト？		S-53
79	54	スクレイパー	97B	SK180	完形	2.7	3.2	0.7	6.0	チャート		S-54
79	55	スクレイパー	97Ab	検出Ⅲ VB2d	完形	2.2	2.2	0.8	4.2	下呂石		S-55
79	56	スクレイパー	96Ba	検出Ⅰ ⅣB8b	完形	5.2	8.2	1.8	94.3	ホルンフェルス		S-56
80	57	粗製剝片石器	97B	SD14	完形	12.9	10.7	2.9	400.7	濃飛流紋岩		S-57
80	58	粗製剝片石器	97B	検出Ⅱ ⅣB19C	完形	9.3	10.5	2.1	254.4	ホルンフェルス		S-58
80	59	粗製剝片石器	97B	SD20	完形	8.1	7.3	2.2	154.0	ホルンフェルス		S-59
80	60	粗製剝片石器	97Ab	検出Ⅱ VA2r	完形	6.6	6.8	1.3	63.0	ホルンフェルス		S-60
81	61	打製石斧	96Ti	SB03	半欠	(9.5)	7.8	1.2	(102.5)	ホルンフェルス		S-61

挿図	番号	器種・形態	調査区	遺構・出土地	残存状況	a(cm)	b(cm)	L1(cm)	L2(cm)	W(cm)	S(cm)	重さ(g)	材質	備考	登録番号
81	62	礫石錘	96Ba	SX04	完形	1.1	2.9	5.3	5.2	4.4	2.0	60.3	濃飛流紋岩		S-62
81	63	礫石錘	97B	SK170	完形	2.1	3.3	6.3	5.9	4.8	1.4	66.5	角閃石安山岩		S-63
81	64	礫石錘	96Ba	SX04	完形	1.3	3.6	5.5	5.3	4.7	0.9	37.1	角閃石安山岩		S-64

挿図	番号	器種・形態	調査区	遺構・出土地	残存状況	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	材質	備考	登録番号
81	65	敲石球状	97B	SK171	完形	8.0	7.4	4.8	414.3	黒雲母角閃石安山岩		S-65
81	66	敲石棒状	97B	SK172	完形	10.3	6.2	3.3	317.1	濃飛流紋岩		S-66
81	67	敲石棒状	96Ba	SD25	完形	11.9	6.9	5.2	593.6	濃飛流紋岩		S-67
82	68	磨製石斧	97B	SK163	頭部のみ	(3.0)	(2.9)	(1.5)	(14.4)	蛇文岩		S-68
82	69	石製垂飾	96Ba	SX04	一部のみ	(1.9)	(1.4)	1.3	(4.3)	チャート		S-69
82	70	用途不明品	96Tg	島畑Tgトレンチ①	一部のみ	(7.9)	8.8	2.1	(185.7)	ホルンフェルス	粗製剝片石器か？	S-70
82	71	用途不明品	97B	検出Ⅱ ⅣA16s	一部のみ	(4.6)	(3.9)	0.8	(19.6)	ホルンフェルス		S-71
82	72	用途不明品	96Cb	検出Ⅲ VA13m	半欠	(2.1)	1.7	0.3	(1.0)	サヌカイト？	石鏃未製品か？	S-72
82	73	用途不明品	97B	SK172	完形	10.0	7.6	4.5	501.3	黒雲母角閃石安山岩		S-73
82	74	用途不明品	97B	SK172	完形	11.6	9.7	3.7	614.0	黒雲母角閃石安山岩		S-74
84	75	硯	97Ca	検出Ⅰ	一部のみ	(3.6)	(1.6)	(0.9)	(45.6)	泥質凝灰岩		S-75
84	76	砥石	96Ba	SD34	一部のみ	(2.8)	2.5	0.5	(41.8)	泥質凝灰岩		S-76
84	77	砥石	96E	検出Ⅰ ⅣB11n	一部のみ	(2.3)	0.7	(0.4)	(8.3)	泥質凝灰岩		S-77
84	78	小玉	97Ca	検出Ⅰ ⅣA7q	ほぼ完形	0.7	0.6	0.6	0.4	水晶		S-78
84	79	用途不明品	96D	ST01	一部のみ	(1.8)	0.4	0.3	(2.4)	珪質岩		S-79
84	80	用途不明品	96A	検出Ⅰ ⅣB2m	一部のみ	(0.9)	0.3	0.3	(1.0)	溶結凝灰岩		S-80

銭　貨

挿図	番号	種別	調査区	遺構・出土地	銭種	鋳造初年	西暦	時期	備　考	登録番号
85	1	銭貨	96Ca	SX01	元豊通寶	元豊元年	1078年	中世		M-01
85	2	銭貨	96A	ST06	寛永通寶	延宝２年	1674年	近世		M-02
85	3	銭貨	96A	ST02	寛永通寶	元禄13年	1700年	近世		M-03
85	4	銭貨	96D	旧水田 ⅥA4l	寛永通寶	享保２～19年	1717～1734年	近世	背「佐」文字	M-04
85	5	銭貨	97Ab	旧水田 ⅣA20q	寛永通寶	元文元年？	1736年？	近世	判読困難	M-05
85	6	銭貨	96E	旧水田 VB2q	寛永通寶	元文２年	1737年	近世		M-06
85	7	銭貨	96D	旧水田 VA17k	寛永通寶	元文２年	1737年	近世	「永寶」のみ残	M-07
85	8	銭貨	96D	島畑５下層 ⅥA2j	文久永寶	文久３年	1863年	近世		M-08

その他の金属関連資料

挿図	番号	種別	形状	調査区	遺構・出土地	長径(cm)	短径(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備　考	登録番号
86	9	含鉄遺物	棒状	96D	検Ⅰ ⅥA1m	3.5	1.0	0.5	2.7	鉄鏃？	M-09
86	10	含鉄遺物	棒状	97Ca	検Ⅰ ⅣB5d	5.5	1.5	0.6	3.9	鉄鏃？	M-10
86	11	銅製品(飾金具)		96A	検Ⅰ ⅣB2o	3.3	1.5	0.2	5.9		M-11
86	12	銅製品(留金具)		96D	検Ⅰ ⅣA4l	1.5	1.3	0.1	0.4		M-12
86	13	椀型鉄滓		96A	ST06	4.3	2.2	1.1	6.4		M-13
86	14	炉壁	扁平	96A	ST01	3.7	2.0	1.1	5.8	白色付着物	M-14
86	15	流動滓	礫状	96Ca	SX01	2.5	1.8	0.8	4.4		M-15
86	16	椀型鉄滓		97B	検Ⅰ	9.1	6.8	3.2	190.0		M-16

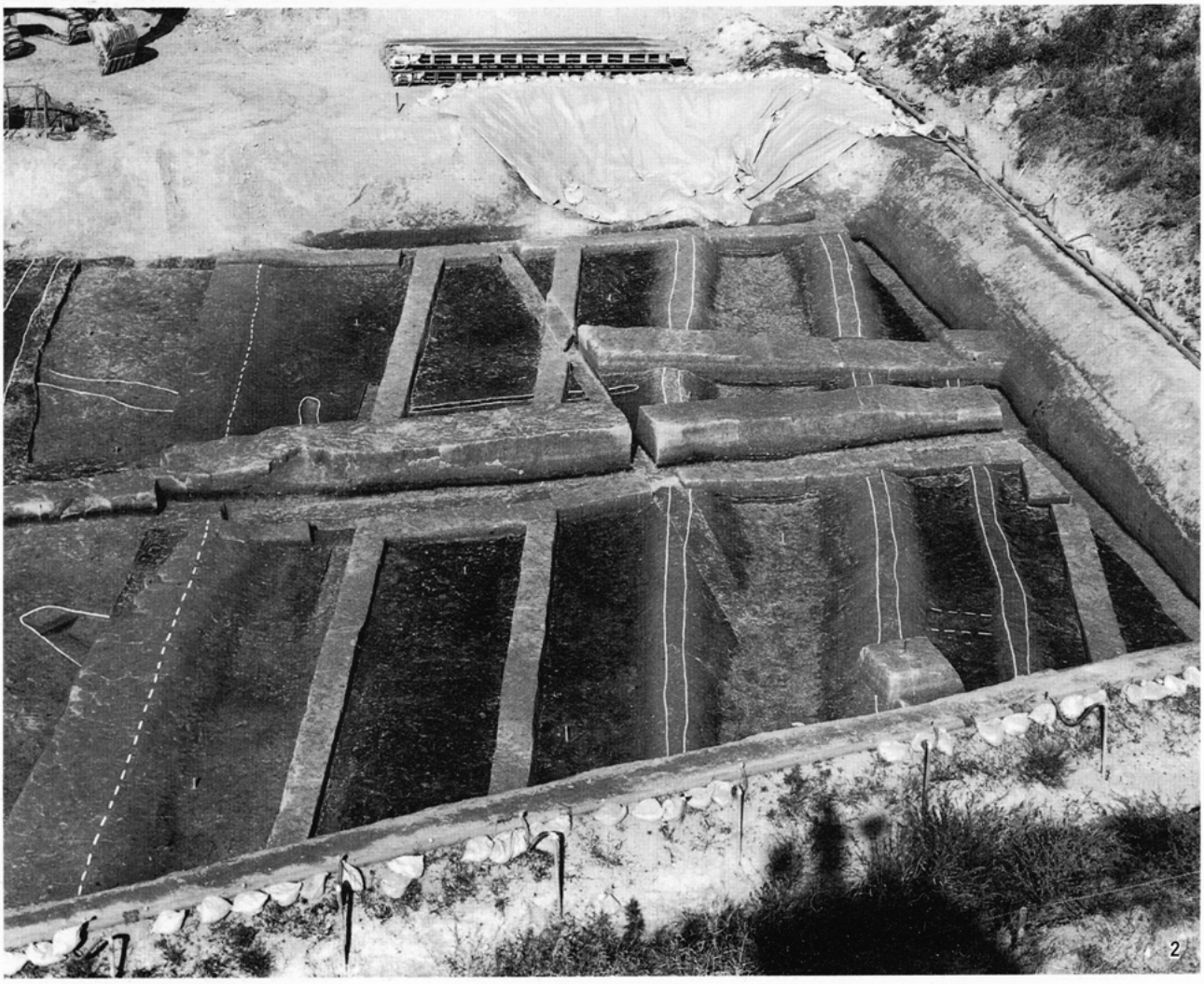
写 真 図 版



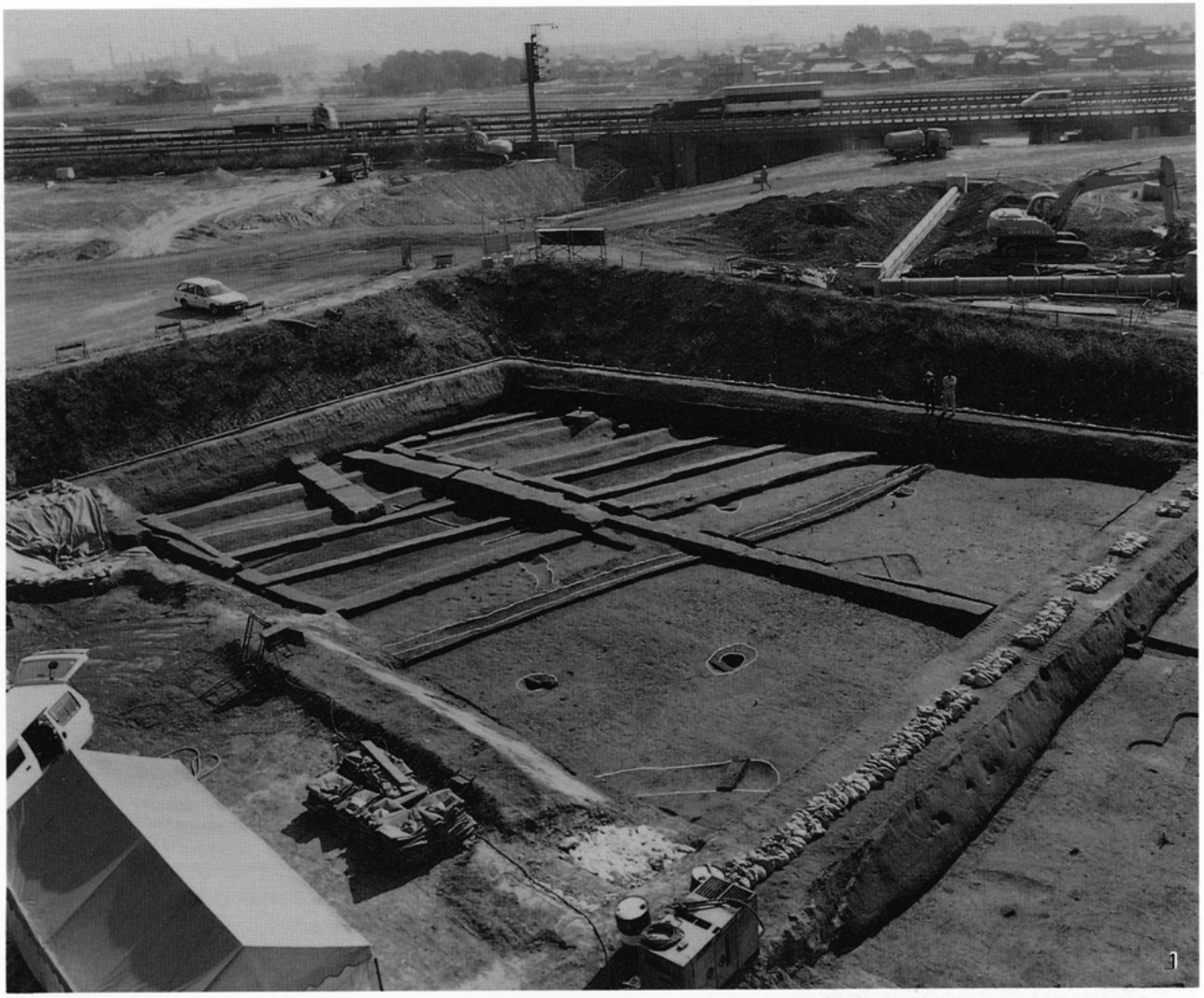


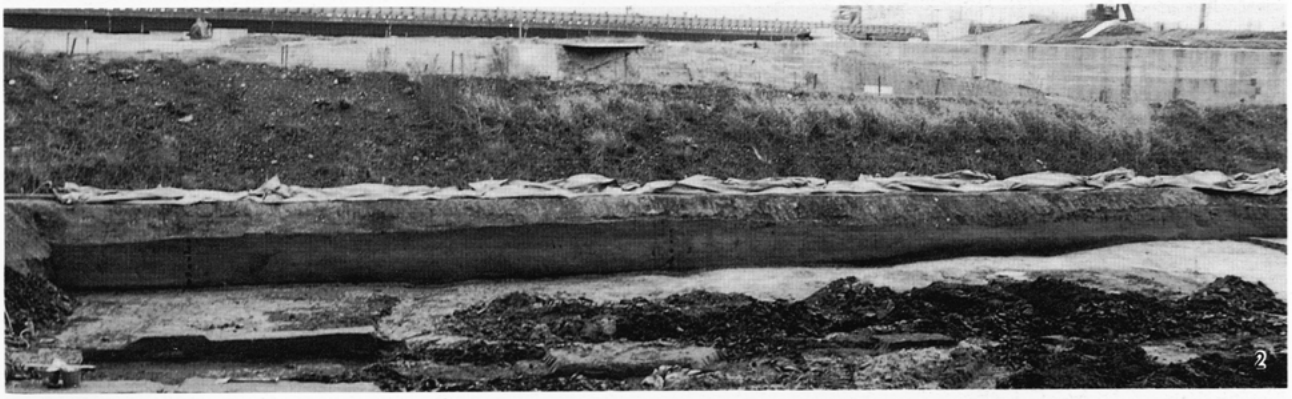
三ツ井遺跡出土の最古の土器

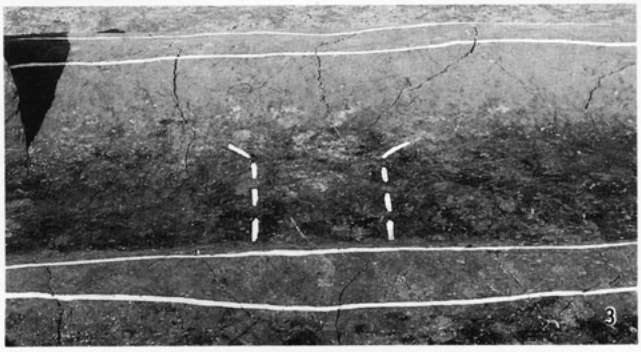




1　97B区　縄文時代～弥生時代の遺構　　2　97Ab区　水田跡

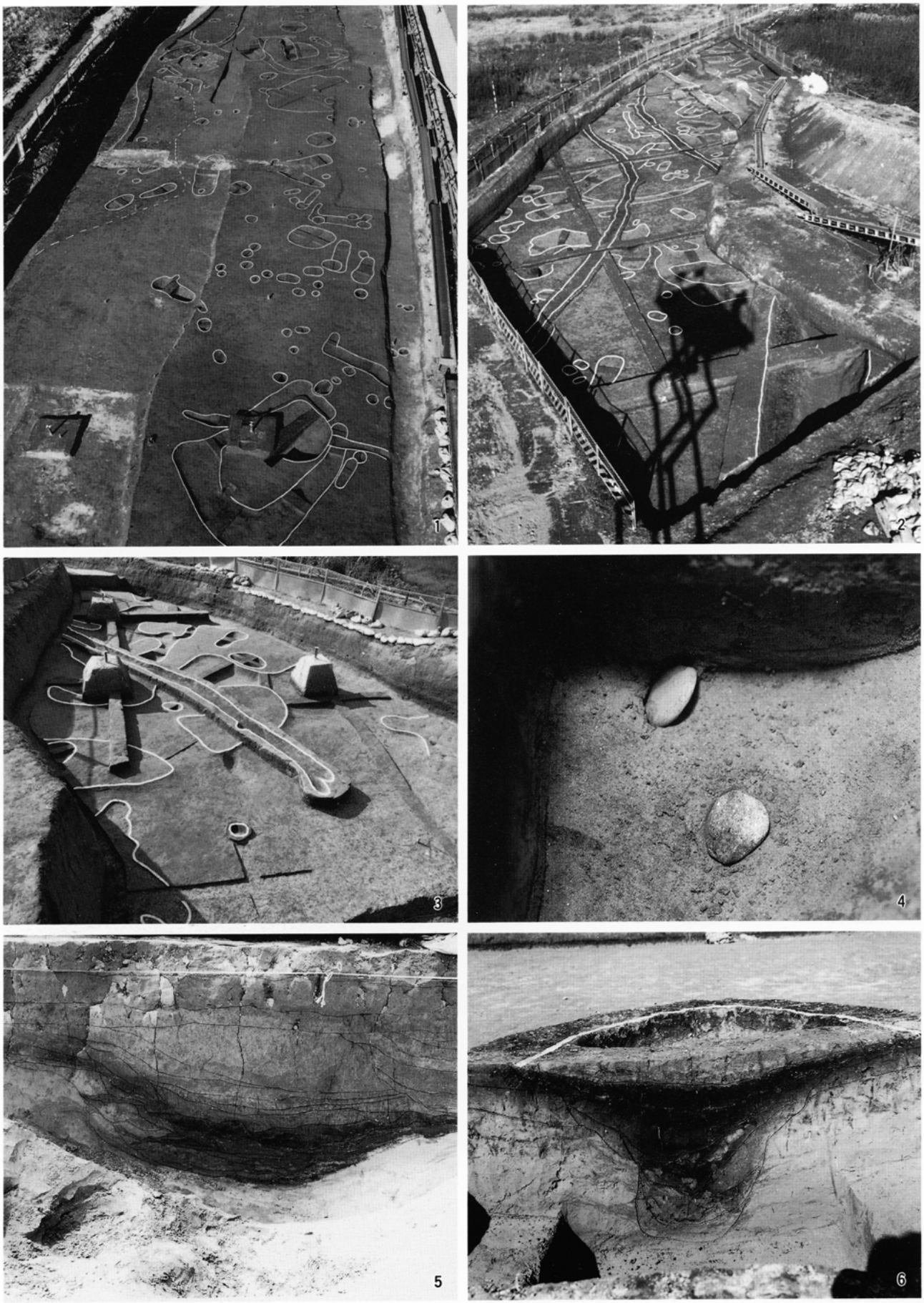






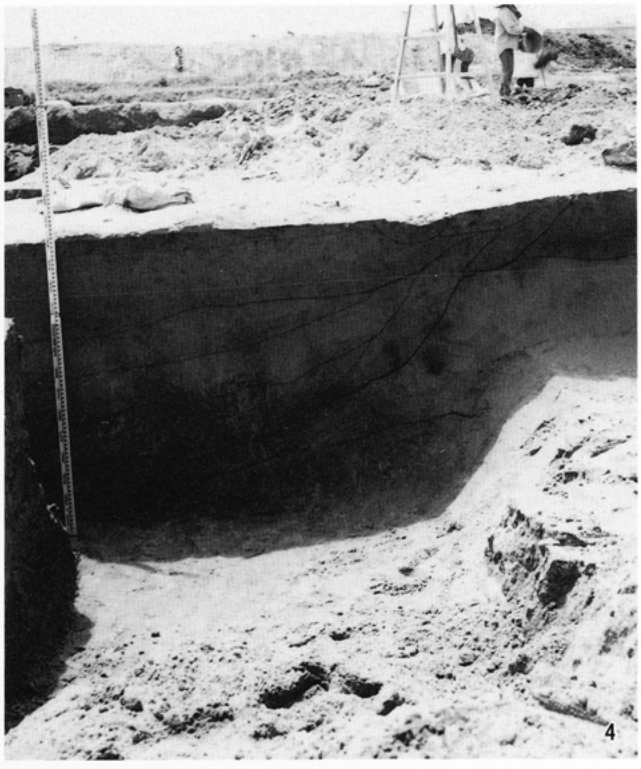


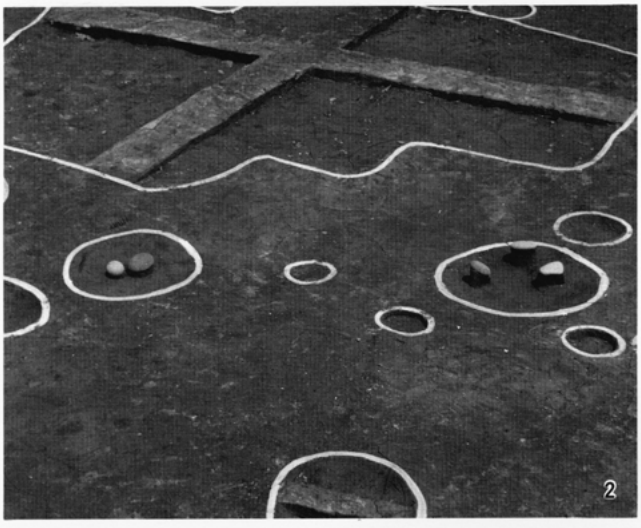
1　97Ab区　水田跡　　2　97Ab区　南壁断面　　3　97Ab SD46 直交盛土　　4　97Ab SD46 西側盛土内出土遺物（東半分）



1　96Cb区　遺構　　2　96Bb区　遺構　　3　96Ba区　遺構　　4　96Ba SX04 出土遺物状況　　5　96D SK19 断面
6　97Cb SK58　断面





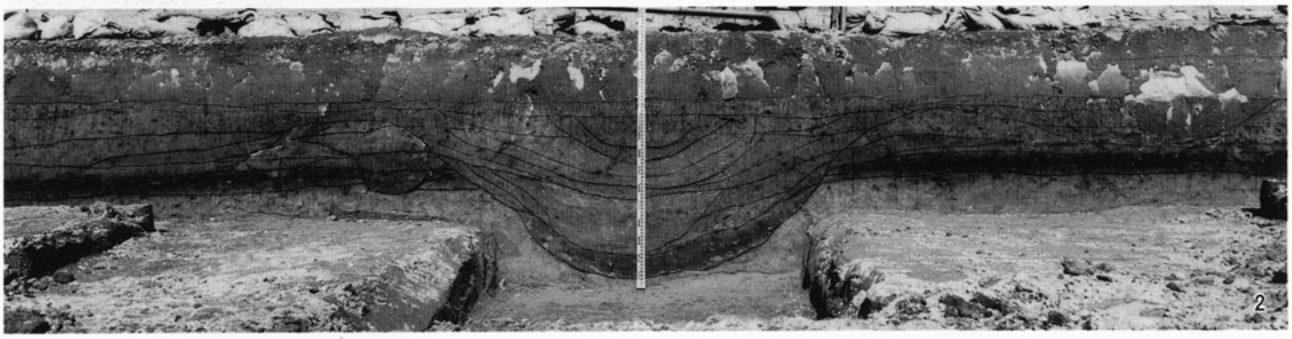






1　97Ab区　遺物出土状況　　2　97B SK171・172 遺物出土状況　　3　97B SK171 遺物出土状況　　4　97B NR01 下層断面
5　97B区　埋没立ち木断面



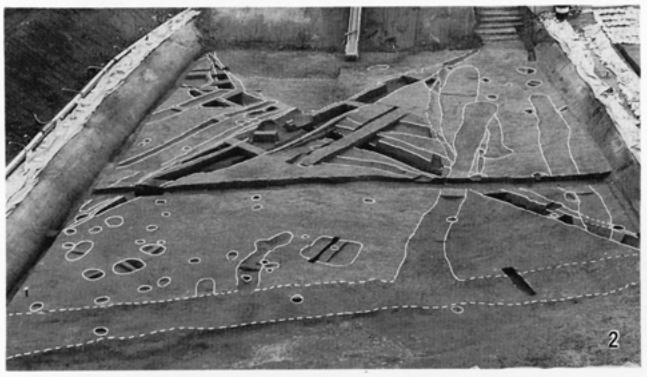


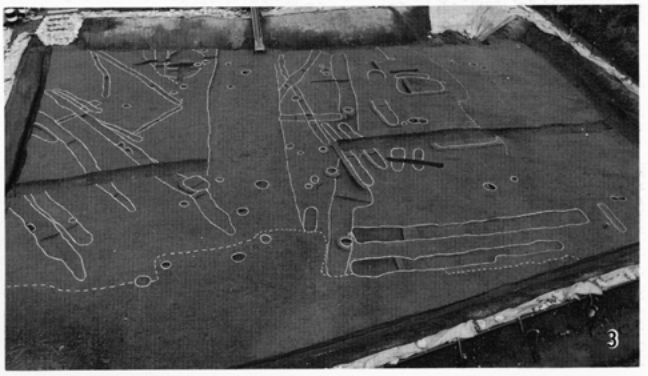




1　97Ca SD27　　2　97Ca SD27 断面　　3　97Cb SD20　　4　97Cb SD20 断面



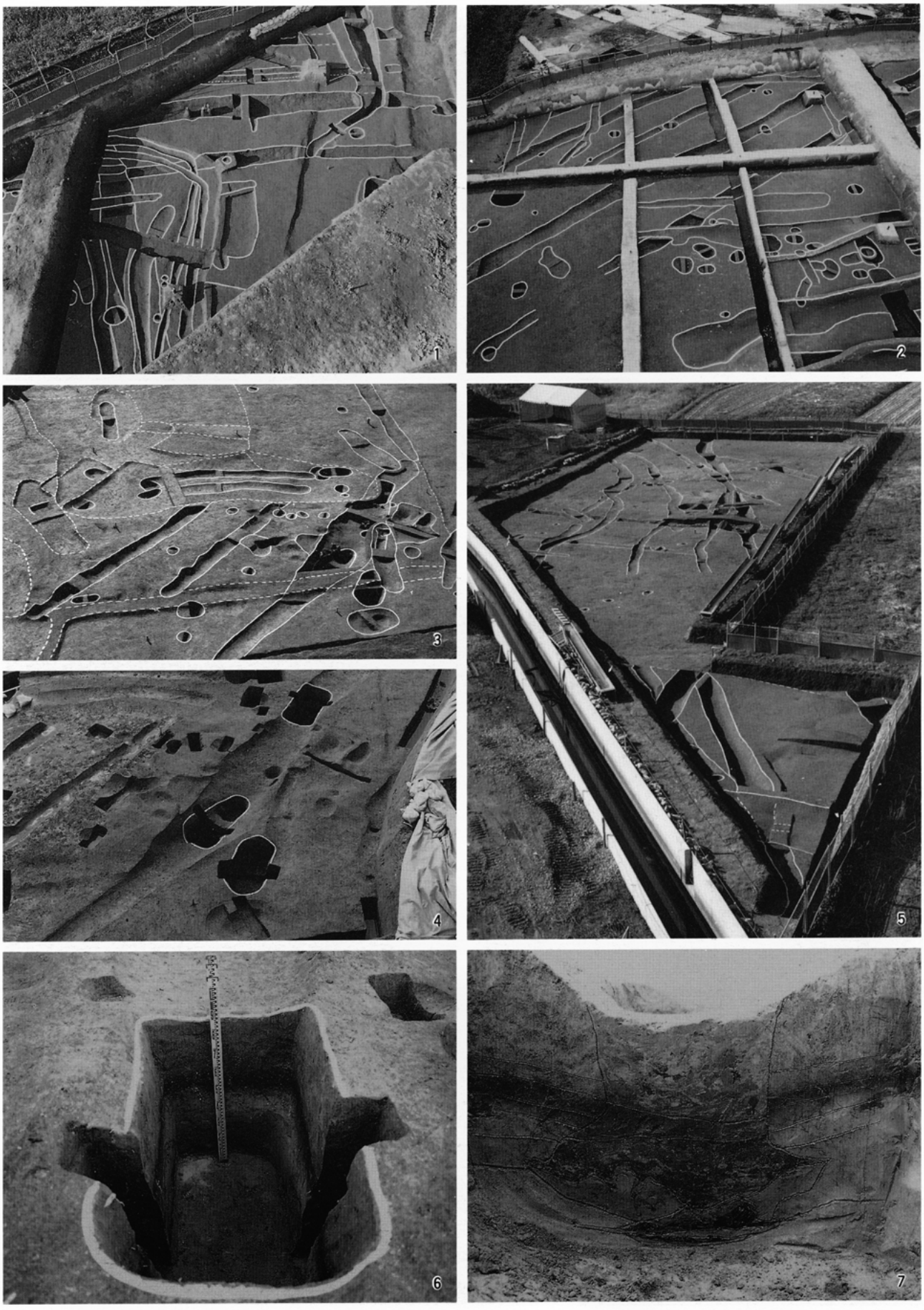




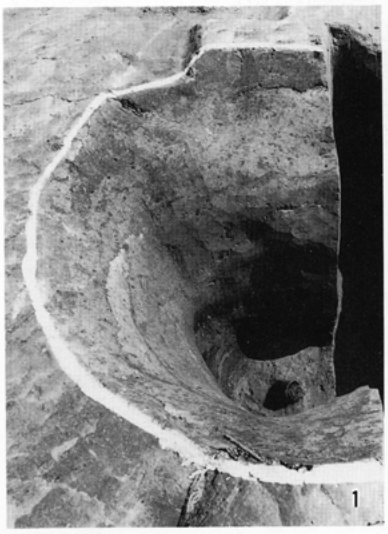
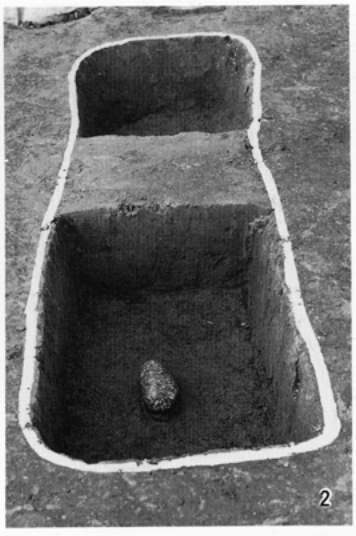


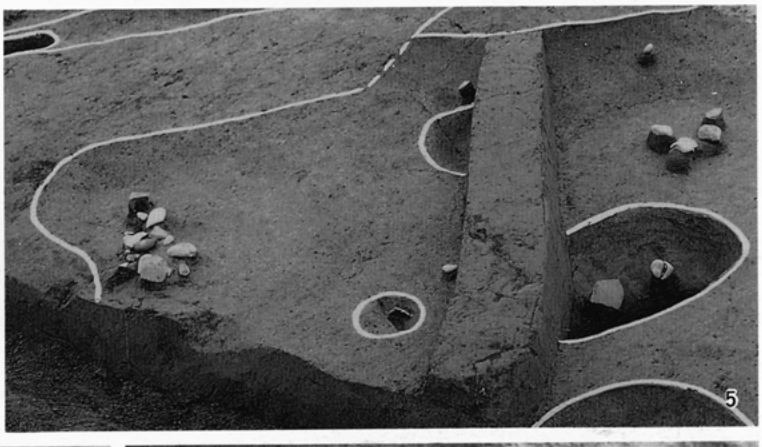


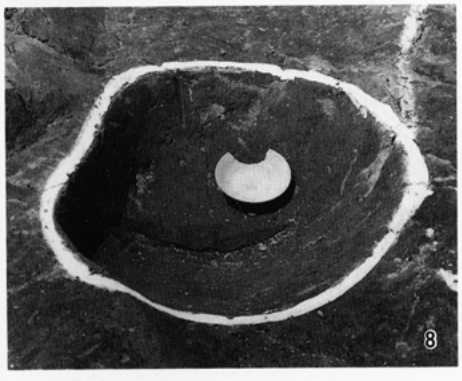
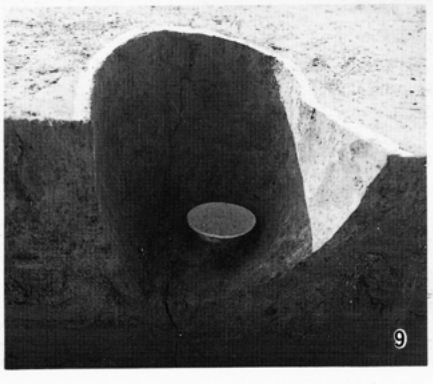
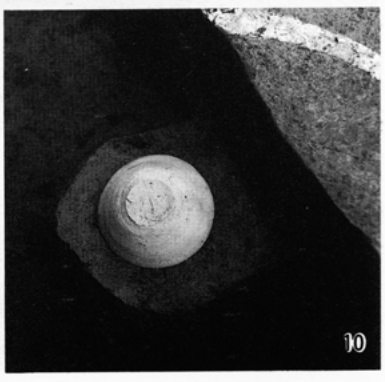
1　97B区　遺構　　2　97Ab区　西側遺構　　3　97Ab区　東側遺構　　4　97Ab SD31　　5　96Cb区　遺構



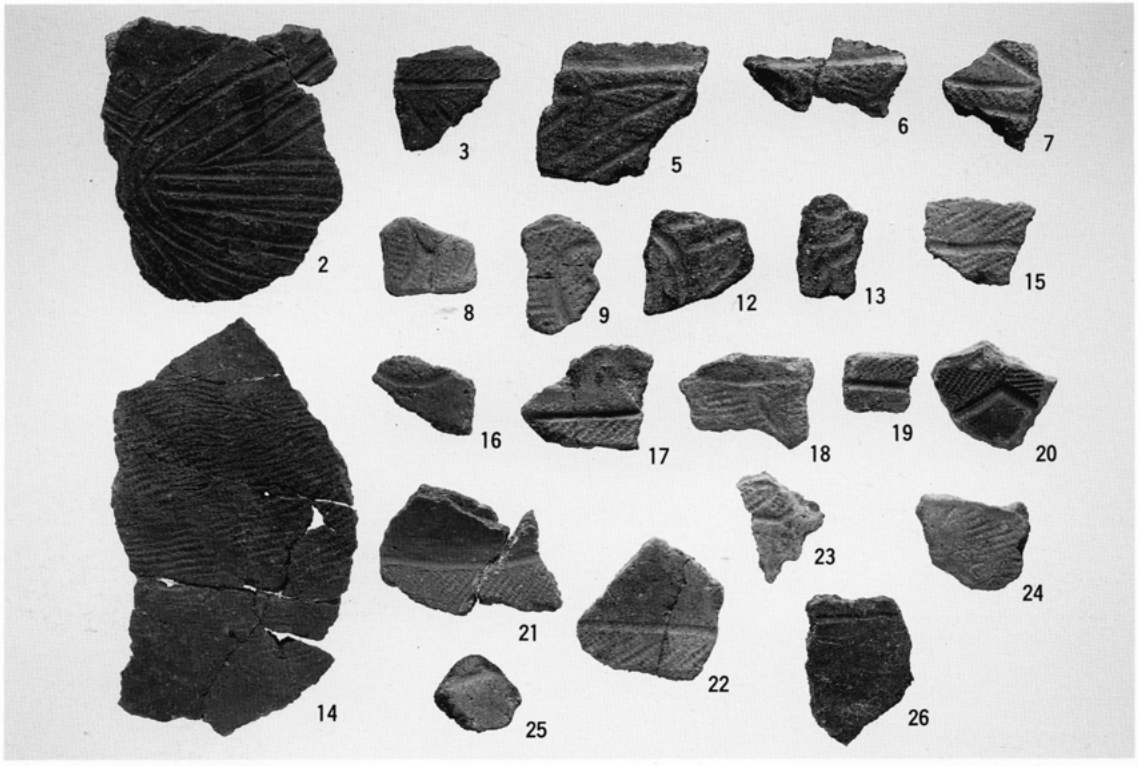
1　96Ba区 遺構　　2　96A区 遺構　　3　97Cb区 遺構　　4　97Cb区 古代の土坑群　　5　97Ca区 遺構　　6　97Cb SK12
7　97Cb SK14 断面

1　97B SK88　　2　97Ab SK03　　3　97Ab SK01　　4　97Aa SK12　　5　97Ab SX02　　6　96Ba SK14 遺物出土状況
7　97Cb SD11 遺物出土状況　　8　97B SK68 遺物出土状況　　9　96E SK13 遺物出土状況　　10　97Ca SK01 遺物出土状況

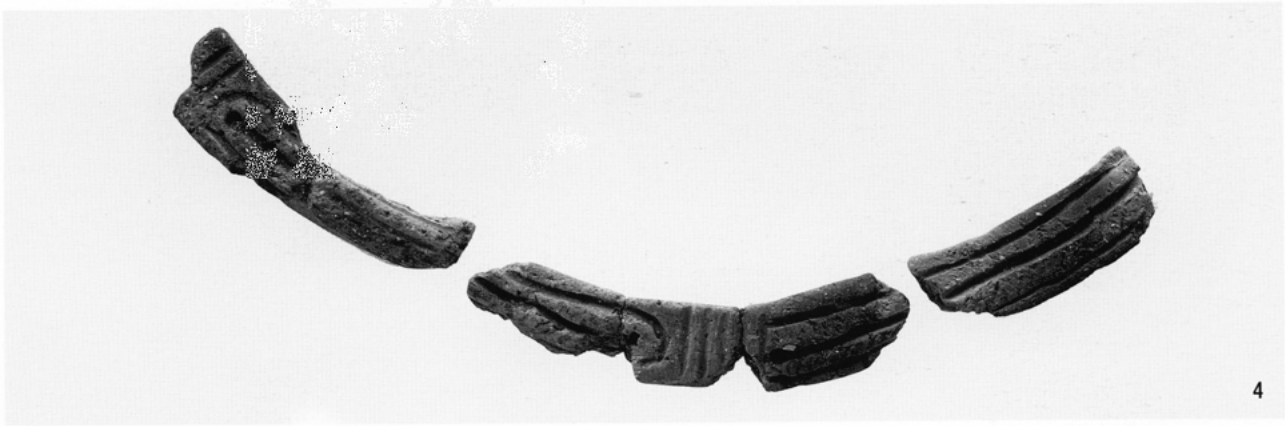

2
3
5
6
7
8
9
12
13
15
16
17
18
19
20
14
21
22
23
24
25
26

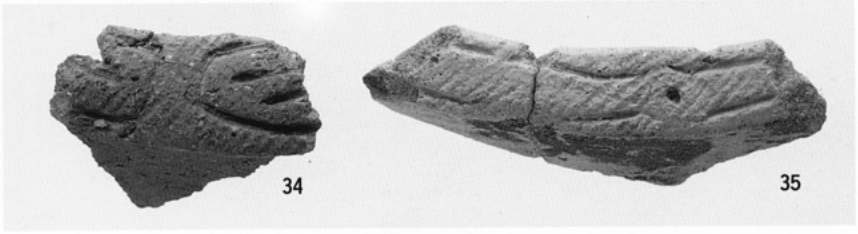

28


29


32

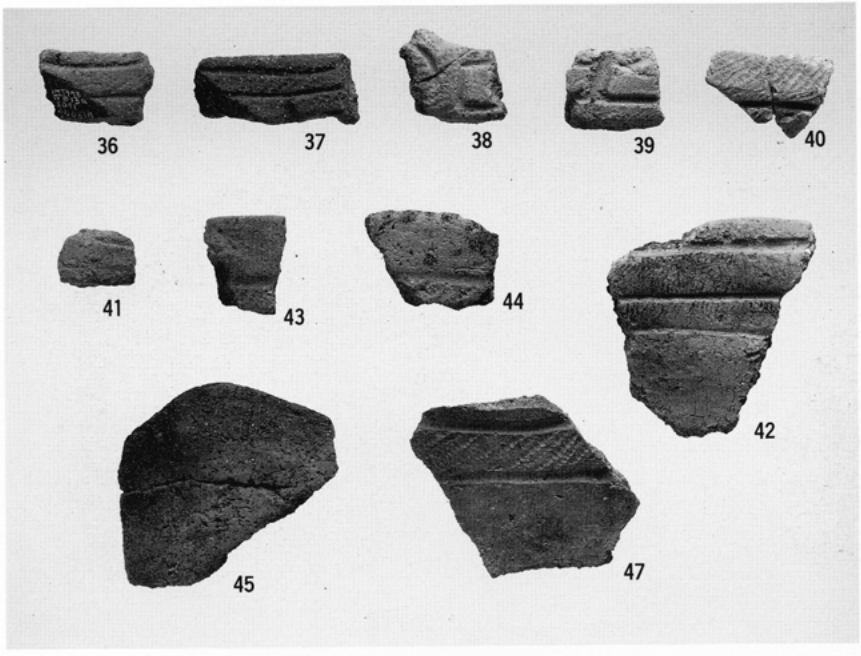

27


4


34

35




36

37

38

39

40

41

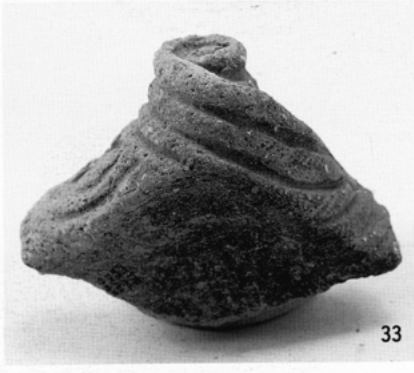
43

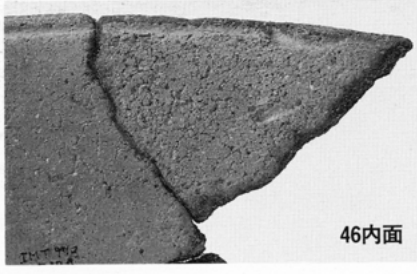
44

42

45

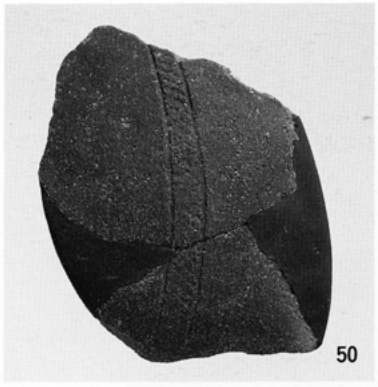
47

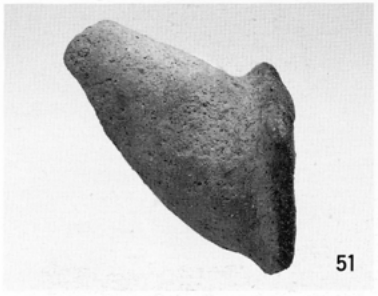

33

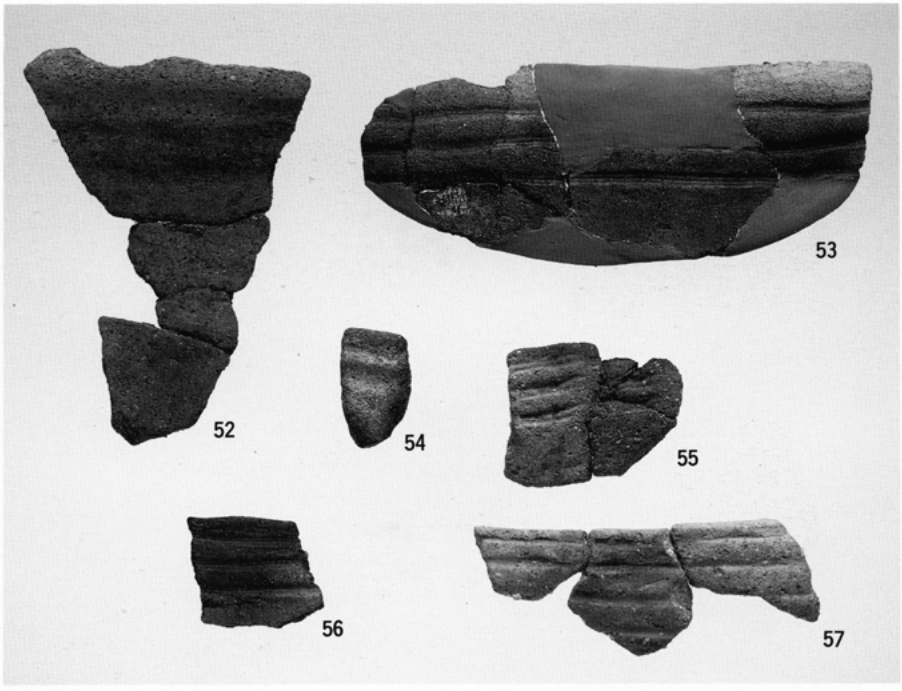

46内面

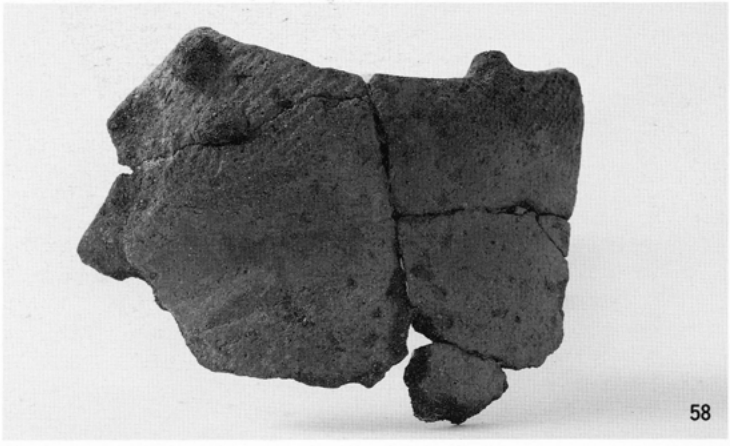

48

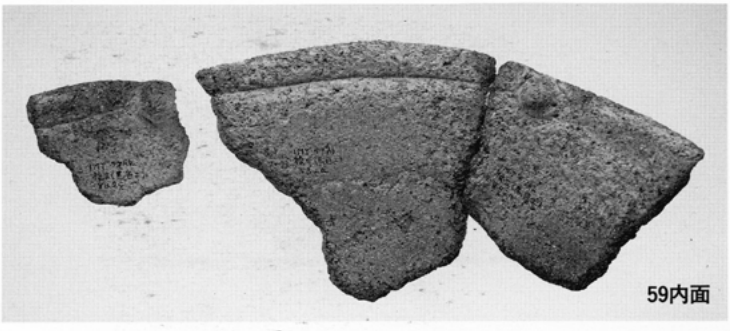

49

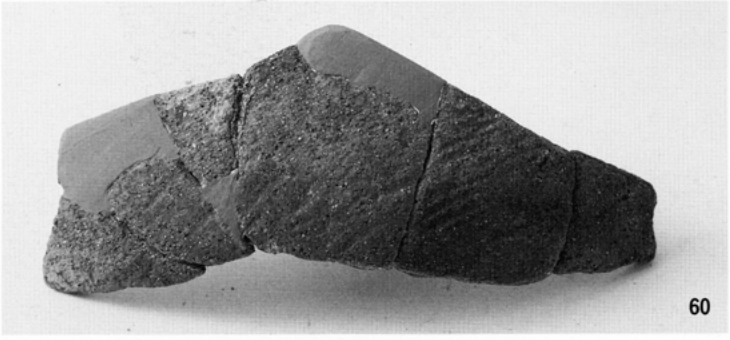

50


51

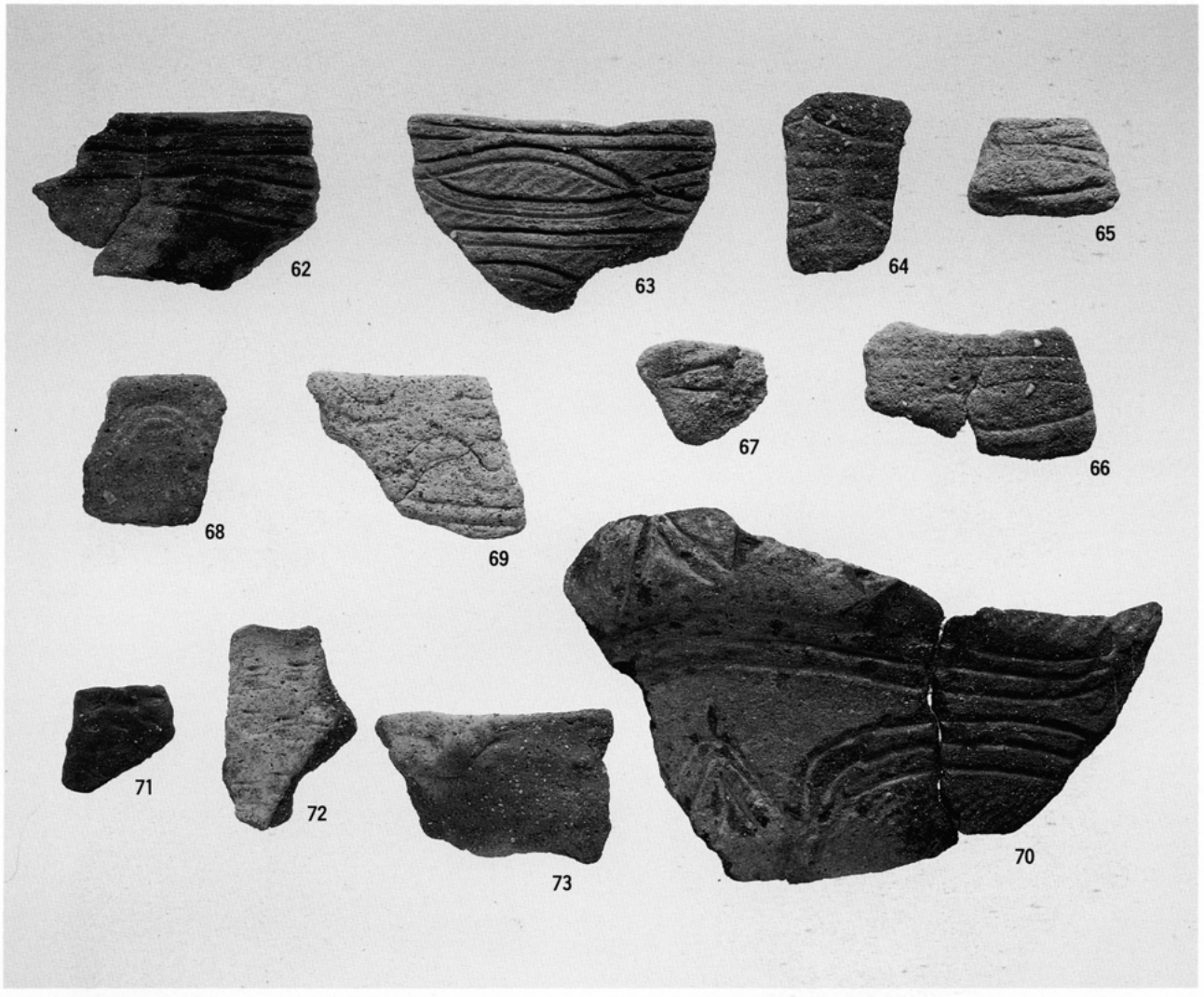

52
53
54
55
56
57


58


59内面


60


61


62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73

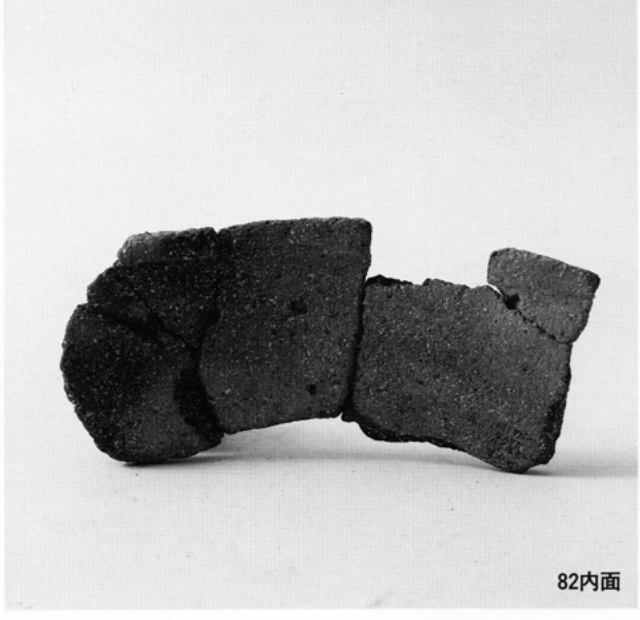

74

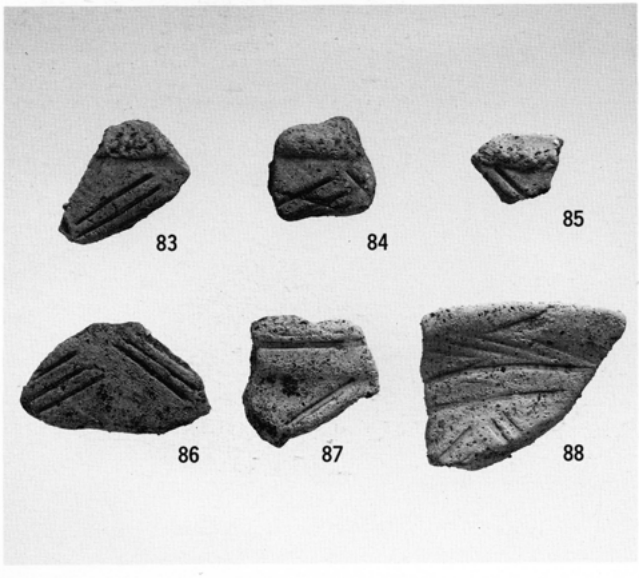

76


79


79内面

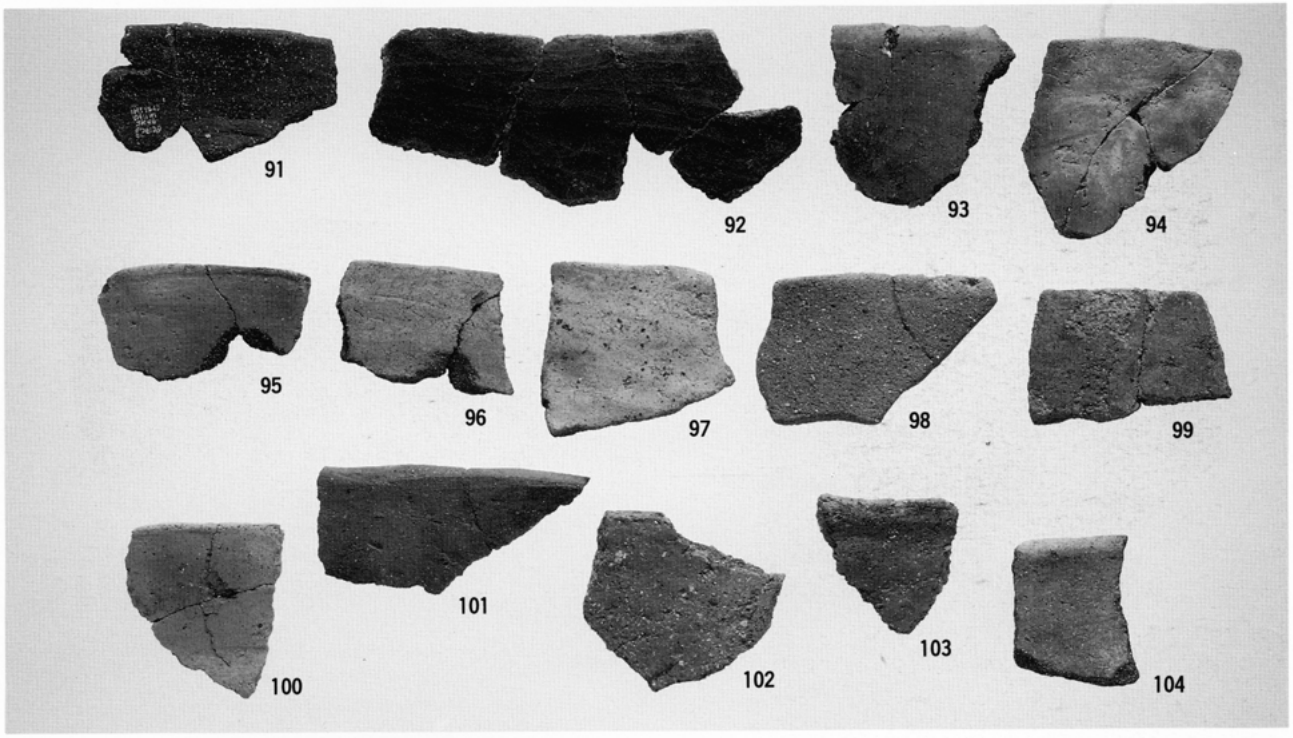

80内面

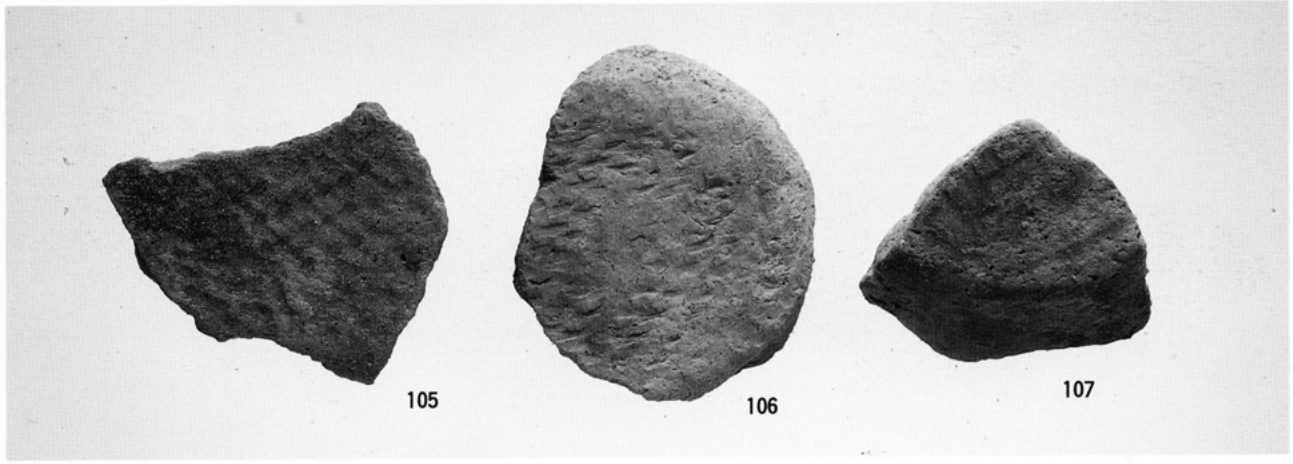

82内面




90


89


91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104

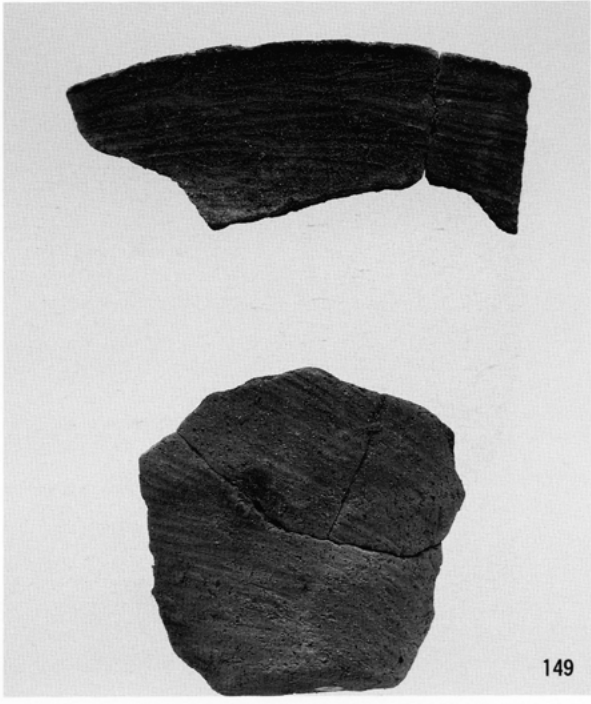

105
106
107

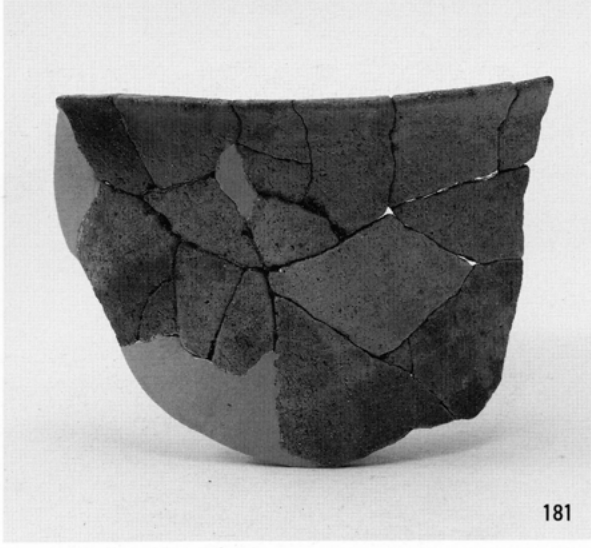

108


141

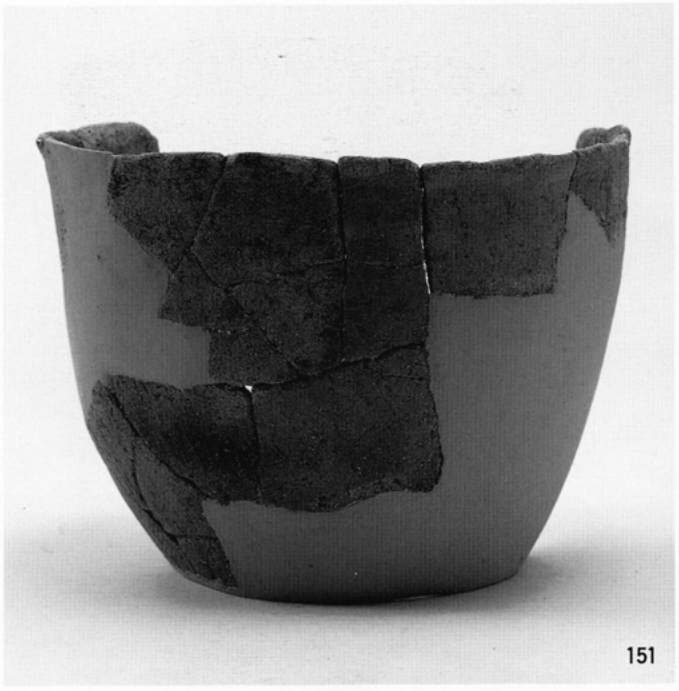

162


148

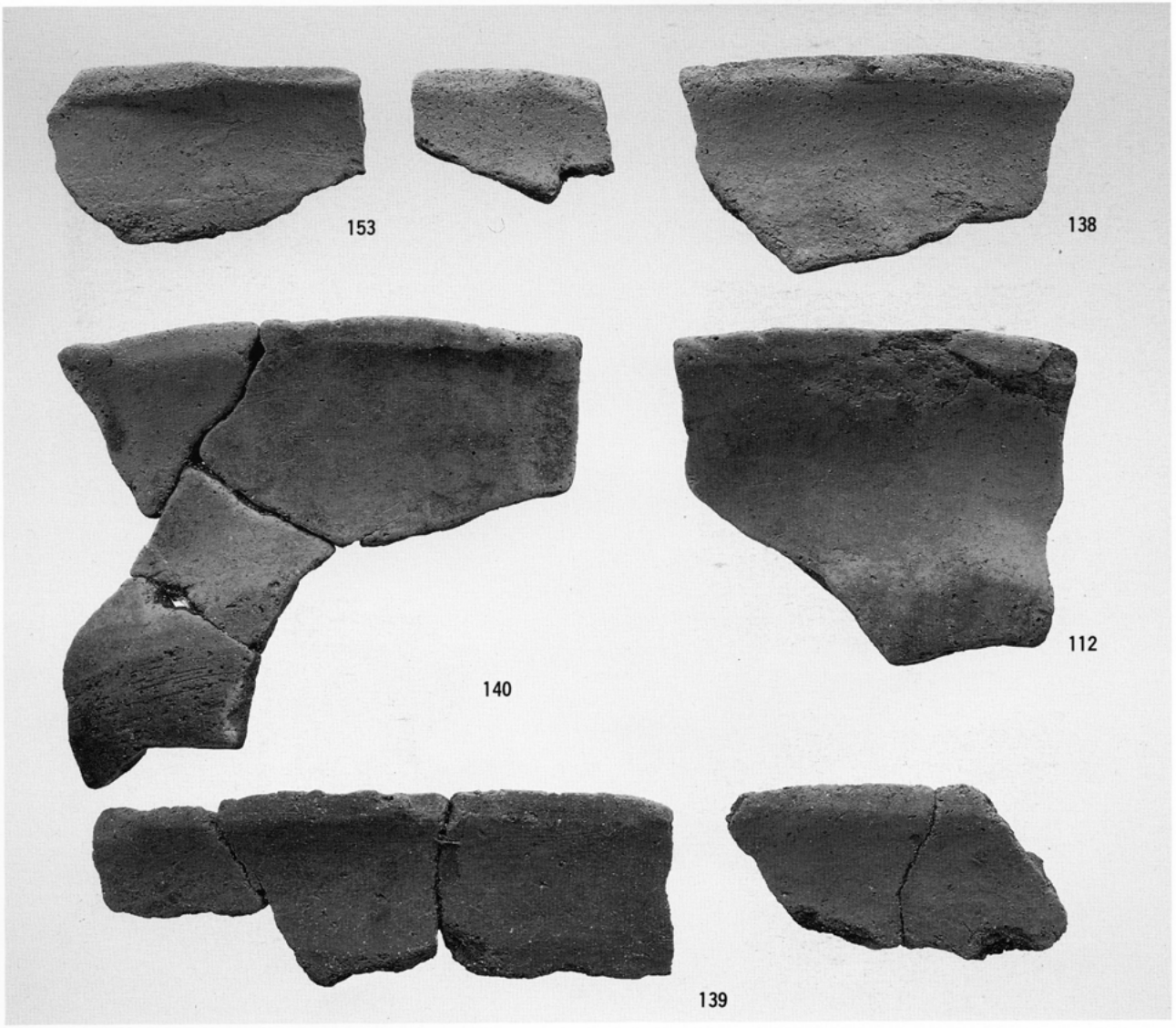

149


181


145


151


151口縁部

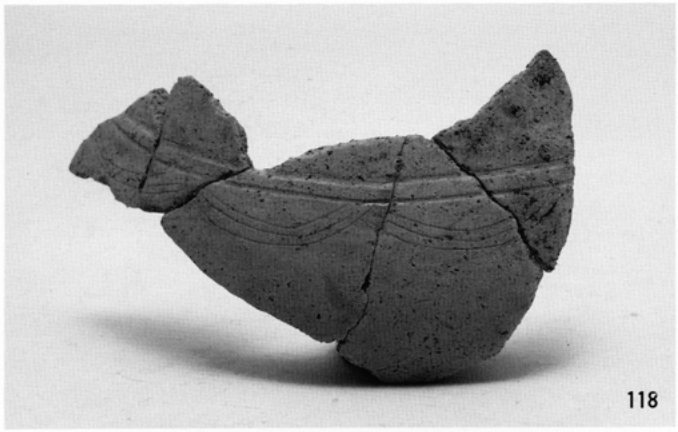

153

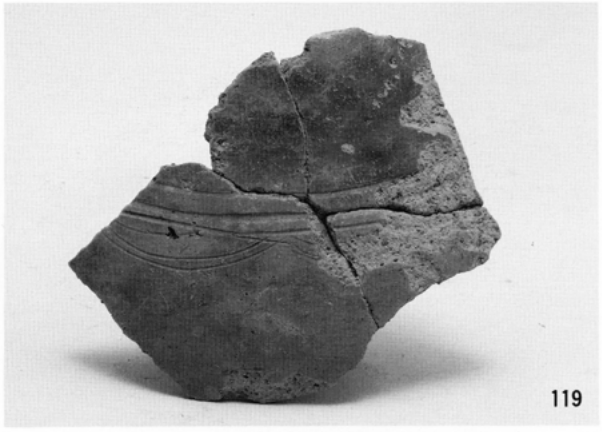
138

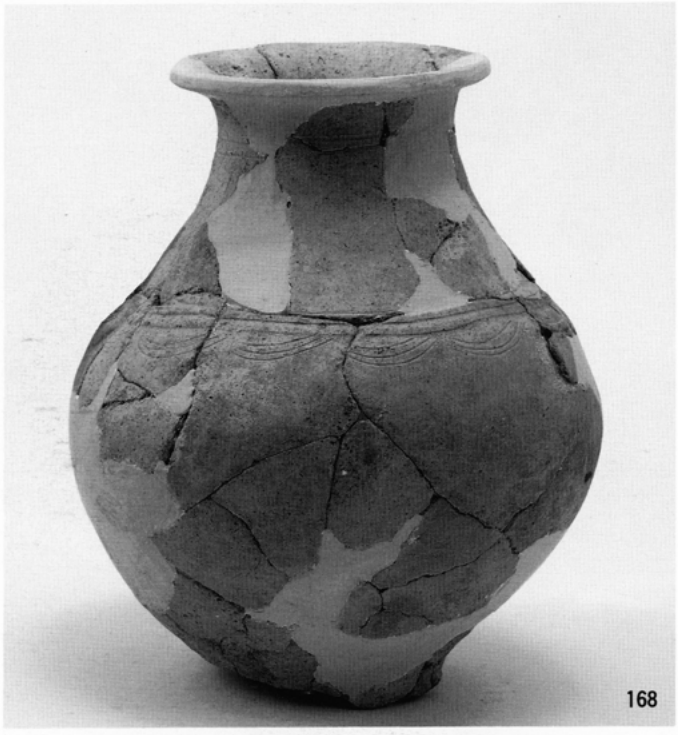
140

112

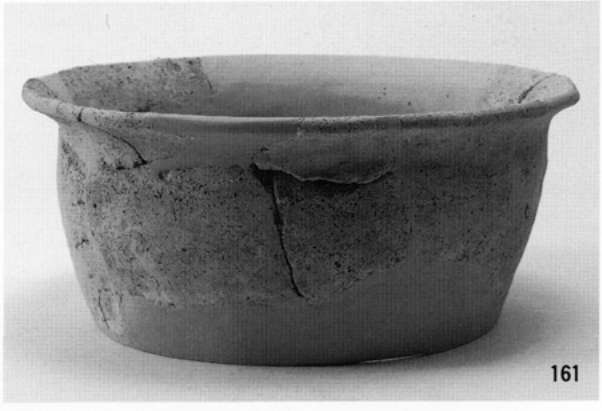
139


118

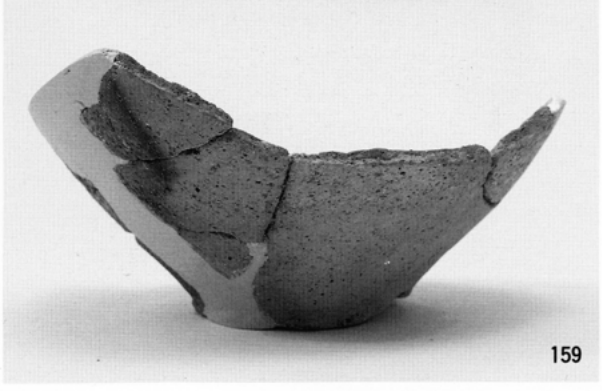

119

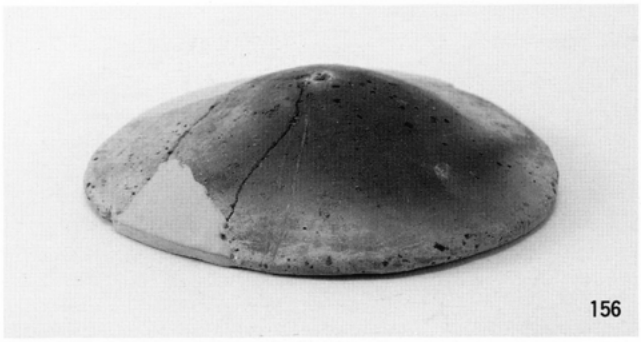

168


129


161

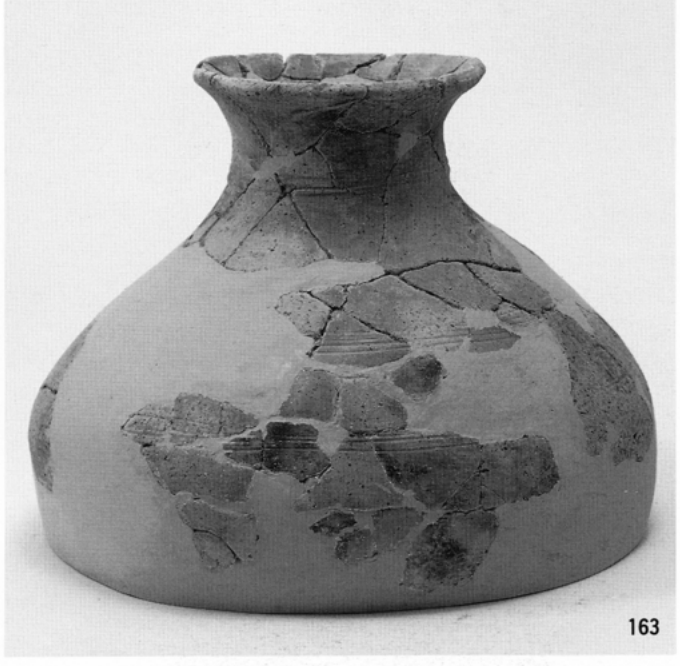

158


159

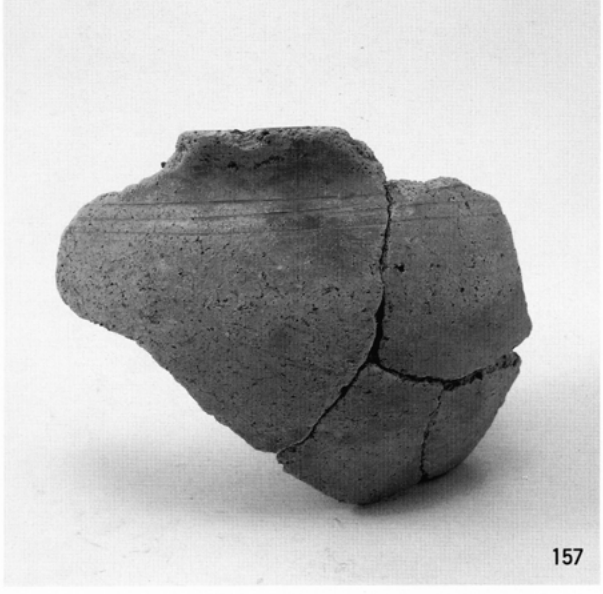

156

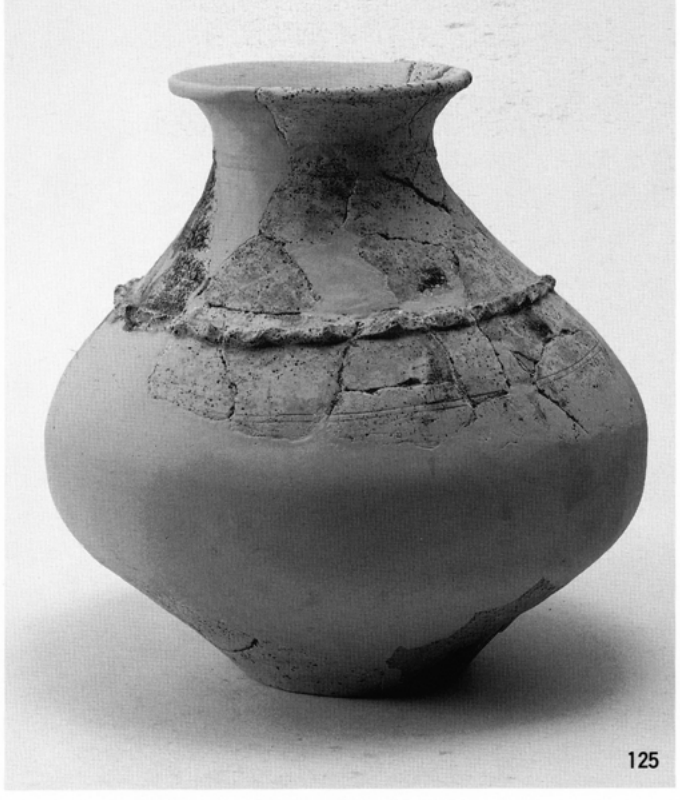

164


128


163

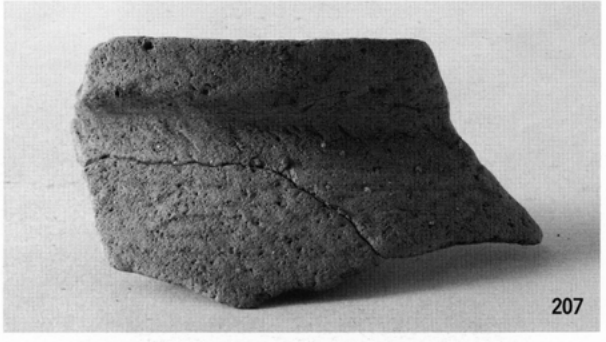

135

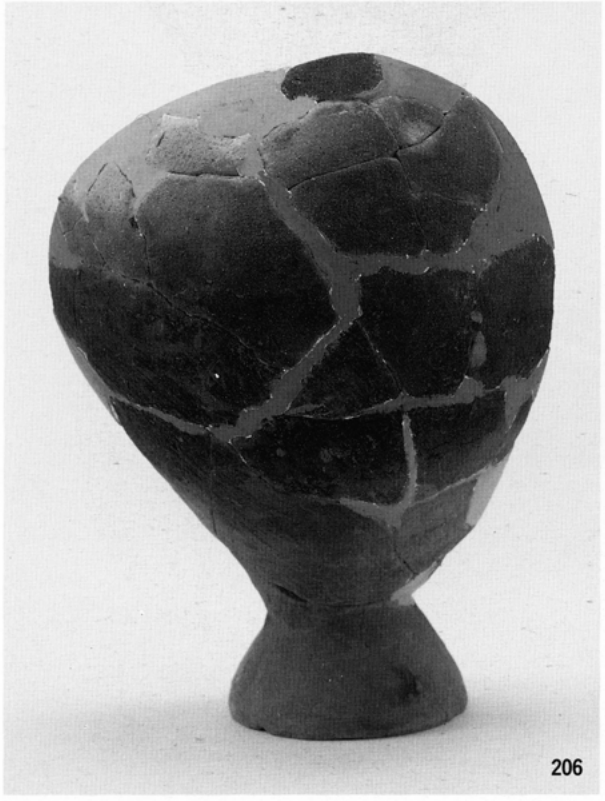

157

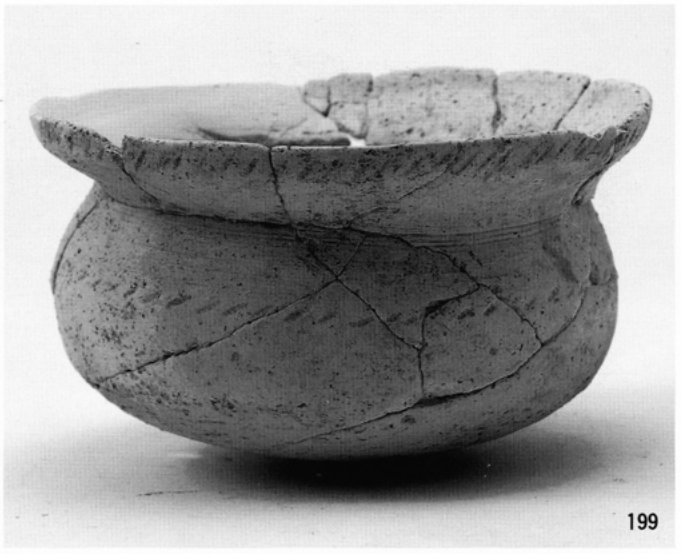

125


194

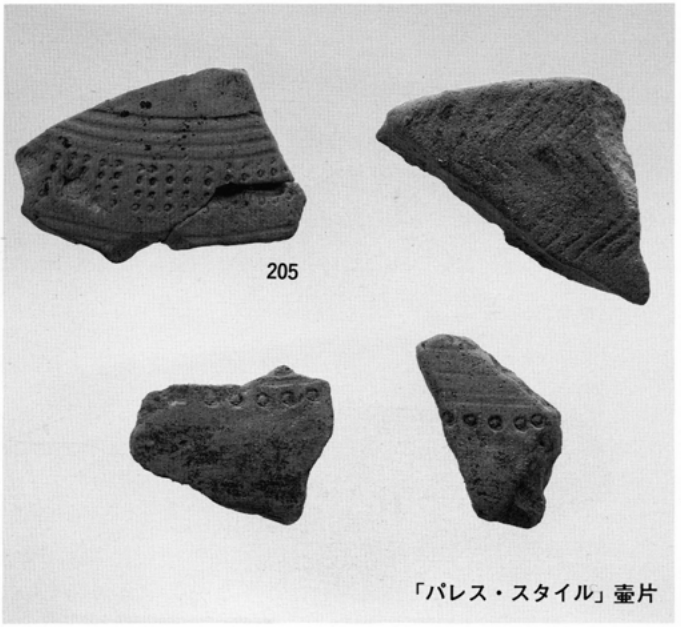

198


207

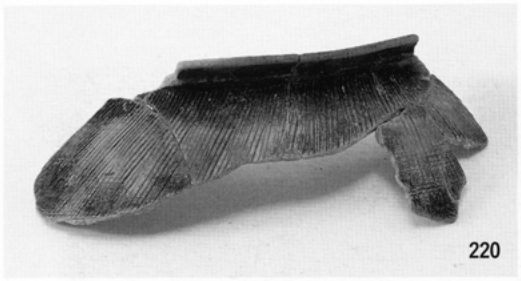

206


199


203


205

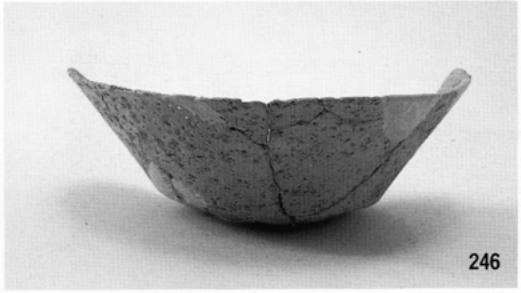
「パレス・スタイル」壺片


220

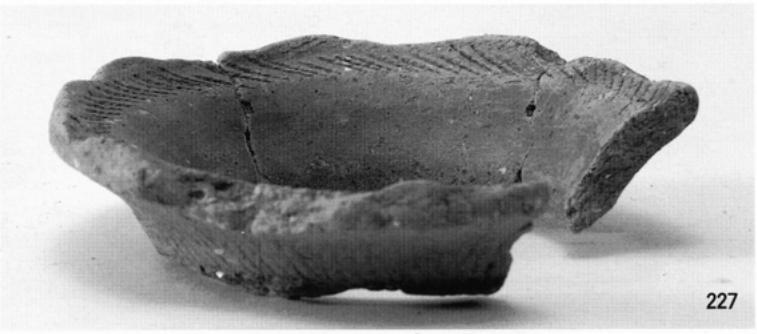

221


228


225

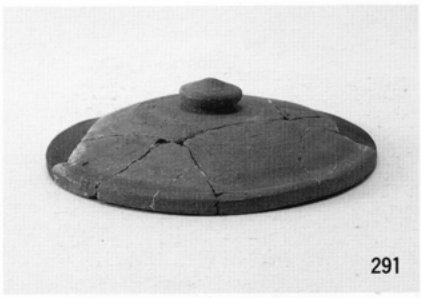

246

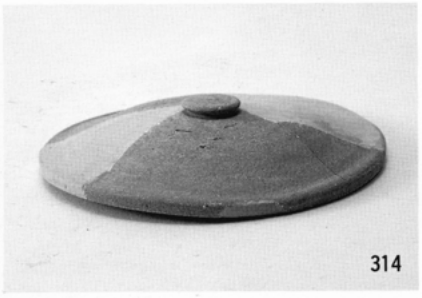

290


227

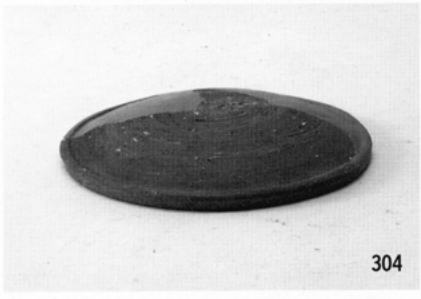

253

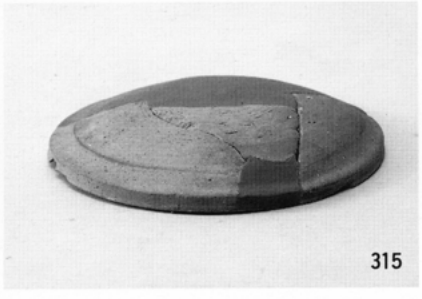

255


291


314


337


304


315

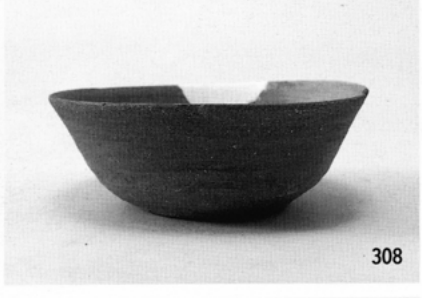

335


341


300


336


298


308

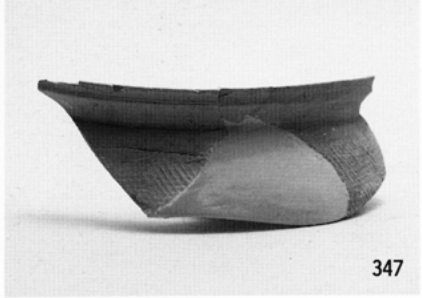

333


294

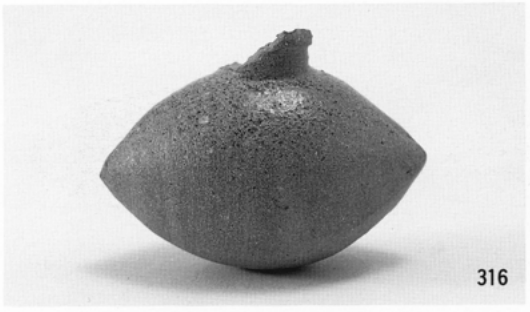

344


345

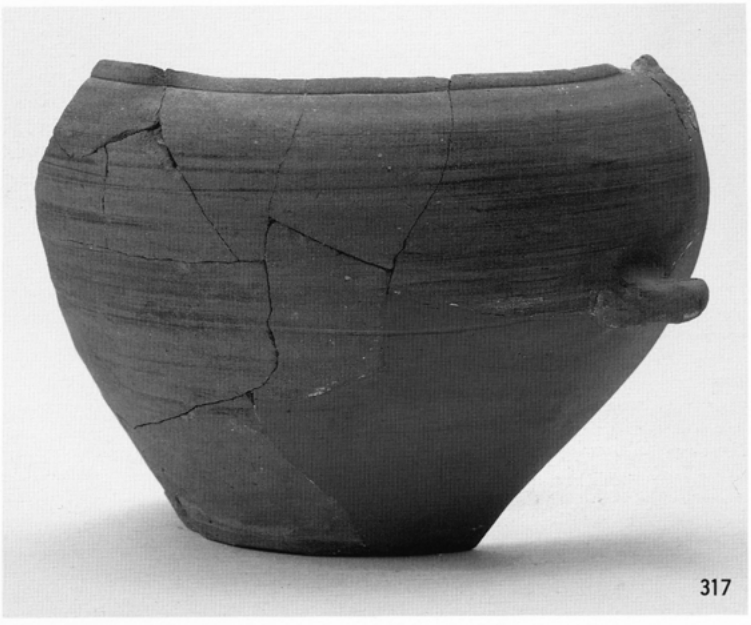

311


347

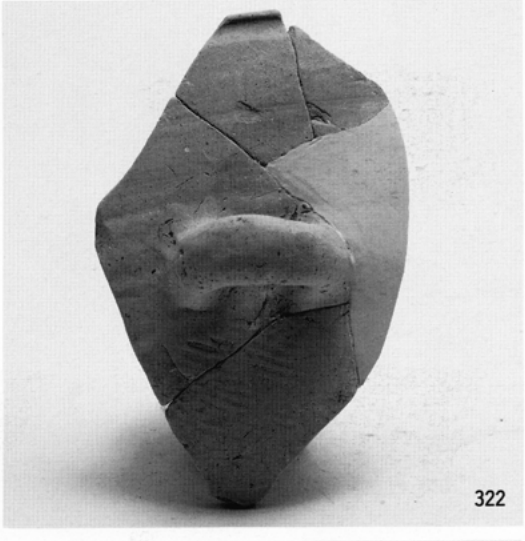

364

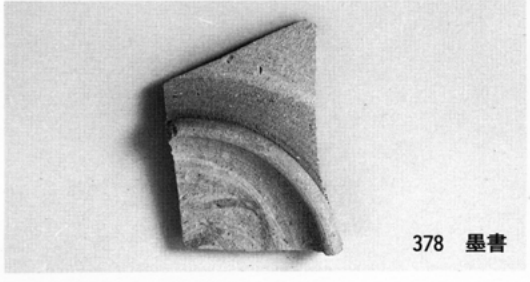

316

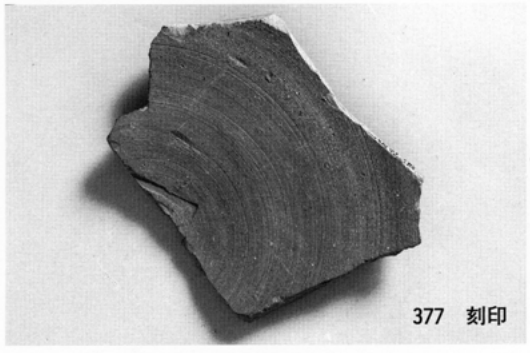

386

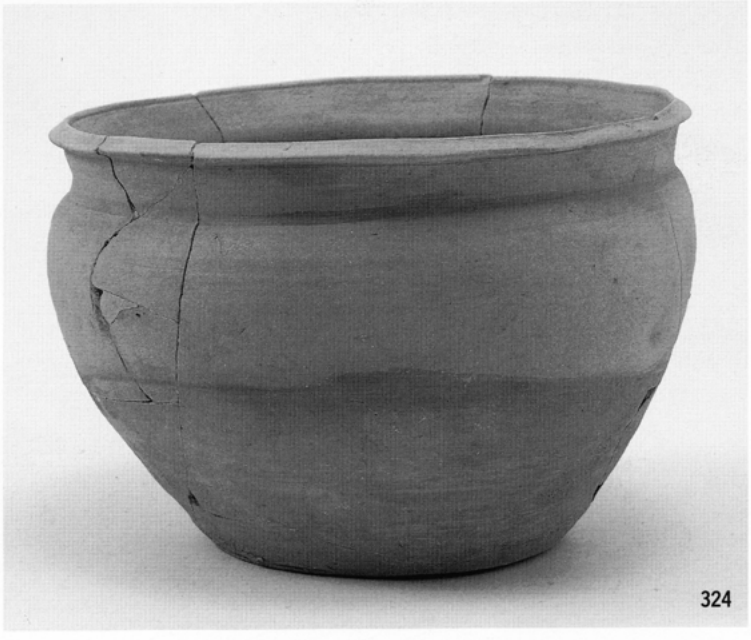

317


383


322

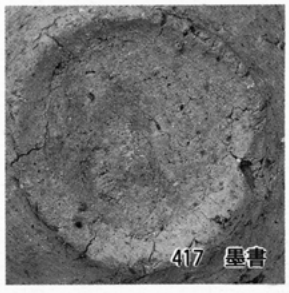

378　墨書

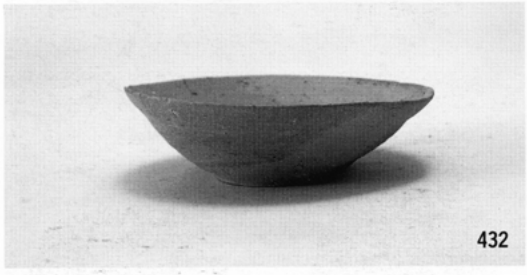

377　刻印

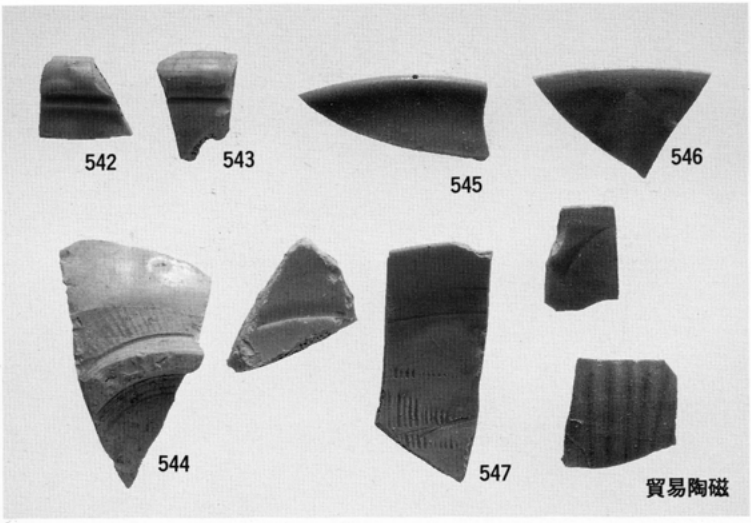

324

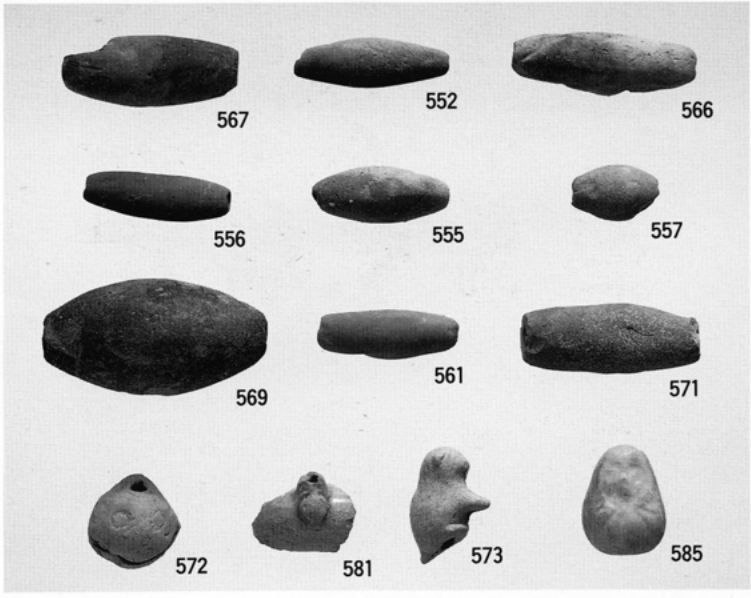

421

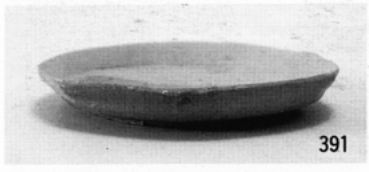

417

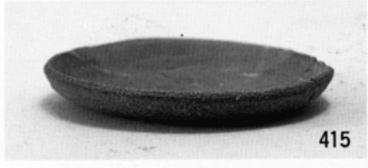

417 墨書

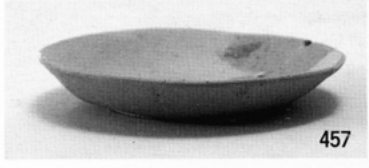

432


542 543 545 546 544 547 貿易陶磁

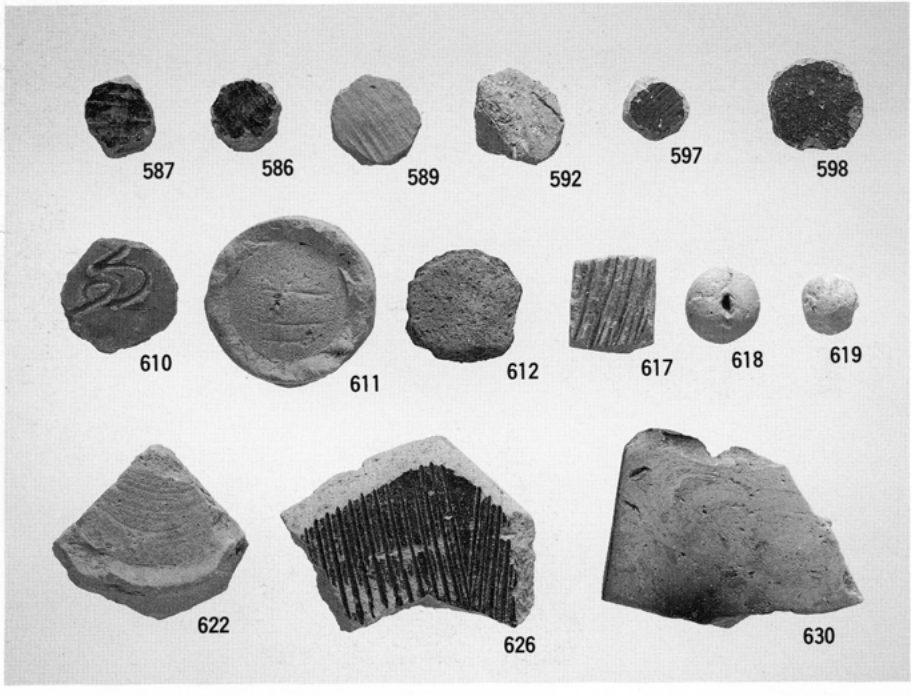

567 552 566 556 555 557 569 561 571 572 581 573 585

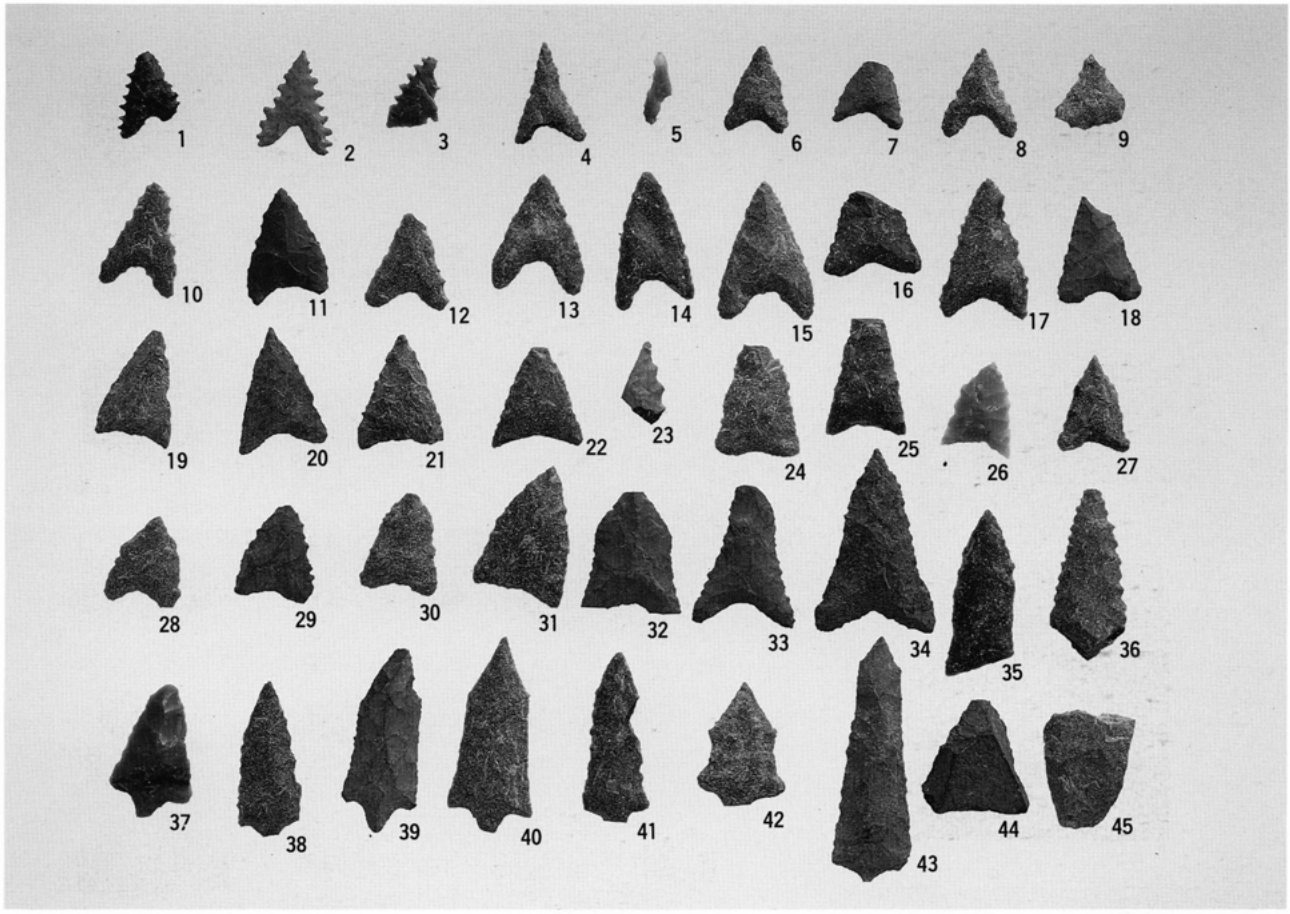

391

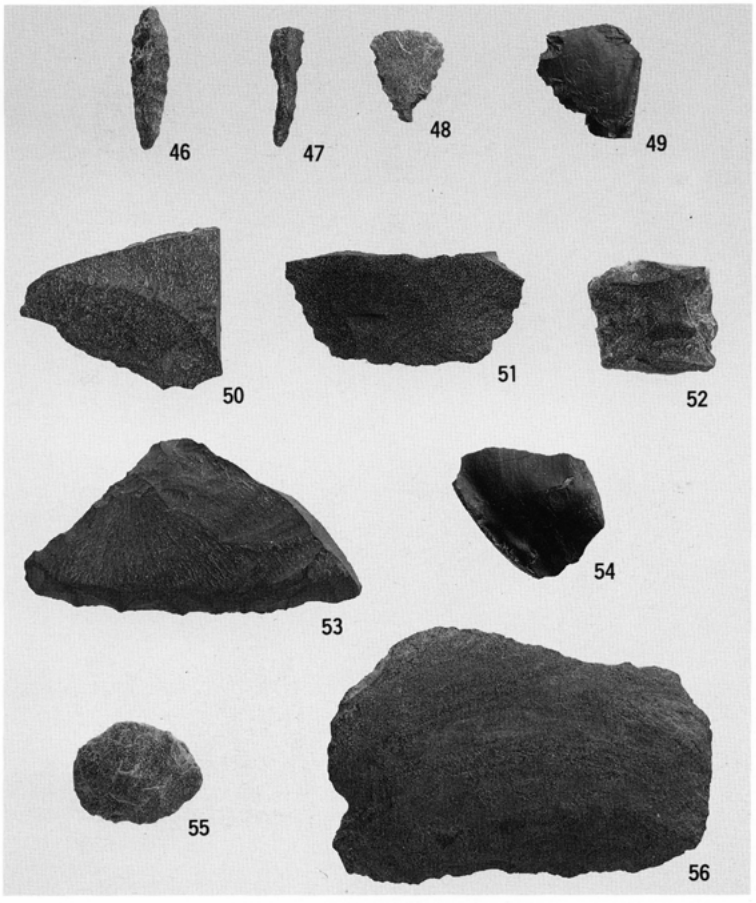

415

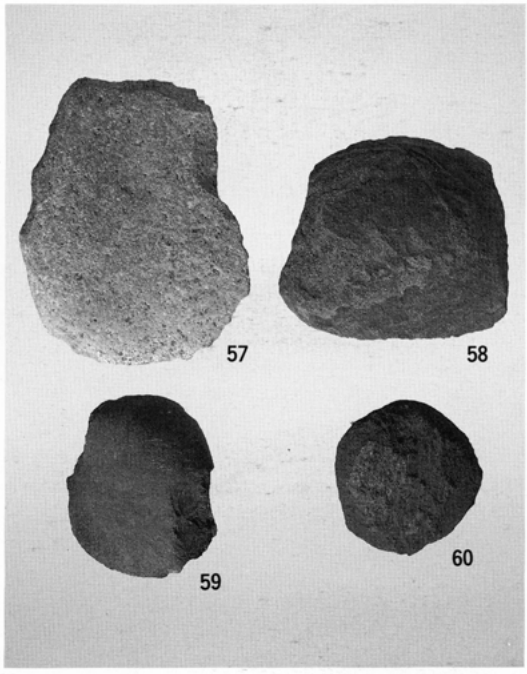

457

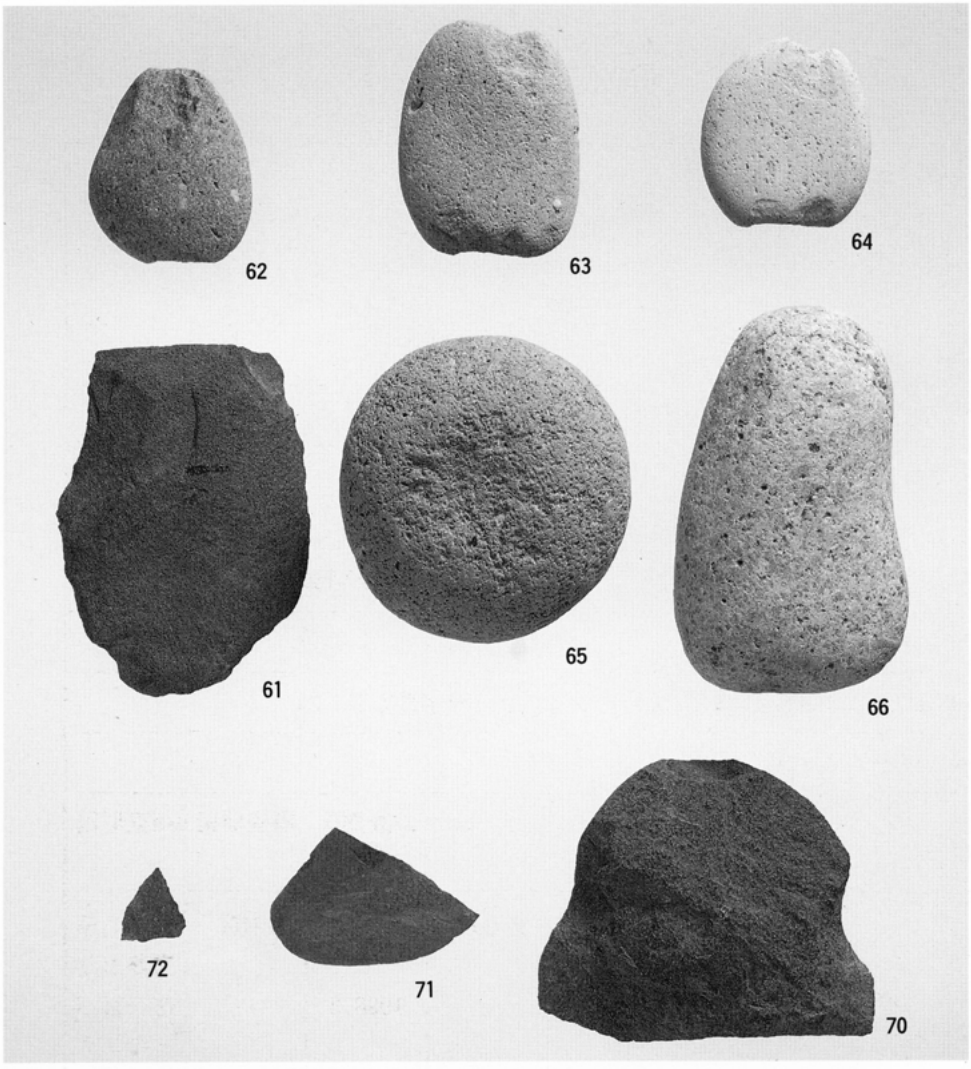

461


587 586 589 592 597 598 610 611 612 617 618 619 622 626 630


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45

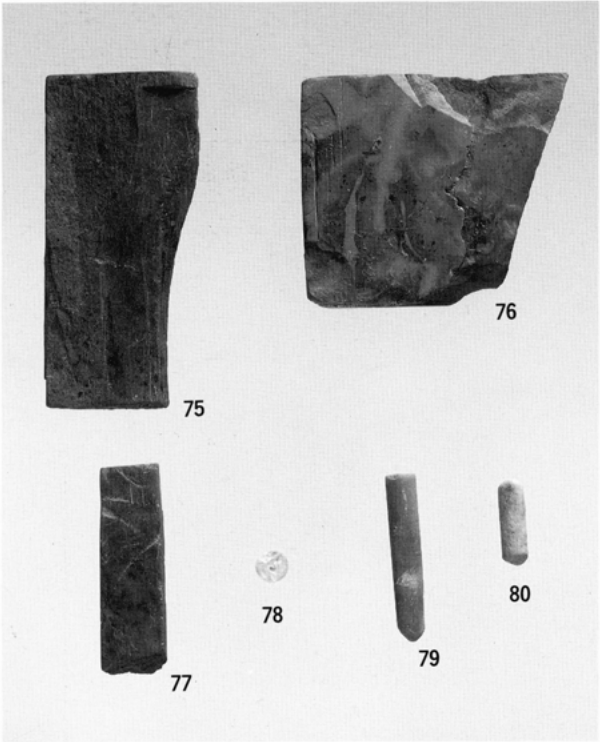

46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56

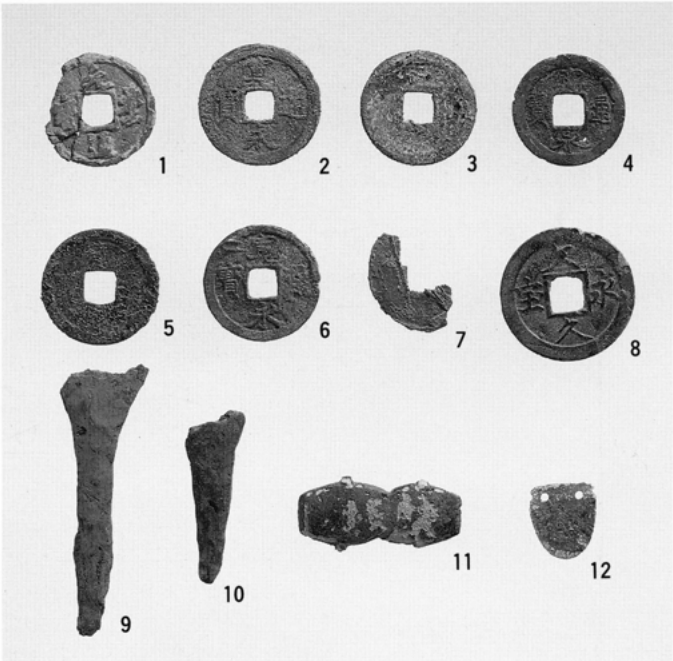

57
58
59
60


62
63
64
61
65
66
72
71
70


68


69


75
76
77
78
79
80


1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12

報告書抄録

ふりがな	みついいせき
書名	三ツ井遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	愛知県埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第87集
編著者名	田中伸明・鬼頭剛・永井宏幸・早野浩二・川添和暁・鈴木正貴・蔭山誠一 堀木真美子・仲井光代・尾崎和美・原田幹・松葉礼子・矢作健二・辻本裕也
編集機関	愛知県埋蔵文化財センター
所在地	〒498-0017　愛知県海部郡弥富町大字前ヶ須新田字野方802-24
発行年月日	西暦　1999年8月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 m^2	調査原因
みつい 三ツ井	あいちけんいちのみやし 愛知県一宮市 たんようちょうおおあざ 丹陽町大字 みついしげよし 三ツ井・重吉	23203	02102	35°16′29″	135°50′55″	1996.4 ～ 1998.3	12100	名神高速道路上り線一宮パーキングエリア建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三ツ井	集落	縄文	溝・土坑・配石	縄文土器、石器・石製品	
		弥生	溝・土坑・水田・方形周溝墓・竪穴住居	弥生土器、石器・石製品	
		古墳	溝・土坑・井戸・竪穴住居	土師器・須恵器	
		古代	溝・土坑・井戸・竪穴住居	須恵器・灰釉陶器・土師器	
		中世	溝・土坑・方形土壙・島畑・水田	灰釉系陶器・施釉陶器・貿易陶磁器・土師質小皿・銭貨	
		近世	溝・土坑・島畑・水田	施釉陶器・土製品・銭貨	

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書　第87集

三ツ井遺跡

1999年8月31日

編集
発行　愛知県埋蔵文化財センター

印刷　東海プリント社